

ピクニック隊長と血みどろ特殊部隊

ウンバボ族の強襲

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦2074年。世界は未知の敵『アラガミ』に食い荒らされ、滅び去ったかに見えた。

だが、意外とみんなそれなりに元気だったし、かつての極東地区の若者に心配されたバイタリティとかにも満ち溢れてた。

「おめでとう、これであなたは、神を喰らうもの『ゴツドイーター』になりました……」

目次

神機使い、始めました編

phase 00	適合試験	1
phase 01	ピクニック隊長	6
phase 02	おでんパンとブラッド隊員	16
phase 03	ブラッドは甘くない	25
phase 04	来る、きつと来る (前編)	39
phase 05	来る、きつと来る (中編)	52
phase 06	来る、きつと来る (後編)	71
phase 07	初陣 (前編)	102
phase 08	初陣 (後編)	119
phase 09	ほぼ確実に死に至る病	125
phase 10	信奉者たち (前編)	145
phase 11	信奉者たち (後編)	155
phase 12	何が変わらなくとも	176
phase 13	その弱さと向き合って	193
phase 14	罪と罰と罷	215
phase 15	ラケル先生のためなら死ねる	238
phase 16	血の覚醒	259
phase 17	ブラッド	279
突撃！ 隣のサテライト編		
phase 18	ギルバート・マクレイン	297
phase 19	北と東の神機使い達	314
phase 20	彼らの望む物	344
phase 21	あなたが人生に裏切られても (前編)	364

phase 22 あなたが人生に裏切られても (後編) | 376

phase 23 あの目見た荒神の行方を俺達は誰も知らない

398

phase 24 あの目見た荒神の行方は結局誰も知らない

413

phase 25 副隊長就任 | 436

phase 26 ナナの幸せのレシピ | 453

phase 27 決戦前までに | 488

phase 28 最終防衛戦 | 513

phase 29 虚ろな勇気 | 524

phase 30 雪華 | 534

phase 31 「ごめんなさい」 | 546

phase 32 氷解 | 556

phase 33 冬の終わり | 576

神機兵護衛任務編

phase 34 ストローマン | 616

phase 35 スケアクロウ | 636

phase 36 ペトルーシユカ | 653

phase 37 オートマタ | 680

phase 38 Nusknacker | 695

phase 39 ドール・レスキュー | 721

すてきな地獄の入り口編

phase 40 バアルの恵み (前編) | 764

phase 41 バアルの恵み (後編) | 781

phase 42 極東の洗礼 | 806

I n t e r v a l	手紙		1074
p h a s e 4 9	おいでよ、 女神の森	f i n a l	1003
p h a s e 4 8	おいでよ、 女神の森④		954
p h a s e 4 7	おいでよ、 女神の森③		908
p h a s e 4 6	おいでよ、 女神の森②		885
p h a s e 4 5	おいでよ、 女神の森①		847
p h a s e 4 4	未知の挙動		832
p h a s e 4 3	極東の洗礼―2		818

神機使い、始めました編

Phase 00 適合試験

今まで、自分の人生を生きていなかった。

取りあえず、今のところの生涯に不幸があつたわけじゃない。いや……むしろ、恵まれていた。

『こんな時代』にごく普通に家があり、家族があり、高校に通っている、普通の女子高生。

今だから分かる、私はとんでもない幸運に恵まれていたのだ。

外の世界には、嵐は吹き荒れている。

両親はいつも言っていた。外の世界は嵐なのだ、と

こうして何重にも壁に囲まれている此処は安全なのだ、と

外の世界には『アラガミ』が居る。異常な気象が次々発生し、飲み水や空気ですら汚染されている。大多数の人間はそんな場所に住んでいる。

そのあと、必ずこう付け加えるのだ。

だから、貴女は此処に居なさい。貴女はとても幸せなのだから。

私は、その言葉に何の疑問も抱いていなかった。

親は正しい、と思っていた。彼らの言葉は正しいと思い込んでいた。

だから親の勧め通り高校に行つて、教師の言うとおりに勉強をして、家柄も人柄も優れた友人達に囲まれていた。このまま上の職業専門校か大学に進学し親と同じ様にフェンリルかその系列企業で勤め人になるのだろうかとぼんやり思っていた。

いや、本当は考えてすらいなかったのだ。

それは、とてつもない幸運なんだろう。

ほとんどの人間が今定職につけない、だから私のように決まりきつた道があり安全な居場所がある人間は少ない。そんな「幸せ」を分かっていなかったわけではない。

ただ、自分にはまだ可能性があるんじゃないかと信じたかったのだ。

夢を見てみたかったのだ。

だが、勇気がなかった。

もし失敗したらどうする、このまま歩いていけば『安全で真つ当な』人生があるのに、と。

きつと皆認めてくれる、お父さんもお母さんも褒めてくれる。そのうち普通の恋愛をして、結婚をして、家庭を築く、全てが喰われていくこの世界で誰もが羨む安定した安全な人生……それを捨てたくなかった。

そんな時だった、『赤紙』——神機適合通知が届いたのは

「氣を楽になさい……そう緊張することはありません。なぜなら、貴女は既に、選ばれて此処に居るのですから……」

「は、はい……」

部屋の上層部の拡声器から柔らかな女性の声が響く。

そこで私は我に返る。

少し感傷的になっていた様だった。緊張していないといえれば嘘になるのだが。

「今から貴女には、対アラガミ討伐部隊『ゴッドイーター』の適合試験を受けてもらいます」

きれいだけど、少々暗い声が霧散する。

床がせり上がりそこから台が現れた。乗せられていたのは一振り
の黒色の刃。

「ああ、試験、と言つても何も恐れる必要はありませんよ。特別なことをするわけではないのですから……さあ、そこに手を」

そこ、というのは神機の柄の先にある枷のようなものことだろう。

ゴッドイーターの象徴ともいえる『腕輪』にあたるものになる、そこでやめておけ、と兄の声が蘇る。

「アレはそんな世間が思っているもんじやない」
どうして、お兄ちゃん？

「お前はアルコールパツチ位のものだと思っているんだろうが違う、
神機と体を繋げるんだぞ、失敗したら確実に死ぬ……それも……マト
モな死に方なんかできない、酷いとそのまま肉片に……」

でも、適合したって通知が来たのに……？

私にしかできない、つてことなのに……？

「そんなもの分かったもんじやない……あいつらは適合率が7割を超
えてる者には全員送っているんだ！ 何もお前がやる必要はないだ
ろ」

お前がやる必要は無い？ 私にしか、できないコトなのに？

ガチリ、という音と共に腕輪が手首に嵌った。一瞬肉片になる、と
いう言葉が思い出されて寒気が走るが……その兆候はなさ気だと信
じたい。

「終わり……なのかな？」

返答はない。

あ、これで終わりなのかな？ ……と、思ったとき

天井部の機械がスライドして開き中からドリル状の鉄塊が出現し
た。

「え」

リプライズする、兄の声。

『失敗したら確実に死ぬ……それも……マトモな死に方なんかできな
い、酷いとそのまま肉片に……』

納得しました、お兄様。

あのドリルが打ち降ろされればさぞ痛いことでしょう……痛い
で済むのでしょうか、済めばいいですね。

「エエエエー！？」

私は、暴れた。

検査台の上でこの上なくみつともなくもがいてみせた。しかし、手を腕輪で挟まれていたため大した動作には成り得ない。

「離してええええ！ 無理、無理無理無理！ やっぱ無理ですごめんなさいー！ー！」

『恐れることはないのです……神があなたを選んだのですから……』

「ドリルなんて聞いて聞いてないですううううう！」

『……少し、静かにしましょうか……』

何ということでしょう、検査台から不思議な機械音。左右手足胴体部分からアームが伸びてきたではアリマセンカ！

しかもご丁寧に接触部分はシリコンカバーでコーティングされている、嬉しいことに無駄に肌に優しい仕様。

「も、もしかしてのもしかして？」

『ご想像通り』

きつとスピーカーの向こう側で彼女は満面の笑みを浮かべたことだろう。想像した通り機械が作動、私の両手両足肋骨骨盤あたりをアームがガツチリと固定する。

——そのせいで全く体が動かない

『では、貴女に神の祝福があらんことを……』

「ま、待ってやっぱり待……」

ドリルがすさまじい高速回転。金属と金属のこすれあう、甲高い音と共にギロチンのように垂直落下をしてきた。

「うわああああああ!?! ああああああつ!?!」

痛いなんてもんじやない。

やばい、これはやばい。目の前が赤くなったり白くなったりするヤツだコレー！

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！」

『耐えなさい、耐えるのです。その先にあなたの未来があるのです』

「無理無理無理無理……死んじやう……」

『どうしても耐えられないなら……素数を数えてみては如何ですか？』

「ひいひいひいっ！ い、いち、にー、さ、さんっ！ 四は違う、四は違うちがうよおおおおおおおおおおおお！」

もう何言ってるのかよくわからない。

全身の汗が吹き出し、狂ったように全身をよじり——たかった。

「いだいいいたいいたあああああいいいいいい!」

できないのは自業自得だ。だって、機械で全身固定されているので
すもの。体を動かせさえすれば多少痛みを和らげられるのになあ
……などと、妙に冷静にアホなことを考えている。こんな落ち着いて
いられるのは、何か痛すぎて逆に痛くなくなってきたからだろう。

『適合失敗か!?!』

『いいえ、よく御覧なさい』

『だがこの苦しみ方は尋常じゃ……っ! 痙攣してる!?!』

『まあ……: 大脳ニューロンの過剰な発射による癲癇、のようですね
……医療スタッフの皆さん、出番ですよ』

ああ、私がこんなに痛いのに何か喋ってるよスピーカーの向こうの
人……。

けど、意識が何だがぼんやりしてきた。うつすらと景色が明るく
なって、ぼやけていく。

白衣の人間たちがたくさん覆いかぶさり、『これ何本に見えますか
!?!』と盛んに指を振っている……ああ、6本ぐらいに見えるわソレ。
そんな中、妙にリアルに女性の声が響いた。

『おめでどう、これであなたは神を狩る者……『ゴッドイーター』にな
りました』

多分、ただの事実確認なんだろうが今の私には女神の啓示のように
さえ、聞こえた。

神機適合、ゴッドイーターになりました。

やっと自分の、人生が始まるんだ……。

そこで意識はフツリと途切れた。

phase 01 ピクニック隊長

終業のベルが鳴る。

教師が教科書を閉じ、荷物をまとめて教室から出ていく。それを見送った制服姿の少年や少女が廊下や窓際、あるいは誰かの机の周りに集まっておしゃべりを始める。

ノートを片手に授業の疑問点を話す優等生もいれば、放課後の部活動について語らう体育会系の男子、昼寝にいそしむ生徒に手をつなぎあつてひそひそ語らう恋人たちが居た。

私は、何となく窓の外を見る。

とても、『世界は終わった』なんて信じられない、平和すぎる日常だった。

はっ、と目が覚める。

飛び込んできたのは教室のLED灯ではなく、それ自体が発光する、見慣れない白くて清潔な天井だった。何が起こったのか理解ができない、だからしばらくぼーっと上を見上げる。

すごいきれいな天井だ、シミの数を数えることすらできない。

「思い出した……」

神機適合通知が来たんだっけ、

それで両親を説得して、兄と半分ケンカ別れして、高校を一時休学扱いにしてもらって、『フライア』に来たんだった。

それで確か……、とここまで考えて自分の右手を見る。

そこには白と黒と金。それで構成されたゴツツイ腕輪がしっかりと嵌っていた。

「ああ……これで、私も『ゴッドイーター』かあ……」

なんだか実感が湧かないなあ、と思う。

けど、モノは慣れ様だろう、うん、きつとそうだ。そうゆうものだ。

……むしろ強引にそう思っておこう、とりあえず一応。

「目が覚めたようですね」

「ひえっ!？」

すぐく聞き覚えのある声が、カーテン越しに発せられた。

柔らかな女の声。透き通るようで少し籠っている、儂げなのにどこか怪しい音色。

きゅらきゅらきゅら、という謎の音と共に声の主が近づいてきた。

「そんなに慌てなくとも……」

「え!?! ええーつと……先生、ですか?」

「先生……、そうですね……、そうとも、呼ばれます」

肯定とも否定ともつかない返答。私は「お医者様ですか」という意味での先生と問うたのだがそれはどうも違うっぽい。白いカーテンがさつと引かれ、女性が姿を現した。

「……あ」

「どうも、こんにちわ」

思わず声が出てしまった。

とても綺麗な人だった。けど、年齢不詳。なぜか少女にも老女にも見えるからすごく不思議だ、いや美人なんだけれども。

青い瞳と流れる金髪はフランス人形（見たことない）の如し、きつとそれなりの格好をすれば映える髪と目の色だ。……なのに着用するのは高そうだけど、造形といい色彩といい喪服っぽかった。

けど、私が受けた第一印象はその不思議な美貌でも、上品な喪服（みたいな服）でもなく、彼女が腰かける車椅子の存在だった。

「ああ、やはり気になりますか……この椅子のことですね」

「え……えつと……ごめんなさい、はい」

女性はそつと手すりに触れた。

「何とコンソール式でほぼ全自動で動きます。ついでにテレビもエアコンも手元の装置で遠隔操作できるというスグレモノなのですよ」

「凄いですね!?!」

「ついでに素材にもこだわっています……手すりはオーク材、クッションは低反発素材を中に入れてその表面をカシミア貼りで……」

「本当にこだわりますね!?!」

「ええ、私は愛着を持って長く使うタイプですから……」

女性はにこり、と少女の笑顔を向けた。

「ラケル・クラウディウス、と申します。……こちらのフェンリル極致化技術開発局で副開発室長を務めておりますわ……」

脳天に一撃。

ちよつと待つてと、言わんばかりに私の思考が空白になり、記憶が検索される……恐らく、漂白された変な表情になっているんだろう。

私が今居るこの場所はフェンリル極致化技術開発局、通称『フライア』。なんでも極致化計画——人類を生態系の頂点へと返り咲かせる為の計画——の一環として、具体的には二つのプロジェクトが研究、開発されている……らしい。残念ながらこれは速成教育でされたデータベースのお勉強内容だ。

一つは神機兵。

『神機』でできた戦闘型人型ロボット、みたいなモノだと思っている。正確にはやはり生体兵器だろうからロボットとは言えないのかもしれないが。

もう一つが『ブラッド』。

私が適合したP-66偏食因子を持つゴッドイーターたちによる特殊部隊。第三代型とも呼ばれ、既存の第一、第二代型の神機使いとは一線を画す……予定、だ。

その発案者にして主な研究主任こそが、フェンリルの誇る最高頭脳を持った才女、ラケル・クラウディウス博士。

……つまり、この目の前におわす車椅子の貴婦人は極致化計画の実行者であり、副室長であり、すぐくエライお方であり……私の人生初の『上司』にあたる人なのだ。

考えがまとまった。

「失礼いたしましたあー！」

私はあわてて飛び起き、足元に散乱していた（とは知らなかった）無数のコードに足を引っかけ、何の素材でできているのか不明だがきれいに滅菌された床へと見事転げ落ちた。

こちーん、と素敵な音が響く。

「……まあ」

「う、うう……」

「大丈夫ですか？」

「ぜんぜん、だいじょうぶじゃ、ない。」

とても痛い……痛かった。ゴッドイーターになったからと言って痛みに強くなる訳ではないらしい。非常に残念なお知らせだ。

「あの、クラウディウス博士……」

「まあ、他人行儀な……これから長く付き合うのですよ？ どうぞ、『ラケル先生』とでも呼んでいただけませんか？」

あなたが神か。お優しさが目に染みる。

「じゃあ……ラケル先生、あの、私一体……」

「ああ、貴女はあの後……」

ラケル先生はほわり、と中空を見つめ、歌うように語り始めた。

「痛みと衝撃とあと色々あつて痙攣をおこし失神」

「あ、や、やつぱり……」

「そしてその際、みごとな世界地図を描くことに……」
「……」

何を言われたのか理解できなかった。

一瞬だけ

「ぎゃああああああつ!？」

「盛大にバシャーつと、でしたよ。大きな大きな水たまりが……」

「あああああああ」

聞くんじやなかった。

いや、待とう。あの適合試験は冗談じゃなくやばいって、ゆえに私だけじゃないはずだ、うんきつとそうだろうん。

一縷の望みをかけて、ラケル先生を見つめる。

「おかげ様で次からは防水処置を施すこととなりました。何しろ今まで派手にやらかす適合者はいなかったものですから」

「うわあああああああ……」

「何も恥じ入ることはございません……」

何がおもしろいのか、クスクスとお笑いになるラケル女史。

「あなたの犠牲は、未来永劫……語り継がれていくことでしょう」
「語り継がないでくださいよ!!」

この人絶対楽しんでる……!

今分かった、この怪しげで美しい年齢不詳の美女はかなりのサディストだ。だとしたら私はフライア生活一日目にして既に毒牙にかかっている……!

「今更ですが、体の調子はその後いかがでしょう?」

「は、はい……生きてます」

「そうですね、悪いものはみんな流れていったのでしよう……」

「ひいひいひいひいっ」

もうやめてア!

心の中で大号泣していると、ラケル博士は何か思い出したように告げる。

「そうですね、体調が良いのであれば本日は『フライア』を回ってみてはいかがでしょう? これから過ごす場所ですからよく知っておくのも良いと思いますよ。お勧めは上層部にある庭園ですね」

「庭園……?」

そんなものまであるのかと少々度胆を抜かれる。豪勢な設備だとは思っていたのだが、庭園なんていうものまで作ってしまうとは恐れ入った。

「明日からは訓練でしょうから……いつ行くのです? 今でしょう!」

「行ってほしいんですか貴女は?!」

「ちなみに庭園にはトイレも完備されていますからご心配なく」

「何を心配しているんですか!!」

この博士は、割と性格はよろしくない方の方なのかもしれない……、と先行きが不安になる私であった。

お兄ちゃん、ゴッドイーターは辛いことの連続みたいです。

花園、という言葉がぴったりだった。

浮世離れレベルならば私の居た場所とどっこいどっこいだろう。色とりどりに咲き乱れる花々は割と希少種も含まれていたりする。恐らくは本物だろう。

硝子を透過する陽光の先には透き通るような青空が広がっている。その下には丁寧に手入れがされた芝生が続く、小高い丘の上には一本の樹木が佇む。その下に、一人の人間が座り込んでいた。とんでもないイケメンがそこに居た。

光の当たり方によっては金髪にも見える亜麻色の髪。切れ長の瞳に通った鼻筋、均整の取れた鍛え上げられた体格を貴族的な衣服で包んでいた。彫刻と見まごうほど整った横顔は青い空を見上げていた。絵画の様な光景に、私はつい言葉を失った。

「ああ。適合試験。お疲れ様」

予想にたがわず半端ない美声だった。ゆっくりと座れと手で示してくる。

「色々あったが……まあ、とりあえず終わって何よりだ」

「はいっー」

適合試験、もう思い出したくもない。

ちよつとしたトラウマである。できたらもうあの部屋は二度と見たくもないし、ドリルは絶対やりたくない。何しろ絶叫して泣いて喚いて気絶したのだから……アレ？

『色々あった』って……もしかして貴方は……あの適合試験をどこかで見……」

「あ」

背筋が冷たくなる。

「……そういえば、まだ、名乗っていなかったな……俺はジュリウス・ヴィスコンティ……その、お前がこれから配属される『ブラッド』の……隊長を、つとめている」

完璧に整ったお顔には苦い表情が浮かんでいた。美形はどれほど

変な顔をしていても様になる。こんなステキな人が隊長なんてとっても嬉しい、このまま金色の翼が背中から生えてスタミナが減らない高速移動を実現し、あのきれいなお空まで飛んでいけたらいいの……きつと花畑のせいだろうと思うまでもが薔薇色になっている。

空を飛んでいた頭が現実世界へと帰還する。

「見てたんですか!? アレを!? あのドリルを!」

「あ、ああ……その、隊員の適合試験を見学しておくべきだと思って……」

「どこまで!」

「……全部」

「うわあああああ……」

私に突き付けられたのは、どこまでも残酷な事実だった。

見られていたのだ、これから共に戦い、共に学び、また教え導いてくれるであろう、先達兼上司に。

ドリルにビビって泣きわめく無様な醜態を

じたばた暴れまわる情けない姿を

そして何より……

「ああああああ」

「俺も初めて見たのだが……適合試験で気絶することは時たま——あるらしい。そう気を落とすな、人生は長いさ」

「もう死にたくなくなってきました」

断言しよう、間違えなく第一印象は最悪だ。

ちなみにこの時の私は知る由もなかったのだがラケル先生と隊長は別室で二人で私の適合試験を見守ってくださいっていたらしい。

「あなたに洗礼を施した時とそっくりですよ」とラケル先生が仰せになった直後、私がド派手にブチかましその後二人の間に何とも言えない沈黙が流れたという話である。

「えー……ここはいい場所だろ?」

「はい……はい……そうですね……ステキな場所、ココ、イイ場所です」

ほぼ自動的に頷く私の胸中は恥ずかしさで一杯だ。やばくなった

からもう逃げたい、そんで隠れたい、運がよければ不意をついてぶつ殺したい。主に過去の自分に。ジュリウス隊長は（あえて）表情を変えないまま話を続ける。

「その……気晴らしに今のうちにフライアを見て回ると良い、明日からは訓練漬けになるからな」

「ラケル先生も同じことを言っただけでしたね」

「もうラケル先生には会ったのか？」

「ええ、はい、うん」

ジュリウス隊長が知らないということは先ほどラケル先生と出会えたのはたまたまお見舞いに来てくれただけなのか。これは幸運なのか不運なのかよく分からない。もしかしたら、今までラクして生きていた分のツケが一気に回ってきているのだろうか？

何となくやさぐれて濁った私の目をまっすぐに見ていたのは

どこか熱っぽいジュリウスⅡヴィスコンティ氏の蕩けそうな瞳だった。

その視線に一瞬だけドキッとなってしまう。

「あの……何でしょうか？」

「最高だと思わないか」

「は？」

今、異次元の言葉が聞こえたような気が

「ああ、すまない。ラケル先生のことなのだが」

「あ、ああ……ですよねー」

隊長は恥ずかしがるように口元に手を持っていくと、すぐさま強引に鉄面皮に戻る。さっきの妙な眼差しは私の錯覚だったようだ。ラケル先生の話だっけ？

正直あまりいい印象は抱けない。

ふわふわした人だなど思うし、すこしあやしくもあるし、何を考えているのか全く読めない。底が知れないから怖い……まあ、一番の原因は適合試験のアレなんだけど

しかし、ここは伝統奥義『T A T E M A E』を発動。

「そうですね……あまり、博士っぽくない人だと思います……あ、いい意

味で。心配してわざわざ病室まで来てくれるような人だし、色々話してくれるし……いい人だと思います」

嘘はついていない。実のところ私はラケル先生を信じてみたいのだ。

ちよつとズレているが悪い人じゃないと思いたいのだ。私のことをおちよくりつつも気安く接してくれるのはその証明なのだと思測しておく。

そう思い、隊長の顔を見ると

まるで子供のように純真無垢な美貌がきらめいていた。

すげえ近距離で

「そうだろう!？」

「……」

「俺もそう思う。あのお方は……優秀で健気でホタルのように儂く気高い女性だ。綺麗だしかわいしいイ匂いもするし、何しろあの独特の雰囲気かたまらない。極限まで細微に作ったような金細工の髪、陶器のような肌、濃い碧玉の目……俺は初めて彼女を見たとき思った、女神様がここに居る、と」

「……」

「お前が共感を覚えてくれて……嬉しい。一年前から在籍してる候補生が居るのだが、何故か全然会話が噛み合わなかった。それどころかしばらくの間は俺と目が合っても音速で逸らされていた。今では分かりあえているが……初対面でこの気持ちを理解してくれたのは、お前が初めてだ」

「……」

ジュリウス隊長の長い指先が私の手に触れる。手袋越しに生きた人間の感触がはつきりと伝わってきた。

そう、彼は理想の美青年を模したホログラムでも、中世の職人が神を映して作った彫像でもない。

確実に、生きている人間なのだ。

だってこんなに生き生きとしているんだもの。

「……………」

「同じ思いを共有できるのは良いものだ……共感、か。今まで蔑ろにしていたがこれからは評価を改める……言わせてくれ……ありがとう……っ！」

ジュリウスⅡヴィスコンティ氏は何故かうっすら涙ぐんでおられた。

そんな彼には申し訳ないが私は半分くらい話を聞いていなかった。なぜなら、彼の唇が紡ぐ言葉が理解できなかつたから。多分、難しいことは言っていないのだろう、心地よい美声と聞き取りやすい口調は魅力的だ。

それでも。

その旋律と律動、心と言葉は右の耳から左の耳へとすり抜けていくのだ。

現象的にはただの空気の振動に過ぎないのだから仕方ない、いや、もしかしたら人智の及ばぬ領域の話をされているのかもしれない……。

結局このあとジュリウス隊長のジュリウス隊長による講義は長々と2時間続いた。

phase02 おでんパンとブラッド隊員

『と、いう訳で訓練を開始する。指導教官はブラッド隊長、おはようからお休みまで暮らしを見つめるジュリウス・ヴィスコンティが第二監視室からお送りいたします』

「よろしくお願いますー!」

トレーニングルーム、というよりは実験室か試験室といった風情の場所。ばりばり鋼鉄製のその場所に押し込められては改めて、私の存在は『兵士』というよりは『兵器』に近いのだろうと実感する。

それが少し悲しくもあり、誇らしかった。

『そう固くなることはない……とは言っても無理だろうから、まずは軽く準備運動と行こう。光学表示されている周回走路が見えるだろう?』

「はいー!」

『1周400メートルある、神機展開状態で走ってみてくれ。準備ができ次第計測を開始する』

「了解しました!」

床には光学表示でサーキットが描かれている。こりや競技場みたいでかなり本格的。

スタート兼ゴール地点と反対側の200メートル地点には旗を模した立体ホログラムが投影されている。わざわざフェンリルのオオカミ紋章が入っているあたり、流星は技術開発移動要塞といったところだろう、無駄に芸が細かい。

そこで、先ほどからの疑問を口にしてみることにした。

「あのー……隊長」

『どうかしたのか?』

「なぜ先ほどから地味に詳しい音声解説が入るのですか?」

うちの隊長、ジュリウス・ヴィスコンティが押し黙った。

あ、ひよつとして聞いちゃダメだった系なことだったのだろうか?

『実は……ブラッド部隊はまだ開発途中にある『最新型』のゴッドイーターの部隊だ。そのためのすべての記録……バイタルや基本的な身

体データ、オラクル濃度から浸食率、適合値。そして訓練内容は全て記録される、ので、こんな感じになっている』

「ああ……さいですか」

そんなことだろうと思っていた。

こうやって細かいところもちゃんと教えてくれるあたり、やはり隊長は良い人だ。ガチガチの軍人然としていないところも安心感がある……というのも、ここに来る前の速成訓練ではかなりゴツツイ人に鍛えられたからだ。マジでウジムシ野郎呼ばわりされるのはキツかった。3か月前まで『カタギ』だった私としては筋肉ダルマ隊長じゃなくて本当に安心したのである、更に個人的な見解をぶつちやけてしまうと……隊長が超絶イケメンであることはとても嬉しい。

人格、容姿、戦技において優秀な完璧超人！ という感じの人だ。……何か致命的な欠点があったような気もするがそれは放置、むしろ封印しておく。

「それでは……ブラッド―03、神威 唯、訓練を開始しますっ！

……で、良いんですよね隊長!？」

『話が早くて助かる』

マイクの先で、隊長が笑ったような気がした。

音声が記録されているのであれば映像も間違えなく残るだろう。なら、妙なことはできない。後々入ってくるだろう後輩隊員や未来のブラッド隊員たちも参考にするかもしれない資料になるんだから！と、そこまで考えてラケル先生の言葉とほほえみがフラッシュアップした。

『あなたの犠牲は、未来永劫……語り継がれていくことでしょう』

未来永劫、語り継ぐ……

刹那、脳にひらめく、ある最悪の思考。

「た、たたたたた隊長……!」

『な、何だ？ どうかしたか!？』

「い、今……今、思いついちゃったんですが……あの、あの……確認してもよろしいでしょうか!？」

『……いいだろう、来い』

怖い、聞きたくない。

けど現実から逃げないと私はもう決めたのです。変わるのだから決めたのだ。

だから問おう、なけなしの勇気を振り絞って

「適合試験もアーカイブに保存されていますでしょうか?！」

『……そうだ』

「無編集!？」

『無編集』

「全部!? モザイクもなしで!?」

『……ああ、そうだ』

その時、私の膝から下は力を失った。

崩れ落ちる体を支えられず、両手が前に出る。つまり脱力し、四つん這い状態。

「うわあああああああああ!」

魂からの叫び、激しい慟哭が訓練室に響き渡った。

「なんで……どうして?!? どうしてええええええ!」

こんな話ってない、こんなことが起こり得ていいのだろうか、あつていいはずがないじゃないか。

圧倒的な不条理——自分の力ではどうにもならない、運命。

私は呪った。その時、この世界を——フライアを、呪った。

安っぽくて幼稚な憎悪だとは分かっている。自分勝手でありふれた呪詛だとは理解している

けど……止まらなかった。

わざわざコマメに記録する制度さえなければ……こんな思いはしなくてよかったのに。

『ブラッド3、神威 唯、立て』

「……隊長」

『立つんだ!』

「……っ!」

『分かる……分かるさ、お前の絶望……かつて俺もこの世を呪い、恨んだことがあった。何故自分だけがこの様な不条理に直面するのだと、

嘆いたこともあった』

「……」

『この世の不幸、不条理、不利益は全て当人の努力不足……とは、俺は言わない』

「たい、ちよ……」

『努力で届かないものもある、叶えられない願いもある——それでも人は、思い、願う。過去は変えられないし、消すこともできない、だからせめて——……今は俺と、一緒に進もう』

「……はい！」

分かった。

そうなんだ。

過去は変えられないし、消すこともできない。記録映像はそのまま残り続け、音声記録はずっと同じ言葉を紡いでいくのだろう。

どれほど時間が流れても。

だから、せめて

もう、絶対に開くことが無い様に、思いつきり嚴重にロックをかけたやろう。願わくばエニグマ暗号並のパスワードでも突っ込んでしまおう。

「うおおおおおおおおおおおっ！」

怒声を張り上げて、私は走り出した。

「はあ……もう、クタクタだよ……心身ともに」

結局、訓練と言っても神機は振り回さなかった。

持って走ったり、跳んだり、回避行動の練習や受け身を反復したただけだ。訓練所でダミー神機（ただの大きい木刀）を使ってやったメニューと大差ない。まあ、木刀より全然軽かったから振りやすかったけど。

あと、一跳びで3メートルくらい跳躍できたことは素直に驚いた、オラクル細胞超すげえ

「……けど、こんなんで大丈夫なのかなあ……」

何故か一抹の不安が残る。訓練終了後、隊長が何にも言ってくれなかったこともある。

終わった直後は疲労がのしかかり過ぎていてスルーしていたが、時間がたてばたつほど怖くなってくる。

「ひよつとして、コレ駄目だったり?……家に帰されたり!」

やはり貴女はダメな子でした、ハイさようならと言いつつラケル先生。

残念だったが俺はこれから次の適合者の訓練だ、と吐き捨てる隊長の姿が幻視できる——ダメだ、一人でいるとダメだ。夕チの悪い悲観的なのに妙に現実味のある妄想が止まらなくなる。これは卑屈でネガティブな私の悪い癖なのだ。

一人でいると、どんどんダメになっていくのが私なのだ……自覚があるあたり辛い。

「おっと、あ、君、例の新人さんかい?」

「え……ってはい! そうです! ブラッド3、神威 唯です!」

本日二度目の自己紹介になる。

声をかけてくれたのは男性。

カーキ色の軍服めいた服装、少々日焼けした肌は浅黒く、服の上からでも分かるほどの分厚い胸板。

筋肉ダルマっぽい体躯とは反して人のよさそうな顔立ちに、眼鏡をかけた男だった。

「やあ、僕は富田健仁郎。フライアの職員さ」

「……お、おう」

「ははっ、覚えなくてもいいよ。ここの警備をやっているんだ。……ま、神機使いが何人もいるのに警備、なんて笑えちゃうけどね」

「は、はあ……はあ……」

「あれ? 何か元氣ないね……ちよつとお邪魔しちゃったかな?」

「い、いえ! そんなことありませんですよ!」

凶星だ。見た目に反してなかなか鋭いぞこのフライア警備員……!

「訓練がイマイチだったとか?」

「……大当たりです」

「あははははははははは！」

「わ、笑わないでくださいよ！　　つてか満面の笑みですと?!」

「いやあ、ごめんごめん」

軽い調子で富田警備員は笑う。

「懐かしいなあ、つて思ったもんだからさ。おじさんもこう見えて、昔は色白で細身の美少年だったんだよ？　　うんうん、そーゆー時は仲間同士でグチりあうに限るね！　　さつきロビーでドカ食いしていた女の子が居たから行ってごらんよ」

「は?」

「あれ?　　ブラッド隊員でしょ?　　友達じゃないの?」

「……」

ロビーでドカ食い、というのも気になるが女の子だと!?

これはブラッド隊員だろう、多分。行こう、私。行くんだ!

「ありがとうございますございました富田警備員さん!」

ネコ耳……だと……!?

「あー、お疲れさまー」

「お疲れ様ですねー」

違った。耳じゃない。髪だ。

それなりに長い髪をヘアピンできれいにまとめ上げているのだ。よって先つちよのところが猫の耳みたいに可愛くなっている。

「もしかして……ブラッドの新入せ……じゃなかった、新人さん?」

「う、うん。そうだよ。えっと、私、ブラッドー03神威　唯っていいます、よろしくね」

まさかの本日三回目の自己紹介。

「私はナナ、香月　ナナです。ブラッドー04だよ、よろしく!」

「宜しくね。ナナちゃんって呼んでいい?」

「よろこんでー!」

ナナちゃんはピヨコピヨコと跳ねて喜びを表す。クツソかわええわこの子……！

何というか、そう陽性の美少女、という言葉がぴったりと似あう。それはさておき……

「さつきからお食べになっっている、それは何でしょう……？」

「あ、これはこれはくお目が高いねっ！ お嬢さあくん！」

嫌な予感がする。

「お近づきの印におひとつドウゾー。お母さん直伝！ ナナ特性のおでんパン！ すつごくおいしいから、よかつたら食べてよ〜」

「おでん……と、パン……を……？」

「だからこそのおでんパン！」

「……」

女は度胸、そうだね！

無茶だとわかっていても、ナナちゃんから感じる無言の重圧に負けました。

「イタダキマスッ！」

「それ、一気！ 一気！」

「むぐぐ……」

わあい、アバンギャルド。

「えへへへー、おいしいでしょう？」

「今、おいしいの基準が無限に広がったよ……」

食欲をそそるカツオの風味と芳醇なパンの織りなすハーモニー。固ゆでの卵と大根がコツペパンにしみこみ、何とも言えない味を醸し出している。

一言で表すのならば、そう。

味のドツジボール。

「わー、完食してくれたっ！ あと100個ぐらいあるよ？ もつとどうですか？ ほれぐいつとぐいつと」

「も、もういいよー……っていうかあれ？ 私、食べちゃったの……一個？ いつの間に……？」

「ほらほら、食べたくなるでしょうあら不思議ー」

ナナちゃんはそう言うとおでんパンを私の手に乗せてくる。

「い、いいって、もうお腹いっぱいですううううー！」

「んふふく？ そうかなあ？ 本当に、そうかなあ？」

子猫を思わせる瞳が、すうと細まった。

悪寒が背筋を伝い……お腹が、きゆう、と音を上げる。

「何故!? 怖い、このパン怖いよお!」

「口では嫌がってても体は素直だねえ……フッフッフ、ほらもう、

こんなに（おでん）汗があふれてるよおく？」

「えええええええ!」

止まらない。

何故かやめられない！ 止まらない！ ナナちゃん印のおでんパ

ン!?

どうなっちゃってるの、私の体!?

「ほくらほくら、お腹いっぱいにしてあげるか・ら・ね？ グへへへ

へ……」

「むぐーっ、むぐうううー!」

「おー、お疲れ様ー。隊長!」

ニット帽をかぶった小柄な金髪の少年がジュリウスに声をかける。

年齢的にはジュリウスと一歳しか違わないのだが、顔立ちと雰囲気

のせいで実年齢以上に幼く見える、少年だった。

「ああ……ロミオか」

「いよっす、新人研修中だっけ？ オレにも遂に後輩ができるのかー

!」

ロミオ・レオーニ、彼こそが第三世代型神機適合者にして——特殊部隊『ブラッド』の二番目の隊員だった。

「で？ どんな奴よ？ ラケル先生は『貴方の大好きな若い女の子二人ですよ』って言ってただけ。元気で活発な可愛い系？ それともクールで知的な美人系？」

「そう、だな……しいて言うならなんだかともアバンギャルドだ」
「なんだそれ」

「1人は同じマグノリア出身だから、後で話してみると良い、お前は人と話すことが得意だから大丈夫だろう……もう一人は、一般からの選出だな」

「へえー……え、マジ？」

ロミオの表情が強張った。

「あのさ……こうゆう言い方すんのはアレだけど……『一般人』がオレらマグノリアⅡコンパス出身者とやっついていける訳？」

マグノリアⅡコンパスとは、ラケル、レアⅡクラウディウス姉妹によって運営されている児童養護施設、孤児院だった。そこでは特殊な教育カリキュラムが組まれており、『こんな時代』であっても、その児童たちは高度な教育を受けることができる。

ロミオには悪気はない、ただ、純粹に心配しただけだった。

後輩の心配顔に、ジュリウスは優雅に笑ってみせた。

「ああ……専門教育を受けてはいないから、多少の齟齬は生じるだろうが……コレを見る」

ジュリウスが電子板をロミオへと差し出す。そこには先ほどの訓練結果の数値が淡々と並べてあった。

それを一読したロミオは、翡翠色の瞳を大きく見開く。

「……うわ、これ、マジ？」

「ああ……」

ロミオの目には信じられない、という色が浮かんでいた。

「一種の天才だな。思わず嫉妬を禁じ得ない」

「だなっ！ 心配はねーか、これなら……なあ、ジュリウス、オレ興味出てきたわー、こりやちよつと、先輩っぽく接触してみつか！」

「……好きにしろ。俺は優秀で健気でホタルのように儂いラケル先生へ報告に行ってくる」

ジュリウスのやや過剰な修飾語をロミオは持前のスルースキルで無視する。

二人のブラッド隊員は、並んでフライアの回廊を歩き出した。

phase 03 ブラッドは甘くない

「天才かあ……」

ロミオの人生において、その言葉が似合う人物はただ一人、先輩にして尊敬する隊長たるジュリウス・ヴィスコンティだけだ。勿論、彼は努力をしない人物ではないこともよく知っていて熟知している。

ただ、どうにもロミオにとっては……というか多分大多数の人間にとって、めんどくさくて苦しくて仕方のない『努力』を全く苦にしない人種であるらしい。そのせいか、多少人の痛みに鈍いところがある、とロミオは分析している。

結果、出入りの本部職員や多少交流のある他支部のゴッドイーター達からは「いけ好かない男」「傲慢な奴」「有能だが冷徹なエリート」だと思われている節があった。

だから何だ、とロミオは思う。

確かに、ジュリウスは人の痛みに鈍い。しかし、心がないわけではない。むしろ逆。

ただ、誰よりも優しく、高潔だからこそ、人の愚かさや醜さ、弱さが理解できないのだ。なら、それでいい。

少しだけ寂しい気もするがそれこそがジュリウスの美点であり、同時に最大の欠点と言える。

ならば、自分が補ってやればいい。

弱くて愚かなロミオ・レオーニが強くて気高いジュリウスに対し、唯一誇れること。

弱いからこそ、分かること。

「見極めてやりますか、人間の器ってヤツを！」

ジュリウスは賢いがアホの子なのだ。

自分が賢いから他人の愚かさに気付けない男なのだ。根っからの善人であり、多少浮世離れしているからこそその孤高の天才。そんな無垢な正義漢を守ってやらねばならない。

ロミオは寝台から飛び起きると、橙色を基調とした上着に袖を通す。室内でも気にせず缶バッジのついたキャップをかぶり、あっち

こっち好きな方向を向く柔らかな金髪を帽子の中へと収納。鏡でちゃんとキマってるか判断すると、一部のフライア女性職員の間で定評のある『天使の笑顔』を浮かべて言った。

「待ってるよー、後輩っ娘たち！ ロミオパイセンが今行くぞー！」
つまりところ、自分はジュリウスが大好きなのだ。そして創設者にして後見人、現在直轄の上役であるラケル先生のこと、大好きなのだ。

ブラッドは『家族』であり、自分の大事なかけがえのない『居場所』なのだ。

それを守るために自分は努力をする。できる努力は惜しまない……ただそれだけだ。

だから、暗い気持ちで這い回るのは弱くて狡い、自分だけでいい。一瞬だけよぎったそんな気持ちを、ロミオは無理やり振り切つて進む。

「唯ちゃんハマりすぎー。君もおでんパンのファンになったのかな？」

「パン、タバタイ。オデンパン……ホシイ」

ロビーでは異次元の会話が繰り広げられていた。

「片言になってるよー？ 怖いよゆいゆい」

「おでんおでんおでんおでんおでんおでんおでんおでんおでんおでんおでんおでん」

「何かに憑かれていますかあなたは」

「だって、訓練終わりにはコレが一番！」

「段々わかってきたね」

えへへ、と笑う私。

そんな私だが、内心焦っていないわけではない。

ここにきて早二週間、私は何とまだ神機を振っていない。

「ナナちゃん……訓練どう？ ジュリウス隊長、けっこースパルタじゃない？」

探るように聞いた私に対し、ナナちゃんは子猫のようなくりつとした瞳で見返してくる。

「うんー、すっごく大変だよ。隊長さん、超絶イケメンだけど容赦ないんだよねー。絶対Sだよあの人」

「いやSかどうかは分かんないけど」

「私まだうまくブースト起動できなくてさー、何回もしくってるんだわー」

「……えマジで」

誰でも覚えがあるだろう、勉強しない仲間だと思っていた友達が実はテスト勉強していたときの、あの気持ち。

あのレベルの衝撃が私の脳天に直撃打撃をくわえた。

「ナナちゃん……聞いていいデスカ？ 貴女は候補生の新生生ジャナイノデスカ？」

「ゆいゆい、また片言になってるんだけどおでんパンが足りてない？」

それと、私は新生生だけでなく、マグノリアⅡコンパスってところで訓練受けてたから意外と大丈夫なんだなこれが」

「マグノリアⅡコンパス……？」

ナナちゃんは小さなお口をあくん、とお開けになると、そのまま猛烈な勢いでおでんパンを吸引した。

最早パンを飲み込んでいた。ごっくん、という間違ってもモノを咀嚼した後の音じゃない効果音が聞こえてくる。

「そーだよ。マグノリアⅡコンパス。児童養護施設……平たく言うとか、孤児院っていうのかなー。親に死なれちゃった子とか、色々事情のある子たちが集まってる場所。あ、実はね、ジュリウス隊長とかも同じところ出身なんだって！」

「そ、そうなんだ……」

「うん、だけどねー、見たことはなかったんだー。施設って言っても結構広いところだから。でも隊長は有名な人だったから名前だけは知ってたかな。マグノリアⅡコンパス一の絶世の美少年が居るーっ

て女の子たちで見に行っただこともあるんだ。手土産にバナナ持ってね」

隊長……あんた珍獣扱いされてるよ……。

「そんな人が隊長さんだっていうから、世の中何があるか分からないよね」

「へえ……ナナちゃんも隊長もそうゆう場所出身なんだ……つてことは神機にも慣れてるんだ……」

「まあねー、そうゆうのは結構本格的だったし、ラケル先生曰くね、『才能のありそうな子』は皆受ける訓練だっていうから。本当超スパルタ体育」

「え？ ラケル先生？」

ナナちゃんが目をぱちくりさせる。キョトン、とした顔が抱きしめたいくらい可愛らしい。

「あ、忘れてた。マグノリアIIコンパスを作った人ってラケル先生とお姉さんのレア先生らしいんだよね。二人とも超美人なんだよ！」

「……マジですか」

今、2つの事が分かった。

『ブラッド』隊長のジュリウス隊長と、隊員四号のナナちゃん。この二人はラケル先生の養護施設から来ている。そこで多分、それなりの訓練を受けてきた……らしい。話を聞く限り、割と小さいころから。

私がこのうのと学校に行っている間にもこの人たちはゴツドイーターになるべく訓練に励んでいたのだ。その差は、決して簡単に埋まるモノではない様に思えてしまう。

目の前に居るはずのナナちゃんや、隊長が、急に遠い人に思えてきた。

そして、もう一つは。

ジュリウス隊長のご心酔っぷりの謎のルーツが分かった気がした。

1ミリくらい、ほんのうっすら、上辺だけ、本当は知りたくもないことだったけど。

「つまり……隊長が、ラケル先生が大好きなのは……母親のような存在だからってことでいいのかな……」

「あ、ゆいゆいも、話したんだ。隊長と」

「うん。熱くて重い愛を語られたよ……」

「そうだね……普通に気持ち悪かったね……」

ナナちゃんも会話選択肢を間違えてしまったらしい。ラケル先生の魅力についてたつぷり二時間語られた組なのか、彼女らしくもなく、何かを諦めたような、妙に大人びた眼差しで遠くを見ていた。

「……でも、それ以外は完璧なお人だから。ちよつと天然入ってそうだけど」

「うん……そうだよね！ 欠点の一個や二個スルーできなくってゴツドイーターはやってられないもんね！」

「で、ですよねー！」

「うんうん！」

何となく空寒い空気が流れている。

考えてみたらあの隊長さん、性格良いし、頭よさそうだし、強いし、神々しいまでの美形だけど……

「忘れよう、ナナちゃん」

「そうだね……そうだよね！ 聞かなかったことにしよー！ ラケル先生がらみの話題をこっちから振らなければ問題なんだもんねっ！」

「そうそう！ 前向きに行こうよ、前向きに！」

私たちはおでんパンを貪りながらお互いに励ましあった。すると、昇降機の側から一人の人間が歩いてくる。室内であるにもかかわらず、缶バッチのついたニット帽をかぶった少年の姿だった。

「あー、アラガミ討伐大変だったなー大変だったなー」

どうやらゴツドイーターであるらしい。あんな小さい子でもゴツドイーターやってるんだね、と何故か微笑ましい気持ちになる。

「私たちも頑張らなくっちゃね」

「そうだね……」

私は、ナナちゃんの言葉に素直に頷けなかった。

焦つてない振りをしてはいるものの、正直キツイ。まだまともに神機さえ振れていない。決心するのが遅すぎたのかもしれない、と早くも後悔が湧き上がってくる。

「ゆいゆい？ 大丈夫？ なんか元気ないぞー？」

「え……？ そ、そんなことないですよおっ!？」

「そう？ おでんパン要る？ 元気になるよ〜」
「もちろ〜」

しまった、ナナちゃんに察せられている。頑張つて隠しているつもりなのだが、どうにも顔に出てしまっていたらしい。出会つてまだ数日しかたつていないけど何となくわかる……ナナちゃんはすごく、優しい子だ。余計な心配をかけたくないし、心配されたくない。

自販機の方から、先ほどのニット帽の少年が歩いてくる。

「すっげー疲れたー大変だったなー あーあーあー新設されたばかりの特殊部隊もラクじゃないなー」

確かに、何か狡いなあ、とは思う。

ジュリウス隊長もナナちゃんも、幼いころから訓練していれば敵う相手ではない。

でも、やはり見捨てられたくはない。見放されたくはない。

やつと選んだ自分の人生なのだ……私には、もう、ここにしか居場所がないのだ。

また昇降機の方から、少年が歩いてきた。

「アラガミ退治大変だけど仕事だからなーはやく新人来ないかな〜。この辺りに居るって聞いたんだけどなー」

何だか大変そうだ。ゴッドイーターは慢性的に人手不足だとは聞いていたけど。この少年ですら自分の部隊の人数不足をを嘆いている、それほどまでに足りないらしい。ゴッドイーターは、たとえ『なりたい』と願う者が居たとしても現実には適合する神機がなければ意味を成さないのだ。

一説によると、ゴッドイーターよりも神機のほうが大事にされている側面もあるらしい。『人』の補充はいくらでもきくが、神機は決まっ

た量しか生産できず、さらに言えばカネがかかる『高級品』だからだ。それなのに、持ち主の現れない神機は多くあり、神機に適合できないゴッドイーター候補も少なくはない……フェンリルの抱える矛盾の一つだった。

誰もがなりたいモノになれる世界ではない。

「気付けよお前ら!!」

突然、ニット帽がキレた。

「い、いきなり何ですかあ!?! 不審者氏ですか!?! 警備員さん呼びますよ!?!」

「通報した」

ナナちゃんは、ちゃっかり防犯ブザーを引き抜き済み。

「判断早っ!?!」

「マグノリアIIコンパスの教えその4〜『1秒判断が遅ければ、1秒命の危険が迫る』ゆいゆいも覚えておくと良いよー」

「うわわわわ、分かったよ! 不審者じゃないよ! オレは怪しいものじゃないよー!」

「大抵の不審者はそう言うんだよね、私は小事に惑わされないよー信頼に足る証拠を見せてくーだーさーい」

「ええ……!?!」

たじろぐニット帽の不審少年。改めてみると、かなり愛嬌のある顔立ちをしている。濃い金髪の巻き毛と碧玉の瞳が

ぴつたりと似合っており、一見すると少女にも見えるほど輪郭がやわらかい。あの隊長とは別方向での美形認定が下りるだろう……なんてこったフライアは美男美女の巣窟なのか。今のところ(富田警備員以外は)出会った人すべてが美形にすぎる。

「そ、そうだ。ホラこれ、見てみ? 見てみ!?! ブラッド特製! フライア印のP-66アームドインプラントです! 『P66偏食因子』を媒介とした、神機に対する神経信号の伝達と神機使いの神経に接続された神機の『オラクル細胞』の制御を担っているスグレモノだよ! 無くすと死ぬアイテムだよ!」

必死の少年が指し示すそれは、ゴッドイーターの証たる『腕輪』だった。白と黒を基調とした色合いは間違えない、私たちの（入る予定の）部隊、ブラッド配色だ。

「あ、本当だ。じゃあ、もしかして隊員さんだったりしますかー？」

「そうだよア!!」

「うわ……す、すみませんでしたっ！」

反射的に頭を下げる。権威に弱弱な私の唯一の特技です。はっとしたナナちゃんはぺこり、と頭を下げてニコっと困り顔で笑い、舌まです出して見せた。あざといですねそして可愛いですね畜生が。

「改めて初めまして〜ブラッド04 香月ナナですっ！ よろしく
お願いします、先輩っ♪」

「あ、同じくブラッド03神威 唯です！」

ナナちゃんの自己紹介に便乗する私！

先輩らしきお人はしばらく放心していらしやった。

「……センパイイ？」

「あの、生きてらっしゃいますか先輩？」

私とナナちゃんは彼の顔を覗き込む。すると、そこには予想外の喜色の笑み。

「先輩……先輩か、良い響き！ よし、後輩たちよ、先輩が質問に答え
てあげようっ！……の、前に」

自称ブラッド先輩はニカッと笑った。

「逃げよう……ブラッドの皆で……」

「了解！」

「そう言うわけで、此処に来たわけですかそうですか」

「だってこちらの香月さんがねえ、通報しちやったからねえ……」

「ロミオ先輩が怪しさ全開だったからですー私のせいじゃ有りませー
ん」

ロビーから逃げた私たちは、第三訓練室に来ていた。

いつも訓練している場所と比べたら、かなり体育館に近い雰囲気であり、正直かなりほっとする。

できることなら、いつもこうゆうところで訓練したい。どこか暖かい色の照明が木板張り風の床を照らしていた。

「じゃ、切り替えていこうー！ はい、楽しい質問時間のはじまりだよー！」

「はーいっー！」

ナナちゃんが勢いよく挙手。律儀にロミオ先輩は名指しする。

「ロミオ先輩ー……ラケル先生の年齢は？」

「企業秘密」

即答だった。

「えー、じゃあ……今つけている下着の色はー？ ロミオ先輩のスリーサイズは？」

「何その際どい質問!! 君は女の子だよね!! 男の下着の色なんか知りたいの!?!」

「は、古い古い。ジェンダーフリーのこの時代にそうゆう男女差別的発言をするなんて、イマドキ流行らないよ、おでんパンでも食べて出直しなよ」

「おでんパン?」

ロミオ先輩の翡翠の目が疑念で彩られる。その視線は私たちの手元へと注がれた。

「……」

そして、表情が漂白されていく。

「おいしいですよ?」

「君らナチュラルに食べてるけど……コレ串はどうしてんの……?」

「何の話か分からないね、ユイイ〜」

「本当ですよ。細かいこと気にする男はモテませんよ」

「細かい!?!? 細かいかな?!?!」

「串位食べられないで男を名乗ってるの? 股間にクレイモアないの?」

「ショートソードなんじゃないの?」

「君らの中の男性像は本当に人類なのかどうか、よろしいそこから議論しようか!？」

ロミオ先輩のツツコミを軽くスルーし、私が挙手する。ちよつと聞いてみたかった質問を今すべきだろう。

「先輩っ！ クラムボンとは何ですか？」

「ケンジⅡミヤザワの伝説の問いかな？ 残念だけど2070年代になっても明確な回答が提示されていないんだなーコレが……って、セクハラ質問と答えの無い問いはやめんかお前等！」

おおぅ……ノリ突っ込みまでこなすとは

「じゃあ何聞けつて言うんですかー？ まさか血の力とは何ですか、とかブラッドアーツについて教えてくださいとか聞けと言うのですかー？ そんな真面目なノリを誰が期待するというんです？」

「まさかっつて何!!? そうゆう真面目な質問しろよ！ 答えられないけど」

「質問時間とは何だったのか」

「もうやめて」

だろうと思った。

『血の力』や『ブラッドアーツ』については意味不明な部分が多すぎる。きつと分からないことのほうが多いのだろうと思っておく。第一、私はまだそんなことを気にする段階に到達できていない。ラケル先生やジュリウス隊長が言うことは、我々『最新鋭』の最新型にのみ理論上発現する固有能力である……らしい。

現状として、その期待に応えるには、私の技量はまだ遠い。

「あれ？ どうしたのえーつと……唯だっけ？ なんかへこんでる？」

「おでんパンの食べすぎかな？ それとも、不甲斐なさ過ぎる先輩に絶望しちゃったとか？」

「え、エエー!!? ちょ、やめろよー不安になるだろ！」

「なれば？」

私の負のオーラは凄まじい様だ。

「……あの、先輩。私、ですね……まだ、ここに着て、一回も神機振つ

てないんです。これって、コレって」

言葉の途中で涙が混じってくる。出している言葉よりも、ダメ出された記憶や、こじれた思いが上回ってしまっている。……伝わるわけがないのに。

分かっている、多分伝わらない。だから、呑み込むつもりだった。平気な顔で呑み込んで、ちゃんと聞きたいことだけ聞くつもりだった。今までずっとそうやって生きてきた——ハズだった。

「私、神機使いの才能が……ないのでしょうか……？　今から頑張っても、間に合わないんでしょうか……？」

ナナちゃんや隊長が『つかえる』理由は子供の頃から訓練していたからだ。そこにはきつと途方も無い努力と研鑽があったハズだと思っている。自分が毎日やっている訓練を子供の頃からやっていたのだとしたら……それはすごく、大変なことだっただろう。

けど、環境の違いは言い訳にはならない。私だってダメな環境で育ってきたわけじゃない。むしろ……恵まれていた方だった。だから今まで未来を真剣に考えたことはなかった。

コレは、『やりたいこと』ではなく『できること』しかやってこなかった私と、彼等の差なのだ。

結局……そんな自分自身が不甲斐なく、情けないだけ。情けなくて出る涙ほど惨めなものはない。

でも、やっぱり嫌だ。

自分にしかできないこと。やっと巡り合えたそのキツカケを手放したくない。つき返されたくない。

やっと決めた自分の運命をこんなところで諦めたくない。

「えーっと……オレからするとどの口がほざいてんだ、と思うけど……唯って、隊長から何にも聞かされてない、とか？」

「え？」

「オウ、ズボシィー」

ロミオ先輩は変なイントネーションをつけて凶星、と言った。

「だよなー、あいつそーゆー所あるんだよなあー……悪いけど教育者の才能はあんまないね、うちの無駄に男前の隊長さんは」

「……はあ？」

「まあ、多分何か理由がありそーだけど……言っちゃお。大丈夫だよ唯。才能あるって、ぶっちゃけオレとか、ジュリウスよっか」

「……」

一瞬何を言われたのか分からなかった。

「ええええええええ!!」

「あつははははは……だよな。オレもびつくりだもーん、あんな適合率見たこと無いわー、んまあ、神機操る才能はすげー『有る』ってことで、そう思っておきなよ」

「……信じられないんですけど!」

「まだ、神機振ってないって言ってたよな? それ、ガッツリ理由あるから」

得意そうに、鼻息荒く先輩は語ってくる。

「適合したばっかだと、神機に振り回されちゃうの。剣とか勝手にブン言ったり、銃が勝手に吹いたりエライことになるの。ナナだつて覚えがあるよなー?」

「うんうん、はじめは大変だよー全然言うこと聞いてくれなくつてさー」

「そ、そうなの!」

「特に適合率高ければ高いほど、そういう傾向にあるらしいよ。暴走すると誰も手が付けられないって奴? から徐々に慣らしていくしかないんだよ。人間と似たようなもんだろ」

「……あ」

凄く分かり安いたとえがきた。

「適合率ってのは要は、気が合うか、合わないかみたいなモノじゃね?

適合率が高いと潜在率はあるんだよ。だけどき、イキナリ初対面相手に『一緒に戦え』つても無理な話じゃん。一緒にメシ喰って好き嫌いとか、好きな音楽の話とかして、こいつこーゆー奴なんだーってお互い知ってからじゃねえと無理じゃん。今はそうゆう期間だと思つとけよ」

ナナちゃんが、目をキラキラと輝かせる。

「わー、何か先輩っぽいこと初めて言った！」

「全部ジュリウスの受け売り」

「ごめん、敬意が吹っ飛んだ」

「え」

快活に笑うナナちゃんを見て、私も思わず笑みがこぼれた。泣きそうになったり笑ったり忙しい奴だなお前、とロミオ先輩もつられて笑顔になる。

「から、さ、もうちよつと頑張ってみろよ。すぐつかえる様になるって。そのうち実戦にも連れ出されるからなく急ピッチだから早い時期かもなく」

その言葉に、新人候補生の私たちは硬直する。

「うわ、や、やっぱり……」

「それは……ちよつと怖いね」

「当たったり前だろ。ブラッドは甘くないぞ、覚悟しておけよ！」

「ラケル博士、よろしいでしょうか？」

「どうしました？ ……ああ、貴方ならばいつでも大歓迎ですよ、ジュリウス」

研究室に突入したジュリウスは車椅子の貴婦人に向かって、書類を渡す。

「新人二人のデータですか……定期的に目は通しているけれども、二人とも素晴らしいと思うわ。優秀な子達でとても先が楽しみね」

「本日も相談したいことは、『彼女』のことです」

「ああ……3人目の適合者、神威隊員のお話かしら？」

「流石ラケル先生。お話が早い」

必要以上に近寄ってくるジュリウスから軽く距離を取りながら、ラケルはクラウディウスは目の前の書類をめくる。その様子をジュリウスは穴が開くほど凝視していた。

「ジュリウス……それで？ 話とは何ですか？」

「……あ、ああ、すみません」

陶器のように艶やかで美しい肌をうっかり鑑賞していたジュリウスは隊長としての責務へと戻る。

「彼女の神機適合率の高さには目を見張ります。事実、こちら側で立てた予測より遥かに上を行く値を弾き出しております。……ええ、本当に、この結果を見たときには技術者と医療スタッフ皆で飛び跳ねて小躍りしました」

「それはそれは……え、貴方も？」

「無論です。しかし、こちらの図表を見れば分かる通り」

そこで一息挟み込んだ。

「どうやら……日に日に適合率が上昇している、と言うのですね？」

「はい、技術者たちもテンテコマイで超びっくりしております。そのせいでここ一週間ほど、神機を持たせてひたすら走り回せておりました。結果として、素晴らしい逃げ足を獲得したことでしょう」

「その間にも適合率がドンドン上昇して行った、と……そう、まるで神機を『呼び覚まして』かの様な」

ラケル博士はそこで謎めいた微笑を浮かべる。

「妖女モードキタアアア！」

「お黙りなさい……そう、神機に対して干渉を行う行動、そして新しい可能性を呼び起こす『波紋』……『波紋』はやがて波となり、そして大いなる大海を揺さぶる『力』となる……言うなれば、新たな『力』を呼び覚ます……ジュリウス」

「はっ」

謎の文言に聞きほれていた彼に、ラケルから撫でるような手がさし伸ばされる。出会ったときと変わらないキメの細やかさを誇る指先から、確かに人の温もりを感じ取れた。

「……『血の力』の目覚め、新たな可能性の覚醒はすぐそこまで来ているのかもしれませんが……」

phase 04 来る、きつと来る (前編)

美しい花園だった。

緑色の若草が広がり、凶鑑や資料越しにしか見たことの無い美しい花々が咲き誇る。ふと、見上げた空はどこまでも青く澄んでいて、降りしきる雨に磨きぬかれた後のように雲ひとつ存在しない。

悲しいほどに、綺麗な空と花畑。

少女は自分の唇から無意識に歌が零れ落ちるのを感じる。

趣味と実益を兼ね、音楽に対する勉強は人並み以上には積んできたつもりだ。厳格に行動を規制する父親もそれをだけは許してくれた。即興で作り上げためちやくちやな音節を踏みながら、少女は思いをはせた。

思えば、物心ついてからあまり自由な人生ではなかった。

母親を失ってからはずっとひとりぼっちで父の帰りを待っている日が多かった。父親を恨んだ時期もあったが、最早それは過去の話。今となっては何となく理解できる。

父はただ、守りたかっただけなのだ。

幼い頃より父は自分とは比べ物にならないほど色んなものを失ってきた。住まう家や町、今までであった平和な日常、祖母即ち父の母親にあたる人物、そして妻。次々失われていくものの中で多分、実の娘だけでも守りたかったのだろう。自分を幾重にも囲う家の柵は、言うなれば小鳥を入れるための鳥籠。

分かっていた。自分は父にとっては小鳥でしかない。

何も見ず、何も成せない、鳥籠の中の小鳥。ただ美しく囀るしか能のない哀れな鳥。守られることしか存在価値のない——どこまでも、弱くて哀れな存在。

あふれ出した小さな笑みはそのまま自嘲となって零れ落ちていった。

それでも、と少女——葦原ユノは思う。

歌だけは自由だから。

歌うことだけが、私の自由だから。

そこでなら、声を翼に変えてどこまでも、どこまでも羽ばたいて行ける。

たとえば、偽りの翼を太陽に蕩かされてもかまわない……この瞬間だけは、本物になる。

どこか陶酔したような極地で、彼女の中の感情が弾ける。

狂おしいほどの渴望、世界に対する絶望と嘆き、そして、それでも光が欲しいと望む蒸留されたまっさらな希望。覚悟と後悔、悲しみと喜び。溢れ出る思いを言葉に重ね、その輝かしい旋律で彩る。

嗚呼……よく歌えた。

誰も聞いてくれずとも構わなかった。ただ、今ここで起こった夢のような瞬間を胸に留めておこう。とユノは諦めを含んだ様な晴れやかな笑顔を浮かべた。苦しいことも、悲しいことも、一人ぼっちな寂しさも、全て優しい歌声に流してしまおう。そうすれば、少しだけ世界は明るく自分に微笑んでくれるのだから。

寂しくも浄化された心地で、清廉な空気を胸いっぱい吸い込む。

「……失礼、盗み聞きするつもりは……ありませんでした」

「……だ、誰?」

聳え立っていた木の陰から男の声が聞こえた。まさか、こんな場所に人がいたなんて! とユノは羞恥でほんのり頬を紅く染める。

「誰も居ないと思つてのにな……!」

恥ずかしさを隠すため、うっかり人を責める形になった。木陰の人物は少しだけ戸惑っていたが、やがて申し訳なさそうな表情を浮かべて姿を現した。

そこに居たのは、はつとするような美青年。

「……っ!」

陽光を受けて輝く髪は、淡く、青年自体が光輝いている錯覚さえ覚える。涼しげに切れ上がった瞳には、純粹な感動が織り込まれていた。瑞々しいすべらかな肌はまだ大人になりきれない幼さを残している。戦士の逞しさと貴人の秀麗さ、そして少年のあどけなさがちょうどよく交じり合っていた。今まで出会ったことの無いほど端正な青年の登場に歌乙女は息を呑む。

頭頂部から足の先まで、打ちしびれるような甘い感覚が彼女の体内を駆け巡っていた。

「失礼しました……あの……」

何と言ったらいいのだろうか、と青年はすこしだけ言葉に迷う。

「まるで……胸に染み入るような、歌でした」

どきり、とした。

同時に、胸の内からふつり、ふつりと何か温いものが湧き上がってくる。

何もできない、何も見えず何も成せない……そんな自分の無力さを嘆き世界に憧れる拙く未熟な歌曲。

……の、はずなのに。

何か通じるものを、見出してくれた人が居る。

「……ありがとうございます」

「い、いえ……素直な感想を言ったままでです……」

思わず零れ落ちた笑顔を向けると、青年は少し照れたように目を逸らした。あまり人慣れしていないその様子が、どこか微笑ましく、好ましくも思える。

花園の向こう側からジュリウス、と名前を呼ぶ柔らかな女声が聞こえてきた。青年はそれに反応し、声の方向へと歩き出す。彼が行ってしまう、と思ったそのとき、ユノの口から無意識に言葉が流れ出した。「あの……また、お会いできますか？」

青年は一度だけ振り返り、不思議そうな顔をした後。ゆっくりと解けるように笑った。

「そうですね、また、いつか」

ジュリウス、ともう一度男の名前が呼ばれる。

ユノはジュリウスと舌の上で音を転がしてみた。何だかとっても綺麗な響きだ。

凛々しくて、力強くて、どこか切ない。彼にぴったりの、素敵な名前。

口にしたただけなのに、うれしくてうれしくて、何故だが口元が緩みっぱなしだった。

「やだ……私、変なの……」

「とおりゃあああつー！」

重い剣を振り上げて、ダミーアラガミを一刀両断！ ……したかったのだが、見事に剣の軌道が逸れる。結果、床に大きな傷跡がまたひとつ、刻まれることになった。

「……はぁ」

もうため息しか出ない。ダミーアラガミが霧散していく。

床を見ると、私がかここ10日ほどで刻んだ軌跡が一面に広がっていた。ただ、目の前のアラガミ……ともいえないまったく動かない『的』を斬るのにすら、10回に1回当たれば御の字状態に尽きる。

『まだ、神機に振り回されている様だな』

「うー……すみません、隊長」

ジュリウス隊長にはガッツリ見抜かれているらしい。本当に彼の言うことはまったく正しい。神機に振り回されている……正解過ぎてぐうの音も出ない。

実際、神機は軽い。この重い鉄と人工筋肉の塊はどう好意的に見積もっても軽く20キログラムはありそうな代物だ。それをオラクル細胞で強化されているとはいえ、一般的かつ平均体型な女性である私が何の苦も無く持ち上げられるのは、神機自体も『生きています』から。神経レベルで接続し、管理されたアラガミを操ること……それがゴッドイーターというアラガミ討伐の専門家。

だけど、ここが若千厄介でもあるのだ。

神機はすなわち、アラガミ。

どうも私はそのアラガミと相性が良過ぎる（と先輩は言ってくれた）らしく彼、もしくは彼女に振り回されっぱなしになっている。神機を持つことはできるし、始めの頃こそちよくちよく痛んだ接続部分

も、今ではお互いに慣れたのか、痛みや違和感は感じなくなっている。ただ、攻撃になると、神機が勝手に動いてしまうのだ。

『神機の動きとのタイムラグは短くなってきたはいる……が、お前が神機に合わせているのではまったく意味が無い。問題は神機を制御し、支配することなのだが……難しいか?』

「……っ」

難しいよ。

思わず黒い感情がこみ上げてきそうになる。隊長の様な人間には、きつとも容易いことなのかもしれない。

神機の制御なんてきつと簡単にできるのだろう。貴方のような優秀な人間には、どうせ分からない。

私のように、何をやってもダメな奴の気持ちなんて、どうせ分かってももらえない。

一瞬だけ、沸騰した自分勝手な怒りを感知してか、腕輪の嵌る右腕がじんわりと火照った。……この化け物は、こうゆう私の汚い面や負の感情が大好きらしい。何度も何度も感じた感触。そのせいで、毎回軽い自己嫌悪に陥っている。

『……今日の訓練はここまでにする。……そうだな、午後の予定は入っていないから、自由に過ごすといい』

「……はい」

『余計なお世話かもしれないがあまり根を詰めるな。たまにはストレスを解消することも大切だ』

「……」

もう、辛すぎて泣けてくる。

隊長は良い人すぎる、優しすぎる。

だからこそ、余計辛いのだ。

自分に自信が無い、私に、少なくとも『今』の私には、隊長に優しくされる価値なんてない。もっと自信があれば、きつとこの優しさを真正面から受け入れられる。何の苦も無く、笑うことができる。

……でも、できない。

だから、変な作り笑いで誤魔化すしかない。空元気どうそをつくし

かない。

自分自身の心さえ、誤魔化してしまうしかない。

「もう、ストレス過多ですよ……、ナナちゃんにおでんパン貰ってきたまーす」

『食いすぎるなよ』

「わ、分かってますですよ!?!」

『それと、心が折れそうになったらフライアのゴツデスこと優秀で健気でホタルのように儂く美しいラケル先生のプロマイドを眺め……』
「お疲れ様でーす、お先上がりマース」

話が長くなりそうだったから、逃げることにする。

本当にうちの隊長はコレさえなければ完璧なお人なのに。ちよつと天然つてるところまで入れて、完璧超人なのに実に勿体無い。

常に輝きを放つ美貌と、戦士に相応しい潔さ、指揮官としての有能さ、多少ズレてはいるがユーモアをそこそこ嗜む堅物さ加減……何よりも、仲間を大事に思ってくれている優しさと強さ。簡単に言えば、神話や物語に出てくる勇者の条件を全て持ち合わせている様な気がしないでもない。

「……」

ああ、そうか。

だから少し、寂しいんだ。

「まあ待て話をし……」

「なんで出て来るんですか」

オチがついたと思ったのにー!

が、第二監視室から出てきた隊長の顔はいつになく険しい表情が刻まれていた。

……どうやら私に対しての堪忍袋がついには破裂したらしい。

「前から聞いてみようとは思っていたのだが……お前に『覚悟』はあるか?」

雷が来るか! 落ちてくるか! と戦々恐々としていた割には、意

外に静かな声を向けられて、ちよつとだけたじろぐ。……で肝心な話の中身は何だっけ。

「覚悟……？」

「そうだ。神を薙ぎ倒す覚悟、そして人々の盾となり、剣となる。人類最後の砦である覚悟が……お前にあるのか？」

「……」

ある。有るには有る。

だが、自信が無い。あまりにもぼんやりとし過ぎている実体の無い霞か霧のような甘つたるい感情。

そんなものを覚悟と呼べば、今度こそ、簀巻きにされてフライアから叩き出されてしまうでしょう。

「……」

だから、黙るしかない。

「恐らくは、あまり実感がないだろう。それならそれで良い。別に否定はしない。……だが、お前が神機に振り回される理由は……『そこ』にあるんじゃないのか？」

「……」

「よく考えてみるんだな。結局、自分のことは自分にしか決められないんだ……いい加減、お前に甘い顔ばかりしてやる訳にもいかない」

「……はい、すみません。隊長……」

しよげこむ私。

自分でも嫌になる程豆腐メンタル（※豆腐のようにすぐに砕ける脆くて未熟な精神のこと）で情けなくなる。

隊長は少しずつだが成果はあがっていると云ってくれるが、まだまだ期待された分には遠いのだろう。隊長は俯く私の肩を叩いてくれる。そして片手に何かを握らせてくる。

遠くなつていく、亜麻色の髪を見つめながら、やはり泣きたくなくなってきた。

あの人は絶対に振り返らない、しっかりと前を見据えて歩いていく強さが眩しい。そんな光が、時分の心の中の影を痛いほどに照らしてくる。如何に私自身がダメな存在なのか、っていつだって思い知ら

されているような気分陥る。

悔しさと情けなさを抱えたまま、ふと、握りこんだ左手を開いてみると

そこには、光り輝くラケル先生のプロマイドがあった。

「お、おつかれー」

「ユイユイお疲れ、今日もシゴかれたっぽい顔してるねー」

最早お約束のたまり場と化した中央ロビーにロミオ先輩とナナちゃんが自動販売機の傍でまったりとしていた。確か、ロミオ先輩の方は単独任務があったハズだ。このところ、ナナちゃんにしろ自主訓練が多く、どうも私が隊長を借りっぱなしで非常に申し訳ない。

「疲れたよ〜……」

「だよねー。あの隊長に付きっ切りで鬼指導されてるんだもんね、私だったら参っちゃうよ」

「あいつ色々容赦ねえからなー。お前も限界だったら、ちゃんと見えよ?」

「あはは……善処します」

ナナちゃんからおでんパンを受け取りつつ、生返事を繰り出す。

実を言うと、隊長の言葉が頭の中でぐるぐると回っている。さっきからずっとそればかりに気を取られてしまう。

隊長の言う『覚悟』とは何だろう?

ゴッドイーターが冗談ではなく死ぬほどやばい職だということは良く分かっている。死ぬことすら仕事の内、とまで言われるレベルだとも分かってはいる。

だけど、死ぬ覚悟なんて勿論無い。死にたくはないし、痛いのも嫌いだ。仲間……ロミオ先輩やナナちゃん、隊長やラケル先生に迷惑はかけたくないし、勿論嫌われたくもない。

……こう考えると、いよいよ私には何の覚悟もない気がしてきた。

「ん〜？ どうしたのユイユイ??」

「ちよつとねー……はあ、隊長さんに出された宿題が難しくってー……」

「ハア？ 宿題い？ 何だつてジユリウスそんなもの出すんだよ？」

そこはかとなく、心配してくれるロミオ先輩。

「……ん、けど大丈夫です！ 何とかします！」

「おー、気合入ってるね！ まー、ユイちゃん頭良さそうだし、心配ないか！ ……どっかの頼りない先輩とは違って〜」

「ん、だなんだ……つて、ちよつと香月ナナさん、さり気オレのことバカっていつてませんか？ 更に頼りないって断言してませんか？」

「えー？ 私はべつにロミオ先輩の個人名なんか出してませんけどー？ パイセンったら被害妄想強すぎの自意識過剰系男子じゃないですか？」

墓穴を掘ったロミオ先輩がふぬぬ、と軽い憤怒で顔を紅くする。

「ひ、人のあげ足取るんじゃねーよ！ 誰が自意識過剰だよっ！」

「ロミオ先輩の足なんか揚げません！ 臭そうだし！ 足を揚げるならやつぱりタコ！」

「物理的に揚げるの!? 釜茹での刑に処すの!? 怖いよその発想オ！」

「おいしそうなのに」

やんややんにゃーと絡み合うお二人の姿はとても可愛らしい……まあ、先輩は年上の男性だけどシヨタ顔だから、可愛いということ処理してしまおう。しかし、勢いあまって接近するAZATOIナナちゃんにビビった純真無垢顔なロミオパイセンが一步引く。

すると、何と言うことでしょう。奇跡か神の悪戯か、今まで影も形も無かつたくせにイキナリ階段から人が降りてくるではアリマセンカ！

「先輩後ろだ！」

「え？ うわああーつとー！」

手遅れでした。

慌てて先輩を掴もうとし、そのまま連鎖的に私の腕が、目の前の誰

かに当たる。

きやつ、と可愛らしい悲鳴っぽい何か、偉く綺麗な声だなーなどと軽く考えていると、そこには。

またしても目もくらむ程の美少女が。

ロイヤルミルクティーとでも言うのか、薄くミルクを溶いた紅茶色の神に、優しい面立ちの『癒し系』っぽい美人さんだった。何処かで見たとような顔と服、そして髪だがちよつと思いいせせない。その美人さんの顔が、何故か恥ずかしげに赤らめてあった。

だって、それは、

私の手が、形の良い果実に触れていたから。

「ぎゃああああああつー！」

やってしまったあああああ！

神威唯！ 17歳！ 初痴漢、いやこの場合痴女かなー？ どつちでもいいわもう！

記念すべきチカン初体験な私ですが不可抗力です！ これは事故なんです！ ……という風に頭の中がなんかすごいことになる。そしてとても柔らかい。ふにやつとしていいな、いいな、羨ましい。妬ましい。

「貴様……何を、何をしているうううう！」

「ぎゃああー！ すみません、ごめんなさい！ 後で何でもしますからあー！」

体が勝手に動く。

基礎訓練で鍛え上げた脚力を使い、すばやくバックステップで距離を取る。その後は、銃を構えているときの前転回避の要領で右足から膝を突く。左右両脚を折りたたみ、足先を親指だけ交差させるのがコツ。畳があると思いい込み、縁に触れない程度の位置を即座機計算し、手を八の字型に置いた。

あとは簡単。顔面を地面へと打ち下ろす。

「い、命だけはああーっ！」

「決まったあー！ 秘儀！ ドゲザ!!」

フオローをありがとう、ナナちゃん。ありがとうロミオ先輩。

私の生き方は間違っていないかったです。どうか忘れないで、わたしがこの、フライアに居たってことを。

生きてたって、ことを。

……冷静に考えたら半分はロミオ先輩の責任じゃないかという気がしないでもないが。

「私の娘も大ファンな世界的歌手に超失敬だな貴様！　おい、名を名乗れ！」

よく通るデカイ声、高級そうな軍服、やたらと恰幅の良い中年オッサン。

ここまで揃えば誰でも分かるだろう。何度も言う、私は権威と権力には弱い。

「は、はいいつ……フェ、フェンリル極地化開発局ブラッド候補生、ユイカムイですう！　お願いしますクビにしないでください靴の裏でもなめますから！　いつそ踏みつけて！」

「同じくー、ブラッド候補生の香月ナナですっ！」

「同じくー、ロミオ・レオーニですっ！　以後身辺警護の任務などありましたら、誠心誠意全身全力で体当たりする所存ですので、以後よろしくお願いしますっ！」

殊勝だなこいつら。営業に余念がないのがとても素晴らしい。というかこんな時に自分を売り込まないでいただきたいですわ、この先輩と同輩め。

「すみませんねえ、ユノさん、何分戦うしか能のない連中でした……」

「いえ、構いませんよ……そして、確か、『ブラッド』とおっしゃいましたか？」

「そうですが……ご存知で？」

「はい、隊長のヴィスコンティさんとは以前……」

「なるほど……」

何故か這い蹲る私そっちのけで談笑が進んでいく。世界の理を見ているような気分になった。

平民が平伏する傍らで雲上人たちは優雅に笑い、話す。分かったよどうぞせこれが世界だよはいはい。

地化開発局ですから！　だよなつ、ナナ!？」

「バスターソードがくシオートソードにいく」

「むしろバーストしちゃってるよコレ！　うわわわわ、こ、これ触らないほうがいいかなあ!？」

「何言ってるんだよ女子!？」　局長！　目を開けてくださいっ！　逝くなあああああああ!？」

「いっそ、もげろ」

「ナナちゃん冗談にならないからやめたげてア!？」

ロミオ先輩に上体を起こされた本日の犠牲者、局長さんが定まらない視線を泳がせる。さしのばされたその手を、ロミオ先輩はしっかりと掴んだ。

「ユノ……さん……お見苦しい所を、失れ……」

「」「局長おおおおお!」「」

それが、彼の最後の言葉になった。

phase 05 来る、きつと来る (中編)

突然だけど、フライアは広いしデカイ。

『移動式支部』と銘打ってはいるものの、個人的にはフェンリルの支部というよりも。

「ひとつの研究所か大学が動いてるみたい……」

「あゝ、なるほど〜」

「分かる分かる。オレにもそう思っていた時期がありました」

実際にはどれ程の人間が居るのかは分からないが、フライアにはかなりの人が住んでいる。そしてかなりの金がかかっている。まず、試験的な部隊の(今のところ)ゴッドイーター4名の為だけに訓練室を幾つも用意している時点で、その金銭感覚の狂いっぷりは想像できることだろう。

現在私たちは、研究区画から居住区画へと移動中だった。

フライアに詰める大量の研究者や技術者、学者に事務員に衣食住が保障されていない：などという、アホなことはない。

私たちブラッド隊員やラケル博士は色々な理由から、寝泊りは研究区画の一室をあてがわれているものの特に不自由は感じないし、むしろ実家の自室よりも広々としておりさながらホテルの部屋みたいに超快適。窓が無いため外の景色を眺めることはできないが別に呼吸困難に陥るわけではないし気分転換に綺麗な景色が見たくなったらいつもの『庭園』にでもいけばいい。と、いうのがちよつとだけ特殊な私たちの話だ。

ここで普通の研究職員達は、この先の居住区画に住んでいることになっっている。

「ま、確かに冗談みたいな話だよな。オレも来たばつかの頃は、もの珍しすぎて男一人でビバ探索。それで、迷ってしよつちゆうジュリウスにレッカーされてたな〜」

「何してんのロミオ先輩」

「あいつスゲーの、このフライアの地図全部頭に入ってるの。流石隊長って感じじゃね?」

「先輩にもそのくらいの甲斐性が欲しいですね〜」

さつくり辛辣なナナちゃんが同意を求めてきたが、悪いけどスルーする。

「でも、この乗り物もかなりキてますよねえ……」

「え？ そう？ オレは結構こうゆうの好きだけど」

「マジですか……」

私たちが乗っているコレは。何なのかと問われれば、一応昇降機……といえそうな気がする。だがすごいところはこの昇降機、縦だけではなく横にも移動が可能ということだ。あえて言うならば、上下左右全方向対応型の次世代型。観覧車の座席を思わせるような座席着き。正面や下はわざわざ強化ガラスの窓が嵌っていて、進行方向や下を見渡せるようになってる。

それ自体は凄い、と思う。

「なんで、わざわざ神機兵のカタチをしているんでしょうかね……」

そう、コレ大変素晴らしい移動手段のだが、ちよつと突っ込みたいところはこの全方向対応式昇降機。

神機兵なのである。

傍から見たら、神機兵の腰から上、上半身のパーツが縦横無尽にフライアを行きかっているような、実に妙な光景を創造してしまっている。

「まー、いいんじゃないの？ ここ兵器の開発局だし？」

「えーつと……何というのでしょうか……」

「ん〜、言われてみたらロミオ先輩の言ってることが正しいような気がするけれど？」

あんたら順応力すげえな……。

何となく、私は落ち着かないような……ちよつとワクワクするような微妙な感情が入り混じっているのだがそれはさておき。

「はい、お嬢様方ご注目〜！ ここからがフライアの誇る居住スペースです」

「おー……これはまた……」

「わあ、すっごいねーっ！」

景色が一気に変わる。

それまでは、何となく機械機械機械とした灰色の鉄筋にコンクリート打ちっぱなしの壁と、色々な用途で点した赤や青、緑の照明。白やこげ茶色のタイルを並べた床に白衣の人間や制服を纏った事務員、軍服めいた服装の警備員たちが点在している光景の連続だったが、それらすべての情景が一気に変異する。

まず、空が見える。

かなり高い場所から本物と思しき日光と青い空……が、あれば良かったのだが生憎本日の天気は曇り、鉛色の雲とくすんだ淡い光が差し込んでいる。

6階ほどに仕切られた建物にはたくさんの人々が行きかっていた。どうやら徒歩だけでは広い施設内を移動することが困難らしく路面を走る小型電車まで走っている。人々の歩いた後の床や、汚れのついた壁は円盤型の掃除機械が塵やゴミを吸い取っていた……アレは知っているぞ、確かテレビで見たことがある。フェンリルンバだ。

道の中央にはどうやって設置したのか、巨大な花壇に多分本物の街路樹木。照明用の街灯はかなりお洒落なデザイン。そこを行き交う人々は、白衣や事務員の制服も居るが、音楽を聴きながら運動着でジョギングをする男性から、私服で腕を組んで歩いている若い男女の姿まである。

「……前言撤回。これは動く町ですね……」

「んー、その見解は間違ってるな」

「あの子！ あの子、クレープ食べてるっー！」

ナナちゃんが指を指した先には十代後半から二十歳と思しき、濃い金髪を肩口で切りそろえた女性の姿があった。フェンリルの事務服を着ているから多分職員なのだろう。休憩時間の息抜き、と言った風情で、設置された長椅子の上でクリームと果物で飾られたクレープをほおばっている。

「は？ クレープ!? なんでもそんなモノが!？」

「それは何故人がクレープを食べるのかって質問かな、神威さん」

ナナちゃんは、真顔だった。

「ロミオ解説員が説明しまーす！ 何か知らねーけど、チエーン展開してる食品企業が乗せてくれーって、頼み込んだらしいよ？喫茶店スターワックスとか軽食屋とかその他菓子屋、ちよつとした雑貨屋、超万能自販機で買えない品物なんかを扱ってるらしいな。んまあ、将来ブラッド隊員とか有人神機兵とかで増員されれば、総人口が増えんじやん？ そこでちよつとした市場かなんか作ろうと思つたんじやないの？」

「……はあ……」

ダメだ、話がデカすぎてちよつと私着いていけない。商人という存在はいつの時代だって遅い。

「まー、そのお陰で並以上には健康でかつ文化的な生活を営なまさせて貰つてんだから特に文句なしっ！ あとはリサイクル品とか多いんだ、あの走ってる路面車あるだろ？ アレは外に出撃しまくつてお亡くなりになった装甲車を軽く治したモノだし、その辺のフェンリルンバには無人神機兵の使えなくなつて破棄されるハズだった可哀想なセンサーを再利用してるし……まあ、アレだ、頭の良い奴多いとすげーよなあ！」

「……まじでか」

職人の意地、いや執念すら感じる。便利な生活の為ならばと知能と労力を惜しげもなく注ぎ込んだ結果がコレだよ。やっぱ人間つてのは欲張つてナンボのものなんだね。

「ロミオ先輩先輩っ！ クレープの他には!? ドーナッツとか売ってる!？」

「焦るでないぞ、ナナコウツキよ。我らには隊長の女神より賜りし、使命があつたハズじやろう」

「えーえーえー、ちよつと位食べ……見て回つてもいいじやないですか聖ロミオ大パイセン！」

「何でもかんでもくつつけりやいってもんじやねーぞ」

でも今日はお休みじやないですかーっ、とごねるナナちゃん。

「うぐっ……ご、ごめんなさい、私のせいで……」

「本当だよ！ ユイユイがグレム局長の股間を殺さなければ良かった

んだよ!」

「待て、殺したのはレア先…博士だろ。それに半分はオレの所為だったり所為じゃなかったり」

ロミオ先輩よ、あんたは本当に悪いと思ってるのか…私も人のことは言えないけど

「責任…取ってくださいよ先輩!」

「取ってるじゃん!? 責任取ってんじゃんオレ!」

「ユイユイ、その言い方は青少年の精神衛生に良くないよ」

「は? 何言ってるんだよナナ?」

ナナちゃんはやたらと下ネタに辛辣な気がする。に、対してロミオ先輩は若干鈍いような気がする。考えてみたらロミオ先輩は隊長と一年ほど付き合ってたわけで、ドキッ!男二人の特殊部隊! だったわけで…:相手がああ隊長なら下ネタ耐性はつかないことでしょう。なぜなら彼はラケル博士一直線なのですから。

きやいきやい言っていると昇降機の泊まり場についたようだ…:つてかコレはもう、昇降機なのだろうか。

「到着!」

元氣よく言い放ったロミオ先輩が真っ先に降りていく。後から続くナナちゃん、最後に私が降りる。意外なことにロミオ先輩はドアを抑えていてくれた。

「何気紳士ですね、先輩っ♪」

「何言ってるんだよ、当たり前じゃん?」

「おう、マジもんの紳士だ見直しましたよ先輩っ!」

「み、見直し…?」

何故か唾然としているロミオ先輩は放置しておく。すると向こう側から歩いてきた白衣を着た二十代中ごろほどの研究員数名がロミオ先輩の存在に気づき、笑顔で手を振ってくる。

「ヴォーノ! ロミオ君この間はサンプル採取ありがとさん」

ロミオ先輩も手を振り、それほどでもありませんよーと大声で返す。

「ふーん、これまた意外ですね…」

「だねー。ロミロミ先輩のコミュ力は高かったのだー」

「お前らなあ……」

そこで一息、彼は溜め込む。

「あのな、博士はラケル先生だけじゃねーの。研究員さんにだって世話になるし、事務員さんだって警備員さんだって居なくちゃ、フライアは成り立たねーの。確かに俺らはかなーり試験的な部隊だよ？」

「けど何も実験動物扱いされてる訳じゃないだろ？」

「は、はあ……」

「だから、個人的な頼みごとをしたり、されたりするんだよ。そうやって『支えあつて』生きてるのが此処の流儀なんだよ。人間一人じゃ生きていけないだろー？」

「……」もつともです」

ロミオ先輩は、割としっかりしていらつしやつた。

当たり前前のことを言っているだけなのだが、実際理解するのは難しい。

「ん、ちよつと言ひ方偉そうだったか……？ えー、なんかそうゆう訳だから、まー、皆で仲良くやつてこーぜ！ 的なことを言いたかつたりして。なんだかんだで結構助けられる場面も多いからなー、特にオレみたいなドジでマヌケだとなー！」

「自覚があるんですか？」

「自覚症状があつても改善できるとは一言も申し上げておりませんが何か」

「正当化するとかタチ悪いよくロミオ先輩く」

「うるせーよー！」

ナナちゃんと先輩はいつも非常に楽しそうだ。なんだかんだでこの二人『波長が合ってる』気がする。私が隊長を借りっぱなしなせいでもあるが、二人で居る時間も長いように思えるし、同じマグノリアⅡコンパス出身者同士色々分かる話もあるのだろう。二人ともかなり人懐っこく明るい思考を持っている（と思う）から簡単に打ち解けあうことができる……何故かそう思う。

ソレに比べて。

私のほうはどうだろう。

隊長はいい人だと思う。だけど、私は今、隊長に見捨てられたくない、という思いしか抱けない。隊長が何を思っているのか、何を考えられているのかまったく分からない。

当たり前だ。

そんな余裕が無いから。だから……

「んじや、行きますか！ グレム局長にお詫びの品を買いに！」

「あいあいさー！ ほーら、行くよー！」

「ちよ、待つて待つて」

二人の歩く速度はとてもはやかった。

結論だけ言う。

あの後私たちはお詫び品を買いに行った。その先々の店で

「あ、はじめましてですよね。インターンの学生さんか何かですか

……？ え、ブラッド!？」

「いらつしやい、ロミオちゃん。あら……？ 今日ほモテモテねえ

……お姉さん、寂しいなあ？」

「イラツシャイマセ……ピーピー！ 警告！ 警告！ ロミオ隊員ガ

女ノ子ヲ連レテイル！ コレハ 終末捕食ノマエブレ！ ヒトノ時

代終了ノオ知ラセ！」

という反応ばかりをされた。フライアの皆様も中々の粒ぞろい。

ともあれ、散々回り道をした挙句やつと見つけた『バナナの詰め合わせ』というバナナ6種類の詰め合わせ、何とも圧巻な箱を丁寧に梱包し詫び状まで手書きで書いた。こんなもので局長が許してくれるとはあまり思えない……正直、手の込んだ嫌がらせにしか思えない。その後ナナちゃんがしきりに菓子類を要求していた為、ロミオ先輩が付き添うことになり、私だけが先にこちらの研究棟へと帰ってきたの

だ。

その時の、「先輩なんだからな！今日はおごってやるぞー！」と言った彼の眩しい笑顔が目には焼きついて離れない。

ロミオ先輩はナナちゃんブラックホールのような胃袋を甘く見ている。まあ、軽くなつたお財布と後悔の痛みと共に学習してもらおうとしよう。

で、戻った私はどうと。

何故か部屋に帰る気にはならないし、今日はもうくたくたで訓練室や資料室には入りたくない。だが、ロビーに戻るのもあの惨劇を思い出すからどうにも気が引けてしまう……というので消去法的に最上フロアの『庭園』に来ていた。

時間は夕暮れ時。空はいつの間にか晴れており、綺麗な薄い紅色が広がっている。

「……なんで、晴れてるんだろ……」

天気になんか言っても仕方が無い。

現象的に考えると、フライアが移動しているから。天候の変化に加えフライアの移動も加わればあつという間に天気は変わっていく。至極真つ当な話。

でも、変わって欲しくなかった。

天気にまで置いていかれた気分だ。

初めから分かっていた。本当は全部私が悪い。

きつと私には覚悟なんて上等なモノはない。

自分で選んだ人生をしっかりと生きたい、仲間には見放されたくない。けど、失敗はしたくない……どこまでも自分勝手な『ない』ものばかり。

こんな気持ちも誰も受け入れてくれる訳ない。『自分のこと』だけで精一杯な感情なんか誰も受け入れてはくれないし……誰も、受け入れられない。

そう、『神機』ですら。

「人間ひとりじゃ生きていけないのにね……」

ロミオ先輩の言うとおりだ。

人間どころか、私たちゴツドイーターは神機……アラガミとさえ一心同体にならないければ、戦えない。

「怖い……怖いな……けど、自分しか、自分しか、できないことなんだよね……」

『結局、自分のことは自分にしか決められないんだ』

隊長はそう言っていた。少しだけ、理解できる気がする。

結局は、誰も、助けてなどくれないのだ。

自分のことは、自分でしか救えない。

本当は気づいていた、けど、認めたくは無かった。分かっていたけど、必死に見えない振りをしてきた。誰かが助けてくれれば自分の心は救われるという、夢物語を信じてみたかったのだ。結局はただ、甘えていた、それだけ。誰にも心を救われず誰の心も救えないならば……この世界は寂しすぎる。

「怖いな……」

そのとき。

何処からか美しい声のようなものが聞こえてきた。耳をよく澄ましてみて、理解する。

綺麗な歌だった。

誰かが歌っている、すごく綺麗な歌。

「歌……？」

あまり聞き覚えの無い女性の声。

透き通るように美しく、羽ばたくように気高い。聴いているこちらの心を掻き毟るような歌だった。

寂しさや切なさ、すぐそこに居るのに触れられないもどかしさ。人の心の隙間を埋めて、すこしだけ傷付けるような歌声。せせらぎのよ

えええ!？」

彼女が出した名前は、フエンリル広報活動でも有名な、すっかり世界の歌姫様の名前だった。そういえば股間がバーストした局長とかいう中年オヤジも言っていた気がする。世界的な歌手、と。

ということは、私はそのグローバルな歌姫様の……

「あ、あのっ、私のことは訴訟しても、フライアのことは訴えないくださいっ！ すみませんごめんなさい許してやってください……!」
「もういいよ、気にしてないです。アレは事故だったってことでいいじゃない」

「ほ、本当に……?」

「それよりも、歌をタダ聴きされちゃったコトの方が問題だなあ」
「……おいくらですか?」

考えてみたら、彼女は世界的な歌手。例えば、コンサート一つ開いたとする。するとそこで聴衆となれる権利を持つのはフエンリルの上層部や世界的企業のトップ、有力者のどれかだろう。私ごとき三下ゴッドイーターの更に見習いが聴けるようなお方ではない。事実を確認すればするほど、胃が痛くなってくる話だ。

泣きそうな顔で歌姫様のご尊顔を拝見し奉ると

その瞬間、彼女は吹き出した。

「ぷっ、あははははははっ！ やだもう……冗談冗談。貴女おもしろすぎ……」

「じよ、冗談ですか? ひ、酷いですっ……」

ユノ様は可愛らしく体を二つに折り曲げん勢いでお笑いにならないが、こちらは全く笑えない。正直冗談まで理解できる余裕なんかない。流石人生の修羅場を踏んできた場数が違う。彼女にとって私は私などきつと玩具に等しいのでしょね、ケツ。

「本当はね、此処で和んでいたら、なくんか落ち込んでそんなブラッド隊員の女の子が居るなくって思っ、ちよつと慰める心算で一曲やらせていただきました……ってちよつとお節介だった?」

「いえ、もう……私なんかにはもつたいなくて」

心臓に悪いお節介だ。

けど、確かにちよつと勇氣をもらったような元気になったような気がしないでもない。気の利いたセリフのひとつでも言えればいいのだけど、生憎そんなセンスは持ち合わせていない。けど、ここで黙るほど空気が読めないわけでもない。

「まるで……胸に、染み込んでくるような……素敵な歌でした」

仕方ないのでそのまま本音を言ってみた。

すると、歌姫様はさつきとは別種の驚きを瞳に浮かべる。

「……あ、あの……」

やばい、また何か粗相をしてしまったのだろうか？ もう此処に来てから私は粗相しまくっている。常習犯だからこれ以上罪は重ねたくない。祈るような気持ちで何か謝罪の言葉を探っていると

「あ、ごめんね。……前にも、同じことを……全く同じことを、言ってくれた人が居たから」

「は……はあ」

何だよかったわ間一髪セーフ。

ユノさんには悪いけれど、やはりこの会話は精神に来る。私のノミのような心臓には負担がデカすぎる。もし、ここで私の急性心不全による変死体が上がったらそれはストレス性ショック死ということにして貰おう。

「だって、そんな感想しか出てこないんです。……うまく言うことはできないですけど……本当にきれいな歌だから」

実を言うと綺麗だな、と思ったのは歌声だけではない。

歌っている姿勢、手の振りや表情、その他全身を使った表現方法。生来の美貌に加えて、『魅せ方』に特化した研鑽を積んできた証。景色も彼女もそして歌も全てを含めて美しいと思ったのだ。

「……努力、なさってきたんですね」

「あら？ 分かる？」

ほとんど独り言のように漏らした呟きに少しだけ後悔する。

「なんとなく、ですけど」

「ふふふっ、じゃあ私もまだまだってことかあ」

ユノさんは私の傍らにそっと腰を下ろしてくる。多少の汚れを気

にしないという姿勢から、案外剛毅なのかもしれない性格が垣間見えた。

「私ね、『自然』に聴いてもらおうって思ってるんだ。これが今のところの目標。大仰な演出もステキだけど、なんだかそれじゃあ肩が凝ってしまうでしょう？ そうじゃなくて、私は、誰かを応援できる…重荷にならない程度に背中を押しあげられる。そんな歌を、目指しているんだ」

「……」

「何ていうんだろ、努力じゃなくって、結果で勝負したいんだ。何かそれだど『私こんなに頑張ってきたんですよ、さあ褒めろ』って言うように思えて。そうじゃなくて、あくまで主役は聴いてくれる方の人たち。評価されれば嬉しいし認められたら気分良くなるけど、それは私個人の話でしかない」

ユノさんの声はやっぱり優しかった。

諭すつもりなんてないだろうが、私にとってはかなり耳の痛い説教となる。

「本当に目指すところは誰かに喜んでもらうこと。……歌に限った話、なんだけどね」

そこで彼女は照れ隠しのように微笑んだ。

「ユノさんは……すごいですね」

「えっ？」

「……私なんかと比べたら失礼だろうけど、年齢も私と大して変わらないのに……すごく立派な考えを持ってて」

「そんなこと……」

「ううん。すごく、カッコいいです。しっかりした考えを持ってて、自分の力を存分に発揮していて……私なんかとは」

私なんかとは全然違う。

でも、言葉が詰まって言えなかった。その代わりに目頭から熱いモノがこみ上げてくる。情けなくて、そんな自分が腹立たしくて、穴があいたら飛び込んで埋もれて母なる大地に返ってしまいたい衝動に駆られる。ユノさんのことをカッコいいと思うし、スゴイなあ、と

も思っている。

「だけど、それと同時に、羨ましいと妬んでいる自分が居る。すぐく、子供っぽくて幼くて、未熟で自分勝手な……自分でも嫌になるような醜い私。」

「やっぱり、そうだ。隊長やユノさんのような『輝き』を持っている人間のそばにいとると、如何に自分がダメな人間かが嫌というほどに分かってきてしまう。」

「それはすぐく、苦くて、痛い。後悔と嫉妬と自己嫌悪が延々と渦巻いている。」

「ねえ、さつきからどうして『私なんか』って言うの？」

「え……？」

「少しだけ涙交じりになって、上ずった私の声は、ユノさんの少し怒ったような表情に跳ね返された。」

「厳しいことを言うけれど、それってすぐ贅沢なことだよ？ だって貴女は『ゴツドイーター』それも最新鋭の神機に適合した人間なんだよ」

「……でも」

「でも、全然ダメなんです。結果が出せないし、神機の制御ひとつマトモにできないんです。」

「と、言い訳が喉の奥までこみあげてくる。だが、ユノさんは反論を許してはくれなかった。」

「誰だって好きに生きれるわけじゃない、なりたいモノになれる世界じゃない。もしかしたら、貴女も無理やり連れてこられて、嫌々訓練を課せられているのかもしれない……でも、その上でも言うよ。『貴女』になりたい人はこの世界に沢山いるんだよ」

「……」

「そんなこと、言われなくたって分かっている。神機は適合しなければ容赦なく人を喰い尽す非情な武器だ。アラガミを倒したいと願ってもそれを成せない人間は大勢居るんだろう、と想像もつく。そうゆ」

う人間から見れば、私は特権の上で胡坐をかいて、さらに辛い苦しいと駄々をこねる存在。

だが、それでも苦しいものは苦しい。

「だから、『私なんか』って言って、誤魔化しちゃダメ。それは結局逃げてるんだと思う。……私も、そうだったから……」

ユノさんの目が少しだけ翳る。思い出したくない過去を見つめる。「昔からね、よく言われてきたんだ。『お前には何もできない』って。だから、ずっと自分に自信が持てなくなつて、苦しくて悲しくて、寂しくて……何をするのもおっかなびつくりで。今思うとかなりダメな子だったなあ」

「あなたが……？」

にわかには信じがたい話だ。いまの生き生きとしてるユノさんからは、ちよつと想像もつかない姿の話。だけど、確かにそんな過去があったと確信ができる。

「ずっとずっと、自分には何も見えない、何も成せないって思い込んでた。思い込み過ぎて、一人で勝手に殻に閉じこもってた。けど、そんな私を殻から引きずり出してくれた人たちが居た。光の中へ引つ張り出してくれた人たちが……たくさん、居たんだ」

「……」

「だから、もう決めた。自分から逃げるのはやめよう、つて。自分自身に嘘をついてひとりで殻に閉じこもっていれば、それはそれで凄くラクなんだよね。誰にも裏切られないし挫折もしない。けど、それって結局は嘘で自分を誤魔化しているんじゃない？ そんなの、生きることから逃げてるつてことと同じ」

そこで、はつとさせられる。

私の心そのものを言い当てられたような感覚。

変な作り笑いで誤魔化すしかない。空元気でうそをつくしかない。

自分自身の心さえ、誤魔化してしまうしかない。

つまり、それは……

「何か説教くさくなつちやつて、ごめんね。でも私はただ、逃げるみたいに『私なんか』って言ってほしくないだけ。……だって貴女は良い

ものを沢山持っているんだもん」

「……はあ、そうですか」

世界的な歌姫であり、人を陶醉させるような美声と柔和だが芯の通った美貌。そして正しくて清廉な志まで持っているユノさんに羨ましがられるものなんて一つもないような気がする。

けど、強いて言うならば、ちよつと強がつて張り合ってみるならば「そう、ですね。私には、仲間が居ます」

頼りがいのある隊長、なんだかんだで世話焼きのロミオ先輩。明るくて前向きなナナちゃん。そして、ラケル先生が居る。まだまだ知らない人だらけだけど、私たちを支えてくれているフライアの人たちが居る。何も無いダメな私が唯一誇れるとしたら……きつと、それだけだ。

「そうだよ。いいなあ、ジユリウスさんとずっと一緒に居られるんだから」

「えへへ、まあーずっと一緒ってわけでもないんですけど……って、ええ？　なんで隊長のコト……!？」

「私はフェンリル本部広報協力者だよ？　フライアの情報だつて入ってきますよ？」

恐るべし歌姫。いや、どちらかと言うと隊長の方が？　世界的な有名人にまで面識があるとか、いよいよ私の上司は雲上人なのではないかと疑える。

「つていうのはウソで、実はね、ちよつと昔、此処フライアでばったり会ったことがあったって話」

「な、なんでかは聞かないでおきましょう……」

「ふふっ、丁度この場所」

なんか懐かしいなあ、などとのたまいやがる歌姫様を差し置き、私の悪癖、独自思考が展開される。

そういえば、さっき言つてたよね？　この人言つてたよね？　同じゴッドイーターなのに彼とは違う、だとか。

その『彼』って……

「うっそ……」

「なんだかゴツドイーターさんたちの素顔って、ちよっと面白いね。貴女にしても、ジユリウスさんにしても」

「ちよ……からかわないで下さいよ！」

ユノさんはやっぱり無邪気に軽やかに笑うだけだった。仕方ないから私もつられて苦笑い。

それでも、今日は、うまく笑えていたと思う。

『ブラッドー03、本日の訓練を開始する』

「はいっ！」

いつもより心なしか、しつかり返答が出来たような気がする。

心の中にあつた黒い感情は消えてはいない、無駄に肥大したわだかまりはそう簡単には解けてはくれない。

でも、確かに前に進んでいる……と、個人的には信じたい。そういう方向性でいこう。

『分かつてはいると思うがブラッドー04、香月隊員は既にフェイズ3課程を修了した。従ってブラッドー03が此処で及第点を取らなければ、部隊全体の足を引っ張っていることになる』

「……はい」

いかん、すでに心がミシミシいつてきている。けど、頑張つて耐える。

これはただの事実。見たくない現実だけど、もう逃げることはできない。

『……ので、今回は個人訓練ではなく、複数人による連携訓練を行うことにする。対応者は——』

「……えっ？」

ちよっと待つて聞いてないんですが!?

自分の見えないところで勝手に決められて勝手に物事が動いていくことほど嫌なものはない……かと言って知っていたとしても何も変えられない事象は確かに存在するのだけど。

訓練室の重そうなドアが自動で開き、神機を携えたその人物が入ってくる。

「……って、え？」

「ジュリウス・ヴィスコンティが担当する」

ジュリウス隊長がはつきりそう言った。

「はい!? ちよ、ど、どうゆうことですかコレ!？」

「短く言うと、今日は俺も一緒に訓練することになったから宜しく」

「え、えつと? えつと?」

だつて今スピーカーから隊長の声したじゃん!?

何故!?! ここに来て浮上したまさかのジュリウス隊長双子疑惑。

もしくは声がそっくりな兄弟が存在する可能性? まさか分身の術をやつてのけたなどとアホな話はあるまい。だつてニンジャは平安時代あたりにハラキリの儀を行つて歴史の闇に消えたハズなのだもん。

『つてな訳でー本日の担当教官は、ロミオ・レオーニです! ジュリウスの声は録音でしたあー』

『同じく香月ナナです! ロミオ先輩に着いてきちやいました〜』

『うわあ……なにこの授業参観……』

「ブラッド大集合だな」

何でちよつと嬉しそうですね、この隊長さんは。

「じゃない、隊長どうして……?」

気にするところ間違えた。

そう言えば隊長言つてた様な気がする。もう、私に甘い顔ばかりしてやらない、と

と、いうことは

「これは直々に死刑宣告を下しにいらしたんですか!? 私死ぬんですか!?! 嫌です何でもするから命だけはっ!」

『何その逞しい妄想力……なんでそこまで現実を悲観できるんだお

前』

『わけがわからないよ』

「何でもする、と言ったな？」

隊長だけが変なところ喰いついてきた。

そしてやけに真摯な瞳で食い入るように見つめてくる。いろんな意味で上昇せし我が心臓の鼓動。

「なら、やってくれ……訓練を」

「ですよー」

そらそうだわ。

「時間だ、始めよう」

「はい！」

phase 06 来る、きつと来る (後編)

『えー、と、いうわけで始まりましたね香月さん。第一回合同戦闘訓練です』

『合同って言っても二人だけだけどねー。えーつと、レオーニさん。ここで注目すべきはブラッドー01と03、つまりジュリウス隊長と神威 唯ちゃんの神機形状ですなー』

『二人とも長刀・突撃銃とのことで、同型の武器が二つ並ぶと実に壮観です。どちらも特殊部隊ブラッド専用装備クロガネ系ですからね』

『さてさて、どーなることでしょうか!? それじゃあ、まずは固定型オウガテイルいってみよーっ!』

お二人が楽しそうで何よりです。

けどやることはしつかりやってるから、文句はないし言えない。隊長に至ってはなんだか楽しそうにしていらっしやるんだけどコレって全部アーカイブに残るんだよね、それでいいのかブラッド、それでいいのかフライア。

とか思っているうちに疑似アラガミがせりあがってくる。

「まずは見ている」

「はいー」

隊長の長刀が掲げられ、袈裟掛けに一閃。たった一撃で固定オウガテイルをブチ殺した。

ちらっ、とこちらを振り向いてやってみろ、とか促すが……ぶっちゃけ強すぎてあんまり参考にならないなあ、というのが私の本音。隊長には悪いけど。本当申し訳ない。

「い、いきいますっー」

私は神機の近接部位、大剣を構える。

刀身150センチメートルの黒色の金属とオラクル細胞の化合物を腕輪越しに操作していく。やることは単純。目の前に向かって振り下ろすだけ。

「当たっ……っ……てっ!」

これは鉄のカタマリだと思ひ込み、標的に向かってフルスイング。

しかし、腹立つことに神機は全然違う方向に勝手に行こうとなさりやる。

結果またしても、床にめり込む黒い剣。

「……はあ」

今、床に共感できた。無数に傷の刻まれたそれは、まさに私の心の状態だ。

『お、おう……』

『どんまいどんまいーめげないでもう一回いつてみよーっ！』

「そっだよね……うおっし！」

今度こそ、と意気込み上段に神機を構えて、下ろす。力にブレはないのだが、何故か神機が嫌がる様に標的アラガミから逸れていく。

『マジかよ……先輩びつくり』

『先輩、ちよつと黙ろうか。唯ちゃん、ファイトだよー！』

「だよね……うん、そっだよねー！」

そろそろ心が痛くなってきた。けど、意外にもジュリウス隊長からは怒声も罵声も指摘もない。何故か何も言わないということはこのままナナちゃんの言う通りにやっていけばいいというお話だろう。

そのあたりのことは、一時置いておいて、今は改善点を考えてみる。結果からすれば一度目より二度目のほうが右側にずれているので、できるだけ左寄りに動作を繰り返してみればいい。

「とか考えているだろう」

「え、なんで分かったんです？」

ヤレヤレを透過し、最早呆れ気味といったうちの隊長。

心なしか、頭の上のバナナに似てるポニーテールもしょんぼりしている。新しい発見だ。

「頼む、お前が神機に合わせてはまるで意味が無いんだ……」

「す、すみません……」

そう言えば、前回も言われていた。『お前が神機に合わせてはまったく意味が無い』と言われていたのをすっかり忘れていた。これじゃ神機に完全に合わせていることになっている。

『んー。そーだなあ……んじゃあ、唯、じゃないブラッドー03。』

ちよつとそれ喰つてみて』

『捕食形態だよーがんばってねー』

「あ、はい！ ブラッド―03了解」

って言ったものの、実は捕食なんてやったことはない。どうすりやいいの、と隊長に救援要請信号を送ると、すでに行動は開始されていた。早速実演して下さいらしい。ゆっくりやってやるから、ちゃんと見てろ、と言う風に神機の柄頭に左手を沿え、神機の刀身を命なきホログラムに押し込む。神機と人体の接続部分、琥珀色の指令細胞核の周辺に黒い細胞が収束。やがて集まったオラクル細胞たちが黒い筋繊維を形成、一本一本線のように細いそれらが集まり刀身を包み込む様に分かれていく。出来上がったカタチは黒い獣の顎にも見えた。

これが、捕食形態にして一説によると人造アラガミ『神機』の真の姿……であるらしい。

神機には現在四つの形態がある。

一つ目は、今まさに超難儀している近接戦闘形態。アラガミを切断し貫き叩き砕く為の武器。平たく言えばデカイ剣や槍やハンマーになる。二つ目は銃形態。アラガミに対する銃攻撃を加えることができる火器。基本的には後衛であり、遠距離攻撃や強化、回復などの前衛戦闘員への補助も可能とする。三つ目は装甲展開形態。形態と言つていいのは微妙だがとにかく盾が出てくる。私にとつては生命線。

そして、四つ目がこの捕食形態。

こうやって改めて見れば見るほど不思議な武器だ。全体的に黒い筋肉っぽいし、琥珀色の指令細胞群はむき出しだし、金属部分と生体部分の融合したところはまるで『木の根』が這っているかのようにさえ見える。

「どうだ？ やってみろ」

「は……はい」

とは言ったものの。

初めての捕食形態展開なので、かなりハラハラする。見様見真似の隊長のモノマネをするべく、左手を柄のところに押し当ててみる。す

ると、琥珀色の核が眩い光を放った。くるくると何かが動きだし、周囲に黒い靄——オラクル細胞が凝集しだす。そのあまりの速度に慌てふためく私。

「え、ちよつと早っ……」

「落ち着け」

冷静そのものと言った様子の隊長さんが近くに居て本当に良かった。全く説明がつかないことだが、この人が傍に居てくれるだけで不思議と自信がついてしまう。何故か怖いこともどうにか出来てしまう気にすらなる……うん、万一しくじっても、きつと助けてくれそうだし。

……さっぱりと介錯されそうな気がしなくてもないけど。

黒い霧のようだったそれが、ぶくり、と水ぶくれのように膨張する。核部分から徐々に膨れ上がっていき、柄の上部にまで伝染していく。一言で言うなら……グロい。神機が黒い膿痂疹でみっしりと埋め尽くされ、さらに膨れ上がっていく。

「うえ……」

そこから急に粘性のある液体が吹き零れた、最早何なのかなど知りたくも無い。

悪臭というよりはどちらかというところガソリンや石油のような匂いを放ち幾つもの黒い筋が延びていく。あつという間にたくさん膿胞（つぶいもの）が破れ、幾つもの紐状のオラクル細胞が伸びる。ものの十数秒ほどで全て寄り集まり、やがて竜か、獣の顎部のような形を成した。

「よし、いいぞ」

「ぞ、そうでしょうか……?」

これが捕食形態というヤツらしい。顎の下にはボツボツ液体が溜まっている、確実に違うとは思いますがビジュアル的には神機さんの涎に見えないことも無い。

「このまま捕食だ」

「え?、こ、これで良いんですか? いいんですね。大丈夫ですよ?」

「ああ、問題ないやってみろ！」

隊長さんからゴーサインが出ました。行くぞー私やるぞー、と意気込んでいく。

伸びきった黒い筋肉の塊っぽいそいつをズリズリ引きずりながら擬似アラガミまで持っていく、という戦場で確実に駄目な姿勢。捕食圏内に入り慎重に狙いを定める。

「喰らってっー！」

神機は無反応だった。

「ほ、ほらあー！」

食べるんですよー！　ここですよー！　神機の柄を左右に激しく揺すってみるがテコでもこやつは動こうとしない。いつもの私ならばここで困り果てて引き下がるところだが、そうは問屋がおろさない。今回だけは退いてやるわけにはいかないのだ。

「食べなさいっー！　こらあー！　たーべーるうーのー！　捕食捕食！」

捕食形態の顎の下を足でガンガン蹴り上げてやる。神機に痛覚があるのかは不明だけどなんらかの刺激にはなることだろう。やつと観念した(?) 神機が伸びていく。良かった、やつと言うことを聞いてくれるんだ……と安心した……私が甘かった。

「ちよ、うわああああー！」

『うおお!』

『わわわー』

「なっ……!」

神機さんが伸びる。まるでゴムのようになやかな伸縮性を実現。優れた弾性能力を存分に行使し口を大きく広げ、鋭い牙で喰らいつく!

床を。

神機が伸びきった状態で神機を掴んでいた私の体は当然のように引っ張られ軽々と持ち上げられる。あつという間に地面から足が離れて体が宙に浮く。

「えええええええ!」

神機の咬合力つてすごいんだなあ……これ、何Nくらいあるんだ

ろうな……。

神機を手放せないということはもちろんしたら悲劇なのかもしれないよね。ロミオ先輩、ナナちゃん、隊長。神機の核部分と腕輪は神経レベルで接続されている、と説明はされたが、当事者たちにとっては黒くてぐにぐにした気持ち悪いものが腕輪と繋がってるなーくらいの感覚で。

それがどうやら生体組織であるらしくて。

当然、理論上、そう簡単には手放せない。少なくとも、私個人の意思では無理っぽい。

本当、世界って……理不尽……。

『飛んだああー！ー！ ブラッドー03神威隊員飛びました！ 軽く4メートルは飛びました！』

『そして、そのまま叩きつけられたああー！ コレは痛い！ 痛そうです神威隊員！』

『ゴッドイーターで良かったですねえ香月さん、オラクル強化していなかったら大怪我だった所でしょう』

『本当ですよレオーニさん。しかし衝撃は大きかったことでしょうねえ……これは立てるのか!? 立てるか！ カムイ隊員！』

「た、立てますですよ！ 立てますんですからね……！」

激痛は後からやってくる。痛いんじゃない、もう何か頭がグラグラする。平衡感覚がイカれており、かなりふらふらの両足で立つのもやっと、という状態。頭上には星がきらめき、ひよこがピヨピヨと舞い遊ぶ黄色のパレードが展開されていることだろう。痛む後頭部を押さえつけながら神機をしゅるしゅると戻していく。結局捕食しなかったね……このポンコツ神機ちゃん……。

「なるほど、問題点が明確に分かった、これ以上なくハッキリと」

「あ、そうですかー……どうもですー」

鉄面皮崩さないんですかね、隊長氏。でもカッコいい

「原因は神機の好き嫌いだ」

「……は？」

思わず聞き返した。冗談ですよ？ という意味合いを込めて隊

長を見ると、やっぱりそこには大真面目顔。表情から読み取れる事柄としてはこれは確実に冗談ではない、という事実。

「……えつと?」

「偏食因子のせいではないが、ガチで神機が偏食しているとは……ははっ、興味深い事例だな」

「……」

ちよつと何がおもしろいのかさっぱり分からないぞ私は。

「神機には多かれ少なかれ『偏食傾向』というものが存在する、といった話は実は所々で持ち上がっている」

「はあ……」

「それはあくまで適合者不在の神機、神機の拘束フレームなし状態で捕食形態での実験だが多かれ少なかれ確認は出来ているらしいな。コクーンメイデン種を好んだり、荷電性のアラガミだけを好んだり、という性質だ。面白いヤツだと盾部位や腕甲などの固い部分は徹底的に捕食しなかったという事例もある」

「……へえー」

「ナナみたいに大喰らいのヤツも居たりしてな」

「えく? 何でも食べて沢山食べられるのが一番偉いと思うけどー?」

「何だよその最強神機……お前並みに食べる神機とか……想像したくなーわ」

『褒め言葉なのだ』

そういえば昨日、奢ったんだっけ先輩。この反応を見る限りでは、やはり私は間違っていないかった。

「ああ、ナナの言う通りだ……神機に好き嫌いなど、不要」

「……そう、でしょうか?」

「こいつらは生体兵器ではある、生きている武器ではある。……だが、自由意思など不要だ。本当の所をいうと個性も要らん!」

「断言した!? 何だかブラッドの存在意義と大いなる矛盾を感じないような気がしないでもないのですが!!」

「事実だ、元々ゴツドイーターの存在意義はまずアラガミを駆逐する

こと、と同時に倒したアラガミから核を摘出すること。その他研究材料ともなる素材を調達することにある。好き嫌いなどというアホみたいな理由でそれを疎かにすることはできない」

それは、人間側の勝手な言い分じゃないかな……。

「実験の臨床に使われ、データを確保の為だけに散々弄ばれた神機だって今では立派に適合者が見つかって捕食に従事している、それが大人になるという事なんだ」

「神機にも人にも生き辛い時代になりましたね……」

『一億総没個性時代……』

『世知辛いねーロミ才先輩』

夢も希望もありやしねえ。やはり世界は残酷だ。

「話は戻るが、神機の偏食傾向……もとい只の好き嫌いが、適合すると極力まで抑えられるのはなぜだと思う？」

「えー……」

知らないってば。

けど、ここで黙ったままというのは一番良くない行為だと思われるので、何かそれっぽいことを考えてみる。

「えーっと……好きに変わる瞬間というやつですか……？ ほら、成長すると嗜好が変化する人っていうのがごく稀に存在するじゃないですか……！」

「残念不正解だ。ロミ才君、座布団一枚取っちゃいなさい」

『いや……座ってねーだろ元々』

『そうですよー大喜利スタイルならもつと面白いこと言ってからにしないと！』

『ナナ……お前も推奨してんじゃねえよ！』

どうしてここまで言われなきやいけないんだか分からない。私が何をしたというのだ。

嫌いなものが好きになったりその逆もまた然りなんてよくある話ではないか。大好きだったのにその分無理になったり、ちよつと気おくれしていたのが実は好きだったと気づいたりすることは。

「正確には、神機の好き嫌いなど体質的なモノなので基本治りません

し、治つてなどおりません。奴らは嫌いなものでも全力で左右に頭を振りつつ涙目で口の中に強引に突っ込まれる異物を咽びながら飲み下しているといったところが正解だ!」

「酷くないですか!？」

「お前は人類かアラガミのどちらの味方なんだ？ 神機など詰まる所は制御されたアラガミ。……アラガミに慈悲など、不要」

『なんか……オレの知らないジュリウスがそこに居る気がするんだけど……』

ロミオ先輩がぼそつと漏らしている。

「何故アラガミが自らの偏食傾向を無視できるのか、それは一口に言うならば神機使いが己の『意志』の力で神機をねじ伏せるからだ。それこそが意志の力……なのに、お前はやはり神機を甘やかしている……!」

「ひっ……」

や、やっぱり怒つてたよ……。流石の隊長も怒つてたよ!

隊長から発せられる謎のオーラ、とも呼ぶべき超弩級の圧力。

「ご、ごめんなさい! すいません隊長そんなつもりじゃないんです! 自分でも良く分かってないんです! 甘やかしてるつもりはないうんですけどこんな風になっている訳です本当にすみません!」

「言い訳は結構」

ばつさりと切り捨てられた。私、渾身の言い訳フェイズだったのに。

隊長はそう仰せになると、腰から下げていた何やら機械の部品、らしきものを取り出し、私の神機に固定。え、何するの何してんの、と思っているうちにアレヨアレヨとデツカイホチキスで機物を神機本体に縫い止めていく。その都度どっばどばと、異臭のする黒っぽいタール状の固液共存状態物質が流れ出し、神機はびくびくと震えて、時折大きくのぞける。さぞ痛いんでしょうね……。

「多目的追加拘束フレームを付けさせてもらった。神機の制御を限定する。デメリットとしては近接戦闘部位への変形と補食形態が使用できなくなる。だが、これで制御は楽になったはずだ」

「あー……ありがとうございます」

銃形態と化したまま固まっている神機、未練がましく何やら黒い筋織維っぽいものが纏わりついているがあまり気にしないことにした。上部についている持ち手を持つと、先ほどよりは幾分か重くなっていることを実感する。

「ロミオ、出してくれ」

『はいよー、疑似ガミ様召喚！』

『撃っちゃいなよー神威隊員』

「了解！」

標的に標準を合わせて引き金を引く。

発射口から勢いよく、強襲系の軽い弾丸が飛び出て、空中を切りダミーアラガミへ着弾。

「当たったあー！ 当たりましたあー！ やったあー！」

「ああ、いい感じだ」

『全弾命中。撃破成功だよー』

『やるじゃん唯ちゃん』

『そうそう、やればできる子じゃんお前……ん？ 誰か来たみてーだな』

撃破された偽アラガミが引っ込んでいく。今のところで一番いい手ごたえだ。達成感を込めて隊長の方を見つめると、良くやった、と言いたげな微笑が浮かべられていた。

「良くやったな」

「はい！ ありがとうございます！」

だが、と彼の表情が微かに険しくなる。

「現時点でお前はコアの摘出ができない、だから基本的にはアラガミに対する『決定打』がない。また、銃撃を主軸とした戦闘になるためどうしても後衛系の戦い方になる。言いたいことは分かるな？」

「……はい」

分かっている。隊長はあえて口には出さないが、こう言っているのだ。

いつまでも、この調子では困る、と。

とりあえず、戦うには戦うことができる状態だが、彼の言った通りに私には『決定打』がない。核の摘出ができない以上戦闘終了後必ず隊の中の誰かの手を煩わせてしまうことになるのだ。それだけじゃない、前衛も後衛もこなすことのできる神機使い——それが第二世代以降の強みであったはず、その為の最新鋭だったはず。

これでは本末転倒になる。ここで情けないまま終わるか……何か突破口を開くかは、全て己次第であるという訳だ。

「前に進むのって……ラクじゃないですよね」

「そうだな」

きつと、周囲から期待されている前進には全然届いていないだろう。ビビりにビビってやっとおっかなびっくり踏み出した一歩の先でバナナの皮を踏んづけてコケる、位のことをやらかしているのだろう。普通に歩けばものの3秒で進めるはずの場所に、必要以上の労力と時間をかけて辿り着いている感じだ。だけど、コケた分だけ前に進んでいると思う。

そして、立ち上がるときに手を貸してくれる人たちが居る。

「私、一人じゃなくて良かったです」

「……」

光の中に無理やりにも連れ出してくれる人が居る、それだけで、すごく嬉しいような頼もしいような気持ちになる。確かに、見ていると偶にダメな自分を思い知らされてしまうから辛くなるし、苦しくもなるけど。

「隊長が居て、ロミオ先輩が居て、ナナちゃんが居て。ラケル先生が居て……それに、ユノさんも」

「ユノ?」

「ええ、そうですよ。葦原ユノさんです」

隊長が怪訝な顔で聞き返す。

無理もない、隊長は『グレム局長結合崩壊の悲劇』を知らないのだから、私とユノさんに接点があることを知らない。きつと彼には想像もつかないことなのだろう。

「同じ年なのに、すごい立派な人で、ちゃんとした志があつて……カツ

コいいな、って思うんです」

昨日のことだけど、すごく鮮明に記憶に焼き付いている。あの夕焼けの中の歌は、この先どんな辛いことや苦しいことがあっても、きつと一生忘れられない思い出になるだろう。そんな思い出をくれたあの人に報いるためには、私が少しでもマシなゴッドイーターになるほかない。一応、今のところは。

「照れくさいけど、あんな風になりた……」

「ちよつと待て」

「はい？」

少し調子に乗ってしゃべりすぎてしまったのか、隊長は静止の声をかけてくる。

ありや、やつちまつたーと反省するのは内心にとどめておき、これは多分最初から説明しろってことなんだろう、と辺りをつけてみると。その端正なフェイスコンティフェイスにはなぜかしっかりと意味不明、と刻まれていた。

「なんだ、その話は？ お前の知り合いがフライアに居たのか？」

「……え？ 隊長？ 何言ってるんです？ ユノさんですよ……」

おかしい。会話がかみ合っていない。というか変な齟齬が生じている。

「だって、ご存じでしょ？」

いやな予感がする。

自慢じゃないが、私の嫌な予感や妙な勘は……なぜだか、良く当たってしまうことが多い。

空寒いその感覚を肯定するかのように、隊長の綺麗な唇が開く。

「ユノ？ 誰だ？ それは」

『やだなあ……ジュリウスさん、私のコト、忘れちゃったの？』

「……え？」

ロミオ先輩たちが居たはずの第二監視室繋ぎの拡声器からなぜか女性の声が響いた。

その忘れもしない音。透き通るように美しく、人を陶醉させるような美声。

葦原ユノさんの声。

「なんでユノさん此処に……?」

『酷いなあ、ジュリウスさん。私、ずーっと貴方のことと思ってたのに』
「あの、隊長?」

もう何が何だかわからない。だが、ひとつだけハッキリしていることがある。

多分、これは良いことが起こっている雰囲気じゃない。

ちよつと助けを求めようと思い、頼りになる人の方を向くと、そこには蒼白なジュリウス隊長の顔が。

「隊長……?」

「知らない……誰、だ。どちら様だ!」

『誰って、私ですよ? 葦原ユノですよ?』

うふふつ、と薄く笑うユノさん。おかしい、昨日と同じハズの人なのに、明らかに笑い方に差異がある。私の知ってるユノさんはこんな悪女のように笑う人じゃない!

「ロミオ先輩? ナナちゃん!? そこに居る!? 返事して!」

「ロミオ! 応答しろ、ロミオ! ナナ!」

とつさに私と隊長のとつた行動は同じだった。部屋の内部は映像と音声、ともに監視室に筒抜けになっている。なのでこちらからロミオ先輩とナナちゃんに呼びかければ声は届くはずだ。

『悪い……ジュリウス、オレ……』

『不覚をとつたよ……』

「ロミオ先輩!! ナナちゃんつ!」

「状況報告しろ! ロミオ!」

『状況つつつても……ハハツ、なんだこれオレが聞きたい……』

『えへへへ、ごめんね。捕まっちゃったー隊長』

「なん……だと……!」

ジュリウス隊長の表情が驚愕に染まる。

大体予想がついた、おそらく先輩とナナちゃんは何故かでノされてしまい、戦闘不能状態でもしかしたら拘束されている恐れアリ。

「待ってる、今助けに」

『ダメだ、ジュリウスっ！ 来ちゃダメだ！』

『唯……ちゃん。隊長と一緒に逃げてっ……！ うわっ』

この女の目的は、とまでナナちゃんの声がきこえたが、その声がかぐもってしまふ。

口の中に何かを突っ込まれたのだろう、むぐむぐと何か抵抗しているように思える。

「おい、ナナ!? ロミオ!? 応えろー!」

「た、たた隊長、いったい何が……?」

とにかく口クでもないことになっていることだけは理解できる。

「行くぞ、唯」

「了解です」

神機を構えたまま、私たちは第二監視室へと走る。

「残念だなあ……でも、きつとすぐ思い出してくれるよね。そうだよね」

ユノはうつとりとした目で夢うつつ、といった風情の笑顔を浮かべた。

「それに、きつとジュリウスは来てくれるはず……あの人が大事な大事な仲間を見捨てたりするわけ、ないもんね」

くすりと妖艶に笑む彼女の足元にはナナとロミオが簀巻きにして転がされていた。さらに、余計な口答えが出来なくなるためなのか、ナナの口元にはおでんパンによる即席猿轡がされていた。人懐っこいネコのような少女はむぐむぐと猿轡を攻略しようともぐもぐと補食してはいるが、いつもの勢いがない。

「な、なあ。ユノさん? なんでこんなことをするんだよ? ついで

に伸びていき、引き金を、引く。

チャ●マンの。

「わあああああ!!!」

「ふふふつ、やだ、そんなこの世の終わりみたいだな断末魔……素敵だね」

紅く燃え上がるシプレグズ、炭と化していくロミオの夢。何故か作動しない火災報知機に何故かハッキングされている監視網。悪夢のような現実だった。

ロミオの中で灰燼に帰していくのはシプレへの幻想だけではない。実在の歌姫ユノへの、夢幻だった。青年にしては愛らしい翡翠色の眼から、光がだんだんと消え、寂寥と絶望で沼のように濁っていった。

「さて、と……次は貴女だよ？ 香月さん」

「……何をするつもりか知らないけど、私はそう簡単には屈したりはしないよ」

いつの間にかおでんパンによる即席猿轡を攻略したナナは、じつとりと冷や汗の滲んだ笑みを貼り付ける。

「あまり強がらないほうがいいと思うのだけど」

「虚勢も張れないような先輩とは一緒にしないでよね……?」

ナナの空ろな強がりを見下したユノは琥珀色の瞳を細め、微かに笑う。

「じゃあ……ちよつと本気出しちゃおっかなあ」

ユノが手に取ったのはナナの魂、もとい精神的な支柱ともいえる……おでんパンが大量に詰まった袋だった。

「それ、はっ……!」

「物資不足でも簡単に作れる合成小麦のコッペパン。しかも半分は改良トウモロコシ粉を使用してるらしいね？ 能天気に見えても意外としつかりしている貴女にぴったり」

「何を……!」

ナナの背中に戦慄と悪寒が走った。

何故、この女はそんなことを知っているのだろうか……という薄ら寒い疑念。ロミオのこともあり、彼女はブラッドの情報を調べ抜いてき

「つて具合に何だか偉いことになってますですよ!？」

よくよく考えたら傍聴は可能だったり。無線が生きているから口ミ才先輩やナナちゃんとの連絡は取れるはずじゃないか……とか思っていた自分が甘かった。練乳をかけまくった苺のごとく、甘かった。

とりあえず、近くの一室に入り安全を確保した私たちはここにて絶賛待機中。

なお、今この瞬間も耳元からは今でもナナちゃんと先輩の断末魔が聞こえている。

『お母さん……おかあさあああああああん！おかあさあああああああああん！』

『夢だそうだからこれは夢なんだオレがユノさんと二日連続で会えるとかそんなクソ幸運有り得ないつてそうだからこれは夢だ夢なんだ不幸で幸せな最高の悪夢なんだマジウケるわくつそ笑えねえあつはははは醒めろ醒めろ醒めろ醒めろ……』

『おがあああああざああああああん！おがあああああざあああああああん！』

阿鼻叫喚の二重奏。特にナナちゃんの方が何かやばい。やばい通り越して怖い。

マグノリアコンパスという児童擁護施設別名孤児院に居たつて言っていたからこのお母さんとやらはもうこの世に居ない誰かさなんだろうが……考えたくないけど幼児退行でも起こしているのでしょうかね。弱りました末期です。これはもうダメかもわからんね。

「い、一体何が起こってるの……!？」

コレは本当にユノさんなのか？

先ほどから良く似た声質の女声が聞こえるのだけど、おかしい。おかしすぎる。きっとコレは別人だよんきつとそうなんだよ！とやや強引に叫ぶ私の（良）心を、冷たい理性が水を挿してくる。そうだよ、だってユノさんに決まってるじゃない、こんな声の人他にいる訳ないじゃない、と。

「あの、隊長どうしましょうか……つて!？」

汚れたポリ袋がある……あの袋の中に顔を埋めれば……などというアホくさい考えは今はやめよう。

今は。

「以前、このフライアに怪奇現象が巻き起こった。……というか俺に」「でしようね」

「初めは電子通信だった……『またお会いしたいです』という感じに綴られていた常識的な文章だった」

「……」

「俺はただの間違いだと思ってスルーした」

それだ。

「だが一ヶ月にもわたり、どんどん文章の内容が濃くなっていった。基本的には『会いたい』という意味合いなのだが、どうも妙だと気づいたときには、何故か俺と家庭を築いた後のリアルな将来設計まで書かれていた。ちよっとした小論文並みの文章量で」

「……」

ということとは、全部読んだのだろう。その小論文を。

生真面目すぎると、こうゆう所にも苦勞するらしい。いかにもジユリウス隊長らしい要領の悪さだ。

「あの、アドレスの変更などは？」

「知っていると思うが、フライアの端末情報は簡単には変更できない」

何その新情報。

「が、やった。してもらった」

「マジですか」

「なのに絶対に届いてきた。酷いときには五分おきに送信がされていた」

「……」

今背筋が凍った。ぞくつと冷たい何かか背骨を這い上がってきた。

「そこで俺は物理的に端末を破壊するという緊急措置を取らせてもらったのだが」

「やりすぎです。どう考えてもやりすぎです」

「当時はちょっと病んでいてな……今から考えると愚行だったとしか思えないがその時の俺は大真面目だった。神機でブラッドアーツならば一撃破壊が可能だ。『端末しかぶつ壊しませんから！ 他に危害は一切加えませんか！ 私ならできます！ この極め抜いたブラッドアーツの精度ならば！』必死に叫ぶ俺を見たときの……富田警備員の顔を忘れられない」

「さいですか……」

きつと黄金にきらめく汚物を見るような眼差しを向けたんだね。

「その時期になつてやつと、俺の精神状態が末期だったということに気づいてもらえたんだ。病室に連行される間際に渾身のピクニツク斬りで端末を再起不能にしたが」

「やったのですか……」

「無論だ……だが、今度は非通知電話がかかってくるようになった」
「は？」

「端末とは別途で回線を引いてあるだろう？ 緊急通信用の、あそこから『もしもし？ どうしてお返事くれないのですか？ 誰かがきつと邪魔しているのですね』といったニュアンスの音が……」

「な、なんで……？ え？ ナンデ？」

怖い。なにそれこわい。

「それ以外にも丁度その頃から頼んだ覚えの無い小包が送られてきたり、部屋に何故か盗聴器が仕込んであったり、極め付けには桃色のカラーインクで書かれたノート一冊分の好きという単語……が、単語が……！」

「……こわい」

「……結局、マイゴツデスラケル先生の出向に逃げるように着いていき事なきを得たようなものだ。あのお方がいらっしやらなければきつと俺は死んでいた」

「……」

隊長の過去は壮絶だった。

そういえば前に言っていた気がする。かつてこの世を呪い、恨んだことがあり、何故自分だけがこの様な不条理に直面するのだと嘆いた

こともあった、と言っていたような気もする。納得の絶望だ。そこから立ち直ることができたことは素晴らしいが、如何せん立ち直り方がクソ……いや、少し変わったお方なんだな、と改めて実感。

とはいえ、いま驚愕の事実を知ってしまった。もし、それが全て過去にあった事実なのならば、今私たちはとんでもない『敵』を目の前にしている。

最も厄介なのはヤツが人間だということだ。それも怪物並みの精神を持った人間であるということだ。

話して落ち着いたのか、ジュリウス隊長の顔には色味が戻ってきている。

「巻き込んでしまつて、すまない」

「いえ……これも同じ隊の仲間の話なのですから……隊長。行きましょう」

「え」

そうだ。行くしかないのだ。

私は隊長の背後に屈みこむ。思ったより広い背中だが、この状況ではとても小さく見えた。

「隊長は言ってくださったじゃないですか。過去は変えられないし、消すこともできない、だから」

腕輪の嵌った右腕を伸ばし、隊長さんの左手……の、袖を掴む。

チキンでビビリなどしようもない私ができる最大限の歩み寄りだった。ここで手を握るくらいの度胸があれば、今頃人生困っていないのだけだ。

「せめて……今は、一緒に行きましょう」

ロミオ先輩とナナちゃんを助けに。

きつと隊長は一人で無理して抱え込んでいたのだろう。この人のことだから、外面完璧超人のジュリウス隊長だから、誰もがきつと誤解してしまう。こいつなら大丈夫だろう、と。

けど、違ったのだ。

隊長は確かに才色兼備で文武両道だけど、加えて部下思いの女神信者だけど。決して冷酷な人ではないし冷徹にだつてなりきれない。

一応普通の人間並みの心の弱さだっちゃんと言っている。だから他人の弱さだっ理解できない人なんかじゃない……ほんの少しだけ鈍感だけど。

だから、この人が隊長で良かった、なんて思えるのだ。

「ジュリウス？　なあに？　その女……？」

「え？」

ユノさんの声がした。

「ごめんなさい、ちょっと強引だったかもしれないけど……わたし、貴方とお話したかっただけなんです。ただ、あの時の、お礼を言いたくって……」

「な、なんのことですか!?! 私は知らないのですが!?!」

「た、たたたた、隊長お……!?!」

さつきでつかいこと言ってみた私の声帯が蚊の鳴くような声に超変化。

「もう……やだなあ……ジュリウスっ? 忘れちゃったんですか?

私たち、出会ったじゃないですか、あの日、フライアの、庭園で」

「フライア? 庭園? 人……? だめだ心当たりが多すぎる……」

「も、もー隊長つたたらあ……ピ、ピクニックもほどほどにして下さいよ……」

「ふふふふっ……浮気性なのかなあ? ちよつとそれ、許せないんだけど?」

「言いがかりにも程があるんじゃないでしょうか。」

と、口に出すほど愚かじゃない私……いや、違う、口にすら出せない。オラクル細胞を練りこんで作られたはずの鋼鉄製の扉越しに伝わってくる。

現象的にはただの空気の震えにすぎない。『人の想い』を増幅して、遠隔にも伝達する。

殺気と愛情というヤツが

「一緒に居るの、唯さんだよね? 神威 唯さんだよね?」

「ひっ……！」

もうやだ漏らしそう。訓練前にトイレ行ってて良かった。

「だって声がしたものだ。それにその呼吸音はなにか張り詰めている時特有のものだよ。あと、貴女は緊張状態だと声のトーンがそれはもう、上がっちゃう系女子なんだね」

「そ、そそそそれはもう」

歯の根が合わない。ガチガチと口周りだけの痙攣がおこる。もう分かってるよこの殺気は真正面から私に向けられているんだって分かっているよ！ 足がすくんでガクガクと勝手に動く。胃や肺といった人体の内臓が皮膚と乖離し、自分が収縮していくような感覚を覚える。

そして寒い。手や足が凍りつきそう。だ。

そこで、ユノさんから発せられる瘴気（仮命名）が、少しだけ和らいだ。

同時に、口調がどこか切実で必死なものへと変わる。

「あのね、ジュリウス。迷惑だつたりしたらごめんささい……最初はただ、お礼が……お礼が言いたかっただけなんです。私、自由も自信も無くって……ただ、殻に籠もって悲しい、苦しい、寂しいって泣きながら歌ってるだけの、何も出来ない女の子だった」

お見受けしたところその頃のユノさんはもう何処にもいらっしやらないのではないだろうか。

「そんな私が、勇気を持てたのは……貴方が、歌を褒めてくれたから。庭園で歌った私の歌を、貴方が、褒めてくれた……それだけで、私。強くなれたんだよ」

「申し訳ありませんが記憶にございません」

「……」

「……」

もう、この色男さん……どうしようもないね。

「どうして即答するんですかあ!?! もうちよつと考えてから喋ってください!! 発言は吟味してください!!」

「だって本当に記憶がないのだから仕方ないだろう!?! 悪いが優秀で

健気でホタルのように儂い上に知的で気高いラケル先生光来の前後に起こったことはあまり記憶が残らないんだ!!」

「ああああ、もう! この際だから言っちゃります! このラケル先生信奉者!! 本当気持ち悪いわ!!」

「フツ、まるで褒め言葉だな!!」

「変なところで精神力が強すぎます!!」

本当どうしようもないね。

「じゃなくって! どうしてこのストーカー……ならぬ純情乙女の純愛を踏みにじるような真似をしたのですか! 酷すぎます隊長! このままだと本当にあなた死にますよ!」

「……」

隊長が本気で悩んでいる。何を悩んでいるのかサッパリだけど何だかすつごく悩んでいる。

秀麗な眉間に皺が刻まれている。

「ジュリウス……さん。どうして……嗚呼、私、私……」

「ユノさん……」

「そうだ……そうゆうコトだったんだ……」

「ユノさん……」

「……」

ユノさんはここでやっと自分の勘違いに気づいたらしい。よくよく考えてみたらユノさんに、あまり悪気はなかったのかもしれない。だって、私は知っている。

ユノさんは、決してそんな酷い人間じゃない。

昨日、庭園で叱られたこと、慰めてもらったこと。あの言葉に嘘はない。

ただ不幸なすれ違いが沢山あって、それがたまたま空回っちゃって、誰も気づくことが無いまま、ここまで着てしまったのだと思う。ならば、今終わらせるべきなのだ。

「私のジュリウスを惑わしているのは、その女なんだね……?」

「……」

おっと、勘違いしていたのは私の方だった。

「分かった、分かったよ。ジュリウス……待っててね、その女ブチ殺して貴方を正気に戻してあげるから」

「誤解ですううううう！ 違いますううううう！ 隊長、隊長助けてください！ 私たちブラッドは絆で結ばれた言わば家族なんですよね!? 嫌です怖いです死にたくありません！」

「……」

隊長は黙したまま何も言ってくれなかった。もうどうしたらいいのか分からないのだろう。思考停止って顔をなさっているもの。そんなこんなで、扉越しの殺気が何故だが膨れ上がる。

「ねえ、神威さん？ 私、本当は貴女と友達になりたかったな……。貴女は悪い子じゃない、だから、きつと理解しあえると思ってただけど……悔しいね、世界って残酷だね……」

「落ち着いてくださいよユノさん……話合えば分かり合えるんじゃないでしょうか!？」

「ごめんね……そんな対話系の能力、持ってないんだ」

それは残酷な死刑宣告だった。

「ところで、さ、どうして私が今この場所に居られるのだと思う?」「……」

「ここはフライア、フェンリルの極地化計画、その技術開発をつかさどる移動式支部だよ。……ということ、ここはフェンリルの土地であり、ここに居るのは全員フェンリル職員かその協力者ということになる……さて、私はなぜ、ここにいます?」

「協力者だから……では?」

「ふふふ……違うんだなーコレが」

聴いているこちらの心を抉り取るような声だった。

恐ろしさや恐怖、すぐそこに居るハズのに触れない空虚。人の心の隙間を暴力的に埋めて、全力で傷付けるような声。せせらぎのような殺気と激しい愛情が同じ場所にある……とすら錯覚させるほど

の気迫。

「ただいま問い合わせましたところフェンリル司法総合事務局から正式に通達を下りました。特殊技術開発局、移動式支部『フライア』のこの区画は正式に買収が完了。ここは葦原家の私有地となります」

「……は？」

「買ったってこと。ここは私の私有地だよ、良かった良かった、これで警報機は鳴らないよね？ ……ここに『部外者』さえいなければ」

「……」

けたたましく鳴り響く警戒音と真つ赤な光。

「な、なんですかこれええええ!？」

「部外者は強制排除、だなんてフライアって怖いね」

「えええええ!？」

私は咄嗟に部屋から飛び出し逃走を開始。何が起こったのか良く分からないが逃げるしかないでしょうもう。

何故こうなったのか誰もわかりませんが、これはきつと映像記録に残されて……るといいですね。この映像を見た誰かが謎を解き明かしてくれると凄く嬉しいです。それだけが私の願いです……。

「邪魔なのはみんな居なくなつたね……さあ、ジュリウスさん、『お話』しましょう?。」

「待つ……待つてく……うわあああああああああ!」

「ごめんなさい、隊長。」

弱くてごめんなさい。

フライアに帰投したラケル・クラウディウスが見たそれは、自らの愛する子供たちの変わり果てた姿だった。

監視室にはバケツの中の炭に向かって虚ろな瞳でブツブツと何か謔言を繰り返すロミオ。その近くにはぐっしり濡れたズタ袋の傍で悲鳴を上げ続けるナナ。始めは何を言っているのか分からなかったラケルだがやがてそれは母親を呼ぶ声なのだとな得する。

更に進んだ場所には汗だくで床に突っ伏して倒れている唯の姿。

彼女の周辺には侵入者用の罾であるはずの、催涙弾ガス噴射装置や警報機、更にはレーザーカッターまで総動員された痕跡が見られた。

事態を確認できず、思わずラケルはいつもの謎めいた微笑を凍り付かせる。

「一体……何が起こったと、言うのです？」

「大変だった……すごく大変だった」

「はい、もう死ぬかと思いました」

「思い出したくない思い出さないよ……もうやだ、もう嫌。忘れよう忘れよう」

「だが、アレから俺たちは強くなった」

アレから数日間は凄まじい状態だった。ブラッドの四人は一同に会しても一言も何も喋れなかった。お互いがお互いに惨劇を喚起させてしまう引き金になっていたのだ。みんな自室に閉じこもりがちになり、顔を見合わせることもすら拒否するようになっていた。

が、いつまでもそうしている訳にはいかない、という事でやがて口ミオ先輩とナナちゃんと一緒におでんパンを食するようになり、状況を見かねたラケル先生に全員庭園に集合召集をかけられ無理やり『ブラッド第一回 仲直りピクニック INフライア』に強制参加。こうして私たちは四十五分間無言でおでんパンを口に運び続け、一週間ぶりに会話らしい会話を交わすことができたのだ。

「いいピクニックだったな……」

「はい……おいしいおでんパンでした……」

「そうだね……帰ってまた、いつかやろうね」

私たちはあの日の思い出を互いに語り合う。確かに、今の世界は絶望がそこらへんを徘徊しているかもしれない。理不尽とか不条理が飽和状態なのかもしれない。だけど、世界にまだ希望はあるのだと理解することはできた。

ナナちゃんが桃色に塗装されたハンマーを握りこむ。私も強襲銃の持ち手を掴む。

「時間だ、行くぞ」



目の前には小型の黒い通信端末が置かれていた。男はそれを何げなく手に取る。

端末の電源が勝手に入り、赤い色のLEDライトが点灯。これで通話が可能、という事実を示す。

『ご機嫌よう、咎人さん』

「……誰だ、あんた」

聞こえてきたのは低めの女声だった。

やけに芝居がかつた男言葉——ではあったものの、青年の注意は別の場所へと向けられる。

「正式発音の容認発音英語キングス・イングリッシュだな。……今時気取りやがって」

『失敬だな。こちらは生まれた時からこんな話し方なのだよ。別段気取る心算はないのだが、わざわざ矯正することもアホらしいとは思ってね』

要は通じさえすれば良い、と吐き捨てる女の声はどこまでも硬くまるで石のようだった。

温度も人肌も感じさせない灰色で無機質そのものの音声、時折入り込む緩急や苦笑や咳払いですら正確に計算されたもののようにさえ思われる。

「で？ 貴族様？ こんな独房入りするような不良神機使いに何の用があるってんだよ？」

『そう腐り込むな……とは言っても警戒するな、というの方が無理な話か。接触の仕方が怪しき満点であったことは詫びるが話位は聞いてほしいものだ』

青年はコンクリートの壁と鉄筋むき出しの天井を眺めながら思う。

一体コレはなんの茶番だ？ 更生プログラムだか危険度判定テストだかの一環なのか？ もし、それに準ずる何かであるというのならば従順な振りでもしておく方が『得策』だろうと判断し、話位は聞いて

てみる演技をする。

「……」

『私は……そうだな、名乗る予定はないから適当に呼んでくれ給え。目的は単なる知的好奇心というヤツだ。少々前まで現場にいた神機使いの話を聞いてみたくて、な』

「……物好きだな」

『ああ、大好きだよ。お前達神機使いは、データ化された数値や計算された力量の常に遙か上を行ってくれる』

「数値か……ってことは、心理学者か脳科学者、若しくは技術開発研究員の類か？」

返答はなかった。

答えるつもりはなということか、言う事が出来ないのか、あるいはその両方といったところだろう。いずれにせよ、自分には与えられることの無い情報だということだ。

『さあ、物好きな貴族様に話してみたまえ。お前がどんな闇を抱えているのか、を』



二足歩行で頭に鬼面をくつつけたような外見。

言うならばかつて地上を支配していた大型爬虫類の小型肉食種に似た様相を持つ『それ』は生物でありながらどこか非生物的な無機質な印象を受ける。どこまでもおぞましく、凶暴に見える癖に……美しく、優美にも見えるのだ。そんな二律背反で全く矛盾した存在こそ、こう呼称するのがふさわしいだろう。

——荒ぶる神、と

「見る……アレが、人類を脅かす災い駆逐すべき天敵……オラクル細胞結束体、略してアラガミ」

「略してないですね」

アラガミの命名由来はどうかやら極東地域で信仰されていた多神教、

八百万の神のなかでも更に民間信仰で荒神信仰こうじんしんこうから来ているらしい。その神様たちは横たわる神様をもつしやもつしやと食べていらつしやった。白っぽいのが散々ホログラムでぶつ殺し奉ったオウガテイルで、死んでる方は……よくわからないが、多分ヴアジュラ、だつたと思う。

「アレを貫き通し、切断し、粉碎し、木端微塵にして再起不能にし、喰らい尽くすのが我々に課せられた使命。奴らに一切の慈悲など……不要」

「アレって『生物』なんでしょかね……？」
「……」

既に顔の青いナナちゃんの表情が、曇る。

「生物の条件、か……そうだな」

一般的な見解を述べると、と隊長の端正な横顔が告げた。その視線の先には神々がいらつしやる。

「自己増殖能力、エネルギー変換能力あとは恒常性維持能力、自己と外界との明確な隔離……こんなところだろうが、アラガミに当てはめて考えてみると先の二つはこれ以上なく優秀だろうな」

「……さいですか」

「とりあえず、『オラクル細胞』っていうものが寄り集まってできている、わけだから生物でいいんじゃない？」

ナナちゃんが言ったことだが、正解なような気もする。

生物と無生物を見分けることなど、専門家の間ですら意見が割れる程非常に困難かつ繊細な話題……であるらしい。だから地球上で生物か否かを見分ける一番安易で手取り早い方法は、活動状態にある細胞で構成されている物か否か、で良いとのことだ。そうゆうことにしてしまおう。

だが、何処かひつかかるのだ。

アレは、『生きている』感じがしない、とでも言うようなほんの一抹の違和感を感じてしまう。もちろん根拠も理屈もないただの私の直感にすぎない。

もしくは、これから討伐する対象を『生命』だとは考えたくない私

の自己防衛機能に過ぎないのかもしれない。

「もし生物と仮定するならば……最強の自己増殖とエネルギー変換能力を保持し、かつ絶え間なく変化、進化し続けることを可能にする。いかなる環境であろうとも適応し、順応し繁栄し、覆いつくそうとするのだから……」

そこで隊長は彼らしくもなく皮肉気に微笑った。

「生命の到達点、なのかもしれないな」

あたかもアラガミを賛辞するかのような発言にナナちゃんが更に顔をしかめた。いつも快活そうな少女の見たことがないほど険しい表情に一瞬だけどきりと心臓が大きく拍動を打つ。

「無論、奴らの存在を肯定するわけではない。この世界に人として生まれた以上、我々は『人間の側』にしか立つことができない」

「当然だよ」

「えー……なんか話が大きくなりすぎてちよつと……」

これ以上なく率直な感想を言っただけなのに隊長に鼻で笑われた。それでいい、とでも言ってくれるような寛容と諦めの笑みに見えなこともないがやはり馬鹿にされている感が否めない。……まあ、別にそれでもいいけど。

何しろ、隊長の出来の良すぎる頭と同列に扱われたらたまったものではないのだから。

「だが奴らの順応と進化の速度はまさに目を見張るものがある。驚異的な捕食能力と進化速度こそがアラガミの最大の武器であると考えたいだろう」

そうなんだよなあ、の一言である。

どうもデータベースや座学で勉強した『アラガミ』にとって捕食行為というのは、エネルギー補給以上の意味を持つのだとか。食べたモノそれが有機物であれ無機物であれその物体の特性を取り込みつつ勝手に進化するという……何だかコピー機のスキャナー能力めいたモノを持っていると説明があった。実に迷惑極まりない。

だが、逆にそれを利用し不合理な進化を促す『強制進化』でアラガミを楽に仕留めよう、とする試みもかつて最前線でなされたらしい。

……今のところ実用化されていないあたり結果はお察し。

隊長と一緒に見ていた白いオウガテイル、もとい神様たちは一心不乱に食事をなさっていたが、が、突然お体に変調をきたす。オウガテイル神の白いご神体が黒ずんでいき、つるりとすべらかだった外骨格部分に複雑な紋様が刻まれる。

その姿かたちはより雄雄しく、逞しく強そうにお成りあそばした。獣のごとく空に向かって神が吼えると、周囲に白い雷光が散る。

「……」

「……」

「……ヴァジュラテイルになっちゃった」

隊長曰く、神は捧げられし供物を喰らいて、その神格をまたひとつ上げたらしい。

『ジュリウス……失敗だ、失敗だよ』

通信回線から割り込みが入る。どうやら別任務で単独出撃していたロミオ先輩が帰艦したとのことだ。その声色は苦味に満ちていた。『やつぱさつさと、ぶち殺すべきだったんだ。『緊張感和らげる為のお喋り』は良くなかった』

「ダメだったか……お前の初陣の時がカツチコチだったからこうしてみたのだが……それが仇になろうとは」

『昨日一緒に夜中まで考えたのにな……あいつらどんな話題なら食いつくんだろー、って考えたのにな……』

「ごめんロミオ……」

何やっていたのでしようねこの先輩共は。いい年齢した男二人が夜遅くまでそんなこと話していたのかよ、と思うと年上なのに微笑ましいな畜生、という気持ちになる。

が、そうも言っていないのがこの現状。

『ジュリウス隊長、お気持ちはお察しいたしますが、任務達成難易度の更新を報告します。如何いたしますか？ 新人の実戦演習を兼ねておりますので一度帰艦なされますか？ あとロミオさん任務終了したのならば手続きを願います』

「な、難易度が上がつてるんですか……!?!」

「……悪くない、人生だった」

「ナナちゃん何を言ってるの!? 諦めたらそこで人生終了だよ!! 今にも終わりそうだけど!」

『帰って来いよ? お前らちゃんと帰って来いよ!? つか、ジユリウス隊長を信じろよ!! あ、フランサーンさつき遺された神機見つけたから積んでおいたわー』

「問題ない。任務続行だ!」

緊急事態だが仕方ないと開き直ったらしい。

「緊急事態は付き物、でなければ実戦訓練の意味が無い」

涼しい顔でそんなことをのたまいやがった。

「手段は問わない、完膚なきまでにアラガミを叩きのめせ、いいな?」

「了解しましたー! ちよつとばかし、荷が重いけどね!」

「アレは顔がついただけのおにぎり、顔がついただけのおにぎり……」
ロミオ先輩からの初戦に向けての心構えというか有益(?)な助言を思い出してみる。なんてことはない、おにぎりに顔がくっついてい
るだけだと思えばいい。あと、私には閃光弾スタンングレネードとい
何よりも強い味方が居る。

「ブラッドー01が先行! ヴアジユラテイルを引きはがす! 0

3, 04は通常種オウガテイルを迎撃!」

「了解つ!」

「は、はい! 了解です!」

隊長が大きく踏み込み、そこから跳躍。……つてここ、高台だよね
? という事実を全然気にしてないらしくさっさと走って行っ
ちやったが、銃形態に切り替えてからの突貫攻撃に移る。アサルト系
特有の連続射撃弾を発射しつつあつという間にオウガテイルとヴァ
ジユラテイルを分断していく。

「……すつ!」

「分断を確認。私たちも行く! 唯ちゃん!」

「あ、そうでしたあ……!」

見てるだけじゃダメだった。

ナナちゃんの後を追いかけるように、高台から跳び降り、無事に着

地……できず、お尻を強かに打った。尾骶骨に痛みが響き数秒間だけ悶絶する。あつという間に痛みが消えていくのはゴッドイーター特典のお蔭。

そんなことやっている間にもナナちゃんは桃色に塗装がされた槌型神機をおおいにぶん回していた。

「ナナちゃん……」

「03！ 04を援護しろ！」

「は、はい！ すいません……」

飛んでくる隊長の怒声。後衛と言えどもぼんやりとしている訳にはいかない。

神機を起こし銃形態であることを確認、指令細胞群が橙色ということとは使用可能の証だ。左手で柄の上の持ち手を引っつかみ、腕輪のついている右手を引き金に添える。

「ナナちゃん、援護します！」

「りょーかい！ お願いするよー！」

アラガミや仲間の位置情報、作戦区域の地図、簡略化生体情報モニターと、神機内のオラクルポイントが網膜上に投影される。銃器のシリンダーを回し、オウガテイルの弱点属性である燃烧、冷却、電磁のどれかを検索する。一番最初に出てきた燃烧系連射弾を選択。

更に、中央制御機構の右上ボタンを押し、銃口部分と視覚リンクさせる……これがいわゆる『エイムモード』。

ナナちゃんが後方に大きく跳び、オウガテイルから距離を取った。

その隙間に標準を定めて、狙い撃つ。

引き金を引くと、神機内でオラクル細胞が生成、記憶素子が細胞の形成方向を指示し、瞬時に弾丸が練り上げられていく。

そして、発射。高圧縮されたオラクル細胞が高速回転しながら飛んでいく。

衝撃と共にオウガテイルに着弾、と同時に炎が吹き上がり砕いた外骨格を焼き焦がす。

「やった……！」

数発続けて叩き込むと、流石のオウガテイル立ち上がることができ

なくなる。

顔面の装甲部位が割れて、中から……あまり想像したくないモノが飛び出て、しかも炎と余熱でじわじわと焼かれているのだ。そりや立てなくもなるでしょうね。

だが、そこは神様。大気中やら土中やらその辺からオラクル細胞をかき集めて再生しやがった。ぼこっ、という擬音語が相応しい治り方だ。何でも塞いでおけばいいだろう、と言わんばかりに肉腫が膨れ上がりケロイド状になる。

再生ミスとかして勝手に死んでくれないかなあ……。

「そりやあつー！」

ナナちゃんの桃色ハンマーが唸りを上げ、オウガテイルの頭部を粉碎。

骨が碎ける良い音と、血液その他液体とお肉が混ざり合う水音と共に、完膚無きまでにすり潰されたオウガテイルは良く言えば機能停止していた。悪く言う……もう原型とどめてない。頭から上が挽肉になっている。

「お、お疲れ〜ナナちゃん〜、えつと……とどめ、さして貰っていいかな？」

言ってて歯がゆい。

今のところ、まともな神機制御ができない私では、アラガミに対しての決定打がない。

目の前の赤黒いお肉様は、こう見えてもまだ生きている。指令細胞という名前の核を神機で補食しなければ、そのうち再生してまた元気に走り回る姿を見れるという。一体どんな生命力だと突っ込みたいところだがそこは基本的に不死の神様だという方向性で行こう。

「はいはい、任せてよー」

食べちゃうぞー、とあえて明るい調子でナナちゃんが神機を構え、捕食形態を出す。

全体的に黒っぽいむき出し筋肉の塊が伸びている光景に私はまだ慣れていない、のでやっぱりグロいようにしか見えない。

ともあれ、これでこちらの戦闘は終わったみたいだ。……と、気が

抜けそうになった時。

「唯ちゃん！ 隊長に合流するよ！」

「ああ……やっぱりそうなりますか……」

ナナちゃんだつてキツイだろうに、いちいち私ごときを気にかけてくれて感謝感激の極み……じゃない、自分もつともしっかりしなければいけないんだ。幸い、スタミナと足の速さだけには自信がある。

「隊長！」

「ああ……終わったのか、早いな。よくやった二人共」

「あの、大丈夫……ぶ、そうですね……」

「お疲れです」

隊長はヴァジュラテイルを全滅させた後だった。神々ご遺体は無駄なく、すっぱりと綺麗に切断されている。核の回収は今まさにやっていた所らしい。

流星は『隊長』だ。やはりこの人は、ラケル先生を崇め奉ったり、歌姫にストーキングされてノイローゼ気味になったりするだけのイケメンではなかったのだ。

「何か動いたからお腹減ってきたやつたよーえへへへー」

「早いよナナちゃん……一体どんな胃袋してるの……」

彼女のブラックホール腹はぐぐ、ぐつきゅうごごああああ……と地獄のような音を上げていた。

私は、時々ナナちゃんの腹の中IN荒ぶる神の存在を疑っている。すると我らがジュリウス隊長は仕方ない奴らだな、ときながら幼稚園児を見守る保育士のような苦笑を顔面に張り付け、やたら貴族っぽい上着のポケットから何かを取り出して、私たちに授けた。

「駄菓子だ」

「ありがとうございますっ！ 隊長」

「……あ、ありがとうございます……」

ビスケットと酵母を足して二で割ったような商品名の謎のお菓子。多分極東製。赤いパッケージに可愛らしい子供の笑顔がまぶしい凶柄。……そして狙ったようなバナナペースト。

ちらつ、と裏返してみたら黄色の付箋紙が貼ってあった。

『頑張つてこいよ！ by ロミオ』
やはりあんたの差し金か。

と、その時だった。

地面が裂け、どつかからもなく神様が降臨……いや、湧き出してきた！

隊長の背後に。

「た、隊長！ 後ろ……じゃない、上だ！」

「ん？」

「んんんぐー！」

咀嚼中のナナちゃんが近接銃を構えようとするが、間に合わない。

やべえ、死んだ！ これ死んだ！ とおもった矢先――

「……」

「た、隊長……!?」

「……」

そこには、元気な通常種オウガテイルに左腕をガシガシ噛まれている隊長の姿が。

「何かお前達に言わねばならないことがあったのだが……すまない、今ちよつと思いい出せない」

「い、いやそんなことより大丈夫なんですか!? え、痛くないの!? 痛くないんですか!」

「やはり駄目だ、このままではロミオとやった打ち合わせがすべて無意味に……」

「もしかして激痛で昨日の走馬灯でも見てる?」

「ナナちゃん縁起でもないこと言わないで!」

全然痛そうみは見えないけど、腕からは確かに鮮血が滴っている。勢いよくではないものの、真っ赤な濁流がドバドバ流れ落ち下に小さな血の水たまりを形成していた。その後、何かが砕けるような音が響き、同時にジュリウス隊長の顔に閃きが奔る。

「思い出した!」

彼が負傷した腕を振りぬくと、オウガテイルが……飛んで行った。

遙か後方、3メートルくらい、綺麗な弧を描いて、飛んで行った。

「隊長……貴方、何者だよ……」

「お前たちの隊長だが？」

「いや……ううん、何でもないです」

ナナちゃんの方をちらつと見る。猫耳のような髪型の少女は私の方を静かな目で見つめていた。そこに秘められた意思を読み解いてみるとこうなる——スルースキル位身に着けておきなよ、だ。

「古来から人間は強大な敵と対峙し……常にそれを退けてきた。生物として鋭い牙も、強靱な爪も持たない人類が何故勝利したのか、分かるか？」

「いや、その……」

「分かりませーん」

駄目だよつぱりきになる。

気になる。気になってしまう。

隊長の、左腕。

「共闘し、連携し、助け合う。長期的な視野での『戦略』と効果的な戦力運用である『戦術』……そして、人という群れをひとつにする、強い『意志』の力」

ぱつと見た限り、肉が裂けているように見える。そこから絶え間なく血があふれ出し、一向に止まる気配はない。次から次へと血液が流れだしていつている。……見てることちが痛くなってくる。

『意志』こそが俺たち人間に与えられた最大の武器なんだ、それを忘れるな」

「……………はい」

歯切れが悪かった返事がお気に召さなかったらしい、ちよつと眉をひそめた隊長はいかにも不満そうだ。

だが、私の目線はもはや真っ赤になった隊長の左手に向けられていた。遠くからぱつと見た限りでは、真っ赤なグローブをはめているのかとさえ思えるほど染まり切った手から、目が離せなかった。

恐らくは顔面蒼白になっているのだろう、横からナナちゃんの蹴りが飛んできた。

「と、いい機会だからお前達が目覚めるべき血の力をここで実演する」
「ええ!？」

「……どうした？ 先ほどからおかしいぞブラッドー03」
「え？ え？ だ、だって……!？」

見るからに重症ではないだろうか、その腕は。

しかし、隊長はふっ、と軽く微笑みを浮かべた。

「初の戦場で緊張するのも理解できる……だが、ロミオも言っていただろう？ ブラッドは甘くないぞ。学ぶべきことは多くある、だからこそ一度の戦いでより多くを吸収するべきだ」

何勘違いしているんだ。

「勘違いも甚だしいですよ……その傷の度合いはあなたが一番ご存知なハズですよね……!？」

「ああ、コレか」

隊長の気合いを入れる声と共に、左腕の筋肉が強張った。裂けていた傷口が強引に閉じ、そこから流れ出す血液が追尾して止まる。

思わず、絶句した。

「意志の力さえあれば、何の問題もない」

「……さいですかー」

「はいはい、次行こうね次」

そんな意志の力なんぞあつてたまるかア!

回復錠とは何だったのか、と世界に向けて問いたくなるような事実。気にしなければ痛みなどないも同然、とか軽く言つてのけるこの人の精神世界が謎すぎる、また遠くなった、隊長がまた遠くなつてしまった。

色々あつて育つていった絆とか仲間意識だとかそうゆう大事なものが今の一瞬で消失、霧散した。

もうやだついていけないよブラッド。

「と、言うわけで今から目標に対しブラッドアーツを放つ」

「ブラッド、アーツ？」

なにそれ？ と私に聞いてくるナナちゃんの顔は純粋な疑問に彩られていた。

そっか、そういえば、彼女は知らないはずだ。

「ほら、あのー……かつて隊長が自室の端末をぶっ壊した時に発動したヤツなんだけど……」

「は？」

「……よ、よく、覚えていたな……」

隊長の声には僅かに動揺が含まれていた。

ん？ アレ？

動揺……って。

「た、隊長！ 傷が！ 開いてます！ 出ちやってますよ！ やっぱダメだったんだ！」

「忘れる忘れるんだ今は任務中集中だ集中しろ俺……歌姫はいない歌姫なんかいないそう、此処に居るのは仲間と仲間とアラガミだけ……」

「うわ、古傷抉っちゃった……ご、ごめんなさい！ 後で何でもしますからあ！ 今はブラッドアーツを！ ブラッドアーツを！」

「……何があつたかは大体察した」

まことに空気の読める香月ナナちゃんて良かったです。

そこから、自分の呼吸と動揺を何とか圧殺したジュリウス隊長が標的、というオウガテイル三体を前に長刀型の神機を構えた。さつきからなんでこいつら襲つてこないの？ とか思っているとその答えは下半身脚部で判明。

どうやら投げられたオウガテイルの脚部が砕け、さらにその状態で他二体の足を下敷きにする、という奇跡が発生していたのだ。もうこんなミラクル向こう十年は起こらないね。

「少し離れている。今から……世界の不条理に対する憎悪だとか絶望だとか俺の中のありとあらゆる負の感情を載せて……こいつらにブラッドアーツをブチかます！」

彼の背中には気迫は鬼のようだった。

憎悪だとか絶望だとかありとあらゆる負の感情が高ぶり、黒い大剣に流れ込んでいくのがよく、本当によくわかった。

長い刀身を上段からの構え。一般的には『ゼロスタンス』と呼ばれ

ている刀法。

戦術マニュアルで散々見たお手本のような動作だった。

の、直後

「ひゃあ!？」

「うわあ!？」

腹の底からなんか突き上がってくる謎の感覚……四肢に活力が漲り、各種感覚が鋭敏に研ぎ澄まされていく。気持ちいいような、気持ち悪いような、それでももってどこか温かいような妙な感触が湧き上がり、広がっていく。

「ちからが……みなぎる……んだけど……」

横からナナちゃんの目線が突き刺さる。

「な、なにこれっ! ……ひゃう……!」

さつきから、自分の意思とは反して高い変な声が沢山出てしまうだけだ。足がガクガクと勝手に震える、心拍数が勝手に上昇。足先や指先がじんじんと痺れる。多分過敏になっているせいだろう。

「ハア……ハア……一体何こ、うつわあああつまた来たあああ!」

「……ただの、バーストモードだよ?」

ひいひい言いながら自分の神機の橙色をした指令細胞を見る。と、橙色がキンキラキンの光を大いに放つていやがった。網膜上に今更ご丁寧にバースト、と表示される。もう遅えんだよ何もかも。

バーストモードとはいわゆる神機解放。基本的には捕食形態の大あごで捕食に成功したときに使える能力だ。もっとも、神機解放とはいうモノの、実際強化されるのは神機の方ではなく、私たち神機使いの身体なのだが。

詳しい説明は省くとして簡単に言ってしまうえば、神機が取り込んだ『生きた』オラクル細胞を神機内で変換し、私たちの身体に流すことで強化する……つばい。

実際この全身で羽虫だけ回虫だけが蠢いているような感触が、オラクルが活性化しているということ証なのだろう。

そう、オラクル吸収方法は『基本的』には直接捕食できるヤツにしか存在しない。

「何だどうした?」

「んうっ……はあっ……はあっ……! い、生きてます……」

「あはは……ゆ、唯ちゃんは……バースト初めてなんだよね……」

「あ」

そうなんだよ。

バーストモードってのはな……捕食できるヤツしかできないんだよ!..

「……そ、その………はじめて、だったんで……」

「本当に突然でびっくりしたよ隊長!」

「すまなかった……」

心底申し訳なさそうな顔の隊長はゼロスタンス辞めてしまった。

「えええええええっ!?!」

このまさかの暴挙に新人女子一同大ブーイング。

「辞めないでくださいよ!」

「……いやだって、辛そうだったから?」

「何で疑問形!?!」

「いいから……私たちのことはいいいから! だから隊長はさっさとやっちゃって! 唯ちゃんは我慢して! 慣れればどうってことないんだから!」

ナナちゃんの仰せのとおりです。ことごとく足引つ張ってて本当ごめんなさい。

「……う、うん。私頑張ります……あの、隊長! 今から色々弱音を吐きますけど全部幻聴なので無視してください!」

「弱音は吐かない方向性で行きなさい」

「……善処します」

つまり「いいえ」です。

黒い大剣が掲げられて、第二回ゼロスタンス発動。と、ともに私たちの神機が活性化。

またしてもイヤな痺れ具合が全身に広がり始める。今のところ、今までの人生でこれに一番似ている感覚は、正座しっぱなしで痺れきった足を無理に動かした時の感触だ。

「……き、気持ち悪……っっ」

もう血の力とかブラッドアーツとかどうでもいいから早く可及的速やかにできれば今すぐ終わらせて貰いたい。

すると刀身の周囲に何か風圧らしきものが纏われる。アレがこの世界への憎悪とか絶望とかその他負の感情の集合体なんだろうね。

踏み込みと同時に黒金が一閃。それに追従し纏っていた白刃が一気に弾け跳ぶ。

一つ一つの殺傷力の高いそれら刃が幾十にも飛翔し、アラガミを切り裂く。そしてそこから更に分離し最終的には幾百にもなつて神の身体を刻んでいく。

「戦況を覆す大いなる力……戦いの中、何処までも進化する血の成せる業……つまり、ブラッドアーツだ」

「……」

攻撃回数はたった一回。

なのに、目の前のオウガテイル三体は元々なんだったのか分からないモノに姿を変えている。細切れなんてものじゃない。これはただの赤黒い変な液体に固形物が浮かんでいるだけの状態だろう、と。

隊長、貴方はその澄ました顔の下に一体どれほどの負の感情をため込んでおられたのですか。

「俺達ブラッドに与えられた『ブラッドアーツ』……これらをどう伸ばし、どう生かしていくかは全て、お前達の意志次第だ」

いいな？ との念押しが入った。

こんなものを見せつけられた後では、流石の私もナナちゃんも神妙に頷く以外にない。バナナだのピクニックだのラケル先生だの普段は言っている人だがこの隊長は本当に強い。

その事実にあ堵し、そして戦慄した。

何故か良く分からないが、その強さがとても怖かった。

いつもの私だったら、この人についていけば取りあえず即死は無さそう、位に開き直つてぶん投げてそうだが今は少し違う。確かにそういう気持ちもある。

けど、心の中に何かわだかまりがぼんやりと広がっている。

とにかく帰投の指定場所まで移動しようとした。その時だった。耳元の通信機から切羽詰まったオペレーターの声が聞こえる。

『緊急事態発生！ 想定外のアラガミがそちらに向かってきています』

「え」

帰投までに、他のアラガミが出てきちゃった……？



耳元に響いてきたのは悲鳴のようなオペレーターからの通信だった。

『緊急事態！ 想定外のアラガミが作戦区域に乱入！ 小型……いや、中型!? ものすごい速度でそちらに接近中！ 注意してください！』

「帰投前に何か来ちゃったああーっ！っ！」

「どうしますー？ 隊長ー」

私たちはジュリウス隊長に指示を仰ぐ。冷静に見えるナナちゃんだが、内心の動揺をどうにか抑え込んでいる、といった感じであり……私と同じく一杯一杯。

「ブラッドー01了解、迎撃する。ナナは下がって神機のクールダウン。唯は援護射撃体勢！」

「ブ、ブラッドー03了解！ もう来ないでよ……！」

無線の先でオペレーターのフランさんが信じられない、有り得ない、と繰り返している。その件に関しては本当全く同感だ。

『あと200メートル……来ますっ！』

唾液腺から湧き上がってきた固唾を飲み込む。

自分の呼吸音と拍動ばかりが妙に大きく聞こえ、神機にかけた指が小さく震えた。

その時――。

岩の影から何か……が動いた。

脊髄反射で、弾かれたように指に力がかかり、セットしていた強襲系で一番威力の低い弾丸――通常連射弾が放たれる。

「ダメー！」

「うわあっ！」

咄嗟にナナちゃんが槌型神機を横薙ぎに振るい銃口へと当てて。ギリギリで狙いからズレた弾道は少しだけ狙った射線を外れていっ

た。結果あらぬ方向に飛んで行ったがそれが正解だった。

標準の先に居たのは人、どうみても子供だった。

「な……い！」

何だつてこんなところに人間がいるのか。

怒りとも焦りともつかない疑問がせり上がる。ナナちゃんのお蔭で命中こそしなかったものの、衝撃を受けて子供は倒れ込んだ。纏っていたボロ布が地面に広がる。

「ブラッドー01からフライアへ！ 要救助者一名！ 繰り返す、要救助者子供一名！ ナナ確保に行け！」

「04了解！ 香月ナナ行きますっ！」

クールダウンを一時的に中止した少女が走り出す。

先ほどのコトで混乱気味の私だが、それでも体は勝手に動いた。ほぼ直感的に燃烧系のバレットチップをセットする。

今、もしナナちゃんの機転が無かったら……人を撃ち殺していた。その現実にごつとする。しかし、ひとまずは放置。後で死ぬほど自己嫌悪するでしょう。

目の前の岩や鉄骨が弾け飛び、大量の砂塵が中空を覆う。そこから先ほどのオウガテイルなんぞよりも大きい……下手すれば4、5メートルくらいありそうな『人型』のアラガミが姿を現す。

「04からフライアへ！ 標的、目視5メートル！ シユウ骨格系アラガミですっ！ ノルンの照合を願います！」

『フライア了解』

すぐにフライアからフェンリル社のデータベース『ノルン』内にある、シユウ骨格系アラガミの情報が送信。そのまま網膜上に映し出される。

データ照合と状況報告は後衛の役割、というのは叩き込まれた教本戦術通り。

片っ端から照合していく。通常種、墮天種は外れ。

だとすると……、あまり考えたくはないが第二種接触禁忌種セクメトか感応種か。そう思いひたすら照合作業を続けていく。

「……全部、ちがう……」

もたらされたのは最悪の結果。

頭の上から冷や水を浴びせられ、血液がサーツと下がっていくのが良く分かる。

「し、新種です！ データベース外！ も、もう……ダメだあああー！」

「黙れ！ 俺がこいつを抑え込む！ 援護しろ！」

「はいいっ！」

確かに言われてみるとシユウっぽくない。

よく確認されるシユウは下半身が甲殻で覆われており、金属質めいた硬さを持っているはず——だが、そいつは見たところ、そうではなかった。

配色は全体的に黒。そして『お肉』っぽかった。姿かたちはどこか蝙蝠を思わせ様な人型のフォルム。ただし、シユウ種の特徴である大きな翼手が左右で異なっており、左翼は通用種と同じ様に長くて金属っぽいものになっている。

問題は、右側。白い骨片に赤黒い肉がごべりついているような……出来損ないめいた翼。

言っただけだが、この神様には綺麗さもなければ優美さもない。ただ、醜悪でおぞましいだけだった。

「落ち着け。対シユウ戦マニュアル通りでいい！ とにかく動くぞ！」

隊長の腕輪から作戦指示が送信され、そのまま網膜上に投影が来る。

多分、予め用意されていた対シユウ用の作戦だったのだろう、しかしこの状況でないよりはマシ、と判断されたものだと思取り取ることができる。その理由はわりと簡単。

味方を表すフラッグに『ロミオ』の名前が入っていたからだ。

「ここにロミオ先輩居ないのにつ……！」

居てくれればどれほど良いだろう。

黒シユウ（仮）はマトモな方の翼を大きくしならせ、そこから大ぶり攻撃が来る。

その範囲内に入っていたナナちゃんはあわてて装甲を展開、『壁』ともいわれる分厚いタワーシールドは重さの分、攻撃と衝撃をきつちり防いだ。

一方、ジュリウス隊長の方はギリギリで攻撃の軌道を読み、紙一重で躲す。

「すげい……」

そのまま地を蹴り、跳躍。

仮面で覆われたような鳥人の顔面めがけて大剣を空中で斬り上げ、そのまま全体重を乗せて振り下ろす。その渾身の一撃は黒シユウの組んでいた腕をすっぱりと切断。

隊長は着地途中で銃形態に神機を切り替えた。それを確認した私も続いて走りだす。あまり自信はないけど、もうやるしかない……！
燃烧系の爆裂弾を選択。

「当たってっ!!」

「おおおおっ!」

神機内で弾が生成され、軽く熱を帯びる。左手でつかんだ取っ手に熱さを感じたが、手を離すわけにはいかない。

私と隊長、二つの強襲銃が同時に掃射。

連射弾とは比べ物にならないほどの大きな反動をうまく殺すことができず、肩から肘にかけて焼かれるような熱さと激痛が奔る。痛いの熱いの疲れたの三重苦で泣けてきた。できることなら泣きたい。

もうやだ、はやく帰りたい……!」

「どうだ……!」

けど、その甲斐はあった。

黒シユウの撃たれまくった下半身は真っ赤な血……らしき液体がポンプを捻ったみたいにドツバドバと流れ出している。もし、人間ならばこのまま放っておけば失血死してくださることだろう。仮にも人型ならばアラガミもそうなければいいんじゃないかと願う。

——が、鳥人アラガミは反転していくと、そのまま傷を抱え、何ともあつけなく立ち去って行った。

「え？ 逃げた？」

「……逃したか」

柄にもなく、舌打ちまでかますうちの隊長さん。

その表情はどことなく剣が濃い。……子供が見たら泣きそうなレベル。

「……あ」

子供、で思い出した。いや忘れていたわけではないが。急いでナナちゃんの居る方向へと向かう。

「大丈夫!？」

「まあ……何とか平気みたい」

見る限り、二人ともケガはなさそうだ。そのことに安堵する。

……そして、私の肩はまだ痛い。何だかさつきから鈍痛がずーっと続いているし、手の痺れはまだ取れない。バカスカ撃ちまくったせいで目にエンメルトの法則よろしく残像がこべりついているし、キンキンと耳鳴りまで鳴り出す始末。

一体私のなにか悪いんだろうね。戦い方でしようかね。それとも皆毎回これくらいの思いをしてるのでしようか。

とりあえず、先ほど転ばせてしまった子供さんへの罪滅ぼしとして手を差し出す。子供はお膝を擦りむいてしまったらしく片方の膝を庇いながらしやがみこんでいた。

満身創痍は隊長以外みんなそうだよ。よし、お姉さんと一緒に回復錠飲もう。と、立たせてあげようとしたその時

「触んなっ！」

激しい威嚇と怒声が響き、残酷なほど明確な拒絶を向けられた。

一体私が何をしたというのか。

そうか、この子を殺しかけたんだっけ。

「あ、さつきはごめんね……だけど悪気があったわけじゃないんだよ信じてくださいい！」

子供にまで頭を下げる、多分フライア一頭に価値のない女、それがこの私！ 神威 唯！

……ダメだ、開き直ったら死にたくなってきた。

子供さんには完全にドン引きされて距離までとられる始末。自分の価値とはいったい何なのか改めて考えさせられるからそうゆうのはやめてほしい。

本当冗談抜きで、心から。

「隊長……さっきの駄菓子もう一個持つてませんか!? アレを献上するんです! 賄賂を贈って気を引けば……!」

「私、それは人間としてどうかと思うけど?」

「ナナちゃんのおでんパンだつて似たようなものじゃない!」

「もしかして……喧嘩売つてんの?」

へソ出し猫娘の声は、氷を思わせる冷たさだった。

隊長はあるかも、とか言つてゴソゴソと上着や薄手のトップスのポケット、ズボンとボトムスの間やポーチの中を搜索してくれている。前から思つていたのだが……隊長の無骨貴族服の構造は割と複雑怪奇。

「うっ……」

「うわあ?!」

子供氏、体幹バランスを崩し本日二度目の転倒。可愛らしいおでこを地面にたたきつけてしまったため良い音がした。軽い身体が傾いて、泥の中に埋もれる。

そして、身にまとつていた毛布がはだけた。

「なっ……!」

「……」

むき出しになった子供の細い足を見て二の句が継げなくなる。すぐに助け起こさないといけないのに、体がいう事をきいてくれなかった。

「この子……」

「……黒蜘蛛病だ」



『そんなに拗ねないで一緒に紅茶でもどうだ？』

「……」

と、いつもどおりスピーカー越しに女の声があるが今回、男は無視を決め込むことにした。長めのダークブラウンの髪が流れて首筋にかかる。

『朝の紅茶は我らの嗜みではないのか？ 紳士が聞いて呆れるな』

「……」

『大方頭痛にまだ悩まされているのだろうが、女の前で強がる演技も出来んのか？ 男の意地はどこに行ったのだ？』

どこまでも絡んでくる女の言葉。仕方なく、男は壁を眺めながら応える。

「長期休暇に入って故郷に帰った。テメエに会わず面はないそうだ」

『そうか……それは残念だ……。不器用だが根は真っ直ぐな善い奴だったのに』

渾身の皮肉もいとも簡単に流される。

性別的にも年齢的にも口撃力の桁が違っていた。

『まあいい。お前が心を開いてくれた記念だ。今日は少し正義の話をしよう』

ちなみに心など開いていない。過去は無理矢理聞きだされた。

そこに至るまでの何があったのかは思い出したくも無い黒歴史どころか暗黒史の一つとして鮮明に脳裏に刻まれ、記憶の奥深くに封印されている。

そんな心境など知ったことか、と言うように女の声は続ける。

『さて、とりあえず正義的質問だ。——何故、人は人を殺してはいけな
いのでしょうか？』

単純にしてどこまでも普遍的な質問。ひねくれ者なヤツにしては至極真つ当すぎて逆に困るほど平坦な問だった。だが、男の心臓を刺

し貫くだけの破壊力を放っている。

その痛みをこらえて、皮肉を口にした。

「……まるで十四歳の子供だな」

『発想がガキ臭いとても批評するか？ ならば大人として答えろ』

なぜ、人は人を殺してはいけないのか。

女の声はもう一度同じ台詞を口にした。付き合いきれない何かを感じながらも、冷たい壁を見つめて黙考をめぐらせる。それが――胸の中の傷を鈍く抉る。

「そうゆうモンだからだろ」

『ああ、全く凡庸で誰も求めていなかった糞のような回答をありがとう』

平凡すぎてつまらない、と女は吐き捨てた。なら最初から聞かなければいい。

そして仮にも淑女ならば糞とか汚い言葉を使ってほしくない。

『まあ……お前は間違ってはおらんよ。人が人を殺してはいけない理由なんぞ探してみれば腐るほどある……それら全てを含めてお前は『そうゆうもの』だと断じたのだろうか？』

「いや、深い意味は特に無いんだが」

『……』

「おい、なんで黙った」

黙られると不安になる。

『失敬、相手が脳まで随意筋で構成されている相手だということをつつかり失念していた。分かっているとも、随意筋だから動かしていないだけなのだよね？ エネルギーの節約は大事だ』

「馬鹿って言いたいなら素直にそう言いやがれ本当性格悪いいなアンタ」

『婉曲表現は、理解が追いつかないか？ だが、あえて断らせてもらう。そのほうが面白い』

無駄に遠回しな言い回しがウザったい、と思いつつもこうゆう人種なのだど割り切るしかなかった。

言葉にしても伝わらない思いは、確かにこの世界に存在する。

伝えたかった思いや意志は何の意味もなくなり、声はただの音波と化した。

『まあ……諸説あるだろうが、一番単純にして安易……早い話手っ取り早くて外れがないのはコレだろうな。『減りたくない』から』

「……減りたくないから？」

『だから、簡単さ。減りたくないし、減らしたくないのだよ。人間と呼ぶから分からなくなる。——人間ではなくホモⅡサピエンスとして考えるといい』

「……要は人間はサルかゴリラの延長だとも言いてえのか？」

進化論的には間違っていない。

『その通りだ。ヒトとはそれほどまでに崇高か？ そこまで気高く尊いものか？ そんな訳があるか、人間など突き詰めてみれば水と炭素の結合体。細胞で構成され、デオキシリボ核酸を持ち、有性生殖を試みる『だけ』の生命体だろう？』

「……」

男は、思わず閉口する。何か難しい言葉が沢山出てきた。

『思うに、人が人を殺さない理由……お前達に倣って言えば『喰わない』理由。それは人が作り上げた倫理や社会、道徳なんぞよりも、もつとずっと根源的な本能で『偏食』しているから、だとは思わんかね？』



目を覚ました少年が見上げた天井は、白く、清潔だった。

これほどまでにマトモなものを見たのは随分久しかった。部屋の中には薬品や消毒液の独特な臭いが充満している。分厚い窓ガラスの向こうでは白衣を着た人々が忙しなく行き交う。

そんな中、一人だけどこか貴族めいた服装の若い男が治療を受けていた。消毒液が沁みたらしく造形こそは美しいものの表情は微妙な

顔……どうやら大人でも痛いときはああなるらしい。

「……」

「じゃない、ここ、どこ？」

やっとログインしてきた脳ミソで彼は思考を開始。硝子の向こうでは、今度は貴族服の男が看護師らしき中年女性に怒られていた。治療とかそのへんのことはもう終わったらしい。

看護師が居るといふ事はもしかして病院かどつか？ と少年は当たりをつけてみる。

「あ、起きたー」

「おい、ナナあんま大声出すなって……おはよー、少年ー」

「先輩も人の事言えませんか十分大声です」

イキナリ扉が開いて妙ちくりんな格好の人間……ニット帽と猫耳、いや金髪と黒髪の男女が部屋の中に入ってきた。手術用の衣服にも似た格好をしており、しっかりと手袋まで着用済みである。ソレをみて少年は少しだけ安堵した——少なくとも、この人たちに『病氣』を感染することはなさそうだと。

「こつちのイケてるお兄さんがロミオ。んで、隣の猫から人間に進化し損ねたようなお姉さんがナナだ。宜しくな」

「ちやおー、空元氣印の愛とおでんパンの伝道師！ 香月ナナですよ、大丈夫？ どつか痛いところとかない？」

少年は首を横に振って否定を示す。体調はかつてないほどに、良い。『流行病』特有の痛みや僅かの熱っぽさはあるが、別段寒くもななく、熱くもないし、腕には点滴までしてあった。寝台も清潔であり、何と低反発マットレス素材使用。

「ここまで待遇が良くなるよ、かえって不安になる。」

「あの……ここって……どこですか……？」

恐る恐る聞いた問いには、金髪の自称イケてるお兄さんが応えてくれた。

「フェンリル極致化技術開発局支部……要はデツカくて無駄によく動くスゴイ研究所っぽい何か」

「……フェンリル……」

知らない名ではなかった。

北欧神話の狼神を冠した現在において実質『世界政府』の役割を果たしている組織——そう思いつくとほぼ同時に彼らの右腕に目を走らせる。

「……ゴツド、イーター？」

「まあ、一応な」

肯定。

その瞬間少年の茶色がかった目が大きく見開かれる。

「あの……ゴツドイーターなら、おれの父さん知りませんか!？」

「ちよ……え？」

少年の細い腕がロミオへの縋るように伸ばされ……身体に触れる、寸前で止まった。

触れることができなかった。

ナナという少女が横でコクビを傾げて、曖昧に笑う。

「んー？ それは、キミのお父さんがゴツドイーターか、ゴツドイーターに関わる仕事をしている人ってことかな？ 整備士とかオペレーターとか——だったら調べられるかもしれないよ？」

お姉さんたちそこまでまだ権限ないけどね、とあえて軽く付けかわえる。

そこで少年は少しだけ押し黙った。

「あー……とりあえずさ、名前は言える？」

「……如月、健太」

「へえ、極東系か、ナナと同じだな」

「ですねー」

自称、イケてる兄ちゃんが人好きのする——どこか人を安心させるような笑顔を見せた。

「じゃあさ、健太。ゆっくりでいいからさ……話せる？」

……どうしよう。

先輩とナナちゃんに完全に先を越されちゃった……。何あの桃色エセ猫耳とオレンジニットの暖色系コンビ。

とか、他人の事羨んでる場合じゃない。

私は胸元に『検査済』という印を押されたフライア印のバナナ詰め合わせを抱き寄せる。

第一印象は最悪だったけど、やっぱり心配。

病気の子供の安否確認はしっかりやらないと、寝覚めも寝入りも睡眠も悪い。

しかし、入りづらい。

もう、すつごく入りづらい。

「……どうしよう……」

今から何だか少年の口から壮絶な過去が飛び出してきそうな感じなんだけど……。ここに突撃するのはあまりに空気を読めない行為ではあるまいか、と考える。

「何だ、どうした入らないのか？」

「だ、だって今……ってうわあああああつ!? ど、どっから生えてきたんですか!？」

神出鬼没。

先ほどまで看護師さんにメツチャ怒られていたハズのジュリウス隊長がちやつかり完全装備で私の背後を取っていた。つくづく心臓に悪いお人だ。

「人をコクーンメイデンみたいに言わないでほしいな」

あんたのどこが乙女だ。

……いや、お花畑好きだったり、趣味ピクニックだったり（曲解して）一途だったりで何気素質がある……?」

ちらっと見た限りでは隊長も何かお見舞いの品をお持ちになっている模様。滅菌パックの中、形からすると何かの本。

「ロミオとナナが既に突入している。我々も後続するぞブラッドー03」

「えー……いや、ですけど何か今……」

「状況はクリア。何の問題もない。お前が前衛、俺が後衛、あとは一気に制圧するのみ」

「ちよ……待ってください！ まだ私、こ、心の準備があ！」

「いい加減に覚悟を決めろ」

何か前に聞いたことのあるようなセリフだ。やはりまだ根に持っているらしい。そりやそうだ。

「うう……わ、分かりました……じゃ、じゃあ……」

こくり、と頷かれる隊長。そして揺れるバナナ頭。

扉の前で深呼吸をし、気持ちを無理やり落ち着かせながら入室をする。

第一印象は最悪だった。だから、もうこれ以上悪くなるコトなんてないハズだ。

マイナス始まりならばあとは加点のみ！ というわけで明るく振舞って行こう、頑張れ私。神威唯！

「おれ、実は……」

「こ、コンニチワー！ 差し入れのバナナ持ってきましたっ！」

開けてみては、まあびっくり。

神妙な顔つきの男の子、年齢は栄養失調で痩せこけている為よくわからないが多分12か13歳。黒い髪の毛に濃い茶色の目と黄色人種系の肌の色で、恐らくはアジア系。もつと限定するなら恐らくは極東系。まだ幼さの残る表情には真剣な覚悟……そう、今にも何か大切なことを人に伝えようとしている覚悟が確かに存在していた。

していた……。過去形で。

「……」

「……」

「……」

だから言つたじゃないですかあ……！

責めるように（というか実際責めてる）背後の隊長を睨むと、我関せずを装い目を逸らしやがった。酷いよ隊長そりゃないよ。

ロミオ先輩とナナちゃんが漂白されたどこか人間味のない笑みを貼り付けている。少年に至ってはびっくり、といった感じで一時停止中。

「すつげータイミングだよ……奇跡的な間の悪さだ……お前才能あるよ、唯」

「何の!?!」

「今から、健太少年に秘められた過去が明かされようとしていたのに……ミゴトに空気がクラツシャー……」

「ご、ごめんなさい……!」

ああ、もう。覚悟決めた瞬間にコレだよ……。

「改めて紹介すると、こっちのバナナ頭の兄さんがジュリウスって言つてオレ達の隊長」

「……怒られてた人だ……」

少年は言った。但し主語が無い。一体彼が誰に怒られていたのかそこんとこ詳しく。

そこでロミオ先輩に続いたナナちゃんがにやは、と邪気ありげに微笑。

「で、こっちのお姉さんがね〜……キミを撃つちやいそうになった怖い怖いお姉さんだよ〜」

「っー」

何かさらつと怖い台詞をはいた。

少年……確か健太君とかいう子は弾かれたように、私を見つめる。

「あ……あの時の……!」

「ま、待って……！ 話を聞いて！」

しかし、健太氏の目には衝撃、そしてみるみるうちにソレは恐怖へと移り変わっていくではありませんか。やばい、この流れはまずい。もう完全に私を見る目にはこう刻まれている……恐怖！ トリガーハッピー暴発女。

「ち、違うよ！ 違うからね！ そう、そうだよ、アレは事故……事故だから！」

だってアラガミかと思ったんだもん……。そう、私は断じて子供を狙撃しようとしたわけじゃない。

……けど、事実として緊張だの何だのでロクな標準もあわせず引き金を引いてしまったのは事実だ。ナナちゃんが機転を利かせてくれなかつたらもしかすると、という事も否めない。

だとすると、言い訳をすべきではないのかもしれない。ただ、それでも、だ。

「オラクル弾を人間にブチ込もうとする怖い怖いお姉さんだからね、怒らせると、人モノアラガミのべつまくなしに強襲銃をぶつ放すよ」

「ちよ、ちよつとナナちゃんってば！ 真に受けちゃったらどうすんの！」

「えへへへへー」

健太少年の顔はどんどん色を失っていく。

真に受けちゃってるじゃないですか。

「……こわい」

「そうだよ、気をつけてね」

「こらナナ、いい加減にしなさい」

ありがとう先輩。貴方は本当にブラッドのストッパーだ。そして、出来ればもう少し早く止めてくれると嬉しかった。

「大丈夫、心配ない」

まるで慈父のような優しい声だった。

「いざとなったら、さっぱり介錯だ」

「ちよー！」

「ブラッドアーツでな」

何それ怖い……思い出すのは粉々になった神様たちの凶。あんなの喰らったら即死だってば。爆弾発言をかました隊長は私の持つてきたバナナの包装を勝手に開封し、健太少年へと手渡す。バナナへアーがバナナ引っさげているという奇跡の光景に……健太君は絶句していた。

「今のは冗談だ」

「やめてください、心筋に悪いです」

冗談だ、とおっしゃるのなら、どうして目が笑っていないのでしょうか。ちよつと小一時間問い詰めたい。ストレス性の心室細動も時間の問題ではないかと思えてくる。私が胃痛を感じている間、健太君はバナナを剥き剥きしてパクパクと口に運んでいた。

あらやだ、この子意外と元気みたい。

「……旨っ！」

「え？ そ、そうかな？ 良かったあ……」

流石フライア印の高級バナナ。あの値段は伊達じゃない。コクシエ病だかコクシャ病だか知らないが、甘いものを食べておいしい、って言える内はまだ何とかかなりそう……な気がする。

他人のことはあまり悪いほうには考えたくない。自分のことならいくらでも悪く考えられるのに。

「お、本当だウメエこれ」

「うんうん、口の中で蕩けるほのかな甘み」

何であんた等まで食ってんだ。

いや、別にいいけど。ゴツドイーターは食べるコトだって仕事だし。とりあえず、食べることも誰かのために生きることでもどんな形であつても多分、鼻屑目に見て知らないどっかの誰かと繋がっているはずだから。

隊長は果物を食す部下と病人を満足気に見た後、ちよつと大型で厚めの本を取り出した。

この人のことだから、何か難しそうな本なのかな、と単なる好奇心が喚起され表題に目を走らせてみる。多分、子供向けの科学冊子か学

「……『世界のヒラメ図鑑』!？」

現実はず想の斜め上から更にライジングエッジする。

「ああ、子供の頃よく部屋の隅で膝を抱えてひとりによく読んでいたものだ。面白いから推薦させてもらおう」

「……あ、ありがとうございます……」

どこから突っ込めばいいんだろう。

「何ですかヒラメ図鑑って!？」

「何って……世界のヒラメの図鑑だが?」

「え、えつと……そんなにヒラメって多いんですかね?」

ああ、と隊長は無駄に輝くどこまでも清らかな光を湛えた眼差しを、こちらへ向ける。やめて、そんな目で見ないで。じわじわ精神に来る……。

「ヒラメ、それはかつて熱帯から温帯にかけて生息した底魚の一種、カレイ目カレイ亜目ヒラメ科。その数約200種類」

すごい生物の多様性を感じる。

「学名Paralichthys olivaceus」

「知りませんし、聞いてません」

本の裏側にはしっかりと出版社の刻印がされている。『フォーゲルワイド出版』らしい。何でこんな赤字確定のもの発行したんだろう。誰が何を思って書いた本なのかは、恐らく永遠に謎だし知りたくもない。

「残念ながら、天然のヒラメはアラガミのせいで中々見ることができない。だが、コレを通してかつての世界を思い浮かべることができるんだ……そう、かつて存在した太平洋西部の様子が」

「そんな海底思い浮かべてどうするんです」

「新しい世界を開拓できるとは思わないか?」

同意を求められたって困る。そんな世界知りたくないし、拓かない

でほしい。

というかこの選択が謎だった。そしてキラキラした目で隊長とセカヒラ凶鑑(仮名称)を見つめる健太君もちよつとどうなんだろう、と何処からとも無く込み上げてくる……得体のしれない不安感。とにかく今、もしかしたら少年期における情操教育という観点で確実に間違った一步を切り拓いてしまっただろう。

「新しい……世界……」

もう汚染が始まっている。

「父さんも、同じこと言ってた……」

「……ん？」

え、戻るの？　ここで、お父さん話に戻るの？　隣からロミオ先輩とナナちゃんによる熱い視線が送られてくるのを肌でひりひり、と感じた。邪魔すんなよ、今度こそ絶対邪魔すんなよ、と声にならない言葉が聞こえてくる。

まさか……これが感応現象なのか。

「おれの父さん、ゴッドイーターだった。フェンリルの東アジア区で活動してた。だから、おれは母さんと二人で外部居住区に住んできた」
ぽつり、ぽつりと零すように健太君の独白は始まる。

「だけど、ある日父さんは帰ってこなくなった……何が起こったのか全然わからなくて、母さんが何度も、何度も問い合わせをした。だけど……何も教えてもらえなかった。だから、多分死んじゃったんだろう、って思って、だったらせめて遺骨だけでも返してくれ、って母さんは泣きながら頼んできた」

聞いていて息が詰まった。

この子の言う通りだ。ゴッドイーターの殉職。もつと言うとKIA(戦死)かMIA(戦闘時行方不明)。それは嫌というほど耳にする話だ。フェンリルの公共通信であるテレビ番組や新聞などでも偶に報道されている……勿論、そんなもの氷山の一角なのだろうが。

予想できることだが多くのゴッドイーターの死は悲惨そのものであるらしい。病室の寝台の上で仲間や家族に看取られながら逝けるのは『まだ』幸せな方だろう、多くの死者は任務中の死亡である。

だから、きつと死体は……

「……でも何も教えてくれなかった。何日も何日もそんなことしている間に……赤い雨が降ってきて……誰も知らなくて、いつもの酸性雨とかだと思っていたんだ。黒っぽい雨なんかも偶に降るからそんな感じだろう、つて皆油断していたんだ」

「……」

「一週間ぐらいして、皆倒れて、ゴロゴロ死んでいっちゃって。朝には元気だった人も夕方にはもう息していない、なんて状態ザラで……ただの風邪じゃない、つて気づいたときにはもう、皆黒い痣が浮かんでた。死んでる人を調べたら、やつぱり黒い痣があつて……後になつてやつと分かつたんだ。コレが『黒蛛病』だつて」

話だけならば聞いている。そうだ、黒蛛病。

『赤い雨』に触れることにより高確率で発病する病。接触感染を起こすとされ、触れることで人から人へとうつっていく病だ。不幸中の幸いにも、飛沫や空気による感染は起こらないらしい。

今のところは。

「それで、おれ達の住んでいた区画は……『無事』な人間だけ、残して閉鎖された」

「……え？」

一瞬、耳を疑った。

閉鎖？ それつていったいどうゆう事？

「閉鎖つて……」

「閉鎖されたんだ。食糧や物……水とか薬とか毛布とか、そういったものの配給が無くなったんだ。配給に使っていた道が大きな壁とかで遮られて、もう配給車も来なくなつて。みんなパニックになつて……」

少年の細い手がぎゅつ、と強く握りこぶしを作った。

話は分かる、言葉も意味も確かに聞こえる。それでも、脳が理解することを拒否していた。

『配給』というのはフェンリルが行っている人類保護の活動の一つだ。人間が生きていくには必要なものがある。食糧や水、生活必需

品、最低限の燃料や電気。たまには嗜好品なんかも。そういったものは2074年現在、すべてフェンリルの管理統制下において配給といたった形で分配されている。

外部居住区に入っている人間たちは、その恩恵に預かれることができる。自分の遺伝子情報やバイタルデータを提出する、という非常に簡単な対価だけで。

そして、殆どのゴツドイーターはそういった人間から選出されていく。私だってそんな感じで選ばれた一人だ。

そうやって人間を保護しているはずのフェンリルが、病人で溢れた町をひとつ見捨てるはずがない……そう思いたい。

「そんなこと……」

「唯、悪りいけど今はそこ突っ込まないで、な？」

いつも通りな明るい声のロミオ先輩に諭される。どこかもやもやしたものを残したまま、健太少年の独白は続いていく。

「ドサクサに紛れて母さんと一緒に逃げ出したんだけど……行く場所なんかどこにも無くて……でも、それでも母さんは、帰ろうとしたんだ……父さんも、一緒に」

なぜか、過去形だった。

「……だから、色々やって父さんが『最後』に居た支部まで来たんだけど……」

そこで健太君の声が湿る。

「全然、分かんなくて……母さんも……」

話の流れからすると、多分同じく病に冒された母親が努力の甲斐もなく、という感じだった。男の子にありがちな強がりの限界だったのだろう、そこで健太君は泣き出してしまった。せめてもの意地で、ヒラメ図鑑で自分の泣き顔を隠している。かみ殺すような嗚咽の間で、それでも意志を伝えようと言葉を紡ぐ。

「お願いします……助けてください……父さんを、探してください……」

細い背中が小刻みに震えていた。

黒蛛病は接触感染を起こすとされている……そのため、ライセンス

を持つている人間ではないと、接触することは禁止されている。ましてや、私たちは半人間と言えど最新鋭のゴッドイーターだ。

だから、その背中を擦ってあげることができない。撫でてあげることも、抱きしめて慰めることも許されない。

「おれは、……帰りたい。父さんと一緒に……帰りたい」

「ああ、探すよ。必ず、見つける」

隊長の言葉に、ロミオ先輩が頷いた。ナナちゃんは……なんだか、微妙な顔。多分、私も似たような表情を浮かべているのだと思う。

「見つけてみせる」

この子の話通りならば、お父さんの見つかる可能性は限りなく低い。何らかの原因で生存している可能性はもとより死体の一部でさえ見つけだせるかどうかも分からない。……第一、何か『フェンリル』が意図的に隠しているかのような嫌な予感が匂う。できれば関わりたくない。

だけど、そんなことはとても口になんか出せなかった。隊長の言葉を聞いた途端、堰を切ったように健太君は泣き出してしまった。必死に歯を食いしばって堪えていた慟哭があふれ出す。

ずっと、押し殺し続けてきた涙と共に。

「あんたたち……何をしているのです?」

「あ」

音もなく自動扉が開いて看護師さんたちが仁王立ちしていた。何故かさつと血の気が引いていく隊長のカンバセ。

「えつと……」

「いい年した最新鋭のゴッドイーターが四人も集まって……何、子供泣かせている訳？」

そう映ったとしてもおかしくない状況。いや、っていうか隊長の一言で泣き出した訳だからある意味正解。

「……あの、その……ちよつと誤解が……」

隊長、貴方からも何か言つてください！ 何か言わないとダメです！ と目で必死に信号を送るがやはり逸らされた。頼みの綱であるロミオ先輩は……ナナちゃんと離脱を図つていやがる。

「特にジュリウス・ヴィスコンティ大尉。貴方も怪我人なんだから安静にしているって……私言いませんでしたっけ？」

矛先がこつち来たあ！ ここぞとばかりに逃げていく似非猫耳少女とニツト帽。いくらなんでも、それは少し酷くないでしょうか先輩。ねえ、ロミオ先輩。

「ちよつと外、出なさい！」

「ひいー！ ぐ、ごめんなさい……！ ごめんなさい！ あとで何でもしますから命だけは！ 命だけはあ！」

なぜ敵だけじゃなく、味方（のハズの人）にまで命乞いが板についてきたのだろう、私……。

会議室には普段、フライアを徘徊して回っているお巡りさん、こと警備の皆さんが大集合していた。これだけ大勢で並ぶとかなりの壮観。

そんな中で間違えなくアウエーな私と隊長。先ほどの看護師さんに受けた説教のせいで心の傷が治ってない。隊長に至っては腕の傷

も治ってない。

そこで、パシャ、という警戒なカメラのシャッター音。

誰だ空気の読めない奴は、とゴッドイーター特有の強化神経で首を振り、音の発生源を特定。恨みを込めて思いっきり三白眼でにらみつける。

「うわあ、びっくりしたあ」

「あ、すみません」

なんだ。ただの富田健次郎さんじゃないか。それにしても人の好きそうな顔、四角いフレームの眼鏡、鍛え上げられた筋肉、体軀に相応しく太い首筋から分厚い胸板にかかるカメラがよくお似合いだ。

「ははっ、何かね、この世の終わりみたいな顔してるジュリウス君が懐かしくってね！ つい、思わず撮っちゃったよ」

「縁起でもない事言わないでください」

確かにこの間からうちの隊長はロクな目に合っていないけど。歌姫とかオウガテイルに腕齧られたりとか。

「嫌な……事件だったね」

天啓。

脳裏にひらめく一筋の光、それに呼応し私の中の何かが告げている。

もしかして、この人、コレを言う為だけに出てきたんじゃないかと。

「まあ、そういうわけで宜しく頼むよ。二人とも」

「あ、ああ……はい……」

何だろう、何か先行きに不安しか感じない。

とか思っているとグレム局長とレア博士が入ってきた。会議はこれから始まるっぽい。

「よし、揃ったな。それではこれよりブリーフィングを開始する」

グレム局長の重い声が響く。隣に居たレア博士が概要の説明を始めた。

「今回は極東支部からの依頼になります。この近辺……サテライト拠点建設『候補』地であるフェンリルの保護外にある集落周辺の視察団

の派遣。皆さんにはその護衛を頼みます」

何か聞きなれない語句が登場した。ちよつと横のバナナ小突いて
小声で聞いてみる。

「サテライト拠点建設候補地……って何でしょう？」

「居住区は知っているな？」

同じく小声で返してくれる。

「はい。フェンリル支部内外の居住区のことですよ？」

まさしく、私だってそこに住んでいた。親がたまたまフェンリル勤
務だったので内部居住区に家で住んでいたのだ。兄は途中から技術
職を目指すらしく本部の方へ単身赴任していったがどうせヤツのこ
とだからどこへ行つたって必要以上にうまくやっているに違いない。

「そうだ。フェンリルの支部周辺は生産と消費活動が完全に自己完結
している『環境完全都市』と言われる」

「ええ……」

言葉位ならば義務教育の一環で聞いたことがある。社会科の教科
書なんかで無駄に褒め称えられていた。

「だが、収容人数が限られているため、限界が来る」

「……は？」

「簡単に言うと、人口の増加だ」

一瞬、何を言われたのかちよつと分からず思考停止。そしてすぐさ
まその意味合いに気づく。

確かアークロジを成功させるためには完全なプロフィールが必
要不可欠なのだ。氏名や年齢、住所さらには身体情報まで求めてくる
あたり、その辺の潔癖さはどうかがえる。

人口の完全なる統制なしでは消費、生産も管理できない。その人口
が増えているという事は……色々な要因はあるだろうが、まずは死
者、つまり『減る数』の減少。または外部居住区への難民の流入。あ
とは……出生率の向上だと思う。

何か言ってちよつと気恥ずかしい、出生率向上って。

「その増えすぎた人口を移住させるためのミニアークロジ。フェン
リル支部外の居住地区のこと……それがサテライトだと聞いている」

実際目にしたことはないが、と隊長は付け加えた。

一方の私はというと信じられなすぎて理解が追いついていかない。「フェンリルの庇護外で人間が暮らせるって言うんですか？」

にわかには信じ難い。というか無理じゃないのそれ。

「実際そのような地区は既に存在しているらしいな。極東の『女神の森』は有名だ」

「……ネモス・ディアナ？」

何だろう、どつかで聞いたことがあるような気が。

「それ以上の質問は禁止する」

「はあ……」

「今回の視察はどうも人間が住む集落の調査、だ。そこで『万が一』の事態に備え多数の警備と神機使い二名の同伴の下で行うことになった。……まあ、まさか奴らも天下のフェンリルに逆らう心算など無いとは思うがな」

局長が笑うと、警備の皆様もつられて笑いうの渦を作り出す。しかし、私だけが笑えなかった。

警備って……何したらいいんですか!?

真っ白になっていると富田警備が横から耳打ち。

「大丈夫、君はグレム局長のアクセサリーになっていればいいから」

「え？　なんだそんなことですか……?」

それなら私にでもできそうだ。そっか、そうだよな。新米ゴツドイーターなんて人間相手には戦力外もいいところ。そして、一般人からしたら超人扱いだから、居るだけでちよつとした威圧になる、というところだろう。

「ただ、相手も相手だからねエ……ちよつと一筋縄じゃいかん連中かもしれないよ」

「はい……?」

「喰神教……って知ってるかな?」

phase 10 信奉者たち（前編）

「どうも腑に落ちないな」

『だろ。まあ、狂人の戯言だとも思えば良い』

元から理解など望んではいなかった。それでも、ささやかながら落胆している自分に、女は気づく。

ひよつとしたら、一縷の望みでも賭けていたのか、と。

だが、帰ってきた言葉は意外なほど真剣だった。

「いや、理解していない訳じゃない……つまり、人が人を殺さない理由は『生物』としての種族保存における忌避本能に由来するもんだ、と言いたいんだろ」

『……突然物分りが良くなつたな。おい、どうした？ 何だか嬉しいような……気色悪いような心地がする』

いつもなら犬の如く噛みついてくる皮肉も軽く流される。ほんの数日だが若干精神的に成長したらしい。

「それは……悪いことじゃないように思えるんだ。『殺人行為は悪である』ってことを、根本的に肯定している……はつきり、あんたが思ったよりもマトモそうで安心してる」

『お前、私のことを何だと思っていたのだ？』

「いい年こいて発想が十代中頃の変態外道鬼畜ババア」
『流石に怒るぞ』

だけどな、とそこで青年は言葉を濁した。

「納得することはできない」
『なるほど。続け給え』

やはり青臭い。予想出来ていた回答だが悪い気はしなかった。若者など、この位青くつて潔癖症で丁度いい。下手に達観している風を装う子供など面倒な上に扱わずらい。

そこで、かつて出会った少年の顔が、ふと脳裏浮かんでくる。子供のくせに達観した風を装い……結局は子供のまま、一人で啼いていたクソ餓鬼を。

「ああ……納得は・できないんだ」

それは、選んで発した言葉のようだった。

女の口元が緩む。いつものような皮肉気な笑みや自嘲ではない、割と自然に出た微笑だった。

「どうやら、こいつは思っていたよりも優しい性根の持ち主らしい。

「もし……もし、人間が人間を殺さない理由が単なる『偏食』なんだ、つてアンタが言うとおりにならば……人が正しくであろうとしたものは、どこに行けばいい?」

『……前頭葉随意筋保持者にしてはよく考えたな』

「倫理、道徳……それこそ、古代から続く神話や寓話……あと、何だったか……聖書? だっけ。それ以外にも人類が積み上げてきた法典は……『正しく』であろうとした証は何になればいい? 生き方や善悪の判断、詰まるところ『正義』ってヤツが全部遺伝子やらDNAの塩基配列やらに組みこまれたモンだったなら……生きるってことは何になるんだろうな」

『さあ……知らんよ』

「プログラミング通りに動くだけの、茶番か?」

「本当は答えが分かっている癖に、あえて疑問にして口に出す。

「そうじゃねえだろ」

『……』

「人は選べる。たとえ遺伝子や環境や使命や責任。内外問わずやたら多い要因の入り混じっていく中で……それでも考えて、より自分が正しいと思える選択が、出来るはず」

出来た、はずなんだ——言葉の外側でそう言っていた。

嗚呼、やはりこいつは馬鹿なのだ。

優しく、素直で、そして愚かだ。いつそ清々しいほどに。

『……ああ、そうだな。きつと、それを意思と人は呼ぶのだろうか』

スピーカー越しにも伝わってくる、多分、今自分の発した言葉により……自爆して傷ついてしまった青年へと語りかける。勿論、慰めるつもりなど毛頭にもない。

『正しくであろうと、思い、悩み、思考する『意思』と選択を決定し、実行し、進もうとする『意志』それこそが、人間に与えられた最大の武

器なんだ』

『——だが』



世界が神に喰い荒らされて、祈りも救いもなくなった世界において。

それでも『神』へと祈ろうとした人々が居る。

喰神教。

アラガミを崇拜するちよつとアレな連中——と、簡単に言ってしまうればどれほど良いか。祈るだけならばまだしも一部『過激派』はフェンリルを蛇蝎のごとく嫌っており……その嫌い方たるや、一に強奪に妨害、三四なくて五に爆殺……みたいな感じでとにかく凄まじい。だから、てつきりフードか、覆面かぶってる黒ずくめの怪しい連中がここぞとばかりに大集合している絵図を思い描いていた。

その割には

「意外と……フツー、ですね……」

どうやら自分は身構えすぎていたようだ。

もちろん、衝撃的と言えば衝撃的ではあったのだが。

私は『人』が住む場所、と言ったら自分が住んでいた支部内の居住区とフライアしか知らないわけだ。外部居住区、という支部の周辺の集落の話は聞いたことはあったけど、実際に行った事などなかったし『壁』——正式名称アラガミ装甲壁の外側になんて、行こうと思ったことさえない。

つくづく、自分の世間知らずっぷりと思い知らされる。私はやはり、何となく皆自分と似たような所で生きているのだろうな、と思っていたわけだ。自分のことは幸運だとか恵まれた方だと言いつつも、

他の人間のことなんてこれっぽちも知らなかったのだから。

その『町』は人が住めるように多少は整備されているものの、旧時代の建物なんかをほとんどそのまま使っていた。

そのまま、というから本当にすごい。アラガミの攻撃が何かで穴が開いたままになっているビルや、中途半端に齧られてギリギリのバランスで立っているクレーン車。また、折れた電柱や倒壊した建物、横倒しになった車なんかはどうすることもできず、辛うじて横に除けてある状態だ。

せめてもの救いは——元々、都会であったのか、アスファルト舗装の道路が陥没はひどいものの、何とか『道』として機能している。オラクル汚染のせいで草や木、コケすらも自生できない灰色の街……まるで幽霊の住処のようだった。

けど、見たところそんなだけで、取りあえず何か変な宗教っぽさはない。てつきり昼間からアラガミを模した像か即身仏と化したオウガテイルあたりを皆で拝み倒し、広場でフェンリルの旗を火刑に処している位のことには起こっているんじゃないかと考えていたのに……今から考える赤面モノだ。

ともあれ、そんな街を歩いて歩いてひたすら歩いてたどりついた場所は昔の役所——の一部を改装し利用したっぽい施設だった。喰神教の割には教会が拠点じゃないらしい。中は意外にも綺麗に片付いており、塵は掃き清められ手すりや窓も拭かれていた。寂れた外観の割には中身はきちんと人の手が入っている……って当たり前か、住んでる人が居るんだから。

「何とか期待外れというか期待以上というか……」

「フェンリルの庇護外にしては……よく整備されている方だろう」

「あー……そうですか」

やっぱりそうなんだ。

そして、言葉の裏側から事実を告げている。

『他』はここよりも酷い、と。

一人だけ座っているグレム局長がチラツチラツと左右に目を走らせたあとフン、と鼻で一笑。暇なので心境を察してみる——フェンリ

ルの庇護外にしては綺麗にしてるじゃないか、だが貧相だな。

こんなところかな。

やがて、扉が開く。

「御足労頂き、誠に申し訳ありません」

現れたのは数人、恐らくは代表者とその護衛。

ひとときわ目立つのは女性だった。

若い、多分20歳をちよつと超えた程度の年齢でしかなさそう。まっすぐに艶やかな黒い長髪に濃い青の瞳。肌は白くて清潔。

と、いうことは身体を清められるだけの汚染されていない大量の水がきちんと確保できているのだろう。近くにダムか貯水池があるのだろうか？ ……グボロ・グボロに注意。

「こちらの代表を務めさせていただきます」

「あー……私はフェンリル極致化技術開発局局長、グレゴリー・ド・グレムスロワだ」

名乗る心算はないらしい。

「今回は環境調査の為機材設置とこちらからの調査班派遣。その間の住民たちのフライア一時受け入れの件について報告に来たままでだ」

局長はそこで一枚の書類を手渡す。

その内容は『さつさと立ち退き署名しろ』だ。女性の左右を固めている護衛たちが露骨に嫌そうな表情をあらわにした。それが人間として正解だろう。

「申し訳ありませんが……そちらの要望にはお応えできかねます」

「事前通告はした筈のだがね？」

「ええ……」

ふう、と局長は嘆息する。

「町長、我々は何も君たちを見捨てる……訳ではない。ただ、人類の活動圏を広げる、という理念の下に調査をさせて欲しいだけなのだ。住人はこちらで一時的に預かるし、別の支部の受入先にも話は通してある……第一、これだけの人数を『タダ』でフェンリルが受け入れてやると言っているのだが……これ以上何の不満があるのだね？」

「……」

町長さんは何故か無言。

……と、というか局長、ソレ完全に悪役の口調です……。いや、やつてることは糞の極みかもだけど……。

『喰神教』だが何だか知らんが、大人しくしている分には特に干渉はせんよ。住人の分の戸籍登録と配給手配の準備はいつでも完了できる状態だ。貴女も長ならば、住民のことを考えてやるべきではないのですかな?」

「……おっしやる通りですわ」

護衛の皆さんが今にもブチ切れしそうな顔に変貌している。ギチギチを握った拳には血管が薄く浮き出ている……。しかし、彼らの事だこちらの警備の人数が見えないわけじゃないだろうし、何よりさつきから私と隊長の右手ばかりを凝視している。

全身の細胞をオラクル強化された兵士、神機使いだと警戒されている。

……ああ、戦闘術教本ちゃんと読んでけばよかったあ……。対人戦なんて勝手が分からないよ……。自慢じゃないがこの年齢になるまで殴り合いなんて兄以外とやったことがない。しかも、その兄は妹に叩かれて喜ぶようなヤツだ。変態は討伐数に入らない。

「ですが、我々にも意地、というものが有ります」

「……それは、人命よりも大事なものかね?」

人命、という言葉を出されて女町長さんが一瞬だけ怯んだ。……無理もない、相手は人生を二倍ほど生きている何か強そうなおっさんだ。しかも葉巻まで吸っている。

「そうは申しておりません……ですが」

机の上に置かれた繊細な手が、きゅつと握り込まれた。

「我々が今日まで守り続けた土地を……みすみすフェンリルに奪われる、そんなこと黙って許す馬鹿がこの地上のどこに居るとお思いですか?」

せ、宣戦布告きたあ……

や、やばい。怖い……怖すぎる。

「……あら、うつかり。お言葉が過ぎましたわ……申し訳ありません。ですが、お分かり頂きたい。皆が皆、納得している訳ではないのです。どうぞ誤解なきように。お話自体はとても有難く思います」

「フン……」

「……その証拠として、機材の設置とそちらの調査班の方々の派遣については受け入れを。ただし、我々はこの地を去るつもりはありません」

あ、あれ？

「意外に譲歩……？」

「譲歩？ いいえ、これは『協力』です。私どもも、フェンリルも『人類』。これがより多くの人のためになるのであれば、これほど勿体ないお話はございません。どうぞ、お役に立たせてください」

「えー……あ、ありがとうございます……」

お前喋んな、との周囲からの視線が痛すぎる。……皆さん、本当そんなません。

「まあ、我々も鬼ではない。気が変わったら何時だって受け入れてやろう……おい、帰るぞ」

こうもアツサリ!? と思っただが、取りあえず一時撤退ということだ。

でも……機材の設置と調査はできるわけだし、これで取りあえずは一件落着。そうゆう方向で考えてしまおう。わーい、帰れるうー今日のお仕事終わりましたー!

とか喜んでた私は……やっぱり、馬鹿だった。甘かった。

「何しに来やがった! 狼共!」

「俺らの街から出ていけフェンリル!!」

さつきまで、誰もいなかった大通りに集まる人々。

そして浴びせられる罵詈雑言の嵐。

「さつさと巢に帰れ！」

「そうだ帰れ餓鬼共!!」

「ゴツドイーター何か連れて来るんじゃないやねえ!!」

うわあ……嫌われてんなあ……。今の時代へビもサソリもここま
で嫌われないだろうに。

「また……また、追い出すつもりなんだろう!？」

「ふざけるな!! どこまで追い回せば気が済むんだ!!」

……また？

気になる単語が耳の奥に引っかかってくる。まさか、とは思って
いたが……この街の人たちは……

「俺たちを散々蔑ろにしやがって……!!」

「支部から追い出して、また更に此処からも追い出そうってのかよ?」

「冗談じゃないわ……! ただ、ただ……普通に生きていたかっただ
けなのに……!」

この間、健太君が言っていたことが蘇ってくる。

『それで、おれ達の住んでいた区画は……『無事』な人間だけ、残して
閉鎖された』

『配給に使っていた道が大きな壁とかで遮られて、もう配給車も来な
くなくて。みんなパニックになって……』

あの子が嘘を言っているとは思えなかったけど。

そんなことはない……きつと、何かの間違いだ。あつたとしても、
ごく一部だけの話。

そう、思っていた。

思いたかった。

「ある日いきなり追い出されて、父さんも母さんも死んだんだ!! 食
うものが何もなくなつて弟が死んだんだ! 誰も埋めてやることもで
きなかつたんだ!! 全部全部、お前らのせいだつ!!」

そう叫んだ男の子は、どう見ても神機適合年齢よりも下だった。

「また追い出すのか!? また、奪うのか!？」

「もうやめてくれよ……放っておいてくれよ……」

「出ていけ、出ていけよ」

良く見ると怒っているだけじゃない。ある人は泣き崩れそうになっていた。またある人は蒼白な顔でこちらを見ていた。おびえたり、泣かれたり、絶望されたり……している。

ぶつけられる感情が、怒りだけなら……まだマシだったのに。

とたんに、後頭部に何か軽い衝撃を感じた。そこだけじゃなく、肩や背中にも何か命中してくる。さほど痛くはなかったが、べちよつとした軽い粘性とものスゴイ悪臭に思わず閉口。そこを触れてみると何故か細かいカルシウム片が。

「た、卵!？」

しかも腐ってやがる。臭すぎたんだ。

わざわざこんな時の為に用意しているのかそれとも偶然か。ベツトベトになった髪や服から嫌な汁が垂れていく。不幸中の幸いか隊長やグレム局長は無傷。

なぜ、私だけ……。

「うぐっ……臭っ……」

私にぶつけるくらいなら大地の肥やしにでもした方がマシだろうに。

自慢ではないが、腐った卵をぶつけられるなど生まれて初めてだし、今後の人生でもないと思っていた。と、ショックを和らげるための現実逃避を開始しようとした私の思考を現実は許してくれなかった。

どうして……どうして、気づかなかつたのだろう。

卵がある、という事それが示す事実は即ち

「コケエエエー……!!」

「う、うわああっ! ま、待って! ちよ、ちよちよつと待って! 投げたのはあっち!! 投げたのはあっちだから私じゃな……うわあああああああ!」

鶏突猛進。

多分、生みの親であるだろう鶏が強襲してきた。そういえば……鶏見たのも初めてなんだよなあ……。

もう、怖い何のつて。

「ご、ごめんなさいごめんなさい!! あなたの卵のコトは謝りますからあ!!」

「ゴゲエエエエエ!!」

「ひいひいひいひい!! 痛い痛い痛い!!」

しばらく傍観していたうちの隊長が、見るに堪えかねて、羽毛と腐卵臭と謎の粘液だらけの私を何とか救出してくださいました。彼の鋼色の瞳には何の感情もなかった。

ああ……もう……。

今までラクをしてきたツケが一気に回ってきたのだろうか？

私の人生……この先きつとこんなんばつかなんだろうな……。

「あつはははははははっ！」

「鶏……鶏っておい!! 何だよそれ!!」

病室では大爆笑が巻き起こっていた。

どうしてこんなことになったのか、私には分かりません。ただ、フライアに帰投して凄い臭いだったからシャワー借りてナナちゃんとロミオ先輩を探してたら案の定病室に入り浸っていた、というわけだ。

そこで嗅覚が鋭敏なナナちゃんに問われた質問に素直に答えたその結果がこの爆笑。

人を笑わせることは難しい、だが笑われることは容易い。

「鶏にゴッドイーターが負けちゃダメじゃん」

「オウガテイルよつか鶏の方が強いのかお前！」

「だ、だって仕方ないじゃないですか！」

半ばパニックってた私は渾身の良い訳を叩き出す。

「フェンリルの戦術教本に……対鶏戦は載っていないんですよ!!」

当たり前だけど本当だ。

そして予想通りの反応が返ってきた。

「もう駄目……!! お、お腹苦しくなっちゃう……!! あつはははははははははは!!」

ナナちゃんが健康そうなお腹を抱えて大笑い。というかもう防護服着ていないのね。

「新説、鶏、人類の敵だった」

「ロミオ先輩やめてー! 真顔で言わないでー!!」

「いやいや分かんないぜー? もしかしたらソイツきつとニワトリ型のアラガミだったのかもしれないじゃん?」

「ない！ それはない!!」

「分かんないよーアラガミは『喰ったものの形質を取り入れる』ことができるからなく」

知ってる。

アラガミは取り入れたものの性質を取り入れることができる……それまでの進化論を一切否定するようなメツチャクチャな細胞、オラクル細胞で構成されているのだから。そしてタチの悪いことに奴らは生きるために食べているのではなく、食べるために生きているのだ。もし、ソクラテスが聞いたら啞然とするかもしれない。

「よって、鶏のアラガミが現れない可能性を否定できはしないのだ！我がブラッドの新鋭隊員によって発見された新種アラガミっ！」

それは人間の家畜に交じって人を喰らっていくタチ悪いアラガミ！だが神威隊員のお蔭でその危機は回避されたのであった……！」

「ま、まさかの救世主……！ 嗚呼救世主様！ 新説、唯ちゃん救世主説浮上」

「……他人事だと思って馬鹿にしてません？」

こいつらも一回あの怪物に襲われてみればいいと思います。

「いいや、唯。いいんだよ。お前のお蔭で、オレ達は明日もチキンを食べるんだから」

「そうだよ、世界のチキンを救ったんだよ唯ちゃんは！」

「もういいでしょう!!」

このまま行くと私はチキン界の神となる！ 位言わねば收拾がつかない事態に陥りそう。そうなる前にさっさと切り上げないと。ひとしきり笑ったあと、もうこのネタには飽きてくれたのか、ロミオ先輩が突然の話題転換。

「ハイハイー、んじゃー、今日は行くぜ？ オレ達の誇る『船』を健太に見せてやるよー！」

「え、ちょ……先輩、それいいんですか？」

健太君は……ずっと暇だったのか、すごくワクワクした表情を浮かべている。が、やっぱり心配。

黒蛛病がどんな病なのかはよく分からないが、そんなオイソレと出

歩いて良いものなのだろうか。

「と、心配性なうえに悲観的な思考傾向を持つ世にも類まれなる不運女に絶対何か言われると思ったデキる先輩は既にお医者先生から診断書をもぎ取ってきたのでした。冴えてない？　なあ、オレ冴えてない？」

「普通さー、自分で言うかなく……でも冴えてるよ！　ロミオ先輩！」
「おつ、ナナ。もっと誉めてくれてもいいんだぜー？」

この二人、実にノリノリである。

一体いつの間にこんなに掛け合いがうまくなったのでしょうか。油断も隙もありやしねえ。

「まあ、歩かせる訳にはいかねーから、一応ラケル先生に車椅子借りる事になってるけど……無理は絶対するんじゃないぞ？　いいな？

したら兄ちゃん怒るからな」

「分かってるよーう！　先輩さあん！」

「せ、先輩……！　健太お前……！」

オレ、頼りにされてる！　と感極まっちゃう缶バッジ先輩。

……と、ニコニコ顔の健太君。この子処世術とは何たるかを心得ている、最近の子は中々強かだ。何だか地味に世代の格差を感じる。

「ふふふつ……まあ、すつかり打ち解けあつて……」

「ラケル先生！」

何故かすぐく久しぶりな気がするラケル先生！

相変わらず流れるような金髪と深い青の瞳を持つ年齢不詳の美貌。どこか神秘的な人形めいたような雰囲気を持つ彼女だが……今日は少々、印象が異なった。

きつと椅子のせいだろう。

「……と、ジュリウス隊長……?」

「……」

「……」

「……」

あたまが 現実を うけいれることを 拒否した。

「何をなさってらっしゃるのですか……!?!」

お、おもわず過剰敬語になってしまった。

隊長はいつもの鋼色の瞳でまっすぐに……私たちを見上げる。そう『見上げる』。わーい、隊長の貴重な上目づかいだぞカッコいいー。

……その頬が少々、朱に染まっておられる様はこの際認めたくないから無視する。

「少し落ち着け」

「逆にどうして貴方はそんなに落ち着いているんですか!?!」

そこで、はっと我に返ったナナちゃんが見ちゃダメ、とおでんパン

で健太君の目をふさぐ。少年はうわああああ、とまるで……じゃない、正真正銘悲鳴のような声を上げた。とりあえず……少し遅かったかも知れど、ナナちゃんぐっじよぶ。

だって、こんなの絶対精神衛生によろしくない。

こんな……

こんな成人男性の上に妙齢の淑女が腰かけていらっしやるお姿なんて。

「車椅子を貸し」

「うわああああ!! 喋ったああああ!!」

「言わせろ、車椅子を貸し出すにあたりラケル先生の移動が極めて不便になる、それは理解できるだろう？ だから俺が……先生の……い、椅子を……っ！ ……ふう……務めさせて頂いてるに過ぎない、ただ、それだけのことだが？ 何か」

「……」
こいつハアハア言ってるんですけど……？ その息づかいを即刻やめて頂きたい。辞めてほしい。

本当マジで心から。

手と膝を床に着けているイケメンとその背に優雅に横座りする貴婦人の凶。うわっぶ

「だから気にせずに使うといい」

「……ジュリウス、お前今輝いてる……スッゲー輝いてるよ……」

ロミオ先輩の目はもはや濁った沼の底と化していた。

「ジュリウス……」

ラケル先生が……そう、女神が。

慈母の如く優しく労わるように、そして愛しい気だけどホタルのように儂い感じで……何か喘いでるブラッド隊長へと呼びかける。

「はい先生！」

「私の可愛いジュリウス……貴女の申し出、大変悦ばしく思うわ……」

「過分なお言葉です！ 先生！ ああ先生！」

ですが、トラケル先生はたおやかに言葉を続けていく。

「一度言霊として口に出した以上、最後まで全うすることこそが……新たななる時代、そして新たななる世界を切り拓く『先導者』にして、あまねく神機使いたちを統べる『教導者』としてのあるべき姿」

「はい先生……！」

流れるように、歌うように言葉は紡がれ続ける。

「ならばジュリウス……嗚呼、私のジュリウス……？ 真に貴方が私の『信奉者』たると言うのならば……」

いつまで続くのかしら、コレ。

「成るべき時に、成るべきものに、成りきらねばならない貴方が……今、誰の『許し』を得て……勝手に人語を紡ぐと言うのです？」

「……っ!!」

「す、すごい！ 隊長が黙ったよ！」

「無駄に熱くてキモい吐息まで止まった!?!」

そう、ジュリウス・ヴィスコンティ大尉の目には……認めたくないけど、強い『意志』の力が見て取れた。

何と引き換えてでも使命を果たすという決意。今にもいろんな意味で暴走しかかっている己の気持ちを理性の力だけで制御……『統制』し続けるという鋼の意志の力を感じた。

何が何でもラケル先生の椅子と化すこと、その一点に……今、奴のすべてが集約されている……！

……本当、本当にもう……何かもう……。

「さあ……どうぞ存分にお使いなさい。この人類の叡智の結晶たる箱舟……『フライア』を、心の赴くままに探索するも良いでしょう。もつとも……私にできることなど、この位しかありませんが」

「……いえ、ありがとうございますラケル先生」

「じゅ、十分ですラケル先生」

ラケル先生はいつも通りに柔らかく微笑み……そして椅子と化しているジュリウスさんの肩甲骨(?)あたりを細い指先で優しく撫でた。

「さあ……ジュリウス？ 研究室へと戻りましょう……？ 今の貴方は私の椅子、そう移動のできる車椅子。ジュリウスならぬジュリ椅子としての……役割を、存分に、全うなさい……」

「仰せのままに！ はい先生！ ラケル先生!! 時間だ、行きましようああラケル先生！ まるでクアドリガのように!!」

そのままクアドリガのような四足歩行で、ジュリウスさんとラケル先生は去って行った。

あまりにもアレなアレすぎる光景に取り残されてしまった私たちはただ呆然として立ちつくす。

一体何をしに来たのでしょね、彼女らは。

「……ま、まあ……車椅子……そう、車椅子だよ！車椅子!! つ、使えるからさ……ほら……」

「そ、そそ、そうだよ。元気出してこー！ オデンぱん食べてー嫌なこと怖いことも忘れよー」

「そ、そうそう！ フライアにはね、すつつつごいものが沢山あるんだよ！」

おでんパン目隠しを取り払われた健太少年はこくこく、とほぼ自動的に頷いていた。防護服を身に着けた看護師さんズの手により細心の注意で車椅子に乗せられていく。

その時、少年は眩きを漏らした。

「綺麗な女の人だったな……」

「あ、ああ、先生のことだよね？ ……たしかに美人だよね……」

否定はしないよ。

確かにラケル先生は美人。ちよつと神秘的で不思議な人だけど綺麗な人であることには違いない。

「うん……女神様みたいな人だった」
「!?」

空気……感染……!? (パンデミック)



もつと他に行くべき場所があったんじゃないかと思う。

「第一次フライア探索隊IN神機保管庫!」

「すぐくわかりやすい説明をありがとうございます」

……やっぱそうだろう。もつと他の場所があったんじゃないか。

車椅子少年に聞こえないようにそつと先輩に耳打ちする。

「あの先輩? 神機の保管庫何かに来ていいんですか?」

ロミオ先輩の翡翠の目はどことなく醒めた色を浮かべていた。

「分かってない。女の子ってホント分かってない。こうゆうのがいいんだよ!」

「そうなんですかねエ……」

「私だったら美味しいものがいっぱいある場所に連れてきてほしいと思うけどな」

それだよ、ナナちゃん。

子供は男女関係なく美味しいものが好きだと思うんだわ。そうゆうものがゴツソリおいてある場所にはずれはないと思う。

「いやオレもそうしよつかなー、とか考えましたよ? ……でもアイツ今そんな食えないだろ? だったら辞めたほうが良くない? と

いう、人にやさしい消去法」

「……あ」

そっか。そうだった。

全然頭がまわっていなかった。

「でも、正解っぽいかも」

「だよな！ オレも此処初めて来たときぶわーっとなったもん」
「た、確かに……」

無論、私だつてここをサゲズんでいるわけじゃない。むしろ

「すごい!! ここそスゴイ!!! デカイ!!!」

「分かるよ!! 分かる!! 壮観だよね!!」

病気の子供と同程度にはしゃぎたかつたりする。

神機保管庫、と言つてる癖に……まあ半分はきつと機能しているんだと思うけど。

現在、フライア所属のゴッドイーター部隊『ブラッド隊』は4名しか在籍していない。隊長、ロミオ先輩、ナナちゃんと私こと神威 唯。第三世代型神機、と言われるのはそのたつた4機のみ。それじゃ倉庫も寂しすぎる……なんてことは、なかった。

意味ありげに嚴重保存されている重々しいのは今は無視して。

ここには大量の神機が整然と並べてある。系統区分されており第一世代型、第二世代型、第零世代型すら存在していたり。

更にそれらが性能検証だとか言つて研究員さんたちの手でバラされていたり、整備されていたり、人工筋肉?と何かの骨格を継ぎ合せた『腕』つばいので変形実験していたり、色々と忙しい。

「すつげえ……!」

神機なんか滅多に見ることのなかつただろう少年は目をキラキラとさせている。

「コレ、今までジュリウスが拾つてきたんだぜ?」

「すごいですね!!」

「近接槌型少ないなあー……ちよつと残念」

真ん中のちよつと離れた場所ではデカイ……本当にデカイ神機があった。目算で大きさ4メートルはありそう……誰が使うんだこんなもん。巨人ですか、そうですか。

健太君はキョロキョロと好奇心半分、真剣さ半分な表情で神機を見まわしている。

「んー……あと男子が見てテンション上がるのはなあ……アレかな。アレだな。フライア防衛用の主砲」

「しゅ……主砲？」

「詳しい情報は企業秘密割愛だけど、主砲。スゲエデカいの。アレが見えるのってどこだっけなー……」

と、ロミオ先輩が缶バッチニットに手を当てて何か思い出そうとした時だった。

研究員の1人、と思しき男性が、こちらゴッドイーター3人を発見して接近してくる。

「おおっと、ロミオさん！ 丁度いいところに現れた！」

「え……？ 何っすか？ ほ、報告書ならちゃんと出しました……けど……」

後ろ暗いところでもあるのか、先輩。

「違う違う。そっちの修正箇所は貴方の部屋の固定端末に直接送って置きましたから、後で再提出して下さいね」

「……はい」

「じゃなくってですね。この間……『遺された神機』略して『のこじん』を拾って来られましたよねーロミオさん？」

「……っすね」

「そういえば言ってたねー、拾ったって言ってたよねー」

あの『初陣』のドサクサ紛れになんかそんな通信があった気がする。遺された神機。端的に言うならば、遺品。

『殉職』した神機使いたちの遺した神機。幸い、まだお目にかかったことは無いけど……時たま、元持ち主さんの一部付き、だったりするらしい。全く想像もしたくないお話だが。

「はあ……『のこじん』はいいですよ。神機はナンダカンダで高級品だから。だから貴女達も、できたらで良いんで、積極的に回収してくださいー」

「はーいっ！ 機会があったら善処しまーす！ それとーお近づき

の印に……どーぞコレ！」

「うおっ……何ですかコレ……!? え? おでん? パン……? どっちだ……!?!」

……とは、言っても……。

神機だけならともかく、そんなかつて人間だった物が付着している物体はできるだけ触りたくない。

そ、その……自分もケガとかしてたら、感染症とか怖いし……? 断じて気持ち悪いからとかグロいからとかそういうった感じの個人的な理由ではない。

「ちゃんと拾ってくれば特別手当が支給されるんだけど」

「やります、いえ、やらせて下さい！」

「わー唯ちゃん、変わり身早いね。物欲センサーに忠実なのかな?」

いや、だつてまあ……ね?

それにしても特別手当まで出しているとは。かなり本気で探さなくては。たとえ元人間の残骸が引っ付いていたとしても。

「まあ、マジレスすると神機が残ってりや誰か他の人に適合することもあるもんなんぞ。そうすればまた、罪も無いワカモノを一人生贄にして戦場に叩き込むことができますしね、あつはははは」

「オペレーター! オペレーター!!」

ロミオ先輩が齒にデンプリン質由来の衣着せることを強要なさっている。品種改良トウモロコシのデンプリンから作れそうだからこの美しき崖つぶち世界でも安上がりで作れそうだ。

けど、言っていることは当たっている。

MIA（任務中行方不明）と化したゴッドイーターが居る場合。数日中にもすぐに捜索班が組織されて派遣がされる。

しかし、彼らの任務は行方不明者の捜索、救援ではない。

運がよければ隙を突いて遺体でも持って帰ってきてくれるらしいが……状況と照らし合わせ、生存が絶望的であつ、偏食因子の投与限

界を超えていた場合は……確実に死亡しているだろうと判断され、基本放置か神への供物。

だが、神機は回収されるのだ。

理由としては、神機は高価だし、引継ぎができる。仮に引き継げないにしろ、余ったパーツを引つpegがして他の神機使いの神機の強化や修正に充てる。ゴッドイーター本人とりも武器に方が大事に扱われるとは泣けてくる。

人のほうが消耗品なのは紀元前から変わらない、人類不変の原則らしい。

「で、その『のこじん』だけど。貴方がこのこ引つ張ってきた神機は。大事な『本体』の方が無いわけなんです」

「……いや、ソレ最初つから言つたじゃないですかオレ……」

「本体なきや意味がないんだって！ 何の罪も無いワカモノを即席ソルジャーにして人類の壁に出来ないんですよ！」

「神機使いの目の前で言うことですか!？」

「日ごろ私たちがどんな目で見られているのかよく分かるよ」
「……」

健太君ドン引き。大人の汚さを見ちまったようだ。

「まあ、正直言う回収してきて欲しかったですよ。むしろ盾や銃、近接武器なんかのパーツよか『本体』の方の回収優先でお願いしますね。正直言う指令細胞群かなあ。アレあればどうにかなる」

「どうにか?」

「あー……あんまり言いたくないけど。万が一『神機使い』がアラガミ化、なんてことになってたらもうどうしようもありません。通常の攻撃は効きにくくなってますし……最悪、『始まったら』本人以外の神機での介錯は難しいとまで言われちゃってます」

「……そうゆう時はどうするんですか?」

割と他人ごとではない。

「そうですねー。言われてるところだと……基本的には直前に部隊長による介錯。間に合わなかった場合は一時撤退後、以降同型適合者による討伐。もしくは『近い』波長の神機……我々の間だと『姉妹神機』

とか『親子神機』なんて言うんですけど……ああ、余談ですが実はブラッドの皆さんの神機は全員姉妹機だったりして。いいですよねえ姉妹系、ロミオさんとジュリウス隊長の補食形態の下顎のラインが似ててやっぱり姉妹なんだなあーと、ジュリウス隊長の単独出撃した時なんかお姉さんの方が不機嫌になっちゃって……ゴホンゴホン……ま、まあ、そうゆう系の攻撃であれば効果があるようです。最近じゃあ本部の方でも部隊を派遣するらしいんですが眉唾モンですねえ。最悪にして過去一番多く取られた処置は、『野放し』です」

「……え」

「野放しですよ、何もしない。元人間と言いつつもアラガミですから、放っておけば神様同士喰い合います。……そうやって死んでいった元人間たちも居るでしょうね」

「……」

「ただ……自我も失いながらもまだアラガミを喰い続ける、そんな呪われた死に方を誰だつてしたくないし、させたくはない。……だから、回収してほしいんです。絶対に」

「……」

「まー、そーゆーことなんでお願いします。ってか何ですかこのパンは……！ 美味しくないのに……美味しくもないのに辞められないんですか!?!」

「ナナちゃん特製のお母さん直伝おでんパンです。よろしかったら、どうぞどうぞ！ まだまだ沢山ありますよ〜?」

「え……え……? い、いいですよもうお腹いっぱいですよ……な、なのになぜ体が勝手に!?! い、要らない……もう俺は要らないんだ……! 嫌だ、食べたくない! 食べたくないのに何で!?!」

「上の口は素直じゃないねー。いいんだよ! もっと欲望に忠実に生きたって罰は当たらないって! ねー?」

「ナナ……? おい、ナナ……? お前何を……!?!」

いく。

どこかで見たことある人たちだなー、つて思っていたら、「これ何本に見えますか!」「……………7・5本」と言ったやり取りをやっているのを見て思い出した。……………そうだ、適合試験の時にお世話になった人たちだ。

ぺこり、と会釈しておく。

「何をやっとするか貴様ら……………!」

「つつ!？」

「え？ ダレダレー?」

「……………おっさんだ……………! おっさんが現れた……………!」

健太君のドン引き声が一番正しく状況を把握しているかもしれない。

現れたのは、おっさん。

詳しく言うと、よく通るデカイ声を発することのできる声帯を持ち、高級そうな軍服を纏いしやたらと恰幅の良い体型の中年オッサン。

「グ、グレムスロワ局長……………!」

通称、グレム局長。正式名称グレゴリー・ド・グレムスロワ氏。

「おい、こんなところで何をやっている? こんな所にいるヒマがあつたらアラガミの1体でも狩ってこい」

「え……………えつとこれはですね……………! そのですね……………!」

脳内計算機がカチカチカチと謎の計算を始める音がする。多分あまり役に立たない計算だろうけど。

「あのですね……………コレはですね……………!」

「ん? おいそつちのは何だ? ……………どうゆうことだ?」

「あ……………局長実は……………こつちの子がそのー」

ロミオ先輩がどことなく歯切れ悪く何か言う。

「なんだと……………」

「うわああああ! ち、違うんですよ局長!! こ、これは……………! そ、

そうこの騒ぎは新型の……そう、第二世代おでんパンの臨床試食実験を行っててですね!!」

「失敬な。さっきの人はちゃんと適合したじゃない」

「アレ適合って言うの……? なあナナさん……アレ適合って言えるの……?」

どう見ても過剰反応起こしてた気がするのだが、ナナちゃんにはアレが適合しているように見えていたのかもしれない。すごく都合の良い網膜だ。

「貴様らああ!」

「ひい!」

当然、こんな下らない言い訳が通じる相手ではなかった。

「馬鹿にしおつてこの……! 何をやつとるか!!」

「ご、ごめんなさいごめんなさい!! 何でもしますからあ! 偏食因子の投与停止処分だけは勘弁してください!!」

「それは嫌だねー」

「お、おい……ナナ、他人事じゃないんだぞ。つてか唯も、そこまで酷くないと思うぞ……」

偏食因子の投与さえあればあとは万事どうとでもなる!

「こいつは!! 黒蛛病の患者だろうが!!! こんな所に連れてくるなど正気か!」

「え、え……ですが……」

「車椅子なんぞで連れまわす等正気かと聞いているんだがなあ?!」

「す、すみません! 正気ですゴメンナサイ!! 車椅子はラケル先生から借りましたあ!! 代わりは隊長がやってます!!」

「……は?」

「ジュリウス隊長がラケル先生の車椅子なんです!!!」

「部隊内秘密あっさり漏洩しちゃった……」

「……ごめん、ジュリウス……ごめんな、本当ごめんな」

テンパリすぎてしまつて、ロクでもないこと口走った気がする。

けど、この際そこはスルーしないとやってられない。

「椅子、椅子だと……ふむ……。ではない!! 此処は神機の保存倉庫だぞ?! そんな場所に何を連れてきているんだと言ってる!!」

「す、すみませんもうしませぬ! 良かれと思っただけです……それだけです……!」

「何がどう良かれだと思っただろうな、よほどおめでたい様だな貴様の頭はな!!」

「はい局長、人の事言えねーけど、今の一連の会話からオレも全く同じ感想を抱いています」

「レオーニ貴様も同罪だ!」

「やっぱね、でも最初っからロミオ先輩一人で話してた方が色々被害は少なかったように思えるんだけどね、私は」

やだ、ナナちゃんごく自然にロミオ先輩の肩持つてる……。

「貴様らは馬鹿か、馬鹿なのか。そもそも何故隔離しているのか理解しているのか?」

「……いやマジすんませんけどそこはその」

「第一、このような場所に病人を連れてくること自体が間違いだろう」

「はい……はい……?」

ん? アレ?

「神機の休眠状態を保つ為に神機保存倉庫はオラクルの濃度を通常よりも上げ、更に特殊……えーっと何だったか、まあ、特殊な機械により偏食なんちゃらだの感何とか波を上げていることぐらい当然知っているんだろうな貴様らは」

「は、はい……」

「そういう物騒極まりない場所に病人を連れてくるんじゃない、馬鹿かね? 貴様らは馬鹿なのかね」

「……………」

畜生油断した。油断していた。

グレム局長……メチャクチャ良い人じゃないですか……!!

「こんな場所に居たら治るモノも治らんだろうが、少しは頭を使って考えるんだな」

「局長……」

「あー……余談だが、最上階に位置する『庭園』はオラクルをろ過する空気洗浄器を取り入れているから空気がいいらしいな」

「……そうなんですか」

「ここに来てバンバン出てくる環境における新情報だ。」

「当然だ、金もかかっているからな。……フン、貴族趣味だ成金趣味だなどと、懐古趣味を持った古い奴らの言う事だ言わせておけ」

「……そっすか」

「あーあーあー花もあるぞー。勿論本物の植物だぞー。光合成もするぞー」

「……そっすか」

「……」

そして、グレム局長は大声を張り上げた。

「ここまで言っただけからなのか?!?! ええい! さっさと行け! このウストラトンカチ共が!!!」

「え……えええええ?!?! い、行けってことだったんですか?!」

そんな局長。突然庭園の自慢なんぞ始めたからビツクリしていたのですよ、こちらは。

「気付けよ……」

「局長も素直じゃないねー」

「気づいてたの二人とも?!? なら言っつてよ!」

しかも、先輩と同僚は気づいていたのか。だったら……どうして助けてくれなかったんだ。

「いや……だつてノリで気づくかな、と思つて」

「無理ですよお! こ、こっちは怖いなのつてもう……!」

「あつそ。もういいよ、さっさと行こうよ。これ以上会話しても何も得るものなんかないんだから」

「そうだな……じゃ、元気よく行こー!」

「おーう!!」

すっかり車椅子の操縦になれた健太君はサクサク椅子を動かして行ってしまう。ナナちゃんとロミオ先輩も仲良く歩いていく。

そこで……色々ついていけない私は。

「ちよ、ちよつと待つてください行くんですか!? え、行っちゃうの!? 待つて……ちよつとついていけないんだけど待つて……!!? って局長!? え、泣いてるの……泣いてるんですか!? い、意味深に顔を背けないでくださいよ!! は? 『いいから早く行け減給するぞ』つてやめてください!! ああああ……どうしようどうすれば——!!」



「そんなところまで行くと思わなかったよ」

「……ですよねー」

「せいぜい居住区か庭園が関の山だと思っていたからね……そつちの方には話しておいたのだけど、まさか神機保管庫まで行くとはね……流石神機使いだよ」

「……で、ですよね……」

褐色のフサフサ髪の毛の白衣の男性が振り返る。色々と目立つ容姿の多いフライアに於いては逆に稀な、普通のどこにでも居るようなちよつと優しそうな人だ。ただし、デカい。言うなれば今では数が減ってしまった指定保護動物、熊のように柄がデカい。でも、不思議と怖くないのはきつと表情が柔らかいからだろう。スラブ系の顔立ちには、地顔なんだろうが何処か微笑んでいるように見える。

通称イワン先生、ここ『フライア』で一般人——端的に言うゴツドイーター以外の、『普通』の体を持っている人類用の医師だ。私たちがだつてちよつとしたケガ位ならば診てもらうことも可。と言うのは何でもかつて発足したてのロシア支部の方に居たらしく……お約束と言つては何だが当時出来立てはやほやなロシア支部には、頼ってくる難民は流れてくるわ、壁はガンガン破られるわ、ゴツドイーターは

負傷するわで日々血みどろだったらしい。人手不足もいいところで、色々あってゴッドイーター用の処置を『覚えて』いるとかいないとか。「まあ、今のところは小康状態を保ってはいるようだね」
「ですね」

探索帰りの少年はすやすやと眠りこけている。かなり痩せ気味ではあるものの、その顔は穏やかで、あどけない。ぶっちゃけ天使のようだ。すごく天使。

結局、あの後、ロミオ先輩は暗い顔で決意を固めながら部屋へと戻っていった。きつと今頃は……再提出をしているんだろう。ナナちゃんは律儀にも「第二世代のおでんパンの記録しなくちゃ!」とレシピの編纂に向かった。だから、今回は私がこうして話を聞いている。

「で、この子の黒蛛病って、いつ治るんですか?」

その質問は、個人的に気軽なものだった。

明日の昼飯はパンですかごはんですか、それともゼリーですか。位に。

イワン先生の顔が曇っていく。

「黒蛛病は……主に極東地域で流行しているから何とも言えないし、まだ分からないことの方が多いんだ。何しろ症例も集まっている情報も少なすぎるから」

「……」

だから、あまり暗くは考えてないで欲しい。

と、付け足した。

「赤い雨に濡れることにより発病するといわれる黒蛛病。その罹患した場合の死亡率は……」

一瞬、耳を疑った。

ついでに目は見開いた。

信じられなかった。

——信じたくなかった。

「100パーセントと言われている」

phase 12 何が変わらなくとも

「きつと、この研究が成功すれば全てが上手くいくはずだ」

フェンリルの中でも、それなりに地位のある研究者であった父はそう言っていた。

「神機使いの死亡率は間違えなく減少する、また、長期活動が可能となるから行方不明者の捜索もより多くの時間を使える。救援任務もやりやすくなる。偵察の精度だつて向上する」

父はどこか熱に浮かされたように、ソレを繰り返していた。

事実、それは『可能であれば実現する』展望だったようにも思える。

……だけど、そんなに上手くいくものだろうか。

「だから、私は何としてもこの研究を完成させなければならぬのだ——死に追いつかれる前に」

病に蝕まれても尚、自分の研究に取りつかれたように戦い続ける父に、何も言うことはできなかつた。

もつとあの時、冷静に考えていたら……と、今でも思う。

後から正解を探しても、もう何もかも遅いのに。



「そりゃあつー！」

気合いと共に、クロガネ長刀型を横薙ぎに振るう。

踏み込みからの大振り、そしてそのまま振りぬいた勢いと神機の重さを利用し体重を移動。また踏み込んでいく。最大四連続まで可能な、戦闘技術教本通りの剣技。

刃はコクーンメイデンの顔面のすぐ下を切断し、一応『斬った』手ごたえだけが指先の末梢神経から伝わってくる。

「……はあ……」

『はい、お疲れ様！』

本日のノルマ達成。

「ナナちゃん、ありがとう」

『どういたしまして！ 唯ちゃん、訓練成績はすごく順調に上がってるね！ 撃破数、時間ともに良い感じ！』

「そうかな……？」

『うんうん！ これなら〜いつ『実戦』で使っても、きっと大丈夫だよ！』

いかにも元気づけようとしてくれるナナちゃんのくりくりな天真爛漫声に……少しだけ心が曇った。一応、これでも実戦の経験は着実に積んではいるし、『任務』も紛いなりにもこなしてはいる。

だが、あくまで遠距離型銃撃形態のみの使用だ。コレでは『新型』である意味が全く存在しない。

けどそこで泣き寝入りばかりもしてはられないし、何よりすっぱり諦めきれるほど、切り替えも良くないのだ。ずるずると何か諦めきれずに引きずるところが私の悪癖ではあると自分でもよく承知してはいる。

そんな訳でこうやって調整し、訓練を入れている。

この為だけにわざわざ神機の調整を行い『近接のみ』での討伐を想定しているのだ。イザという時の為の準備くらいは、しておきたい。

『でもさ……頑張りすぎてない？ 張り切りすぎるのも良くないと思うけどなー、無理しすぎると、お腹減っちゃおうよ？』

「そうかな……」

結構痛いところ突いてくるなあ……ナナちゃん……。

確かに……ちよつと自分でも無理はしていると思うけど、こんなのが全然大丈夫、の範囲だと信じたい。

逐一、メデイカルチェックを受けている身体だし、何かあればすぐにでも静止がかかる環境に居るのだ。何かがあっても平気ではない

かと思う。

それに……きつと、これぐらい必死にならなければ、きつと今の状況を打開できない。

……逆に、ここまでやってもまだ何の解決の糸口も掴めないのか、とも思うけれど。

神機を調整に出すために持つていくと、すっかり顔なじみになった整備士さんが笑いかけてくきた。

「お疲れ様、唯ちゃん」

「……すみません、お願いします」

一体、何に謝ってるのだろう。私は。

「頑張るのも良いけれど、ほどほどにしておくんだよ？ 焦ったって結果なんか出るときにしか出やしないんだから」

「あはは……ナナちゃんにも同じこと言われちゃいました……」

逆に言うとは焦っている内が花なんだとも思う。

整備士さんは計器を繋げて、軽く神機情報を確かめる。見方さえ分からぬ棒グラフや円グラフが多数表示されそれぞれが自動的に数字換算されていく。

「その……毎回すいません……イチイチやつてもらっちゃって……」

「ま、確かにメンド臭いけどね、貴女の神機」

「う……」

ぐうの音も出ねえ……本当申し訳ない。

「けど、コレもあたしらの仕事だから。大事なお役目ってヤツだから。

——まあ、毎度毎度手間だけど、早いところ両方使えるようになってくれると嬉しいんだけどねえ」

「……」

「やだ、冗談、冗談」

整備士さんは軽く笑ってはくれたが、全部が全部冗談と言うわけじゃないのだろう。

実際この……私の神機はクールダウン時間と射撃訓練、ついでに近接系訓練に加えて任務。と回さなければならぬので、非常にメンド臭いことこの上ない状態になっている。更に、近接訓練の際外してい

た——隊長が強引に取り付けた装置——をまたくつつけて貰うわけなので……すごく手間だとは思う。本当に、本当に申し訳ないです……。

「まー、コレでもまだフライアはマシだからね。物資に、機材、整備用の工具まで一級品が揃っているもの」

「た、確かに……」

備え付け備品、メモ帳一枚に至るまでちよつとした価格と品質ものを使用している。

「昔、野戦整備をやったことがあってねーアレは本つつつ当にキツかったわ。工具もマトモに揃っていない状態でね。ああ、もちろん出撃するときにドツサリ予備品を詰め込むのよ？ だけど色々あつて無くなつちやう訳。」

ひつきりなしにアラガミに追われて、酷いときなんてドンパチやつてる横で整備だよ？ 負傷者の治療も戦闘も神機の整備も同じ場所でゴツチャ混ぜ。『整備しろゴラァー！』なんて神機使いに怒鳴られたときには……チビるかと思つたもんよ」

「うわあ……怖あ……」

野戦やべえ……ヤベエよ、何がやばいのか分かんない位にヤベエ。

「んで、そんな時の幼気な私の首根っこ掴みやがった無礼極まりない野郎が、今の亭主」

「はア!? マジですか!?!」

「まあー色々あってねー……まあ、そんな野戦男でも偏食因子は毎回神経質になってた位だから貴女たちも注意するんだよ？ ウチの人曰くうつかり忘れようものなら大変なことになるらしいから」

「は……はい……」

万が一にもそんなことにはならないと思うが。検査だつてしよつちゆうやつているし。

「それにしても……コレ、本当スゴイね。流石ラケル博士。強引にくつつけている様な状態だけれど絶対に誤作動を起こしたりはしない——その分、融通が利かなさそうみたいだけどね」

「……」

「まるで、どっかの誰かさんみたいじゃない？」

彼女には悪いが、ちよつと理解不能。

「だから心配はいらないよ、どんな外部刺激でも壊れたりはしないさ……けど、やっぱり長期使う予定のない即席追加部品だから内側からの力には弱いかもしれないね」

「内側……？」

んー、そうね、と整備士姐さんは腕を組む。

「神機を構成しているオラクル細胞が一気に常識外の活性化をするとか、極めて特殊な活動をするとか、その辺ね」

「じゃ、なさそうですね」

「そうね、ないと思うけど……」

一瞬、ほつとしたような……少々がつくりしたような気持ちになる。

「どうやら私の神機は『奇跡』でも起きない限り、目覚めてはくれないそうだ。」



「大尉ー、資料のお届けですー」

「……ああ、ありがとう」

「どーも、じゃあ此処に受領の署名お願いしますーす」

受取表に署名しながら、ジュリウスはそのファイルを受け取る。

中身はある作戦の人名一覧表と……それと前後しておきた『事件』の詳細だった。

灰色の目が人名表を辿っていく。

「……」

そこに記されていたのは、現在の最寄支部で行われた『大規模掃討作戦』——長期遠征任務に従軍した神機使い達だった。年齢はどれも二十代後半から三十代……神機使いとしては、ギリギリの年齢。『旧型』と言われる第一世代機や、第二世代機に乗り換えたものの、あまり高い適性を示せなかった神機使い達。

その全員が、行方不明になっている。

「……新型の携帯型偏食因子、か」

長期遠征任務に当たり、偏食因子の投与は新型の携帯型というものが使用されたらしい。その実用化が未だないということを鑑みれば——あまり良い結果にはならなかったのだ、という事実が明白である。

ジュリウスは思わず閉口した。

そして、その次の資料に視線を落とす。

と、その時、またしても自動扉が開いた。

「あー……ジュリウス隊長……今お忙しいですか？」

「……何か？」

多少、語尾強めな口調でジュリウスが問いかけると、研究員が、やや申し訳なさそうに目線をそらす。

「ちよつと、回収してきたのこじ……じゃなかった……『遺された神機』が騒いでおるんですよ。近くに適合者が居るのか、それとも元・適合者が居るのか……はたまた未回収な部品が近くにあるのか。後ろ二つだった場合には……つか、そっち濃厚っすけど……神機使いの派遣を依頼したいので」

「……そうか」

「色々あるとは思いますが……まあ、そこは予定調整してくださいませば」

それにしても、と研究員は話題を変えてみる。

「いい加減動いてくれないんですかね。あの町の人たち。別にちよつ

と動いてくれるだけで良い、って言ってるのに。こつちだつて……いつまでもこんなところで停滞している訳にはいかないのに」

いかにも、研究室で日ごろ神機やらオラクル細胞やらと戯れている人間の感想を聞き、ジュリウスは苦笑を零す。だが、彼らからすれば当たり前前の意見だった。

フライアは腐つても技術開発支部。求めるものは、常に最新。時には各支部に依頼し、世界各国を回つてでも『新種』アラガミの核や素材を調達する。

彼らからすれば……特に得るものもない、真新しいものもない。一部「なぜ、アラガミが寄つてこないのか」に興味を示している層が居るが、ほとんどは既に、『アラガミの生活環とズレているから』と結論付けさつさと自分の研究に戻っていた。

特に、神機兵開発に携わる者は、さつさと素材確保の為に次の支部に移動したいらしい。

「恐らくは、フェンリルに対する不信感が拭いきれないだろう。たとえ、善意からの行動にせよその全てが敵意に見えて仕方がないんだ……分らないでもないさ」

「はあ……大尉がですか？ 何か意外ですねー……まあ、いいや。別にいいんですけどね、神機兵開発室の連中が五月蠅いの何のつて。ありや近いうちに発狂しますよ、あいつら。この間なんて神機から素材を剥ぎ取ろうとして、ちよつと一悶着」

よく見ると、青年研究員の額には切り傷の跡、頬には湿布。白衣の裾はやや煤けて繕われており、うつすらと血痕のようなものまで見て取れる。その姿が、どれほど戦場が過酷で凄惨だったのか物語っていた。

長年のフライア暮らしから何となく察してはいたが、彼らは日中穏やかな割には夜間非常獰猛になる。

「お互いに少なくないものを失いました。もう二度とこんな愚かしい争いを繰り返したくはありません」

皆の気持ちは、ノーモアフライア。

「まあ、そうゆうわけで。さつさと立ち退きしてくれませんかね、とか

思っちやうわけですよ。何かあの人たち、キナ臭いし」

「……」

「気づきましたか？ あの街……『墓場』がないんですよ」

こんな時代だからこそ、何処に行っても大抵、墓場……もしくはそれに相当する何かが存在している。生きる人間たちは死を遠ざけるほど幼くはないが、死者をすぐに忘却できるほど強くもない。

だからこそ、存在するハズのモノが……どこにもなかった。

「さて、と。では確かに渡りましたからね。——さて、まだ保管庫には負傷者が溢れている。さつさと戦災復興しないと」

「……ああ」

そして青年研究員は、内乱の爪痕が残る元戦場へと帰って行った。みんなラケル先生を崇めて仲良くすればいいのに、と内心想うジュリウスだった。



色々鬱々しくてため息が出る。

が、意を決して色々な素材を繋ぎ合わせている扉を叩いた。

「すみませーん！ フェンリル極致化技術開発局でーす！」

しーん、という擬音さえ聞こえてきそうな静寂。シカトこかれてい
るんだなあ、と内心感じ入る。

……良いでしょう、そっちがその気なら、無視してみるのも良いで
しょう。しかし。

「フェンリル極致化技術局です!!」

生憎、こちらも退く気はない。

「すみませ……うわっ」

「帰れ!!」

もしかしたら打撃目的であるかもしれないって位に荒々しく扉が開く。が、そこはバックステップの要領で後退し、回避する。中に居た人は不服そうに舌打ちを一発かました。

「どうも、フェンリルで」

「帰れ! お前たちに用はないんだよ!!」

「そう言わずにいっ!!」

やめて閉め出さないで。

「あのですね! 皆さんの安全を保障するために一応こちらからスタングレネードの無償無料の配給を……」

「要らん!」

「ちよ、ちよつと待って!」

そう、コレは、下手すると押し売りっぽく見えるけどやっていることは正式な配給。フェンリルも色々やらかしているのは事実なんで、相手方にもちゃんと気を遣って? という、本部から直接指示された訳の分からない方針のせいであらうなってる。

だが、実働は暇な神機使い。ナナちゃん、私、ロミオ先輩の3人。……何のためにゴッドイーターになったんだっけ? と右手の腕輪がゲシュタルト崩壊を起こしている。

「調子の良い事を言っつて、そいつで爆破する気なんだろう!? ええ!?! もしくは自決用に配って歩いてるのか!? はっ、お優しいことだな!」

「違いますそれは手榴弾! これはスタングレネードです!! ちよつとばかしチカつとするシロモノでアラガミの足止めを——」

「騙されるかつ!! この間も妙ちくりんな猫みたいな小娘に変なパンを押し付けられたんだぞ!? 何がおいしいから食ってみろ、だ……」

それ、ナナちゃんだ。こんなところでも配ってるんだ……流石自称おでんパンの伝道師。

「あ……アレは好みが個人で分けられると言いますか何と言いますか

……けどソレとコレとは話が別で！　お願いします受け取って下さいじゃないと帰れないんです私！」

「知るか！」

おっしやる通りだと思います。

その人は、とつさに何かを手でつかみ私に向かって投げ飛ばしてくる。

何かが目に入ったらしく、眼球に痛みが走る。

「うわああああ……！」

スタン状態になったのが敗因だった。そのままガツン、と扉は閉ざされ重々しい金属音……南京錠でも掛けているのだろう。焼け付くような痛みで物理的に涙が溢れた。その内容物を何となくで理解する。灰と塩。別名混合物と塩化ナトリウム。

確か、塩ナトは父の故郷では魔除けの意味を持っていたような……悪霊扱いなんてあんまりだ。気を取りなおしてないけど、スタングレネードを強引に置いてさっさと次へ向かうことにする。

こんな扱いにも慣れてきましたよ……。

卵と鶏の洗札からそろそろ半月。水をぶっかけられたり、オツサンの履きつぶしたくっさい靴を投げられたりでもう散々。最近固形物ならなんとか躲せるようになってきた。慣れって偉大。

「すみません、フライアですー」

「はいはい」

殆どの皆様は無視か先程のように敵意剥き出しかの二択。たまに命乞い、卒倒、首吊り寸前という稀な事案が勃発するが……本当ごくごく一部、このように普通の対応もあったりする。

「いつもお疲れ様です。フェンリルの」

「今日は片方結びの子か」

という、熟年夫婦である。

あまり人の年齢を当てるのは得意じゃないから何とも言えないが……40か50歳くらいだと思う。大体うちの両親と同じ位の方々。何でも……亡くなった息子さんが生きていたら同じ位の年齢だっただろうという——ほぼお情けで接してくれるのだろう。

「配給のスタングレネードです！」

「悪いですねえ」

「ありがたい」

素直に受け取ってもらえると本当に感動する……！ 特に塩とか灰とかぶっかけられた後だと。

「悪いですねえ。毎日可愛らしいお嬢さんが来てくださって」

「皆、美人さんばかりだからなあ」

……そツスか。そりやどうも。

「おでんの子にも宜しく言っておいて下さいな。あのパンは若い人達にとっても好評ですよ……何か妙な中毒性があると」

「あの金髪の子にも言っておいてくれるかい？ この前は瓦礫の掃除を手伝って貰って……神機使いは女の子でも力持ちだって、な。はははっ」

……ん？ あれ？

「あの……金髪の……」

「気立ての良い娘さんばかりで羨ましいですねえ」

「ウチのが生きてたら嫁に欲しい位だよ。特に金髪の子」

「だからその……」

「あらそう？ おでんの子のおでんだってちよつとしたものですよ？

……おでんだけなら」

「そっかなあ……力仕事の出来る嫁が居てくれるといいんだがな……」

……ロミオ先輩は男……

「ところで、そちらの娘さんが何か言いたそうにしているけど？」

「何かあるのですか？ 私らでよければ聞きますが？」

「うっ……」

思わず言葉に詰まる。

「な、何でもないデス……」

ごめん、先輩……。いつかちゃんとフォローしますからあ……！

「あらあらごめんなさいねえ、困るわよね。でも……可愛くて言い娘たちだから、いつかきつと素敵なお嬢さんが見つかりますよー、って

言いたかっただけなんですよ」

「このトシになるとどうもお節介を焼きたくなくなつてな。君たちを見ると思うんだよ」

「う……う……う……！」

言えない……！

こんな良い人達に言えないよ……！！

でも、このままじゃ先輩が……！！

「息子が生きて居たら、と」

いや、待てよ。実年齢より幼……もとい若く見える彼だが。声は完全に男でしよう、と。

うん……声、は。声だけは。

じゃない。

「……よろしければ、お話を聞いていいでしょうか？」

割とズカズカ入り込んでいる気がする。

け、けど情報収集も任務の内。どうせあまり期待されていないだろうけど、やっておくに越したことはない。……話してくれば、だけど。

別に、珍しい話ではないのですけどね、と小母さんは前置きをしてから話し始める。

「私たち、3年程前まで『極東』に居たんです」

「極東……？」

「ご存知ですか？」

「……父が極東系なので」

まさかこんな場所でご縁があると思わなかったけど。

「何でも当時は『エイジス計画』といのがあつて、そつちに物資を回さなくちやいけなくて……配給物資カツカツの大変な日々だったんですよ」

「……」

うちの親、買い物感覚で配給行ってくるわねー、って感じだったか

らなあ……留めきれないこの罪悪感。

そして、『エイジス計画』の話はほんの少し、薄ら聞いたことがある。数年前に期待と注目を集めていた計画だ。人類の絶対安全圏を作るとかなんとかで、アラガミすら超えることのできない最強の盾に守られた島……だったような気がする。しばらく話題に上がって、自然消滅して、霧散。その後計画の第一人者だった当時の極東支部の支部長の事故死で完全におじゃん。更にはその『事故』というのも、意見の合わない部下による暗殺、だとかフェンリル本部からの刺客……だとか黒い噂が少々飛び交った感じだ。

「そんな時にフェンリルから『赤紙』……神機の適合通知が届いて、あの子はさっさと家を飛び出してしまった。『おっしや適合キタアアア！』って言って……凄く喜んで」

「……」

他人事じゃない。私もそんな感じですよ……。

「もちろん止めたけど、引き留めたけれど……どうにもならなくてね。フェンリルからの『迎え』も来ていたし。……何より本人が行く気満々だったから。それでも、やはり何処か甘く見ていたのね、近所でもフェンリルに勤めてる人だとか、一般兵として徴兵されている人とかが居なかった訳じゃない。そういう人から話を聞いて……きつと安心してた、……そうしたかった。そう思ってたかったです」

心底、悔やんでいるかのような声だった。

「半年位経って、結局帰ってきたのは紙切れ一枚で……他には何もなかったんですよ。腕輪だけ渡されたって困りますよ。……それから、極東に居られなくなつて、ここまで流れてきて……何だかんだで生き残っちゃつて。一時は神機使いを見ただけで、平静じゃあ居られない位でしたよ」

「うっ……」

「ああ、大丈夫。一時は私もこの人も……色々と馬鹿なことを考えたものですよ。一体、何処に差があったのだろう、って。うちの息子とあそこの神機使いに、何の差があったのだろう、って」

返す言葉を、つい見失った。

……いや、違う、そんなもの存在しなかった。

生物学的な理由があるのかもしれない。遺伝子の塩基配列だとか、体一つ一つの細胞だとか、或は偏食因子への適合値だとか。

でも、分かっている。

何も違いなんてない。……特に、私のような平凡な人間とは。

「ねえ、娘さん……家族は居る？ 居るのよね？ さっきの口振りからだと」

「……はい……その……両親が」

家を出る前に大喧嘩してきた兄は割愛。

「なら、帰ってあげないとね。いつかでいい。一瞬だつていい……知らないところで、肉親が死んで何も残らないで、ただ『死』だけを突き付けられるのは……どっちも辛い話なんだから」

「……」

どんな表情を浮かべていたのか、分からない。

顔を見ることができなかった。彼らの顔を……確かにある『現実』を見たくはなかった。

悲しませていること位分かっている。

でも、受け入れることなんかできない。

……責められる、覚悟もできてない。

黙っていた旦那さんの方も口を開いた。

「苦しいし、悲しいだろうさ。……だけど、やっぱり、帰ってきてほしいんだよ」

それが、どんな形をしていても。

「はああああ……」

やはり、気が重い。

コレ、あとしばらくは引きずるんだろうなあ、とか思っていた。

……正直キツイ。

責めてくれれば良かった。怒鳴られたり、罵声を浴びせられたりの方が良かった。そんなもの慣れている。化け物扱いだつてすぐに忘れるから問題ないし。

でも……こういう当たり前の人間の感情は苦手だった。

責められているわけじゃないし、叱られている訳でもないのに、すごく追い詰められたような気持ちになるのだ。

住んでいる場所こそ違えど生きている人間の思いは変わらない。

だから……聞きたくなかった。

『同じ』だから、嫌だった。

「き、切り替え切り替え」

そうだ、泥のように落ちこむことは後でだっていくらでもできる。今すべきことじゃない。……何より、スタングレネードはまだ残っている！

「よおっし……行くぞ私」

沈んでいた心境を全否定で一步踏み出そうとした。

その時だった。

「……!?!」

ぴりつと、肌の表面をなぞる感覚がある。

ぞくぞくした何かが足先から這い上がってくる。まるで、体中の

『何か』が歓んでいる様な——気持ち悪い感触。

「う、嘘……?!」

ああ、知ってる。

この気持ち悪さと高揚感を。

確かに身体が覚えている。

「——フライア！ 緊急事態発生！ 神機使いの応援を……」

恐怖と衝撃で震えあがり、半ば混乱しかける心に冷水を流す。怖くて怖くてたまらないのに、頭の何処かでは冷静に計算が始まっていた。

今からフライアから誰かが出撃して最短10分。平均15分。

その15分を生き延びる方法を模索する、私の神機は急げばすぐに回してもらえ。通信網は生きているから輸送車に走ってきて貰えばいい。幸いここは瓦礫などの障害物が多いからアラガミの視覚も効きにくい。

小型種程度なら私一人でもなんとかなる。

……小型種なら。

「そんな都合良い訳ないって……!」

直感が告げている。『コレ』はそんな温いものじゃない、と。

イヤイヤ無理だつて。中型と単独なんか無理だつて!

け、けど何も討伐するわけじゃない……そう、15分ほど時間を稼げばいいのだ。

……15分も。

問題は、『人』が多すぎることに。

『神威隊員聞こえますか? 今、レーダーが中型種を補足! 他小型種多数! 神機回します、周辺住人の避難誘導を!』

レーダーよか早かった私の勘。やったね冴えてる。幸いスタングレネードはしこたま持つてるし、持たせてある。

……けど肝心なこと知らない。

「避難つてどつちに!」

『え、えー……あつ、西側! 西側に避難用のシエルターがあるらしいです!』

マジっすか……。

何かちよつと引つかかるものがあるけど、今はそれしかない。

「み、皆ぎぎーん! 聞こえますかー!? 今何かこつちにアラガミが来てるっぽいのでーちよつと緊急避難の方をーん!」

……もうちよい他に言い方つてモンがあつたような気もする。

すると、意外にもひよいひよい、と家から人が出てくる。

……物わかり、良すぎじゃない?

とか思ってたなら、皆さんそこにしやがみこんだ。

「え？ ガスでも出てる!？」

毒ガス出すアラガミ……ザイゴードとかラーヴァナとかグボロ・グボロ墮天……キリがねえ。

「大丈夫ですかー!？」

傍に駆け寄って気づく。

具合が悪いんじゃない。コレは——祈ってるんだ。

何に？ ……分かってる。だって彼らは『喰神教』だと言われていたじゃないか。

「……っっ!？」

視線の遥か先には、『神様』が居た。

お食事の真っ最中の。

オウガテイルを片手で捻りつぶし、頭から喰らい上げている。

姿形は蝙蝠を思わせる人型のフォルム、左右で形が違う、歪な大きな翼手。

いつか見た、黒い、シユウ。

——お許し下さい。

祈る人々の口からは、そんな声が木霊していた。

phase 13 その弱さと向き合って

不安がなかった訳じゃないかった。

そうなる可能性は大いにあった。

だけど——私はその恐怖から、目を背けた。

「何か心配事が？」

「……ない訳ないでしょう？」

とげとげしい口調で、幼馴染の男を睨み付けた。私と同じく、父の部下として働いていた者だ。

彼はどこか優しい苦笑を浮かべて私を宥める。

「確かに……もう少し錬成してから出した方が良かったとは思ってる。だけど……これは全て『支部』の——強いて言うならば出資者の意向だ。こつちが何を言っても聞き入れてもらえない」

「……分かってるわ」

『コレ』が完成すればどうなるか。父が言う通り——助かる人間が増えるだろうとは思う。

だけど、何かを見落としている気がしてならなかった。

確かに、救われる人間も居るだろう、だが……その裏で、犠牲になる人間も居るのではないか？

「大丈夫さ……きつと、世界は良くなる。その為の研究なんだ……そうだろう？」



「成る程なあ……けど、そうは言っても仕方なくねーか？　そうゆう

モノだつて言われてたんだし」

今更言われたつてな、とロミオ先輩は肩をすくめた。

「逆に、今までがフツー過ぎたんじゃないの？」

「……」

そうかもしれない。

あの後、実はびっくりする位何もなかった。例の黒いシユウ様は飯が終わったら、さっさと退場してしまい、それと同時に街の方々もさっさと元の生活に戻っていった。呆氣にとられてる内に終わっちゃったもんだから仕方がない。折角届いた神機も輸送車も「あれっ？」って感じになり……そのまま尻尾を巻いて帰ってきたのだ。

「でもさ、深く考えても分かんないと思うよ？ それに多分……カンタンに分かつちやいけないこと、なのかもしれない」

人にも色々あるんだから、つてことか。ロミオ先輩は書類に目を通してている。

「……それ、何ですか」

つい話題逸らし。

私のこの微妙過ぎる胸中を知つてか知らずか、コレー？ と先輩は素直に返答する。

「ジュリウスが取り寄せしてた資料、を本人からじゃなくつて事務の人に手を回して秘密裏に手に入れた物」

「……何故そのように回りくどいことを」

「んー……何かアイツが一人で色々抱え込んでそうだったから？」

なぜ分かるのだ……能力者か。あんたは。

「そう……でしょうか……」

「そうなんですよー」

特にやることもないし、言いたい愚痴は全部言った後なので、ロミオ先輩の読んでる資料を盗み見る。先輩もあまり気にしていないらしく……いや、もしかしたら口振りからすると内心見たつていいんだぜー、とか思っているかもしれない。

一読したところ『神機使用による遠征作戦失敗』だとか『偏食因子研究者行方不明——アラガミ襲撃の恐れあり』とか……実に穏やかと

は言い難い内容だ。

「なんでこんなことを……」

「分かんない……強いて言うなら日付じゃない？」

言われて日付の欄に視線を移す。今から2年くらい前だった。

『赤い雨』と黒蛛病はここ1年くらい騒いでるじゃん。で……健太の病気は多分半年から3か月くらい。本人の話だとお父さんが行方不明になったのは2年前だって言ってたからさ」

「……」

まさか、この作戦。

「全員行方不明だって言ってるけど……この行方不明って死体が確認できないだけ、だよな。誰一人腕輪も神機も回収されてねーんだって」

「……」

参加者の名前とその年齢を見ると、殆どが……と言っちゃアレだが、神機使いとしては寿命ギリギリの年齢だった。多分……というか絶対、コレ片道切符の任務だったと憶測できる。

「……」

結局フェンリル上層部は神機使いを単なる駒程度にしか見ておらず、しかも肝心な守るべき人たちはアラガミを崇拜している……なんて凄く出来の悪い笑えない冗談のような有様。分かっていたことだけど……こうして目の前に突き付けられると……かなり落ち込んでみたくもなってもいいんじゃないかと思う。

「先輩は……どう思います？」

「んー？ 何が？」

「こんなの……無意味じゃないですか」

言っちゃった……。

ロミオ先輩の顔から軽い表情が取れる。怒られちゃったかなあ……と内心おもいつつも、口先は止まらない。

「だって……だって、私たちがあの子のお父さんの腕輪だけ見つけたって、何が変わるわけじゃない……黒蛛病が治るわけじゃない。目の前に死を突き付けるだけじゃないですか……。腕輪だけ貰ったつ

て困るだけなんじゃないですか」

「……それは……」

「だから意味なんて……何処にもないのに」

私なんか気づくようなことだ。

ロミオ先輩はきつと……とづくに分かつてる。自分でも、自分の気持ち整理できなかつた。

そんな当たり前の事実を提示することで不愉快にさせたいだけなのかもしれない。もしくは、何か答えが欲しいのかもしれない。

……と、うかこうゆう台詞を吐くこと自体、私らしくない。

いつもウジウジ悩んで一方的に考えて自然鎮火するのを待つ。そうやって生きてきたはずだったのに。

……やっぱ謝ろ、今すぐゴメンナサイして、無かつたことにして貰おう。そうするべきなんだ、と少し遅れた結論を出して口を開こうとしたその時。

頭上から資料の直接攻撃が。

「ぐ……」

「ハイハイ。如何にも暗ーいお前らしいな！」

そのまま、わしゃわしゃと髪をかき乱してくる。

「まあ……お前の言う通りなのも事実だけど。……でも、だったら何だよ？ お前は何もしないの？」

「……」

人間的にはこう言いたい——そんなことない、と。

だけど現実問題として……何ができるのか、と問われても。黒蛛病の特効薬を開発できるでもない、専門知識も技術もない、何もないほど……無力なのだ。

強いて言うならば、神機から神鉄砲ぶつ放すこと位だけど……それだって中途半端極まりない。

「だろ？ だったらできる事だとか、やれることをやるしかねーじゃん。この台詞ウケオリなんだけど……相手の考えることが分からなくても、その人のためにできることをする、で良くね？」

「……」

「あいつの考えてることは……まあ正直あんま分かんないし……きつとオレらの想像よりも辛くて苦しいんだと思う。でも、それでも……あいつ言っただじゃん。腕輪を探してくれて、一緒に帰りたい、って」

「……です、よね……」

ロミオ先輩は納得しているのだろうか。

しているのかもしれない……逆に、同じような無力感を噛みしめているのかもしれない。

やはり、よく分からない。

「居た！ 二人共!!」

「ん……？ 何ですかあ……？」

「……医療員……？」

伊達にフライア生活を送っていないロミオ先輩の脳ミソにはフライアの人員情報が一つ一つ刻み込まれている。から、恐らくは間違いない。

だとすると。

「探したんですよ!!」

「ど、どうしたんですか!? 何かあつたんですか!?!」

「有りましたよ!! あの男の子！ 危篤状態なんです!! 数日前まで正常だったのに……一体何が」

ひゅっ、と息が詰まる。

「な、なんで……」

「こちらが聞きたい位です！ とにかく……急いでください!」



結局、事態が動いたのはそれから半日経ってからだった。

健太君は何とか容体が回復……とは言いい切れないけど危篤状態からは脱して何とか面会は出来るようになっていた。ただ、その頃になるとナナちゃんも先輩も任務が入ってしまったから、あの子に会えるのは暇な私だけ、ということになった。

寝台の上には、かなり顔色の悪い少年が横たわっている。

手足にはぐるぐると包帯が巻かれているが……これは外傷や出血によるものではない。

見えないように、見ないようにする為のものだった——見えると、辛いから。

何を言っているのか迷った挙句、

「げ、元気……？」

結局核弾頭を落とし込む。

うわああああああ！ 私のバカー……！ そんな訳ないでしょ……！

「……まあまあだよ」

「お、おう……」

もしかして、自分、十代突入したばかりの男の子よりコミュニケーション力が低いんじゃないだろうか……。

「唯さんさ……あんまりそうゆう質問しない方がいいと思うよ？」

「で、デスヨネ……」

「空気読めない訳じゃないんだからさー」

「……」

読めて、尚ぶち壊してるんだからタチ悪いとは思ってる。

「あの、さ……」

こんなこと言っているのか、と不安になる。

「元気になったら……何したい?」

「元気づて……それ、今みたいに落ち着くってこと? それとも、病気が治ったらってこと?」

「う……ど、どっちでもいいんじゃない?」

「何だ、それ」

「選択式だよ! どっちでもお手軽な方をどうぞってこと!!」

うーん、と子供らしくコクビを傾げる。

でも、顔は困ったように笑う。

「言われてもなー」

「あー……ほ、ほら! 病は気からって言葉もあるから! だからそんな悪い方には考えないで良い方向に行くように前向きに検討してみたらどうでしょう!」

「えー……その理屈で行くと唯さん年中重体じゃね?」

「そんなこと……」

うっ、と詰まる。

「……………ナイヨ?」

「説得力ない」

「……………」

はい論破。論破されましたよええそうですねはい。

「……まず、局長さんが持ってきたバガラリー制覇」

「え、アレ……長いよ?」

「……マジ……?」

つか局長何してんですか。外見に反比例な良いオッサン過ぎるでしょうが。

「じゃ、じゃあ……先輩さんに貰ったゲームクリア」

「そうゆうの！」

「ナナさんのおでんパン完食」

「完食……完食ね、うん」

串は……ううん、何でもない。突っ込んじゃいけないんだ。そうだ。

「あと……あとは……」

掛布がぎゅつと握り込まれる。小さな拳は、やっぱり子供の大きさだった。

子供も握力でしかなかった。

「ラケル先生の……椅子やりたいよ……！」

「それは駄目」

「……」

「駄目だよ。それやったら二度と人間扱いされなくなるからね？ 命は助かってても人間として生きていけなければ人生に意味はないでしょう？ お姉さん、そんな苦しい生き方を貴方に選んでほしくはないな。だから辞めよう、ね？」

「………うん」

分かって貰えて何よりだ。

人道を踏破するにも力が必要だけど、その分のエネルギーを正しく使えば人生はより明るくなると思う。……それにしても自分でもビックリする程淡々と喋れたものだ。

「……ねえ、どうして、お父さんの腕輪を探してほしいの？」

深い意図はなかった。

多分、私が安心したかっただけ、だろう。

もしくは決意したかっただけ。

ちゃんと探すからって、ちゃんと探してあげる、って、胸を張って
言えるように。

「……だって……そうしないと……いけないから」

「……」

「母さんが言ってたんだ……会いたい、って。帰りたい、って……ずっと」

「……でも」

言つてた筈だ。

死んだ父親を探し続けている内に、母親も死んでしまったと。

……同じ病気で先に死んだと。

「分かってるよ」

「……だったら」

「分かってるんだよ。母さんは死んだ……だけど……だけど、それでも探すんだ……見つけないと、いけないんだ」

「……」

「だって……だって、他に何したらいいか……分からない」

「……」

さつきまで、アレほど治ったら何がしたいか語っていたのに。

……だけど、きつと、こっちの方が本音だろう。

「じつとしてると怖い。……怖くて怖くて、たまらないんだ。おれ、人が死ぬの、結構見てきたんだけど……でも怖いんだ」

「……」

それが普通だ。

自分が死ぬのが怖くない人間なんか、居る訳がない。

「ただ……ただ、帰りたいたんだ。皆で、一緒に」
「……うん」

もしかしたら、ただ、縋っているだけなのかもしれない。
必死に食らいついていてはいるだけなのかも——しれない。
もう『それ』しか、無いから。

だけど『見つけたらどうするの?』の一言だけは、聞くことができ
なかった。

聞きたくなかった。

病室を出た私は、ロミオ先輩とナナちゃんに連絡を入れようとして
ロビーの端末に向かう。

そこで、オペレーターの方のフランさんに呼び止められた。

「あの……神威さん、よろしいですか?」

「え……何ですか」

「実は……」

それは、近くに発令される作戦の内容だった。



「どうゆうことですか!!」

珍しく……というか絶対あっちゃいけないコトなんだけど、隊長に
対して大声を張り上げている。

「……聞いたのか」

「聞きました、けど……」

「詳細は追って伝える。準備はしておいてくれ」
「……」

中々引き下がらない私に、隊長はまだ何かあるのか？ と問いかけ
る。

「あ、あるって言われましても……」

「あるんだな」

「あ、有りますけどー！」

ああ、そうだ。こんなところで引き下がるわけにはいかない。此処
だけは引き下がっちゃいけない。既にビビってるけど、何とかしてな
けなしの勇氣と言うモノをかき集めてみる。

「……強制執行だなんて許されるんですか!?!」

「ああ。フェンリルの持つ切り札だ。相手に対する全人権の停止処分
と言う強硬手段が存在する」

「なっ……!?!」

開いた口が塞がらない。

何、それ……。

「い、嫌がる人たちを無理矢理に引っ立てるって言うんですか!?! 此
処に!?! しかも此処に!?!」

「フライアならば受け入れが可能だ。元々は移動式の『支部』。期間内
であれば……最低限の安全は保障できる」

「だ、だけど……」

「もう譲歩は出来ないんだ」

隊長は真正面から言い切った。

「……」

「調査の結果、地質としての特異性は見られなかった。だとしたら本格的にサテライト建設に動いた方がいい——そう本部が判断した、それまでだ」

「でも……だったら……」

建設だったら人が居てもできるだろう、と。

そうしない理由は何となくだが察しはつく——優先順位だ。

『優先的』にまた人間を選んで、そこに入れる人と入れない人を選別するからだ。……できるだけ、フェンリルに従順で扱い易い人間だけを。信頼に足ると判断された者たちだけを。

そこに、誰の意志も介入することはない。

知ること、考えることも、意見を言うことも、願うことも、祈ることも——できないまま。

「それが……」

そうやって目に見えないような所で、何か大きなモノに運命を勝手に決定されていくことが。

……心底、嫌だったはずなのに。

「それが、神機使いの……『人類最後の砦』を名乗る、フェンリルの言う事なんですか？」

「……」

ジュリウス隊長は黙ったままだった。

沈黙の肯定と言うのか何というのか。ここで隊長に当たっても何の意味もないけれど、何かにぶつけられずにはいられなかった。

今だけは八つ当たり衝動を止められそうにない。

「そうやって……人を『選別』してきた結果がコレなのに……？ そのせいで一体どのくらいの人間が傷ついてきたんですか、どれ程の人間が死んだんですか！ なのに、なのにまだ追い詰めるんですか？」

縋ってるモノさえも奪い尽くすと言うんですか!？」

黒蜘蛛の病が出たらそこを切り捨て、

都合の悪い人間を捨て、

配給が回らなくなった区画はそのまま捨て去る。

まるで、末期病の患者が腐ってゆく末端を切り捨てるかの様に。

『本体』を生かす為ならば、一切の容赦はない——その先に在るのが命だとしても。

たとえ、必死に生きようとしている人の意志があつたとしても。

……生きたい、と願つて縋りついていたらとしても。

そうやって役に立たない神機使いを切り捨てた。病気の親子を切り捨てた。

子を失つたばかりの夫婦も、行くアテの無くなつた難民も——見放して、見捨てた。

「人は……弱いんです。ほとんどの人間は本当に弱いんです……アラガミに対して無力で、戦う力どころか逃げる術さえ持つてない。そんな弱い人間が……何かに縋るのは悪いことなんですか……？ ソレを切り捨ててまで、何を守り抜こうつて言うんですか!？」

「それは……」

ふと、喉の奥が冷える。

ああ、そうだ。

隊長は強いんだ。……ビツクリするくらいに強い人なんだ。

一人で何でも出来る人間は居る。何をやっても上手くいく人間は確かに存在するのだ。

だから当然、差があつて壁がある。

だから、きつと、……分かつてなんか貰えないだろう。

だったら、何を言つたつて良いじゃないか。

……どうせ、届きはしないんだから。

「貴方が……！ フェンリルが守りたいのはただの『理想』だ！ 自分が守りたいものを、守ってるだけだ！」

渾身の言い訳とも、タダの八つ当たりともつかない『其れ』を、思いつき叩き付けた。

慣れないことばかりやった所為か全身が強張っているのが良く分かる。握り込んだ拳に爪が喰い込む。

だが、頭上から響いた声は思っていたよりも、冷え切って——固かった。

「言いたいことはそれだけか？」

「……」

それだけな訳がない。言い返したいことは山程あった。

だけど、もうこれ以上は言葉にできなかつた。

だから、いつもの様に言葉を詰まらせる。

飲み込めないままの、感情を押し殺しながら。

「お前の言い分が理解した。否定はしないさ。今ある全てを以てして可能な限りを救う——それがフェンリルで、それが『ゴッドイーター』の在るべき姿だ」

隊長の声は大声ではなかつた。

私みたいに感情任せに怒鳴っている訳じゃない——けど、間違えなく怒りのような何かを読み取れる。

末端の一兵卒に過ぎない自分の口答えのせいとか、生ぬるい理想論を唱えたせいとか。怒られる理由なんて本当数えきれない。むしろ、今まで何も言われなかつた方が不思議な位だろう。

だから、言われるべくして言われた言葉だとは、理解していた。

「だから——いつまでも弱いままです許されると思うな」

「……っ」

「動機が何であれお前は既に神機使いとしての力を手にしている。アラガミに対し、抗うだけの挑戦権を十分に持ち得ている……そんなお前が、何時まで弱者としての立場でものを言うつもりだ？」

「……」

だったら抗え、と言ってくる。

つまりは……こうゆうことなのだ。

確かに怖かった。変わりたいとは思っていたし、弱い自分が嫌だった。

だけど……

私は、弱いことに縋っていた。

『強さ』から、逃げていた。

そこまで言われてもまだ内心言い訳が止まらなかった。

強さには責任が付くじゃないか、そんな責任なんか背負えないんだ。

私はそこまで強くはないんだ。

自信なんかない。

誰かの期待に応えられる程の実力もない。

……そんなこと、今まで一回だって有りはしなかったんだから。

だが、どれひとつとして言葉にはできなかった。

「甘えるな。神機使いとしての覚悟がまだ決まらないなら……この船を降りろ」



それだって任務は有る。

いつも通りの任務、いつも通りの日常。可能だと判断された程度の小型種の討伐。

まだ……答えは出ない。

ただ銃口をアラガミに向けてぶっ放す。何も考えないで撃ち続ける。

……もう、何も考えたくないかない。

ザイゴード、という球体と女体を足して割ったような浮遊アラガミを弾丸で叩く。小気味のいい音と共に肉が裂けて削れて、鮮烈に引き千切られる。壊して壊して引き裂いていく。

穴だらけになっていくアラガミを見ても何の満足感もない。達成感も得られない。

ただ、指令細胞群を破碎され、あとは消失していくだけになったアラガミに対して弾を当て続けていく。

……そんな無意味で無価値な、八つ当たり。

やがて、弾丸が尽きる。

「何で……」

柄を引っ張ってみても、神機は応えてはくれない。

捕食形態にもなってくれないし、近接形態に代わってくれない。最

初だけ丁寧にやってたその作業が……やがて力任せになっていく。

「どうして……!」

ああ、ダメだ。

奥底からどろり、としたまっ黒な怒りがせり上がってくる。

食いしばっていた奥歯が、噛み殺しきれなかった苦味が、溢れて、広がって、ぐちゃぐちゃに絡まっていく。

「どうして応えてくれない訳……? ……私の、何が気に食わないの……!?!」

黒い鋼は何も答えてくれない。

ただ……静かに夕暮れ時の陽光を反射していただけだった。

その先の真っ赤な空にも、雲はひとつたりとも存在しない。

どこまでも澄み切っている。

だから……もう、余計にやり切れなくなった。

悔しくて辛くて……苦しくて苦しくて仕方のない、何処にも行く先のない気持ち暴走する。

「そうだよ……! そうだろうね! 私なんか……私なんか、元々大した人間じゃない!! これと言った取り柄なんかないよ、根性だって曲がってるし、性格だって良くないし、自信なんて何それおいしいの、食べられるのって感じだし……役立つかもしれないところの愚図だよ……そんなの、自分で一番分かってる!!」

一度口に出すと、止まらない。

どうせ……誰の耳にも入らない、誰かに届くことのない、腐れた独り言でしかない。

「でも……」

きつと、この言葉に意味なんてない。

「足掻いたって……いいじゃない……!」

そうだ。

私……足掻きたかったんだ。

最初から何となく分かつては居た。

最新鋭の『ゴッドイーター』なんて……きつと、私には過ぎた役割なんだって。

自分にそんな価値ないってことも。私のような平凡人間には身に余り過ぎているってことも。

……だけど。

それでも、足掻いてみたかった。

「私だって、こんな私だって……何かになれるって、『何か』で在れるんだって……そう思えたから………だから……!!」

『普通』の人間だったら、きつと衣食住が取りあえず保障されている環境に居たら。一応家族が居て、アラガミへの恐怖もない場所で過ごせていたら……人によっては絶望さえしてしまうかもしれない。

それだけの力が、神機適合通知の赤紙にはある。

人の人生を、それまで続いていた当たり前の日常を破壊するのだから。

……だけど、私は。

嬉しかったり、した。

生まれて初めて、何かに期待してみたり……した。

その結果がこの様だ。

「あははっ……ははははははっ……」

乾いた笑い声が口から洩れる。

情けない。

ただ……ただもう、自分が嫌だった。

子供みたいに自分の感情のままに動いて、上手くいかなくなって癩癩起こして……終いには喚くだけしかできない、そんな幼さが本当に嫌だ。

気力と体力があつたら墓穴でも掘って埋まりたい。運が良ければ

隙を付いて即身仏。

何かもう、そんなんでいい気もしてきた。

「このままじゃ私……」

偏食因子だってタダではない。神機の調整や整備だって人の手を煩わせる。毎回当たり前の様に受け取るスタングレードや回復錠だって……

何より――

役立たずが、生きてていい世界なんかじゃない。

フェンリルは『そうゆう』所から、切り捨てていくのだから。

「神機使いで……居られなくなっちゃうよ……」

……あれ？

私、今、何て……言った……？

神機使いでいられなくなる……？

頭の中で、ぱちり、ぱちり、と欠片が埋まっていく。

——『神機使い』の末路、って……なんだっけ？

——偏食因子の許容限界を超えたら……どうなるんだっけ……？

色々な情報がぱつ、と散り……ひとつの形に収束していく。

『ある日父さんは帰ってこなくなった……』

『大事な『本体』の方が無いわけなんです』

『お許しください』

『偏食因子は毎回神経質になってた位だから』

『大規模掃討作戦——』

『お許し下さい』

『最悪にして過去一番多く取られた処置は』

「あつ、あああああつ………！」

そんな訳がない、そんなバカな話があるわけない。

違うに決まってる、そう、きつとそうだよ……。

けど、否定する材料が……何ひとつ、見つけれなかった。

もし、『それ』が真実なんだとしたら。

どこまでも。血に塗れている。

phase 14 罪と罰と罷

酷えよな、と彼は言った。

それが最期の言葉になった。

今、自分の白衣はその返り血で真っ赤に染まっている。鉄臭く、思ってたよりもずっと粘ついていて……それでいて、温かかった。

どうしてだっけ、

なぜ、この人は私か庇ったのだっけ。

頭の中に霞がかかり、どこかぼんやりとしている。

どんどん冷たくなっていく……幼馴染で、同僚で……つい1か月前に私に求婚してくれたその人の身体を押しつけ、放棄する。

本当はこんな所に置いておきたくはないけれど、仕方がない。私とて無傷という訳ではないし……今は独りでも生きなくてはならない。愛しかった人の瞼を閉じさせて、白衣の内側を探る。

護身用の拳銃といくつかの試験薬のサンプルを持ち出す——きつと、丸腰よりかは幾らかマシだろうと判断して。

一瞬だけ目に映った薬指の指輪は僅かな時間だけ迷ったがそのままにしておいた。

今は、研究室へと行かなくてはならない。

そんな使命感だけが自分の身体を突き動かしていた。

行って……『アレ』をとって来なくてはならない、アレだけはあいつ等に渡すわけにはいかない。何か視界が酷く霞んでいて、と思ったら案の定瞼がひどく腫れていた。……多分打撃か何かによるものだろうが痛みはないから放置しておく。

拳銃で周囲を警戒しながら歩くし、ぴちやりと水音が足元で鳴った。電灯の消失した中で目を凝らすとやはりその液体の正体は血液だった。一瞬だけ自分の足跡が残っているのではないか、という不安に駆られるけれどよくよく考えてみたらこの暗さだ。視覚強化でも行っていない限り追跡されることもないだろう。

そう、当たりを付けて研究室へとたどり着く。

幸いその場所は何一つ、荒らされてはいないようだった。

……ああ、誰も来られなかったのか、と感傷じみたものが湧いてくる。

とにかく、目的物を見つけ出し、ポケットへと突っ込んでいく。ついでに自分の傷も生理食塩水で洗って消毒薬をぶっかけ応急処置しておく。棚を開け、包帯か何かないと探す中々見つからなかった為、ガムテープで止血の真似事をやってみた。

そんなことをのんびりやっていたのが災いしたのだろう。

「は……はははっ！ み、見つけた、見つけたぞお!!」

ひどくやかましい声が聞こえる。

戦闘服を身に着けた男、若い、鍛錬されている身体……冷静に考えてこちらに勝算はない。

しかし不幸中の幸い……男は武器を片腕ごと失っていた。さらに細かく観察すると腹部が血に染まっており、ぼたぼたと新鮮な血液がまだ垂れ流しになっている。そのせいなのか、ひどく取り乱していた。

「殺さなきゃ、ころ、殺すんだ、お前、お前らを殺さないといけないんだそうだななんだ……そ、そうゆう命令だ!!」

無駄口を叩くから、どんどん消耗していくじゃないか。

ほら、今でもボタバタバタバタ……と。

「ち、違う……違う違う違う！ 俺は命令に、しっ、従っただけなんだ！ こんなのは聞いてない……任務、任務に忠実だっただけなのに……なのにお前ら!! 狂ってる！ 狂ってやがる!!」

「……何が？」

自分でも驚く程冷たく静かな声だった。

緊張しているし、動揺しているのはこちらだっただけだ。——だからと言って相手にバラすことが得策と言えるわけではないのだけだ。

「ア……アラガミは!! 人類の敵だろうか!?!? な、なのに……なのに
お前らは!!!」

「……………ここは研究所よ？ 検体としてのアラガミは必要になるでしょう？ ……そいつらのコアがあつて……………不思議かしら？」

男は間拔けな面を浮かべる。

「は？」

「……………」

「はっ……………ははははははっ……………！ 何だよそれ何だよ……………？」

否定はしない、するつもりもない。

私だつて彼だつて反論はした、だが他に策などなかった。時間も物資も何もかもが。

コレは皆で決めたことだ。

その決意を……………下らない言い訳などで汚したくはなかった。

「私たち非力な普通の人間の科学者が戦闘の専門家に敵う訳がない。だから使えるモノは何でも使った。なりふり構つてない自衛手段にご不満でも？」

「だ……………だからつて普通アラガミを使う……………か……………？」

「そうね、コレは『賭け』に等しかった。……………もし手練れの神機使いが一人でも居たら、今頃私たちは『お望み通り』に蜂の巣だっただろうから」

男は信じられない、と言つた表情でうつむいていた。

その間にも血がどんどん溢れ出している。

こいつらは……………本当に、何の対策もしてこなかったのか。

そんな安易に殺せると思われていたのか。

私は銃口を、瀕死の男へと向けた。

乾いた音と共に銃弾が発射されて、男が崩れ落ちる。悲鳴と共にそいつは床をのたうち回る。

きっと激痛なのだろう——だつて、銃弾には微量の『オラクル細胞』が練り込んであるのだから。

「痛いでしょうね」

動く男を火事場の馬鹿力で押さえつけでわざと中和剤を投与してやる。もちろん、ケガが治るわけではない。次に通信用機器を——

もつとも偏食場の関係でこの場所に足を踏み入れた瞬間狂う様にしてはあったが——ひとつひとつ丁寧に破壊していく。

そこまで来て、やっと、私の中から……怒りや殺意、憎悪と言った感情が漏れ出してくる。

「どうして」

僅かに声帯が狭くなって、声に震えが奔る。

「私たちは……ただ、人類のために、と作っていただけなのに？　ただ……神機使いの生還率を上げようと思っていただけだったの……？　それが——こうやって皆殺しにされなくちゃならないことだったの？　それほどまでに罪深いことだったと言うの……？」

うるせえ、と男は吐き捨てる。

吐血で真っ赤に染まった唇が歪んでいく。

「その神機使い達だよ、反対したのはな!!　はっ……はははっ……!!　んなもんが実用化されてみる、あいつらは無茶な作戦を連発されて、ズー——つと死地に送られ続けることになるだろう!!　怖いよな、嫌だよな、だから潰すんだよ!!」

自棄になっていている訳じやなさそうだった。

目には恐怖と僅かな媚びが含まれている。

コレは……きっと煽っているんだ。何かの拍子でラクに死なせて欲しいから。

呪詛は続いていく。

「お前……お前らは！　救おうとしてた奴らに潰されたんだよ!!　ザマア見ろ!!　はっ……はははっ!!」

あんまりにも腹が立ったので両手に一発ずつ撃ち込んでやった。指が醜い断面図を見せながら吹き飛び、掌が赤黒くに潰れる。

「謎が解けたわ……ありがとう」

白衣の内側から薬液を取り出して浴びせ掛ける。

もう、此処に用はない。

『ソレ』は挑発フェロモンよ。希釈前だから濃度なんか知りたくもない位のね……じきに、アラガミの大群でも襲ってくるんじゃない？」
「なっ……」

男の顔は絶望に彩られていた。

「せいぜい祈ればいい……先に、失血死できるといいわね……？
……幸運を」

「お……お、い……!? 待て、待てよ!? ふぎけん……ふぎけんなふぎけんなふぎけん……! 殺していけよ!! 殺してくれよ!! な、なあ……待てよ!!」

まだ懇願の声が聞こえてくる。

奴がどんな死に方をしようが知ったことではない。……だって同じように、今ここで皆死んだのだから。

ああ、そうだ。それでいい。

何もかも神に喰われて消えればいい。

……それでも



「ちよ、ちよつとタンマあつ!!」

……やっぱ他に言い方があった気がする……!

い、いやいや、此処まで来て何を尻込みしているんだ私……もう後には退けない!

と、自分を鼓舞してみるけど、胸の奥にはやっぱり案の定どこまでも虚しい寂寥感しか存在しない。

「ブラッド……?」

「え、何でここに?」

居ちや悪いんですかね……。

……悪いよね、そうだよね、どう考えてもね。その点は本当申し訳ないと思っております。はい。

と、というか、今の状況が中々スゴイ。

一体何が起こっていたのか不明だけど数人のフライア武装兵員が多数。武装にはあまり詳しくはないけど予想するにコレなら対人どころか対アラガミにでもそこそこ張り合えるんじゃないかと思える程の重装備だ。

そんなのが、いつしか出会った美人町長さん(仮)に銃を突き付けちやっついているという修羅場。

毎回思うんだけど……ひよつとして、私……間が悪すぎる呪いで雇っているのでしょうか……。

「そのー……任務で凄く近くまで来たんでそのー……」

「……」

「……」

「……神威ちゃん、君のその調子外れなところは評価してるけど今は笑えないよ、今は」

「……ゴメンナサイ」

折角の言い訳フェイズだったのに何故か3fc芝居以下の謎のコ

ントが展開されてしまった。だが、しかし今はそんなことしている場合ではない。

思い出すんだ。

何をしに此処に来たのか、何がしたかったのか、

今、何を成すべきなのか。

コレが正解かどうかは分からない。でも……確かに言えることは一つある。

——私は、この人と話に来たんだ。

「まず……お聞きしたいことが……あるんです」

早速胃がキリキリと痛み始める。

「ここは……貴女達は『喰神教』じゃない……そうですよね？」

「……」

沈黙は肯定と捉えていいだろう……多分。

「そもそも……初めから何処か変だった。アラガミを崇拝する組織にしては……ちよつとこの街は合理的すぎる」

多分、ここは喋つていいんだろーと何となく空気がそう言っているような気がした。半分は願望込で。

最初は……彼らがただ過激な信仰を持たないだけの集団なんだと思っていた。

だが、それは違った。

「調査機器にはオラクル系の素材が使われています……のに、あなたたちは拍子抜けするほどアツサリと受け入れた。それに……その後散々……本つつつ当に散々……色んなもの投げつけられたり除霊さ

れかけたりしながら配りまくったスタングレネードにだって何も言わなかった。……聞こえたのは、フェンリルに対する不信感だけ」

「……除霊？」

そ、それはともかく。

「教義的な不平や不満をひとつとして聞いていないんです」

調査機器にはオラクル細胞が入っている。その理由はアラガミの出す偏食場パルスは通常の機械で探知することができないからだ。だから、オラクル細胞で感知したソレを機械化測定するという仕組みになっている……らしい。神機なんぞはもつとアラガミに近い……どころか実はアラガミそのものだし、スタングレネードはアラガミの——オラクル細胞の活動を一瞬停止させる。

だから、絶対何か言われると警戒していた。

……のに、予想とは打って変わって、彼らは何も言わなかった。

その『信仰』を盾には……しなかった。

「それに……先日、ここにシウ変異種が確認された時……『シエルター』があると聞いたんです」

そうだ、言っていたはずだ。

『え、えー……あつ、西側！ 西側に避難用のシエルターがあるらしいです！』……って。

「喰神教を一括りにして考えようだなんて思ってません……ですが、2072年アメリカ支部で報告が上がっているんです。支部内で発生したサリエル変異種への対応の際、喰神教と接触したゴツドイター曰く……『アイツらすつげーやべー』。祈ってるだけで全然逃げなかった超やべー必死こいて移動させたわマジ必死だったわ折角の休暇だったのにオフ返して』………」

尚、とある神機使いの証言は任務報告よりそのまま引用しました。させていただきました。その件に関しましては私のせいじゃないから謝らないよ。

「何……だと……!？」

「アメリカにはスゲエ奴が居る……！ 任務報告を何とも思っていないばかりか、それが半永久的に残るってことをまるで気にもしないツワモノが居やがる……！」

「一体どんな精神力しているんだ……!? 脳組織まで強化した強化ゴッドイーターか何かか!?!」

フライア兵の皆……突っ込みどころが違う！

「と、ともかく!! あなた達はちゃんと『逃げよう』としていたんです！ 逃げる場所を作ってまで居るんだ！ だから……少なくとも『喰神教』とは考えにくい……だったら」

ちよい短絡的かなあ、とは思いつつ。喰神教なんて多かれ少なかれそんなものだ。過激派になるとフェンリルの活動阻害どころかテロ、誘拐、破壊活動までやる。その信仰は支部内外に幅広くフェンリルも下手したら把握しきれない。

だから……できるだけ、そうだと確定できた集団には——それが特に害悪をもたらさない『穏温派』だと思われた場合には——フェンリルは、『あえて泳がす』とあまり関与はしない。

『喰神教』を装いたかった、偽りたかった……フェンリルから目を逸らす為に」

どこまでも苦い言葉になる。返す刃で自分が傷つくのが分かる。

それは……まぎれもない『弱者』の思考、力もなく群れることでしか生き残ることのできない者の考え、強者からこそそこそと逃げ回るだけの生き方——だから。

だから、私にだって理解できる。

「貴女の口から聞かせてください……どうして、フェンリルから隠れたのか、そして何が貴女を——皆を此処に縛りつけているのか」

隠れたくて隠れている訳じゃない。

逃げたくて逃げている訳ない。

きつと……きつともう、『それ』しかないのだ。

「あの『アラガミ』は——シユウの変異種は……人、だったんですよ……？」

少し長い話を聞いてください、と彼女は言った。

「私は元々フエンリルの研究者でした。……私の父も。私は父の研究の助手をしておりました」

やっぱりそうだった。

隊長の調べていた資料——1年前の科学者失踪事件と研究所へのアラガミの襲撃事件のことが思い起こされる。

「昔、父は何人もの仲間を失ったそうです。あの時代はまだ……偏食因子という概念が成立して間もない頃だった。暴走を抑えきれずにそのまま帰らなかった人も少なくなかったと聞いております。だから……だから、父は偏食因子の改良を目標としていた。……帰ってこなかった仲間や、同じ運命を辿った私の母の仇討ちとして」

皆が押し黙った。

神機使いとその遺族たち……この世界のどこにでもある悲劇のひとつ。

「父が目指したものは携帯型の偏食因子です。神機使いが簡単に持ち運びができて、少量の投与で長時間の活動を可能にする代物」

「なにそれすごい」

超欲しいんですけど。

そんなものがあれば……私たちの心配のタネもひとつ消失するだろうに。

「……そう思う人ばかりなら……良かった」

「……」

思わなかった奴も居た、という事らしい。

「父は……焦り過ぎていた。もつともつと時間をかけるべきだった。自分たちの作っているものがどれ程の影響を——良くも悪くも、もたらずのかという事をもつと考えるべきだった……。きっと、冷静ならばそう出来ていたのでしょう、でも……時間がなかった」

「……黒蛛病」

「調べてくれたのですね」

ただの偶然だったんだけど。

黒蛛病の情報が欲しくって色々漁ってたらまさかのヒット。……極東地区がヤバすぎるだけで他の赤い雨の発生地区は割と限られていたからだ。

特定できてしまう程度に。

「父は黒蛛病だった。時間がなかった。だから……携帯型の偏食因子が実用化できれば多くの神機使い達を幸せにできるのだと……信じ、疑わなかった……そして」

一瞬だけ彼女の息が止まった。

長い黒髪が蒼白になった肌に不気味なほど映えていた。

「……研究途中だった物を、出してしまった」

「なっ……」

先日見たあの情報は——やっぱり繋がっていた。

『神機使い』としてギリギリの年齢やあまり高い適性を示せなかったゴッドイーターを集めた長期遠征。

その実態は……すぐくすぐく体裁の良い……人体実験。

できるだけ損害を出さず、かつ失敗に終わったとしても世間に漏れることなく隠蔽できる方法。

「その……結果は……」

誰も、帰ってくることはなかった。

無理のある任務で全員死んだのだと思っていた……。全滅したんだと、思ってたけど……

「ええ、知ってのとおりです。……『誰も』帰っては来れなかった」
「……」

「そして……フェンリルが出した責任の取り方は……銃だった。研究に携わった研究員からその家族まで皆殺しだった……。どうやらその採決には本部の退役神機使いも居たようだけど……。私たちは正式な処分を受ける事さえできなかった……」

真実は重く、あまりに突拍子もなく着いていけなかった。
凄すぎて……。そして複雑で、怖かった。

人が抱いた正しい復讐心が暴走し、結果多くの死者を出した。その彼らの死に報いる為により多くの人間が犠牲になっている。

誰もが守りたいものや叶えたい願いの為に——どこまでも非情になっている。

この人がその地獄からどうやって逃げ出してきたのか……。考えたくないし、想像もつかない。

そして、話はまだ終わっていない。

「それで、何があったんですか？」

その先が、あるはずなんだ。

語る彼女の目に怯えの様なものが奔った。

……その様子が告げている、真実は、苦いと。

「そう……。全滅だと聞いていた……。失敗だったと、聞いていたのです。……ですが、完全な『失敗』ではなかった——そう、成り得なかった」
「……」

なって欲しかった、と彼女はつぶやく。

「命からがら逃げ延びた私は……。逃げた出した先で、遭遇しました」

口調が何処か……言いよどんでいた。

きつと言葉を探しているのだろう、出来るだけ口当たりと耳ざわりの良い単語を。

何となく、そんな風に見えた。

「人の精神を……持ったままの、アラガミと」

「——っ!!」

「身体は既にアラガミに堕ちていた……それも、かなり中途半端に。どうすることも出来なかった。腕輪を浸食され、神機とも同化していた。どうすることも……できなかったのです。」

それでも……『彼ら』は人であり続けた……そう強要され続けていた……」

……できる訳がない。

ゴッドイーターの世界でも更に一段階常軌を逸脱している話だろう。

それなのに。

話自体はすんなりと理解していた。携帯型偏食因子の実験台にされてしまった神機使い達は、投与限界を超えて『死亡』かもしれないに近い形になった、だが、ごく一部は生き残ってしまったのだろう。多分、理性や記憶、感情などを司るであろう部位を残したまま……全身をオラクル細胞に浸食されてしまったのだろう。

自分ってこんなに理解力高かったっけ……。

「それで、彼らはどうなったんですか」

「彼らは……最後まで、任務に忠実でした。精神まで浸食が進み最後には……自我さえ、滅んでも」

『ゴッドイーター』であろうとしていました」

何故か、過去形だった。

「出来る訳が……ない。そんな都合のいいものが、あるわけがない」
身体だけが神で、心が人。

この世界にそんな都合の良い物が……どこまででも、人にとって都合の良いものがあるわけがない。

この世界の摂理はそこまで甘くはないのだ。

だったら、どうした？

世界が人に恩寵を与えてくれなくなった——前時代の人間たちは何をした？

捻じ曲げたじゃないか、世界の『摂理』の方を。

どうして、これまでこの廃街の人間たちが生きていられたのか。

フエンリルのアラガミ装甲壁もなしに、なんで生き延びてこられたのか。

それは……アラガミが都合よく襲ってこなかった……からじゃない。

「だから……祈っていたんですか……？」

彼らは『ゴッドイーター』に守られていた。

でも。

そんな『奇跡』がいつまでも続くわけがない。

だから……

「……何を、したんですか……？」

思い当たる節が無かったわけじゃない。

ただ……それを正解だとは思いたくなくなっただけなのだ。

認めたくなかった。

信じたくなかった。

初陣の時隊長だって、ロミ才先輩だって……言っていたじゃないか。

アラガミは食べたモノの『性質』を取り込むことができる——
——って。

「何を……したんですか……!？」

気管と声帯が一気に狭くなったような気がする。

息を吸い込むことも、言葉を発することも、今の今だけはひどく難しいことのように感じられた。言葉で聞いただけなのに、衝撃や驚愕が抑えられない。

「……人を……」

思わず言い方を変える。

「人の体を……喰わせた？」

そうだよ。

だってここには、こんな時代で、こんな世界に……ないといけないものが、欠けている。

「死体を……？」

その美しい女は黙ったままで、一度だけ深く頷いた。

足元から世界が崩れていくような妙な感覚が伝っていく。大事な何かがぐらぐらと、壊れて零れて……消えていく。

「何で……そんなこと……!」

分かっている。

本当は……分かっている。

「どうして」

より多くの人間を救う為だったのだろう。

こんな世界だからこそ——人は、継れるものになれば何にでも継ろうとする。

例え、それが半神半人の神機使いだろうが、世界政府に成り代わったフェンリルだろうが。

そんなこと……分かり切っている。

彼らがただ、生きたいと願っただけの……普通の人間だということも。

だけど、これだけは言わずにはいられなかった。

「分かっていたはず。そんなことをしたら——二度と、戻れない」

アラガミは喰らったものの性質を取り入れはする。

だから……人の脳を食べればその形質を真似て崩れていくその形を再構成していくことはできるんだと、思う。

でも……

如何にアラガミと言えど、自分と同じ形のを、喰べることはしない。

それを応用したのが『偏食』なんだから。

「二度と……人には、還れないのに……！」

全て済んだこと、終わったことなんだ。

何もかもが終わってから何か正解はなかったのか、と人の傷口を掻き毟る。

何の意味もない、ただの人を傷付けるだけ問答だったけれど。

「……『彼ら』にも、全て打ち明けました。それしかない、と……それでも、選んだ、願った。往き付く果てが地獄の底だと分かっている……全てを受け入れて」

少しでも永く、人で在りたい、と。

「最後の1人も……もう、人としての意識はほとんど残っていません。……ですが、コレだけは繰り返して言っておられました……帰りたい、と。家族の居る場所へ……子供の待つ場所へ、帰りたい、と」

「……え？」

まさか。

いや、そんなまさか……だろう。

でも……隊長の言っていた情報と全部合致する。

だとしたら……本当に……ありとあらゆる意味での凄い偶然だ。

と、動揺したのがいけなかったのかもしれない。

その人が銃口を突き付けていることに気付けなかったのだから。

「……許されようとは思いません。……ですが、償う術など分からない……ただ、もう……私は、疲れました」

そして、彼女は。

すべての重荷を降ろしたかのように、どこかしら晴れたような。

泣いてるような、笑ってるような表情と共に。

本当に、小さな声で。

あなたが、どんな人間なのかは分からない。

でも——どうか——。

「……『皆』を救って、下さい」

そして



自動扉が開き、ロミオとナナがロビーへとほぼ同時に突入してき

た。

「隊長聞いた!? ブラッド緊急出撃だよ! 予定建設区にアラガミの大群が向ってるんだって! 一体何が……」

「つ、つかさ……唯が、任務行ったまま戻らないんだけどさ……お、おい、これヤバくね? 夜だし……視界悪いし」

「ああああ……嘘でしょ、唯ちゃん……分かるよ、コレもう十中八九口クな目に遭ってないよ!」

「……や、やっぱそう思いますか香月さん……」

「思いますよレオーニさん! しかもーあそこは今強制移住計画実施中ー! フライア人員が多く入ってるんだから! さあー! 助けに行くよーっ!」

と、実に分かりやすい会話を交わしていった。

事態は数分前に巻戻る。

フライア全体がそろそろ強制移住させよっかなー、という強引極まりない最終手段に踏み切ろうとしていたその時、常識では考えられない規模のアラガミの大群が『予定建設区』へとなだれ込んでいる……との知らせが届く。

フライア側はこの事態に対し、既に入っていた人員、そして非保護の『難民』達を見捨てるわけにはいかず、切り札、特殊部隊ブラッドの緊急出動を要請。

……したのだが、何故か1名絶賛行方不明中につき、取りあえず居る奴らだけで出撃するかー、という事になっていた。

入隊し初めてのスクランブル出動であるにも関わらず、香月ナナの行動は迅速だった。見た目こそ少女だが、どうやらかなりの度胸が据わっているのかもしれない。

あの調子ならば恐らく平気だろう、とロミオは隊長に向かって声をかける。

「ほら、さっさと行こうぜー! 隊長」

「……」

だが、隊長——ジュリウス・ヴィスコンティ大尉の反応は、彼らしくもなく、どこか鈍いものだった。

「お、おい、隊長！　しっかりしてくれれば!!」

「……」

まさかスクランブルでビビっている訳でもあるまい。

だが、確かに何か思いつめているらしくその表情はひどく苦いものに見える。

普段どこか浮世を踏破、さらに跳躍している男の……ひどく人間臭い場面に遭遇し、何気この顔レアショットだとロミオは場違いすぎる感想を抱きつつもロミオは焦る。

事態はどんどん悪くなっていく。

状況は更に混迷を突き進んでいく。

自分ではどうしたらいいのか、分からない。判断できない。だったら、指示が欲しい、指揮を執ってほしい。

それができるのは——『隊長』しか居ない。

「……あいつの、言う通りだ」

「ん？　あいつ？　ひよつとして、唯のこと？」

先程思いつきりド派手に口喧嘩をかましていた少女を思い浮かべる。

普段これでもか、という程気弱で悲観的、かつ弱腰な駄目なヤツが珍しくこの完璧超人に突つかかっていた。『強い人間に弱い人の気持ちなんか分からない』と叫んでいた。

……そんな平凡な人間の思いでも、届くものがあつたらしい。

「俺は……やはり、自分の守りたいものしか……『理想』しか守れない。結局、エゴを押しつけただけなんだ……情けないが……それは紛れもない事実なのだ、思う」

「……あー」

どうやら、ぬかるんだ思いに足を取られていたらしい。

「俺はこんな……こんな思いで、何を守ろうとしていたんだろう……」

と少し省みてな」

——こいつ、本当真面目すぎるんだよな。

ロミオはそんなことを思いつつ、1つばかり年上の……だがたった1歳しか年齢の変わらない、自分の指揮官を見つめる。

きっと、本当はコイツだって分かってる。

今はただ……一瞬だけ立ちすくんでいるだけなのだ。

きつとすぐにでも、自分の力だけで歩き出す。

それでも、だ。

「なあ、『ジュリウス』」

自分の腐れ哲学を押し付けるつもりはない。

考えを説教してやろうだなんて大層な立場などではないことは

重々承知。

だが……今だけは、慰めるフリをする位ならば、許されるだろうという気がした。

誰だって、弱ってる時——聞きたい言葉のひとつやふたつは存在するのだから。

「お前さ、馬鹿だろ。頭のいい馬鹿だろ。あんまり、くよくよ考えすぎるなってば」

「……」

自然に零れたのは、軽い苦笑だった。

「ほとんどの奴はさ、お前みたいに強くないんだ。何でもできる、つて訳じゃないんだ。アラガミとだって戦えないし、逃げることしかできないし……そうゆう人間の気持ちはさ……きつと、お前には分からないと思うよ」

アラガミを唯一倒すことのできる『神機』それに適合し操ることのできる『神機使い』——それこそが人類の儂い希望の萌芽であり、同時に最後の砦でもある。

そして、その存在に誰でも願えば成り得る訳ではない。

「同じようにさ、お前の強さも弱さも、あの人たちには通じない。そんなだけじゃなくって、多分……唯にも、ナナにも、届かないし伝わらないよ？ お前だってあいつらの弱さを理解できないと思うし」

きつと、オレのも。

その言葉を口腔内で噛み砕きながらも、ロミオは言葉を続けていく。

「……分かり合えることなんてさ、ないと思うんだ」

言いそびれた其れは、ひどく苦くて固く、喉の奥へと突き刺さった。

「だけど、いいじゃん、ソレで」



だから何だ。

「オレは知ってる。お前が強い奴だつてこと……まー、だけど強いからその分、案外脆い奴だつてことも？ ……そんなの、唯も知ってる……と思うし、ナナだつてさ、多分きつと分かつてるよ」

おでんパン少女はともかく、弱腰後輩の方はあまり自信を持ってない。

……け、けどきつと分かつてるハズ……！

……だよな？

もうそれでいいや、とぶん投げておく。内心言い訳が止まらないし、言わないとやってられないんだ。

「お互い『知ってる』……それだけ、だけどき」

——それ以上何ができるって訳でもないんだけどさ。

「支え合うこと位出来んじゃねーの?」

——そうやって『支えあって』生きているのが此処の流儀なん
だろ?」

「だからほら、お前が守りたいものを、守りに行こーぜ?」

その位だったらさ、いくらだって付き合うよ。

だってオレ達、家族なんだから?

phase 15 ラケル先生のためなら死ぬる

我ながらスゲエとは思った。

無理でも何でもやってみるもんだなー、と思った。

「確保ー！ー！ーっ!!」

「おおおおおおおおおー！ー！ーっ!!!」

なんてことはない。ただ。

……ちよつとスタングレネードを投擲しただけだ。

うん、そうだよね！ やっぱり物理力は全てを制するんだよね！

ちよつと怯ませる位だったら御の字ですー、とか思つて投げたスタグレが、まさか命中するなんてね。更にまさか引き金の所をピンポイント狙撃するとはね、まさかそこで炸裂するなんてね!!

……きつと、いや、間違えなく向こう3か月分の幸運を、今ここで全部使い切つたと言えるかもしれない。

そうして奇跡と奇跡と奇跡の末に出来上がった光景は……。

妙齢の美人に群がつていく戦闘服のオッサン共……。

……。

……。

「ちよ、や、やり過ぎは駄目ー！ー！ー!!」

「ふん縛れエエエエエ!」「束縛じゃハッハー！ー！ー!!!」「口ん中何か

詰めとけエ!!」

「台詞がダメだああー！ー！ー!! やめて差し上げて!!」

元研究員な美人さんは何が起こったかよくわからない、といった顔でぐるぐると色んなもので体を簀巻きにされていく。濃い青の目が散々彷徨つて……私へとロックオン。

声帯を通さずに言葉を視線に乗せて問う——どうして、と。

……デスヨネー。

「あー……」

少しばかり迷って、言葉を吐き出すことにした。
そんなの、決まってるじゃないですか。

「……し、死なせたくないからです……!」

そりやそーだろ。

その場に存在するほとんどの人間が抱いたであろう心の声か、何故か聞こえてくる気がする。

「あなたみたいないな!! 頭よさげで綺麗な人が脳みそブチマケて自殺する姿なんか見たくないからです!! そんなもの見ちゃったらトラウマになります!! 夢に出ます!! 不眠症になります!!」

「……じゃあ目を瞑っていけば……?」

「……っ!」

盲点だった。

「だ、大体貴女が何をしたって言うんですか……!」

「……」

「確かに……シヤレにならない話——だとは思いますが……で、でも! 別に生きてる人間にトドメ刺した訳でもないですからあー……そ、その……貴女ががやかしたことはせいぜい死体遺棄! 昔どっかの国でやっていた鳥葬みたいなもの!! そんなに変わったことじゃありませんから!!」

「……」

言いきった!

もう、こうなったら暴論でも何でも通しちゃったものが勝ちだ。総員がありとあらゆる意味で絶句するのがよく分かった。だけど、たとえドン引きされようがあまり悔いはない。

「……でも……その前に……一人始末し……」

「録音してる人いたら切ってください、あとは聞かなかつたことに懺悔なら他の人に願いたい。そんなものまで背負いきれない。」

「それに……」

ほんの少しだけ、ためらった。

私は……この人がやったことを、正しいことだったなんて口が裂けても言うことはできないだろう。

肯定することも、弁護することも……多分できない。それどころか、本当に正しいことだったのかどうかなんて判断することさえも。

……そんな資格、ないから。

だから、どこまでも無責任だとは自覚している。

綺麗事だってことも分かっている。

「自分に罪がある……だから許されないとか、価値がない、なんて思ってる貴女を」

そしてその綺麗事が……この人の為だけのものじゃない、ということも。

自分が信じたいものなんだ、ということも。

……それでも。

「必要としている人たちが、沢山居るんです」

発した言葉が鏡面反射するかのようには、跳ね返る。

……そうだ。

足手まといかもしれない。

情けないかもしれない。

弱くって、しよぼいかもしれない。

……だけど。

「だから……逃げないで下さい」

それだけは……しちやいけなかったんだ。

それさえ守れば、あとは……ぶつちやけ万事どうにかなるんだ。

「逃げないで、できる限りの精一杯のことをやるんです！ 苦しくつても、ダサくても、情けなくても……何ができなくつても、何もできなくつても——誰かの為に。それだけです!!」

それが、きつと人間の形。

本来、あるべき人の形なんだろう……多分。

『あ、つ、繋がった!! 聞こえますかブラッドー04 神威唯さん!』

いいですか……落ち着いて聞いてください』

「うわっ!?! び、びっくりしたあ……ってフランさん!?! ……ど、どうしたんですか……」

イキナリ入ってくる通信音声にやや緊張したフランさんの声。

あーコレもう分かりましたよ……もうコレ絶っつ対いいお知らせじゃないでしょう。もつと言うとロクな通知だった試しがございません。

いいだろう……来いよ! と内心覚悟を決めて待つ。

『今そつちに……アラガミの大群が……本当もの凄い数が! 向かっていきます!』

「……」

『詳しい位置情報はまだ把握できていません。掴み次第お送りしますので、その場に居る民間人の避難誘導をお願いします。何卒——御無事で!!』

「……………」

やっぱり現実は予想の壁をミゴトにチャージグライドオ……………！
するんだね。

「どうして!! 今!! 敵が来るんですかあ!! もう! 本当こんな時にい……………!! 状況が悪すぎる!! ……あ、ひよつとして私が居るから、かな……………」

「マジかよ」「死んだなオイ」「どうしたモンですかねエ……………」

早くも諦観が流れつつあるフライア組。

「あ……………戦術マニュアルどこにしまったっけ……………」

網膜投影をパチパチやる私。

もう何か覚悟を決めた顔つきになりつつあるフライア兵たち。装備を確認する者。銃を握りしめる人。更には胸元に下げたドツクタグを握り込む人や遺書代わりに音声記録を取ろうとしている輩まで居やがる。

「あつた……………ありましたよー! 入れといて良かったあ……………ええつと……………避難経路に従って広域シエルターへ……………つてやっばどこですかソレ!?!」

「うわあ……………」

「つか、ブラッ娘ちゃん。これもう経路とか言ってる場合じゃないんでねえの?」

「デスヨネー……………じゃ、じゃあ……………」

考えたって何も出てこないですけどねー!

とか思っていると、思わぬ場所から指示が飛んできた。

「そこ!! 貴女!! 赤いスイツチ押しなさい!!」

「え……………ええ!? ちよ、自爆だとしても思い切りが良すぎじゃ……………」

「な訳ないでしょう!? いいからさっさと押す!!」
「は、はいっ!!」

スマキになっっている元研究者女史に命令された。何度だってしつこい位に言うが、私は権威と権力、ついでに威厳や尊厳、カリスマ性……といったものに弱い。

だから、脊髄反射でスイッチ・オン。

鳴り響く警戒音——こみ上げる不安感。

『緊急アラガミ警報——緊急アラガミ警報——状況赤——状況赤——』

一体何が始まると言うのですか。

「これで皆避難しますから大丈夫……! さっさと脱出しますよ!!」

「え……? ええええええ!? 解決!? こうもアツサリ!」

「何も解決していない!! 全員がこの場所を脱出するまでの経路確保と……アラガミの足止めを! ……頼みます……『ゴツドイーター』!」

「そりやそうですケド……でも避難って何処に!」

「フライアが全員受け入れてくれるのでしよう!!」

「そ、そうでしたあ!! スミマセンごめんなさい!!」

窮地で使える人間と使えない人間の差ってこうゆう所に出てくるんだなあ、と改めて思いました。

今の心境を一言で述べるならば……生まれてきて、ごめんなさい。

「じゃあ皆さん! 行きましょう!! 誘導は……何か……もうこの簀巻き様の言う通りに!!」

「は……はあ……ですが」

「ブラッ娘ちゃんよ、それでいいのかアンタ。腐っても一応エリート部隊の端くれだろうに」

「うぐ」

生死の危機にあつたとしても、人の心は割と正常に傷つくのだ。

「ひ、人には向き不向きがあるんですよ……! そ、そうだよきつと!

だから私は一匹でも多くのアラガミをぶつ殺してきます!!」
だって、それしかできないから。

「……と、言われましても」

「どっから攻めてくんのかサツパリだしなーオイ」

「大丈夫だー俺には自決用の拳銃があるうー!」

……そうじゃん。



車椅子の上、黒衣に腰まで届く長い金髪。青い目の少女にも老齡にも見える女性は月の女神を模したステンドグラスを眺めながら笑った。

「嗚呼、やはり……そうなのね」

ラケルⅡクラウディウスは艶やかに、柔らかに、笑う。

「そう……新しい力の目覚めと覚醒。新たなる秩序と序列……そして世界に起こりうる、変革と革命」

P—66 偏食因子。

それは第二世代までの既存のゴッドイーターに投与されているP—53型や公式記録上ではたった一例しか成功しなかったP—73型とは異なる。

偏食因子の交代と世界の変革。技術革新の時はすぐそこまで迫っている。

「良いでしょう」

アラガミは進化した。

『感応種』と呼ばれる特異な力を持つ種の台頭。並の神機使いの持つ神機は『支配』されて全く作動しなくなると言う。

ならば、人も進めば良い。

『荒ぶる神』と『新たなる神話』その序章は」

今はまだ、役者も舞台も揃ってはいない。

だから、ここから始まるのは、序章。

やがて訪れる神と人との物語——その、序章を

「あなたから……始めることとしましょう」



とりあえず、何とかして市内に出た私は。

「と、富田さん!?!」

「唯ちゃん……!?! 何でこんなところに……?!」
フライア兵団御一行様とまさかの遭遇。

黒いヘルメットに防弾ベスト、編み上げの長靴と市街戦用の戦闘用迷彩服。突撃銃とオラクルを練り込んだ銃弾。また、RPGや無反動砲を抱えた姿もちらほら見える。

と、というか気づいた新事実。フライア警備員の皆さんってこういう時はやっぱり戦闘員なのね……。

「あの、今コレ一体どんな状況……」

「あ……ああ……今から集団避難をさせようと思っていて……出勤時に使ったのと持ってきた輸送用のトラックに積み込んでいる。……ただ、思ったより敵が来るのが早すぎた! 東側の壁から来ているようだがかなり危ない」

「……了解、じゃあ、そっち行きますね!」

「皆さん! 輸送の都合により手荷物は最小限です! 繰り返します、手荷物は最小限です 現金、通帳、印鑑の類だけを携帯してくださいー!」

「あると思ってるのか」

「とーちゃん、げんきんってなにー?」

「混乱防止の為、車両避難は禁じています!!」

「だから!! あると思ってるのか!!」

「いや、だってマニュアル口上にはこう言えって……ねえ?」

深夜、大勢の今現在『保護対象』になった難民たちはぞろぞろと戸外に出ていた。

「兵隊さん……爺様の位牌を持って行っちゃならんでしょうかね……」

「位牌は構いません！ 急いでください、点呼を怠らないように！」

「位牌……お、すげえ本物だ……！」

「爺様に触るんじゃねえだらっしやああああああ！」

「出た！ 婆様の爺位牌久遠葬送!! 誘導してくれてる人をボコすなんて、並の常識じゃできねえことを平然とやっつてのけるッ！ そこに痺れる憧れるウー！」

……と、その時。

「おい……アレ……！」

「うわあああああつ！」

まぎれもなく切迫した誰かの悲鳴。その声が次々と人の列に連鎖していく。

当たり前だろう……だって、そこには。

「オウガテイル……!!」

改めて、コイツはこんなにデカかったのかと思った。神機を構えて応戦しようとしたその時……

「行け!! 唯ちゃん!!」

「……へっ?」

「ここは僕に任せて、君は行くんだッ!!」

「いやちよつと!? え? え!」

飛び出したのは……富田警備長さんだった。

「二尉!!」

「そんなに偉い人だったんですか!」

今明かされる衝撃の真実。

富田さんは、神機もなく、ただ体一つで目の前のアラガミへと呐喊していく……!

無茶だ、彼はゴツドイーターですらないのに……!

そこで気づく。

富田健次郎さん……体に何か巻いている……？

「まさか……！」

「皆！ 目を閉じるんだああああ!!」

……汽車の前方に人がいたら警笛を鳴らすのはなぜでしょうか。
汽車が傷つくからじゃない。

相手が跳ね飛ばされるからだツ!!

「うおおおおおとどっけええええッ!!」

その雄叫びはまさに機関車の警笛！……じゃないって。

富田健次郎さんは……覚悟を決めたようにその声を張り上げると

……体に巻き付けてあった『ソレ』から、ピンを引き抜いた。

笑った、ような気がした。

「富田さっ……！」

「富田系フラアツツッシュュ!!!」

暗い空の下。眩い閃光が迸る。直視できないから、自動的に網膜投影機のブラインドが下がった。

「今だッ！ 囲め囲めえ！」

「動きが止まったぞおおおお！」

「見たか！ 人類の叡智スタングレネードのカッ!! 人類の怒りを思い知れえええええええええッ!!」

「……」

零距离グレネードの効果はばつぐんだ！

フライア兵団の皆さんは、オラクル成分配合のナイフだの銃剣だのでアラガミ様をミンチに変えていく。そして露出した核へ偏食因子っぽいものを……。

……今夜の夕飯は喉通りそうにないかもしれない……無論、生きて帰れたらの話だけど……。

「さあ行くんだ唯ちゃん!! ここは僕たちに任せてくれ!!」

「大丈夫なんですか富田警備長さん!？」

「ははははっ！ 心配ないさ!!」

何故か無事だった眼鏡がきらり、と星屑の光を反射した。

「僕の肉体は装甲壁さ！」

「………はい、ソウデスネ、ハイ」

フライア兵団のみんなは、ここぞとばかりにオーアンプルを分けてくれた。コレだけあれば何とかかなりそうな気もしてきました。はい。

そして、即席地図を出して東側の壁へと走る。



って言いましても多すぎでしょうコレ……！

投影画面に映るのは……もうあまり考えたくない位の多さだった。しかも判別できない。何となく、動いてないのがコクーンメイデンじゃないかと思うけど……。

「と、とりあえず1体ずつ……あ、無理だコレ……」

各個撃破とか言ってる場合じゃないかも……。

とりあえず、撃つてから考えよう、という方向で行くことにした。とにかく今は……この大群をコレ以上壁に近づけさせる訳にはいかない。

最悪自分を囿にしても……とか思うけど、やっぱり余裕があるうちは出来るだけ優位に立って戦えるに越したことはない。実のところ決心とは裏腹に今この瞬間にもバンバン救援信号を連打している。

……早く誰か来てくれないかなあ……と思いつながら。

高台から、アラガミに向かって一斉掃射。

弾丸状に構成されたオラクル細胞がアラガミ数体を切り刻み、地面に縫い付けていくけど……一時的に足止めをしただけだ。追加スタングレネードを投げて停止させておく。

……もうこんなことばかり繰り返し返してる。

できることは足止め位なものだ。

撃破した個体数はせいぜい十数体だろう。

その癖に、取りこぼす数は増えている……市街地に入っちゃったアラガミが増えている。

けど……結局、こんなことしかできないんだ。

自分の無力さは、よく分かっている。

「……だけど……」

もう、決めたんだ。

その時だった。

「っえ……!?!」

オウガテイルが1体、目の前に跳躍してきた——!

思わずバックショットを繰り出し後方へと飛ぶ。10メートル程一気に落下し、上手く衝撃を逃がして着地。ゴッドイーターになる前から……足にはちよつと自信があつたけど……改めて思う。肉体強化すげえ。

足が痺れただけだという凄さ。

「このっ……!!」

高台下を観察した結果、ああ、そうかと納得した。『仲間』達の捕食した後や死体に昇って這い上がってきたのだと。

敵ながら創意工夫にとんでらっしやることだとは思うけど、そうも言っていられず、迷うことなく爆裂系の強力めのバレットを押し込む。

発射数自体は減つたものの——威力が上がる。

「当たってくださいお願いしますっ!」

銃口からは撃つてた連射系よりも、反動の大きい弾丸が放たれる。それはさっきのオウガテイルに直撃し、続いて爆散。神様の頭骨が弾け飛び、肉片と共に体液が飛散。そこに真っ赤な花が咲いた。

とりあえず1体……と、思ったがこっちはアドバンテージを失っている。

しかも……さっき皆から分けてもらった弾丸補充も残り半分を切っている。

改めて、これもう駄目かもしれない……という予感に襲われた。だつて。ほら。

さつきまで見向きもしないでぞろぞろ一方通行していたアラガミたちが、近くに獲物が居ると分かった途端にこっちに集まってきてい

る……！

「ちよっ……！」

空気の弾丸が目の前に迫ってきた。

文字通り風を切って迫る攻撃を、何とか倒れ込んで数センチ差で回避する。

けど……そしたら。

目の前にザイゴートの巨大な顎が、ぼつかりと大きな口を開いていた。

「あっ……うわあああっ!!」

思わず悲鳴が上がった。

……が、

微妙に噛み合わない歯は、何も噛めないままパツクリと半分にも断られていた。

少し遅れて、球体っぽい上半分が、面白い様にそっくり返る。

こんな風に、綺麗な断面で斬れるのはアラガミの喰い千切った傷では有り得ない。

……これは、刀剣で『斬った』跡だとハッキリわかった。

だって、はっきり見たから。

そこに居る、人を。

「隊長!!」

見間違えもしない。

フエンリル極致化技術開発局ブラッドのピクニック隊長……ジユリウス隊長だ。

頭の上のバナナと言い、やけに構造が複雑怪奇な貴族趣味っぽい服装といい……マジのマジで隊長だ。

夢や幻やホログラフの類なんかじゃない。

「あれ……でも一体どこから……」

「ああ、へりから市街地に入り侵入してきたアラガミを排除、そこから救援信号通りに一直線にアラガミの大群を抜けてきた」

「……」

うわ……確かに言った通りだ。

隊長の後ろには道が出来てる。死屍累々で屍山血河な。つか神機のやべえ血みどろですわ。

「遅くなって、すまないな」

「い、いえ……ってか人間業ですかソレ……」

「ああ……ロミオとナナも一緒だ。避難民の護衛が終わり次第、合流すると言っている」

「……」

駄目だ。

まだ泣いちや……だめなんだ。

泣いてる場合なんかじゃない……そんなことは余裕が出来てから……いくらでもすればいい。

状況はあまり好転していないんだ。

相変わらずアラガミはゴチャゴチャ居るし……まだ何も終わってないけど……。

なぜか、生きて帰れる。そんな気がした。

……みんな、一緒に。

「あ、あれ……でもフライアまでの護衛、ナナちゃんと先輩だけでなんですか……？ それってちよつと……いや、かなり無理じゃ……」
隊長は余裕の笑みを浮かべつつ、ザイゴードをまた1体両断しながら言った。

「無用な心配だな。見ろ」

と、隊長が指す方向を見ると。

……そこには――

「勝利の女神だ」

……フライアが、見えた。

「ラケル先生！ 見えますか！！ 俺は！！ 此処に居ますよ先生ああ先生マイゴツデスラケル先生！！ ラケル先生 Я Л Ю Б Л Ю В а с !! ラケル先生の為ならたとえ火の中水の中世界の終末まで何処までも！！ 私は往きます先生先せえええーい！！！！」

「……」

「……どうした……!? まさか……戦闘疲労のせいか……!? 眼球から瞳孔が消失しているぞ、無理はするな!!」
「す、すみませんちよつと今……ああ、世界は今日もキレーだなーと思イマシテはい……」

「そう、どんなに地を這って生きる人間が……色々あっても。きつと、世界は美しいのだ……生きてる人間がアレでアレなだけで。」

「とりあえず青いお月様は今日も綺麗だなー……などと意識が現実逃避しそうになってしまったただけだ。」

「……お前の言う通りだった」
「イキナリ何ですか。」

「俺に言ったな……お前は守りたいものしか守れない、と」
「……」

「……………」

「分かってましたよ。」

「分かってましたよ……そう言えばそんなことも口走りましたネ……私……」

「でも……今、言わないで下さってもいいじゃないですか……」

「うわあああああ!! す、すみません! すんません本当!! ソレは!! 忘れる方向で考えて下さい!!! っていうか忘れてください」

!!!! もう本当に恥ずかしくって死にたいんです本当……」

「いいや、お前の言う通りだ!」

「何でそこ頑固なんですか!」

頑迷なお人だ!

だが、態度とは裏腹に、口調は苦渋に満ちていた。

……あれ? コレは本当に……真に受けちまって……る……?」

「俺は……結局、俺は」

隊長は銃形態にリロードしながら、言葉を重ねる。

少しだけ、自嘲的だった。

『『自分』が守りたいと願うものしか、守ることなど出来ない人間なんだ』

……お、思ったより深刻っぽい……。

……完全にデマカセだった分……申し訳なき倍増。

「……だから、ここに来た」

そして、壁内……今まさに避難中だろう、市街地に向かって、叫ぶ。

「聞こえるか!? 死にたくない者は……」

そこで、はっとしたのでろう。

言い方を変える。

「生きたいと願う者は!! フライアへ行け!!!」

オープンチャンネル越しに声が拡散していった。

……届いたはずだ。きつと、誰の耳にも。

今、生きようとしているすべての人間へと。

……って素直に言いたいところなんだけど……これ、いつから回線全開だったんでしようか……。と一縷の疑問がもたげてしまう。

ともかくこの瞬間は、もしかしたらさっきの女神への愛の惨禍もアレだけ大声で叫んじゃったんだからもうこの辺りの生存者全員に拡散しちゃってんじゃないかなーと思ったり思わなかったり別に隊長的にはそれでも良いんじゃないかもしれないけどフライア全員がそーゆー思想の持ち主じゃないだろうかと疑われるようなことでもあったりしたらもう人間世界で生きていけない気がするしこの際だからいつそのこと私もラケル先生信仰に目覚めた方が良いのかもしれないという自分の中の弱い心と言う名の悪魔が囁いてくる謎の呪言から何とかして耳を背けることで必死だった。

「いつかお前に言ったな？　結局、自分のことは自分にししか決定できない——と」

「……あー……はい」

確か……アレはまだ。

『覚悟』があるかと問われて……何も答えられなかった、頃のことだ。

あの時と比べてみると分かる。本当に、亀よりすつとろい歩みだった。

だけど、その何が悪い。

「爪も牙も持たない人類だけが持ち得る力……」意志　こそが、人間に与えられた”最大の武器”なんだ」

「……」

それは初陣の時に言っていた言葉だった。

「だから」

きつと、それが……隊長の守りたかったものだったんだろう。

「世界に抗い、生きようとする人の意志の力を。その力を使用すべき機会と時間を……人の決意を」

きつと、それが……今できる、精一杯のことなんだろう。

「守り通して見せるさ」

——誰かの、為に。

「付いてきてくれるか？」

返事はもう、決まっている。
もう、迷いはない。

……今のところは、とりあえず。

phase 16 血の覚醒

『悲しいお知らせだ。今日でカウンセリング教室も最終回となりました』

「え？ え……あ、ああ、そっか今日で最後か……」

『何だ残念なのか？ もっとしたいのか？ ん？』

「いえ、もう……もう結構です」

正直うんざりだった。思わず敬語になるほどに。

『私個人としてはもう少し続けてもいいんじゃないかと思ったがな……まあ、いい。診断書には書いておいてやったぞ。「従順ではないが最低限の社会規範に従わせることは可能」だと』

「俺の扱いそんなもんなのか……」

『嗚呼、神機には適合しても、社会不適合者がまた一人世間に巣立っていくなんてな……本当に世界は理不尽だ』

「テメ……社会不適合者って……え？ 神機適合……？」

一瞬耳を疑った。

『実に嘆かわしい事だがお前に適合する神機が見つかったらしい。それでもってソレは最新型であるらしい。でもって、まだ開発途中であるらしい、よって司法取引が勝手に完了されたぞ。これで貴様も出所だ畜生が』

「選択権はないのか!？」

いざとなつたら出るところ出る。

『有るわけなからう。お前の罪は世の中を騒がせたことと、純粋な軍規違反……は撤回されたか……そして生きていることと存在していること、ついでにこの世に生まれてきたこと位だろう』

「さりげなく全否定なのか!？」

『せいぜい充実したモルモットライフを満喫し給え、それがお前の有用性だ』

やはり、いくらか柔らかくなったと言え基本的に傲岸不遜な姿勢は変わらないようだ。

だが、これで最後ののだ、と思うと、この女にはひとつだけ聞いておかねばならないことがある。

「なあ……あんだ。教えてくれないか？ 何で俺に構った？」

『……始めに言っただろうが、神機使いの心理というものに興味があるのだと』

「言葉を濁すんじゃないよ。あんたが何してブチ込まれたのかは知らねえけど……あんたも何か抱えてるんだろ？ それを問いたただす気はないが……だけど、教えてくれ。どうして俺だった？」

『……』

「俺は珍しい事案かもしれない……だが、『逆』は珍しくもなんともねえだろ。——それが原因で今ブチ込まれてるヤツだって居るだろ？ でも、なんで……俺だったんだ？」

介錯など珍しくもなんともないハズだ。むしろ、神機使いとしては当然だ。

ただの気まぐれだと言われればそれまで、特に意味など存在しないのかもしれない。ならば、それでいい。

だが、どうしても問いかけたくなつたのだ。

何を考えていたのか。こいつの抱えるモノは、何なのか。



「で、具体的に何を!? すれば! いいんでしょか!」

「前方、オウガテイル5体! 脚部と鬼面尾集中射撃で足を止める!」

「りよ、了解!」

指示待ち部下ですいません……。

こんな切羽詰まりすぎた状況下では網膜投影によるポイント指示は間に合わないらしく口頭での指令になる。神機の銃口と視覚を直結、連結完了。

「当たってー！」

比較的肉質の薄い（ハズの）脚部を狙い撃つていくと、巨大な頭部に重量が偏っているオウガテイルの身体が傾げて転倒する。まだ息がある一体に躓いた後続のアラガミが転倒。密集時によくあることらしい。

そのまま掃射を続けていくと半分は金属音と共に弾き飛ばされるが、残りは眼球や甲殻の隙間から頭部へと入り込みアラガミを浸食していく。

着弾、と共に体液が宙へと散花した。

「後方10時方向！ 距離150サイゴード！ 爆裂弾行けるな!？」

「はいっ！」

弾倉を開ける。バレット——神機内部のオラクル生成記憶素子——を組み込む。炎系爆裂弾、と表示されたソレを装填。

ジャキリ、という小気味いい音が弾がしっかりと入り込んだことを示す。精密狙撃は苦手だが、とにかく当たればいいのだ。

吐き出された弾丸が回転しながら突き進み、射線上のサイゴードの上半分……浮遊の為のガスが溜まっている、球体部の方を抉り抜く。遅れて爆裂系のモジュールが動き、『中』で破裂。炎がサイゴードが体内に蓄えている浮遊の為のガスへと引火し、より大惨事になって爆散した。

あ……だから、爆裂弾を指示されたのか、と少し遅れて理解が追いつく。

一方隊長は地上の小型種を討伐している様だった。

白いオウガテイルや、その墮天種……緑色の毒々しい昆虫みたいなものがドレッドパイク。それら数体へと斬りかかっている……かと思いきや、柄を引いて捕食形態を展開。

黒い『アラガミ』が剣を飲み込み、伸びて、周りを一気に喰らって

いく。

「……!?」

信じられないけど……捕食形態を展開したままの状態であらガミを斬っていったのだ。

一瞬だけ肉を削がれて赤黒い断面図を見せていたそれらがもの数秒で完全に沈黙して黒い粒子を上げていく……討伐の証だ、つまり……コアを一瞬で抜き取ったということだろう。

ピンポイントでの指令細胞群の剥離と捕食。

『アラガミ』の生態と緻密な剣技の成せる荒業。

行ける、と思った。

きつと……生き残れる。

そんな根拠の定かではない希望が芽生えてくる。

「前方距離300……オウガテイル通常種、墮天種……20は固い……か」

だが、行くしかない。と決意を込めた声が響く。

「確実に、だが、足を止めていくだけでいい！ 行くぞ！」

「了解！」

暗視モードで目視確認すると……本当に言われた通りに20体ものアラガミがひしめいている状況が認識できた。よくもまあ……こんなに集まったものだ。

もしかしたら……これは異常状態なかもしれない、などという一抹の不安がもたげる。

今はその解答なんか分からないけど。

神機にオラクルを注ぎ足す。

175発分が追加されたことを視認して高威力系のバレットを装填。安全装置を下ろし、アラガミの大群に向かって突っ込んでいく。隊長の方はもう既に突入し、真正面から長刀で千切っては投げ、更につった切るといふゴリ押し戦法を取っている。

ていうか……もうそれしかないんだけど。

だが私はまだ近接形態が使えない、だから打てる手は限られてくる。

……だから迷うこともない。

「同じことをやるだけ……！」

低姿勢を保ちつつオウガテイルの側面へと回り、脚部と鬼面尾を狙って撃つ。

吐き出された弾丸は確かに鈍い音と共に着弾し、肉を抉るが、空いた風穴はまだ湯気の上がつている内に埋もれて再生していく。

一発一発が軽いことは百も承知だ。

だったら手数で攻めるまで。

「——っ!？」

その時、一体のオウガテイルが尻尾から、槍の穂先のような細胞群の塊が飛んでくる。

鋼鉄並の硬度を誇るソレが投擲されるのだから当たれば痛いでは済まないだろう。ほぼ直感で身を捻って、避けた。

ゴキッ、と何かが碎ける音が耳奥を打つ。

直後、横で結っていたハズの髪が肩へとかかった。

髪を留めていたサイドクリップが碎け散った音だった。特に痛いとか掠ったとかはない。

……けど、コレがあと数センチズレていたら……と思うとヒヤリとする。

「これ……気に入ってたんだけど！」

一応、家族から貰ったモノだったし。

しっかりと握り込んでいた柄を持ち替えてアラガミを思いっきり

フルスイング。

銃の使い方としては確実に間違っている上に、下手したら曲がる可能性もあるから絶対に優秀な神機使いは真似しないことを祈ろう。

けど、やっぱり流石は神機。打撃でもちゃんとアラガミに届く。

地面は居れた骨片や歯片。血や肉の欠片に塗れていた。

「……やった、かな……っ?？」

夜闇のせいだろう。

暗くて視界は黒一色に塗りつぶされている。光の吸収性の高いオ

ラクル細胞とウェアラブル端末の恩恵でかろうじて視界は確保されている。

が、アラガミを見分けているのはサポートデバイスのオラクル濃度解析機能によるものだ。

それが残数ゼロを指し示す。

とりあえず……一波超えたところ、だろう。

だけど楽観はできない。

当たり前のことだけどアレだけバカスカ撃ち続けちゃったことによりオラクル内蔵量の残りがとても少ないのだ。あれだけ貰ったのに……とも思うけど、そもそも一体どれ位戦っているのかが、もう体感的に分からない。

ただ……ずっと、たった一つの知らせだけを待っている。

『繋がった……！——こえますか!? 聞こえ——すか!? ブラッド!』

「……フランさん?」

雑音だらけの通信が割って入ってきた。

感度は最悪……だから、かなり音量を上げざるを得なかった。ざりざりという音が痛い位に鼓膜を叩く。

でも、聞かなきゃ……駄目だから。

だって……ずっと、コレを待っていたんだから。

『良かった……! ……民間人の収容が——了しました——
収容が完了しました!! 2人とも今すぐに撤退を——!』
「……っ!」

『そっちにもうすぐ——合流します! だから早く撤——』

「フランさん……直ぐ撤退は……無理だよ」

『—な』

「前方……大型種です」

よくよく振り返ってみれば……変だった。

アラガミの来襲位ならば考えられる。

けど、こんなに大群が一気に集まるなんて通常では有り得ない。数が多いとは思っていたけど、やっぱり普通じゃなかったんだ。本当にそれこそ。

——何かの『意志』が関係して居ない限り。

「……これが……」

「感応種……」

夜闇の中でもハッキリと浮き上がるのは、赤。

それが、青い月と対を成しているようにも見えた。



「オラクル反応……!? 高い……! まさか……コレは……!」

「現場のブラッドは何を!」

「今あの2人が迎えに行きました! 全員で合流ならば或は!」

「ブラッドー01バイタル低下! 恐らく何らかの負傷を負ったものかとー!」

「新兵と2人だけじゃ危険過ぎる!」

「待って下さい……コレは……中型種接近!? 速い……!」

「いや……この『アラガミ』は……」



信じられない光景を見た。

普通に生きていたら……あのまま、もし、適合通知なんて来ないで、普通に進学して、普通にフェンリル関連の職について……引かれたレールの上の人生を歩んでいたら。

不満やどうしようもない無力感を抱えながらも、とりあえずは衣食住に困ることのない壁の中の恵まれた生活を送っていたならば。

あのまま、望まれた通りに嵐吹く世界へと歩きださなければ。

きつと絶対に見ることのないような光景を。

「隊長!!」

「……」

隊長の傷はどう好意的に見てもかなりの重傷だと分かる。掌や腕にオラクル細胞の杭が貫通している。

軽く言っただけスゴイ痛そうだが、冷静に考えてみるとコレではもう、近接戦を行うことは不可能に見える。取りあえず手持ちの回復錠を噛み砕いているが、どう考えても回復どころか止血すら間に合っていない。

「鎮痛剤を……」

「いや……打つな……動かさなくなる……」

「でも……!」

かなり痛いのだろうが、歯を食いしばって耐えている……様に憶測

してみる。正直貫通しているから風穴があいているのだろう、皮膚の上からは血が溢れて地面には血だまりを作っている。

まるで、腕一本分の血液全てがまるで一気に失われていくかの様に。見ているこちらの方が脱力してしまいそうな光景だった。

それでも、目を逸らさずにはいられない。

そうでなければ、見ることになるからだ。

きつと暫くは目に焼き付いて離れてはくれないだろう、光景を。

「……見届けよう、きつと、それだけが……俺たちに出来る事なんだ」
きつと、それが唯一の。

信じられない、光景だった。

常識外れだらけのゴッドイーター達の世界の中ですら、異端中の異端なのだろうと予測はつく。

信じられはしない、信じたくはない。

だが、痛いほどに——理解はできた。

何が『ソレ』をそこに留めていたのか、を。

それは、崩れる寸前の形をした——アラガミだった。

「……」

何時か見た……まっ黒になったシユウ変異種の姿だった。

「隊長……アレは……」

夜闇でもハッキリと浮き上がるのは赤。

神々の王、とでも言うべきその狼の如きアラガミは、あくまで美しい。

自然に淘汰され、選別され、磨き上げられていったが故の完成度なのだろう、だからこそ、そこには一片の穢れもなく、ただただ崇高さだけが存在する。

それに対しているのは……何処までも歪な存在。

「……『あの』人は……」

黒い羽根が空を横切った。

だが、その刃は届きはしない。

偽りの歪んだ『神』が本当の神に……届くことなどない、などとあざ笑うかのように。

代わりにぼとり、と身体が欠けて堕ちてゆく。

既に手足は無い様に見えた。

毒々しいまでに赤い血が流れて、溶けていく。

「……アラガミだ」

「……」

「今は、アラガミだ」

もう戻れない。

戻れはしない。

黒いシユウの身体がぐずぐず、と崩れていく。

やがて、体軀を支えることすら叶わなくなったのか、膝が折れてそこから液状の黒いオラクル細胞の固まりが噴出し、ぼとりと足が欠けた。

グラつく己を支えながらもそれでも会敵することをやめようとはしなかった。

そこでやつと理解する。

もう、とつくに、限界など超えていたのだと。

「何のために……」

アラガミには知性がある。

だが、それは人ほどの複雑さはない。

だからこそ、奇異だったのだ。

人は、一体どこまで人で在れるのか。

神に姿が堕ちたとしても……人は人で在ることはできるのか。

「どうして……」

引き裂いたのは、巨大な爪だった。

白い狼の爪が黒い鳥人の肉を削ぎ抉る。

何かが混ざり、ぐちゃりと濡れるような音と共に、上半身と下半身がハッキリと分かたれたのを目撃した。

——終わったのだ、と思った。

その時。

雲が切れて……かなり傾いた青い月が煌々と空を照らす。

明るすぎる月光に照らされて、シルエツトだけじゃない、黒いアラガミの姿が浮き彫りになった。

きつともう、戦える力は残っていないのだろう。

だが、飛ばされた上半身はまっ黒な腕を伸ばしていた。

——フライアへと。

「…………え…………？」

重い腕が溶けた。

肉がじくじくと溶解していき、ほぼ液体に成り果てて零れ落ちる。その先に現れたのは紛れもない。

……人の手と、赤い腕輪だった。

「…………！」

——『彼』は、この為に、生きていたのだ。

ずっと。

自我すら崩壊しても。

白いアラガミが、その手すら飲み込もうと歩を進めていた。デカす

ぎる前脚が大地を踏みしめ、古代神話にでも出てきそうなシルエツトが青い月に照らされて浮き彫りになる。

白く、淡く、輝く神の姿は息を呑むほど美しかった。

「食べ……」

ダメだ。それだけは駄目だ。

その思いだけが強く脳を沸かす。

何もかも、奪われてきたじゃないか。

何もかもをも、食べられてきたじゃないか。

誰もが大切な人を奪われて、住むべき国も追われて。病気になつたら追い出されて……

帰るべき場所さえも、失つて。

もうコレ以上何も失いたくなんかないんだ。誰だつてその気持ちは変わらない筈だ。

もう、これ以上。

——帰りたいんだ、とあの子は言ったのだ。

死に追いつかれてしまうことが怖いと、あの子は言った。だから……

「届いて……！」

距離自体は大したことは無い。

気持ちにためらいが無かった……と言うと嘘にはなる。

『この距離』を延ばすことは不可能じゃないはずだ。この神機様は訓練室ではロクに言うことも聞かない癖に無駄に伸びて下さるんだから。

「届いて……！ 届いてー！」

柄を無茶苦茶に引っ張る。

両側からせり上がってくる黒い筋肉束。浸食する様に其れは黒い銃身を飲み込んでいく。

捕食形態が起き上がってくる。

「届け!!!」

偶には強い思い、なんてものにも応えてくれるらしい。

筋繊維が伸び、ゴムの様に大きく伸長する!

かつてない程のデカさを誇る顎が巨大化して、何もない地面を駆け
る。

一瞬だけ、こつちが早かった。

黒い顎が白い狼口の鼻先を掠め、人間の腕ごと赤い腕輪を掠めと
る。

そして……

ごつくん。と確かに脈動した。

「……ちよ」

「……オイ……」。

……オイ」

伸びた捕食形態は手元までもの凄い速さで戻ってくる。

むき出しの琥珀色の球体。もとい指令細胞群が「飲んじやった」こ
とを示す。

「……こ、こらあああ! ペっしなさい! ペっ!」

「お前……お前本当……」

「わ、私だけが悪いみたいと言わないで下さい！ 流石に予想外だったんですから！」

神機内のオラクルが急速に増えてバースト。

「ひいっ!? き、きたあああつ！」

ひよつとして……消化しちまったのだろうか。

いやいや、まさかね。

マサカネー……。

はつきりと否定することが出来ないことこそが悲劇。

「もうやだこのポンコツ……」

「……」

心なしか神機がずっしり、と心地よい重さを得ている。

そして、徒歩で行くには割と距離の離れている筈の。

そのアラガミと目が合った。

「……」

「……」

ガツツリこつち見てますね……。

いくら私も神機もポンコツとはいえコレは理解できる。

コレ、完全に、キレてる。

「ど、どどどどどどどうしましょう隊長!?!」

「落ち着くんだ……今、考えていた退却プランが無に帰した所だ」

そのの一体どこに落ち着く要素があるのでしようか、と今世界に向けて問いたい。

神機は依然として捕食に満足したのか程よい重さを持ったままだ。

「心配ない。……今から、俺が……奴にブラッドアーツを叩き込む」

「それ……何か前聞いたことがあるようなセリフなんですけど……」

確か前はロクな結果にならなかったような記憶がある。

「だから、お前だけでも逃げるんだ」

「え……」

そこで隊長は、何故か余裕すら感じさせるような笑みを浮かべた。いつもの様な……この人に付いていけばきつと大丈夫なのだと思えるような微笑みだった。

だけど、今なら分かる。

真正正銘の崖つぷち状態だ。隊長は满身創痕状態だし、神機内のオラクルは枯渇しているし、敵は強そうな上にガチギレして活性化中だ。悪い事が重なりに重なり、相乗効果を生み出している。

でも、そんな状態でも。

『大丈夫』と笑うのだ。

心の何処かに存在する、確かな弱さを押し込めて。

……だったら、決まっている。

「隊長……すみません、その命令には従えませんが」

「……！」

「流石に分かります……そのケガでは満足に戦闘だって出来ません。……だったら、自分が戦います……！」

「待て、無茶だ！ お前は……」

「分かっています！ 勝てる気なんか空気中に存在する微量オラクル程にも感じていません!!」

そこで、隊長はぐっ、と一瞬だけ口をつぐむ。

ここまで自信満々に自信ない、と言い切る奴も珍しいんだろう。

けど、それが『私』だ。

そして……やっぱり私は、ここで隊長を見捨てたくないのだ。

「だったら逃げろ!! 俺の事はいいんだ、お前だけでも——」

「勝てる気なんかしません!! でも！ 救援を待つ時間位なら稼げま

す！」

嘘だ。

……本当は、それだって出来る気なんかしない。

「もうすぐ……もうすぐ、必ず来てくれるんです……だから！」

背後で聞こえる制止の声を無理やり振り切って走る。

目標は目の前の巨大なアラガミ。

白い狼。

何だか今は、それが死神にすら見えた。

「だから……！」

バーストモードはまだ続いている。

神機が金色に輝き、今まさに活性化しているということを手張している。

その銃口を。

真つ直ぐに、アラガミへと向けた。

「怖いよね……」

紛れもない、むき出しの本音がぼつりと零れた。

怖い、本当に怖い。

足がガクガクと喘っている。腕が細かく震えているせいで、狙いが定まらない。

いつそ何もかもを投げ捨てて一人で逃げ出したくなる衝動が、さつきから胸の中で痛いほど悲鳴を上げている。

バーストモードによって活性化し、僅かに回復した神機の内部情報が、あと一掃射だけ撃てると教えてくる。

「死にたくないよね……」

怖すぎて膝がわらってる。息ができない位に肺腑が詰まる。
生物としての直感で悟った——力の差は歴然だということ。
死にたくない。
死にたくない。

……死にたくは、ない。

……だけど、

だけど、それ以上に……強い気持ちが今は在る。

「死なせたくないよね!!」

不思議と、神機が軽かった。

あれ程いうことを聞いてくれないハズだった私の武器が。

今は体の一部であるかのように操作することができる。神経とい
う神経が結合し、繋がり、そして意思が伝達される。

もしかしたら皆、自分の利己主義を押し付けているだけなのかもし
れない。

生き延びたかった人も、死にたかった人も。強くなりたかった人も
……強くなるうとしてしている人間も。

たとえ、『それ』が自我の押しつけ合いだとしても。

『自分』が無いよりは何万倍もマシなハズだ。

「立場が離れていてもいい、相手の考えていることが良く分からなく
ても、空回りで終わったとしても……自分のできるこ精一杯のことを
やれば良い！」

右手の腕輪が軋むような音がする。

神機が、ガタガタと震えて、振り動く。銃身の奥から、黒い人工筋
肉の塊が伸縮して、絡まって、蠢く。その都度発信される脈拍や鼓動

が確かに伝わってくるようだった。

もしかすると暴走寸前と言ったところなのかもしれない、という可能性がふと浮かぶ。

——— 知ったことか。

それ位やらなければ何ひとつとして救えはしない。奇跡でも何でも起こさない限り助かりはしない。だから……迷っている暇はない。

ひとつだけ、ある。

この状況を覆せるかもしれない、そんな力を。

ひとつだけ、確かに知っている。

『長期使う予定のない即席追加部品だから内側からの力には弱いかもしれないね』

『神機を構成しているオラクル細胞が一気に常識外の活性化をすることで、極めて特殊な活動をするとか、その辺ね』

そんな力を……確かに、私は知っている。

『皆』を守りたい!!」

無駄に終わるかもしれない。

何も、できないかもしれない。

だけど、もうこれ以上。

何も出来ないままで終わっちゃいけない、とだけ……それだけ、だった。

——— 弱い自分が、嫌だった。

何をするのにも、自信がなくて……臆病で、何をやっても駄目な自分が本当に……本当に嫌いだった。

何も自分で決められない生き方ばかりの、何も見ようとせず、何も成せない自分が……嫌だった。

だから、欲した。

力じゃない、強さでもない。

そんな具体的に即物的なモノじゃない。

そんなカツコつけた偉そうなモノじゃ……なかった。

バキバキと、内部の何かが壊れていく……いや、『喰われていく』ような音が聞こえた。

神機の配列が一気に書き換わるような感触がする。

そして、銃口が縮小し折りたたまれて、代わりに下側に付いていた『刃』の部分が起き上がる。

立ち上がった大剣を構えて、アラガミと真正面から向き合った。

そこで、恐怖に怯えている自分の理性を、宥めるように勇気が覆う。

そうだ。

ただ……

私が……欲しかったのは……

「それだけじゃないよ」

今、この瞬間生きると決めた。

これは、紛れもない自分で掴みとった私の意志。

「隊長と一緒に……帰るんだ！」

phase 17 ブラッド

『お前が……一度だって言い訳をしなかったからだ』

『己は悪くなかった、仕方のない事だった』と、一度たりとも自分を正当化していない』

「……できる訳、ねえだろ」

『……そうか』

「……自分しか、自分の身を愛してやれないこの世界において……その自責はあまりにも正しい、正しいすぎるが故に痛々しい」

『神機使い』は……『神託』が選ぶ『人間』というものは、皆多かれ少なかれその素質を持っているのだな。人間などという生き物は、どこまでも未完成でありながら世界の不完全さを指摘し、そこを責め立て、辛い苦しいと不満を吐き散らす——そんな愚かさを踏みしめて尚、前へと進む……ような『強さ』があるのだと思うがね』

『だが、そんな汚泥の中の煌めきなんぞ知ったことかと、神は言う。選んでくれぬと、神託は告げる。なればこそ』

『世界に残るのは、痛々しいほどの清らかさを持った者だけになる』

『それは、笑えんな。笑えぬ喜劇で、泣けぬ悲劇だ』

「……それでも、前に進むしかないさ……それしかできないんだ」

『全く……これだから、神機使いという奴らは……いいだろう、己を取り戻したければ、試してみるのも良いだろう。弱さと強さを抱えていくもよし、弱さを強さに変えていくもよし、だ。どこまでも混沌とした己の魂一つで、この整然とした世界へ挑戦してみせろ』

「それこそが、神を喰らう者——『ゴツドイーター』だ、行つて来い。
ギルバート・マクレイン」



空气中に拡散しているオラクルさえもが、震えているような気がした。

それは、ただの現象に過ぎない。
だが、何がそうさせたのか。

——ジュリウスは知っていた。

「血の力……」

オラクル細胞……世界を喰らう荒ぶる神々が下す——人への『神託』。

自らが『捕食』し『思考』する万能細胞を持つ異形達。

そんな存在——アラガミに対し立ち向かうのではなく『受け流す』ことを選んだ人類は考えた。

そこに一つの方向性を作つてやればいい、と。

『捕食』の方向性を指定するものが『偏食』。

初めに人類はより多くのアラガミが『食べたくない』と思われる物を塗り固めて作ったアラガミ装甲壁を作り……そして、ゴッドイーターの人間である部分がオラクル細胞に捕食されないように調整する仕組みへと応用される技術——偏食因子の開発の基礎理論を確立した。

そして、

——『それ』はもう一つの可能性。

「ついに、覚醒したか……！」

感応現象——オラクル細胞同士の共鳴反応。

まだアラガミとは到底呼べないような細胞株から大型アラガミに付き従う小型種、ひいては、アラガミと同じオラクル細胞を摂取した人類——第二世代のゴッドイーター達にすら顕現した事象。

神機などは所詮アラガミであり、それを制御する人間の側も——オラクル細胞を以てアラガミを操っているに過ぎない。

『偏食』で『捕食』を押しさえつけ、

『意志』で『思考』を伝達する。

その実現こそが——第三世代の成すべきこと。与えられた使命。意志を与えられた細胞は思考し、形を変幻させていく。

より強く、より遠く、その『意志』に従い寄り添う様に。

それが、ブラッドアーツ。



……。

ナンカデタ……。

「……えっと」

この土壇場で拝み倒した結果突如として必殺技が発動した——で、いいのだろうか……多分。

願った奇跡が本当にアツサリと降りてくるとビビる、という当たり前の事実を今更だが私は思い出す。

無我夢中のがむしやらで振り抜いた刀身は空を引き裂き垂直の傷を白いアラガミへと確かに刻んでいた

……ので。

「ウオオオオオオオオオオオオオン!!!」

神はやはりキレられ、活性化なさっておられます。

「や、やっぱり……!?」

……冷静に考えてみれば何一つ状況は好転なんかしていないのだ。背後から冷却バレットが負傷した片目に浴びせかけられる。

高い銃声だけがバンバン連続して鳴る。

「下がれ!」

「ひっ……!」

けど、白い神様はあんまり気にしないらしい。

というより……怒りのあまり我を忘れちゃっている……みたいな

？ 今更だが、もつと殴る場所を考えておけば良かったのかもしれない。などと一抹の後悔を試してみる。

完全にキレたそいつは、重機のような前脚を振り上げる。

「避けられな……」

即座に装甲を展開。

避けられる余裕がない。軽量級のバックラー盾を出して防ぐ。

ガキンという大音量と共に、思っていたよりも重い衝撃が押し寄せた。力を流しきれずに、そのまま肩が外れそうになる。

け、けど……ここで引き下がったら……と、考えるとさっきの決心が脆くも崩れそうさだ。

「……え……う？」

……熱い？ 焦げ臭い……？

何かトンデモない熱気がじりじりと、目の前に迫ってきているような気がする……。

と、異臭と熱気を嗅覚と触覚で感知していたら急に真っ赤な光と、炎が爆ぜた。

派手な爆音と共に展開していた装甲の半分が弾け飛ぶ。鋼鉄で出来たハズの固い金属の塊が、軽々と飛翔していくのが妙にゆっくり見えた。

「……!？」

悲鳴を上げる暇もなく目の前に迫ってきた爆風に飛ばされた。

くるりと景色が反転し、衝撃が後頭部から背にかけて走る。少しだけ遅れて、目の前が真っ赤になる。

「——っ!!」

息が、出来なかった。

吹っ飛ばした後追撃してきた前脚が、丁度鳩尾あたりを踏んでいった。というよりかは、押さえつけられていた。

骨が軋み、肺腑からなけなしの息が漏れていく。

その癖に、口の中が血の味で満たされている。

「いぼっ……がはっ……!」

内臓の何処かが傷ついたのかもしれない。

痛いというより、熱い。熱くて熱くてたまらないけど、悲鳴を上げることさえできない。酸素が欲しくて開けた口からは血反吐が漏れた。

肺が死んだのか、それともただ横隔膜の上にデカイブツが乗っかっているからなのかは分からない。

というかそんなことより、後一撃、今は押さええるだけのこの白いアラガミが体重を本気でかけてきたら……今度こそ間違えなく……！

最悪の予想が多分近未来の予知になるだろうと予測した時、極めて本能的に近い場所で何かが動いた。

何とかしなきゃ、とにかく……ココから這い出さないと……、とだけ考える。

確信なんて全く無かったけど、殆ど体が勝手に動いた。

展開していたシールドがぶつとんだせいで、近接形態の剣になっている私の神機。

その下には収納された銃が付いている。

確か、オラクルは……残り、一発分だけ残っていたハズだ。

力が緩んだ一瞬の隙を突いて剣、ではなく、その下の折りたたまれた銃身で砲撃をぶつ放す。

確かインパルス……インパルス何とか……とか言うヤツだった……ハズ。

上体を若干浮かせた状態で撃つたので、鈍い音と共に今度こそ肩が外れた。そして体が吹っ飛んだので、辛くもその状況から脱出する。

だが、予想していた衝撃や痛みは来ない。

何か隊長が受け止めてくれていたらしい。

今は……あんまり……嬉しくない……。

「はあっ、はあっ……がはっ、ごほっ……！」

やっと出来るようになった息が散々傷ついた気管へと流れ込み、結果、凄く痛い。

「いつ……ああああああっ!!」

戦わなきゃ、いけないんだ。と頭ではよく分かっている。

だけでもう体が動かなかった。
もう万策が尽きかけた時――。

「オラクル充填率95パーセント……行けるかコレ……まあいつか……よし……当つたれええええええええええ!!!」

何処からかロミオ先輩の声が聞こえてきた。

霞みがかつた視界に僅かに走る一直線の光が見える。

それは高く高く……本当にとつても天高くまで登っていった。

そして……。

わずか0・5秒後。

とてつもなくデカイ青い何か……空から重力に従って墜落する。

何故か全く、1ミリたりとも関係ないのに『それ』は隕石を思わせた。

地球上での万物の法則に従った『それ』がミゴトに落下し目標である白いアラガミへと直撃。

少し遅れて、爆裂と粉碎の音の洪水が起こる。

超低温の波が白いアラガミを覆い、僅かに急所を外れて逸れる。

そして激突。

周囲に巻き起こる噴煙でさえ低温なのか、周りの地面が凍り付く。僅かに生えていたコケや折れた電柱、コンクリートなどの過去世界の

遺産を凍えさせて砕く。その辺一帯が気が付いたら冷凍庫状態になっただけだ。

何だか凄すぎる氷結系のバレットは

冷凍した肉や体液、甲殻さえも氷の欠片にしてまき散らす。

更に、凍結バレットが——多分、その白いアラガミの本来の属性であるのだろう——炎熱と反応を起こし急激に熱されて気化していく。液体をスルーした急激な気化は、爆発という形になった。

一瞬にして、籠手のだった甲殻と共に前脚の片方を消失した白いアラガミは憎悪と憤怒の籠った声で朗々と吠える。

「ギャオオオオオオオオオオオン!!」

「効果大だよ！ 今の内に回収しよっ！ 先輩！」

「お、おう……おう？ やっべ……今確実に目エ付けられたわ……あいつに……」

「もう二度と遭わないんだから大丈夫だって！ 隊長——！ 唯ちゃん！ 早く早くっ——!!」

隊長が私を抱えたままで走り出す。首根っこ掴まれているという人権もへったくれもない輸送方法。

……ああ、やっぱりお荷物で本当にすみません……隊長……でも、何故かさつきまで痛かったり扱ったり苦しかったりしたけれど、何か今はもう……感覚が鈍くなってきておるのです。

ってコレはヤバいってば。もしかしてもしなくてもコレはかなりマズいよ、マズい!

「よっこいしよ……つと。さあ、見てなさい！ 通常兵器だって役に立つんだから！」

ナナちゃんが元気よく……声を上げて、なんだか物騒な代物を肩に担いでいる。

……何か見たことあるなあ……アレ……昔の戦争映画みたいなやつで……対戦車用の何か……みたいな……?

「連続スタングレネードで逃げるよ——っ！」

「おっし！ ナナ！ やったれ!!」

「了解！」

ナナちゃんが絶賛再生中のアラガミ目がけて、スタングレネードを至近距離で打ち込んでいく。

スタングレネードはそうやって使うものじゃないけど、効いているから結果往来というヤツだろう。物理的に加速を加えたことにより殺傷能力が高まった閃光弾が、アラガミに突き刺って爆ぜる。

スタングレネードの光はアラガミ、ひいてはオラクル細胞の活動を一時的に停止させる効果を持っている。

そして、どうやらその効果はばつぐんのようなのだ。

もう何だか色々あって殆ど感覚が消失している背中がひんやりとした金属質な何かを掴む。硬さと素材の雰囲気からコレは軽トラツクか護送車の荷台だろうと察しをつける。

かなり泥や血で汚れたロミオ先輩と、ナナちゃんの姿が見えた。

しかし、彼らはぎよつとした顔で私を見返す。

「お前……」

分かってますよ……。

さつきから、妙な異臭が鼻につきまくっている。肉の焼ける臭いだとか、髪の毛の焦げる悪臭だとか、が。何処が痛いのかももう良くは分からない。激痛で何度も意識は飛びかけているが、ケガは見えないように意識する。

小心者の私のことだ。きつと傷なんか見たら卒倒だろう。

……見なくても何かもう意識ぶっ飛びそうだけど。

「……水……」

「ごめん。そんなもん、ない」

「……」

ひどい。

持っているスタングレネードを全弾ぶっ放したのかなナナちゃんがふう、と一息ついた。

もうアラガミの反応はない。

隊長が何処からか酸素マスクと吸引機、あと簡易キットを持ってく

きつと、これが私の――



「それからというもの、唯ちゃんは……一週間の爆睡をやらかしました」

「並のゴッドイーターでも有り得ねえような驚異的な回復力を見せて、普通に直しても全治1か月かかりそうな負傷を軽く3日で治したクセに……そのあとはゴロゴロゴロゴロ……」

「テコでも起きなかった唯ちゃん。何をしても全然起きなかった唯ちゃん。3日間は皆すっごい心配したんだよ？ だけどね、5日目になつたら何で起きないんだろう、つてなつて……6日目には何かもう皆どうでも良くなってきて……」

「その分仕事増えるし、出撃増えるし、ぶっ壊した神機と一度解体した分の修理費を隊のみんなでワリカンして……」

「高くついたよねー」

「大体お前ら助けに行くのだったって車ボコボコになつたし……」

「状況報告は隊長一人でやってたよね」

「ジュリウスだって大怪我してたのに無理して次の日出撃してさー」

「……ずびばぜん……!!」

ナナちゃんとロミオ先輩によるコンボ精神攻撃だ。

必殺、事実連打！ それだけなのに、心はしくしくしくと痛くなる。

物理的に早くも胃が痛い。

「わ……私のバカ……なんでそんなに……！」

「凄かったよ！眠ったように、死んでたよ！」

「本当本当！人が働いてんのにすやすやとなー」

「もう許して下さい……！」

自分で自分を責める前に他人二人からゆっくりじっくり責められちゃっている。そんなアットホームで素敵な職場ですが私はギリギリ元気です。

「本当にすみませんでしたからあー！」

「ねえねえ、知ってるー？唯ちゃん。人ってね、口先だけだといくらでも謝れるんだよ？」

「え……じゃ、じゃあ……何をしろと言うのですか香月さん……!？」
「決まってるでしょ！」

ナナちゃんはにつこり、と零れるように笑った。

「本当に申し訳ないという気持ちで胸がいっぱいなら……人は何処でだって謝罪ができるハズなんだからっ！」

「鉄板!?! 鉄板なの!?! 鉄板の上で土下座なの!?!」

「ん？何でもするって言ったよね？」

「助……助ケテ先輩……! そんな死に方嫌だあああ！」

「おい！ナナ言い過ぎだつてば!! つかお前もそんなにビビるなよー泣くなつてー冗談通じないな本当。お前にそんなことさせる訳ないだろ？」

と、いつも通りな人懐っこいロミオ先輩の笑顔が……

「今んところな」

「ひっ!?!」

……一瞬消えたことは私は生涯忘れることはできないでしょう。

人は、笑いながらも激怒できるのだという。

そんな事実と、共に。

「あらあら……仲がいいのは良い事だけど、あまりはしやぎ過ぎると傷が開いてしまいますよ?」

「……ラケル先生……!」

病室のドアがフーッと開き、黒いドレスの車椅子博士が舞い降りた。

少しだけ遅れて、いつものバナナ頭が入ってくる。少し前と全く変わらない……私たちのブラッド隊長だ。

良かった……ちゃんと二足歩行している。二本のすらりとした長い足で立っている。

決して、四本足なんかじゃない。

四本足なんかじゃない。

「さあ、全員揃ったところで……。改めて」

ラケル先生かキコキコと車椅子を回し、私の真正面へと向き合った。

「おめでとう、ついに『血の力』に目覚めましたね……ジュリウスに次いで貴女が二人目……と言いたいところですが」

「……はあ」

「ぶっちゃけ、貴女の、『血の力』。分かりません」

「……」

「……」

「……」

「で、デスヨネー……デスヨネ……はあ……」

「そうだよね……」

あの時……私は……本当にただガムシヤラでとにかく必死なだけだった。死にたくない、死なせたくない、そんな思いばかりでいっぱいになって。

ただ、強く、本当に強く願ったのだ。

帰りたい、帰るんだ、と。

けどこの有様だよ……ケツ。

「だがブラッドアーツ自体は発現している。今はそれで良しとしよう」

「そうだよ！ 唯ちゃんにしては凄いつて！ 自信持つて！ ね？」

「そうでしょ先輩」

「え……？ お、おう……そうだよな……。……うん、おめでと」

「……どうも」

「そうだ。良いところだけを見よう。もうこの際都合の悪いことは全部忘れて良い所だけ見て生きよう。そうしよう。」

「順番に説明することと致しましょう……まずは……そうですね、貴女と……私のジュリウス、二人が相対したアラガミ……」

ラケル先生の手にしていた端末が光り、そこから立体映像が投影される。病室ベットのシーツの上に、小さなアラガミが出現。

「忘れもしない、すっかりトラウマな白い狼型のアラガミだ。」

「コレは『マルドゥーク』、暫定的に『感応種』と呼ばれています」

「……マルドゥーク……」

「出典は古代バビロニアの旧き神。大洪水が起きた時、方舟を造らせ人類を救ったと言われる古神エアの子。そして、古代の神々の王」

「あれ？ 洪水の時に方舟を造ったのって確かノアっていう人間じゃなかったっけー？」

ナナちゃんが可愛らしくコクビを傾げた。

「それは旧約聖書の話だ、ナナ。墮落した人類に対し神々が怒り洪水を起こした、だが方舟により洪水を生き延びたノアは神から新たな秩序を授かり人類の第二の始祖となった……という話のことだろうか？」

「あ、それぞれ！ 流石隊長！」

「思い出したーと言って納得したらしく、ナナちゃんは頷く。」

「ぴよこん、と似非猫耳が揺れた。」

「洪水神話は世界各国に古くから伝承されてきました……そして、その原因と人の救済方法は多岐にわたります。神から人へと下される神罰であったり……はたまた悪神による単なる逆ギレであったり……もちろん、ナナが言っていたものもありますよ？ ……一番有名

な洪水伝承でしょうね……」

「……」

「アラガミのソースを知ろうとすることは良い事ですよ……？　でも今は、話を戻しましょう。この『マルドゥーク』及び『感応種』は新種のアラガミ。強い『感応現象』によって他のアラガミを支配、統制することを可能とするのです。神機使いの使う神機は言わばアラガミの一種。よって第二世代までの……現在既存のほぼすべてのゴッドイーター達には抗う術は……有りません。言うなれば……」

ラケル先生は意味深の言葉を区切った。

緊張感で、生唾を呑む。

「まるでアラガミのピクニックの様なのです」

「ありがとうございます」

隊長の謎の感謝。そして無駄に満足そうな車椅子の淑女。

……何ですか。何気に実はラケル先生も満更でもないんですかそうですか！　お幸せにい！

「しかし、これらはそう……P-53型の投与者『のみ』に見られている現象……ならば異なる偏食因子P-66ならば、と……また感応現象の延長である血の力であれば対抗することのも可能ではないかとの仮説が打ち立てられていましたが……図らずとも、貴女が証明してくれたようですね」

「……はい？」

「貴女は、これまで倒せないとされてきた敵に、一太刀を入れることで……ひとつ、常識を覆してみせたのです」

「……」

ちよっと待って。

「……私……が……？」

「は？」

「……私なんか……？」

「その通り」

「……」

「おい、そこは素直に喜んだって良いんだぞ……?」

「そうだよ！ スゴイじゃん！唯ちゃん！」

「この私が……人から手放しで誉められるなんて……? これは、ゼツタイ近未来ロクなことがないことの前兆……!?!」

「幾らなんでもその解釈は後ろ向き過ぎるな」

「幸せに……慣れてないんだね……」

憐れむような眼差しを向ける似非猫耳。だけど本当のことだから反論の隙が1ミクロたりとも存在しない、から何も言い返せない……!

「……ふふふつ、じゃあ今から聞かせる少しだけ悪いニュースを聞いても動じませんか?」

「ほ、ほらあ！ やっぱり来た！ キマシタヨー！」

「いや……何で嬉しそうなんだよ」

「うーん……不幸じゃないと安心できないから?」

何とでもホザけですよ、このブラッドのムードメーカーコンビが!

別にそれほど悪い知らせでもないのですが、とラケル先生は絶やさぬ微笑に少し苦いものを交えつつ、その知らせとやらを告知してくる。

「残念ですが……服が完全におしやかになりました……」

「……」

「……それは」

「……何というか……」

「……愁傷さまで……」

「……」

明日から

何着て生きろと
言うのですか。

「服が……爆死……？」

「いや、でも……えー……唯の身代わりになってくれたと思えばさー！」

「そ、そうだよ！ 服なんか幾らだって作れるじゃないー！ この機会にさーもつと可愛い服にすれば？ 何なら私が選んであげ」

「う……ううん……いいよ大丈夫……だた……」

ガツンと頭を一発喰らったような大衝撃。

心の中じゃ既に大号泣。

「両親が……出征前に買ってくれたもの……だったから……」

「……」

「……まあ」

「……ごめん」

「悪かった」

「で、でも大丈夫！ し、仕方ないよねー……ちゃんと防刃とか色々調べて……お父さん元技術系だったからそうゆうの詳しく……あははっ……やだ、何で涙が出てくるんだろ……あれ？ あれ……？」

「泣け。泣いていいよ……今だけな」

「ご両親の愛が守ってくれたのですよ、貴女を」

「そうだよー！」

「うう……」

そのまま私は、暫く撃沈した。

「その代わりと言っては難なのですが、ブラッドの制服がやっと出来上がりましたよ。ジュリウス？」

「ここに」

「そうそう！ お前が寝てる間にな！ 遂に制服が仕上がったんだって！ やつと特殊部隊っぽくなってきたよな!! あとジュリウスごく自然にテーブルの代わりになるの止めろよな」

「却下だ。こうすれば合法的にラケル先生に背中を触れてもらえるだろう？」

「真顔で何かカマしてんだ」

「愛だ！」

「」

即答だった。ロミオ先輩も思わず言葉を喪う。

なるべく隊長の方を見ないように、っと心がけて真正面のラケル先生を見つめることに集中する。

……心なしかまるで女神の様に見えた。

ラケル先生の手が……伸びて触れるか触れないかのスレスレで綺麗に折れたたんである制服を手に取る。

何か変な声が聞こえたのはこの際だから無視。何も聞かなかったし聞こえなかった。

ラケル先生が両手で丁寧とその制服を私へと差し出す。

改めてになりますが、と彼女は前置きして。形の良い唇を開いた。

「ようこそ、ブラッドへ」

突撃！ 隣のサテライト編

phase18 ギルバート・マクレイン

「新しいブラッドのメンバー？」

レア・クラウディウスは妹の私室兼研究室にて一緒に巨大画面を眺めていた。

傍らには彼女の最愛の妹、あまり似ていないとよく言われるラケル・クラウディウスと車椅子が存在する。

「ええお姉様、今日から編入してもらおう予定です」

「ギルバート・マクレイン……どこかで聞いたことのある名前ね」

「恐らく……査問会の議事録では？」

レアは手を顎に当てて少々記憶を探る。

「——思い出したわ3年ぐらい前だったかしら？ 『フラッキング・ギル』……『上官殺しのギル』ね」

「ええ……そして彼は『あの』査問会に一時拘留されていたとか」

「……そんな……やっぱり……」

「本当に……」

ラケルはくすり、と小さく妖艶に笑んだ。

『あの』査問会収容施設で……正気を保って居られるなんて……どれ程の逸材なのでしょう……？ 楽しみですねお姉様……？」

「……ラケル……」



「隊長ー？ 何見てるんですか？」

「隊長隊長ー。唯ちゃんが気にしてるよー？」

「気にしちや悪いのかな……!」

「べつつにいー? というか唯ちゃん、何で目が据わってるのー?」

目なんか据わってない大丈夫大丈夫。……なのに何故でしょうか、この娘じつとりとした半目で私を見てくるではありませんか。

嫌な予感がするので、さっさと隊長に目を逸らす。

「と、というかもう! 隊長は何を見ているんですか?」

「ああ、先ほどラケル先生から賜った新しい隊員の情報だ。今回適合試験を終えて、編入してくるらしい」

「て、適合試験……」

フラツシユバツクするのは嫌な思い出。

「新しい子ー!? やったね隊長! 家族が増えるよ!」

ひやつほーい、と両手を挙げて喜んでいるナナちゃんだが、隊長はやや苦笑気味な表情を浮かべている。

「子、と言うよりは……年齢だけで言うならば誰よりも年長者なんだがな」

と、ナナちゃんと二人で文章だらけの資料を覗く。性別男、名前は多分英語読みでギルバート。年齢は……

「22歳……って随分と……」

祝! ブラッド部隊2人目の二十歳超越者。

「かなり大人つて感じだね。何だろー? お兄さんのな? お兄ちゃんつて呼んじゃう? 呼んじゃう?」

「ナナちゃん……」

きやつきや、とナナちゃんはとつても可愛らしく、かなり喜んでい

る。恐らく彼女は、今度来る新入り隊員氏がお兄さん梓であると全く、これっぽちも、一ミリたりとも疑っていないみたいだ。

だからこそ、言うべきことがある。

「実際のお兄ちゃんなんてロクな物じゃないよ」
「……唯ちゃんの闇は深かった」

失敬な。闇なんて深くない。
ただ事実を述べたまでのことだ。

「……お兄ちゃん、か……」
「……隊長？」

何か隊長が感慨深そうに呟く。

ははあ、と何となく察しはついた。情報が正しければジュリウス隊長はラケル先生の運営している孤児院の出身。となると、彼の人生で『お兄ちゃん』扱いされていた時間が存在した……という可能性も無きにしも非ず。

懐かしい思い出が蘇ってきたのかもしれないなあ、なんて考えてみる。

「俺も呼んでみようかな」

「……なっ!？」

「……え」

畜生外れ申した。

「俺とて、偶には年長者に頼ってみたくなる時もあるさ……って何だその反応は」

「い、いやその……」

「隊長……二十歳過ぎた男のお兄ちゃん呼びつて一体何処の世界の誰が得をすると思ってるの？ 害悪でしかないんだからっ!」

「そ……そうか……そう、なのか……」

「そっだよ！ 自分のキャラを客観的に把握できないんですか？」
「言いすぎだよナナちゃん……」

あからさまに落ち込む隊長。

ここはフオローを……と、思いつつも少しだけ私も期待してみたかったりする。

……隊長だつて、きつと色々大変なのだ。

まあ……大変な理由は主に私のせいでもあるんだけど……。

「でも良いかもしれませんね、お兄さん役」

「ああ、そうだろうか？」

「そんな上手くいくかな？」

「ともあれ、そろそろフライアの方へ移っている頃だろうな……エン
トランスに行つてみるか？」

……という、私たちの願望は脆くも崩れ去つたりした。

バキイ！ とどう考えてもヤバい音と共に、私たちが見たものは
……。

「い……てえ……！ いきなり殴ることないだろ！」

あの人当たりの良いロミオ先輩がぶん殴られて、尻もちをついてい
る姿だった。

「……」

「うわっ!? ロミオ先輩大丈夫!？」

速攻でロミオ先輩へと駆け寄るナナちゃん

……ほらね、だから言ったでしょ……期待なんかするもんじやな
いって。

そして、恐らく一番期待していたであろう人は。

「……………状況を説明して欲しいな……………」

ほら、もう地獄のような顔をしているじゃないですか。

言わんこつちやない。

恐らく彼がさつきまでの期待の新人氏、ギルバートさんだろう。ま
ずデカイ。とても大きい。目測で軽く180センチ以上はあるであ
ろう長身と筋肉質な体。そして紫色の上着を着ている野郎……じや
なくって、青年だった。

第一印象を率直に言う……怖いんですけど……この人……。

デカいし、ロン毛だし、顔に傷まで付いてるし……しかもロミオ先輩殴打してるし……。

正直思ってたよりヤバいのが来ちゃったような気がする。

ギルバートさん、は隊長の方へと向き直った。

「アンタが隊長か？ 俺はギルバート・マクレイン、ギルでいい」

やはりというか、外見からある程度想像出来ていた通りの腰に来る低音ボイス。

「このクソガキがムカついたから殴った……それだけだ。懲罰房でも除隊でも勝手にしてくれ」

じゃあな、と告げた後ギルバートさんは踵を返し去って行ってしまった。

階段の下からチン、と言う軽い電子音。……これは、昇降機を使用したと考えていい。

「……」

「……あいつの元居た場所とか……聞いたただだよ！……アイツ、短気すぎるよ……」

「どうせロミオ先輩がしつこく聞いたんじゃないの？」

「そ……そうかもしれないけど……だからって普通殴るか!？」

「普通じゃないね……多分ね、聞かれたくなかったんだよ」

「そ、そんなの分かるかよ！」

ロミオ先輩とナナちゃんの会話がトントン拍子に進んでいく。

いや、気持ちは分かるけど……

ジュリウス隊長が深く、本つつつ当に深くため息をついた。

「今回のことは不問に処す。だが、戦場に私情を持ち込まぬように関係を修復しておけ」

「え……！ ムリだよあんなの!!」

殴られたことがすっかりトラウマになっているのか、ロミオ先輩はぶんぶんぶんと頭を横に振って全力で否定する。

「……ナナ、唯。お前たちもサポートしてやってくれ、いいな？」

「りよーかいですー！」

「ええ!? 私もですか!?!」

「……頼んだぞ」

そりやないですよ! 隊長!!

……という心の声が届くわけもなく最早死にそうになっている
ヴィスコンティ隊長は落ち込んだまま一人、昇降機に乗った。

去り際に、仲間とは……もつと良いものなんだ……とつぶやいた声
はまさに悲壮感に満ち溢れていた。

そんな寂寥さえ漂わせる背中へとロミオ先輩は愚痴をぶつけた。

「無理だつて! あんな暴力ゴリラとなんてやってらんないよー
!!」

そのゴリラ、という単語にナナちゃんはぴくり、と反応した。

「ちよ、ロミオ先輩……! 暴力ゴリラつて……! やだもー!

あつははははは!」

「ゴリラ……つて……酷過ぎやしませんかね!?!」

「うっせーゴリラだよあんなの!」

ムキになってロミオ先輩は思わずゴリラ連呼。

「なんで連呼するんですか!?! ゴリラつて……もう……ぶつははは
ははははっ!」

「駄目だよナナちゃん、笑いすぎだよ……!」

「そう言う唯ちゃんこそ、なんだか肩がピクピクしてるんだけど?」
し、してないもん……。

「だって新入隊員さんがお兄ちゃんキャラかと思ってたらゴリラキヤ
ラだったんだし! ぶぶつ……! コレは唯ちゃんの鳥キャラと双
璧を成すネタになるよきつと!」

「まだ覚えてたのその鳥ネタ!?!」

「聞いてないの? 唯ちゃんすっかりチキンで定着してるよあだ名
!」

「嘘……でしょ……!?!」

後で聞いた話だが、現在住居区域に一時的に受け入れた『あの街』の
人たちがの間ではすっかり鳥子扱いされているらしい。

……あそこまで鶏に嫌われる人間も珍しい……と。
全く失礼しちゃうお話だ。

「そんなコト言うんならナナちゃんは猫でしょ！」

「ゴリラや鶏よつかマシですー」

「この……似非猫耳の腹出し腹黒娘！」

「似非……ちよつと、ひどいんだけど？ この全自動万年腰引け鶏突っつかれ機！」

「重量級下半身ハンマー！」

「重装甲イカリ肩ゴリラ！」

「見せかけ能天気!!」

「根暗!!」

「おい、お前らが関係こじらせてんじゃねえよ……」

ロミオ先輩が制止の声をあげる。

「嫌だなー先輩。こじらせてないよー？ これが女の子の慣れあい会話だよー」

「そうですよ。微妙な冗談を言い合って偶にガス抜きすることによりお互いの関係を深めようとする……あまり効果の見込めないコミニケーション手段のひとつです」

「……そうなの？ なあそうなの？ 仲間ってそんなもんなの？」

「こんなもんだよ」

「こんなもんですよ」

そう言えば、とナナちゃんはそこに来ている事実を一つ思い出す。

もしくは、そう装った風に尋ねる。

「ねえロミオ先輩、お口大丈夫？ 何かさつき顎、折れるみたいな音してたけど平気？」

……確かにさつきバキイ、ってちよつとヤバげな音が。

「そうですよ！ 凄い音してたハズじゃ……」

「……あ、意外とだいじょーぶだ」

「マジデスカ……!?!」

どう聞いても大丈夫な音じゃなかったけど。

確実にバキってゴキツって……。

「そ、そんな逸話クラスと一緒にしないで下さいよお……」
武勇伝には尾ひれ尻びれがヒラヒラくつつくものだ。誰も頼んでいないのに。

もしくは、勝手にくつつけられているのかもしれない。
くつついたヒレの数は、きつと希望を求める人の声。

——そんな伝説を引き合いに出されるこつちには堪ったもんじやないんですが。

「で、その紫の人何処に行ったか知りませんか？」

「ん？ 何？ 聞いてないの？ 確か庭園……じゃなかったかなあ」

流石富田健次郎フライア警備長さん。有能で本当に助かります。

「よっし……行くよ私！」

「いってらっしやーい」

「マジで頼みます」

その前にまずは、医務室だけど。



本当にお花畑に居やがった。

「……アンタは……さっきの」

「……ど、どーも……」

ギルバートさんは庭園に構築された東屋で長椅子に座っている。

デカイ人だったけど、こうやって座っていることによつて多少は威圧感、の様なものが緩和されていると思つた。

いつ見たつてここは何処か非現実的だ。綺麗で、清廉で、美しい。見るべき現実が暴力と捕食と血に塗れている世界なんてのも笑えないけれど。

いつまでも突つ立ててもアレなので、ギルバート・マクレイン氏の正面にかなり距離をとつて座る。

「俺の処分が決まったのか？」

ギルバートさんの目は、真剣そのものだった。

考えていれば5歳ぐらい上なんだよなあ……この人。

隊長より大人な人なんて今までの人生にそもそも関わったことがない。学校は同年代ばかりだったし、親はまた違うし。仲間として接するのは、恐らく彼が最年長だろう。

……富田警備さんは別枠。

人見知り数値最高潮で、何とかギルさんへと言葉を向ける。

「あ……貴方の処分はですね……ロミオ先輩との関係修復です……！」

下手したらこつちが殴られかねない。

そんな思いがふと浮かぶ。あのロミオ先輩をぶん殴つた奴が相手だ。

でも、と自分に対し言い訳をする。

大丈夫、ゴツドイーターと言えども人間。感応種マルドゥークの炎パンチよつかマシなハズ……。

「ハッ！ そりゃあ、良い」

……。

……あ、アレ……？

「あのジュリウスつて隊長に頼まれたんだろ？ ……案外世話焼きだな」

このゴリラ……。何て綺麗に笑うんだ……。

とても優しい、というか無邪気過ぎて一瞬ビビつた自分が恥ずかし

い。

「あの……ロミオ先輩も軽いノリだったかもしれませんが……きつと、悪気があったわけじゃないですから！ だから……その……」

「ん？ ああ。ロミオって言うのか、アイツ。配属早々につまらないものを見せて悪かったな」

「いえ……」

ロミオ先輩の名前も知らないうちから殴り飛ばしたんかこの紫ゴリラ。

だけどこの人、なんだか悪い人には全然見えない。というより今まで少しか会話をお互いに抱いた印象は……。

このゴリ……人……メチャメチャ良い性格なんじゃないだろうか。

何故か警戒できない。ある意味圧倒的制圧力……!?

初対面にも関わらずガンガンツッコミが（心の中とはいえ）入れられる。

「あのウ……何か問題があったらいつでもドウゾ。私なんかで良ければ……応えられる範囲であれば……」

「……隊長に似て、お前もお節介な奴だな」

「……すみません」

「責めた訳じゃねえよ」

そんなこと顔を見ればわかる。

嘘でもお世辞でもない、心の底から本当にそう思っている——どこまでも澄み切った目だった。

だからこそ、何か罪悪感が増す。

「なににせよ、俺は俺の仕事をごなすだけ。物事は単純明快だ」
「……」

かなり割り切ってるなあ……このゴリ……人。

ベテランさんというのは本当らしい。

「あの時は変な流れになったから改めて言わせてくれ。俺はギルバー
ト・マクレイン」

知ってます。すみません。

隊長がコッソリ資料を見せてくれたお蔭なんです。

……まあ、今のご時世大抵の人のデータは中央データベースに登録されているんだけど。アーコロジー社会を成立させるためには完全管理が必要不可欠。身体データから履歴まで事細かく記載されている。

そして、それらは嚴重に管理されているので一般的には覗くことなどできはしない。私たちがカンタンに閲覧できる理由は極めて単純にして明快だ。

ゴッドイーターだから。

それだつて規制がかなりかけられた状態で、だ。階級が上がってくれば各種権利は解放されるらしいのだけど。

「ブラッドになったのは先日だが、神機使いとしての経歴は……5年程ある。槍はそれなりに使う」

「槍ですか」

出た。ポールタイプ。

制御機構が私や先輩や隊長の使うブレードタイプよりもメンドクサイ奴だ。ナナちゃんのハンマーに次ぐ2人目のポールタイプ登用。

実際使用されるのを見たわけじゃないから何とも言えないが。

「私は……ブラッド隊員の神威唯です。神機使いになったのはつい最近で、長刀、アサルト、バックラーです」

「……」

ギルバートさんがそこで何故か目を見開いた。

一瞬だけ固まったように一時停止する。

「……あ、あれ？ 何か違いました？ あ……ロングブレード、アサルト、バックラー使用です?!」

「いや、そうじゃない。……そうじゃ、ない」

何かあるのだろうか。

……現時点で深く詮索はしないでおく。

「えっと……色々あると思いますけど、宜しくお願ひしますね！ マクレインさん！」

「堅苦しいのはゴメンだ。名前で良い」

「……じゃ、ギルバートさん」

マクレイン氏はそこで何を思ったのか庭園の上——つまり、雲一つない空を見上げる。

「……ギル、って呼んでくれないか」

「……は？」

まさかのニツクネーム強要……？

「……じゃあギルさん……私のことは是非、神威と呼んでください」

「分かった」

「唯ちやー！ーんっ！ わー！ ちゃんと会えたんだねえー！ 良かったじゃん〜！」

「ナナちゃん!? どうしたの!?!」

ここでポーン、と昇降機到着音が鳴り響き快活な露出桃色娘がフィランドに住むという聖なる夜に子供たちに夢と希望を与えに来る伝説の爺にも似た格好で舞い降りる。

っていうかこの娘絶対来ないと思ってたのに。

……もしくはタイミングを読んできたのだろうか。流石ナナちゃん。

「こんにちわー！ 私、ブラッド第二期候補生香月ナナですっ！」

お近づきの印に……どうぞ！ これ！ おでんパン！」

「おでん？」

「き、極東地域に昔伝わっていた伝統料理……みたいなゲテモノですよー！」

「すっごく美味しいから食べて食べて〜！」

ぐいぐいぐいっ！ と執拗におでんパンを迫る香月ナナ！

まずい……私とて伊達にフライアで生きてきたわけではない。少なくとも、おでんパンの犠牲者たちを見てきたという過去がある。

このままじゃ……ギルさんが……！

「遠慮しておくよ。ロミオって奴に渡しといてくれ。悪かった、ってな」

「……！」

躲した!?

しかも全く悪意のない断り方で!? 上手くいなしたギルさん。偶然なのか意図的なのか。恐らくは前者だ。

「……ふうくん……? ま、いいやー。ねえねえ唯ちゃん! 神機修理終わったってー! 良かったね!」

「え? そっか、今日だっけ? やったあー!」

「早く保管庫行こう! ロミオ先輩も待ってるんだからー」
ナナちゃんが私の腕輪を掴む。

視線を合わせて合図する。

……やっぱり、ソレか。

「あの……ギルさん、よろしければコレ……」

そして、ギルさんにソレを手渡す。

さつき、医務室でイワン先生に貰ってきた、回復錠S×5。

だつてさつきの音はヤバかったもんね。

ロミオ先輩は痛くないって言ってるもんね。

……さつきから、ギルさん。ポケットに腕突っ込んだままだもんね。

……つまり、そうゆうことだよね。

「お、お大事にいいいい!!」

「待ってよー唯ちゃんーん!?!?」

黙つててゴメンナサイ……ギルさん。

色々喋ったけど、本当は。

ソレ持つて来た……だけなんです。



痛む手を擦りながら、ギルバートは端末を掴んだ。

そこには一通の電子通信が画面上に表示されている。

それは昨日の日付。バカでかい船に入る前に受信したモノ。

送信元、送り主、件名すべてが無記入。ただ一つだけそつけない言葉が記されていた。

『方舟には辿りつけたか？ ゴリモット』

「全く……」

ギルバートは苦笑を零す。

この世界は暗くて冷たくて、絶望が形を成し、そんなじよそこらをわが物顔で闊歩しまくっている——というのに。

思い起こされたのは5年前の記憶。

今よりもかなり背の低かった、自分の記憶。

『わー！ キミが期待の新人君？ いくつだっけー？ やだ17歳!?

若い……！ というかクリティカル……!』

『……は?』

『ドストライクだよキミ……! 成長してほしくない! ああっ!

でも成長してほしい……!』

『何……ですか……!?!』

——そうだ。

『彼女』もそうだった。

『これは鍛えがいがあるよ。良い素材が来たわ……! 初めまして、

少年。私はここの隊長だよ! と言ってもこの間なっただばかりな

んだけどねー! まあ、そこは新人隊長と新人隊員。仲良くやろう

!』

『……っ! よ、宜しくお願ひします』

『名前は……ギルバート……! 良い名前だねー! じゃあ、こう呼ぼう

! よろしくっ! ギル! ようこそ!』

お節介なヤツというのは、本当に何処にでも居る。

ペーストへの文句が出てくるという素敵な有様。なので最近は食事時間はできるだけ各自バラバラに、速やかに無言で終わらせることが奨励されている。

……凄いの、ブラッドのゴリラ採用枠であるギルさんが一切文句を言わないということ。フライアに転属されてイキナリこの扱いなのに、舌打ちひとつ漏らさずに全部平らげる。

一度だけ、「平気なんですか」と質問したこともあるけど、食べるだけマシだと全く邪気のない瞳で答えられた。

年長者としての意地なのか、それともただ単に底抜けに性格のいい人だけなのか……。もしかしたら前の職場ではもつとひどいモノばかり食べていたせいなのか。真実は不明のままである。

謎と言えばナナちゃんも、そうだ。

「ねえナナちゃん。そのおでんパン……。どこから湧いてくるんだろー……。？」

「え？ 企業秘密だよそんなの！ 教える訳ないでしょー」

「……」

とまあ……。毎回こんな感じだ。聞くな、答えないから。と言外に告げられている気分になる。

こうしてネバーエンディング・おでんパンのお蔭で食料は大丈夫かなーという気もするけれど……。

……ブラッド、まだまだ謎が多い。

「……ねえ、唯ちゃん」

「何でしょうナナちゃん」

「あのですねー、唯ちゃんは、色々一生懸命で馬鹿正直だと思うから言うんだけど」

「ちよつと」

口ケンカなら3割引で買うよ。

「あのね、おでんパン……さ」

「その化学兵器で、もう無差別攻撃するの止めなよ。人道に対する罪だよ」

「受け取る人と受け取らない人、が居るでしょ？」

「……そうだね」

よく見て見るとそうだ、と気づく。

受け取る人、食べる人。奇声を発しながらフラフラと歩きまわる人。おでんパンの禁断症状に苦しんでいる人……。色んな人間がいるけど、一定数受け取らない人というものが居るようにも見える。

「その違いって、何処だと思う？」

「……本能的な危険察知能力？」

「バカにしてるの？」

失敬な、割と本気だ。

「あのね、大抵の人は素直に受け取ってくれるか、あとは笑ってツッコんでくれるんだ。……だけどね、受け取ってくれない人って偶に居るの。そうゆう人ってね……」

ナナちゃんの目は蹲ったままの人を見つめていた。

「何かに、追い詰められている気がする」

「……」

何故か、思い出されたのはギルさんだった。

あの時は気にも留めていなかったけれど、彼は——角が立たないように、すごく上手く断った。

ただ遠慮しているだけなのか、アフリカ大陸にかつて生存したと言われている野生生物バリの生存本能で危険回避したのだろうかと思っていたけど……そんな見方もあったのだ。

何かに追い詰められているのだと——考えることもできたのだ。

「……あのゴ……人も……」

ナナちゃんは答えない。というか、あえて無視されている。

「……」

でも、それだってどうしろと言うのだろう。

今日や昨日に会った人に何ができるって訳でもない。第一……私にそんな力などない。

「何でそんなこと私に言うのかな……」

「えへへ。なんとなく、伝えておきたかっただけだよあんまり深く考えないでね」

「……」

「でもね、放っておくと1人で勝手に背負い込んで……取り返しのことかないことになりそーじゃない？ 私そんなのは嫌だなって思うんだ。……だから唯ちゃんも、気が向いたらでいいから、できるだけ気にかけてあげて？」

深く考えるなど言う方が無理だ。

あのゴリラが何を背負っているのかは分からない。何が彼を追いかけているのかなんて全然見えない。

……何ができるのかも、分からない。

私にできることは、今のところ——アラガミを倒すことだけ、なのだ。



「全員、集まったか」

久しぶり、ロビーブリーフィングだ。

中央の巨大画面に映像が浮かぶ。

……見たところ要塞の様な……かなりデカイ。作戦区域の映像の

様だった。

「旧支部建設予定区になる」

「きゅ……旧」

まるで意味が分からない。

ナナちゃんとロミオ先輩のコンビも同じような感じらしく、どうやらあまり理解が追いついていない様子だ。何だ私だけじゃなかったんだ良かったー……などという、妙な安心感。

「昔そこに支部が建つ予定だった場所……だろ？」

意外なゴリ……ギルさんから、予想外なお言葉が放たれた。隊長がこくり、と頷き肯定する。

「その通りだ。流石だな、ギル」

「……古巣でも似たような話を聞いた」

「ちよつとー？ 訳わかんないよー？ 隊長！ 私たちにも分かるように言ってくださいーい！」

危うく成人組だけで話が進むところだった。

……というか、ギルさんの『古巣』って一体……。

「よくある話だ。フェンリルの本部と世界各地に点在する支部——更にその支部の管轄で一部民間人や傘下企業を疎開された……小規模のアーコロジ―を建設する話があったんだと」

「つまり、ミニチュア版な支部……？」

「ん？ 待てよ？ あった……？」

「過去形だね……」

ナナちゃんの指摘でやつと気付く。

きつと、収容人口に限界が来たからそれを移転……だとか逆に壁の外の人類の救出とか、或は此処、フライアみたいに研究系だけを独立させた形とか……色々と思う所はある。

が、肝心なのは過去形だつてこと。

「大半は資金難で書面の時点で立ち消えになっているっつー話だがな……現存するものを目で見るのは流石に俺も初めてだ」

「へえー……流石玄人サンは違うなーよおっつくご存知で凄いなー。フェンリルのまっ黒そうな黴臭そーな陰気臭エ所も5年も神機使い

やったりやそうなたちまうのかあーあーあー」

「ちよ……やめて下さいよ先輩い……！」

ロミオ先輩は殴られたことがよつつつつつぽど気に喰わないのか、イチイチイチイチ何か言わないと気が済まないらしい。

仲良くしろとは言わないからせめて、皆が一緒なときにやる必要はないんじゃないデスカネ。ねえ、先輩。

が、反するギルさんの反応はと言うと……。

「誉めたって何も出さねえぞ？」

「……」

「……」

「……あー……つづけてジュリウス」

こくり、と隊長が首を縦方向。つまりは重力に従う形で振る。

何か目が『仲良しなんだな』とかちよつと嬉しそうな気がするけれど放っておく。

「大方はギルの言った通りだがひとつ訂正するならば……この立ち消え原因、それは資金難ではなく『エイジス計画』だ」

「エイジス計画……ですか」

またそれかあ……。

すげーデケー計画だった、ということは知っている。その裏で何か色々あったらしいという黒い噂も聞いていたけれどそれじゃあ不満も持たれるだろう。

仮に、そのミニ支部が出来上がっていたのならば、技術だつて前に進んでいたかもしれない。

救われていた誰かが……居たのかもしれない。

「それよか本当に恐ろしいのはさー……よくコレ位でつけーモンを放置できていた、つてことだよな。単純計算で3年放置してたんだろ？」

普通有り得ねえつて」

「やだなく先輩。そんなの決まってるじゃない！ きつと工事とか」

計画とかく……関与した人たちが皆謎の失踪を遂げ……」

聞くんじやなかった。

「うわああああ！ 言ーうーなー！ それ以上言うなー！！ 分かったよもう！ 分かったからあー！」

「失踪……行方不明……ま、またなの？ また硝煙臭いお話が!? もうやだあー……！」

「落ち着け唯！ そうと決まったわけじゃない!! ってかお前らも何か言えよ!?!」

その矛先は辛気くせーフェンリルのキナくっせー部分を知っているであろうマクレイン隊員に向かってシマツタ……！

「ああ……きつと関わった奴らが全員……物凄く口の固い連中だったんだろうな。そうとしか考えられん。コレほどのモンを隠……ん？

何だお前らどうした？」

「……」

「……」

「……」

この人……本当に、優しいんだな……。

「ギルさん……ギルさんが居て、本当に良かったあつ……！」

「は？」

「お前のコト、ちよつとだけ尊敬するわ。そうゆうトコだけな。心から」

「ねえねえギルー？ 今までく一体どんな人生送ってきたのー？」

今だけでも、一瞬だけでも、人間の正しさを信じてみる気持ち……忘れかけていた何かを取り戻させてくれたギルさん……ありがとう。

まあ、掘れば人骨がザクザク出てきそうな予感はあるんだけどね。

「……で、つまりはその奪還だ。先遣隊がその場所を陣取っている

……が、包囲されたという情報が入った」

「はあ……」

「一か月にも渡る籠城戦をしており今のところ大きな戦闘は見られない、とのことだ。我々のすべき点は2つ」

大画面に図と映像が表示される。

映像の方はリアルタイム送信なのだろう、支部の外壁を思わせる巨大なアラガミ装甲の一部が喰われて穴が開いており、そこに申し訳程度に旧型の電磁バリアが張ってあった。

更に、その背後には万が一に備えてか備え付けの自走砲や戦車で戦線が築かれている。

何が問題かは一目瞭然だ。

「この穴を塞げば良いと？」

「ああ、そうだ」

ロミオ先輩やギルさんの表情に硬いものが混じった。

多分、私も似たような顔をしているのだろう。

穴、と簡単に言っただけ……これはかなりデカイ。色々なアラガミが散々食い散らかした後何だと思う。所々溶解しているし、断面図もぐつちやぐちやになり果てている。

こんなデカイ穴を人力で塞ぐのはかなり……。

冗談みたいだけど、それでこそ巨人みたいな……。

「巨……？ そうだ、神機兵……！」

「ああ、そうだ」

「おい、マジか……」

「言いたいことは分かるが続けるぞ。我々が行うべきは2つ。1つはこの『内部』に人員と物資を供給、つまりはこの壁の中に兵員を送り込むことだ」

その兵員つて間違えなく我々のことですよ、隊長……。

「2つ目は修復作業のオラクルソースの提供と採取——結局はいつもと同じさ。アラガミを狩ってコアを採取する。それだけだ」

「……はい」

「何だかなあー」

「隊長—なんでそんなの引き受けたの—……？」

いや……まあ、多分本部からの命令だから拒否権なんかないのだろうけど。

「本来ならば、支部になるはずだった場所だ。立ち消えになったとは言え、基本的な設備は整っているだろう。……であれば」

「あっ」

「……そっか、それなら……！」

そのままサテライトに転用できる——と、いうことだ。

今フライアは……半分は私のせいなんだけど……大量に難民を引き連れている状態だ。ちよつと前に色々あって、人乗せて……ついでにその話がどつから広まったのか、フライアを頼ってくる人間も集まるようになっていいる。

今のところはそれで何とかなっているかもしれないが、いつか絶対に——限界が来る。

「この『領土』を人の手に奪還した暁にはフェンリルが今乗せている避難者全員の居住許可が下り、ここをサテライトとして正式に認める、という話を取り付けた。……ここまでだ、俺たち出来る事は」

「……はい」

「流石隊長！　すごい！　何時の間にか問題が解決——！」

「そんなこと……いつやってたんだよー」

勝手な話、かもしれない。

……でも、本当にここまでのんだ。私たちが……フライアのゴッドイーターが、『彼ら』の為に何かができるのだとしたら。

とりあえずの安全と、食料の配給。フェンリルの発行する身分証明書。

いわば、籠の中の鳥になれと言ったようなものなのかもしれない……けど。

何かを選ぶには——まず、生きなければならぬのだ。

「ただ一つ、『不安要素』があるので通達しておく」

「ふ、不安要素……」

また不穏な言葉が……！

隊長がそんなネガティブ単語言うんだからよっぽどのことではないかと思うけど……でも、負けてなんかいられない。おっしや来い！不安要素なんか受け止めてやりますとも！とか決意を固めていたんだけども。

「発案、計画、協力、提供……ロシア支部……」

「……」

「……」

「……」

「……そうか、分かった……」

私の決意、一気喪失。

「無理です!!!」

「オブライトオブライト!!」

「お、おでんパン食べて落ち着かなきゃ……!」

「だ、だって相手は『あの』ロシア支部ですよ!? 超絶ブラックで有名なロシア支部ですよ!? いいえ、ブラックなんてもんじゃないよ、あそこはむしろダークネス!!」

「分かったから落ち着け! オレだって泣きてーよ!! ってかダークネスとか言うな! 忘れられなくなっちまうだろ!」

「だ、だって……! だって相手は! あの……! 3年前にいち早く新型を導入しておいて真っ先に極東に研究者ごと持っていかれたロシア支部ですよ!」

「た、確かにそうだけどさ……! でもほらアレだよアレ! 相手が——例え極東のパシリになり下がっててエイジスン時に絞られるだけ絞り取られていたあのロシア支部だとしても!」

「何かねーやだねー……だって……ロシアと言ったら『あの』びみよーな結果に終わった大掃討作戦の場所でしょー? ……それ

よっか、ロシアの美味しいものってー何だろー？ ピロークとか、ピロシキかな？」

「極東やアメリカに次ぐ激戦区のひとつと聞いてるぜ。兵員の腕は確かなんだろ？ そいつらと合同なら心強いな」

ギルさんだけが、ロシア支部の肩持つてる。

「……総員気持ちは分かる……とりあえず、遺書の準備は忘れるな以上だ」



と、言われても……だ。

「遺書……なんか書けないってば……」

目の前の白紙を見つめながらぼやく。

一応、フランさんから便箋と手引きは貰ってきたけれど、考えてみたら私に財産はほとんど存在しない。あつてもフェンリルの条項に従って遺産分配や遺品、そう言ったものは未成年の場合大抵は全部親元か肉親、保護者に行くようになってる。

特に私の様な両親が健在な場合は確実に親。

一応渡したくないモノ……っ、机の中の2段目の引き出しに入っ

いるものとか……ターミナルのデータとか、そうゆうものは、もし私が戦死した場合には、一時的に指揮官(この場合はピクニック隊長)の管理下で処分してくれるらしいし、選ぶものもない以上特に書くこともない。

と、なると。

「やつぱり……」

つまり、本当の意味での遺書。

家族に遺したい言葉はあるか、ということ。

「……」

……どうしよう、ない。

「……仕方ない、例文集からランダムに組み合わせせて……」

まず、書き出しを選ぶ。①に書いてあるお父さん、お母さんへの文章を記入。

次に18ページまでめくり、2段落目を選ぶ。そして次は27ページ目の3段落目を……。

「ねえねえ！ 唯ちやーん！ 書いたー？ 見してー！」

「ナ、ナナちゃん!! ナニヲイツテルノ!? あなたは!?!」

「良いじゃん」

「ちよ……」

ひよいつと、とても身軽なナナちゃんは私の手からいとも簡単に手紙を奪ってキラキラと必要以上に輝く目で一読する。

そして、案の定。

「……なにこれえ」

非常につまらなそーな顔になる。

当たり前だろう、だってソレ、至極適当に書いているんだから。面白くも何ともないと思う。

「ちよつと唯ちちゃん? コレは幾ら何でも酷いんじゃない?」

「だ、だって……何書けばいいのかわかんないし……お金とか物とかないし……」

「だからって遺された文章がこんなってさ……ちよつと唯ちちゃん? 真面目に死ぬ気あるの!?!」

「ないよ?!?!」

当たり前だが、私は出来るだけ死にたくないのだ。
絶対死なないという自信なんか無いし、強い意志もないけど、死にたい訳なんか無い。

それが人間、というか生物だと思う。

「唯ちゃん、ってさー。基本的に悲観的でマイナス思考でずるずるウダウダグダグダの根暗っ子だけどさー、変なところで楽観的だよね。というか甘いよー? 自分は死なないって思ってるんでしょーどーせ。そうゆうの『油断』って言うんだよ?」

「うっ……」

当たってる……ような気がする……。

「そんな風に甘えてていいと思ってるの? そりゃ私たちは隊長とかーラケル先生とかー局長とかに甘えていい立場だよー? 責任とかまだそんな背負わされてないんだから」

「……はい」

確かにそうなんだよなあ、まさに……この状況。

前だつて勝手に一人で突っ走つて……結局は皆に助けに来てもらつた。後先考えないで痛い目に遭つたのは私もだけど……巻き込んだ結果色々迷惑かけちゃつたのだ。

で、しかも今度はその事態の収束まで隊長にやつてもらふ始末。

本当下思いな組織だよフライア。

「だけどさ、やっぱり自分の命は別じゃない? 自分の命に対して責任を取れるのって、やっぱり自分自身だけ……なんじゃないかな?」

「……はい」

「だから、真剣にならないとね! 隊長みたいにみんなの命背負ってる訳じゃないんだもん! それにね、唯ちゃん」

「……」

「死ぬことから目を逸らすことはね……生きることから逃げることに、同じだつて思うんだ」

「……うん」

……やっぱり、ナナちゃんはしっかり考えている……。ただのおでんパン娘だと思っていただけけど、それだけじゃない。意外としっかりしてるし……。周りの事だって、本当はすごく良く見ているんだ。

自分のことばかりで手一杯な私とは、大違い。

……と、こうやっていつもの自己嫌悪に陥りそうになる。

反省と自己嫌悪は違うのに、なんでいつもこうなっちゃうんだろうか。

「で、私のコレー」

「い、良いよナナちゃん……。そう簡単に人に見せるものじゃないでしょ……。そうゆうの……。って!? え!?!」

口では嫌と言いつつも、身体は実に素直だった。

そこには、ハッキリと書かれていたのだ。

うつすら桃色に染めてある紙に、赤いインクで……。あまり綺麗ではない字が——いや、狂乱一步手前、とても精神的健常者が書いたとは思えないような絶妙な狂気具合で乱舞している。

『世界が、おでんパンと笑顔で溢れますように……。』

右下には幼稚なタッチだけど、何故か虚ろな眼差しを持った人々がおでんパンらしき物を笑顔で飲み込んでいるという更に怖いイラストまでついている。

「どうしたのコレ!?!?」

「これがね……。遺したい、大切な言葉」

「真剣に向き合った結果がコレ!?!?」

「うん！」

何か色々大絶滅してる。

「私が死んでも……おでんパンには生き残って欲しいんだ。おでんパン食べて、笑顔になれば、きつとみんな幸せになれるんだよ」

「そ、その笑顔死んでるよ……!?!」

「そして世界がおでんパンと笑顔に溢ればきつとみんなアラガミなんか怖くなくなるんだよ？ そのまま笑顔で総員突撃！一挙殲滅！こうして世界に平和が戻るのーす！」

「何その光景?!? 世界の終末?!? 人類の終焉?!?!」

「未来を切り拓くのはいつだって人の意志なんだからっ！」

「そんなナナちゃんの歪んだ遺志に支配された世界なんか見たくないんだけど!?!」

「……そのためにはもつと、おでんパンを改良しないと……こんなじゃまだまだだよー……シアワセが足りてない」

「ま、待って!?! 待って下さい!?! どうしよう……私、人類の未来の為に……このまま貴女を放置しちゃいけない気がする……!?!」

「そんなことないよ?」

「あるよー!」

ナナちゃんは一体どんな闇を抱えているのでしょうか。

甚だ疑問ですね。

このままじゃいけない、と思ってナナちゃんの手を掴んで走る。

「隊長ー!?! 聞いてくださいこの女……!?!」

「何ー? 何なのー!?!」

ガツン、とアポなしで隊長の私室へと突撃強襲。

ブリーフィング中だったのか、ロミオ先輩も居た。二人で文章をつつき合っている。

「あ、会議中でした……? 失礼しましたあ！」

「センパイー!」

「何だよお前ら……どうしたんだよ……!」

「何かトラブルか?」

いや、そうゆう訳じゃないんだけど……。

とも言いにくい。ここはテキストに理由を構築してみる。

「あの……すみません隊長、遺書が全然書けなくて……」

「そうなんですよ隊長ー！ 唯ちゃんってばひどいんだよー？ 例文集丸写ししようとしてたんだよー！」

「あとナナちゃんの遺書が間違えなく倫理的な理由から検閲対象でー！」

「何だよその倫理的な理由って……」

ロミオ先輩がジト目で呆れたようにつぶやく。

その現実を突き詰めるべく、ナナちゃんの手紙を見せることにした。

「ちよ、やーめーてー！ やめてよ唯ちゃんっ！ ……は、恥ずかしいよー!?!」

「今更……何を言っているのです？ さあ、見ちゃってください先輩ー！」

「や、やだー！」

嫌よ嫌よも好きの内！

さつきとは打って変わって無駄に絡みついてくるナナちゃんを抑え込みながら先輩に用紙を見せつける。

ロミオ先輩の翡翠の目が馬鹿らしそーにして、それを一読。次に驚愕、やがて恐怖へと塗り替えられていく。この人割と感情がすぐに表情へと変換されるから百面相みたいで面白い。

「……燃やそう、ジュリウス」

「何故だ、良いと思うが？」

「先輩……酷いっ！」

「良かったあ……信じてましたよロミオ先輩！」

急に不自然に涙ぐむナナちゃんは放置。

どうせお得意点なウソ泣きでしょ。人の涙腺がそんなにご都合主義な訳がない。

「コレやべえよ……!?! 読んだ人間の精神を間違えなく浸食する力があんどコレ!? 悪いことは言わねーから書き直せ！ もう頭から離

れないんだけど!? 今日の悪夢はコレで決定なんだけど!?

「ですよね?!?」ですよねー! やっぱりそうだよナナちゃん……!」

正義は勝つ! だから人は明日を信じ! 正義が負けないからこそ前を向いて生きれるんだよ!!」

「人のこと悪の大魔王扱いして……いいもん! 明日の唯ちゃんの朝ご飯に下剤混入しちゃうんだから!」

「ご、ごめんなさい言い過ぎましたあ! 何でもするからいい、命だけは!」

と、色々やっている間にも隊長は何故か真顔のまま、ナナちゃんのを見つめていた。

不意に、何か思いついたように閃く顔つきになる。

「……分かったぞ、ナナ。挿絵の右下の人物だが腕が3本生えている。これでは、まるでアラガミだ。修正しておく様に」

「……はい」

黙ってれば絶世のイケメンなのに……。何かもう……。もう……。

「で、お前の方はどうなんだ」

「……あ、私ですか……その……書けなくってちよつと……」

「書けない? なんでだよ?」

ロミオ先輩があっけらかん、と言う。

「あまり難しく思い詰める必要はない。……遺したい言葉を書けばいい。たとえ、自分が居なくなった後でも……誰かへと伝えたい言葉を書けばいい」

「……って言われても」

「というかお前家族居るんだろ? じゃあ家族に向けて何か書けばいいじゃん」

「そんな……カントンに言わないで下さい……」

むしろソレができなくて困っているのに。

だが、そこでふと思う。

先輩達はラケル先生の運営する孤児院出身だと聞いた。……と、いうことは家族や肉親はもう、この世には存在していないということだ

ろう。

もしくは、もう手紙を出せるような状況ではないと。

「先輩たちは……先輩たちの、あの……どこに届くんですか」

「オレらの分ー？ そらマグノリア・コンパスだろ」

やっぱ孤児院に行くのか。

……そっか、やっぱそうなんだ……。

「つてことはナナちゃんのそのヤバイのを夢も希望も未来もある無限の可能性を秘めている子供たちに見せると言うの……!?!」

「なにがもんだいかな？ よくわからないよ？」

「それだけじゃねえよ、きつと未来永劫語り継がれていく類のシロモノだったの」

「やだ〜そんなの本望だよー!」

……それはあかん。あかんよナナちゃん……。

隊長が、やれやれ、と仕方なさそうに笑う。

「ロミオ、ナナ。少し待ってやれ。こいつは俺たちとは事情が少々異なる。……確かにすぐに死後のことを考えろと言われても困惑するのは当然だろう。……急ぐ必要はないさ」

「そーそ！ いざとなったら代筆だ!」

「遺書ですよね……?」

「知ってるかーない話じゃないんだぞー？ 適合試験時の事故って死んじゃった人の代わりに代筆するって話もあるんだぞー」

それは流石に嫌だと言うか……。

「ほーら、もういいでしょ！ 唯ちゃん。もうお邪魔タイムは終わリだよー？ じゃー失礼しましたー!」

「気にすんなよ。イキナリ言われて書けるもんじゃねーよな普通は。……さージュリウス続けるぞ」

「頼む」

ナナちゃんに背中を押されて部屋を後にする。

先輩と隊長はこれからブリーフィングを再開するらしい……そう
だ、暇なのは私たちだけなのだ……。

「フェンリル極致化ぎじゅじゅ……くっ、また噛んだ……!」

「よし、分かった……落ち着けジュリウス、お前は何でも憎ったらしい程やればできる奴だ……慌てず騒がず冷静にもう一回行こう」

「分かった……よし、フェンリル極致化技じゅちゅか……! クソっ……」

「……なー、もう諦めて最初からフライアで良くね……?」

「駄目だ、初対面が大切なんだ……ここでコケたらまるで意味がないんだ」

「……じゃ死ぬ気でやれ」

「フェンリル極致化技術開発局所属『ブラッド』……言えたぞロミオ!!」

「言えてない。おいしい」

「何……!?!」

「……」

「……うわ」

何やってんでしょうかね、彼らは……。



結局、フェンリルの居住区画に戻ってきた。

いつ見ても本当にここはスゴイ。何だって町を丸ごと一つこぶち込んでいるのだから。少し前まで、かなり瀟洒な感じの街……という雰囲気だったこの場所も。

今じゃ人口過多で何となくゴダゴダしている。

そこらへんに段ボールだのコンテナがごった返していし、フェンリルマークの輸送ケースも転がりまくっててどれが開封済みなのかもよく分からない。

……まあ、忙しいのは誰だって同じということの証左だろう。

「で、まだ1ミリも進んでない進行状況」

「言わないでよお……」

だって書けないもんは書けない。

「本当に？　だって唯ちゃんこの間死にかけてたでしょー？　あの時も何も思い浮かばなかったとか？」

「……」

……何も考えてなかったなあ。

「はあ……万策尽きちゃったねー……」

「……」

ナナちゃんが今の状況を明確に言語化した。

二人揃って長椅子に腰かけつつ、何となくぼーっとしていると、足元にコロコロと何か転がってくるような物体を発見。足先を見ると小ぶりで、固くて、金属質な物体が目に入る。

……間違えない、コレは……。

「スタグレ……」

どっかしらに転がってるな、コレ……。

一応武器なのだから、そんなに転がってて良いものではないはずだけど……。しかし、ここが研究施設兼軍事基地なのだということを考えれば……。

……いや……やっぱ、鑑みても、アウトだと思う。

「すいませーん！ ソレ拾ってくださいー……あ、何だ唯さんとナナさんだー」

「何だって何……ってアレー？ 健太君ですか!？」

「何だかお久しぶりだね〜はい、おでんパンー！」

「いらない」

あつさり、おでんパンを拒否されたナナちゃんはショックを受けたらしく、袋ごと遙か彼方まで逃げていつてしまった。

その拒否権を発動できた子こそ……。いつぞやの黒蛛病の少年、如月健太君だった。

電動車椅子の扱いがすっかり板についてきたらしい。ただし、服装はもう病院服ではなく、普通の服になっている。

だけど、手や腕は未だに包帯でぐるぐる巻き。

……と、いう事は『そう』なのだろう……まだ。

「君こんなところに居て大丈夫なの……!？」

「全然平気ですよ？ 何かこの所体調が良くて！」
につこりと笑う少年は快活そうだ。

……というか、むしろ健康そうにも見える。

「あ、でも接触厳禁ー。唯さんソレ投げてー」

「……はい」

「ありがとうございますー」

下投げでかるーくスタングレネードを投げる。
それを少年はキャッチ。

……かなり回復してるよね、この子……。え、何そうゆうものなの？
そうゆうのものなの??

最後にあつた時にはほとんど死にかけていたような気も……。

「イワン先生がねー、少しだったら外出ていいって言ってたんだよー。
で、先輩さんとかに連れまわして貰ってさー……もうおれフライアの
プロだぜ！」

「超回復してる……」

「治ってないけどねー！　でも今は色々やることあつて楽しいし」

「やること……?」

「うん！」

健太君は首から下げていた紐を上げて、見せてくる。

その紐の先には……形が崩れて、若干溶けて……それでも何とかし
て誰かが一生懸命復元したであろう。
赤い腕輪がぶら下がっていた。

「……」

ヤベエ……これ……コレ……！

「唯さんと会長さんが一生懸命取り返してくれたんだろー？　これ、
父さんのだつて！」

「……あ、あの……健太君……こ、これ……これね……私……」

「ありがと、唯さん」

「……」

罪悪感が昇り飛竜……。

だつてコレ……パクツとしちやったブツであり……。

……そして……その……。

「アラガミに捕食されてたのを取り返してくれたんだよね！　ありが
とー！」

「……………イイエ、ドウイタシマシテ……」

……そうゆうことにしておこう。

真実は海ではないから、全て飲み干すことができるのだ。喉元過ぎれば熱さも苦さも全部忘却することが出来る。

それに、形見になった腕輪を大切そうに持っているこの子が相手に真実を告げることは、今は保留しておこう。

……それでも良いハズだ。きっと。

「帰ってきたときはバラバラで、すっげー落ち込んだけどさ……ハカセがさ！ 治してくれたんだ！」

「ハカセ……？」

「うん！」

フライアで博士、と言えそうな人物を思い浮かべてみる。まずは、我々ブラッドのオーナーにして、発起人。マグノリアIIコンパス創設者でブラッド3人の育ての親、そして……隊長の女神。ラケル先生。

次にそのお姉さんで神機兵の開発部長をやっているらしい……少し前に局長の局部にローキックかました美女、レア博士。

私がパツと思い浮かべることのできる人物はその2名くらいなものだけど、その他技術職は白衣の人間も多いし……この少年から見れば皆どいつもこいつも『博士』に見えるのだろう、とも思う。

「ハカセは色々教えてくれるしー世話んなってるんだーおれー」

「……そうなの……？」

神機兵の実験投入の迫るこのクツソ忙しい状況下で病気の子供の相手をしてあげられるような聖人が……正直フライアに存在しているとは思えない。

じゃあ一体……と考えてみる。

「何か教えてもらってるの？」

「うん、ハカセ凄いなー。大人だし、綺麗だし、美人だし。あと優しいし。ラケル先生の次位に凄い人だって思うよ」

「……」

既に精神汚染済み……こっちは……もう手遅れ、なんだ……。

「スタングレネードの構造とか教えてくれたんだ！ あと『へんしよ

くいんし』？ だっけ……？ 何かそうゆうのも色々教えてくれるし」

「……」

何か段々心当たりが付いてきた。

その予想に違わず、一人の女性が姿を現す。

……やっぱり、20才を少し過ぎた位の黒い長髪に青い目の女性だった。

「ハカセだよー唯さん」

「……お久しぶりですね……」

「……はい」

そうだ。

彼女は……元々、フェンリルの科学者だったのだ。

「……あの時は……助けて頂いてありがとうございました」

「い、いえ……その……何かすいませんでした……」

……簀巻きだか何だか色々ひでえコトしたような気がする。

そこからしばらく、間が開いてしまう。

極めて近い距離に居るのにお互い黙ったまま、というのは余程信頼し合っている仲でない不安を催す。

特に……女にとってその沈黙時間は腹の探り合いだ。だけど、この人とはもう、そんな勘繰り合いなど繰り広げたくはない。

と、というか、相手はフェンリル本部相手に自分の生死すら隠して生き延びてきた人間。勝てる気がまるでしない。

「あの……色々、不自由何かはありませんか？ 大変じゃありませんか？」

「……いいえ。むしろ前よりもずっとずっと、安全で安心ですよ……皆にとってはい」

その声色はどこか寂しそうだった。

「全員分に配給が来る。アラガミに襲われなくても良い。子供たちに

は……初歩的な教育まで受けさせてもらえる。大人だつて……手が足りないからでしょうが……仕事を貰える。元々、皆さん我流で通してきた所が多かったですから、ちゃんとした機会に恵まれて前向き始めていますよ」

「……」

フライア……スゲエな。

「皆もう、迷いながらも自分の道を見つけている様です」

「……そうスカ……」

この人は、どうなのだろう、と思った。

流石におでんパン測定なナナちゃんじゃなくても分かる。

この人も、確実に何かに追い詰められている側の人間だ。

「あの子は強いですね……」

「……」

「さつさと病気を治して……故郷に帰るんだと言っていましたよ。

……それが当面の目標だと」

「……」

黒蛛病の死亡率は……现阶段で100パーセントと言われている。

その事実が深く胸に食い込んでくる。

「幸い、あの子の進行具合は……過去の罹患者のデータと照合しても遅い様です……その原因は、恐らく」

「……原因？」

戻ってきたナナちゃんがおでんパンを無理やり健太君の口の中に突っ込もうとしていた。

車椅子の健太君は必死にディフェンスしようとしている。

そんな戯れる2人を、少しだけ遠くから見つめつつ、彼女は口を開いた。

「あの子は……生まれながらにして、偏食因子を持っている」

「……はあ!？」

静かにしろよ、と言わんばかりの冷たい眼差しで射すくめられ、開

いた口を慌てて閉じた。

「恐らくはP-53型。……冷静に考えれば、たった十代前半の子が、『壁』の外に追い出されて生きていける確率はごく低い……ですが、事前にアラガミの危険を察知できるとしたら？　そして……生まれつき、並の人間よりも身体能力や生存能力に長けていた、としたら」

「……」
「聞いてみたのです。……あなたの御父様が、いつから神機使いだっただのか、と」

「……」

「あの子は応えました。『ずっと』そうだった、と」

「そんな衝撃の真実を聞かされても……」。

「困る、というか怖い。」

「……聞くんじゃなかったあ……」。

「貴女には恩があります。ですから……これだけは伝えておきたかった。理論上言われ続けていたけど、その証左がたった数例しかないと言われた……ゴッドイーターの遺伝子と偏食因子。これは間違えなく遺伝します。どちらの父親、母親、染色体由来かは分かりませんが間違えなくDNAを食い破つても入り込んでくる。これを、神の祝福と取るか、呪縛ととるかはお好きにどうぞ」

「……じゃ呪縛の方で」

「ブレませんね。そして……フェンリルが、その様な事例をいつまでも野放しにするはずがない」

「彼女は、膝の上で拳を握った。」

「……良くて抹消か。……悪くすれば生きてまま検体にでもされるでしょう」

「その目は過去を見つめていた。」

「……以前口にしていた。『抹消』された過去を。」

「……サテライト拠点なら」

「自分の意志とは無関係に口を開いていた。ひとつだけ、可能性を思いついたのだ。」

「……浅はかかもしれないが、今はその可能性に縋ってみたかった。」

「……独立自治が認められる……らしいです……」
「……」

「そこでなら、きつと……その場所なら……隠せると思います。あの子のことも……貴女のことも」

彼女の濃い青い目が、驚愕の様なモノに彩られていた。

だろうな、とも思う。

自分でもビックリなのだ。こんなに強い言葉を吐ける……そのこと自体が。

……こんなに強い気持ちで、何かを思えることも。

「だから……待っててくれませんか？ 私一人じゃ無理だけど……全然、自信なんかないけど……。でも、作って見せますから。あなた達が——生きてて良い、って場所を」

その人は、一度だけ何か思いつめたように目を閉じて。

やがて小さく、お願いします。とだけ私へと言った。

「ゆーいーちゃん？ もういいー？ 健太君定期検診の時間だつてー」

「は、はい！ もう大丈夫だよ!!」

「ハカセさんも早くー」

無駄に元気よくおでんパン攻防戦を繰り広げていた二人から、そんな声が響く。

ハカセ女史が健太君の元へと歩き出す。

去り際に、彼女は一度だけ私の方を振り向いた。

「何？ まーた厄介事に首突っ込んだの唯ちゃん？」

「突っ込んでないよ……っっていうかとつくのとうに巻き込まれてるよ。私ら。命令とか任務って形で」

「まーそうだよね！ うん！ グタグタメンドクサイことは考えずに
気楽に行こうよ」

だってそうでしょ、とナナちゃんは言う。

「人の『意志』だけは……自由なんだから」

「……そうだよね」

私たちに、自由はない。

任務にしても、命にしても。

それどころか、偏食因子なしでは生存さえできずに……神機に食い
殺されてしまうことになる。この腕の枷が目に見えるその証拠だろ
う。

だけど。

ナナちゃんの言った通りなのだ。

命と、心。もしくは意志。

それだけは、自分の自由であり……自分だけの、責任だと思う。

今、何も持っていない私の……ほぼ唯一の財産として。

だから、ちゃんと遺しておこうと思う。

P—53 偏食因子の話聞いて、私の頭の中に浮かんだことは……
かなり馬鹿っぽいとは自分でも思うけど、こんなことだった。

ちゃんと『遺る』んだ——と。

ゴツドイーターが遺せるものはきつと、少ない。

どんな死に方をしたにせよ……アラガミの餌になったり、神機に捕
食されたり……または、いつかの『彼』のような最期だったりするけ
ど……もし、体が帰って来られなかったら、それはそれで……凄く寂
しいと思う。

この理不尽な世界では、人の命はどうしようもなく軽いけど。

それでも、何も準備しないで……遺された人たちへと私なんかの命

の重みなんか、背負わせたくはない。

結局、隊長もナナちゃんもロミオ先輩も……フライアに居る皆、結局は凄くいいひとたちばかりだから。

……彼らが、そういったものに、追い詰められてしまわないように、と。

何となく、そんなことを考えながら……万年筆を取った。



数日後、フライア、エントランスにて。

我々ブラッド一同は——カッチリと制服着用を義務付けられて、整列していた。

ロミオ先輩曰く——初対面は大事だろ！ ……らしい。やがて、輸送機が3機ほどやってくるのが見えた。

彼らこそが、今回協力してくれるという、神機使い達だ。

輸送機の舷梯がガンガン、と踏まれていく。

現れたのは4名の神機使い達。

思わずゴクリ、と生唾をのんだ。

隊長が一步前に踏み出して、お手本のような完璧な敬礼で迎える。

「フェンリル極致化技術開発局所属『ブラッド』隊長。ジュリウしゆ・
ヴィしゆコンテイでしゆ」

「……」

「……」

「……」

「……」

隊長……噛んじゃった……！

「えー……ロシア支部所属特殊遊撃部隊『スネグーラチカ』隊長……
アーサー・クリフォードでしゆ……」

「……ヘルマン・シユルツ」

「オリガ・アンドレーヴナ・メドベージェワですー宜しくブラッドの皆様
さんー」

「僕は栄えある極東支部第一部隊所属……エミール・フォンシユト
ラスブルクだッ！」

鳴り響く不協和音とこみ上げる不安感。

それだけが、暫くその場を征服していた……。

phase 20 彼らの望む物

「凄いな、人多いんだなフライアって。スゲーシデケー。支部が1個町ごと移動してるみたいに見えるぞコレ」

「そつスカー？ まあ、今は色々あつて人が多いんスけどね。でも、最大収容人数はもーちよい余裕があるつばいツスよ」

「凄すぎるな!?!」

「でしよー」

……と、まあ、予想通り。

ロシアの隊長さん、アーサー・クリフォード氏さんと我らが先輩口ミオ・レオーニ氏はすぐに打ち解けあつた。あの自己紹介ならぬ事故紹介……もとい、顔合わせで唯一空気をよんだ人物であり、ぶつちやけ赤毛という——全くの偏見にすぎないのだが——第一印象からして、何か人懐っこいような暑苦しさな人だなーと思っていたら案の定そつち系だったというわけだ。

同じく人懐っこいロミオ先輩とは意気投合して……しかも、どうやら先月アーサーさんも19歳になったらしく、早々にして19歳同盟を打ち立てて居たのを、ガッツリ目撃したりもした。

正直見ても誰も得をしなかったのだが。

「流石本部直属だよなー。小物一個取つてもロシア支部よつか全然モノが良い！ ここアレもあるんだろ？ あのー……神機兵って奴」

「あー、そうそう！ 知ってたんスカアーサーさん！」

「知ってるも何もありませんよ！ アーサーさんつたらいつも『シルブプレ？』なんですよロミオさん！」

「お、おいオリガ！ 言うなよ！」

「良いじゃないですか別に。どーせ皆バレるんですからー……そう、きつと、いつか」

「だからってバラすなよ!!」

「えー？ いいじゃんシプレ。何だよ好きなら最初っからそう言えよー、俺も大好物ツスよ!!」

「……マジ、かよ……！　ロミオ……！　やったぜオリガ！　同志が増えたよ！」

「あっちゃー、ヤツベえーここも汚染地区でしたかそうですか。感染さないで下さいね」

「人を病原菌みたいに言うんじゃねーよ！」

「病気じゃないですか。主に頭と心と精神が」

……と、まあ上官に対して色々容赦のない女の子がオリガちゃん。

ラケル先生よりも色の淡い金髪に深い緑の目がくりくりとしたいかにもロシア美少女、といった感じの子だ。長い髪は頭の両側でツインテールにい結っており、黒いリボンで纏められていた。

そして……スラブ系らしくかなーり発育の良い……分厚い胸部装甲をお持ちになっている。

……年齢、2こも、下なのに……。

全体的に小柄なのに、手足は長くて細くてどっちかと言うとすらつとして綺麗。

……なのに、胸だけが……デカいって……反則でしょう。……人類的に。いや、別に羨ましくなんかはない。

羨ましくなんかない。

「情けなっ！　……うちの隊長こんでごめんなさい、神威さん。香月さん。……ってかアーサーさんももっとちゃんと隊長っぽくしたらどうなんです!？」

「う、うるせー……オレだって努力してるんだぞ……!？」

「はいはい、吠えてろ。結果も出てないし、特に誰の役にも立っていない。ただ続けても空気中の貴重な酸素を消費して二酸化炭素を排出し続けるだけの無駄なこと極まりない作業ならやっていますよね？」

「オリガ——ア！」

アーサーさんの精神がゴリゴリと削れていくのがよく分かる。

「ま、まあ……スミマセンと言えばうちの隊長もね……?」

「そんなことないですよ！　ブラッドの隊長さんって……どっかの誰

かと違って凄くカッコイイし背高いし、どっかの誰かと違ってイケメンだし、顔立ち整いすぎてるし、やっぱりどっかの誰かと違って大人っぽくて真面目だし、その上どっかの誰かと違って階級高めでお金持ちっぽいし！」

「他人のこと誉めるのはいいがさりげなく俺のこと貶すのやめてくれない!?! なあ、やめてくれない!?!」

「何ですか、自意識過剰ですよアーサーさん。誰が貴方の事なんか貶すんですか」

「お前だよ!!」

仲良いな……ロシア支部……。流れるような罵倒が最年少っぽいオリガちゃんから隊長であるアーサーさんへと紡がれる間、もう一人の隊員——ヘルマン・シウルツさんはあまり口数が多くないタイプの人間なのか会話に加わろうとはしない。だが、黙っていても親密な空気が十分に感じ取れていた。まるで……横で子犬が2匹じゃれ合っているのを見ている飼い主みたいだ。

情報によると、ヘルマンさんは近接系短剣型使用の典型的な前衛らしい。右目に眼帯をつけていることから……視界に若干ハンデがあるのではないかと予測できる。また、彼は銃形態での戦闘が見込めない分……リンクバーストもできないと考えていいだろう。

そう、彼らロシア支部の派遣ゴツドイーター達は……『第一世代』、俗に言われている『旧型』使いだっただ。

「ですってよー? 隊長ー? もう皆気にしてませんかー? ほら元気だしてくださいよー?」

と、私は手を拡声機型にして呼びかける。

部屋の隅の壁で体育座りでしよげ込んでいる……ウイア・レジアに。

「やっべえ……まだ落ち込んでんのかあの人……」

「後からジワジワくる系なんだよなあ……ジュリウスって……しかも下手に練習重ねちゃったからその分……」

「成程ですね、でもまあ、どっかの誰かと違って超絶イケメンだから許されますよね！」

「だーかーらー！ もういいんですよ隊長！？ ほら皆謎の記憶喪失に陥りましたから！」

……返事がない、ただのピクニックの様だ。

もしかしたら精神の方はどこか彼方にピクニックしていやがるのかもしれないけど。

……でも、気持ちも分からないことはない。自分でアレだけ言っていた初対面で……アレだけやらかしちやつたもんね……。男というのはプライドの塊で構成されているらしいから、コレはかなりキツイハズだろう。

その時、パシユ、とドアが開いた。

「一同お集まり頂いただろうか……!? 大変ながらくお待たせして申し訳ない!! この騎士！ エミール・フォン・シュトラスブルクツ！ ただいま紅茶と共に帰還した次第！」

そこには、黄金に煌めく騎士が存在した。

左手には紅茶のポッド。右手は大きく高々と掲げられている。目は何故か閉じられており、口元には優雅な笑み。

何故かそこだけ異空間が形成されているような気がしなくてもないが、きつと気のせいでしょう、ということとで脳内処理した。

キコキコキコと少々遅れて自動制御システム搭載型のワゴンが到着する。

「オリガ殿、コレで問題ないだろうか？」

「あつりがとーございます！ エミールさん！ 多分大丈夫だと思えます！」

「何、礼には及ばない。淑女の頼みを聞き届けることも、騎士としての務めなのだから！」

ファツサア……という擬音めいた音まで聞こえてきそうな勢いで前髪……というか横髪をはらうエミールさん。オリガちゃんが背負っていた背囊から瓶を取り出す。

出てきたのは果物を砂糖で煮込んだ保存食——ジャムだった。

「折角だから皆さんロシアアンティイで一杯やろうと思いましたが、でもお茶っぱなんか何処にもないーと思つて居ましたらエミールさんが大量に持つてきてくださつたと聞きました！ 極東つて凄いですね！」

オリガちゃんはニコつと快活に笑つて人数分のカップを用意し始めた。

ナナちゃんも私もコレはちよつと嬉しかったりする。ここ最近朝もミートペースト昼もミートペースト夜もクツソ不味いミートペースト……。あとは栄養剤と水。サプリメントと水、乾いた乾パンとボソボソのビスケットと水……。といった素晴らしく充実した食生活を営んでいたのだから。おでんパンでも食つてなきややつてられなかつた。

「ほらージュリウスー……。お茶だつてさー……。折角用意して貰つたんだから飲めよ〜？ ……なーあー」

ロミオ先輩が隊長を懐柔しに行った。

なんだかんだで仲がいいからね、あの二人は。

だが、心の傷は思ったよりも深かつたらしい。ぴくりともしない、あのバナナ。

そこでふと、私は思いつく。

「隊長ー？ ほら、隊長の好きなラケル先生ですよー？ 見てくださいこのプロマイドー」

以前、訓練が上手くいっていなかった私（phase04参照）に隊長が手渡してくれたものだ。これなら……。と一縷の期待をかけてみる。

「お手数お掛けして申し訳ありません、ロシア支部さん。お言葉に甘

えさせて頂きます。お前達も貰うと良い」

「……ほら、蘇生」

「……早」

「……まー……うん……結果オーライだよ……うん……」

「いや、少々待たれよ。今……」

エミールさんが歯切れ悪く言うと、パシユとまたドアが開き、何やらゴツイ金属を搭載したワゴンを、ブラッドのゴリラ別名ギルさんが運んできた。

それを見て、思わず驚く。

「サモワール？」

「わー、知ってるんですね！ 流石は神威さん！」

オリガちゃんが満面の笑みを浮かべる。

おでんパンを齧っていたナナちゃんが疑問符を浮かべた。

「なあに？ その『さもわる』ってー？」

「んー……ポットみたいなものだよ。っていうかポットだよ全自動電動湯沸し器」

「良く知ってるねえ、唯ちゃんにしては」

「家で使ってたからね。たまーに」

オリガちゃんがポットを受け取り、ティーカップへと注いでいく。そして給湯機の下部についている蛇口をひねってお湯を出す。直接希釈。……豪快だ。

「ジャムは皆さんお好きにどうぞー。人数分のスプーンもありますよ！ ペロペロ用の器がないので悪いけど中に直接ブツ混んで下さいねー」

「……なにになー？ どうゆうこと？」

ナナちゃんが分からない、と言った様子でコクビを傾げる。

「あのね、ティーポットの中にはリンクバーストを重ねた濃縮紅茶レベル3が入ってるの。そのまま飲むと死ぬ。だからね、ああやってポットの中のお湯を追加することにより濃縮還元。つまり希釈することで飲みやすくするんだよ。後は残りの紅茶の入ってるティーポットをサモワールの上に設置しておけばいつまでも温度を保ちつ

つお茶を飲めるといふ訳」

「そうなんですよ神威さん！ アーサーさんは未だにこの飲み方が気に入らないらしいんですけどねー！」

「なんつっーかさあー……紅茶って感じじゃねーんだよ何となくな」
「うっぎ……この時代に他文化を受容するだけの感性がないなら……とつととくたばりやいいのに……」

「もうオレ泣くよ？ 泣いていい？ なあ……なあ！」

なんてことをモゴモゴと口腔内で咀嚼するアーサーさん。名前や外見からすると、かつてグレートブリテン島あたりにあつた曇天と皮肉と紳士の国の血を受け継いでいるのだろうと思う。名前など、エクスカリバーでも引っこ抜けそうな立派さを誇っていることだし。

アーサーさんが何故か意味ありげにうちのギルさんを一瞬見たが、ゴリラは黙したまま熱湯を啜っていた。

「その通りだ。アーサー殿！ この混沌にまみれた世界に於いて！！人々は常に交わり交流をすることによってその身を寄せ合い生きしのできたッ！ その途上に於いては、泥をすすり、汚泥を踏みつけて生きねばならなかったことだろう!! しかアッ！ 人はかつて誇った栄華……！ かつて人間たちが築き上げた叡智と誇りの結晶を忘れることはなかったッ！ それこそが、我々は受け継いでいくべき伝統となるのではないかな？」

と、自称騎士なエミールさん。

その言葉にヘルマンさんが重々しく頷いた。……同じドイツ系同士、何か通じ合うものでもあつたのだろうか。というかこの人もキラ濃いんだよなあ……。

「……って言いますケド……コレ、別にオレの伝統じゃありませんし……」

「笑止！ 生きている人間が受け継がなければ何とするのですかな。まさか死者がそのバラに埋もれた墓の下より後世に伝えるとでも？」

何というゾンビパニック……！ 片腹痛いことですか

今笑止って言ったばかりなのに、もう笑いすぎて腹痛いのか。

お忙しい人だ。

「死んだ人がお墓の下から……！ やだ怖い……」

「でもソレだと、対アラガミ用の最強兵員が確保できるじゃないですかねー？」

「やーだー。オリガちゃん発想が怖いぞっ？ 流石ロシアっ娘なんだからっ！」

「えへへー。そうですかー？」

……ナナちゃん、貴女人の事言えるないよね？

忘れたとは言わせないよ……あの、終末戦争と人の時代の終焉を告げたロクでもない黙示録のことを。

可愛い外見にダマされてはいけない、彼女の腹の中は色々な意味でブラックホールだ。

……それに、万一そんなゾンビVSアラガミな世界が来たらどの道人類終了のお知らせが来るってば。死人と神が襲ってくる世界など考えただけでトリハダが立つ。

「……」

改めて見ると、

この面子……本当に濃いな……。

協力を言ってきたロシア支部が派遣してきた理由は分かる。……というか願ってもない。

だけど、極東の……このエミールさんとやらは何なのだろう。

一見悪い人にも、腹に一物ありそうな人にも見えないけれど……『誰』が『何の為』に送り込んできた人員なのか、と疑わずにはいられなかった。

何故なら間違えなく彼はイレギュラーだ。

協力要請をしたわけでもない、それに人員は現在ブラッドが5名。ロシアが3名で十分足りているようにも見える。フライアの偵察や工兵が足りていないわけでもない……。

ただ、ひとつ確かに考えられることは。

エミールさんの背後に居るであろう人物——極東支部の役員か、もしくは支部長本人。そのどちらかが、フライアの実態を探りに来たの

ではないか……？ と、暗い考えが脳裏をよぎる。

事実、ロシアと極東の繋がりは深い。

ナナちゃんと言ったかつて微妙な結果に終わったと言われている大規模掃討作戦に始まり、3年前の新型ゴツドイーターと技術者の『不自然』な異動。エイジス計画への協力態度。

しかも、極東の現支部長は……『エイジス計画』の発起人であった前支部長を暗殺したという噂まである人物だ。何を考えているのか分かったものではない。

何だか薄暗い思考に支配されていたその時だった。

「でもさ、真面目な話。フライアの皆さん。オレはあんたらに感謝してるんだよ」

「……はい？」

アーサーさんが低い声で話し出す。

「放置されちゃった場所を拾ってくれる、つてのも有難いんだけどさ……此処、ずっと立ち入りが禁止されてたんだ。知ってる奴も古参のごく一部だけで……オレとヘルマン、あとはロシア第三部隊で隊長やってるダニエラ。っていう女位なもんなんだ」

「そーそ。私知りませんでしたもん。こんな場所があるなんて」

オリガちゃんが付け加える。

「なんか……馬鹿っぽいけどさ、……昔、あそこで死んだ仲間が居たんだ。けど……何か色々あってずっとナシになっちゃってて。多分もう何も残ってないだろうけどさ……何か、やっとなイツを迎えに行けるような気がするんだ……まあ、うん。そんな感じで！ オレ個人としては今回の申し出、めっちゃ乗り気だつてことをお願いしますブラッド隊長さん！」

「雰囲気ぶち壊しですよ、真面目に行くんならソレ貫いてくださいよ」「うるせーコレがオレのスタイルなの！ じめじめ湿っぽいのはなんざゴメンだつーの。死んだ奴も能天気な脳筋だったしー！」

「ふーん……まあ、別に良いとは思いますが。真面目かと思つたらイキナリ空元気ブチかますとか普通はドン引きですよ」

「……なあ、オリガあ……お前隊長のこと嫌いなの？ 嫌いなものか泣けてきた……」

「泣けば？ 年上男性のガチ泣きなんかドン引きです」

アーサーさん、撃沈。

片手で顔を覆ってうなだれてしまった。沈んだ隊長に代わって……ぶっちゃけ、よっぽど隊長らしい風格を持つヘルマンさんが、かわりに話を進める。

「それもあるが、我々が……今回の話に乗った理由はもう一つある、そこをハッキリさせておきたい」

「理由、ですか。……『領土奪還』人類の活動域の拡大、以外にも何か理由が？」

すつかり落ち着いた隊長が紅茶を啜りながら対応した。ちやつかりジャムを大量に投下済み。

この人本当に、こういうった上品な仕草が絵になるなあ……と一瞬だけ意識がそっちに向く。いつもこんな感じで居ればいいのだ……四足歩行なんかしないで。

「技術的な理由だ」

「……技術……？」

やつぱり神機兵のことだろうか。と思う。

「……『ブラッド』——第三世代。……現在我々の部隊は、全員が『旧型』——第一世代の神機使いたちで部隊が構成されている。第二世代型——遠近可変型神機の導入も他支部より遅れている」

「そんな……だってロシアは激戦区だって……言ってみましたよね……？ ゴリバートさん……」

衝撃の真実で横っ面を張り倒された気になった。

「ギルって呼んでくれ。俺もそう聞いていた。極東、ロシア、アメリカ……この3つは数ある戦場の中でも『別格』だつてな」

ギルさんがどこか険を含んだ顔でヘルマンさんを見つめた。

その目線をまるで巖の様にヘルマンさんは受け止める。

「……ロシアと極東は深い繋がりがあった。確かにロシア支部は極東相手に搾取されていた面もあった。……だが、その見返りはそれなり

に受けていた」

「見返りって、何だったんですか？」

「技術提供、ですか」

隊長が真正面から正解を言い当てた。

ヘルマンさんは頷く。

「そうだ。極東は魑魅魍魎の巣窟……。……。だが、その分オラクルリソースに恵まれている、そのため研究分野に於いても非常に高度な水準を維持していた……。だが」

やはり、過去形だった。

沈んでいたアーサーさんが復活してくる。

「3年前、ちよつとした『政権交代』があっただろ？ アレのせいで繋がりがバツサリ切れちまったんだよ。新支部長になってからは極東は積極的な新型導入だ、新技術開発だ、に一生懸命になっちまったオレたち後進支部の面倒にまで首が回らなくなっちまったんだよ」

「アメリカ支部の様に独自の研究体系があった訳ではない。また、本部に対して強く出れるだけの発言権もない……。そんな支部の上層部が撮った手段は……。兵員による戦力増強だった」

「……」

薄ら寒い嫌な予感が背筋を上る。

言葉にすると単純だが、兵員による戦力増強……。つまり、それは。「極東には技術があった。だが、ロシアの技術力は残念ながら……。後退した」

「無理もねえよ。資本に人材、素材に資源。全部全部極東に持つてかれちまってたんだよ……。『せんせい』と『新型』にくつついてさ」

アーサーさんの口調はどこか感情を押さえつけたような……。苦みや怒りが籠っていた。

ヘルマンさんが片目でアーサーさんを睨み付ける。

「何……!?! その様な事態に陥っていたとはっ……。ま、まさか、それはアリサ……」

「……アーサー……」

「うわあああ！ 早とちりすんなってエミールさん！ 誤解すんな

よー？ 極東を恨んじやいねーよ。腹立ってんのはロシア支部の上層部だ……だから3年前はもうヤバくつてさ。新型なんか製造してる暇ねーし、練兵もじっくりできる余裕なんかねーし。……ロクな訓練もない、とにかく回収した神機は何でも使う。適合数値ギリギリの奴とか……本当にガキとか。とにかく何でも使ったさ。とにかく頭数揃えて物量で対抗するしかなかった。そうしなきゃ生き延びれなかったんだよ」

「……………本当ですよ」

「そんなことに……なつてたんだ……」

「怖えーな……流石はロシア支部……」

遺書用意してきてマジで正解だった。

本当にここまでダークネスだとは……黒いなんてもんじやない。

「んで、そんな時組織されたのがオレらみたいな遊撃部隊だよ。各地の戦線で一斉に戦闘が起こる。それで……どつかの防衛ラインが崩れたら、そこに向かって穴を塞ぐ。その為に組織された部隊さ。……まー、もちろんそんなんで妥協するオレじゃなかったけどな!!」

「より積極的な武力介入により、崩れかかった戦線を補充するただの助っ人仕事だ……だが、どうせ救うなら死人よりも生きている人間を選ぶだろう?」

「こう見えてもオレ達ちよつとした英雄だぜー? ロシア支部に詰めてるゴツドイーターや一般兵の半分はオレに命を救われていると言つても過言じゃないね!」

「自分で言つたらカツコよくも何ともないですよーアーサーさん」

支部に居る戦闘員の半分の命を救ったって……。改めて噛みしめてみると凄い事実だ。

と、同時にその言葉の裏側にある意味も取れる。

……救えなかった人も居るのだ、ということも。

きつと、どんな地獄だったのだろう。恐らく……戦闘も人生も経験の乏しい私なんかでは、予想もつかない程の世界だろう。

「……話が逸れた。我々が求めているのは……サテライト運営の技術、及びにアラガミ装甲壁の強化技術だ」

「……」

流石の隊長も閉口した。

「ここまで言えば理解もできたことだろう。……技術力がないのは神機だけではない。『全て』が……3年前で止まっている」

「……ハア!?!」

「なっ」

「……おいおい、マジかよ……」

「……」

あまり認めたくはない現実だけど……世界は、ここ3年で明らかに変動した。

赤い雨が降り、各地でのアラガミの新種の出現が起き、また、感応種と呼ばれる既存の神機を無効化する特別な種類まで現れた。

……と、いうのに。

「それと、もう一つ。近年出現した『感応種』に対する対策。コレが全然打てない。上の奴らオレ達に丸投げしてきやがったんだよ……。大防衛戦の英雄なら何とかできるんだろ、ってな。流石に無理だろうって話だわ。」

……けど、ここで投げて逃げるのは、オレのスタイルじゃない。誰かがやらなきゃなんねーだろ。それで困ったところにアンタ達が現れた……なあ、『ブラッド』はさ、『感応種』に対して戦績を上げることができる部隊なんだろ?」

情報の周り早っ!?

多分、グレム局長あたりが大々的に喧伝したんだろうなー、とブラッド全員の心が一つになる（気がする）。

アーサーさんの目には継るようなものまで浮かんでいた。

「オレ達はその感応種のコアが欲しい。……幸い出現する種類は限ら

れてる。何か一個だけでも抑えられれば後はどうにか出来る。……コレが『ロシア支部』からフェンリル極致化技じゅち……技術開発局へと求める条件だ」

「……噛んだ」

「親近感湧きますね、隊長」

「……」

隊長が紅茶を思わずカートへと戻した。

表情には苦いものが混じっている。無理もないと思う……道理で美味しい話だと思っていたら、飲み込むのにはタダではいかなかった、というわけだ。

中身が思つて以上にヤバかった。

激戦区、人類の最前線。との異名を持つ極東とは……別の意味で、ここもヤバい。

「了解しました。クリフオード隊長。我々ブラッドの指揮下にて、『奪還作戦』及びに『感応種討伐』任務を遂行します」

「ちよ……隊長……？ 勝手に決めちゃっていいんデスカ……!？」

「良い訳がない。だが、もう後戻りする道などないだろう。……ならば、進むだけだ、違うか？」

「……」

……時々この人マジでイケメンだから困るんですが。

イエス、以外の答えが見当たらない。

べ、別に流されている訳じゃない。……多分……。

「よっしゃ、じゃあそうと決まれば宜しくなージュリウス隊長」

「最新型が5台に新型1台ですかー。かつてないほど見通しの明るい戦いですね！ アーサーさん！ ヘルマンさん！」

「アーサー殿……！ その弱きを全力で救うという志……！ 僕は……嗚呼僕は！ 自分が恥ずかしいッ！ 今の今まで自らが如何に恵まれそして与えられてきたのかということを知ったッ!! 嗚呼アーサー殿！ 極北のゴッドイーター達よ！ その全力で戦いを

挑むという姿……それこそ！ まさに！ 求めていた騎士道つおとおおとおおお!!」

「よ……宜しく願います……あの、不安しかないのは私だけでしょうか……!?!」

「唯ちゃんの弱音は今に始まったことじゃないからスルーするね！
はい、皆さんどうぞーおでんパンです!」

「おでん……!?! オレ知ってるぞソレ！ 極東地区のソウルフードだろ……!?! パンに挟むもんなの!?! 違うよね絶対違うよね!?!」

「如何にもッ！ 極東のおでんという食べ物あまりパンに挟まないものだと記憶しているが……」

「すごく美味しいから食べて見てくださいよー」

「うむ……では遠慮なく頂くとしよう。……こつ、コレはア！ ……食べた瞬間口の中に広がるネリモノと魚介の味……よく効いたカツオや昆布の風味……更にはソレを封じ込め丁度良く染み込ませたコッペパンの得も言われぬしつとり感……おで、……お、おで、おで……おで……おでん……おでんおでんおでんおでんおで……」

「おい……? おい、大丈夫かどうした!?!」

「効いてきたあつ!」

「アーサーさん、私の分のおでんパンあげますっ！ い、今わたしーちよ、ちよつと減量中で〜!」

「嘘をつくなオリガ！ お前昨日あんだだけピロシキ喰っついて何を言っ……」

「あつはははははーどうぞどうぞー遠慮することはナインデスヨ!?!
えへへへへへー」

「オリガあー……!!」

不安だった。

期待され過ぎている様な気がする……。今までの人生でそこそこの期待しかされてこなかった分、こうゆうものに私は慣れていない。人々の期待になれ、と……何か押し付けられているような気にも

なってしまう。

そう考えるのは、自分が卑屈だからだろう。

自信なんかないのだ。

感応種討伐の実績……というか、感応種に対して第三世代の神機が有効だということ。

それを示したのは——私ということにはなっているけども。

正直、あんなもの本当は二度と戦いたくない。

『あの時』だって死にかけたのだ。思い出すだけでも怖い。

……さらに、それに、慣れない他人からの期待という重責が相乗効果を生んでくる。

ストレスで吐きそうになっている所に、右手におでんパンを持った隻眼の男性——ヘルマンさんが肩を叩いてきた。

「お前達には要らないものまで背負わせて……悪いとは、思っている」
「……いえ」

別にそんなことはない。

きつと、これは……本当ならば、ゴツドイーターとして当たり前の重荷、なのだろう。

この人たちはソレをずっとずっと背負ってきたのだ……そう思うと、やはり、皆凄い人たちの様に思えた。

「だが理解していても欲しい。……お前達は『希望』だ。最新鋭のゴツドイーターは……俺たちの様に守ることだけで精一杯の旧型とは違う。このどん底の世界を少しでも良くしてくれるという人々の願いを背負った、『希望』だ……だから、堂々と胸を張れ」

「ヘルマン、さん……」

だからその希望が重いです。

その希望が、追い詰めてくるんです……なんて、甘えたことは言えなかった。

……こんなに真っ直ぐに私たちを信じてくれている人たちが居るのに……そんなことはとてもじゃない、言うことなど出来なかった。

だから、虚勢でもいい。ウソでもいいから、強がっていきましょう。怖いのは誰だって同じなんだから……。

でも、
その中にあっても希望を求めることができる……その感情が、理解できない訳じゃないから。
そう思った。

「ああ、折角良い形をしている。大きさも申し分ない。だから、堂々と胸を張れ」

「……………?」

あ、あれ?
可笑しいな……オカシイナー。今なんか幻聴が聞こえたようなキガシタナー……。

「良い胸をしているのだから自信を持って」

「ひいひい!! さ、触らないで下さいいー!!」

「何が?」

「だ、だって!?! え? 間違ってるのは私!?!」

「お前の胸は正直だ」

「うわあああああああ?!?!」

「ヤベエ……ヘルマンのヤツ大人しくしてると思ってた……さつきから神威さんの胸ガン見してやがったのか!」

「瞬き一つしなかったツスよねあの人……!? 唯! こつちだ! こつちに来い!!」

「助けてえー! ロミオ先輩! 怖いよおおおおお!!」

「ヘルマン! ステイ! ステエー! イ!!」

「おでん、お、おでんおでんお……うおおおおお! き、きしいっ! き、きききききしっ……き士……騎士いつ……騎士道おおおおお!!」

「なっ……! おでんパンのシアワセ力を、打ち消したの!?! 流石は歴戦の神機使い……カントンには倒せないみたいだねっ……!」

「あのーあのあのー! ヴイスコンティ隊長さーん? 失礼ですがー? 御父様はご健在ですかー? もしくはおじ様は?」

「申し訳ないが、父は既に他界。親類とも縁を切っております」

「あららー残念ですー……じゃあ、どつかにー良い中年男性は知りませんか? 小太りでーヤニ臭くてー加齢臭のするー……あ、ハゲかけてたら最高ですっ! 紹介してくれませんかー? 大好物でー!」

「……残念ですが」

何か……濃い面子だけど。きつと、協力できる……ような、気がする。

大きな期待に応えられる自信がないときは、手を携えればいいのだ。

それが小さな希望でも、
きつと、繋げば……届くはずだ。

「……アーサー、男なら堂々と胸を見ろ」

「何でお前も変わってねえんだよ?!?! 年喰った分余計に夕チが悪りいんだよ!! 頼むよ俺はお前を通報なんかしたくねえんだ!!」

「お前も正直に生きろ」

「まるで野獣だよお前!」

「隊長さんもきつと後10年くらいしたらナイスミドルになると
思いますよ! それまで頑張つて生きて下さいねーっ!」

「今思いついたのですが……グレム局長など如何でしょうか」

「何かスゲエな……ロシア支部……」

「ああ……ハルさんに対抗できそうな人物を俺も初めて見た」

「お前あのレベルでヤバイ知り合い居るのかよ!? やめろこっち来る
な変態が感染るこのサル! ゴリラ! チンパンジー!!」

「黙れこの缶バツジ」

∴
多分。

phase 21 あなたが人生に裏切られても (前編)

次々と消えていく、仲間からの応答。

その最後の言葉が耳から離れず、蹲っていた。

『助けてオーリヤ！ 囲まれてる！ 囲まれてるの！ もう動けない……！ お願い……お願い助けて！』

『クソ……クソオ！ もう弾丸がな……うわあああ！』

『……ねえ、聞こえる……？ ……もう……ターシャもヴォロージャも……返事……ないんだ……』

恐怖感を消す為に、と司令部から支給された抗精神薬を噛み砕く。
効いてない。

全然効いてない。これ。
だって

『聞こえてるなら助けてよ！ 助けてもうバリケードが持たない！
来てるの！ すぐそこまで来てる!!』

『痛え！ 頼む、拾ってくれ！ 拾ってくれ俺の腕が……腕があああ
!!』

『……ごめんね、オリガ……』

『コレ』を聞いたのは……もう、一週間以上前のことなのだ。

手元にある錠剤を眺めながら思う。

本当に薬、なのかな……これ。

だったら……どうして聞こえるんだろう……？

どうして、仲間の声が。

もう居ないハズ。

皆の声聞きこえてくるんだろう……。

『ごめんね……オリガ』

ガリガリガリ、とそれらを噛み砕く。

自分の咀嚼音が耳に着く。

聞こえる『声』から気をそらしたくて、必死になつて耳を塞いだ。なのに、強化された聴覚は聞きたくない『音』を拾った。

——何だあいつ？

——ああ、アレが『代用品』か

——『今度も』……全滅だよ。

——やっぱり……ね。

やめて、と言いたかった。

違うと、叫びたかった。

私たちは代用品じゃない、代用品なんかじゃない。

だって……神機使いにしてもらえると言われた。

言われた通りにやれば、神機使いにってもらえると言われた。

もう足が痛くなるまで配給の列に並ばなくていいって。ちゃんとした分量を毎回貰えるって。

母さんや兄さんの様に、路上で飢えに苦しんで野垂れ死にしないで済むんだって。

今でもハッキリと覚えている。

孤立した自分たちの区画で、何が起きていたのか。

疎開もままならず、配給品もない。

なのに……陥落した場所から流れてきた人間だけがひしめいていた。

道を歩けば餓死者か凍死者の死体が転がっているのに、それを片づけるだけの体力がある人間さえも居なかった。そのくせ、皆、死体から衣服や配給チケットを剥ぎ取っていく。

伝染病を防ぐためにと設けられた即席の火葬場には、燃料が切れ、氷漬けになった死体が積み上げられていくだけで……電力はとつくのとうに打ち切られ、皆、公園の木や家具を暖をとるための薪にしている有様だった。

……ロシア支部ではアラガミに喰われて死ぬんだつたらまだマシンな方だ。

ほとんどの人は、散々生きようと足掻いた挙句……食べ物が無くて餓死するか、寒さに耐えきれずに凍っていくかのどちらかだった。

毎日毎日、どこかで骨と皮だけになった死体が転がっていた。

神機使いになれば、そんな死に方はしなくていいと言われた。

10年くらい戦えば、安全で毎回ちゃんと配給がもらえる『内側』で暮らしていいって言われた。

……だから……。

……だから……。

——だから言ったんだ。初期型の……ピストルだっけか。あんなもんまで出しやがって

——動くかどうかも分からない。カビの生えてた骨董品を……。

——ただ死ぬだけならいいだろうが。

この前はアラガミ化しやがったんだぞ!! オレの部隊はそれで……!

——死んだ奴の装備はそのまま回すんだっけ?

長持ちしねえ鉄砲玉ばっか作るんだつたらオレ達正規の神機使いに物資を回して欲しいのに……

——アンプルだって3日前に支給されたばかりだ……。
相棒が死んじまった……。これでどうやって戦えばいいんだよ……。

『ごめんね、オリガ……』

——あの子……。どうなるのかしら。

——多分どこかの部隊に配属されるだろうな。だが……。いつまで戦えるのか。

——どうせまた『次』が来るだろ。

—— あいつらの『代わり』なんぞ幾らでも居やがる。

『ごめんね……』

最期を看取ることさえできなかった仲間たちの声が反響する。

キツかった訓練も、苦しかった『副作用』も皆と一緒になら……。と思つて耐えてきたのに。

今は辛くても、いつかはきつと幸せになれるんだって思ってきたのに。

もう、飢え死にしくっていいんだって。

もう寒さに震えてることはないんだって。

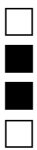
なのに……。なのに……。

こんなのひどすぎる。

皆、皆、あんな死に方がしたかった訳じゃない。
ただ……。
……ただ……。

「おい、アンタ。大丈夫か？」

ふと、頭の上からこちらへ問いかける声があった。



「作戦は以上だ。何か質問は」

会議の終了後に、隊長がその言葉を口にした。

特に質問はないらしく、誰も挙手する者は居なかった。

作戦はいたって簡単。3行にまとめると……

ブラッドとスネグーラチカの混合班を二つに分ける。

私とオリガちゃん、アーサーさんとロミオ先輩は索敵。残りは迎撃陣形に展開。

目標の大型種『クアドリガ』をキルゾーンまで誘導して全員で殴る。
……らしい。

この大型種をぶち殺せばあとは小型種だけになるので、面制圧が可能になる……らしい。

つまり、クアドリガ討伐で陣地奪還は完了というわけだ。

何だかあつけないような気もするけど実際そゆうものなのだから仕方ない。ここは素直に現実を受け止めておこう。

「訓練通りにやれば勝てない相手ではない。各自、冷静に行動するよ
うに」

「了解」

「あー……そうだな……オレからは……作戦当日は寒波が直撃するら
しいから防寒装備よろしく、つてとこだわー……まあ大したことねー
けどな！ でもブラッドさんとエミールさんは気を付けた方が良い
かも」

「まーた寒波つすかー。りよーかいです！」

「……分かった」

「ウム。心得た！」

アーサーさんが軽く言った一言だったが、ブラッドは少々どよめい
た。

「えー？ 寒いのは嫌だな〜……」

「だ……だよなあ……はあ……オレ寒いのが苦手だし……」

「ナナちゃんその恰好だとね……というか寒波直撃するならどうして
……」

別の日にちにやればいいのに、と恨めしさが混じる。

そんな私たちの文句と疑問に答えたのは、ロシア部隊最年少なオリ
ガちゃんだった。

「そりや対クアドリガ用の気温だからですよ！」

「気温……？」

「通常のクアドリガは高熱型アラガミなんで！ 寒いと弱くなるんで
すよ。あとはデカいから動きが鈍くなって討伐しやすくなります
よー」

「……あ、そっか」

今日の為に、皆で散々勉強したクアドリガの生態によると確かに奴
らは高熱系。

故に冷却バレットが効果的……って言われる程だ。

「あとは単に地盤の問題なんですよね。寒い方が硬くて歩きやすいの
で」

「ま、寒いって言ってもこの時期の寒波だから大したことねえと思う

けど。せいぜい零下10度とかその辺だと思うし」

あつさりとそう言えるアーサーさんの神経がちよつと……いや、かなり怖い。

確かにオラクル細胞を体に入れた時から私たちの身体は人間の活動領域をはるかに凌ぐ生存能力を持つていたりする。

でも、それとこれとは話が別だ。

……零下10度をせいぜい、とか大したことないと言えるロシア支部って一体……。

考えてもキリがなさそうなので、思考をやめることにした。

「……でも、籠城している兵にとっては……」

「えー？ 大丈夫だと思いますよー？ 中継でみたらさつき一部の兵が水泳やってみましたし」

「……ソ、ソウデスカー……」

普通の人間であっても生存能力強化されているのだろうか。環境のせいなのかもうやだここ……。

「……緊急事態発生!! おでんパンが……なくなった!!」

袋をゴソゴソやっていたナナちゃんが、束の間の平和の到来を告げた。



作戦は初めはスムーズに進んだ。

開幕と同時に現れたコンゴウの群れをすり抜けて、分隊別に分かれて行動。

進路上邪魔になると判断された小型種のみを狙って討伐。

そして私たちは敵影をすっかりとらえて……あとはキルゾーンへと誘導すれば任務完了……

……の、ハズだった。

ただひとつの誤算を除外すれば。

「うおっ……」

「無理……」

「あ、ありやりやりやりや……」

「な、なんだよコイツ……」

アーサー分隊。軽くパニックに陥るの巻。

「落ち着け！ ……まさかこんな奴が出てくるなんて思ってなかったけどな！」

「死んだ……これ絶対死んだ……わ……私……生まれ変わったらアルパカになりたい……」

「やべえ、死んだ皆の顔が見……これマサカ走馬灯!？」

「諦めんな馬鹿あ！」

を、見た時、私たちは確かに思ったのだ。

これがクアドリガか。でっかいな……と、思ったのだ。

で、よく見たらちよつと違った。

まず……頭の上の平坦なハズの排熱器官が何か違うなくという嫌な予感。

次にシルエットが何か違うなく何かトゲトゲしているな……と
いう妙な直感。

そして前面装甲の……顔。

変な緑色の人面。

そう、クアドリガだと思われていたそいつは。
テスカトリポカだったのです。

「こりやいつまでも制圧できねえ訳だわー」

「隊長おおお！　こちらブラッドー04！　クアトリガテスカトリポカでした！　クアドリガ!!　じゃなくて!!　テスカトリポカああ!!」

「くつそ怖エーですわー……生き残れたら何か奢って下さいって」

「え、えつと神属性神属性……オレがしつかりしねえと……」

速攻でノルンから送られてきた情報が点滅する。

『神と殺戮機械を融合させたような姿を持つアラガミ。』

想像を絶する火力を誇り、一つの街を一瞬にして廃墟にするほどの力を有する』

……こんな相手にどうやって戦えと言うのでしょうか。

接触禁忌種と呼ばれる類のアラガミであり、並の神機使いはその名の通り『接触すんな、したら逃げる』なレベルの化け物だ。

「総員に告ぐ！　作戦の変更はねえ！　やることは同じだ！　けど敵の脅威レベルは格段に上がった！　あと氷結系は全部捨てる！　ロミオと神威は神属性バレット装填！」

「持つてないんですう!!」

だつて持つてこいなんて言われてない。

「了解……じゃあ唯！　食つて撃て！」

「食つてつて……あ、アラガミ弾ですか!?!」

「……ああそうだよ！　偏食性が何かで喰ったもんそのまま撃てばある程度は効くつて座学でやっただろ!!」

「そ、そそそそそうでしたあ！　ご、ごめんなさいいませند忘れしてましたあ！」

流石のロミオ先輩もイラっとしてる。

うん……まあ……もつともだ。色んな人に怒られるのも慣れてきた。

じゃない、今は命の危機。

「ロミオ！ 威嚇射撃！」

と、自分だけステルスフィールドを展開したアーサーさんとロミオ先輩が射撃体勢。

レーザー光の直線がテスカトリポカの頭上のへと直撃する。

完璧なヘッドショット。人間ならバツタリと倒れてもう呼吸中枢も停止することだろう。

当然。

『#\$\$%\$%&#+*(!!!)!!!』

アラガミはそうはいかないのです。

何言ってるんだかよくわからないけど、多分怒ってるような……不快すぎる機械音な奇声を発して、頭蓋骨に似た頭部がこつちを向いた。

「……こ、こつち見たあ……見！」

もう足がガックガク。

胃のあたりがきゆうつと締まる。

「喰いついた！ このまま引つ張ってくぞ!!」

「りよーかーい！ さあ逃げますよ！ 神威さん！」

あまり慌ててないロシア組は流石の一言に尽きる。

テスカトリポカはガチガチガチという何かが組み変わるような音を立てている。

ギアチェンジでもしているんでしょうかね……アラガミは思ったより頭いいね……。

そして、奴は発進する。

「早!?!」

「あのデカさで……!」

思ったよりも全然早かった。

通称歩く戦車と呼ばれる通り……完全にキャタピラの使い方を誤っている歩行方法は、ビツクリするほど早かった。

納得いかない。

アーサーさんの指示。正面にかつてのコンクリート高層建築物が見える。

かつては様々な会社が入っていただろうソレは、今では、アラガミに齧られてかなりスカスカになっていた。

その隙間は人間ならば入り込めるだろうが……歩く巨大戦車であるテスカトリポカには越えられない。

コレで少し時間が稼げ……

「一気に通り抜けるぞ!! そんなに時間はねえ!!」

「……え?」

アーサーさんの怒鳴り声と被って、トンデモナイ破壊音が衝撃と共に襲ってきた。

耳が痛い。

不幸中の幸いと言うべきか、あまり砂埃のようなものは立たなかった。

だから、しっかり見えた。

テスカトリポカが……高層ビルをぶっ壊しながらこつちに向かってくるというこの世の終わりの様な光景が……

「……ええええええええ!!?」

8階建てビルが……死んだ。

可哀想に、中に居た小さなアラガミも犠牲になっている。

さつき舞い上がったハズの破片が、遙か天空まで打ち上げられ……私の足先にトスン、と落下した。

コレが頭上に刺さってなくて良かった……と安心しかけたところ。
「うわっ……ちよっ……いつっ！ 痛つつつたい!!」

頭上から舞い上がった砂や小石欠片が降ってくる。
致命傷にはならないものの、……地味に痛い。そして埃臭い。

「歩くだけで損害何億f c出すとか……流石接触禁忌ですねー」

「大丈夫か二人ー」

「く、口の中ジャリジャリします……」

「平気そうだなー!? よおっし！ このまま後退もとい、明日への前進だあああああ!!」

「同じです!!」

顔に着いた砂だけを払おうと思った……けど、何故だか皮膚に当たった瞬間、含まれていた水分が溶けだして肌にくべりつく。

それらを拭っている余裕はなかった。

「ん……ちよつとキツイかも……アーサーさん！ コイツ少し削りましょう!!」

「削るって!?!」

オリガちゃんが唐突に凄いい提案をぶちかます。

「基本的な弱点はクアドリガと変わりませんー。ちよつとあの……ウつつつっぜい緑ツラカチ割ってきます!」

「ちよ……オリガちゃん!? オリガちゃんー!?!?!」

金色のツインテールをはためかせた少女は一人で駆け出してしまった。

phase 22 あなたが人生に裏切られても (後編)

「あいつまた……神威さん！ 悪いけど援護頼む！」

目の前にアーサーさんの赤い髪が躍った。

スナイパー銃をかまえたまま……奴は突っ込んでいく。

「了か……ってアーサーさん!? 後衛……後衛が前に突っ込んだ!? ど、どうなってるの……これが最前線の戦闘スタイル!?」

「マジかよ……」

化け物相手には前衛とか後衛とかもうどうでも良くなるらしい。突撃していくオリガちゃんがステップ中に捕食形態を呼び起こす。

私のウエアラブルデバイスに捕食形態が表示される——制御ユニット『シユトルム』。加速しながら捕食できるというプレデターフォームだった。

当然その後バースト。

「オリガ！ 前出過ぎだ下がれ!!」

「と、言われましても！」

すごいアラガミの前でどなりあつてるよあのひとたち (錯乱)。

「こいつの弱点が前にあるのがいけないんですよおおおお!!」

「もつと狙い方ってモンがあるだろうが!!」

「アラガミの所為なのねそうなのね!!」

「つーか、普通に喋ってんだなーあいつらヤベーな……ははっ」

思わず突っ込んだじゃった。ロミオ先輩は死んだ目で笑っている。でも手はちゃんとロードしてガンガン撃ってる。

オリガちゃんは巨大なクレイモアを振るいつづけ、アーサーさんは精密狙撃を繰り返している。後ろのミサイルポッドや頭頂部の兜、狙うべき場所をちゃんと狙って狙撃。

果たして効いているのかいないのか……よくは分からなかった。すると、端末に文字が表示された。

information>>テスカトリポカが怒りで活性化

「……マジデスカ……!?!」

活性化、その名の通りオラクル細胞が活性化すること。

アラガミ界のバーストモード。

つまり……一定時間、強くなる。

「活性化……。……来るぞ! 防御体勢! シールド展開!」

「は、はいっ!」

ロミオ先輩の直感は完全に当たっていた。

自然現象ではありえないような、毒々しいまでに鮮やかな薄紫色の煙幕が立ち込める。

これは見て分かる。

……あの光は、ヤバい。

「オリガちゃん! アーサーさん!」

『旧型』の……特に装甲のついていないアーサーさんに防御手段はない。

だが、そこは何というか……。……すっかり彼は退避していた。

……問題は、クレイモア使いの少女の方。

「大型攻撃来るよっ! 退避か装甲展開急いで!」

「待ってましたあ!」

「はい!?!」

耳を疑うとはまさにこのことだ。

「オリガちゃん!?!」

その時、テスカトリポカの……。変な緑顔が、パツカリと開いた。

機械質な外見とは文字通り裏腹に、装甲の内側は真っ赤な生肉だった。

そして……。ぬらっとしてて、酷く生々しい特大レバーの中に埋もれている、逆にメタリックな……

巨大なミサイルが見えた。

「……」

「ここだあああああ!!」

彼女は高熱の吹きすさぶ嵐のなかに、そのまま突貫していった。

「オリガちゃん!?!」

「……」

あの高熱はやばい。……見ればわかる。

なのに、彼女は熱さなんぞ感じないかの如く、まっすぐに突進していく。

確かに……装甲部分で覆われていない、内部は今なら手薄だ。つまり……。

今なら致命傷を与えられる。

与えられる……けど……

どう考えても、自分目がけて飛んでくるデカイミサイル相手に呐喊するとか正気じゃない、と思う。

飛んでくる巨大ミサイルを彼女は身を低くして走り込み、紙一重のギリギリところで躲した。

その結果。

オリガちゃん目がけて飛ぶはずだったミサイルは、撃墜目標を失い、そのまま指定された弾道通りに飛んでいく。

つまり……! !

……私の方へと真っ直ぐ飛んできたのだった。

ガツン、と腕が抜けそうになる程の衝撃が軽めの装甲を襲う。

「くっ……熱っ……」

ブスブス、と何かが爆ぜるような音がしているが多分それは気のせいだろう。

もしかしたら金属が沸騰している音なのかもしれないが、多分気のせいだろう。

神機がガタガタと震えているし、コアがピカピカと助けを求めているように光っているけど……神機に意識なんかあるわけがないから気にしない。

髪の毛の焦げる嫌な臭いが鼻孔を突いた。

何かこの間から戦闘のたびに髪が犠牲になっているような気がする。

一方ロミオ先輩は頭のニット帽を必死に庇っていた。

出すもの出した後、暫く手薄になっていたテスカトリポカの『中』に、オリガちゃんの武器……思いつき貯めていたバスターソードの専用技——チャージクラッシュが炸裂する。

「アーサーさんの……馬つつつつ鹿ヤロオオオオオオオオオオ!!」

オリガちゃんの気合いと共に、高密度で圧縮されたオラクルがテスカトリポカの前面装甲を確かに砕いた。

「おい……」

……………おい……………」

アーサー・クリフオード氏、男泣き。

到底大丈夫に思えない彼女を、私は走って回収しに行く。

「だ、大丈夫……!?!」

「な、何とか………ありがとうございます………」

息も絶え絶え、になりながら何とか返事をするオリガちゃんに手を貸して起き上がらせる。

……やはり大丈夫なんかじゃない。

炎熱と爆風に燻された地面ですら、まだ熱く、歩く度に靴の裏の耐熱ゴムが溶ける。

軽く見たただけでも、神機を持っている方の腕が……ひどい事になっていた。

右脚からは嫌な臭いがする、恐る恐る目を向けると、大やけどが目映った。

彼女は回復錠を飲み込むが、あまり効いていない。

ひよつとしたら……『効きにくい』体質なのかもしれない。

「………立てる? 行くよ!」

「は………はい! 大丈夫ですよ慣れてますんで!」

言いたいことは色々あったが……今は何も言えなかった。

追いかけてくる小型ミサイルたちから、今は頑張つて彼女を庇いながら逃れる。

両脇に付いている箱みたいなお物体——ミサイルポッドから、順次小型弾が射出されていた。



「ん？ 隊長ー？ ロミオ先輩見えたよーっ！」
「む……何？ 何か叫んでいる様だな……？ フツ、この騎士、エミール・フォン・シユトラスブルクの眼力を以てすれば読唇術など……『ヤベエ、来るぞ避ける』……？」

「何が来ると言うんだ……キルゾーンには左右からのアラガミ除けに15メートル級の鉄筋コンクリートが立ち並ぶ場所を選んでいる……はず……だが………」

「……おい……何か煙見えないか……？」

「……香月、胸は保護しておけ」

そして彼らが目にしたモノは。

元住居に使われていたであろう共同住宅用の建物が、バツタバタとなぎ倒されていく光景だった。



「や、やっと辿りつきましたよー！」

「こりや凄いですわー……コイツ一匹のせいで地形変わりましたわー」

「ビルばつかぶつ壊しやがって勿体ねえなクソ!! 人間と違ってアラガミ様はゼータクだな畜生!!」

「オレは何も見えてないオレは何も見えてない……」

破壊神テスカトリポカ。

コイツが一体現れれば周囲が焼け野原になるの意味が身に染みて理解できた。

さつきから所かまわず小型ミサイルだの爆弾だのをまき散らしまくる——本当に歩く災厄。

ビルは壊すわ、地面は焦がすわで……あげくの果てには小型のアラガミまですり潰すわ……。

……ここまで徹底していると逆に何か凄い、とさえ思える。

「ゲホツ……うう……また砂があー」

砂というよりは、砕けたアスベスト。

ジャリジャリという食感を楽しみつつ、このデカブツを拓けた場所まで誘導した。

若干高い場所から銃弾の雨がテスカトリポカ目がけて降り注ぐ。

「喰らうがいい！ 闇の眷属よ！」

「誘導班よくやった！ 総員散開！」

怯んで動きが止まった巨大戦車のアラガミ。

だが、それは次の攻撃の予備動作にすぎないようだった。

またしても、こいつの周りに集まる自然現象じゃ有り得ない光。

「またですか……またデスカああ!!」

もうやだ……フライアに帰りたい……。

「いや……コレでいい！」

何故かアーサーさんは自信満々だった。

本日2度目のバカつと開き……見たくもないコイツの内部と、そこから湧き出す呆れる程巨大な近代兵器。

だが、今はさつきと違う。

これだけ神機使いが四方八方に散開していれば、奴だつてどこに狙いを付けるか分からないハズだ。

「……」

そのはずだ……つた。

そして。

こともあるように、

極太ミサイルは、

私の方へと、飛んできたのです。

「ほ、骨は拾ってください……!」

ひよっとしたらコレが最期の言葉になるかもしれない。
音速並の速さで迫るデカ弾頭。それを回避する手段は……

地面に這いつくばることしか、できなかった。

頭スレスレを——実際にはもうちよつとあつたらしいけど——超速度の大人の頭程ある物体が飛んでいく。風圧で頭皮がゴツソリもつていかれるんじゃないか、とさえ思えた。

遙か後方でトンデモナイ爆発音と、何かが崩れ去るような轟音が反響する。

……何も聞かなかったことにしよう。

「怖あああ!」

ガンガン射撃形態に移っている仲間たち。

よっしゃ、このまま殲滅だ……と思ったところだった。

テスカトリポカが、こつちを見た。

「……あ、あの……」

ロ、ロックオン……??

結合崩壊し、割れた緑フェイスが私の方をガッツリ向いている……。

モシカシテ、これ死んだ? あのキヤタピラかで轢殺される未来が見える? 大きくなる心拍だけが嫌に耳に響くその時……。

奇跡が起こった。

「なっ!? テスカトリポカが!! 進まないですと?!?!?」

「…………えつと…………何が起きてるんですかね…………」

目を疑った。

何だか頑張つてもがいているみたいだけど、そのデカイ体が全然ちつともコレツポチも前進していない。

…………というか…………どんどん…………沈んで…………いつてる……………………?特に根拠もなくそう思った。

「ま、まさか…………? まさかのまさか!」

「はっ! このあたりは人間様の土地なんだよ。地質調査はガツツリやっってるんだよ!!」

「ああ…………この周辺は泥地帯だからな…………」

ドヤ顔なロシア支部の男性陣。

「アレ…………キヤタピラ回ってんのか…………そうか…………泥に足を取られて回っても進まねえのか…………」

「…………履帯の使い方を正しく理解したが故の悲劇だな」

あさながらアラガミ式無限アリジゴク。

もがけばもがくほど沈んでいく仕様。

「そう言えば言ってたね…………何で寒波と一緒に出撃なのかって言ってたね…………歩きやすいって…………そうゆうことだったんだあ…………」

「ふむ、気候や風土、地形までもを戦術に入れたミゴトな作戦だ…………見たか闇の眷属よ! ……これが人類の力!!」

と、高台の上からナナちゃん&エミールさんのハンマーコンビがぼ

やく。

つまり歩きやすい理由は、この泥土の中にある水分が寒ければカチカチに凍って勝手にコンクリートと化すからだ。それをアーサーさんたちは『歩きやすい』とか言ってるやがったのだ。

だが、テスカトリポカのさっきの高熱を一気に放出する戦い方で……氷が解けて……。

……。

機械内部まで泥が入り込み、完全に身動きのとれなくなった宿敵は虚しくキヤタピラをぐるぐるぐると同じ場所で回し続けるだけだった……。

「……いや歩けばいいだろ!？」

ロミオ先輩正論。

「総員神属性バレット装填！　オーンプルは箱で持ってきた！
打って打って撃ちまくれ!!」

「いやジュリウス……戦法が正しいことは認めるからもつと言葉選ぼう!？」

「奴の息の根を止めてやれ!!」

「だから言い方選べって!」

「黙って撃つてるトリガーハッピー!」

「違えよ！　アレは撃つてると楽しくなってくるだけだつて！　誰でも一度はあるだろ!？　……え？　ある……よな……?」

「ねえよ、黙って仕事しろよ変態」

「……あゝ？　テメエに言われたくねえよクソゴリラ」

「エミール！ キヤノツオオオオン!!」

「命中〜！ クリテイカルヒット出たよ！ もつと撃つちやつてーエミールさん！ でもちよつと角度修正かな？ 右にあと15度！」

「エミール……シヨットオオオオオ!!」

「次は上方修正〜〜！」

……今気づいた。

自分……膝……埋まつてるんですけど……。



その後無事にサクツと討伐でき……コア回収にかなり手間取った後。帰投までの時間を各自物資回収にせいを出すことになった。

ヘルマンさんたちが意気揚々と『モシカシテ袋〜』と言って胸元から何やら取り出したというビツクリ事実は……私にとつて忘れられない光景となったでしょう……。

みんなとても手慣れているらしく、とにかく使えそうなものは何でも袋に詰めていった。

そこでアーサーさんに金属片を拾いつつ、切り出してみる。

「オリガちゃん、いつもあんな戦い方をしているんですか……？」

あの娘はかなり捨て身な戦い方をしていた……そのことを、問いたださずにはいられなかった。

アーサーさんの顔にやや暗い影が差す。

「……ああ、アイツは元々『そうゆう』所に居たんだよ。けど、辞めろつて言っても聞きやしねえし……」

そこで一度言葉を区切った。

続く語句を探すかのような間を取る。

「……『それ』以外の戦い方を知らねえんだと」

「……」

「悪り、だけどコレはオレらの問題だから。『ブラッド』の足は引つ張んねーよ。それにさ……」

オレは……決めたんだ、もう二度と仲間を失ったりしねえって」

アーサーさんは、言い切った。

何だか、どこか遠くを見ているかのような……それでいて、過去を心底悔やんでいるかのようにだった。

オリガちゃんの戦い方は……確かに前衛としては……ある意味『お手本』のような戦い方なのだろう。

そもそも前衛は身を挺して後衛たちの盾になり、最後にトドメを刺す——捕食を行うことにこそ意味がある。精密攻撃やデカイ一撃は後衛の仕事だ。それがゴツドイーターの基礎戦術。

特に第一世代はその役割区分が明確になる。

……だからと言って彼女の戦い方はあまりにも正し過ぎる。

「……」

だが、それに反論するだけの素材を私は現在持ち合わせていない。批判するのには……知識や経験がまだまだ足りていないのだ。

と、いつも通り後ろ向きな思考を煮詰めていると、アーサーさんが唸っていた。

もしかしてまた怒らせちゃったのかも!? と不安がこみあげる。

「……なー、神威さん？ アンタさ、前にロシア支部来たことない？」
「……はい？」

出てきたのが質問でスゲエ安心した。

ざっと記憶を探してみる。

そりや子供の頃——今ほどアラガミがヤバくなく、一時の騒ぎも収束していた頃——世界各国を飛ばされまくった両親にくっついて、兄と二人で色んな場所に行った記憶がないこともない。

だが、年齢が二ケタになる頃にはすっかり定住していた。親——特に父親とは数年マトモに会うことさえ出来なかった時期もあるが、基本的に支部内の『家』と学校、その他内部の居住区から出たことはない。

「すみませんが……もう覚えてないって位子供の頃にはあるかもですけど——」

「えー……じゃー違うよな……何か、オレ神威さんの顔に見覚えがあるんだわー……まあ全然思い出せないんだけどな！」

「もしかしたらスングイ子供の頃か何かにとっかですれ違ってたのかもですか？」

「うーん……何かそんなロマンチックなのじゃなくって……まあいいや。多分オレの気のせいだわ忘れて」

「ですねー！」

多分きつとそうだろうという事にして私は疑をぶん投げることにした。

オリガちゃんが何か見つけたらしく、こっちに手招きしている。

「神威さーん！ 皆さあーん！ 何か凄いのありましたよ！ 見て見てくださいー！」

一体何を見つけたのでしょね彼女は……。

どーせロクなモノじゃないよね……と期待しないでおいたけども、

彼女が見つけた『それ』は、思っていたよりも遥かにちゃんとしたものだった。

「……石？ 碑文？」

「持って帰れないかなーコレー」

「無理じゃないかな……って何に使うの!? え?! 持って帰るのコレ!?!」

「いや、だって? こんなもんでもバリケードとかの代わりに置いておけば役に立ちそうじゃないですか!」

「……」

既に市街地戦を始める気満々だよこの子……?

一体ロシア支部とは何なのでしょう。この間から文化の違いを思い知らされるようなことばかりです。

今まで自分がいかに視野の狭い人間だったかをよくよく思い知らされます。

ですが、こんな世界知るんじやなかったと後悔している自分も確かに心の右端あたりで体育座りしています。

「何書いてあるんでしょーね? コレ」

「何か……詩、かなあ……?」

あまり文学には明るくない。特に異国の文化には。

もっと勉強しておけば良かった……! と心そこから後悔する瞬間である。

後からゾロゾロやってきたブラッドの仲間たちがその石を囲み始めた。

ロミオ先輩やナナちゃんが慣れないキリル文字を目で追う。

意外なことに、真っ先に解読したのはギルさんだった。

コイツ……まさか文系だったのか……!?!

一抹の予感と共に、程よく響く低音ボイスが朗読を開始した。

もし、あなたが人生に裏切られても
悲しんではならない、怒ってもならない
あるがママを受け入れなさい
喜びの日は、きつとまたやってくる

「何だよギル。知ってたのかよ」

「すつごーい！ ロシア語知ってたの!?!」

「いや……何だ……？ 勝手に頭に……」

「つてかまだ続きありますよねギルさん！

続き続き！ お願いしま

すー！」

「オリガちゃん何気喰い付き強い!?!」

心は未来を向いて生きている。

たとえ、今は辛くとも

全ては束の間、全ては過ぎ去っていく

全てが終わった時

苦しみさえも愛おしくなるのだから

「……………ドM……………?」

うつかり発した言葉に、仲間たちがガクリと脱力。

「お前なあ……………」

「神威さん……………」

「これ提案なんだけどね、もう唯ちゃんね、黙ってた方が良いと思う……………」

「そ、そこまで言わなくても……………！　だ、だって！」
わざとじゃない。

ただ、本当に心底……………一瞬頭をよぎっちゃった考えがソレだっただけだ。

苦し紛れにギルさんを見る。

「受け取り方なんか人それぞれだろ。あんまり……………誉められたもんじゃないけどな」

「ギルさん……………」

マジでギルさんが良い奴で良かった……………！

本当に良かった……………！

「そんな包容力のあるギルに提案。ちよつと口と鼻以外で呼吸して何秒生きれるかという人類の為になる実験に協力してみるとフェンリル本部から死亡保障と言う名の賞金が出るってよ」

「遠慮しとく、そう言やロミオ……………呼吸と言えばお前の吸ってる酸素勿体ねえな」

「……………おいゴリ助表出ろ」

「ちよつとー。何でそんな鼻息荒いのー？　もー、仲良くしなよーー！」

オリガちゃんがやや呆れたように、私たちを見ていた。

「何というか……………まあ、皆さん強いんですけどね……………」
「うう……………」

「でもまあ……気取ってないって方向性で考えましょー！　そうゆうのって大事ですよ大事！」

もう無理やり言ってる感満載だ。

「っていうか、そもそも無理ありますってば！　……苦しみが愛しくなる時なんて、来るわけないのに」

「……」

「私別にDMじゃありませんし……まあ将来的に目覚めない可能性も無きにしも非ずですけどね!!　苦しい事とか悲しいことって続きすぎるともうどうだってよくなっちゃいません？　そんなことよつか、毎日生き残ることに必死だと苦しいとか悲しいとか言ってられないくありません？　そーゆーもんですって！」

「……そう……なのかな……」

「私はそうだと思ってます。ロシアにはこんな諺があるんですよ」

『悲しみは海にあらず、すっかり飲み干すことが出来る』

オリガちゃんはそう言った。

「苦しみとか悲しみなんてカパカパ行っちゃいますよ！　飲み干せば何も辛くないって！」

「……」

明るい彼女が、なんだか痛々しかった。

この娘は……。

「そんなことよりも、自分の中は楽しい思い出でいっぱいにしときたいんです。そうしたら、たとえ居なくなっても……頑張って生き残ろうって気にもなりますって」

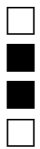
「……そう、だね……」

一体、この娘は

「だから、楽しい思い出作りたいな……と提案しましたところ！」

オリガ・アンドレーヴナさん！

これは良くない！ 良くないよ!? 悲しみしか生み出さない未来が見える……私には未来が見える！ 悪いことは言わないからやめておいた方がいいって……え？ 隊長……!? な、なぜココニ……!? 話は聞いたですって……!? 待って下さい何故そんなにノリ気なんですか!? フライア全員参加だから……って知りませんよそんなこと！ こうしちやいられないって……ど、何処行くんですか隊長!? 隊長!! 隊ちよおおおおお!!」



「……ほつといてよ……」

「放つとけて……お前いくら『ゴッドイーター』でもこの気温でそんな恰好じゃ凍死だろうが!」

「……ほつといて……」

「馬鹿が……いいから来い!」

強引に掴みあげられた腕から寒風が吹き込んでくる。霜が降りたまつ毛が重かった。

開けた視界には嫌になるくらいの灰色の空と、どこまでも冷えた固い白い大地。

吐いた息が白くなって、下に落ちていった。

この気温だと、ただ馬鹿みたいに息を吸えば喉を傷めて、肺が凍る。なのに、そいつは、大声を出した。

まるで寒さを吹き飛ばすかのように。腹の底から大声を出した。

雪の中でもよく目立つ——赤い髪。

そして右腕に嵌るおおきな……赤い腕輪。

あまりの身勝手さに腹が立った私はそいつを思いつきり怒鳴りつける。

「放っておけって言ってるでしょ!! 私なんか……! 私なんか!!」

「……おい」

「どうせ使い捨てにするくせに!! 皆……リーリヤもターシャもヴオロージヤもみんな……アンタ達の盾にされて死んだんだ!! どうせそうやってボロ雑巾扱いするんだから声なんかかけて来ないで!! ほつといてよ……私なんか放っておいてよ!!」

カチコチに凍っていたハズの両手を拳にする。

私たちは……正規のゴツドイーターにはなれなかった。

簡単な訓練だけをされて、妙な薬を与えられて、すぐに戦場へと叩き込まれた。

今ならわかる。

初めから私たちは生き残りの勘定なんかに入れられていなかったのだ。

はじめから『全滅』させる為だけの……本当の意味での『人類の盾』で『壁』だったのだ。

「うっせえ喚くな!」

掴みあげられた腕から雪の上に投げ飛ばされる。

最早、冷たさなど感じる余裕もなく……ただ、ただ痛かった。

そいつは怒声を張り上げる。

「いいか！ 簡単に自分のこと傷付けるようなことしてんじやねーよ馬鹿!! んなことしても誰も褒めねえし誰も心配しねえよ。もうガキじゃねえんだ……自分の面倒ぐらい自分でしっかりみやがれ!! ひとりで勝手に死んでんじやねえ!!」
「……」

胸倉を掴みあげてくる。

結果的に、これでもかという程顔が近づく。

「いいか！ しっかり貰うもん貰ってんだから……勝手に死ぬとか抜かすな!! 拾った命だったら無駄に捨てんな!! テメエが死んだ奴らの分までアラガミぶつ殺す位の根性見せろ大馬鹿野郎!!」

その時、寒さでカチカチに固まった前髪が風に吹かれて、不意に視界が開けたような気がした。

正規の神機使いだろうソイツは、私の顔を見て一瞬、何か信じられないようなものを見たような表情へと変わる。

それはきつと、私が疲労やら栄養失調やら睡眠不足やらで酷い顔になっていくから、とかじゃない。

今時のロシア支部所属の神機使いはその程度は常識であり、驚くに値するようなことではなかった。

そいつの表情は、色々と複雑だった。

驚愕と衝撃……そして、わずかに歓喜が入っているような気もした。

まるで。

そう、まるで。

『懐かしい仲間』に再会した——そんな顔だった。

「……オレー……シヤ……？」

口にされたその名は。

どこか似た響きを持ってはいるもの——確かに私のものではない。

『誰か』の名前。

phase 23 あの日見た荒神の行方を俺達は誰も知らない

「やっぱり……ちよつとスースーする……」

辞めておけば良かった。

心の中でそう思いつつも、もう後には戻れないことは分かっている。

こうなればもう……腹をくくるしかない。

そうしてけなしの決意をぎゅうぎゅうに固める――

行こう……!!

「終わったー?」

「うん……うん、大丈夫……」

と、お隣のカーテンから聞こえるナナちゃんの声。いいなあ、あの子は……と思いつながら彼女のいつもの服装を思い返してみる。

太ももむき出しのショートパンツ、丈の短い上着。そしてインナーは辛うじて大事な部分を隠しただけのチュートップ……。

普段がアレなだけ、羨ましくもある。

だって、こうゆう時困らないから。

「じゃー……せえーのっー」

ナナちゃんの声と共にカーテンが思いつきり開かれる。戦友と10分ぶりの再会。

そして思わず我が目を疑った。

「ずるいよ!! ずるい!!」

「何が?」

「だ、だって……!」

その手があったか……! クソツ……どうして気づかなかったんだ!
だ!

なぜなら香月さんのお姿は。

「スク水だなんて……!!」

「スク水……? 制定水着のコト? ベつに普通の水着なんだけど……」

「そうだよ!! 普通の水着だよ!! ずるい! ナナちゃんずるい!!」

普段からあんな格好してケロっとしているクセに……!!

何ということでしょう。香月ナナさんは水着を着用することによってかえって肌面積の露出度が低下しているのです。普通逆でしょ。納得いかねえよ……。

全体的に紺色のシンプルなデザイン。いつもは冷え性が心配になっっちゃうむき出し丸出しのお腹は今日に限って布地がぴったりと張り付いている。そこからすらりとした健康的な手足。

頭はいつもの偽猫耳。

「ずるいよお!!」

「え〜? そんなこと言われても困るよ〜?」

けど、と彼女のやや赤みを帯びた目が私を映す。

そしてにこっ……と——と言うよりはニヤッと意地悪く笑った。

「張り切っちゃったねー唯ちゃん!」

「言わないでー!」

「えー? どうしてどうしてー? 似合ってるよ! かわいい!」

もうどうっちかというと、餌を見つけた捕食者の目。

「まさかそんな大胆にビキニを着るとは思わなかったよー!」

!!

「うう……！ ひ、ひどい……！」

「オレンジ色を基調とした色合いに黄色の花を染め抜いた意匠。胸の上と腰で結ぶタイプの脱げそーな脱がしやすそーな水着だねっ！

上下各5820fc（税別）でしょー？」

「何で知ってるの!? リサーチ完璧なの?!?」

ナナちゃんは応えない。

都合の悪いことは答えない。

「だ、だって……！」

言い訳をさせてください。

私が……ですよ……。この、私が。

なんでこんな水着に挑戦しようと思ったのかという訳がある。そう……仕方ないことだったのだ。

水着必要、そうだ、ダーミナルに行こう。

すると現れた4タイプのまぶしい水着。こんな無理！ なので酒保に行けばもつと地味な競泳用の水着があるだろう……と、思っていたのだ。

オモツテイタノダ。

ロシア支部の酒保どうなってんでしようね……キツレキレの女性用水着とかマイクロビキニとか最後にはもう水の中で溶ける水着とか……。

そうだ……仕方なかった……コレしか……なかった……。

きつと、ナナちゃんもすごい水着だろうなーと思っていたのだ。

……ミゴト外れたけど。

「う、上着を!!上着とってくる……！」

「えく？ 何でよー？ 恥ずかしがらなくつていいのにつ！」

「無理だよ!! 無理……無理ったら無理……！」

「駄目ー。大丈夫大丈夫、可愛いんだから自信持ちなよー？ ね？」

「で……でもお……」

マジで無理……同性の前ですらこの様なのに……。

……異性の前だと本当の本当に……何しでかすか分からないんだよ私!?

「大丈夫だからーきつと、隊長も先輩も可愛いつて言ってくれるよ!!」
「……………」

男性隊員二名の名前を出されて顔から水蒸気が飛び出る。

客観的には真っ赤だろう。

……無理だ……やめよう。怪我が治っていないとか適当なパチこいで欠席しよう……………」

そう覚悟を決めて踵を返した私の手を、ナナちゃんが逃がしてくれ
るハズもなかった。

「ふっふふー！ 逃がさないよー!!」

「ごめんなさいナナちゃん！ 私には……私には無理だよこんなの
!!」

「無理じゃない諦めたらそこで人生終了だよっ!」

「ナナ……………」

ナナちゃんが背後から強襲。そのままホールド状態に持っていく
!?

一糸まとつてない状態の背中を……細い指がつうーっとなぞる

……

「ひっあん!?!」

やだ。

ナニコレナニコレナニコレ……………」

ナニヲしようというのですか……ナナちゃん……ナナちゃん!?!

「逃げちや駄目なんだからね！ えっへへへへー」

「ナ、ナナちゃん顔近いんだけど……………」

「しってるよ……唯ちゃんは……耳の後ろが……弱い」

「や、やだあ……………」

「んっ……素直じゃないねー？ でも強情張つてもイイコトなんか
ないんだよっ!」

「……………」

「行こう……？　ね……唯ちゃんっ……？」

「やっ……ん……っ……！　……………っ！！」

「はい陥落ー！！　お風呂お風呂」

「はあう……………」

くったりした私は…

なすすべもなく、彼女に引きずられていったのでした。



「遅っせーぞー何してたんだよー？」

「ゴメンなさいっ！　女の子には色々準備があるんだよ！　ロミオ先輩！」

「一体何の準備があるんだよ……っておい!?　どうした!?　どうしたんだよ唯!?　始まる前から何かデキ上がってんぞ?!?　しかもなんで内股気味なんだよ……!?　何があっただ……女子更衣室……」
「全部ナナちゃんのせいなんだからあ!!」

一応個別設置の洗い場で体をじゃぶじゃぶした後である。コレが

温泉マナーらしい。

律儀に待っていてくれていたのかロミオ先輩マジ先輩。やっぱり彼も水着だ。

一体どこで手に入れたのか黒地に脇にオレンジ色のラインの入っている……先輩の神機色のサーフパンツだ。その上は細身な上半身。そして気になったのが……

「水泳帽……」

「わ、悪いかよ!? しょうがねえだろお! ……いつものニットは持ち込めねえんだから!!」

「一体何がロミオ先輩をそこまで……」

「そうですよ……そこまでして毛根を……」

「ハゲてからじゃ遅エンだよツ! 何もかもツ!」

「髪の話をしましたね!? 今!! 髪の話をしてしまいましたねエ!? 若いくせにイ! フサフサの癖につつ!!」

話の途中で、オッサンが乱入してきた。

このお方はクジヨウソウヘイ博士。『神機兵』の方の研究をなさっているお方らしい。

チャームポイントは今本人が言った通り……とお……つても……広い……額。

そして薄い頭。

髪の薄い頭。

「羨ましくなんかありませんからねええええ!!」

……そんなわけで今日はフライアの研究職の人も来ているらしい。とは言っても全員ではない。監視やルーティンワークを止めないためにも、事務員や警備員はほとんどが来れていない状況だ。

まあ、今日はそんなアラガミ居ないから大丈夫だろうという訳で、戦闘員と一部研究職がこうやってお休みを頂いているだけにすぎない

い……フランさんなんかやっぱり今日も働いてるし……。

「ブラッド全員、揃ったようだな」

ペタペタと水音をたてて、向こう側から誰かが歩いてくる。そう、この流れでは……。

……。

見たこともない超絶美形が現れた。

「誰!？」

「あ、あれ……う？」

「お前らなあ……」

いかにも生真面目そうなハーフスパッツな水着。腕にはひのきの洗面器。首には極東文字で「ゆ」の字が書かれた綿製手ぬぐい。

その完全に温泉満喫する気満々の姿勢といい、思わず眩しすぎるオーラといい……やはり『彼』なのだが……。

「俺だ」

そのテノールは皆の隊長、ブラッド隊長。ジュリウス隊長のものだった。

「バナナは!? バナナどこいつちやのー!?」

「隊長のバナナがない?!?!? 隊長のバナナがない!!」

「ど、どどどどどうしようー!バナナがないよー!?!」

「お、お気を確かに隊長!!」

「確かだが?」

キョトンとすんな。

「オイ、温泉で女子がバナナバナナ連呼すんな!!」

「だって隊長のバナナがないんですよお!? アラガミが出る! これ、ゼツタイアラガミが出る!」

「髪型変わってるだけだろ!? 認識できないの!? え、認識できなくなってるの!? お前らにとってジュリウスって一体何なの……!?!」

「ピクニックバナナ」

「……ひよっとしてオレも帽子取ったら認識されねーのかお前らに……」

「やだなー。ロミオ先輩はロミオ先輩だよ」

「……え? な、何だよ……おい……」

そうなのです。いつもは頭の上に乗っているバナナ（型の髪の毛）が……今日は……存在していなかった。

普通のポニーテールになっている。ただいつもより低い位置で結んでいるだけなのだが……一瞬、ほんとに、誰かとオモッタ……。

あといつもの変な服……じゃなくて貴族っぽい服着ていないのが悪い。

この人意外と着やせする体質だったらしい。腹筋バツキバキに割れている。スゲエ筋肉だ。

「何だ?」

「い、いえ……」

「ああ……コレだな」

何かを勘違いしたらしい隊長がヒノキの洗面器の中身を指さす。

「た……卵……」

とつさに鶏が近くに居ないか確認する。

……よし、居ない。今回は大丈夫。

「極東ではオンセンタマゴなるものが存在するらしいぞ。湯に30分ほど浸けておけばできるものだと言う。幸いにも生卵が入手できた。全員で食べよう」

「……あー……はい。はい、そうですね……」

そんなキツラキラした目でこっちを見ないでほしい。

一体誰でしょう、こんなことをうちの隊長に吹き込んでしまったのは。

「フム……。これがロシア支部の温泉か、実に趣深い！ まさに!! 美肌と長寿と健康の秘訣！ いい旅湯けむり気分・フォン・エミール!!」

……こいつか。

「この温泉の秘湯を是非我が魂の親友の妹にしてこの僕的朋友たるエリナにも堪能させてやりたかった……!」

ちなみに、エミールさんの水着はキラキラに光る紫ビキニパンツ(男性用)。

「世界は今日も輝いているツ!!」

「エミールさん、コレを沈めればいいのだろうか?」

「Ja。だがこのままでは採れたてピチピチの卵たちが拡散してしまう恐れがある……だが！ 心・配・無・用!!そんなときの為にっ!

オラクル繊維練り込み済綱くく！ さあ、この中にタマゴ達を入れ給え!! さあさあさあ!!」

「30分か……長い……」

隊長は30分タイマーをセットして、マダカナマダカナ……とまるで5歳児の様にワクワクして、タマゴ群を見つめていた……。

「う、ああ……エミールさんに……持ってかれたあつ……!」

「……唯ちゃん……。……そう言えばギルは？」

「アイツなら何か頭が悪いとか頭痛が痛いとかボヤキながら医務室行った。多分来ないな」

「おーいブラッドオー？ 何かジュリウスさんが面白れーコトやってるって聞いたんだけどー……。おー……。？ え、マジで何やってんの……。？ つて、うわっ……。水着だ……。！」

「……。いい年した男が一人で膝を抱えて水底を見つめている……。？」
見たまんまを口にしながらロシア支部の遊撃隊の皆様が現れた。
やっぱり二人とも水着着用。

アーサーさんはやっぱり赤い海パン。ヘルマンさんの方は……。何故かヒョウ柄のド派手な物だった。趣向と中身と外見がとことん噛み合わない奴もいたものだ。

やっぱり眼帯は外せないらしく、医療用のモノを付けている。

そして、相変わらずヘルマンさんは首から下しか見ていない。しかも、目線がちつとも嫌らしくないのが逆に嫌だ。

「……。良い水着だな、胸に合っている」

「……………」

歪みねえなこの人。

「えー……。あ、そだ。オリガちゃんは来てますか？ というか一緒にじゃないんですか？」

「ん？ な、何神威さん……。あーオリガだよなオリガ。あいつなら……。あれ？ さっきまでそこに居ただけだな……。オリガー？ おーりーいーがぁー？」

まるでペットを呼ぶようにオリガちゃんを探すアーサーさん。
すると、少し遠くで黄色い声が上がった。

「既婚者ですかー？ 局長さん！ 局長さん！」

「辞め給えよ!? 辞めんかね君い!？」

「そうおっしやらずに！ そうおっしやらずに！ おじ様ドストライクなんですうー！」

「何がだね!？」

「決まってますね!……ハゲかけた頭、薄くなった髪……加齢臭とヤニ臭さの混じった体臭……。そして小太りで……毛深くてえ……やっぱり加齢臭のする……っ……も、もうっ！ 何言わせてるんですかあー！ 恥ずかしいなあ……!？」

「本当に恥ずかしいと思ってるのかね」

「今夜……お暇ですか……?？」

「生憎仕事を今入れる予定だ!!」

「じゃあお食事だけでもっ！ お食事だけでもー!!」

「却下だ!! 何なのだねキミは!？ もっと自分を大事にしなさい!!」

「えー？ そんな照れなくてもくく」

「オリガアアアアア!!」

「うっわ……」

「……うっわあ……」

金髪スラブ系美少女オリガちゃんは何か今日はハリキリガールだった。

長いストレートな金髪は今日は下ろしてある。ソレはソレでとても可愛かった。

水着は薄い黄色のチューブトップとスカートで……年齢と細い体に不釣り合いなポリウレムたっぷり胸を、ぐいぐいぐいと押し付けていた。

……グレム局長に。

「いいじゃないですか局長さん！」

「良くないから言っているんだがな!? キミ、君の部隊の隊長は何処だね!? 責任問題だ!! 監督不行き届きで減俸してくれる……!」

「きやーっ! アーサーさんピーンチ……は、どうでもいいとして……局長さあくん、ねえ局長さあくんっ?」

「何をしているんだね!? や、やめ……」

「どうしてダメなんですかあ……? 私が……神機使いだから……ですかあ……?」

コケティッシュな顔……具体的には上目遣い&涙目というコンボで迫りつつ、局長の腕を壮大な胸の谷間へと沈みこませるオリガちゃん。

さあ、局長は理性を保つことができるのでしょうか!? 百戦錬磨のオッサンは美少女のアブナイ、イケナイお誘いを躲すことができるのでしょうか!? それともこのまま交わしちゃうのかー!?

「ふふふっ……あらあら、お嬢さん? あんまりうちの局長を苛めないであげっ……きやあっ!」

局長危機一髪! なこの状況に湯煙の奥から現れたのは……グラマラスボディを持った女性だった。

長い赤毛と理知的なのに婀娜っぽい美女。チャームポイントは泣きぼくろなお姉様。レアークラウディウス博士。

このお方も……予想通りというか、やっぱり純白の、しかもかなり上質な素材なビキニを身に着けておられる。すらっとした長い足と、程ほどにお肉のついた柔らかそうな腰つき。そこからきゅっとし

まったお腹への曲線はとてもなだらかで……同じ女の私から見ても素直に綺麗だと思える。

豊かなお胸は純白のビキニで締め付けられており……今にも弾けそうだ。

彼女自体はもうハジケちやつた後だったのだが。

「レア博士ええええー！」

「きよ、局長ー！ー！」

お色気ムンムンの美女の長い足が、今回は局長の局長にアタック。不幸中の幸いだったのは……レア博士が何も履いていなかったということ。レア博士の生足が局長の布地一枚の場所を正確にシュート！

そのまま局長はレア博士と共に……水しぶきを派手に上げて、散つていった。

前も思ったが、何故何もない場所でコケたのでしようね彼女は……。

「局長おおおおお!!」

「ありや……あらららー？ え？ 何何？ そうゆう関係だったんですかフライア!? やだーもー！ やだなあくもうっ！」

オリガちゃんが顔をわずがに紅潮させてきやあきやあ言ってる。

「局長おおお!! 何やってんですかあ!! ロミオ先輩浮き輪ー！」

「何か今すっごい音したけど大丈夫……ってレア博士!? あ、あんた何に顔突っ込んでんですか!? つかそのくっせー足誰の……うわあ!

局長だ?!?」

「やだねー、ここはそうゆうお店じゃないよ？ 勘違いしないよねっ！」

「え……!? お前ら状況判断早くね……? な、何が起きたのかサツパリなんだけど……!?!」

「豊かだが、ドジな胸だ。だが、素晴らしい」

「ああ……局長……！ ごめんなさい局長……！ 私のせいで……全部私が悪いの……っ！」

「本当そうですよ反省してください!!」

「すげえコレ……犬○家みたいになってる……」

「何言ってるのロミオ先輩ってばっ！ そんなシンクロ・ナイズド・グレムスロワみたいなこと言っちゃって」

「えと……ええつと……オリガが逆ナンしてて……赤毛の女の人が出てきて……そっから分かんねえ……?」

「アーサー、お前も男なら、あるがままの胸を見ろ」

「人工呼吸ですか!? やりますけども！ 私やりますけども！」

意味もなく局長の唇を奪っちゃおうとするイケナイ美少女を引きはがしつつ、局長を見守る神機使い達。

常人より優れた運動能力を持っている神機使いがこれだけ居ても……この悲劇を食い止める事ができる人間は誰一人いなかった。

局長の目がやはり虚空を彷徨う。

「レ、レア……博士……足元には……注意し給えよ……?」

「きよく……ちよう……!」

「局長おおおおお!!」

「良かった、卵は無事だ」

何か隊長は一人でボヤいていた。

phase 24 あの日見た荒神の行方は結局誰も知らない

局長が撃破されて後……何事もなかったかの如く粛々と温泉会は続くのだった。

乳白色のお湯に足先から浸していく。

嬉しいことにこの温泉は本物。

今の時代、ほとんどの大衆向けの入浴施設は、大抵はアルカリ性の冷却水を沸かしたお湯に合成入浴剤使用の温泉しか入れないのだからこうやって本物の温泉に入ったのは……記憶に残っている限りだとかかなりご無沙汰になる。

「このお湯でお肌すべすべになれそうだねー」

「このところガサガサだったもんね……」

主に前回の寒波出撃の際の乾燥と低温度のせいだ。

だが、今は戦場も戦闘も忘れて、こうやって呑気に温まっていたい。

ナナちゃんが大きく腕を伸ばした。

「ナナちゃんって……肌、綺麗だよね……」

「えへへへへー。そうー？ 私は唯ちゃんの色白の方が羨ましいよー

？。こればかりはどうにもならない」

いかにも健康的、な血色のいいお肌を見つめる。

肌理が細かくて赤ちゃんみたいだ。確かに肌色だけならメラニン色素というレベルの含有量は私の方が少なくは見えるが、生粋の極東系の肌の綺麗さには到底敵わない。

「お母さんはもつと白かったんだけど……」

「へえくそうなんだ。遺伝子の神秘？ それともイタズラ？」

「……うう……ナナちゃんはどうだった訳……」

「私？ 私はねー」

急にナナちゃんが頭を、正確には後頭部を手で押さえた。

「あ、あれ……？ 私の……お母さん……」

「あ……」

いくらか動揺した彼女を見て、私はやっと自らの過ちに気が付く。そうだった。うっかりしていた。

……つい忘れがちになるのだが、一見エリート部隊と巷で呼ばれる『ブラッド』は、実はほとんどがマグノリアAコンパスという孤児院出身だということ。

孤児院ということは……

……つまり、そうなのだろう。

世間知らずで甘ったれの私でも最近やっと分かってきたことがある。

今のこの世界で、親が居て、家族をひとりも失っていないくて、毎日食べるものにも寝る場所にも困っていない、そして何よりアラガミに怯えなくていい……そんな『当たり前』で『普通』な世界で生きている人間なんて、実はごく一部だったということに。

「ご、ごめんねナナちゃん……！ その……」

「うーん……実は私よく覚えてないんだよねーお母さんのことー」
「え？」

一瞬だけ苦しそうな表情を浮かべたナナちゃんは、すぐにケロっと戻った。

「お父さんなんか全然だし、お母さんのこともおでんパン以外はあんまり覚えてないんだー」

二人が死んじゃったとき……私……そんなに小さかったのかなー？」

「……そう……なんだ……」

そんなことって、あるのだろうか。

何かひっかかるものを感じながらも、結局は何も言うべきことが見つからなかった。

「どうなんだろうー？ まー今度ラケル先生に聞いてみるよー！」

「……そうだね……ん？……ラケル先生……？」

……そう言えば何故、彼女は今ここに居ないのでしょー。

「まあ、みんな楽しそうに……。……。ところでグレム局長が先ほど医療班の皆さんに運ばれていきましたが……。それもまた、やがては来るべき最後の『晩餐』にともされるべき生贄の子羊……。と言ったところなのでしよう……。」

「ご降臨……。なすった……。」

「嗚呼、それにしても……。私の子供たちが、肌をさらしたあられもない姿でこうして乳白色に浸かっているというこの状況は素晴らしいものね……。そう思いませんか？ お姉様」

「え？ え、ええ、そうね……。ラケル」

レア博士……。貴女という人は……

……。まあいいや。

ツツコミたい衝動はここは押さえて放置して、完全密封にしておく。

なぜなら、今は——それよりも突っ込まないといけない事象があると、考えたからだ。

ラケル先生の水着……

……それは……

低露出だった。

—— 低露出だった。

一瞬ナナちゃんと同じ系統かな……？ と思えるようなスクール水着にも似た形状にも見える。だけど胸のところは大胆にアレンジされておりラケル先生の貧……ちよつとお上品な、つつましやかなその場所をきゅつと締め上げるかのように上に寄せてあげてある。

黒色統一された配色もあいまって、普段から限界まで漂白されたかのように白い肌ときつくりとコントラストを形成。

さらに下半身はパレオをあしらっているので、低露出。

あくまで出している部分は二の腕と胸元だけであり……ラケル先生のまとう上品さや可愛らしさを損なうわず、程ほど妖艶にかつエロく見せているという奇跡の組みあわせだった。

すごい。一体誰が選んだんだろうこんな水着どこにあつたんだろーもしかしてこの日の為に作ったのかなだとしたら本当に凄いなでも奴ならやりかねないから否定できないところがまた……。

「唯ちやーん？ もしもしー？ 大丈夫？ やだ、ちよつと白目剥いてるよ!?! のぼせちやつたのー!?!」

「あー……ゴメンネ……ナナチャン……今ちよつと見たくもない現実から目を全力で逸らしてるンダー」

「逃げちや駄目ー!」

逸らしたくもなるわ。

だつてさあ……。

……だつて、さ……。

「病的にまで細すぎると言っても過言ではない、少女のような幼女のような無防備な二の腕」

「……………お、おう」

「更に衣服に包まれながらも、今は形が露わな胸から腹部にかけてのライン……………起伏に富んでいない曲線」

「……………ああ」

「透けそうで、透けない。体の線を極限まで露わにし……………隠す。見えそうで見えない」

「……………」

「ああ先生……………！ 最高です……………先生!!」

ロミオ先輩が絶望しきった顔をしていた。

一方我がブラッド隊の隊長は小刻みに震えつつ、ガックリと膝をつき天を仰いでいる。

そのままのけぞって頭でもブツケテ昇天でもすればいいと思いましたが。

「ジュリウス……………」

ニットならぬ、水泳帽な先輩は顔を覆ってぼやく。

「そして深い襟切りから晒された真っ白な肌……………あの下にもうラケル先生のラケル先生があるのかと思うと……………くっ……………静まれ俺の愚者の空母……………落ち着けヴォリーショナル……………！」

「……………おい」

「そうだ、統制だ……………統制すればリンクバーストなど……………っ！」

「お前……………分かってるだろうな……………？ こんなところでバーストLv3解放してみる……………いくらテメエがイケメンでエリートでも社会的に死ぬよもう」

「うわあ……やっぱり……ですよねー……デスヨネー！」

「なかなかできることじゃないよねえー」

やっぱり、隊長がお選びになられたのですね。流石です。

さすが隊長です（白目）。

「うっわ……うわあ……頑張ってロミオ先輩……」

「とうかねーああやって隊長を甘やかしてるのも、私ね、どうかと思うんだわー」

「ナナちゃん、ソレ言っちゃったら終わりだよ」

「ナナ……あまり……彼らのことを突き放してはいけませんよ？」

交戦外のラケル先生が会話へと乱入。

「先生、こんなこと言うのもアレですが貴女聖母ですか!? 貴女はあのバナナ乗せたド変態に視か」

「ゆいちゃんーゆっちゃんかーん」

「……んされてるんですよ!？」

「おい」

ラケル先生はまあ、と白魚の様な手で口元を抑えてコロコロと笑った。

普段つけているベールが存在しない分、いつも秘されている少女のような……無垢なお顔がよく見える。

「……あなた達ブラッドは家族。そこには共に戦う戦友として……そして、来るべき世界、次なる世界への『道しるべ』……そう、新世界の『秩序』を表すP―66偏食因子の体現者として血より濃い絆で繋

がっているのですよ?」

「はあい、分かっていますよー先生ー」

「ラ、ラケル先生……」

ですが、とラケル先生は続けた。

「分かります。確かに……二人とも、年頃の女の子、だものね? 同世代の男の子たちと向き合うことが少し照れくさいのも理解できないことはありません……ええ、その様なことは……人類が知恵の実を口にした聖典の時代から紡がれてきた人の営みなのですから……」

「いや別に照れてなんかいない……と、思いますけど……」

「本当? ねえねえ唯ちゃん本当に?」

「何なのナナちゃんのその喰い付き方!」

「捕食だよ」

「だからこうして見ることも出来るのです。

男の子同士って……素敵でしょう?」

「……は?」

「……」

ナナちゃんが遠くを見る目が変わっていった。

ああ、知ってる……この目、みたことある……と私はその時、そう思った。

これは。そうだ。

聞きたくもない言葉、見たくもない現実。受け入れたくない世界……そうゆうものを、受け流す時の目だった。

「ラ、ラケル……先生……イミガ……」

「分ならずとも良いのです。今は、いずれ貴女も目覚める事でしょう……大丈夫、女の子は皆、その『素質』を秘めているのですから」

「……は、はあ」

ちよつと適当に相槌打ってたらラケル先生の青い目がキラキラと輝きだしてしまった。

その方向性たるや何だかトンでもない方向に薰陶されている様な気がしないでもない……！

「さあ、考えてみるのです……あの場合、どちらが『受け』なのかを！
そして！ 『攻め』なのか……もちろんリバ可か否かも含めての私の考察を……」

「トンでもないものを踏んでくれたね……唯ちゃん……この話長いよ……」

「そ、そうなの……!? そうなの……!?」



突如現れた車椅子の金髪美人をカメラでパシャパシャ撮影していた謎の警備員がしよつ引かれていくのをアーサーは見ていた。

温泉施設で年相応に騒ぐブラッドや同僚たちを眺めて思う。

自分たちはまだガキっぽいところもあったのだ、と。

数年前ではこんな光景は有り得なかった。元々侵攻の激しい支部ではあったのだが、エイジス計画協力での物資枯渇、そこから数年間の地獄から……よく立ち直ったものだ、と。

いや、正確には立ち直ってなどいない。——きつと、何一つ。

アラガミを防ぐだけの壁は直った、支部はやつと機能を回復し、人への配給はようやくマトモに戻りつつある。

……だが、失ったものを取り戻したわけではなく——何より、もう取り返しのつかないモノも少なくはない。

「……これからどーっすか……」

今はオフだと頭では完全に理解しつつも、考えることを辞めるのは出来なかった。

最新鋭の戦力である『ブラッド』が何時までもロシアに留まっていた訳がない。今、此処に居るのは大量に乗せた難民をロシア支部に下ろしたいからだ。その任務が完遂しつつある今、彼らが此処に留まる理由はない。だが、アーサーは一部隊の隊長として、フライアが開発している神機兵は欲しかった。

遊撃隊などを組織しなければカバー出来ないほど、ロシア支部のゴッドイーターは足りていないのだ。

装甲壁のアップデートもしないといけない、だから、何とかして彼らを引き留める方法はないか……或は、短期間で戦力を増強できるだけの『何か』が得られないか。と。

そこで下卑た思考だと、やや自虐的に苦笑した。

コレが他人のことだったら最低なヤツだ、と軽蔑していたことだろう。

一体いつから俺はこんなこと考えるようになったんだよ、と思いきり笑ってやりたくなる。

……4年前じゃ有り得なかった。

あの頃は、正式な任命もなく、アーサーはリーダーを気取っていた

だけで……やっぱりヘルマンが居て、ダニエラが居て、後に極東に取られることになった『新型』が居て……そして『彼女』が居た。

今でも思う。

もし、あの時、自分がもつと考えていたならば……違う未来があったかもしれないなかった。

今でも自分は、あの頃のように笑えていたかも知れなかった。

オリガを見ていると、どうしても思い出してしまう。

——あの日、帰ってこなかったオレーシャ・ユーリエヴナ・パサロヴァを。

木製の風呂桶に手ぬぐい、さらには酒まで持ち込んで温泉を満喫しているヘルマンが近くまで寄ってきた。既に酒臭い。というか室温が通常より高い場所で水より気化温度の低いアルコールを持ってきている時点でお察しだ。

「何やってんだよヘルマン……テメーは良いかもしれないけどココにはアルコールNGな未成年だつて居るんだからさオイ……つてウオツカ!?!」

度数40越えの命の水。

「臭えから寄るな！ お前いつものビールは何処行つたんだよ!? 何でビールにしとかねえの!? 馬鹿なの!? 片目なの!?!?」
「うまいぞ」

「平気か！ 冷静か!?!」

ゲルマン系は強かった。

「欲しい?」

「要らねーよおおおお! どうせだつたらヴィスコンティ大尉辺りに持っていけ!!」

「拒否られた……」

「あ、ちゃんと持ってたのね」

「アーサーはついぞ知ることはなかったが、ジュリウスは実は下戸である。」

「ので、アルコール類は一切切拒否なのではあるが。」

「この時点では、酒の力を借りて契約引き伸ばしにしようと思つていたのに失敗した、としか思つていなかった。」

「本当ねーよ……有り得ねえ……何でお前らゲルマン系だとかスラブ系はみんな酒で解決しようとするんだよ……つかアルコール強すぎるだろ、お前にしろ、ダニエラにしろ、オレ……」

「オレーシャ、と言いかけたことに気づき、ハツとして言葉を変える。」

「は全つつ然信じらんねえ!! 酒の何が良いんだかサツパリ分かんねえ!!」

「かなり苦しい言語進路変更。」

「子供の味覚だな……」

「喧嘩売つてんのかお前は」

「ヘルマンは居なくならない。それどころか横で手酌で飲み始めた。」

「何かさーこーしてるとさー思い出すよなー色々ー」

「……」

「誰が聴いてる訳でもないのに、何故か言葉が止まらなかった。」

「オリガ、来たばっかの頃ヤバかったじゃん? それが今じゃアレだよ。……何か変な性癖に目覚めてるけど」

「ああ、変だ」

「立ち直ってるんだとは思うんだけどな。アイツ色々ヤバかったから……」

「……」

「色々な所が色々持ち直してきてると思うんだよ。

だけど、さ……」

「……お前は違う、そうだな」

「……」

何となく視線を外した。

「見るべきものを、見誤るな」

「……今時流行らない婉曲表現すんな、何が言いたいのかは簡潔に」

思わずムキになったアーサーとは対比的に、ヘルマンの態度は冷静そのものだった。

「人は、見たいと願うものを見ようとする。

だが、現実がそれと同一であるとは限らない。見るべきものを見失えば、取り返しのつかないことになる」

「……」

隻眼が穴が開くほど見つめてくる。

ふとアーサーは思った。ヘルマンの過去をよく自分は知らない。

こいつが語らないから、だが、ひよっとしたら……ヘルマンも昔、見るべきものを見誤り、そしてその結果片目を失うような事態に陥った……などということがあるのかもしれない。

不思議とそう思えるほどの、力強さが確かにあった。

「オリガは、オレーシャじゃない」

「……うっせえ……分かってんだよ……そんなこと」

オレーシャ、の名を出されたことで胸の奥が痛むのをアーサーは感じた。

確かに一見似てはいるが、改めて見れば全然違う。同じ金髪だがオリガの髪色はもっと薄めだし、目の色だって違う。第一、年齢が異なる。

かつての戦友——オレーシャが生きていれば、アーサーと似たような年齢になっている筈だ。

「お前は……平気なのか？」

「何故聞く？」

お前は平気なのか、と聞きたい訳ではなかった。

ヘルマンは恐らく——自分よりも『仲間の死』に慣れている。もしくは、付き合い方を心得ているのだろう。

アーサーだって神機使いだ。人の死や別離はあの2年前の地獄でそれなりに見てきた。

「だから……大丈夫なのか？　オリガと『あいつ』は……似てる、だろ……？」

だが、それとは違うのだ。

今でも思う。

自分はその日『何か』大事なものを見落としていたのではないか？
そうすればもしかしたら『あいつら』を失わなくて済んだのではないか……？

願ったところで何が変わる訳でもないのに、そう思わずにはいられなかった。

だからアーサーは聞きたかった。

ヘルマンはそういった気持ちにどうやって、折り合いをつけているのか——と。

「胸の大きさが全然違うだろう……？ 一体どうやったら見間違うんだ……？」

「……」

ヘルマンは真顔だった。

それどころか正気か？ と問うてきているような声色だった。

「……分かったた……分かったたぜ……そうだよな……お前は……そうだよな……」

……うん、聞いた俺が馬鹿だったよ!! ああそうだな!! じゃあついでに聞くぞ!! ブラッドの神威さんに見覚えねえかお前!」

「……」

ヘルマンは今回は少しだけ黙考。

顎に手まで当てて……もの凄く真剣に、まるで真理を追い求める哲学者の様に沈思。

2分ほど熟考した後、答えが出たらしく、口を開く。

「この時代にあって栄養分の行き届いた育成環境の良い箱入りだが……どこか自信のないアンバランスさがある……いや、そこがまたいい

「きゅぴ……!? きゅ……きゅうく!?」

一攫千金の大チャンス

——到来。



「捕まえろおおおお!!」

「アモさんや……!! アモさんとアバちゃんや!!」

「生け捕りにしろおおおお!!」

「奴らを生きてココから逃がすなあああああ!!」

流石ロシアの人たちですね。とても対応が早くて何よりです。

「どっから湧いた……!!?!」

風呂場は今、阿鼻叫喚と化していた。

さつきまで水着だー温泉だーワイワイきやいきやい楽しそうにしていた皆さんが……血相を変えて縦横無尽に動くアラガミを追いかけていた。アラガミも何故か驚き戸惑い、電光石火で人間たちから逃走している。

一応補足しておく、これは『アモル』とその亜種『アバドン』というアラガミだ。

コアから希少な素材が採取できるらしいが、遭遇率が低く、また、出

現予測かやり難い。更にはコイツら何と逃げ足がすごぶる早いので広いフィールドでの戦闘中の発見などは逃してしまうケースが多い。なので、神機使い達からは『幸運のアラガミ』——なんて揶揄されている。

お分かりいただけただろうか？

そんな『幸運のアラガミ』が……浴場という、閉鎖空間で……大量発生する、その意味が。

「そっち逝ったぞ！」

「逃がすな！ 殺せ！」

「ビヤハー!! 汚物は消毒だアー!!」

「チケツト置いてけ！ チケツト置いてけ!!」

……と、言う風にみんな自分のキャラさえ忘れて捕獲にフォーカスしてしまった模様。

「何かやたら寄ってくるんだけどー!!」

「ビヤツホー！ 超絶ラッキーいー！」

「……まるでピクニックだな……！」

何でこの状況に順応できるのブラッド。

せめてロミオ先輩だけは常識人だと思ってたのに!!

そして隊長にとってのピクニックって……ピクニックとは一体何!?

「チツケツトオ〜♪ チツケツトオ〜♪」

ロシア勢はもつとすごかった。

金髪ツインテール、巨乳なスラブ美少女オリガちゃん。彼女は、とても上機嫌そうに……鼻歌を奏でながら、とびっきりの笑顔を浮かべて、アバドンをその辺にあった鈍器でボコボコに殴打している。

返り血（）らしきものが水着は顔に飛び散っている分、かなり……

怖い……。表情一切変えてないところが怖い……。

さらに隣に死屍累々の山を築き上げちゃっている辺りもう完全にホラーの類だ。私は、その恐怖映像を見なかった事にした。

アーサーさんも完全に捕食者の目つきだったし、ヘルマンさんは今そこで二匹のビチビチビチと、尻尾を振り回しているアバドンを両脇に抱え込んでいる。

……何だか凄く絵になっている。

「ふっ、コレは僥倖……！ ユツタリゆつくり禊を楽しみたかったのだらう闇の小悪魔共！ ところが残念無念。今……店の前に立ちし、月と金貨の契約者と見えぬ富と引き換えに！」

「っ、つまり……月給で店番やつてるバイトさんからf cで買った……？」

そんな舌鋒絶好調・フォン・シュトラスブルクな……！

「エミール・バインドオ!!」

「あ、網……！ オラクル繊維合成の網……!?!」

それは。

隊長が温泉卵用に使ってた網だった。

「どうだ動けまい闇の小悪魔よ！ なぬっ……う、上目遣い……涙目……だと……!?!」

網の中のアバドンが、最後の抵抗を試みたらしい。

……人間の良心に、賭けてみることにしたらしい。

「こ、これではまるで……この僕が……悪……!?!」

頑張つて騎士の魂……！

「だ、ダメだエミール！ 惑わされるなエミール！ むう許せ闇のちびっこい眷属！ 貴様に罪はないが僕は騎士……正義を遂行するためには、無慈悲と言えど……あ」

するっ、と何かが抜ける音。

その進行方向に偶々私が存在したことが、多分、いけなかったのだ

ろう。

ぽすつという軽めの衝撃と共にヌイグルミの様なアバドンが顔面に激突した。

しかもコイツら意外と力が強い。

「う、うわっ!？」

しかも後方にあつたのはお湯だった。

何でこうもギリギリの水際で戦ってたんだろう……私たち……。頭を床に打ち付けることだけは回避できて良かったあー、と喜ぶべき場面なのかもしれないが、そう呑気なことも言つては居られなかった。

「ご、ごめんなさゴボボボボ」

「キシヤアアアアアア!!」

「ア、アバドーン!?!」

アバドンが闘争本能をむき出しにした!

おかしい、絶対に何かがおかしい……だつてアバドンはきゅいつ♪で鳴く神なハズなのだ。

でも今何か変な鳴き方しませんでしたか。しましたね。聞こえませんでした。意外でしたね。

「ひっ……ご、ごめんなさ……」

「ギジャアアアアア!!」

「い、痛い!? え? 何で?! どうして痛いの!? 噛んだ!? アバドゥンって噛むの!?!」

一体全身の半分が顎関節な体型のどこにそんな力が!?

「大丈夫か!？」

「ヘルマンさ……助け……」

顔から引きはがされるアバドン。何故だか激しく抵抗するアバドン。そして奴から往復ビンタを喰らう私。

でも諦めが悪いアバドン。ここまで生きること執着するアバドン。そして腕を噛まれる私。

……コレってひよつとして……アバドンにも、ナメられているとい

うことなのだろうか……。

「ううう……ひどい……アバドン……ひどい……」

本気で、目の奥と鼻の奥から水分が湧き上がってきた。

ぐしやりと湿った視界の中で、何故かヘルマンさんの端正な顔一時停止しているのが分かった。

目線は若干、下。

……どうしたんだろう……。と疑問に思っていると。

若干離れた場所に何か下着にも似た形状のトップスが水に浮かんでいるのがハッキリ目に入った。

どうりで。

ちよつとスースーするなあ、とは思っていたんだけどね。

「いやああああああああああああああ!!!」

「……………本当に……………本当に……………ありがとうございます……!」

「見ないで!! 見ないで下さい!! 私を見ないでー!!!」

オイ、鼻血拭けよ……。

「何で……………何でいつもいつもこうなるんですかあ……………私は……………私は……………! 特に悪いことしてる訳じゃないのに……………! う

わあああああああ……」

そのあと、浴場に大量発生したアバドンはホクホク顔のアーサーさんが全部回収していった。



という惨劇もあったけど。

「本日付けでフェンリル極地化技術開発局所属となりました、シエル・アランソンと申します」

今、目の前に居るのは。ブラッド最後の候補生の女の子だった。フリルっぽい服装、銀色の髪を二つ結びにして、リボンで結んだ容姿から……ラケル先生とはまた違った系統で人形の様な女の子だった。

それなのに、表情は硬く、敬礼の動作は一ミリの狂いもなく完璧だった。

「ジユリウス隊長と同じく、児童養護施設マグノリアアイコンパスにて、ラケル先生の薫陶を賜りました。」

基本戦闘術に特化した訓練を受けてまいりましたので、今後は戦術戦略の研究に勤しみたいと思います」

少し微妙に気まずい間があつて、以上です、と締めた。

凄く生真面目な印象——を抱いたが、むしろそれは好感が持てた。

私も人付き合いは得意な方じゃない。だから、彼女には少しだけ共感を覚えたのだ。

いきなりソレっぽく挨拶をしろと言われても……無理なものは無理なのだ。

でも、きつと良い子だろうと思う。

「よ、宜しくお願いします。アランソンさん。えっと……私、ブラッド

第二期候補生の——」

「と、言いたいところですが実は今もう一人、紹介しておきたい方が居るのです」

「ラケル先生……今……私……」

「ふふふっ……唯、話を遮ってしまってゴメンナサイね……でも、貴女も驚くと思いますよ……」

だって貴女もよく知っている人なのですから」

「……えっ？」

嫌な予感がした。

悪寒が足の下から這い上がってくるような感覚だ。

何故か冷汗が溢れてくる。

そんなハズはない。

そんなハズは……。

私の知ってる人？ 私が『よく』知っている人……？ が、配属……？

そんなバカな……そんな……馬鹿な……コトが……あるわけ……あるわけが……！

「失礼します！ 同じく本日付けでフェンリル極致化技術開発局。神機兵開発部兵装チーム配属になりました——」

とても聞き覚えのある声だった。

まるで、世界が自分の味方である——本気で信じて疑っていないような、自信に満ち溢れた声。

きつと、コレが夢なら最低の悪夢だ。

夢なら覚めて……と言いたい。

「神威ヒロキです」

phase 25 副隊長就任

コツン、と石床を踏み鳴らす。

流れるような銀色の髪を頭の両脇で結び上げた少女——シエル・アランソンは、僅かな緊張と胸の大半を占める期待でフライアを歩いていた。

まだ慣れない、右腕の重みに少したじろいだ。

黒い腕輪。一生外せない、枷。

そして……神機使いの証。

今日からは、新しい日常がある。

夢にまで見た日々がある。

今までのすべての研鑽はこの時の為に存在したのだ……そう思うと、思わずワクワクせずにはいられなかった。

軍人はいついかなる時でも冷静であれ——時には冷徹であれ、とシエルは日ごろ心がけてはいたが、今だけはこの思いを抑えきれそうにない。

少しだけなら、許されるだろう……と今日だけ、今だけ、と自分を甘やかしてみる。

少しだけ、少しだけなら……と。

何より今日は、『また』……あの人達と会えるのだから。

「1枚、2枚、3枚……」

誰かが何か数えているのだろう——そんな声が聞こえた。

きつと、誰かが書類か何かを数えているのだろう……と通り過ぎようとして足を止めた。

今の声……どこかで、聞いた覚えはなかっただろうか。

まだ少年だった『彼』が成長していたら、ひよつとしたらこんな感じの……。

「……っ」

「7枚……8枚……」

もしかしたら？ そうなのかも？

男性が変声するということは知識では知っているし、大人の男が低い声で話すことも分かっている。

でも、それが『彼』の姿とどうしても重なることはなかった。

少年、とはいえ——幼少期はあまり男女の差が無いにしても——まるで、女の子の様な人だったのだから。

ジュリウス、は。

「9……い、一枚足りない……だと……!?」

「ジュリ……」

後ろ姿しか見えなかったけれど、見間違えるはずはなかった。

あの頃と変わらない……特徴的な髪型と、光の当たり方次第で金髪にも見える亜麻色の髪。

でも、身長はとても伸びていた。

それに……全体的にがっしりとしていた。

少し残念なような、寂しいような、切ないような気がしたが……やっぱり、嬉しくて、少しドキドキした。

ジュリウスはそこでガツクリ膝をつく。

どうかしたのだろうか？ とシエルは一瞬不安に襲われた。

「足りない……！ ラケル先生が……足りない!!」

「……………」

そこで流石ジュリウスと言うべきか、こちらの気配に気づいたらし

くクルリ、と首をその体勢のまま回転。

シエルとジュリウス、二人は何年かぶりの再会を果たすことになった。

「久しぶりだな、ラケル先生の付き添いではなさそうだな」

「ええ、任務は更新されています。正式にブラッド隊員として招聘されました」

ジュリウス、はすくつと何事もなかったかのように立ち上がった。

中性的な美貌はそのまま……ガッツリ成長した姿はまさに育成大成功と言えるだろう。

「ようこそ、シエル。フェンリル極致……フライアへ。ブラッドとも引き合わせよう、手続きをすませて来ると良い」

「了解しました。『隊長』」

「……そうか、お前にもそう呼ばれることになるのか……。……少し、寂しいな」

「……！」

ジュリウスはどこか寂しそうな笑みを浮かべた。

一体どこで覚えたんだそんな表情……!? とざわつく胸中を悟られない様に鉄面皮を被るシエル。

表情筋という表情筋を引き締めて、絶対的でかつ完璧な無表情を装う努力——大丈夫、多分気づかれてはいない。

「これは忌々しき事態……ラケル先生が足りないなどということが何故……」

そしてやはり先生一筋。

去っていくジュリウスの広い背中を見つめながら、シエルはそつと口にした。

「あなたも、お変わりなくて……何よりです……」

本当に変わってなくて良かった!!

誰にも気づかれぬ心の中という場所で、シエル・アランソンは一人、叫んだ。



3歳年上の兄は、何でもできる人だった。

子供の時にはちよつと体が弱かったけど、運動神経良かったし、ケンカでもスポーツでも誰かに負けている所を見たことが無い……のに、成績はいつもダントツ。

そこまで何でもできる癖に嫌味が無く、それどころかコミュ力半端ないし、おまけに性格良いし更には、モテた。

親の転勤だらけで一か所に落ち着くことがなく、よってあんまり友達が出来なくて苛められていた私はよく庇ってもらった……なんて過去もある。

良い『お兄ちゃん』だったとは思……それこそ一片の文句の付け所もない程の。

私は……。

私は……そんな兄のことが……

「帰れえええええー！！！！」

大っ嫌いだった。

「あっはははははー！ 久々の兄妹の再会にトンでもないコト言うね
唯ちゃーん！ お兄ちゃん会いたかったよ！！ 可愛い妹に会いた
かったよ！！」

「何で居るの何で来てんの!？」

私は……私は……っ！ アンタが嫌だから真っ当な人間の体捨て
て！ 人体にオラクル細胞入れて！ 神機使いになってまで家から
出たのに!？」

「兄の愛は深いよっ!」

「失せろ……！ 貴様などもう兄ではない……!」

「残念だったなマイシスター、お兄ちゃんは滅びない！ 唯ちゃんが
この世にある限り、何度でも必ず、しつこく蘇るであろう」

大っ嫌いだった。

大事なことなので2回言いました、コレだと過去形みたいです。

言い直さなくちやつ♪

大嫌いです。クソ兄貴が。クソ兄貴のことが、超絶大大嫌いです。

何も私だって最初から嫌いだった訳じゃない。むしろ本当に小さい頃は多忙な両親にあまり構ってもらえなかった分、いつも兄にくつついていたから傍から見れば仲の良い兄妹に見えなかったこともないだろう。実際優しかったし面白い兄のことが好きだったような気がしないでもない訳じゃない。

だけどね。

何にしても。

私が数時間ほどかけてやつとこなしたようなコトを、兄はたった数分でマスターする。

子供の時からどんなに頑張っても、どんなに努力しても。兄が鼻歌交じりにやったことには勝てないどころか、同レベル完成度にすら及ばない。

結果、子供の頃から父と母にはついぞ、『凄いね』だとか『良くできたね』という褒め言葉を言われなのまま私の幼少期は過ぎ去ってしまった。

代わりに言われ続けた褒め言葉は。

『頑張ったね、唯ちゃん』だ。

ぶつちやけ私が人格形成に失敗した原因に確実に一枚かんでいるであろう人物……それがこの兄なのだ。

想像して頂けるだろうか？ 物心ついた時分より常に、『あの』神威の妹として勝手に過剰に期待され、そして勝手に無駄に失望され、その都度自分のスペックの悪さを指摘され続けているという驚異の経歴が。

だが今回は引き下がるわけにはいかない。こんな私だって多少なりとも成長はしたのだ。アラガミだってこの間接触禁忌種だって倒

せた。

兄貴一人位、ここで葬つて見せる。

「い、今の私はね……！ このフライアが家！ で！ この『ブラッド』が私の家族なんだよ！ 新しい兄弟!! だからアンタはお呼びでな」

「え？ 何？ ……お前と？ ……兄弟……？」

「こつちから願ひ下げだよろ」

「悪い……そうゆう趣味は……」

「」

ブラッドの皆は容赦なく言い放った。

……酷くないデスカ？ 流石に酷くないデスカ……？

家族はないにしてもさ……せめて仲間だと思つてた……。

思いたかつた……。

「すっごいねー。まるでクローンみたいだねー！ 初めまして、香月ナナですー唯ちゃんをいつもお世話してまーっすー！」

「うちの唯ちゃんをドウモドウモー！ この子メンドクサイから大変でしょー」

「それはもう」

「不運が服着て歩いてるみたいツスよ」

「分かる分かる。唯ちゃん不幸重力ヤバいから！ だが、俺が来たからにはもう心配なあい！」

兄が人を不愉快にさせる笑顔を浮かべた。

何かノリが良いロミオ先輩とアザトイナナちゃんはすっかり

ちやつかりと意気投合してるっぽい。いつも必要以上に明るいと波長が合っているのかもしれない。ギルさんは割愛。

「ナナちゃん、先輩！ そんな奴と会話しないで！ クソが伝染るよ！」

「平気だよ。唯ちゃんと兄妹なんですよ？ クソなら慣れてるよ。」

「女の子がクソクソ言うんじゃありません。そして自分のお兄さんをクソ扱いは辞めなさい唯」

ロミオ先輩にとてもマトモな注意されてしまった。
そこで、少し、頭が冷える。

多少冷静さが戻ってきて真っ先に思い浮かんだことは……コイツ何でココにいるのか、ということだった。

実は、私。クソ兄貴には勿論、両親にさえ今どこに居るのか伝えていない。

というか伝えちゃいけないのだ。守秘義務というヤツで。

当然というか何というか、ここまで来ればアホな私でも理解が出来るように、そもそもゴツドイーターには敵が多く、同じ人間であってもあまり良く思っていない人が多い。むしろ運が良ければ隙をついてぶつ殺そうとしてくるタイプの人間も少なくない。

となれば、おいそれと情報を漏らすわけにもいかないのだろう。特に極致化開発局フライアは一般的な支部とは一線を画す。

何もかも特例であるがために、秘匿するべきことも多い。だから両親は私がフライアに所属していること、そしてゴツドイーターであること、は知っているがそれ以上のことは知らないハズだろう。

例えば（送っていないけど）私が家族や友人へと電子通信を送る時は、今いる場所や部隊内の個人情報、ブラッドアーツや神機兵のことについては検閲が入る。

また、（やってないけど）家に置いてきた私物や、何かを送ってもらいたい時はフライアではなく、一度本部の管理室からこちら宛てに届くように手配される。もちろん盗聴機や盗撮機がないかどうかの検

査付きで。

以上諸々の事情からフライアに関する知識はむしろ一般のフェンリル職員と大差がないハズ——と踏んでいる。

そうでないと、彼らにも危険が及んでしまうから。

……というフライア側からの手厚すぎる配慮があつたハズなのだが。

そこまで考えて、急に怖くなった。

「い、一体どうして……どうして此処に……」

なぜ、兄は此処にいるのです……!?

「ふっ……ふふふふ……！ 知りたい様だな唯ちゃん……何故、お兄ちゃんが此処に居るのか、を……！」

「ほ、本当だよ……!?! な、何で……クソ兄貴ナンデ!?!」

「それはな……」

「そ、それは……!?!」

ごくり、と喉が鳴った。

「偶々!! 転職した先が……フライアだったから……!!」
「……………ハア?」

「いやあのねー。お兄ちゃんもビツクリだよ。あの後……お兄ちゃんはキミのことを全力で探したんだ。妹がどこに居るのか、そして……どんな神機使いになっているのか。不眠不休で全力全開で捜査したんだ」

「キモい……から死んで……?」

「だけど全然見つからなかった……! 唯ちゃんの為に、俺は外部居住区の探偵や不法武器商人や元軍人やフェンリル内部のあんな奴やこんな奴。極東支部の知り合いとかに連絡とって最終的には変な宗教団体まで行って聞いてみたんだけど」

ここまででは想定済みだ。

だから兄やそのやたら多い知人、友人たちに目撃されない様に奴らの行動パターンを完全に把握、予測した上で引越すと荷造りをしたのに。

「その為にお兄ちゃんは胸に七つの傷を負う羽目になってしまった……」

「なんでその時死ななかったの!?!」

まだ世紀末と呼ばれるには20年くらいあるはずだ。

「でもね、唯ちゃん。お兄ちゃんは諦めなかったんだよ!」

「何で!?!」

「いや〜タマママねー。神機のオラクル設計やってたらさー、フライアからは是非来てくれ、ってお達しが来ちゃって。最初は胡散臭いしキナ臭いし何か臭いから断ろうかと思ったんだけどさー、フライアって唯ちゃんの居る場所じゃーん! と言うわけでその場でサインして捺印して来たと言う訳」

「うそでしょ……」

フライアあああああ!! フライアあああああ!!

個人情報握ってるんだから家族関係まで調べてるハズでしょうに……!! わざと!? わざとなの!?

毘だ……これは毘だ……! 誰かが私を陥れるために仕組んだわなななななry

「仕事頑張ってたら……研究成果認められたし、昇進したし、給料上がったし、何より大事な妹に会えたじゃん……嗚呼、完璧すぎて自分が怖い」

そう考えられるお前の精神構造が怖い。

そして何より現実が怖い……神よ……なぜあなたはこのクソヤロオに無駄な知能指数と才能を与え給もうたのですか……。

「御高説ありがとうございます。神威技官」

ぱちぱちぱちー! と、ブラッド一同からの盛大な拍手が兄へと送られた。

嘘でしょ、何で……何で……? と信じられないような思いがこみ上げる。

ほぼ死んだような目でピクニックな隊長殿を見つめる……。

「貴官の肉親への愛情に感服致しました」

「たい……ちよ……?」

貴方は私の味方ではなかったのですか。

「貴官ほど優れた人材が、公私共に私の部下を支えて下さるのであれば、もう何も心配いらない」

「ナニイッテルノデスカ!? 貴方まさか自分の部下を売る気じゃ……!?!」

「ゆーいーちゃーんく。上官同士の会話にいー、一兵卒が口を出さ

な〜い！ これ社会の常識なんだからっ〜！」

復活のおでんパンを口に突っ込まれた。

「お任せくださいヴィスコンティ大尉。必ず期待に応え、そして期待以上の成果を出してみせます」

「それは頼もしい」

出さなくていいから早くソイツを強制送還……。

「あ、あの……」

部屋の隅からか細い女性の声が聞こえた。

今まで聞いたことのない音声から、消去法で新人さんの声だと全員が理解する。

「その……」

「シエル。固くならなくてもいいのよ。……何にしても、これでブラッドはようやく全員揃いましたね。

これからあなた達はその身に宿した『血の力』を以て、あまねく神機使いを……そして、救いを待つ人々を導いてあげてくださいね……
ジュリウス」

「はい、先生」

「さあ皆に……つて何を勘違いしているのですジュリウス？ 私のジュリウス……!? 今そこでヨツンヴァインにならなくても良いのですよ……! た、立ちなさい……」

「……っ〜！」

隊長が……ラケル先生の意図を読み間違えたなんて……。

明日は天から槍が降ってくるかもしれない。

「これからブラッドは戦術面における連携を重視してゆく。

その命令系統を一本化するために、副隊長を任命する」

ああ、成る程。

そこでやっと合点がいく。この時期の新人の入隊、しかも、マグノリアコンパス出身のエリート。

更にはジュリウス隊長と面識があるっぽい女の子。だからきつと

隊長は、シエル・アランソンさんを副隊長にしようと思っただけで連れてきたのだ。

だが、隊長はアツサリとアランソンさんの前をスルー。

そして一歩ずつ足を進めていく。

「これまでの立ち回り……にはこの際目を瞑るとして」

……嫌な予感MAX。

「早くも血の力に目覚めたこと……神威唯、お前が適任だと判断した」

「……」

「副隊長、やってくれるな？」

頭が真っ白になった。

何を言われているのか脳が理解を拒絶した。

やけに大きな心拍数を頼りに、だんだんと現実感が戻ってくる。

そして、言われた言葉も。その意味も。

「む、無理です!!!」

「やってくれるな?」

今度は肩を押さえつけて不気味な笑顔を浮かべていた。

「お願いです隊長! 正気に戻って考え直してください!!」

「大丈夫だ……きつとお前ならやれるさ……やれる……やればできるさ……」

「できない話じゃない話じゃありませんよ……! 無理なんです! 私が副隊長になんかなったら……そんなことになったりなんかしたら……」

……巷で囁かれているような終末捕食は起きて、世界は崩壊して、拳句の果てにはユノさんまで降臨してくる事態になりますですよ!?!?」

「……!?!?」

ビクつ、と『あの悪夢』を知っているナナちゃん、ロミオ先輩、そして隊長が急に後ろを振りむいて安全の確認をする。

あ、そうだよ。怖い話とか心霊現象系のTVとか見ていると背後が気になっちゃう系統な人なんだね皆……。

とか思ったのもつかの間、隊長のSAN値は復活した。

「大丈夫だヤツは居ないヤツは居ない歌姫なんか居ない……副隊長やってくれるな？」

テコでも動かねえつもりか……。

「だ、大体……！ 隊長職はそちらのアランソンさんみたいにな……しつかり教育を受けたエリートじゃないと駄目なんじゃ……」

「ですから、私は副隊長の補佐に回ります」

「そ、ソウデスカー」

第一次悪あがき戦、アツサリ敗退。

「そ、それに！ ……単純にキャリアの問題ならロミオ先輩やギルバートさんの方が適任だと思いますが……」

「……人が気にしていることをアツサリと……」

「唯ちゃんさあ……」

「ひい!? っ、ごごごごめんささい……！ そんな視線だけで人を殺せそうな目で見ないで下さい……！」

ロミオ先輩は血涙を流していた。

ナナちゃんもジト目で私を睨んできた。……ああ、もうどうして私って……。

「コレ……！ コレだよコレ……！ コレが唯ちゃんだよ……！
うう……お兄ちゃんもう感涙の極み」

「帰って」

兄は脳内補正で居なかったことにして、継るような視線を紫色の長身の青年へと向ける。

お願いしますギルバート様、神様仏様マクレイン様……！ 今この状況から私を救って下さるお方は貴方様しかいらつしやらないのです……！

口には出さずに、心の中全力土下座で思わず彼へと、祈った。

「まあ順当だろ、ナナはアレだし、ロミオは頼りないしな」

「……」

性格はいい奴なんだ……いい性格なん……だけどな……。

本当それだけなんだなこの紫ゴリラ。

「うるさいよ！ お前の方がよっぽど有り得ないよ！」

「前にも言ったが、お前は敵と距離開けすぎだ。その癖、被弾率が高いつてのはどういうことだ？」

「イノシシ馬鹿に言われたかないねー。第一皆の射線の邪魔になつてることに気付いてないの？」

「……皆って誰だよ」

イラツときたロミオ先輩とギルさんの特に意味もゴールもない口喧嘩が勃発してしまった。

他人のこうゆう不毛な争いが好きじゃないナナちゃんがひらつと躲していく。

「私じゃないよー」

「……俺だよバーカ!!」

「あ、すみませんー……実は私もですー」

「俺もだ」

「……え……え……マジで……？ マジで……？」

だって本当に時々マジで邪魔なんだもんコイツ。まさかの援護射撃にロミオ先輩が一番オロオロしている。

「そうか……悪かった……以後気を付ける……」

ギルさんはしゅん、としてしまった。

……何か申し訳ない。けど本当のことだしギルさんだから何かいいや——ということにしておく。

「……わ、分かりました……やります……副隊長……」

「!？」

「え!？」

「なっ!？」

「おおっ！」

「何ですかそのリアクションは!？」

「……!？」

phase 26 ナナの幸せのレシピ

「ロミオとー!」

「ナナの〜!」

「性なるお部屋探索〜!」

「やめて下さい!!」

ロミオ先輩&ナナちゃんの二人が息ピッタリなコンビネーションで繰り出す謎のポーズ。

けど、内容はスルー出来ない模様。性なるって一体何……何をしでかそうとしているのか全く持って理解ができない……訳じゃない。

「何だよ唯もやりたいのかよ?」

「じゃあ名前変えないとね〜先輩……。『チームミニジャンズ』」

「何やらかすつもりなんですか?!」

何って……なあ? と言ったキョトン顔で顔を見合わせる童顔組。

桃色同僚と橙先輩は仲が良いからよく一緒に居るけど……この二人、目を離すと、時々危険。

「お部屋探索って誰の部屋ですか……」

予想はできる。

この二人、私の部屋へは実は結構来る。私の部屋は、という与实际……よく資料や書類を出しっぱなしにして積み上げていたり、服出しっぱなしにしたり以外は割と片付いているとは思う。

実家に居た頃からそうだったけど、私の家族は代々『小康状態を保つ』ことがあまり得意ではない。

汚れている時はゾドムとゴモラか、と言うくらい酷いけど、一気に掃除をするタイプでそこから少しずつ汚していくのだ。家族共同で使うキッチン、リビング、居間なんかは時々私が掃除していたけど。

……家に誰も帰ってこない日の長い夜は子供の頃からそうやって過ごしていたから……。
で。

だから、この二人の私物が少々私の部屋に在ったりするので、お部屋探索は私は除外。

だとすると。

ジュリウス隊長、新入りのシエル・アランソンさん。そして……ギルさん辺りが妥当な線になる。

そして、おそらくは。

「ギル」

「ギルん所」

「やっぱり……」

ロミオ先輩が『いやがらせ』目的で行く場所なんか、そこしか見当たらない。

……とは言っても、一応理由はありそうで、隊長は気安いしブラッドは比較的距離が近いアットホームな笑顔の絶えない部隊の様だからあまり実感が湧かないが、ジュリウス隊長はれっきとした上官。勝手に部屋を漁っていいわけがない。

怒られるだけならまだしも、下手をすればスパイ容疑か何かで査問会にお呼び出しされてしまう。

アランソンさんの方は、まず女の子だし、来たばかりでまだ上手く馴染めていないし、やることも沢山あるので部屋の整理なんかは後回しになっているっぽい。何より、先日の騒動で変な語尾がついてしまった件について本人が一番ショックを受けて少し落ち込んでしまっている。

勿論、加害者の方は全然反省していないのだけど。

この女そろそろどうにかしないと、次はきつと、誰か死ぬ。

「だってアイツさー、何か全然打ち解けてないじゃん？」

「そうそう、何か私も思うんだよね〜。あの類人猿私のおでん

パン拒否したし」

「……ああ、そうだね」

そう言えばしていましたね、神回避。

「それにヤケに人が好いつーか……何かアイツ怪しくね？ あんな

『お人好し』。この世界に居る訳ない」

「絶対演技だよ」

「人類皆があなた達みたいな性格じゃないんだよ」

少しは他人を信じてみたらどうでしょう。

「だからここで奴の秘密を暴いてやろーと言う訳だ！」

「うんうん！」

「何かロクでもないことを考えているかもしれない！ 信用できない

！」

「うんうん！」

「だから！」

「弱みは今の内に握っておくに限る!! ってね〜」

「あ、分かりました。私、分かりましたよ！ 最低ですね、最悪ですね

！。そこまでやればきつと、あんな良い人でも流石にブチ切れますね

!？」

「それはそれで見てみたい」

「DMなんですか!？」

「だって、取り繕った姿見せられるより、この際思いつつつ切りキ

レてる方がなんか『それっぽい』じゃない？」

「……ま、まあそうかもしれないけど……」

そりゃ、そこまでされたら誰だって怒って当然だと思うけど。

でも確かにギルさんの生感……じゃない、性格はちよつと胡散臭いかな？ とも思ってしまう。

決して人の優しさに慣れてないとかそういう理由じゃない。別にそういう理由じゃない。

それに距離を置かれているのも事実なような感じもする。

根拠は、ある。

ナナちゃんの前には少しだけ言っていた……『おでんパンを受け取らない人は何かに追い詰められている』……のだと。

彼の過去は知らないし、知った所で何ができるわけでもないだろう。

でも、確かに……何かがある、そんな気がしてならないのだ。

そんな追い詰められている様な人間を、ましてや、仲間を、いつまでも放置出来る程、私はまだ大人になりきれてはいない。

とか考えているうちに、結局二人を止める機会を失った。

「はい到着」

「現在ギルの部屋の前に居ます〜！ きゃーつ、ロミオ先輩！ 見てくださいこの鍵〜」

「おおーつと何ということでしょう、ギルの癖に一人前に人間のマネをしております!!」

「いや……ギルさんアレでも一応人間ですからね……」

「電子ロックと、腕輪認証で開く形式みたいだねー」

「何気セキュリティ固いなアイツ……」

本当だ。

腕輪認証はまさにゴッドイーター専用。一番一般的な所だとターミナルに付いており、そこから個人用アクセスが可能になるというあの意味最強の識別コード。

一応皆の部屋についているけど、使っている人はあまりいないと思う。ひとえに面倒くさいから。

正直私や……過去にはロミオ先輩も神機使いになったばかりの頃は、テンション上がって使っていたシステムだが（というか実は誰でも一度は通る道らしいが）あまりに時間がかかるので電子ロックとパスワードだけでいいや、という風に乗換えるのが大多数だと聞く。

流石に、少し不安になってきた。

ひよつとしたらギルさんは……隊長みたいに……過去にヤベエ奴にストーキングされたというトラウマでも抱えていたり……？

「ま、どうせ全部マスターキーで開くんだけだな」

「すっごーい！ 流石ロミオ先輩くく！ ……ソレどこから持ってきたのくく？」

「グレム局長」

「局長公認!? え？ 何ですかコレ局長の許可出たんですか?!?」

マジでかグレゴリー・ド・グレムスロワ!?

「うん。ユノさんの音楽記憶素子全部貸しますって言ったら、快く……な」

「ああ、娘さん……ファンなんでしたっけ……」

「ユノさん……お、おでんパン……おでんパン食べなきゃ……」

と、いうわけで迷わず開錠。

定期的にフェンリルンバのお掃除が入るとはいえ、男の一人暮らしの部屋だ。

さぞ臭……壊滅的なことになっているんじゃないかなろうか、と半分期待して足を踏み入れる……。

……けど、そんなことは何もなかった。

「殺風景」

「何もない」

「普通……だね……」

コレじゃ余程私の部屋の方が小汚いかもしれない。

部屋、ベッド。机。小型テーブル。電気スタンド。あと隊長以外の全員の部屋に等しく存在する端末。

クロゼットとソファアと……あと私物っぽいのは、紅茶とティーセット。

大人の人のらしく壁際にいくつかお酒の瓶が立てかけられていた。1人の時にでも飲んでいるのだろうか。

その位であり、特に変わった所がない。強いて言うなら音楽再生機の周りが色々充実しているから、音楽が好きなのかもしれない……。または、あまり私物がまだ届いていないのだろうか？

ナナちゃんは、と思うと、この似非猫耳娘、何故かマスクとゴム手袋、更にはエプロンまでも装備ときた。

一体何をなさるおつもりなんです……。？ ……掃除……。？

「さてとー、じゃあ香月さん。お願いします」

「はい。ベッドの下からですね〜！」

ま、まさか……。!?

「れ、レオーニ上等……。！ こ、コレハ……。！」

「ごうもアツサリ出てくるとは……。！」

「そ……。それは……。！」

国により地域差はあれどここは便宜上……。極東基準にしておくと……。

R18本！

つまりエロ本!!

10分後。

「……」

「……」

「……………」

ひとことと言うなら。

見なきゃよかった……と、そこに居る全員が思っていた。

「何これ……何……これ……」

「ナ、ナナ……戻しといてくんない？ お、オレもう……なんかコレ触れない……」

「らじゃーっ!」

どうやったのかゴム手袋を三重以上に重ねたナナちゃんが音速で聖典を重ねてベッドの下へと叩き込んだ。

壁か床が削れるような音がしたけど気にならない。

今……それどころじゃない……。

「見ちゃった……見ちゃったよ……」

「ヤバい……アイツ……ヤバい奴だ……」

「ちよつと私、吐いてくるね〜!」

辞めとけばよかった。辞めとけばよかった、時間を戻したい、無かったことにしたい。

ナナちゃんはトイレに駆け込んでいった。

「どんな闇抱えているんだよアイツは?!?!?」

「私……ここまで来てもまだ分かんないんですけど……奴はドSなの!? それともドMなの!? どっちなんでしょうかロミオ先輩!?!」

「知らねえよ聞くなよお!! わ、分かんないよ! 強いて言うなら……表裏一体って言うから……ドSでもありドMでもあり……」

『緊縛美の巨人』とか『大爆走! 三角木馬ライダー』なんてどんなジャンルなんですかあ!?! どっちにしろあの人畜無害な奴ほどヤバいという古の伝説は本当でしたね!?!」

綺麗な清流がせせらぐ音と囀る小鳥の歌声をお楽しみ下さい。トイレから流れてきます。

「それならまだマシな部類だろ……『削げ逝けア●パ●マ●』なんかあのタイトルとロゴからどうやってたらあの内容を想像できるんだよ……? 後半只の拷問だったじゃん……!」

「な、何か穢れた気分……」

「な、なあ副隊長……明日からどうやってアイツの顔見ればいい? 直視できない、できないよオレー……こんなことに付き合わせてごめん……本当ごめん……」

「もう言わないで下さい先輩……被虐と加虐で血にまみれた先の恍惚とした混沌世界なんてどう考えても狂ってる……」

「全部出たよーもう大丈夫!」

ナナちゃんカムバック。

と、同時に、私たちはその部屋を去ったのだった……。



「……と、いうことがあったんですよ……」

「……はぁ……」

ミツシヨンオーダー用のカウンターの前でクダを巻いてた私たちの話を聞いてくれていたのは、オペレーターのフランさんだった。

猫目のクールビューティーでかなり大人っぽい人……だけど……この人年下なんだよなぁ……。

「成程、お話は理解致しました。皆さんが陥っているでしょう事態の深刻さも」

「ありがとうございます……」

「それらすべてを踏まえたうえで、あえて言わせて頂きます……」

それを私に言っ、一体、何を、どのように、助言しろと言うのですか」

「……」

おっしやる通りです。フランさん。

「えええええー！ー！ 一緒に考えてよーフランさんー！」

「何をですか」

「だからアイツをどうしようかってコトだよ!! ……なんか壁があるからここは強引に歩み寄ろうとしたらこの様だよ……何なのフライア……マトモなヤツ居ないの……」

ロミオ先輩がうなれて、(ミツシヨンオーダーの)カウンターにニット帽を激突させる。そして日頃からロミオ先輩が、フライア勢をどう思っているかをハッキリ表す台詞を吐きやがった。

「私はこれから、あの……隠れ変態ムツツリEXのオペレーションを

やらせて頂く時……そうゆう話題を提供しないよう極力注意させて頂きます」

「フランさんはそれでいいかもしれないですけど!? た、確かにミッションや訓練中はそれで乗り切れそうですけど……じゃあプライベートルな時はどうすればいいんですか!?!」

「半径10メートル以内に入らない様にします」

「貴女はそれでいいかもしれませんけど!?!」

そこで、チツ……と舌打ちめいたもの……じゃない真正正銘の舌打ちが聞こえた。

「じゃあ、もういつそ隔離でもしたらいいかがですか……それこそ拘束服でも何でも着せて」

「ちよ……幾ら何でも酷過ぎませんかね……!?!」

「いや、場合によってはそれで喜ぶ可能性がある……! つか50パーセントの確立で大当たり……」

何て危険なロシアンルーレット。

「……では葉漬けにでもしておきます?」

「どうしてそんなアツサリ怖い案が次々出てくるんですかフランさん!?!」

「いいじゃないですか……どうせ……人間……最後には皆仲良く微生物のクソなんですから。クソと化するのが早いか遅いかの違いでは?」

……人生なんて」

どこか投げやりな声色のオペレーターさん。

あれ……フランさん……こんな人だったっけ……?」

そのとき、今の今まで黙っていたナナちゃんが、ガゴンと音を立てて立ち上がった。

「決めたよ」

「ナナちゃん唐突にどうしたの……? ……主語は……?」

「私、決めた」

紅を帯びた目の色は、確かに決意を宿していた。

「ギルに……おでんパン、食べさせる!!」

……おい……。

コイツ今……何言いやがった……?

「ギル……きつと色々あつて病んじやつたんだよ……。だつてあの
5年も神機使いやつてるんだよ!? きつと、凄く辛いことがあつた
だよ!」

「だからつておでんパンで洗脳しようと言うの……? そんなの……
そんなの……間違つてるよナナちゃん!」

何としても止めないと、どんなサイコモンスターにメガ進化なさる
か分かったものじゃない! と、何と引き換えても必ず止めようとし
た私を、ロミオ先輩が遮った。

「いや……イケるかもしれない! 掛け算だつてそうだろ……? マ
イナスにマイナスをぶつければ……プラスになる!」

「駄目ですよロミオ先輩! この場合、クソの上にクソを乗つけても、
クソ山が生成されるだけです!!」

「私はナナさんに賛成致します。………どうせ……この世は肥溜め
なんだから」

「フランさんそんな人でしたっけ?!」

ロミオ先輩の賛成、私の反対、そしてフランさんのやや投げやりな
賛成の2―1を得たにも関わらず、ナナちゃんは少し不満気だった。

「ちよつとー。なんでそんな酷いこと言うのー? 皆、マイナスだと
かクソだとか肥溜めだとかく〜! おでんパンは私とお母さんの絆
の証なんだからねー」

「どうせナナちゃんが魔改造したんでしょ……」

「何か言った!?!」

「……な、何でもないデス……」

えへん、と何故か自信満々な似非猫耳娘は露出度過多なお腹に両手をあてて、力説を開始した。

「あのね！ おでんパンは元々、母親が愛する娘の為を思って作った愛情たっぷりの創作料理なんだよ！ 寂しくても、泣かない！ いじけない！ おでんパン食べる！ ってコンセプトで作られたものなの。だからきつと、ギルの冷え切った心にも届くはずなんだからっ！」

「……はい、香月さん」

「発言を許可します、神威副隊長」

「ここはお行儀よく挙手してみる私。」

「対象は既におでんパンを摂取した後、発狂した被験者を数ケース目撃しています。……よって簡単に摂取するとは思えません」

「コンゴウだつて分かる。前食べた奴が死んだのを見て、同じものを食べようとする奴なんて居ないはずだ。」

「余程熱心な自殺志願者とは思えない、そして、多分ギルさんは自殺志願者ではない。」

「だよね、そこが問題なんだよね」

「はい」

「はい、フランさん」

「実は何気な乗り気なのだろうか、フランさんが一切表情を変えずに小さく挙手をした。」

「この際、目隠しを施した上に装置か何かで強制開口、そこに強引に突っ込むというのは如何でしょうか」

「16歳の女の子が思い描いたとは思えない程、ひでえ絵面だ。」

「うわあ……見えた……地獄絵図……！」

「それも一理あるよね。だけどそれじゃー、本末転倒じゃない？ コレはあくまで対象のヤバすぎる……もとい精神に巣食っているであろう何か混沌としたロクでもないものを取り除くことが目的です！ それじゃあ、あつという間にメガ☆進化！ ルート突入だよね」

く。という訳で却下」

「……そうですか……。別に期待してた訳じゃありませんけど……。どうあがいたって、全部、徒労に終わる」

「悔し紛れにありそうなコト言わないで下さいフランさん！ 未来予報は辞めて下さい！」

最早、女性陣に期待することを辞めたナナちゃんが最も信頼しているであろう常識人……。というか唯一の良心、ブラッド最後の砦になりつつあるロミオ先輩へと水を向ける。

「レオーニさん、何か意見はありますか？」

「……ベタだけど……。目の前で実際に作ってみる……。なんてのは……」

ようやく出てきたマトモな案にナナちゃんの丸い瞳がキラリ、と光った。

「採用！ それで行こー！」

「え……。マジ……。？ けど、ナナ料理なんかできんの？」

「そこそこー！」

「……唯」

「……レトルトカレーなら……」

「……フランさん……」

「お断りします」

「フランさん!!」

「お断りいたします」

今日も、ロミオ先輩の胃痛は止まらない。

「でもー。よくよく考えてみたら……。ギルって、アイルランド系？」

スコットランド系？ どの道旧グレートブリテンな島国出身の人っぽいじゃない？」

ナナちゃんがさつくりと疑問を口にした。

……。確かに、アラガミ出現以降、ほとんどの国家は国体維持が不可

能とされて政府は解体、そこはなんやかんやあって現在一企業であったフェンリルが世界政府の様な役割を果たしている……というのが現在の世界の在り方だ。

取りあえず、フェンリルが支部を作ってその周辺の人員をテキストに保護、または、フェンリルの専門職従事者および神機使いや軍人の世界レベルでの出張や派遣、家族の同伴や現地づ……い、色々あつて国籍は混ざりに混ざっている。その結果、2070年代では私や兄の様な多国籍な混血児が産声を上げまくっている。

アーカイブで知ったが、たつた2,30年前までは『ハーフ』や『クオーター』という表現があり、一般的に使用されていたらしいが……ここまで人口の減つた今、産めよ増やせよ時代でそんな些細なことに拘っている場合ではない。

と、なつてもやはり人間、自分のルーツは気になるものなので、今でも一応民族種別用語は残っていたりする。

「西欧系に極東のソウルフードはダメかな〜つて思う！」

「今更何を……」

今までの犠牲者で誰も気にしてなかったじゃないか。

老若男女関係なく、善男善女を無差別攻撃してたじゃないか……。

「きつとギルはドーバー海峡の向こう側の人だったから『ODEN』は慣れてなかったんだよ！ だから受け付けてくれなかったんだよ!!」

「……まあ、あるだろうな……」

「……じゃあどうするの？」

カレーで代用とかするのでしょうか。

カレーを串刺しにして、パンに挟む……カレーパン……？

……何か違う気がする。

ロミオ先輩が深刻そうに呟く。

「おでんが、ゴリラの味覚に合わねえのかも……」

「だからギルさん人間ですからね……？ どうしてそんな自然にゴリラ扱——」

「話は聞かせて貰ったわっ!!!」

バーン、と弾けるような音と共に……自動扉が開く。

そこから現れたのは派手な意匠をこらした白衣をに纏った赤毛の女性……。どこか小悪魔的な雰囲気を持つお姉様、隊長の女神のお姉様……レア・クラウディウス女史だった。

彼女が現れると必ず、と喋っていたいい自体が起こるので足元、ついでに背後を確認してみる。

……局長の姿はなし。

レア博士はまるで慈母の様にやさしく微笑む。

「ロミオ君、大丈夫よ……。ゴリラの食性は植物食寄りの雑食だから。果実食傾向が強いけれど……まあ多分平気でしよう」

「それ完全にゴリラの説明ですよね……!! 食性と言う言葉は人間に使う単語ではない気がするのですが!! レア博士……!!」

「そっか!! じゃあつまり……ベジタリアンなんだね!!」

「ナナちゃん曲解! 自分に都合がいい方に真実捻じ曲げて解釈するのは良くないよ!」

「じゃあ……野菜多めなら大丈夫ってことツスカ……?」

「タンパク質は虫から採取するという資料があるわ」

「虫か……うーん……昆虫さんとかは絶滅危惧種だからなく」

「だよなー……このご時世でしぶとく生き残ってる虫は食えそうにな
いよなあ……」

「ギルさんに何させようとしているんですか?!?!」

一体この話どこに向かっていくんだろう……!?!

性癖がヤバいから心が病んでる(可能性がある)ギルバートさんを救済するために、同じマイナス因子であるおでんパンをぶつけて食事療法しよう、という時点で何か既に狂気じみてる気がするのに、どんなシヤレにならない方向に話が進んでいっている……!?!

「決めた！ 『アレ』だねっ!!」

「え？ 何……何すんの……。……あつ、その手があつたか、いーじやんナナ！ よしつ、『ソレ』で行こーぜ!!」

「……いいんじゃないですか？ 後悔するなら少ない方にしましよ
う」

「……大丈夫かなあ……。ホントに……」

……ロミオ先輩、ナナちゃん、フランさん、私……。

……最終的に、いくら悩んだところで答えは出ないし。最悪、自分で食べる訳じゃないからいいか、という方向で、できるだけ楽観的に考えることにした。



一体何が始まるんだ、と開口一言目に、彼は言った。

「もう絶対許さない」

「お前はオレを怒らせた」

「逃げられると思わないでね」

「……………え？」

場所は、今回は雰囲気重視してフライア庭園。

そこにテーブル、機材、コンロを持ち込み、どこからどう見ても今から料理をする以外の何でもない空間を構築。

各員、エプロン、三角巾の装備を整えて戦闘準備は完了。

今回の討伐対象であるマクレイン隊員にはテーブルクロス付きの食事前テーブルに着席して頂いている。

「……………え？」

何が起こっているのかまるで分かっていない成人男性。

大人しく座っていればいいものを……………必死に状況を把握しようとしているらしい。哀れだね。

「フランさん」

「……………余っている鍋で……………一番大きなもの……………選んで……………きました……………」

……………覚悟しろ……………クソ野郎……………」

フランさんが鈍器を運んできた。

「まさか手っ取り早く圧力鍋とかふぎけたことぬかしてないだろうなカスが」

「まさか……………それは禁じ手のハズじゃ……………!?!」

「…………………………え？」

まだ自分の置かれている状況を理解できない……………いや、したくない

「もう……いい……煮込め……！ 煮込んでくれ……！」

涙声になっていた。

「え〜？ 何か早過ぎないかな〜？」

「……この程度で折れるとか……」

「い〜じゃん、本人が煮込めって言ってたからさあ……お望み通りにしてやろうぜ？」

「さっさと溶けるよクソコンソメが……水3リットル位入ってたよボケ……一体何人分作ってたよあああああ!!」

「はいはい。さっさとスープ間引くよ〜まびき♪まびき〜♪」

「おい……何してんだよさっさと蓋閉めろア!! 旨味と臭いが漏れんだろうが!!」

「ひっ……ご、ごめんなさい……」

「いいからさっさと蓋ア!! ……おいハーブ類は入れたんだろーなー？」

「はい、その辺で隊長が栽培してる草をテキトーに突っ込んだきました」

「合法ハーブ合法ハーブ」

「草……」

「おい……おい……セロリは……？ セロリは……どうなったんだよ……!? さ、さっきまでそこに……!?」

「フランさん」

「チツ……」(ダアン！)

「……っう!?!」

そして、しばらくして（約15分ほど）……コトコトコト、と火にかけた鍋から、心地よくリズムを刻む音が聞こえ……その前に何か圧力鍋の蓋が不協和音を奏で始めた頃だった。

「うんうん、煮えてきたね〜いい感じいい感じ!」

「ちよつと煮崩れてないかなあ……? コレ大丈夫?」

「平気だろ。ナナ、串の準備してある?」

「うん! 見て見て!。はいコレ! じゃ〜ん! 揚げパスタ〜!」

「「え?」」

常識的なモンが出てきた……。

「何? 何か文句があると言うのかね」

「だって木だったじゃ……」

「何か文句があると言うのかね」

「……」

「今回は、洋風なので、油で軽く挙げたパスタを串にして通しま〜すっ! だってこの方が合ってるでしょ? これを通して……と。コンソメ風味のジュレをかけて……はいっ! 完成で〜っす!!」

「今回のパンは厨房からパチってきたバゲットなんですよ! 焼きたてなんですから早く食べないと冷めちゃいますよ〜」

「普通に美味そう……ナナ! やればできんじゃん!」

「えへへっ……! はい、どうぞ、ギル召し上がれ〜」

ギルさんはすぐには動けないでいた。

「フランさん」

「……………どうぞ、お召し上がりください」

座るギルさんの前に食器と共にバゲット（と呼ぶのにはかなり小さいだけのミニチュアフランスパン）に挟まれた……………西洋のおでん、とも言うべきフランスの煮込み料理。

名付けて、『ポトフパン』が供された。

「……………」

「すつごくおいしいから、食べてみてよ〜〜！」

「これ……………本当に美味しそうですよ！ ギルさん」

「何かお前ばつかズリい……………別に羨ましくないけどさ」

「フランさん」

「どうぞ、ご遠慮なさらずに」

フランさんがワイングラスに水を注ぎ入れた。

お酒、つて訳にもいかないし、紅茶やコーヒーが合うとは思えないから……………という選択だろう。

「わざわざ……………コイツを……………俺に……………？」

「そうだよ。だつてギル、おでんパン……………中々受け取ってくれないじゃない？ ……だからね……………食べ……………にくいのかなあつて……………私、思つて……………お醤油とか……………苦手な人なのかな、つて……………」

「……………ナナ……………」

「でね、頑張つて色々考えたんだよ……………！ ねえ、ギル……………コレなら食べられるよね……………？」

「……………」

ギルさんは切れ長の目を数回はちぱちと閉じたり開いたりする。何が起こったのか分からない、という呆然から、だんだん……………信じられない、という表情へと変わっていく。

「……………お前ら……………わざわざ……………俺に……………？」

「はい……………ギルさんの為に……………皆で、色々調べたんですよ？」

「まあ、言う程じゃねーけどな」

「えく？ ロミオ先輩が一番熱心だったじゃくん！」

「ぼつ……そ、そりやどうせ作るんだったら良いモノにしないと……ってああもうニヤけんなよお!!」

「本当ロミオ先輩って素直じゃないんだからく」

「う、うるさい……!」

ギルさんは黙って、帽子の鍰を深く下げてしまう。

流石にそろそろ分かってきたことがある。……この人がこうゆう仕草をする時は。

表情を、見られたくない時——だ。

「ギルさん……言いたくないこと、簡単に言えない様なこと……は、確かにあると思います。」

だから……そんなに急がなくてもいいと思うんです。……時間をかけないと、分かり合えないことって……

……あるから」

……だから

「こうやって少しずつ——仲間になっていくんじゃ……駄目ですか？」

建前だとか、カツコつけた言葉だとか、そういうモノはとりあえず全部捨てた。

かわりにぶつけたのは、自分の言葉と……自分の本音。

すぐに分かり合うなんて私たちには多分無理だ。誰だつて見放されたくない、見限られたくないという気持ちは確かにある。

失望される位なら……初めから、歩みよらなければいいという諦めと恐怖と妥協。そう言ったものと……何とか折り合いをつけて、皆

『自分』を守って生きている。

……そういったものが分からない訳じゃない。
だけど……だけど……少しずつなら、毎日1ミリペースずつでな
ら。

……頑張れるんじゃないか……と思う。

だって、私は。

……『副隊長』だから。

「……ギルさん」

ギルさんの無骨な手が、皆で作った渾身の創作料理——『ポトフパ
ン』へと伸びていく。

訓練や戦闘で負傷しまくった切り傷や傷痕だらけの指先が、ソレを
掴んだ。

先輩とナナちゃんと私の期待と緊張を込めた目……とフランさん
の何の感情もない目が集中する。

テンションとノリと勢いだけで作った結果……全然味見してない
けど……煮込み料理だし大体どんな風に作っても基本おいしくなる
のだから失敗はしないハズ……！

……ハズ……だと……思う……。

「……食べにくい」

「そ、ソレは……おでんパン最大の弱点……！」

「うるさいな〜今改良中なんだから見ててよね！」

「もつと何かいう事ねえのかよタコ」

「ロミオ先輩は憎まれ口を叩かなーい！」

「本当デスヨ」

別に食べられなかった訳じゃないんだ良かった……という安心感からか、一斉に脱力して無駄口を叩き合う私たち。

特に、ナナちゃんは、大好きなおでんパンをやっとギルさんが受け取ってくれた、と……本当に、本当に今日だけは無邪気に喜んでいた。何だかんだで口喧嘩相手を心配していたロミオ先輩も嬉しそうだ。

「……ありがとな」

「なっ!？」

「ええ!？」

「お、おい……嘘だろ?!？」

ギルさんはまた帽子の鍔を下ろした。

「やった~~~~! ギル今のもう一回! もう一回!! 今度はちゃんと録音するから~!」

「ギルさんが……ギルさんが……? ギルさんが……!？」

「良かったね、唯ちゃん! まだ『ありがとう』って自然に言えるうちは……治療の見込み……あるよ……!」

「諦めていたギルさんにも心にある一筋の希望が……!」

「言い過ぎだよお前ら!」



訳も分からず、はしやぐ三人を見て苦笑が漏れるのが分かった。悪い奴らじゃない……そんなことは、とづくに分かっている。ただ、自分が頑なだったのだ。誰かを受け入れることに。そして、また失うことに。

それが『拒絶されている』と誤解されていたのだろう……と、ギルバートは思った。

あながち間違った解釈ではない。

「皆さん、心配してたんですよ？」

「ああ……アンタにも迷惑かけたな」

「……手間ではありましたが……迷惑のかけられ甲斐があつたか否かは」

これからの貴方次第になるでしょうね」

フランというオペレーターは悪戯っぽく挑戦的に笑ってみせた。

「穂口は作りました。あとは、貴方がお決めになって下さい。……どんな部隊にするか、なるか、はまるで未知数ですが……どうか、後悔のない選択を」

「……分かつてるさ」

どうやら、年齢以上に大人びているらしい。

『何となく』であるものの、重くて苦しい過去や抱えた事情を察して、気を回し、そして重荷にならない程度に背中を押す……というかなりの高等技術をやったのけた。オペレーター恐るべし……という現実は一切気づくことなくギルバートは素直に礼を言った。

所詮脳筋族なこの青年に、人間の……特に女性の繊細な感情の機微を読み取るとは当分不可能。

「まあ……どうしても何かお返ししたい、というのなら……同等のモノを返すことをお勧めしておきます」

「……俺の手料理？」

「妥当では？」

ナナさんは大食いでロミオさんは味に五月蠅いところがありますから、難易度は高めになりますが。とオペレーター少女は付け加えました。

「どうしても、と言うのであれば……おひとりです人前は厳しいでしょう……。」

「……手を貸さないことはありませんか？」



その日、人類は思い出した。

「…………え？ ギルさん？ ギルさんが今度は料理作ったんですか!？」
「嘘……？ 今流行の男の手料理って奴ですか……?!？」
「フランさんが手伝ったんだってよ！ ギル成分を無視すればフラン
さんの手作りってコトに…………！」

そう、忘れていたのだ。

『世界』から『国家』が消えて、早20年もの月日が経とうとしていた。

自国、という概念を失い、とりあえず近くにフェンリルの支部ができたからそこに住むわーという風に固まって生きていた人間たちは……必然的に文化というものが混在する中に生きていた。

だから——人類は、忘れていたのかもしれない。

その…………『忌まわしき』を。

それどころか、この時、私たちはあろうことか…………ギルさん、って基本的に手先が凄く器用そうな人だから、意外と上手なんじゃないか

な……なんて異次元世界の幻想を抱いていたのだ。

「あ、有り得ない……有り得ない……!? ど、どうして……何故……?
どうしてこんなことに……?」

おかしい、とこの時点で気づくべきだった……。

普段冷静沈着で、何があつても動じない、ミスの少ない優等生……
優良オペレーターなフランさんがここまで取り乱しているという、異
常事態に。

「あ……ありのまま今起こった事をお話します……!」

『わたしはやつの前で料理していた』

と思つたらいつのまにか終わっていた』

な……何を言っているのかご理解頂けないでしょうと思いますが
私も何をされたのか……。

頭がどうにかなりそうでした……!催眠術だとか超スピードだと
か……そんなチャチなものでは……。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わいました……!」

「何言ってるんだこの人……」

ポルってやがる。

「副隊長、お、お気をつけて……! アレは魔のモノです……! 唯さ
ん……あの闇は……あの闇は……そう簡単に祓えるものじゃな……」
「フランさん!? フランさん大丈夫ですか?!? ……気絶しちゃった
……!」

「ちよ……何この急展開……」

その存在を……知らなかった訳じゃないのに。
……樂觀的になりすぎていたのだと思う。
私らしくもなく。

「どうした？」

「ギルさん！ フランさんが急に——……?!?!」

「貧血か？ そのこの長椅子に寝かせて——」

私たちは、思わず言葉を失った。

ギルさんの、持ってきたモノ……その料理……いや、物体に。

「ぎる……さん……それまさか……」

「……まさか……」

「……」

ああ、コイツか。とギルさんはフランさんを担ぎながら——

何の悪意も籠っていない、1ミリたりとも邪気の入る隙のない——
純粹に善意だけの笑顔を浮かべた。

『ウナギのゼリー寄せ』だ」
「……………!？」

お分かり頂けたでしょうか。

「見た目からして最悪!!!」
「kひc833えy34い7tr……………」

どこから取り寄せたのか今じやもう希少な淡水域に生息するヌルヌルのお魚さん……………表面に粘液とレクチンを分泌する細胞をもっている長細いお魚さん……………ウナギさんをブツ切りにして……………。

……コレ以上の描写は精神衛生上よろしくないので控えさせていただきます。

「狂気だ……」

「狂ってる……極めて冷静に狂ってやがる……!」

「何をアホなことを」

まるで正気なのが逆に怖い。

「……冒涇だよ」

「……ナナちゃん……あんまり刺激しないで……!」

「これは……冒涇だよ!!」

流石の香月さんもガチギレ。

「おい……本当大丈夫か? ……一応医務室行くか……。悪いお前ら。」

勝手に食っててくれ」

食器は片づけるから置いといてくれてて良いからな……という微妙に優しい心遣いの元、マクレイン氏は昏倒したフランさんを担いで医務室へと向かうのだった……。

死刑宣告をされた、私たちは……一抹の後悔を抱いていた。

どこで間違っちゃったんだろう……やっぱり、冒頭でロミオ先輩とナナちゃんを止めておけば良かったのかな……? そうすれば、こんなことには……ならなかったの、かな……。

でも、もういいや。

……どうせ、すぐに。終わることだから。

「……頂きます……」

口を開けたことは覚えていてる。

その後、今までの人生で起こった出来事が脳裏に蘇り———そこから先は、なにがあったのか……

……気が付いたら、皆で仲良く入院してた。

嬉しかったり——した。



予想してたことだが、その後の兄の活躍は凄まじかった。

「CA……じゃねえ疑似CNSプログラミングを手打ち入力だと……
!?! 凄すぎる!」

「関節部位のトラブルが……」

「そうか、あそこの配列を……! なんて凄い発想なんだ!!」

「立った!! 神機兵が立ったわ!!」

「テストを起こせ! 歴史が変わるぞ!」

「……ああ、完璧すぎて自分が怖い……!」

「あんま調子乗らないで」

「神機兵が……神機兵が……動いた……!」

「すごい、やはり彼は天才だ!」

「なかなかできることじゃない!!」

「やめて下さい!! コイツつけあがりまますから!! 煽てると調子に乗りますから!!」

「マスターとお呼びしても宜しいですか!？」

「神と呼んでもいいでしょうか!？」

「お兄様!!」「お兄様ー!!」「ああ、お兄様! 流石ですお兄様ー!!」

「見てくれマイシスター! さあ唯ちゃんもご一緒に!!」

「帰ってよおおおおお!!」

……つてなことになってやがった。

ものの一週間経つか経たないかで神機兵の兵装開発(具体的には神機兵の持つてるデカ神機)の担当のハズなのに、

何故か色々な問題につき自立できなかつた神機兵を歩かせ。

その片手間にアーサーさん達ロシア部隊の旧型神機のアップグレードをこなし。

更には、ここに来てから何か思いついたらしい——変な新技術の開発レポートの発表までやりやがったらしい……。

皆ビツクリして唾然としていたが、ぶつちやけコイツは常にこんな感じだ。

更に、今はブーストかかってヤル気がギンギンに漲ってしまっちやっている。

嫌味な位デキて当たり前、だけど人から好かれる意味不明のカリスマ性を持っているから敵を作らない。

……他人だったらさぞ、眩しく映るだろうな、と今まで何千回も思ってきた。

幸か不幸か、正直、身内からすれば

ウツツツツザイ……以外の……何者でもない……。

「アンタの兄さん凄いな神威さん!!」

「マジ腹立ちます」

「このままあの人が此処に居てくれればなあ……!　ロシア支部にエ
イジス島出来ちゃうよー!」

「何なら置いて行きますよー」

「マジ!?　そうして!　そうして!!」

「寝込みを強襲して拉致監禁しましよー。2, 3日昏睡させておいて、
そのスキにフライアがトンスラかまします……これで完璧……死ね
クソ兄貴が……」

「いいね!　上手く行きそうだねー!　というのは別にしてー。あの
人昔ロシア支部に居たコトあるよ思い出したよ。本人も言ってたし」
「……そーなんですかあー……」

「興味なさそうだね神威さん……。オレ、勘違いしてたみたいだわー。
アンタどつかで見たコトあると思ってたらそれお兄さんの方だった
んだよ!　ごめんごめん」

「……べつつつつにいー……」

「だって本当似てるんだもん」

耳が腐る程言われてきた。

私たち兄妹は、外見だけならかなり似ている。

だから何処へ行つても『あの神威ヒロキの妹』不回避だった。世界
中を移動しまくる移動要塞兼極致化技術開発支部なら平気かと思っ
ていたら……追いかけてきやがった……。

それはそうと、とアーサーさんは上機嫌ゆえに輝く目から、やや厳

しめな表情へと変わった。

「神威さん……この戦術予測表……見たんだけど、これアンタだろ……」

「……うっ……」

ペラリ、と机の上に書類が一枚。

そうです、それはまさしく私が提出したものです。

「だよなー。絶対そうだと思っただ。アンタが副隊長になってから戦術パターンがカッキリ2種類だけになっちまったもん。教科書通りのマニュアル戦法か、逆に弱腰すぎてアレなヤツかーって感じの」

「……す、すみません……」

『遊撃隊』の隊長として言わせてもらうと……両方共ダメだね、不合格だ」

「まず前者、『お手本通り』な方な。何が駄目かって言うと、よく言われることだけど……状況って言うのは教科書通りには動いてくれない」

「……敵勢力が……教科書通りとは限らないから……適用できない、と？」

「違う。確かに敵もそうだよ。教科書通りって訳にもいかない。

でも、だからと言って教本を蔑ろにすべきじゃない……『アレ』は何だかんだでよく出来てる。過去の膨大なデータを分析して洗練してる……こつちが『場面』さえ読み間違えなければそのまま転用したって最善の結果を出せる場合もある。それに基礎を馬鹿にすると痛い目見るよ？ ソースはオレ」

「……成る程……」

彼は基礎を馬鹿にして痛い目見たことがあるようです。

「でもコレで真に問題にすべきは『敵』じゃない。『味方』の方。この戦術表は個人差を一切考慮に入れてない。全員厳格な訓練を潜り抜

けた兵士であるという想定の下に構成された戦術だ。……これじゃ失敗するのも目に見えてる」

「……」

アランソンさん……結構……言われましたね……。

「で、もう1コの『引け腰』な方は、逆。もう全然逆。まるで逆。

こっちはこっちでアラガミのことを全然分かってねえ！ 新人がよくやるミス。まあ……ナメてかかってないだけでもマシだけどさ……これだと『最低討伐線』もクリアできない」

聞き慣れない単語がアーサーさんの口から飛び出した。

思わず聞き返す。

「最低……討伐……せん……？」

字面から見れば最低討伐しないといけないアラガミの数……の様に思える。

問題は、それがアーサーさんの口から当たり前のように出てきたことだ。

……恐らくは神機使用の中でごく普通に使用される用語、なんだろう。

「あー……ジュリウス隊長とかロミオは気にしたことねエんだろうな……。ギルバートさんだっけ？ なんか旧型から転向した人。あの人に意見は聞かなかった？」

「……」

「それじゃダメだな、神威さん」

「………本当……すんません」

しょうがないなー、といった感じのヤレヤレ顔でアーサーさんは続けた。

「まあ、薄々分かっているとは思うけど最低ブツ殺さないといけないアラガミの数だよ。どこの支部でも大体あると思うよ。……ん……カントンに言くと、『防衛班』のノルマって考えればいいと思——」

「!!!」

「ソコ開き直るの?! 逆に凄いわ!! よくソレで神機使いになろうと思っただよな!? 徴兵されたクチか!?!」

大正解だ。

徴兵が来たのでコレ幸いとウザい兄から逃れるために乗ったクチ。

……何もかも無駄だったけどね……。

「常識が違う……!? こ、コレが『外』と『内』の違い……!? 格差を見た……階級社会っていうのは今でも健在ダツタンダ……!! とんでもねえモンスターイーターが居たモンダー……」

ひとしきりボヤいた後、多少冷静さを取り戻したアーサーさんは……。

……深刻な常識格差を埋めるべく、まるで、異世界人とも会話するかのよう——懇切丁寧な説明を開始した。

「大抵ん所はそうだと思うけど……神機使いには『部隊』があつて、部隊単位で動いてる。分かるな? アンタら『ブラッド』や『スネグーラチカ』みたいな奴だ。

支部は神機使いの巣だ。そこで、部隊がウジャウジャ湧いてる。

で、メンドクサイから大抵は第一部隊、だの第二部隊だの第三部隊だの数字呼びしてる。というか、名前がしつかり付いてる部隊の方が少ないんだわ」

「そうなんですか?!?!」

「そうなんですよ!?!?!」

てつきり皆名前付いてるモノだとばかり……。

……だってブラッドだって、スネグーラチカだって名前ついてんじゃない……。

と、そこで思い出した。

今派遣で来ている金色騎士・フォン・シュトラスブルク卿のことを。

あの人は自己紹介の時『第一部隊所属』と言っていた。

「ヤバい……何か怖くなってきた……。オレの常識が今問われてる……!?!」

「……で、でな!? 第一部隊、とか第一チーム、αチームなんて呼ばれてるとにかく一番系な部隊がトップだ。」

一番強い奴らが集まる場所。

「そいつらは積極的に打って出てアラガミを倒しに行く奴ら。理由は……装甲壁のアップデートとか、研究素材の確保とか、神機の強化とか。」

「強いて言うなら『ブラッド』もコレに近いと思う」
確かに……と思った。

ブラッドがアラガミを倒しに行く理由はフライアの装甲壁の改良や修理の為の素材の確保か、神機兵開発の過程で必要となるアラガミ素材の調達。もしくは自分たちの実績作りになる。

そもそもフライアは研究の為にだけに動く支部。一部例外はあるけれど、守るべきものがないし、何より動ける以上……余程のコトでもない限り私たちが人を守るために出撃することはない。

「んで、つぎに第二、第三、第四くらいまでかな? って数字が続く。この辺は、第一部隊みたいに遠出しなくて支部に詰めてる。支部の近くのアラガミを狩ったり、最悪の場合壁を破ってきた奴をぶつ倒す。基本的には救護部隊、偵察部隊、装甲壁修復部隊や回収部隊なんかの混成になるから『防衛班』なんて呼び方になる。」

何が違うか、って言うとなら第一部隊が『狩る』ゴッドイーターなら防衛班は『守る』ゴッドイーターってこと」

「……」

「どうかした?」

「……やっぱり……壁って……『アラガミ装甲壁』って破れるんですよ……」

言うまでもないが……アラガミ装甲壁は読んで字のごとく対アラガミ用の防護壁。」

アラガミが『なんかすげえマズそう』と思う傾向の因子、『偏食因子』をまけてこねて固めて作ったデカイ壁だ。それが破れる……というのが意味することは……。

アーサーさんはもう完全に呆れ顔。

「……そりゃな……。装甲壁なんかバツカバカ破られるよ。だからこまめにアップデートしなきゃならねんだよ……。新種は湧くわ、偏食傾向は変わるわでな。その辺フライアは良いよなー、イザ勝てないとなったら逃げちゃえばいいんだしさ」

「……」

「あ……落ち込むなよ……。……はあ……。ゴメン。確かに少しだけ羨ましいっていうのもあるんだ。……技術も装備も人材も揃ってるアンタらがさ——……。ま、言っても始まらないな！」

「……」

「神威さーん……」

あまり不用意に人を傷付けることを好まない……。系男子なアーサーさんが、色々喋って何か元気づけようとしている様子が分かった。

多分落ち込んでいる——と勘違いしているのだろう。

でも大丈夫。今はそこまで沈んではない。

「前に……言われたんです。『誰だって好きに生きれるわけじゃない、なりたいモノになれる世界じゃない。それでも、貴女になりたい人は沢山居る』って……。……怒られました。……ちよつと思ひ出しちゃって」

「お、良い事言うじゃん」

「……胃痛が……」

「何で?」

やはり自分は恵まれている方……。なんだとは思うけど。

最近、来やがった兄のせいでつつい、忘れがちになる。

『私たち』を希望だと言ってくれる人達には悪いけど……。

『英雄』にはなれそうにない。

「まあー……そーだなー。アンタになりたい、って奴はこの世界にゴマンと居るだろうなー。オレだって時々羨ましくなるし……。

でも、アンタはアンタだろ?」

「……」

「あー……あんま上手く言えないケドー……アンタの兄さんは確かにスゴイ奴だし、アンタの隊長もスゴイ人だよ? だけどさ……引き摺られることはない、そうだろ?」

神威さんって周りをよく見れるところはいいんだけど、自分のことは全然分かってねえな。自分が周りからどうゆう風に見られてるか、ってこともさ。自己評価低すぎ。逆にウザい」

「……う、ウザい……」

よく言われますが何か。

「だからオレはハッキリ言う。言わなきゃ分かんないっぽいからハッキリ言う。

もっとな!! 社会勉強しろ世間知らず!!」

「は……はいすみマセンごめんなさい!」

「あと神機兵置いてけ!!」

「あ、ソレは無理です」

「じゃさっさと完成させろハゲ!!」

九条先生、苦情が来てますヨ……。

「という冗談は抜きにして……本当にさっさと神機兵完成させて欲しいんだよオレらは。ロシア支部はさっき言ったと思うけど防衛戦力全然足りてねーの。迎撃用の神機使いも少ないし、だからさっさと、神機兵作って防衛戦に回したいんだわ……!」

それに………オリガに………あんま無理させたくないんだ……」

「……オリガちゃん……?」

金髪ツインテールな元気美少女が思い出される。

体に不釣り合いなデツカイクレイモアを振り回す美少女神機使い——のハズだ。

けど、それだけじゃない、ということも薄らとだけ察している。

前回の大戦闘——テスカトリポカ戦ではオリガちゃんはかなり無理のある戦い方をしていた。あんな戦い方ばかりしていたら——早死にするのは目に見えている。負担がかかるどころではない、文字通り命を削るような戦闘だ。

でも………他にもない………アーサーさん自身が言っていた。『それが戦う方法を知らない』のだと。

「……」

「アイツは………神機の適合率が高くない。………適合率って案外重要だぜ? 数値が高ければ高いほど、安定してればしてほど……『寿命』が来るのが、遅くなる」

「……でも……」

「それにアイツの神機だってメチャクチャだ。混乱した戦況で、とにかく戦える頭数を増やさないといけないっていう状況下で………ほぼ

無理やり動員されたようなものなんだ。

だから……もう無理してまで戦う必要なんかねえ」

「……」

何か、違和感を感じた。

だけど……それがハッキリ何であるか、という確信は持てなかった。

アーサーさんは暗くなってしまった雰囲気、無理やり吹き飛ばすかの様に笑った。

「だからアンタ達にはけっこう期待してるんだぜー？ さっさと早いところ神機兵作ってくれよな！

それに……オレは決めたんだ、もう二度と仲間を失ったりしねえんだ、つてさ」

その言葉には、確固たる決意があるような気がした。



アーサー・クリフォード隊長によって散々ダメ出しをされて、もう生きる気力も失せかけてきた頃だった。

何となくのノリで庭園に突撃すると……そこには意外なことに、隊長ではなく、シエル・アランソンさんが東屋に座っていた。

この人もかなり貴族趣味っぽい服装もとい装備なのでお花畑が似合っている。

「……副隊長……」

「あー……どうもです……アランソンさん……」

何で居るの……。

いや、別に悪くないけど……あんまり今は会いたくなかった。今は1人で際限なく奈落の果てまで落ち込みたい気分だった。

だからと言って、そこどいて、という訳にもいかず……黙ってここで踵を返すこともできず、何となくで隣に座ってみる。

「……」

「……」

……沈黙。

「……えっと……アランソンさん……。今回の戦術表だけど……またダメ出し食らいました……アーサー隊長に」

「……」

「……うん……でも……お互い初めてだし……気楽に行きましょう」

「……」

静寂。

「……え、えっと……戦術の選択自体は悪くない……とおっしゃってましたよ……」

「……」

無言。

「……あとは……私が弱腰すぎるって……」
「……」

無音。

「……えー…つと……だからそのー……」
「副隊長」

「な、何ですか!？」

唐突に喋り出したアランソンさん。

しかも名指しで。

「……実は……ご相談が」

「……なんでしょう……?」

「此処に……ロシア支部に来てからというもの……私……何故かよく人に話しかけられるんです」

「……えつと……ヘルマンさん?」

彼と彼女の邂逅の開口一言目は、やはり予想していた通り

『デカイ』——だった。確かにプロポーションは凄まじいけれど、その台詞を真顔で言っただけはいけなかった。

若干ドン引きしていた彼女の顔を見て——少しだけ哀れみを感じた。

「もし、凄くしつこい様だったら査問会に通報してもいいからね？」

注意状3枚で退場である人もう既に2枚持つてるから今リーチかかって」

「……いえ、シュルツ隊員ではなく……一般兵からの」

「……え、マジで!？」

ロシア支部の変態は奴だけではなかった……!? 一見……アランソンさんは凄く可愛い女の子だ。ふわふわの装備だのフリルだのを

身にまとっているし、しかもソレが似合っている。

「だけど……よくよく見るとホルスターには拳銃、脚にはナイフ、という結構近接系装備に充実している。恐らくその他のブラッドの誰よりも。事前情報によると高度な軍事教育プログラムを受けてきたらしい——まさにそれこそが、今の微妙な齟齬を生じさせてしまっている一因になる訳だが。」

口説こうという挑戦者がよく居たものだな……侮れない、流石ロシア支部、と感嘆の念さえ抱く。

敵ながら……、だ。

「……その……不埒な目的であるならば……相応の対応を、とは思うのですが……。……困っているのです」

「……不埒な目的じゃない?」

「はい……。皆さん、おっしゃるのです……」

その内容はマジで意外なモノだった。

要約すると。

『アランソン、って『あの』アランソンですか!』

『サイン下さい!!』

『握手してください!!』

『貴様オレに間接握手よこせえええ!!』

『お写真よろしいでしょうか!』

『でえ……』

……というファンっぷりらしい。

「はい?!?!」

え、エエー……それは、また……。

反応に困る。

『内側』の常識だと、神機使いと一般兵の間は極めて微妙なモノだった。

神機使いは即席ソルジャーとはいえ、若年、下手すると子供……と言える年齢までも動員している。しかも、人体にはオラクル細胞をブツ込むことで半ば人間を捨てていることになる。

……しかも、その多くは基本的に『非生産的』と判断される外部居住区出身者だ。有名な話では、内部居住区には赤紙が届きにくい——ということ。

『内側』に住んでいれば教育を受ける十分な練成期間があるため、研究職や幹部職、軍人にしても士官クラスに配属されることが多い。

嫌な話だけど、支部の外か内側かに生まれるかで既に差がついている……のだと。

と、いう訳で、軍人といってもピンキリだと思うけど……多くの兵士は、人間を辞めていることに対して恐怖を、または若年でありながら動員されていることへの同情を。または、特殊な教育を受けている訳でもないのにスピード出世することへの嫉妬などを抱いているため、当然関係がうまく行くわけがなく、比較的彼らから受け入れられるのは……ジュリウス隊長の様に正規士官教育を受けつつも、ゴッドイーターを平行してやっていたという珍しいケースのみだ。

……そんな一般兵の皆様方がそこまでアランソンさんに執着する理由とは……。

アランソンさんは見た目だけだったら間違いなく、『若い女の子なのに』と同情路線に入ると思うのだけれども……。

「……な、なんで……？」

シエル・アランソンさんは少しだけ考え……やがて、何かを振り切りたいかの様に語り始めた。

「……私の家は……元々軍閥だったらしいのです。まだ国連軍が健在であった頃、アランソン家という名は、有名だったと聞きました」

「……あー……そうですか」

それなら納得だ。

今は亡き伝説の末裔に会えた、と思えばテンションも上がるだろう。

……が、話はそこだけでは終わらなかった。

「そして、私の両親は……『ソーンツア作戦』で殉職した、と」

……聞き慣れない業界用語本日第三弾、降臨。

どっかであっすら聞いたことがあるような気がするな……と思いつつも、アーサーさんとは違い何か今ここで話の腰を折れるような雰囲気じゃない。

私は……アランソンさんが今、何か心を開こう、としている場面に質問できる程空気読めない奴じゃない……！

と、いう訳で、奥義『知ったかぶり』で通すことにした。

ソーンツア作戦、ああ知ってますよあの作戦ですね、あの有名なね！

……よし……演技の用意は十分だ。

「両親は、若手の士官であり、当時崩壊しきっていた連合軍に……所属していたと聞きました。当時もう連合軍に力は残ってはいなかった……でも、両親は最後まで任務に忠実だった。

ロシアで人類の反攻作戦がある、と毎日口癖の様に言っていたのを今でもよく覚えています。でも、私は行ってほしくなかった。……でも……母は誕生日までには帰るから、と優しく言っ任務へ赴きました。

そして幼かった私は……二人の訃報を受け取りました……奇しくも、自分の誕生日に」

「……」

ソーンツア作戦って何かロシアで連合軍な人類の反攻作戦だったらしい。

……ごめん、何も分かんねえわ……。

「……その後、私はラケル先生の『マグノリアⅡコンパス』へと引き取られました。

今思うと……両親が、もしもの時の為に、と探してくれていたのかもしれない。……軍事で名を馳せた家だったので、頼れる知人も、親類も、皆……アラガミに負けてしまっていたのでしょう。……だから、少しでも、とまだ家の名に力があるうちに……と信頼できる場所を用意してくれていたものだったのかもしれない。

事実、マグノリアⅡコンパスに行つて私の教練担当だという教官に会つて最初に言われた言葉がコレでした。

『アランソン!? 『あの』アランソン!?!?!? さ、サイン貰つても宜しいですか!?!』……と」

「うわぁ……」

ある意味人格が曲がりそうな幼少期の記憶だ。

アランソンさんの過去もやはり壮絶っぽい。かなり一筋縄ではないかない臭い。

でも、過去を語る彼女の顔は何故か穏やかなものだった。

「そして、私は、マグノリアⅡコンパスで軍事教育を受けてきました、時には反対する教官を無視してでもストレステストを受けさせて貰った事もありました」

わりと過酷な軍事教育を受けてきたこと、そして時には懲罰房にぶち込まれたこと……。暗殺や防諜まで学んだこと……。

正直言つて、少女が送るべき思春期をまるで過ごしていない様に思えた……けど、本人は。

「でも……私は、嫌じゃ……なかった。

規律と軍律で徹底された世界も。時には人格をも切り離して理性に従うことを要求されることも……。

嫌じゃなかったんです……だって、寂しくなかったから。

その時だけ……両親が近くに居るような感じがして……」

……シエルさんは。

「だから……その……今、こうやってロシア支部に居ることも。

……皆さんから、親の名前を聞くことも……今は、とても……。

……多分……私は……」

……とても、嬉しそうだった。

「……そうなんだ」

「……はい、ですがあまりに熱心すぎるのはちよつと」

「よく言っておきますね」

レアなのは分かるが度を超すのは良くない……とのムネ、ちゃんと伝えておこう。

どの辺に言えば届くか分からないが、とりあえずここは隊長に報告することにした。

あの人なら多分上手くやる。

「あ、あの……副隊長……」

おずおず、といった感じでアランソンさんは話しかけてくる。

「私は此処に来てからというもの……一つ学びました。いかなる状況にも不測の事態にも対応できるように、上意下達は厳守すべき……でも、戦況に応じて臨機応変に対応するべきことは重要であるのだと」

「は……はい……!？」

何という四字熟語の多さ。

堅苦しい言語使用により若干混線しかけた頭の配線をなんとかショートさせない様に押し込める。

「なればこそ、お互いの相互理解が必要不可欠事項なのではないか

……という結論に至った結果」

「は、はあ……」

「副隊長、折り入ってお願いがあります」

そこから先は、マジで唐突だった。

お辞儀したのだ。

がばつ、とでも擬音が聞こえてきそうな位の……まさかの腰を90度
に曲げる完璧な直角お辞儀を彼女は披露したのだ……！

「私と、友達になってくださいー！」

「!?」

と、友達告白……!?

「あの……駄目でしょうか……?」

「だ、だだだだダメじゃない!! ダメじゃないよ! だ、大歓迎……で
す……」

「……!」

今度は、ぱあああ、という擬態語が似合う程目をキラキラさせたア
ランソンさん。

表情がド直球で顔に出る人だ。分かりやすいというか、騙されやす
そうというか……。

……あまり人のことは言えないんだけども。

「こ、こちらこそ……宜しくお願ひします……!」

思わず片言になる私。

だ、だって嬉しいんだもん……。

自慢じゃないが、私も友達は少ない方だったから!!

全然友達なんか! いなかったから!! ……そりや学校で一緒に
食堂行くレベルのは居たけど、アレは友達じゃない、クラスメイトだ。

だからこんな宣言もとい告白をされたのは初めてだ。

「えーつと……アランソンさん……」

「あ、あの！ その呼び方ですが……できたら名前で……呼んでくれるのじゃ……駄目……ですか？」

「そ……それじゃ……シエル……ちゃん？」

「……っつ!!」

名前を呼んだ、それだけで真っ赤になるシエルちゃん。

……ヤバイ……すごく可愛い……!

シエルちゃんは頬を紅潮させながら、あまりこうゆうことには慣れていなくて……でも懂れていたんです。仲間とか、信頼とか……と、小聲で恥ずかしそうに喋っている。

もう一つ、不躰だけど、お願いがあるのだ、とシエルちゃんは切り出した。

「あなたを呼ぶとき……『お姉さま』って呼んで、いいですか……!？」

……。

……。

……ん？

「……ごめんなさいっ！ 幾ら何でも早過ぎますよね……? 『お姉

様』なんて呼ぶの……」

「早い!?!」

早い遅いの問題じゃないよシエルちゃん!?

え、何これ……間違っているのは世界の方!? ……それとも私……!?

「ラケル先生に教えて頂いたのです! 自分と最も親しい年上の間柄の女性は、たとえ血縁関係になくとも……『お姉様』と呼称するのが相応しいと……」

その、副隊長はまさにそれに当てはまるので……」

嗚呼、女神さま……!?!

貴女は何と罪深いことをなさってくださいだったので。お蔭様でシエルちゃんは何かトンデモナイ勘違いをしている様です。

「マグノリアIIコンパスでは日常的に使われていた言葉ですが?」

何を教えていたんだよ児童養護施設! マグノリアIIコンパス!!

特にそのエリートクラス!!

幼気な子供たちに教えるのは軍事訓練だけにしていたいただきたい。

「そ、そうですか……そ、それ程までに嫌ならば……はあ……仕方ありません……」

思わずしゅん、としてしまうシエルちゃん。

その様子が、あんまりにもシヨンボリ……としていたので。

本当に、本当に……小さな女の子みたいに、しよげかえっていたので……。

思わず、私は。

「……いっしょ」

「え……!?!」

「……呼んで、いいよ……シエルちゃん……」
「……!」

負けました。

……折れました。

「ありがとうございます、お……お姉さま……!」

「うん……」

「あなたが……私にとっての……はじめての友達です……ですから
……本当に、ありがとうございます……」

「これからも、宜しくお願いします……お姉さま……!」

「……〜!!」

シエルちゃん、やっぱりそれ恥ずかしいからやめて!!

……なんて、言えなアアア!! と……本当に自分が嫌になった瞬間だった。



本当は、嬉しかったりした。

分かってる。

オレーシヤは死んだってことも。死んだし……もう帰って来
ねえってことも。

一番辛かったのは、アイツの姉さんのリディアさん……と、当時新

人で一番アイツと親しくしていた『新型』

……アリスだつてことも。

……分かっている。

……分かっているんだ、全部……全部。

……だけどき。

凄く良い奴だつたんだ。

馬鹿なのに底抜けに良い奴で、女の癖に女にばっか抱きつく奴で。

辛くても悲しくても、笑顔で全部受け止めて——飲み干せる。

……良い奴だつたんだ。

ずっとずっと思ってた。アイツを救える方法が何かあつたんじゃないか——つて。

アイツ一人救えた所で、何が変わった訳じゃない。

でも、ひよつとしたら……と、思わずには居られなかった。

もつとオレが自分の頭で考えていれば、行動していれば——アイツらを助けられたんじゃないか、

と考えずにはいられなかった。

そんな思いが、ずっと消えなかった。

だから、オリガを見た時オレは思つたんだ。

壊滅寸前の陣地を必死で守る部隊、その後方で、雪と泥に塗れて一

人で座ってるアイツを見た時。

……嬉しかったりした。

損傷して、そのまま眠っていたハズの……オレーシヤの神機を使う
アイツを見つけた時。

……帰ってきた、と思ったんだ。

……だからもう、

オレは二度と、失いたくはない。

phase 28 最終防衛戦

【ソーンツア作戦】

2065年

旧ロシア連邦東シベリアクラスノヤルスク地方で発動された大規模アラガミ掃討作戦。

フェンリルの技術提供の下、連合軍が主導として行った『人類最大の反攻作戦』である。

この作戦の目的はフェンリルと連合軍との協力によるアラガミの掃討であり、

結果として多くの犠牲を出したものの、大成功を収めた。

——『世界史用語辞典』

「……………、ココだった……………」

何も言わず、実家から何となく持ってきた教材を閉じた。



ブリーフィングルームには全員が集まっていた。

「スミマセン私が最後までいたいですね……つてあれ？　ギルさんは？」

「……………ギルさんは!？」

「んー……何か体調不良(?)みたいだったから医務室ブチ込んで来た。何か本当にヤバそうだったし……まあ……死にはしねえと思うけど」

「二度と帰って来なくていいのに」

「……………ねえナナちゃん……ひよつとして……一服盛った……?」

否定しきれない可能性を思いつき若干青ざめる私へ、香月ナナさんは何か意味ありげに微笑んだ。

……………この二人、例の『ゼリー事件』から険悪。というか最悪。

あの一件以来、ナナちゃんは完全にギルさんを敵………というか殺害対象にロックオンしたらしい。度々隙をついてぶっ殺そうとしている姿が目撃されている。

……………あの人生きてるよね……ちゃんと生きてるよね……!？」

……………何か、すごく、心からのそこから………心配だ。

「ギルなら問題ない。ラケル先生が見ていらっしやる。時間だ、ブリーフィングを開始する」

「ちよ、待って下さい隊長……! ……傍に居るのがラケル先生なんてもう嫌な予感しかしないのですが!？」

「問題ない」

「……………いや………でも………」

ジュリウス隊長の鋼色の目が、スツと細まった。

——あ、ヤバい。と直感が警報を鳴らす。

「それとも何でしょうか。貴官は何が言いたいのです?」

「何で敬語何ですかあ!？」

「優秀で健気でホタルのように儂いラケル博士がついて居る………マクレイン隊員に、何の、問題がが起こり得ると?　まさか完璧なラケル博士の技術と知識と『完全な』フライアの設備に対し疑問を抱いてい

る訳では在りませんよね？ 神威副隊長？ それとも貴官はフライアの設備に何か問題が起こり得るとの情報を得ているのでしょうか？

「……もし……そうだとすれば、私は義務として反乱分子を告発――」

「じ、じじじ時間ですね！ ブリーフィングを開始してくださいシエルちゃん！」

隊長はかなり機嫌が宜しくないらしい。

だから、私はギルさんへの心配や配慮を全て無かったことにして遙か遠くへと投げ捨てた。

「了解しました副隊長、それではブリーフィングを開始します」

シエルちゃんが頷き、巨大画面に映像が投影。

それは地図、そして恐らくは『アラガミ』を示すだろうフリップが振られていた。

「本作戦はロシアサテライト候補地付近のアラガミ。主に中型種の討伐となります。

標的はコンゴウ8体。その他小型種は測定不能の為随時対応という形になります。

コンゴウ種は知覚能力――主に聴覚にすぐれたアラガミの為分断、後に各個撃破の戦術を取ります。

ブラッド、スネグーラチカの混成部隊を更に分けることにします」
そこで、しゅばっ！ と言う擬音が聞こえてきそうな位……勢いよく、東の彼方より来訪した黄金の騎士殿が人差し指を挙手なさっておられた。

「……何か？」

「ブラッド参謀殿の言わんとしていることは理解できた……そう！ 人々の為にも！ アラガミを倒すのだという誇り高き志とその才知も!!」

しかアしッ！ 相手は闇の眷属もとい悪魔の手先……！ 果たして我らの思う通りに動くかな？」

意外にもまともな質問だ。

シエルちゃんの話からすると……この作戦はかなり戦力を分散することになる。

だとすると、正確な観測が必要不可欠な要素となる。少しでも間違えがあれば最後、少人数ではスタグレ使用による知覚遮断、後に戦域離脱しか打つ手がなくなる。

つまりこの策は戦闘の前——分断から始まっていると言っても過言ではない。

それに答えたのは、ヘルマンさんだった。

「コンゴウ種の分断はロシア支部先遣隊が行うことになっている。先遣が不可能だった場合は我々で分断を行う。……それで、いいな？」
シエルちゃんが頷く。

エミールさんも満足したらしく手を下ろし、目を閉じて得意気な笑みを浮かべた。

……というかソレがデフォルトの表情なのだろう。

「では、編成を発表します」

皆が思わず身を固くする。

……戦闘規模からして二人一組か三人一組。かなりの少人数での討伐になる。

つまり……ここで誰と当たるかが運命の分かれ目にならない……こともない。

Ⅱ 掃討戦・編成Ⅱ

α：ジュリウス・ヴィスコンティ、ロミオ・レオーニ

β：アーサー・クリフォード、香月ナナ

γ：ヘルマン・シユルツ、エミール・フォンⅡシユトラスブルク

δ：神威唯、シエル・アランソン

ε：オリガ・メドベージェワ

「はい！ ブラッド参謀さん！ 納得いきません!! 私は予備ですかー!? 此処は私の言わばホームグラウンドですよー!」

「だからこそ、です。オリガさん」

納得いつてない、と顔に書いてあるオリガちゃんに対し、シエルちゃんは冷静だった。

「オリガさんには今回遊撃に当たって頂きます。コレは貴女の特徴を生かした結果です——ロシアの地形に精通しており、更にオラクル補充の必要のない近接戦闘が可能な神機を使用できること——その結果、ヘルマンさんか、オリガさんのどちらかに当たってもらうことになりました、が。神機の傾向を考慮した結果、ヘルマンさんにはエミールさんと組む方が合理的であると判断し……オリガさんはこちらに配属とさせて頂きました」

「……………そですかー……………ならかんばりますね！ ヨロシクです!」



かなりの苦戦の末に、何とかギリギリ討伐ができた……という感じだった。

「シエルちゃん、大丈夫……?」

「……はい」

通信機を作動させて報告を開始する。

何というか流石だった。全員目標討伐に成功している。

……が、『タダで』という訳ではなかった。

アーサーさんとナナちゃんは体力の限界。特にナナちゃんの方のバイタルがかなり危険値に突入しており、コレ以上の戦闘は難しい……ヘルマンさんとエミールさん達はオーアンプルが枯渇。回復錠も既に底をついている。

隊長とロミオ先輩の方も残り3割を切っている……と。

『各員、討伐は完了した……が、引き続き警戒。撤退まで残り10分30秒、油断するな』

『了解……シエルちゃん、もうちよつと頑張ろう!』

『……了解です』

何でこんなキツイことになっていたのか……と言うと。

確かに想定のお戦だと極地型コンゴウを討伐すればいい……ことになっていたはずだった。

だが実際はそんなもんじゃなかった。

想定外のヤクシヤ、やその上位種のヤクシヤ・ラージャが大量に集まってきたこともあり……結論から言えば少人数で乱戦状態になっていた。

『うー……キツツイ……リーダー狂ってるし……どうなってんだよー!』

『落ち着けロミオ。損傷が激しい、銃形態は使うな』

『愚痴らないのーロミオ先輩……』

『香月さん下がって……つて言いてえ所だけオレ後衛……クソ』

……』

『大丈夫です！ まだやれまーす！ でももう戦いたくはナイかな〜
〜……』

かなり皆消耗していることが予測できた。

『うむ、弾丸が切れたか……ならば文字通り鉄槌を下すのみ！ 騎士
は……騎士の魂は……！ この程度で折れるハズもなアイツ!! そ
うであろうヘルマン殿!』

『言うまでもない』

『左様、我らの魂は……そう、心は居れるわけもない!!』

『……世界の胸を守る為』

『愛と正義で悪を貫く!』

『索敵に行かないで下さい！ その場で待機しつつ警戒を続行してく
ださい!』

元氣な奴ら一部まだピンピンしているっぽい。

無駄にSAN値が高い人達だな……と極めて関係ないところに感
心。今そんなことしてる場合じゃないけど、そう思わないとやってら
れない。

「……副隊長、すみません私の失態です……」

「……仕方ないよ……シエルちゃん……。レーダー観測通りにはいか
ないって皆言ってたけどココまで酷いとは誰も思わなかったんだか
ら……ああ……コレ私が居るから、かなあ……」

ロシア支部のレーダー観測機器が完全に狂っていたとしか思えな
かった。

……と、いうのも分かる。なぜならこの機材はゴッドイーターが配
備された時から第一線で使用されているいわば『骨董品』の類だ。
もっとマシなものではなかったのか、と聞くとアーサーさんは暗い顔で
言っていた。

レーダーにしろ何にしろ、『良い』ものから喰われていくのだ――

と。

レーダーなんて機材は基本装甲壁と同じでアラガミができるだけ捕食したくない、と思われる各種偏食因子を混合して練り込んでいる……ハズだが、どうやらロシア支部の地ではアラガミですら食糧難に苦しんでいるらしく、共食いはするわ、偏食因子の塊であろうが避けて齧るわ……拳銃の果てには食傷を起こしてレーダーの周りに死にかけのアラガミが散乱していた……という事態もあつたらしい。

それで結局長い間捕食されなかつたものが生き残っているから使っている——という状況だ。もちろん、そんな骨董品の精度なんか初めからアテにはしていない。把握できるのはせいぜい大きさや位置——そんな情報でも無いより遥かにマシ、でありロシア支部ではレーダーと偵察によって詳細を確認している方法をとっている。

……だけど、今回は、そのレーダーが完全にイカれていた。

場慣れしている筈の、アーサーさん達ですら把握できないレベルで。

なんか……嫌な予感がする。

……それも、かなりのレベルの嫌な予感が。

『こちらオリガです！ CPさん！ 小型種残り3です！ さつさと殺っちゃいますねー！』

『こちらCP。了解しました』

オリガちゃんは今回遊撃に回ったこともあり消耗は今、展開中の部隊で一番少ない。

それがせめてもの救いのようにさえ思える。

……本音を言うと、前にアーサーさんに言われたことが引っかかっていた。

『アイツは……神機の適合率が高くない。……適合率って案外重要だぜ？ 数値が高ければ高いほど、安定してればしてほど……』『寿命』が来るのが、遅くなる』

『それにアイツの神機だつてメチャクチャだ。混乱した戦況で、とにかく戦える頭数を増やさないといけないっていう状況下で……ほぼ無理やり動員されたようなものなんだ』

……あまり考えたくないことだが、オリガちゃんは無茶をし過ぎている。でもそれはきつと経験と技術でハンデを補っている故の結果だろう、ということも考えられる。

ただでさえ偏食因子への適合率が低い……のに、最適な神機を使っていない。

その末にもたらされる結果は……。

最悪の可能性さえも考慮に入る。

だから、私はアーサーさんとは別の意味であまり無理をしてほしくはなかった。

あの子を失いたくない、死なせたくない——とかじゃない。もっともっと、自分本位で保心的な……すごく身勝手な思考回路で。

そんな考えしかできない自分を心底情けなく思った。

そんな時、耳ざわりな雑音と共に、オペレーターのフランさんから通信が入る。

『……偵察班より入電！ 作戦行動中の全ゴツドイーターに伝えます
!! 中型種作戦域に乱入……肉眼で確認した限りではシユウ種――
え!?!』

「ど、どうしましたフランさん!?!」

……嫌な予感は良く当たる。

そして、その嫌な予感はまだ続いている。

もう絶対ロクなことにならないって……というのが今までの人生
での経験則。

そう。

最悪の予感は、よく当たるものだ。

『このアラガミは……ロシア支部のデータベースには記載ありません
……! 新種……いえ……まさか……この偏食場パルスの反応
……!?!』

フランさんの息を呑む声が聞こえてくる。
それが、切羽詰まった悲鳴にも似た叫びに代わるまで、そう時間は
必要ではなかった。

『全員直ちにそこから退避してください!! 『感応種』です!!』

phase 29 虚ろな勇氣

既存の神機では感応種と戦闘を行うことはできないとされている。適合率の高い第二世代のゴッドイーターが神機を使用したケースが、イタリア支部で報告されているが、それ以外ではほとんど対処ができず、遭遇した際はスタングレネードなどで視覚および聴覚の遮断後、離脱することが推奨されている。

……というのが現在採用されているマニュアル戦術だった。

「……で、ターゲットは私ってことですかー……！」

オリガは目の前に降り立ったアラガミを凝視する。

オペレーターはシユウ種と言っていた……たしかにそうだろう、と思う。基本的な骨格、構造はシユウによく似ている様に見えた。

妖鳥と美姫。

その二つを組み合わせたような女神。

どこか余裕を見せるように妖女は蠱惑的に微笑う。

……だから、こちらも笑い返す。

「気に入らない……余裕ですかそうですね。ちょっと色っぽいからって調子乗らないで下さいね……オジ様フェチにはロリ属性で攻めるという手段もあるんですから……！」

神機が重かった。

動かなくなる……とは聞いていたが本当らしい。

元々それ程扱いは上手い方じゃなかったが……今は本当に鉄の塊になってしまったかのようだった。

コレ詰んだなあ、とオリガは一瞬だけため息をつく。

「来なよ……おばさん？ ……後悔させてあげる」

恐怖の淵。今にも決壊しそうなハリボテの勇氣。

上等だ、と思った。

どうなるにしろ、最後の最後まで足掻き切ってみせる。

……それが……。



『オリガさん、感応種と交戦中……!? ってどう考えても無茶です即
退避してください!! ブラッド各員に通達、至急オリガさんと合流を
！ 撤退支援を!!』

「……あー……やっぱ……こうなっちゃったんだ……」

「ど、どどどどどうしましょう副隊長……!?!」

「うん……本当ね……どうしようね……うん……」

本日の討伐対象：コンゴウ

実際：上記にプラス、無限湧き小型種、ヤクシヤ、ヤクシヤラージャ
……そしてシユウ感応種。

フランさんから送られてきた情報によると、現在交戦中のシユウの
感応種は、既に確認がされており『イエン・ツイー』であるらしい。
ハツキリ言つて、今やつと色々なことが頭の中でつながった。
狂いまくるレーダーは故障していたわけではなかった。

『年代物』であることが災いし……結果、見事にイエン・ツイーの感
応派にアテられて狂っていた、ということが真実。そう考えるとコン
ゴウ種を測定しただけでも大したものだろう。

そう……歴戦のレーダーは最期まで己の使命を全うしたのだ……。

じゃない。

こうなつた状況下で、とても心配な人が居るのでそつちに周波数を
合わせてみる。

『ちよ……アーサーさん駄目だつてばー！ 無理しちゃ駄目だよ！

アーサーさんだつて酷い怪我なんですよーー！』

『オリガ!! 待つてろ今行く!!!』

『駄目ですっ!! ……ハツキリ言うけどアーサーさん行つても何の役
にも立たないよ!? 第一世代機は全部対感応種戦じや停止するんだ
よ!? それにここからじゃオリガちゃんのところまで行けないよ
……』

『……っ！ ……オリガ！ 頼むから返事しろ……!』

ナナちゃんが上手く止めているらしい。

が、恐らく時間の問題だと思つた。今はまだ冷静に他の助言を聴く
だけの余裕があるっぽいアーサーさんだが……切羽詰まると人間ど
うなるか全然、全く、皆目見当がつかない。

特に、アーサーさんは出撃前から再三言っていた。二度と失いたくない、失う訳にはいかない——と。

生半可な決意ではない以上、どうゆう行動にでるか分からない。

『お、おい……感応種とは、確か皆マトモに戦えないんだろ……!?』
『……』

ロミオ先輩の張り詰めた口調とト正論。

ロミオ先輩がブラッド歴だけなら隊長に次いで長い、だからこそきつと分かっている。

今、感応種と戦える神機を持つゴツドイーターが……つまり、私たち『ブラッド』の誰かが救援に行くべきだ、と言いたいことも良く分かる。

だが、今戦力はかなりの広範囲で分散中。

つまり、今誰かが動けば、誰か一人が孤立することになる——と。

『……アーサーさん五月蠅いですー……聞こえますそんな連呼しなくていいです……。はあ……。ったい……。こちらオリガ生きてますです……。けっこーギリギリで……。』
「……オリガ……。ちゃん……」

かなり苦しそうなオリガちゃんの声を通信機が拾う。

……神機の動かない状況であの子はどうか戦っている。

『おいオリガ！ さっさと逃げろ！ 戦わなくていい!! 逃げて生き残ることだけ考えろ!!』

『いやそれ……本気ツスカアーサーさんー……。ぐっ……。!』
『おい!?!』

血を吐くようなアーサーさんの叫びが鼓膜を叩く。

聞いているこつちが……。辛くなるような声だった。

『そんな奴放っておいて逃げろよ!! 逃げてくれよ……! 早く……!!』

『……いや、無理ですつて。だ、だって……。』

……ここで私が逃げちゃったら……誰がコイツと戦えばいいんですか……?』

『……』

『コイツを野放しにすれば、これから色々喰い漁りますよ……そしたらまた……折角作った装甲壁……無駄になっちゃいます……』

『……!』

『だから……一分でも一秒でもコイツを引きつけておきますから! だから——』

ブツリ、とそこで断線した。

迷いが無かった、と言えば嘘になる。

……それどころか、直前まで私は迷いまくっていた。

オリガちゃんを現時点で距離的に救援に行けるのは……私か、シエルちゃんのどっちかだ。どっからアラガミが湧いてくるか全くわからない以上、誰かがこの戦闘ポイントに残留する必要がある。

神機の特性上、残るべきなのは遠距離狙撃やステルスモードを使用できるスナイパー型のシエルちゃんが残った方が良い。だから消去法で、私が彼女を助けに行くべきになる——。

……だけど、そこで一瞬迷いが生じた。

そこまでして、あの子を助けに行く必要があるのか……と。

確かに、オリガちゃんの良い子だと思う。優しいし、仲間思いで……オツサン好き。ちよつと異性の趣味が変わっているだけの可愛い子だと思う。

でも……それは同じブラッドの仲間を危険に晒してまで助けるべき、なのかと。

個人的にはすぐにでも助けに行つてあげたかった。何も無い状況なら、迷うことなく飛び出していったかもしれない。勇気だとかそんなものを考えている余裕さえなく……本当に脊髄反射レベルで。既に前科もある。

だけど、今は、副隊長として任命された事実が重くのしかかった。副隊長という立場なら……考えるべきなのは、『他部隊』のオリガちゃんのことじゃない……。

……だけど……。

……そこまで考えて、私は気付いた。

そう、私はあくまで副隊長。

……『副』隊長。

……そう、私は副隊長だ。

「ブラッドー04からブラッドー01へ!! 許可を願います!」
『こちらブラッドー01』

コールサインブラッドー01。接続先は、ジュリウス・ヴィスコン
ティ。

つまり、ブラッド隊長。

「これよりブラッドー04は、戦鬪域で感応種と交戦中の現地の一般
ゴツドイーターの撤退を支援してきます!」

——許可を!」

『……ちよ……おい、待て唯?! そしたらシエルが……』

ロミオ先輩が慌てるように口を挟む。

そんなことは、百も承知だ。横でシエルちゃんが怯えたみたいに息
を呑む。

「ですから隊長。戦力の再編成を進言します! 現時点で行動可能な
特別編成δ班を分割、αと合流させて交戦範囲を拡大し、戦線の維持
を」

言っていることはメチャクチャだと我ながら思う。

……驕ってるわけじゃない、むしろ逆だ。この状況下でシエルちや
んを守ることはできない。

だから、隊長とロミオ先輩に彼女を任せたい。

今のところコレが私のはじき出した一番それっぽい解答だった。

「自分はこの部隊の中で唯一『感応種』との交戦経験があります。また
アラガミへの切り札、ブラッドアーツを習得しています……よって対
感応種討伐部隊である特殊部隊『ブラッド』の有用性を一番証明でき
る確率が高いと思われます! だから……!」

……口から出た言葉は誰が喋っているのかと思う程、自信満々な論
理を組み立てた。

全部出まかせのハツタリだ。

……確かに感応種との交戦経験はある。でも、『アレ』を交戦と捉えているのか……自分でもあまり自信が無い。ブラッドアーツも習得はしているけど……未熟もいところだし、毎回発動できる保証はない。

『血の力』はまだ不明。

本当にこんな状態で戦えるのか……自分でも分からない。自信なんてない……何より、私だって怖い。

「……信じて下さい……！」

それでも、ただひとつ。

諦めたくはない、意志だけはある。

——死にたくはない、でも……死なせたくない。

『……ひとつだけ訂正する。感応種との交戦経験があるのはお前だけじゃない』

「……そ、ソウデシター」

今訂正するところですか、それ。

確かにあの時、隊長も居たような……でもってロミオ先輩も一撃与えてた様な。というかそう言えばブラッドの初期メンバーは全員マルドゥークと面識あるような……。

……緊張しきってたところにまさかの一撃。ぷつと張り詰めていた何かが切れた。

通信機越しに隊長がいつもみたいに笑った……ような気がした。

『ブラッドー01了解。当該作戦域の離脱を許可する……派手にやって来い、唯』

「04了解。……期待に応えます」

「あ、あの副隊長……！」

シエルちゃんが不安げにこっちを見た。

……凄く怖いだろうな、と思う。ごめんなさい、と心の中で謝つとく。

「ブラッドー06はこのポイントを離脱。特別編成αと合流し、ブラッドー01の指揮下へ入って下さい。」

……理論上、ステルスモードを多用すればアラガミに捕捉はされない……すごく怖いと思うけど、お願いします」

「……」

シエルちゃんは少しだけ迷ったようなそぶりを見せる。

よくよく考えてみたらシエルちゃん、ブラッドーとしてはコレがまさかの初陣なんだ……。

……初陣で、ステルスモードでアラガミの中を単独突破せよとの上官命令……。

……私だったら間違えなく半ベそになっているよな……と我ながら命令が鬼畜すぎることを再確認。

けど、シエルちゃんは強かった。

覚悟を決めたように頷く。

「……了解しました。……副隊長、ご武運を！」

……うん、カッコイイ……カッコイイよ、シエルちゃん……。

……是非見習いたい。

『オリガちゃん、聞こえますか!? 今行きます!』

ツン、と鉄の錆びたような臭気が鼻についた。

それが何であるのか……は言うまでもない。問題はその量が尋常じゃないということ。

赤い水たまりが広がっていた。

周囲の朽ちかけたコンクリートの建物や壁を遮蔽物にしつつ点々としたその跡を追う。

……間に合わなかったのかもしれない……。

頭を巡るのは最悪の予感。

どくんどくん、という自分の心拍数ばかりが嫌に耳につく。合わなくなる歯の根を無理やり噛みしめながら一步一步、のこされた血痕を辿っていく……。

たまにどう見ても血以外の何か……同色系の固形物が転がっているようにも見えるがあえて無視。この先に行けば嫌でも目にすることになるだろう。

「オリガちゃん聞こえますか……?!? 聞こえてたら応答してください……!」

返ってくるのは雑音。

だんだんと荒くなってく呼吸を抑え込む。

何慌てているんだ……まだ決まった訳じゃない。

そう、まだ……。

……まだ……。

「オリガちゃん……!」

血の跡はどんどんどんどん濃くなっていくように見えた。
一体これはどこまで続くんだろう。

……いつまで、続くのだろう……。
嫌な汗が背中を濡らす。

一歩ずつ慎重に動かしていたハズの足が、どんどん速くなっていく。
く。

廃墟の中を駆け抜けていく。

「……応答してください!!」

通信機の音量を最大値にまで上げる。どんな小さな音でも聞こえるように、と。なのに、鼓膜を叩いてくるのは雑音だけだった。

そして、目の前が突然開ける。

開けた場所……のハズだった。

だが、その地表はかなり不自然に抉れており、そして何より赤く湿っていた。

一面の赤い大地を目を見開くと……『それ』が目に入る。

真っ赤に濡れた……オリガちゃんの神機が。

「つつ……!!」

悲鳴を上げそうになる口を片手で押さえた。

足が無意識に後ずさることを選択する。勝手に動いた下半身は細かく震えていた。だから当然、もつれて転倒する。数歩下がったところに尻もちをつく——という形になった。

ああ、ダメだ。こんなんじや……。
こんな所で……。腰を抜かしている場合じゃないんだ。
そう……。そんな場合じや……。ない……。のに……。

『神威さんそこからゆっくり右側にスリケツで進んでいってください！いいですか絶対それ以上下がっちゃ駄目ですよ!!』

「……………え？」

するとイキナリ、後ろから破壊音。

急いで振り向くと壁をぶっ壊してのオウガテイル登場。

ビビる私。だが、さっきの通信を思い出して右側へとゆっくりケツをスライドさせて……………。

「つて間に合わないいいいい!!」

折角の助言へガン無視を決め込み、かなり無様な姿でオウガテイルを回避しようと試みる。だがしかし、その瞬間……………。

凄まじい爆音と共に、地面がイキナリ吹き上がり、黒い土が空へと舞った。

無論、オウガテイルはその場で爆散。その場で奮闘していた私の全身に生暖かいものが降り注ぎ、一部が口の中に入る。

「……………にがい……………」

ごつくん。

何となく、全体的に粘性は高めだった……………というか大丈夫なのかなコレ……………。控えめに言っても美味しくもないし、とても体に悪そうな味がした。

そこで横からコツン、コツン、と小石をぶつけられるような感覚に気づく。

「神威さん！ こっちですよ！ 神威さん！」

「……アレ!? オリガちゃん?!?」

「何ですかその幽霊でも見たような顔はー！ こっちに来て下さい！」

元々なんだったのかももう全然分からない遮蔽物に隠れながら、オリガちゃんが来い来いと手招きをしている。カサカサイいながらそこからへ向かい、同じ様に身を低くした。

「来てくれたんですね！ ……ありがとうございます！」

少女はいつもの様に弾けるような笑顔を浮かべる。

「来てくれて嬉しいです神威さん……つてー言いたいところですが……大丈夫ですか!」

「……………はい……………」

「怪我してませんか!? スゴイ血ですけど……………」

「うん……大丈夫……。……これ……………返り血だから、全部」

「あ、なら大丈夫ですねよかったー」

はいどうぞ、と言ってハンカチをオリガちゃんが差し出してくる。ここは彼女の好意に甘えて、顔を拭う。これで酷い外見が……多少はマシになったハズ……なったと思う……………そう信じたい。

「えへへーありがとうございます……それでオリガちゃんは大丈夫!?! 酷いことされてない!?!」

「平気です。ちよつと腕のところ切れちゃいましたが回復錠イツキコレ一本！ で何とか治しましたよー」

「神機は!?」

「駄目でした……やっぱ全然動きませんです、すみませくん……えへっ♪」

「で?」

オリガちゃんは全く悪びれもなく、けろつと言った。

「ので、もう邪魔なんで放置してきちやいましたっ！」
「……………」

「あー！ ドン引きですかー？ 人の事をドン引きしたみたいな目で見てー！ ドン引きですね！ ええそうですね！ 分かりましたよはい！」

「いや……………いえ……………違います……………あの………………凄いですね……………はい」

役に立たないとばかりに投げ捨てたのですか!? 神機を!?

ハッキリ言つて神機なしでゴツドイーターつて一体どこまで戦えるのでしょうか!?

そんなオリガちゃんですが、右手には自動小銃……………自動小銃!?

「ま、まさかAK……………」

「あてこの辺地雷かなり埋まつてるんで気を付けてくださいね。役に立たない神機に誘引フェロモンぶっかけてデコイにしてるんですけど……………効いてるのかなあ、アレ」
「……………」

ここに来る途中で見た景色を思い出す。

一面、血化粧された世界——やっぱりアレはアラガミのだったんだ。

きつと美味しそうな臭気ムンムンのフェロモンに引つかかって……………神機に向かって一直線に走つて……………文字通りに地雷を踏みまくった結果だろう。

……と、同時に私がおそらく無事にここまでこれたのは……アラガミ様たちの尊い犠牲のお蔭様……。

……………この世界にもう祈る神なんて居ないけれど思わず合掌。もしかしたらその地雷、私が踏んでいたかもしれない。危うく味方に挽肉にされるところだったよ!!

「よく戦えるね!? よく戦おうって気になれるねオリガちゃん!」

「あつたりまえですよ〜! 大体、ナイフと手榴弾、ついでに小銃さえあればオウガテイル位なら何とかかりますって!!」

「……御冗談を……?」

「冗談じゃナイデスヨ。ひよつとして神威さん素手での対小型種相手の訓練してないんですかー?」

「なんでするんですか!」

「だって神機動かなくなったら困るじゃないですか?」

「動かなくなったら!」

もしかしてロシア支部はその優れた先見の明で、感応種が現れても大丈夫のように準備をしていた……!?

という、私の甘い予測は、オリガちゃんによって粉々に粉碎された。

「そうですよ! 神機なんて整備不良や物資不足で! 皆! 1回2

回動かなくなったことありますってば!」

「あるの……!」

どうやら私はまだロシア支部をナメていた……! そうナメきつていた!

そうここはロシア支部。アラガミも人間も両方喰うか喰われるかのギリギリの場所。

だから慌ててないんだこの子……と、直感した。絶対コイツ過去に

神機が急停止したことある系女子だ。

「……で、このトラップにあの感応種が引つかかってくれば……っ
て思ったんですけど中々そうはいきませんね」

「そうだね……だけど、不幸中の幸いまだ捕捉はされてない……今か
らコツソリ撤退すれば……」

「何言ってるんですか！ 今なら背後から狙って撃てばイケますって
！」

「どうしてそんな好戦的なの!? 何が貴女をそうさせるの!？」

「絶対ブチ殺す……あの鳥女……」

「鳥の話はやめて」

脱線しそうになる会話を戻そうとする。オリガちゃんには悪いが、
ちゃんと生きててくれて本当に良かった。そして、もう戦いはここま
でだ。オリガちゃんの気持ちは分かる。飢えに耐えかねたアラガミ
が玉砕覚悟で偏食因子を齧るようなこの地で物資が何よりも大切だ
ということとは……何かもう色々理解した。

だから何と引き換えてでもアラガミ装甲壁を死守したいのだろう。
しかし、この感応種——イエン・ツイーが存在し続ける限り、きつと
その感応種が色々食い荒らしてしまう……しかも、レーダーを狂わ
すアラガミが居るならば再びこっちが予測して捕捉するのはかなり
の難易度になる。

だから、今ここで討ち取りたい……というのが、オリガちゃんの思
い、そして願い。

だけど、私は反対だ。物資不足は痛いほど理解はするけど……正直
勝てる気が全然しない。

此処に来たのだから……オリガちゃんを助けられればそれで良
かった。実際この子はピンピンしてる。このまま退却したい。

もしかしたら、フライアの装置を使えばイエン・ツイーをキャッチ
するのはそう難しくないかもしれない……。

だが、それらはすべて過程の話だった。何となくの想像がつく。オ
リガちゃんが多分、正しい。

……今、この感応種を逃したら次捕捉するまでにかかなりの代償を払うことになる。

「……オリガちゃん、ハッキリ言うよ。今この瞬間にも、私たちの隊長は……ジュリウス隊長やアーサーさんは死力を尽くして戦ってる。皆もう余裕なんかない。本当にギリギリの状況だよ。それに、今回討伐すべきと設定された目標数の撃破は『とつくに』終わってる……分かってると思うけど、ソレを踏まえて聞くから。」

……オリガちゃん、そこまでして、戦うことに拘る?」

オリガちゃんは数秒だけ迷う様に目を伏せた。

……が、すぐに私を痛いほど真っ直ぐに見て応える。

「はい」

「……理由聞いてもいい?」

「……私が、今『防衛班』だからです」

その声に迷いはなかった。

会った時に言っていた、アーサーさんの声を思い出す——スネグーラチカは各地の防衛班の支援をするために創設された、遊撃隊である……と。

「2年前……私の住んだ場所は……今はもうありません。アラガミに装甲壁を破られて……でも疎開もできなくて、なのに難民がどんどん入ってきて……その結果、餓死者と凍死者で溢れかえってしまいました。私の家族もそれで……」

「……」

「そんな地獄がありとあらゆる場所で繰り返されたんです……。やっと立ち直ったけど、いいえ……人々は今やっと、立ち直ったばかりなんです! もし……また壁が破られれば、『そう』なってしまう。」

その場所からまた立ち上がるためには……今度は、前よりもつとむと力が要る。時間も要る。……だけど……今の私たちにそんな力はもう何処にもないんです……!」

……そうだ。オリガちゃんは前言ったた。

古い言葉がある、と。『悲しみは海じゃないから、全て飲み干すことができる——』と。

だけど、それは簡単じゃない。

悲しみを飲み干すには……力と時間が要る。

飲み干せなかった人間はずっとその場所に留まり続けることになる……。

……悲しみを、飲み干すことができなかつた人間は。

「ブラッドの皆さんに迷惑を掛けます。神威さんにも……皆さんにも。だけど……だけど……ごめんなさい。

いざとなつたら見捨てて逃げて構いません。……私は決めたいです。

……最後の最後まで、自分らしく足掻ききってみせるって……一秒でも多くの時間を人類に残す為に。

それが、私のゴッドイーターとしての矜持です」

ここに来て、私は……本当に、私はやっとなつてくることができた。

……この子の地獄はまだ続いている。

家族を亡くしたと言っていた、地獄を見てきたと言っていた。そして——その分、人の死を見たんだろう。

そして、オリガちゃんは……救いを求めて地獄から抜け出すことじゃなくて、地獄の中を進む選択をした。

一人でも多くの『誰か』が、立ち直れる様に——と。

自分を犠牲にしても、仲間を犠牲にしても、『誰か』を救おうとすること。

人類の『盾』に徹するという……固い覚悟がそこにはあった。

「……了解。じゃあ行こう」

差し出した手を、オリガちゃんが信じられない、と言った表情で見つめた。

……ホント、自分でもそう思う。勝算なんか、全くこれっぽちもないのに……。負ければ高確率で死が待っている戦いなのに。

けど、この覚悟だけは無駄にしちやいけない。

……私、本当に流されやすい。

簡単に論破された私の手を、オリガちゃんの手が……。しっかりと掴んだ。

「……はい……はい……ありがとうございます！」

まるで泣くように綺麗に、笑った。

だが、現実問題として……再三言っているが……勝てる見込みは本当に薄い。

まず携行品がもう限界に近い、取りあえず腰に括りつけているスタングレネードの残数を確認する。

その時、コツン、と指先に何かが触れた。

「……コレって……」

そして思いつく。——ひよっとしたら、打開策になるかもしれない——一つの道を。

だが……ソレは賭けになる。
失敗すれば……。

「もうひとつ、聞くよ、オリガちゃん……」

私はそこで——その提案を口にした。

「……ここで、死にたい？」

phase 31 「ごめんなさい」

極彩色の色合い——翡翠色と橙色の羽毛を全身にまとった美女の姿を視界に入れる。

『誘引フェロモン』に乗せられてきたらしい——感応種にも効くんだ、とここで新しい発見。

「CP。こちらブラッドー04。こちらの動きは把握してるとは思いますがオリガちゃんも合流しました……今、イエン・ツイーの真後ろを取っています」

『CP了解——シエルさんバイタル危険です下がって下さい！』

うわあ……同時進行……。流石のフランさんでも、混線を禁じ得ないっばい……。

と、思いながら一度深呼吸。改めて決意。

「これより交戦を開始します。オペレートお願いします」

『ちよ……!?! 正気ですか副隊長……!?!』

「すいません、もう決めたので……というか今のこの距離からだとも今からトンズラしたところでもう絶対捕捉されるので背後撃たれて死にます。その位だったら真正面から戦ったマシなんですう！ 分かって下さいこの断崖絶壁絶体絶命を！」

「何びびってんですか神威さん！ がんばりましょー！」

フランさんは数秒間だけ、信じられない……遂に狂ったんですか……イカれてる……とのボヤキを繰り返しながらも、他の戦闘域のオペレートをこなしている。そして、ついに。フランさんは……キレた。

『分かりました……もう分かりましたよ……。……どうせ、みんな、い

なくなる……ふ……フフフフ……」

「ふ、フランキーン……!?」

『地獄の宴の開幕じやああああああああ!! 総員に通達! ブラッド副隊長これより感応種と交戦開始!』

ジュリウス隊長中型種乱入! エミールさんヘルマンさんウコンバサラ追加!! せいぜい足掻きなさいな……聞かせて下さいよ断末魔を! 一心不乱の断末魔を!』

「フランキああああん!」

『01了解。総員、完膚無きまでに叩き潰せ!! 奴らが存在した痕跡をこの世に残すな!!』

『ふっ……! 相手にとって不足はない! 騎士の魂は折れはしない!! チエストオオオオオオオオ!!』

……。

状況やべえ……。

「神威さん行きましょう……先制はこつちにありますよ!」

「……そ、そうだね……」

神機を銃形態に変形。

シユウ種共通の弱点——頭部に狙いを定めてロックする。

……チャンスは一回。

「当たって……!」

炎属性のバレットが銃口から射出。(オリガちゃん命名) 鳥女の顔面にヒット。

美姫の顔が……ゆっくりこつちを向く。

顔の部分は見えない——だが、口元はハッキリと見えた。形の良い唇が、弧を描く。

……嗙っていた。

「行くよ!!」

地面を蹴る——真正面から殴り込んでくる妖鳥の真上に跳んで回避。

すれ違い様に捕食。着地と同時に真後ろを取る。再び銃形態に戻し、アラガミバレットを装填する。

このアラガミは気づいて居ないだろう——今、自分が立っている場所が『綺麗な地面』であることに。

「これでー!!」

一回だけバックステップショット。距離をかせぐ——イエン・ツイーをロックに入れたままで。

『偏食場パルスの大きな乱れを確認! 周囲のオラクルが集まっています! 注意して——』

フランさんの声が届く。

だけど、今更色々遅い……動作は変えられない。装填したバレットに沿って、神機の中のオラクルが構成されて、放つ。

薄く輝く白い閃光弾が銃口から飛び出た。一瞬羽根の様なものが見えないでもない。

かなり綺麗なオラクルバレットが——イエン・ツイーの手前の地面を抉る。衝撃や爆風で細かい傷をいくつも作る。

と、同時に。

その地面一帯が爆破した。

アラガミ弾を利用した誘爆——これが直撃したなら、たとえ中型種と言えども無傷という訳にはいかないだろう。……上半身だか下半身だかが吹き飛んでくれれば……と思う。

「……っ!?!」

だが……イエン・ツイーは……。

下半身——羽毛に覆われた長い脚部を損傷してはいるもの——それ以外のコアを傷付けるまでには到らなかつた……という結果になる。

「なんで……!?!」

オウガテイルを一撃と仕留める位破壊力のある地雷——そんなものを踏みつけて、何発も直撃して……なんでもまだ立っていられるのか？ 何か情報を探ろうにも全部消し炭に帰した今は何も残っていない。

直前で回避したのか、何かが盾になって直撃できなかつたのか……。

いずれにせよ。使える武器がまたひとつ減つた。そのことが重くのしかかる。

「神威さん!!」

「な……!?!」

今ので完全にブチ切れたらしい鳥女が、奇声を上げた。

耳ざわりな高音をはり上げて虚空へ吠える。空気がガラリ、と一変する。

何かが来る……でも、何が起るのかが分からない……!?!

『警告! 大気中のオラクル濃度上昇……アラガミが形成されます!!』

「ど、どこからあ!?!」

『大気中だつてんだろ』

「は、はいっ!」

本当に大気中のオラクル濃度が凝集し、地面が割れ、小型アラガミが何処からともなくあらわれた。

「な、何ですかこれ!?!」

『アラガミです』

「見れば分かりますう!」

『じゃあ聞くんじゃねえよ……。……シエルさん戦闘不能! 誰か助けに行つて下さい!』

見た目はオウガテイルに似てる……。だけど問題は一気に4体も出てきたことだ。

でも……。一体ずつなら……。！
そう思つて神機を握り込む。

『ブラッドー04！ 危険です狙われてます!!』
「はいい!？」

そのオウガテイルモドキ、4匹が……。一斉にこっちにかかつてきた。

「ええええええ!?! き、聞いてないよ!!」
『言つてません』

「結構応答してくれますねフランさあん!」
こうなつたら奥の手……。！
神機を近接形態に戻して、ゼロスタンスに構えなおす。

そして、前方へと斬り込んでブラッドアーツを……。と、思った瞬間。
何故か、発砲音が響き前方オウガテイルモドキが沈んでいく。

「……。沈みましたよ神威さん! ……捕食しちゃってくださいーい!」
「オリガちゃん!? い、今……。! ……私ごと……。私ごと……。!?!」
「……。……。まっさかく……。信じてましたよ神威さん!」
「……」

オリガちゃん……。味方ごとぶつ殺すスタイル……。やめよう?
と思いつつも体は正直なもので勝手に腕が捕食機構を起こし、勝手に神機を捕食形態に変形させていた。
んなことをやってるうちに。

イエン・ツイーが低空飛行で突っ込んできた。
回避——が間に合わない。すぐに装甲を展開。円形のバックラー

が噛み合い、赤い火花が散る。

上手く受け流せたことに安堵した瞬間——右肩から背中にかけて焼けるような痛みが疾走った。

「っ……………」

痛い熱い、痛い……負傷で頭がパニック状態になる。

何が起こったかまるで分からない。

アラガミの攻撃？ 背後から…………？ だから…………何かが後ろに居たことに…………。

「——8時方向！ コクーンメイデン!!」

「このっ——!!」

恐怖を打ち消すように怒声を張り上げて銃を乱射した。放たれたオラクル弾が50メートルほど離れていたコクーンメイデン2体を、穴だらけにしていく。不意打ちされた怒りに任せて——背筋が凍りつく。

…………無駄弾を撃ちすぎた。弾倉が残り10パーセントしかないことを告げる——。

「しまっ——」

「神威さん上っ!!」

上——？

一瞬何を言われたのか分からなくなる…………。

だが、その解答はすぐに得られた。太陽が翳っている。

「嘘…………だってシユウが…………あんな高く飛べるはず…………」

こんなの全然聞いてない——！ だが…………何を考えても遅かった。予想外の能力、予想外の攻撃パターン…………感応種を甘く見ていたとしか言いようがなかった。

回避も防御も間に合わない…………。

次の瞬間、視界が——真っ白になり、そして…………黒く染まった。



『ブラッドロー04!? 生きてますか!? 応答してください……副隊長!?』

「……………フランさん……………」

『良かった……バイタル危険値です、早く回復を!』

数十秒だけ意識を失っていたらしい……全身がズキズキして、うまく力が入らない。

回復錠を……と探るがそんなものどこにもなかった。ぶつ倒れた時の衝撃でいくらかぶつ飛ばされた……と思った。霞む目で見ると、泥の中にそれっぽいのものが転がっていた。

……手を伸ばして掴む。ソレをそのまま口に投げ込む。
じやりじやり、とした音——かなり嫌な味が広がる。
でもコレで、何とか立てる。

「オリガちゃん……………」

「……………ん……はい……生きてます……」

少し離れた場所からの音声応答。その声はかなり弱弱しい……。
こっち、とオリガちゃんが軽く手を振った。

そして……その傷が決して浅くないことを悟る。

同時に、もう、『あれ』しかない——ということも。

オリガちゃん、ともう一度だけ名前を呼んだ。

「……ごめんね」

「……もうこうなっちゃ仕方ないでしょー……あとは……信じて下さい……。もし……駄目だったらさっさと逃げちゃってくださいですー」

「……分かった」

腰のポーチに挿していた——スタングレネード……の、隣。

P—66 偏食因子投与アンプルをオリガちゃんへと投げる。

ソレは『あのアラガミ』に会ってから、心の何処かで不安が消えなくて……必ず1個気休め程度のお守りで持ち歩く様にしていたものだった『私たち』の偏食因子。

ブラッドが感応種の影響下であっても神機を使える理由。それは偏食因子の違いが引き起こすものだとされている。そう——感応種が感応波で支配できるのは——P—53の神機だけなのだ。

だから、私は賭けることにした。

そのハイリスクすぎる、賭けに。

ここを戦場にした理由——わざわざここまで、イエン・ツイーを誘導した理由はいくつかある。

一つ目は地中にまだ埋まっている(らしい)地雷を全部有効活用するため。より開けた場所での戦闘を行う為。

そして……ここには彼女の神機がある。

デコイ以外にも……一応使い道はある。

ガタガタと恐怖以外の感情で揺れる膝で立ち上がり、妖女に向かって神機を構える。

——私が、時間を稼がないといけないから。

『——ちよつと待て……なにするつもりだよお前ら?』

突然の回線乱入。

声で判断する——コレは……。

「あ、アーサーさん……アーサーさんつか……? 今忙しいんで手短にお願いしますすつて……」

「……」

『おい……あなた……まさか……!?!』

「……まーいいや……うん、繋がったことだし……言っちゃいましょー……丁度好いし」

オリガちゃんの表情は分からない……ここから見ることはできないし、見ている余裕もない。

でも、何となくで予想はついた。

いつものあつけらかな、とした無理やりにも笑っていようとする様な……明るさが声から消えた。

今にも泣き出しそうな——まるで小さな女の子のような声がス

ピーカーに響く。

「最後まで……迷惑かけてごめんなさい……」

そして、オリガちゃんは、自分の神機へと突き立てる。
P—66 偏食因子を。

phase 32 氷解

「ここで……死にたい?」

私が聞いた直後に、オリガちゃんは即答した。

「なくはないですよ。……ここで死んでもいいとは思ってます……覚悟はできてます」

だけど、と少しだけ言葉を濁した。

やがて、決意したかのように……意志の強い目を向ける。

「やられっ放しなんて冗談じゃない……一矢でも二矢でも報いてから死んでやります」

「……分かった」

私はアンプルを出して説明する。

コレが『ブラッド』のP-66用の偏食因子だということ。

P-66なら感応種相手でも対抗できるということ。

コレを神機に投与すれば……もしかしたら神機を励起させることができるかもしれない……ということ。

「でも、ソレはもう……あなたの神機じゃない……この意味分かるよね?」

旧型の旧型、第一世代に第三世代用の偏食因子を突っ込むのだ。

当然、色々なものが書き換わる——それこそが、神機を動かせるようにする希望でもあるのだけど……同時に『ソレ』はもう、今まで適合していた神機ではなくなるということになる。

「だから……少しでも怖いなら辞めた方がいいよ……できる?」

どうなるにしても相当の痛みは伴う、と言外に告げる。

すオリガちゃんは綺麗に笑った。

「問題ありません、適合試験をもう一回やればいいって思えば良いんですから。元々適合率は高い方じゃありませんし!」

それに、いい加減腹立つんですよ……アラガミにも神機にも。オラクル細胞だか何だか知りませんが……神様気取りで勝手に人を選んだり、選ばなかったり、世界を喰ったり……大概にしろってんですよ……。

見せてやりましょう……人の意志と人間の意地を。いい加減にしやがれてね!」

「……い、いや……別にそこまで思っていないかなー私……。……うん」

「えー? そーなんですか?」

「……なんかむしろ……適合してくれてありがとう……みたいな……? ごめんなさい……」

「は……何か別世界の人みたいですわね。呑気というか、贅沢というか」

「面目ないですわ……!」

いつもの調子を装って、オリガちゃんが軽く口を叩く。もう自分の立ち位置とかイジラレ位置は弁えているつもりだ。

……とかこの場合はド正論だから反論のしようもないのだけだ。

「でも、貴女は……それでいいんだと思います」



「シエル！ 使え!!」

「……了解！」

ジュリウスがシエルへ自分の残り少ない回復錠を投げた。

これで残量はゼロになる——だが、そんなことを気にしている場合ではなかった。

回復錠を噛み砕いたシエルの、大腿部から膝にかけての裂傷がみるみるうちに回復する。

赤い血だけが鮮やかに太ももに残った。

「畜生……どこまで湧くんだよ……こいつらあ!!」

「……もしかすると感応種に引きつけられている……可能性がある」

「マジで……!?! ってことは感応種を討伐しないと……ってことか!?!」

「……そうなるな」

煤と泥で顔をまっ黒にしたロミオが歯噛みする。

周囲のアラガミを全部狩り切るまで終わらない——全く終わりの見えない苦行に絶望さえ感じながら。

『キリないよ……はあ……そろそろおでんパン補給しないと死んじゃう』

「ナナあんまり無理すんなよ!!」

『はいはい。しないよ』

全員声には疲労が滲んでいた。コレ以上の戦闘をいつまで続けられるか……限界が見えてきたところだった。

ジュリウスは極秘回線——隊長職以上にしか使えない裏回線を経由してオペレーターへと繋ぐ。

「CP。ブラッド04のビーコン反応が消失したら俺にだけ教えてくれ——副隊長は単騎で救出に行く」

『こちらCP……それは……』

「ブラッドにコレ以上負荷をかける訳にはいかない……だが、一人でも欠けさせる訳にもいかない。あいつは俺が必ず連れて帰る——いいか?」

『……了解しました……』

手は打った。あとは……ただ信じること。

「ブラッド総員! 戦闘時間残り600秒! この先を一匹たりとも通させるな!!」

バラバラに了解、の音が反響して返ってくる。

『……その意気や良し……ブラッド諸君! 健闘を祈る! 僕は……見たっ……! 命を賭し、死力を尽くし……信じる仲間の背中を守り抜くその騎士の姿勢を! 戦友の背後を守ることこそ騎士の誉れ!! ならこの僕もその志に追従しよう……! 付き合ってくださいますなヘルマン殿?』

『……無論だ。元より仲間の背後を支援する遊撃部隊——その為に俺たちは結成されたようなものだ』

『覚悟に揺るぎはない、と見て宜しいかッ!』

『ああ……。それに……あの胸は、無くすには、惜しい』

『……大いに結構!! ああ愛、それは愛……! 変態道、貫けばそれも誠なり……!』

なるわけなくても何となくそれはそれでアリなんじゃないかと思えますぞヘルマン殿。

いや……シユルツ卿!! 今僕は騎士の魂をそこに見た! という
ことにしておく!! ならば我が騎士道を示すは今! そう今!!

神機使いの闘いは……ただの闘いではない！

この絶望の世界に於いてッ！ 神機使いは……人々の希望の依代だッ！

正義が勝つから民は明日を信じ、正義が負けぬから皆前を向いて生きるッ！

故に騎士は！ 絶対に倒れるわけにはいかないのだ!!

希望である限り、希望がある限り……倒れ伏す訳にはいかないのだああああああ!!

……だよな、エリック』

「きよ、協力に感謝する……」

「ドイツ系すげえ……騎士の国って一体何なんだよ……」

『熱いねく……ブラッドにドイツ系の人居なくて良かったよ……』

「何でしょう私……胸が……あつい……！ これが……騎士……の魂……!?!」

「正気に戻れシエル。手遅れにならないうちに回線を切るんだ、汚染されるぞ」



喉が引き千切れそうな絶叫。

神機の配列を一瞬で書き換えるような荒業をやっているのだから
当たり前……と、頭で理解していても、つい耳を塞ぎたくなる衝動に
かられた。

でも……これは最後まで聞く。
たとえどんな結果に終わったとしても。

「はあ……はあ……きつつ……うっ……あああああつ……！」

むき出しのアーティフィシャルCNS……人工的コアは見えてい
る。

何かあれば……すぐに狙える。その兆候が見えたら、ソレを撃ち抜
く。

兆候が見えたら……。

オリガちゃんもそれを分かっているから……どんなに苦しくても、
拳銃を頭にしっかりと当てている。

「お願い……だから……っ！ 言うこと聞いて……聞いて……聞い
てっ……!!」

額に脂汗を滲ませながら必死に呼びかけていた。

「こ、この腐れ神機……いつまでも……いつまでたつても……前の持ち主に固執しやがって……!!」

「オリガちゃん!!」

適合率が安定していない——どんどんどんどん悪い方にばかり思考が回転していく。

怖いとか……罪悪感とか、自責でさえ……ありとあらゆることは一切考えられなくなる。仲間を手にかけることへの罪の意識も、人を殺してしまうという事に対する拒絶も……追い詰められてどんどんどんどん消えてなくなる。

こんな所でアラガミ2体となんか戦えない——こんな場所で死にたくない、という思いで心がまっ黒に塗りつぶされていく。

「オリガちゃん!! しっかりして!! オリガちゃん!!」

まるで薄氷の上を渡るかのような感覚——呵責も葛藤も……もう何も考えられなくなりそうだった。

その時——オリガちゃんが苦し紛れに叫び声を上げる。

「いい加減にしてよ……このクソ神機! 私は私!!」

まるで、——叩き付けるようだった。

「……代用品だとか出来損ないだとか……そんなもん、今までだって散々言われてきた……! 適合率もない、強くもない……でも……でも……!」

血を吐くような声。苦しみに塗れた声が、絞り出される。

今までため込んできた——ずっとずっと心の中にしまい込んできたその思いが。

慟哭と共に。空へと響く。

「……どんなに自分が嫌でも……嫌いでも他の誰かになんかになれない!!

別の何かに生まれ変わる訳ない……どんなに頑張っても……変えられないことだって……変わらないことだって……もう変えられないことだって!! 沢山……腐る程あった……だけど……!」

俯いてたオリガちゃんの顔が、上がる。

「そう簡単に自分の人生を『誰かに』取って代わられてたまるもんですか! 私私!!」

神機の中央部、アーティフィシャルCNS。沈黙したままだったソレが、琥珀色の輝きを放った。

確かに見えた。

それは、神機が起動する時の合図。

「消耗品で上等……人類の盾と呼ばれようが何だろうが……もう決めたんだから。

誰かの代わりなんかじゃない!! もう二度と『代わり』にはならななんだって……たとえ死んでも……最後の最後まで! 弱くてダサくて出来損ないの『私』で、足掻ききってやるんだって!!

誰の願いでも希望でもない、自分の……自分自身の意志で!! だか

らっ!!」

そして、神機が浮いた。

大きな剣が——泥と血だらけの、お世辞にも綺麗とは言えない神機から、黒い触手が伸びて、赤い腕輪へと接続がなされる。

「あんたも前に!! 歩き出さないっ!!!」

「……オ리가ちゃん……!」

その顔にもう苦痛の色はない。

負傷による出血、もろもろによつて酷く汚れてはいるもの——直感的に理解した。もう大丈夫。

もう、戦える、と。

肩で息をしながら、オ리가ちゃんはいつもの笑顔を無理やり作る。

「……お待たせしましたっ! 唯さん!!」

「……うん……! うん……! 行くよ!!」

あきれ果てたことに……私は安堵していた。

……でも、今は——今だけは。

後悔も反省も、後ですればいい……ここを、生き残ってから。



通信回路が開きっぱなしだった。

恐らく、あの二人の小娘はそのことに気づきもしないだろう。彼女らに余裕がなかったのだろう。

だが、その一連の出来事を……悲鳴も慟哭も絶叫も、アーサーは全部聞いていた。

大音量が反響し、耳が完全にイカレつつあることを自覚しながらも、アーサーは……呆然としていた。

気づかされたからだ。

他でもない——『彼女』の声で。

「……オレは……ずっと……」

己の咎を。

「あいつを……見てなかった……?」

オリガはハッキリと言っていた。おそらく……神機に向かって。この世界に向かって。

『私は、私』——だと。

誰だって、一度は世界の不条理を恨んだことはある——アラガミによつて何もかも奪われていくことへの不条理を。

……そんなものを嘆いても、何の意味もないことを、心の底で分かっている。

だが、大抵の人間はソレを理解し……そして、立ち直っていく。諦めや、忘却という形で。

自分もそうした。

……そうしてきた——つもりだった。

「……『二度と』失わねえって……何……言つてたんだよ……オレ……」

ヘルマンにも再三言われていたのに。

見たいものを見るな——見るべきものを見誤るな、と。

自分を許せなかった。

オレーシヤを死なせてしまった事も、それをまだ受け入れられていないことも。せめて『新型』——アリサからオレーシヤの最期を聞いて居れば受け入れられたかもしれない……そして、何よりあの時『新型』を失つてさえないなければ……あんな地獄のような防衛戦を繰り広げなくてよかつたのかもしれない、と。

だが、『新型』は自分たちと会うことさえできなかつた。

だから……行くアテのない自責をずっと、抱え込んでいく結果になつた——その、自覚もないままに。

だから、オレーシヤの神機を持った、あの時死んだままの年齢と同じくらいの少女を見た時……ほっとした。

ああ、良かった。コレで全部許せる。

今度こそ守り抜こう、あのとき救えなかつたアイツの代わりに——

と。

「……何言つてやがったんだよ……オレは……！」

足りなくなつた正規のゴッドイーターの代わりに、捨て駒として神機も適合率も加味されずに徴兵されたアラガミ災の孤児。

『使い切り』とされ口減らし同然に動員された少年兵——何かの『身代わり』にされて、一番苦しかったのは………苦しんでいたのは………——。

それに、気づいていたはずだ。

それでもオリガは——何も言わなかった。

「………弱くてダサイのはオレも——つてことか」

そして、今でも……何も言おうとしていない。

自分が救われようだとか、救われたいだとか………これっぽちも考えていない。

ただ、『人種の盾』として使い潰れるつもりだ。一人でも多くの人間が救われる時間を、稼ぐためだけの。

………使い捨てとしての、ままの。

ならば、やることは決まっている。

「………悲しみだけじゃねーよ。これから………アイツは色々飲み干さなきゃいけないモンが死ぬ程あるんだ。

自分自身だとか、存在価値だとか………色々あるんだよ」

アーサーの神機——遠距離狙撃型の、神機。

周囲に展開していたアラガミに近くされない為のシールド——ステルス・フィールドを解除する。

同じ戦域に居たとしても自分やヘルマン、エミールといった『P—53型』でも神機は動かすことができる。

それはこの戦闘中に証明したはずだ。

つまり、偏食場パルスには影響範囲がある。そして、おそらくソレは……。

「だからさあ……!!」

感応種が持つ偏食場パルスが及ぶ範囲は、あくまで半径500メートル程。

他の神機ならば何も出来なくなる距離。

……自分の神機は旧型、それも第一世代の銃型。近接戦にはとことん向かない。

だが。

アーサーはスコープを最大拡大値まで絞る。

感応種がコレほど離れているにも関わらず——ほぼ間近で目視しているのとまったく変わらない感覚欺瞞。

だが、実際はわずかな指の振動ですら、着弾点を狂わせる程の距離。イエン・ツイーの腕が、殴る前の予備動作を行おうとしている——。

「テメエ如きが……さわってんじやねえええ!!」



目の前のイエン・ツイーの拳が抉れて、弾けとんだ。
少し遅れてからの発砲音。

何が起こったのかそこで初めて理解する。

……遠距離狙撃。しかも、音とコレだけ離れてくる、かなりの距離。

『反転でもう一撃！ 来んぞ!!』

「……え？ アーサーさん……?」

『ぼさつとすんな!!』

言われた通り、イエン・ツイーの反転攻撃——もう一回殴りにかかってくる。

だが、さつきほどの勢いも速度もない——十分に見切れる程度の拳。

「カウンターもらいます!!」

前に出たオリガちゃんが盾を起動。

……バスターソードだけが使える簡易防御。更にはアラガミから貫った衝撃を生かし刀身を反転させるカウンター攻撃をかます。

……ときに。ひとつ、異常が見えた。

カウンターを出す前に……コアが、神機が——赤く、光った。

「……!?!」

そして、殴った後、赤い閃光が迸る。

ソレは正面からイエン・ツイーの腹部を抉り……アラガミのコアをむき出しにする。

「い、今の!?!」

「アーサーさんっ!!」

『外すかああああああ!!』

2発の連続発射。頭部に命中。結合崩壊を起こしたらしく、今度は再生しない。

叫ぶ口がなくなれば——あの一点攻撃も、オウガテイルモドキの生成も不可能。

今度こそ……と。神機をゼロスタンスにしてから、狙いをつける。

「どおりやああああああ!!」

周囲のオラクル細胞を一気に凝集。剣がまるで風のようにそれを纏う——充填よし……踏み込んで、斬る。

すれ違いざまに複数の斬撃を叩き込む居合い斬り。

ブラッドアーツ——疾風ノ太刀・鉄。



「今のって!? ね、ねえ今のって!?!」

「んー? そう言えば何か光りましたねくく……ま、いつか……。アーサーさん討伐完了です!! すぐ回収ポイントへ向かってください!!」

オリガちゃん、華麗にスルーしてる……!?!

が、そうはさせない。絶対この子分かってるはずだ。

だっていまの、どう見てもブラッドアーツだったじゃん……!?!

『遠距離狙撃なんか久しぶりにやったー……コレ心臓に悪いなオイ

！ CPとブラッドー01、感応種討伐完了した！ 撤退する！
こちら状況は!?!』

『こちらCP……ヘルマンさん、エミールさんも戦闘終了……?』

『ヘルマン殿!! 何ですか今の赤い光は!! からの連撃は!! ま、まさか……! ホールドの神が貴殿の神機に降臨してきたとも言っているのであるのか……!?!』

『……? なにが起こったのか分からない……?』

「え? ええ!?! そ、そつちも!?!」

通信を聞く限り何かそつちにも何かあったらしい。

——おかしい、何かがおかしい。一体いつ!?! どこで!?! 何の接触が原因……。

……。

……そう言えば出撃前に、こいつらの神機のメンテナンスとアップデート、やったうちのクソ兄貴だ。

……十中八九、なんかやらかしただろうクソ兄貴を、帰ったら絶対吊し上げる、と心に誓う。

『ブラッドー04。何が何だかオレにも分かるように教えてくれねーか? 何かウチの前衛たちに何かが起こってるみてーなんだけど……』

「すみません私にもわかりません!!」

『おい』

「ご、ごめんなさい! 何でもしますから命だけはあつ!!」

『いや……別に分かんないならいいよ!! 仕方ないことじゃん!?! そこまで謝る意味!?!』

「つーかブラッドー01応答してく……おい!?! ジュリウスさん!?!」
「え……!?!」

そういえばさつきから、隊長からの応答が来ていない……。

……考えてみれば、私たちが悠長に感応種相手にあーでもない、
コーデモナイ、と戦闘できていたのは……。

周囲のアラガミを、一手に他のチームが引き受けてくれたから
——だ。

『……こちら、ブラッドー01……。……——……』

「隊長!？」

『CPからブラッドー01へ……コレが最後です中型種3体！ ジャ
ミングが発生してます……おそらく——ラーヴァアナです!! 移動可
能な戦闘員はすぐに救助へ向かってください!! このアラガミは聴
覚に優れるので撤退してもすぐに捕捉されます!!』

「そ……んな……!?!」

隊長からの通信は雑音しかもう聞こえてこない。

ラーヴァアナがどんなアラガミか知らないけど……そんなものが3
体も出てくる状況を知り、目の前が暗くなる。

『こちらヘルマン、300秒粘れ——すぐ行く!』

『待たれよッ！ この先の通路は塞がっているッ!! 直線移動はでき
ないぞヘルマン殿!!』

『……』

「隊長!!——隊長!!? ロミオ先輩！ シエルちゃん!？」

『ジャミング発生中につき通信断絶です……これでは……最期の言葉
すら聞くことも……』

「物騒なこと言わないで下さいフランさん！ 何諦めてんですか!？」

『ですがもう無理……。バイタル情報も何もかも断絶……。もうこの期

に及んで投入できる戦力がカツカツです。』
「でも……!」

隊長やロミオ先輩が死ぬわけない……ブラッドで1年も戦ってきたコンビがそう簡単に崩れる訳ない。

……シエルちゃんなんか、まだ新兵。それも初陣なのに……死ぬわけない……。

私の——せい？

私が——感応種討伐なんかやってた……から？ だから仲間が……本当なら最優先で守らなきゃいけなかった仲間が……？

もう何をしたらいいのか、何をすべきなのが分からない。頭が完全にパニックになる。

今からでも行くべきなのか——もう諦めた方が良いのか、そもそもロシアの回収部隊はいつ来るのか……。

……このラーヴァナ3体が突破してきたら——戦えるのか。そうじゃない! 隊長がそんな簡単にやられるわけがない。

……だって……!

………………だって……。

『諦めるのは早計ですよ……皆さん……?』

「ラケル先生……?」

戦場に、女神の声が響き渡る。

『ふふふ……すこし『調整』に手間取りましたが……間に合ったようで何よりです……。親として、私の愛しい子供たちを、このような場所で……見捨てるわけにはいきません……ジュリウス……もう少し、待っていなさい。』

……みんなで帰るのでしょうか? 私たちの方舟——フライアに……』

「先生……」

『唯もよく頑張りました。さぞ怖かったことでしょう……でも、貴女は負けずに……己の義務と任務を果たしたことを、誇りなさい。もう大丈夫なのだから。』

……救援部隊、降下開始。周囲にアラガミは居ません……ただ前方3体を殲滅なさい。』

……さあ……いつてらっしやい……? ……ギル』

phase33 冬の終わり

「何をやっとなるか貴つつ様あああああああああああああ
あ!!」

「もおおおしわけございませんでしたあああああああ!!」

公開土下座INフライア。

「P—66を……貴重なP—66型偏食因子を……既存の第一世代に
投与だ!! 結果が出たから良かったようなもの!! 万が一!
どう責任を取るつもりだったのか聞かせてほしいものだなあああ
あ!?!」

「ご、ご、ご、ご、ごめんなさい! ……全然考えてませんでしたあ……。
失敗したら……死なばもろともで……」

「今すぐその希望を叶えてやることも可能だぞ!?!」

「す、すすすすみません! ごめんなさいごめんなさい申し訳ありま
せん!! な、何でもしますからああああ……!」

「何でもするのか? あああああ? 何でもするのかあああ? 貴様
に出来ることなどタカが知れているだろうがあ!?! 貴様自分のし
でかしたコトが分かってるのかアアアアア!?!」

「分かりません!!」

「考える振り位したらどうだ!?!」

「無理です!!」

「大概にせんかアアア!!」

「いいか……神威。貴様はこの『ブラッド』の——ひいては『フライ
ア』の専売特許を勝手に持ち出した拳句、無謀な賭けに出て、しかも
! 最悪こんな訳も分からん場所で部隊全員を失うところだったん
だぞ?!?! 貴様らに一体いくら注ぎ込んでいると思つとるんだ?!?!
ええ!?! 貴様の内臓まで身売りしたところで到底賄えるカネじゃな

いんだがなああああああ!!」

「幸いこの歳まで大きな病気にしたことありません！　な、何とかならないものでしょうかあ……!?!」

「そんなもん大した資産価値はない!!」

「生まれてきてすみませんでしたあああああ!!」

最早何を怒られているのかさえ定かではない。

まあ……うん、でも分かった。分かったよ……。

あの時はああするしか思いつかなかつた——と、言ってみたところ
で実は他に手はいくらか存在したような気もする。

そして、局長の言ってることは正しい。

自分が浅はかでした……はい。

「何かあると必ず貴様が絡むなあ？　ええ!?!　本来ならここで懲罰房へぶち込んでやる所だぞ……」

「ちよ……懲罰……!?!」

そんな怖いものまであるのですかフライア。

大体懲罰房って一体何するところなんですか!?!

……あとでシエルちゃんにでも聞いておこう。

「まあ……ですがグレム局長？　ここはお怒りを収めては頂けませんか……？　この子はこの子なりに……努力したのですわ？　確かに至らない点もあつたことでしょう……そして、貴方への損害も少なく
なかつたこと……この私から謝罪させていただきます……」

「先生……!」

「ラケル博士……」

キコキコキコーという車椅子音と共に隊長の女神登場。

……私にも救いの慈母に見える。

「ですが、幸いおっしゃっておられるのでしよう……？　ロシア支部の支部長も……一旦保留、と。機密事項にして下さる……とか……」

「……本当にそうなるなら良いのですがな」
「……」

あの後。

オリガちゃんとヘルマンさんの二人の神機におこった『異常』とその結果覚醒したブラッドアーツ……についてロシア支部長に対し皆で隠蔽しようとした——が、『こんな俺らに対応できねえよ!!』とおビビりなされた『スネグーラチカ』の野戦整備士さんたちが密……報告しやがり、緊急会議が開かれたらしい。

結果、ロシア支部上層部の判断はこうなった。

何が何だか分からない。

だが、解析するだけの技術力ない。

まあ、取りあえず使えれば何でもいい。

ので、今まで通りで続投。

全てのことは黙ってる……。

……すぐ、この一件に関与した全ての神機使い、技術スタッフ、オペレーターから偵察班にまで箝口令が発令されただけで終わった。

何かレア博士やらフライアの交渉コーディネーターやらが色々やっていたらしいけど、その辺のことは一兵卒の私なんかには到底理解できない世界の話になる。

「……我々フライアに課せられてた『使命』でもある……『感応種』の討伐の成功……コレは十分に功績と言って宜しいのではありませんか……?」

「ラケル先生……でもそれほぼ偶然でもう一度同じコトをやれって言われてもできる自信な……」

「拒否権があると思っっているのか貴様あ!!」

「ひいひいひい!?!」

そんなコト言われたって紛れもない事実だ。

先の戦闘は本当に死にもの狂いだっただし……実際私が、というより

はオリガちゃんとかアーサーさんで倒したようなもんだっし……。

確かに結果だけ見れば『ブラッド隊員が感応種討伐に成功』ということになる。

フェンリルの報道には、フライアとロシア支部の共同作戦に於いて、フライア所属の特殊部隊『ブラッド』が感応種討伐に成功、と言った形で掲載されるらしい。

ブラッドの名前を一躍売る好機だところぞとばかりに乗っかる局長が流石すぎた。

……嘘は言っていないけど……報道の真実なんてそんなもの、という事だろう。

………いつそフェンリル官報なんかやめて堂々と虚構官報に改名でもすればいい。

「………そして……予想外の発見もありました……『彼』の尊い献身と自己犠牲の精神は、今思ってもこの胸の内の高鳴りを抑えきることができませぬわ……ふふふふふ……」

「………哀れな男だったな……」

「新たな発見には常に犠牲がつきものです……ふふ、うっふふふふふ………ああ、ですがこの胸に源泉のごとく溢れ出る新たな沼……いえ、聖泉を与えてくれましたわ………こうはしてはおられません………わたくしも来るべき夏の『祭典』の準備をしなければ……」

お説教は終わりですよ、トラケル先生が視線で伝える。

グレム局長の気が別の方向に向いたことを見計らい、戦域を離脱した。

——私は、アレだけのことをやらかしたにも関わらず……私がグレム局長に怒られる——というだけの拍子抜けするほどの甘い裁定に

なった。

ラケル先生やレア博士をはじめとして……多くの人間に庇ってもらった。

ロシア支部側にも多大な迷惑をかけたことだし……きつと、もう二度と来るなど思われていることだろう。

だからコレ以上問題を起こさないうちにさっさとトンズラかます。

……んだけれど……。

「納得いかねええええええええ!!」

アーサーさんが荒ぶっていた。

「アーサーさん抑えてー抑えてー!!」

「何でだよお……!! うう……何だよおおお!! クソおおお……!!
だつてさ……!! だつてさあ!! 納得いかねえよ!! ヘルマンもオリガもブラッドアーツって何だよ二人して畜生おお……!!」
そう、アーサーさんは……。

遠距離型にはブラッドアーツとかそういうものは顕現しなかった。ばかりか、神機も通常制御のままになった。箝口令を敷かれた二人とは違い、アーサーさんは本当の本当に……何も変わらないまま、今後も泥沼の闘いを続けていくことになる……。

「いいじゃないツスカ〜! アーサーさんには狙撃があるんですから! 感応種戦はパルス域外から狙撃しまくればいいんですよ!」

「アレ結構大変なんだよボケエ! 遠距離狙撃ナメんなよゴルアアア

ア！　なんで俺は近接型に適合しなかったんだよチクショー……」

「ええー？　でもー？　カツコよかったですよー？　あの狙撃ー？

お蔭様で！　助かっちゃいました」

ですから次からは……」

「え……？　何だよオリガ……イキナリブツ込んでくるなよ……！

そりゃ助けたかったけどさ……」

部下から煽てられたことが嬉しいのか……それとも、実は単細胞なタイプなのか、アーサーさんの顔が髪と同じく、赤くなる。

だけど、彼は気づかない。

……オリガちゃんが、中年以下にデレることなど——ありはしないのに。

「遠距離型は遠距離型なりの仕事をしていただければいいと思いまああああああああす!!」

「オリガてめええええええええええ!!」

「いいじゃん……お前なんかまだマシじゃん……せいぜい、『覚醒』しちまった部下二人と仲良くやってろよなあ……」

「うぐっ……!」

そして、もう一人。暗黒オーラを発する……。 19歳男性。

「何なの……本当おまえら何なの……!? オレさあ……1年先にブラッド居るのに……頑張ってるのに……! 血の力って何だよ……ブラッドアーツとか本当に何……」

「落ち込まないでーロミオ先輩! 大器晩成なんだよ! 主役は遅れて来るんだからっ!」

「このままオレは……終わるんだ……」

「もー……何言ってるの? おでんパン食べて先輩!」

……ロミオ先輩は落ち込んでいる。とてとても、落ち込んでいる。

なぜならブラッドアーツ、先、越されたから。

……実は、今回の一件に、箝口令が出されることになった最大の理由がここにある。

ブラッドアーツって……『既存』の奴らでも、使えるんだあ……と。

……この発見は誰にとっても全く不本意だった。恐らく、当人たちも……

今生き残れば何でもいい力を! そんな時だけでいいので我に力を! ——という感覚だったのでここまで事態がこじれると誰も思っただけだったのだ。

そして、その誰も予想してなかったとばかりを受けた人たちがここに。

「もう皆滅びればいい」

「世界が憎い」

「何もかも消え去るがいい」

「そして世界の終焉を」

ダ、ダークサイド……ダークサイドフォールン……?!

「……」

という、ダークネス19歳×2の横に腰かけているのは我らが隊長。ジュリウス隊長。

この人も今すつつつごい不機嫌そーそーな顔をしている。

元が無駄に良いだけに、いかにも冷徹そうなエリートっぽくて正直……怖い。

「隊長……あの……迷惑かけて……本当すみませんでした……」

「ああ……副隊長か、気にするな。仲間は支え合うものだ……迷惑だなどと思つてないさ……お前が責任を感じる必要はない」

アレ……? ……なんか……優しい……?

絶対不機嫌だったから厳しいことのひとつやふたつ、いやむしろ罵声の嵐を浴びる覚悟は出来ていたのに、かけられた言葉はとても優しくかった。

……凍るような感覚が背筋を伝う……。

「す、すみません！ 私が勝手に動いたばかりに皆を危険に……」
「気にするな、自分の信じる行動をした結果だろう？ その選択は間違っていない」

「でも……！ でもっ!! そのせいで……そのせいで……！ ギルさんが……あんなことに……！」
「……ギル、か……」

ジュリウス隊長は……どこか遠くを見た後。

……まるで、懐かしむような声で、優しく言った。

「そんな奴も居たな」



立っているのもやっとの疲労の中ロミオは、確かに仲間が降下してくる気配を察知した。

正面に立ちふさがる赤い化け物——ラーヴァナのせいで、依然として通信障害は回復しない。

周囲には毒煙が立ちふさがるせいで、更に視界が確保できない状況——オペレーターからの指示もなく、データリンクもない。

だが、その中であっても……直感で悟った。
仲間が来た——と。

「……ギル……？」

お前なのか？

来てくれたのか……？

青紫色のカラーリングが施されたクロガネの槍、黒腕輪、黒い制服——ブラッド正式装備。

背中の狼をはためかせ——長髪が、靡く。

……なびく、はず………だった……。

「何やってんだ……お前……!?!」

頭部に、神機兵の頭がついていた。

頭部に、神機兵の頭がひっついていていた。

半ば狂気じみたその武装に——ロミオは困惑する

「え……!?! ええ!? ギル!? お前ギル!?!? それ……ゴリ……ゴリ……!?!」

得意のツツコミすら入れられなくなりつつあるロミオへ。

『ソレ』手を伸ばして、制した。

……分かつている、何も言うな。何も……とでも言うかのように。

「今の『私』はギルバートではない——」

一人称まで変わってる。

「おい!?! 何言ってるんだよギル!?!?」

「否——……今の私は——! 私——!! マスク・ド・ゴリラ!!」

どがっしやあーん。

という、特に意味のない大爆発。それが誘爆した地雷によるものなのか、それともヘリからの追撃だったのかはこの後（特に誰も気にしなかった為）誰にも知られることはなかった。

『今の爆発によりラーヴァナがビビりました！ 通信が何故か回復!?』

『現場ブラッド応答願います』

「え……？ ……え？ 何が起こってんの……ブラッドー02………理解不能……」

「ロミオ?! 無事か——……と……何だその変態は?!」

「オレが聞きたい!! オレが聞きたい!! オレが!! 聞きたい!!!」

『元ギルバートさんです』

「元ギルバート……だと……?!」

「じゃあ今は何なんだよって話だよなあ……!」

良い年こいた男二人の困惑に対し、更にもつと良い年こいた男が神機兵マスク・オン・ザ・マクレインな状態で答える。

「またの名前を!! 『性義の味方・ゴリラ仮面』!!!」

「ギルううう……!」

「ギル……最早聞こえてはいないと思うがひとつだけ言っておく……今頃、お前の親は泣いているぞ」

生きていればの話だがな、と。ジュリウスは会ったこともないミスター&ミセス・マクレインのことを思い浮かべる。

……が、想像力に乏しい青年は特に思い浮かぶことは何もなかった。

「一体何があつたんだ……？」

「ナナのせいじゃないかなあ……アイツに盛つたりしたから……」

『ちよつとー？ 私はギルのゴハンにトリカブトを入れただけですー！ こんなになるなんて聞いてないよ……！』

「やっぱナナのせいじゃねえか!!」

『ロミオ先輩ー！ 何そのトリカブトに対する風評被害……！』

※立派な犯罪なので、良い人間は絶対に真似をしないで下さい。

『ふふふ……ふつふふふふふふふ……！ ジュリウス……ロミオ……シエル……何も恐れることはありません……そう、クジヨウ博士の毛根程にも!!』

「ラケル先生!？」

「先生!？」

「先生！先生！ ああ先生!」

それは、浅くて——少ない。まばらな、毛根——の比喩。

『……ギルは今『覚醒』を果たしたのです……そう、大体こんな感じで。私はギルの横たわる部屋へと訪れました……青ざめ、額に汗を浮かべ……苦悶の表情を浮かべる『彼』に向かって……私は問い、かけたのです。

——力が、欲しいですか……？ ——と。

その代償が安くないということはギルにも分かり切っていたことでしょう……。

嗚呼、ですがしばらく迷った後、ギルは選んだのです……。

——それでも、仲間を救えるなら……迷いはない、と。

——二度と、大切な人を失う訳にはいかない……と。

かくて私は『兜』を授けたのです……戦う為に、守り抜く為に……そしてその結果！ 見事にギルは才能を開花させました……やはり古き世界に伝わりし『伝承』は本当だったのですね……！
仮面ヒーローはやたらめったら強い、という伝説は!!』

「ラケル先生……」

『言っている意味が』

「……分かりませんが……?」

「流石完璧な理論ですラケル先生。おっしゃる通り何の異論もありません——が……」

部下たちの困惑をよそに、一人だけ冷静なジュリウスが謎の仮面、自称『マスク・ド・ゴリラ』という世にも奇妙な生物を眺める。

「……ギルだった頃の理性もどっかに吹き飛んでいるようにお見受けします」

『理性など本能の前では無力ですよジュリウス……。さあ！ さあ！ マスク・ド・ゴリラ!! ——世にあまねくすべての『救済』を求める人の前——！ 目の前の焰獣を蹂躪するのです!! れつつらごーう!』

「了解した——お婆ちゃんは言っていた……食事の時間には神・降・臨だ!!」

「神様の居ない世界で祈ったりなんかしちや駄目なんだよお……!」

『お婆ちゃんって誰ー!?』

「も……もも?」

『細かいことは気にしたら負けですよ私の愛しい子供たち……? さあ神機を……闇と闇と闇の力を重ね合わせ!! 今こそ『真の姿』へと解き放つのです!!』

「——良いでしょうミストレス……ご婦人の要望とあらばお断りするわけにはいかない……それがこの私! マスク・ド・ゴリラああ!」

「もういいよ分かったよ!!」

『もうやだあ……! 視覚と聴覚の暴力だよおお!』

「……!」

「もしくは『ゴリ仮面』!!」

「まさかのリピート!?」

『激し過ぎる自己主張!!』

「……ご、ゴリ仮面! 皆を助けて下さいゴリ仮面ー!」

「シエルやめろ!! 煽るんじゃねえ!!」

「ふははははは! 任せろ——この世に! 悪と……不味い飯が栄えた試しなどありはしなああい!!」

『お前が言うな!!』

亡国の文化を貶すわけではないが、お前の料理だけは絶対許さねえ。

その洗礼を喰らったロミオとナナ、橙色と桃色コンビは脳裏をかすめてくる忌まわしい記憶を喚起させられていた。

「――神――機――変――体――!!」

「何だよそれ!？」

『ただ、ヘンタイって大声で言いたかっただけじゃない……?』

「こ、これが……メタモルフオーゼ……!」

『ダークヒーローは暑苦しい位が丁度良いのですよ……』

カラーリングは紫と黒。

2Pカラーどころか、どうあがいても正義の英雄にあるまじき配色だが神機兵マスクの前では誰もそんなコト気にしない。

なぜならそれだけの――顔面破壊力があるからだ!

ピカアアアン! とアーティフィシャルCNSが謎の赤色光を灯し、神機を構成するオラクル細胞が赤く尚、紅く染まっていくツ!!

パワーアップした『ヘリテージス(違法改造済)』は近接形態なのに姿を――変えた。

これではもう『亡き者の遺志を継ぐ戦士の槍』の原型も残ってない!

そしてそのかわりにアラワレタのは……。

「鞭……」

『ういっぷ……』

「……正義の……味方の……武器じゃありませんけども……？」

シエル・アランソンは勘違いをしていた。

鞭は武器じゃない。

断じて、違う。

「どやっさああああ!!」

変な掛け声と共にラーヴァナへと呐喊していく謎マスク。ああ、ゴリマスク。

マスク・ド・ゴリラの神機、ヘリテージス（違法改造済）はオラクル細胞特有の謎の伸縮性で無駄に良く伸びる！ 伸びきったところでがぶつと捕食！ 撓った鞭が空中で孤を描く。

いいぞー強いぞーマスク・ド・ゴリラ！ たたかえぼくらのマスク・ド・ゴリラ！

「嘘だろ!? 一撃かよ!」

『ええ!? なんでもく!? ロミオ先輩、状況報告ー!』

「な、何か知らねーけど……神機が鞭型に変形して……物凄いスピードで正面から突っ込んで……で、ウィップ攻撃がクリティカルで当たって……ラーヴァナの四肢切断……もうなにをいつてるのかよく分かんねーな、ごめんな」

ロミオは半ば狂いつつある己を自覚していた。

『ふふふっ……考えてはいけませんロミオ……全ては東の間、全ては過ぎ去っていく……そう、ロミオ……考えるのではなく、感じるので

す！ 貴方の一番奥の深くて柔らかいところで!!」

「……何言ってるんですか……？ ラケル先生……」

『焦る必要はありません……最初こそ辛くとも、だんだん慣らしていけばいいのですから……だから先生を、信じて……？ 想像なさい口ミオ。奥の暗くて深くて温かな場所……そう、その深き深奥で……』

貴方の中の九歳児が歎んでいるでしょう……？』

「……べ、べべべべ、べつに……そんな訳な……!」

『ロミオ先輩スルースキルを忘れたの!? そっち逝っちゃだめっ!!』

「心配すんなー! ナナを置いてオレは何処にも行かないー! ……」

「つーかジュリウス? なんでさつきから何も喋らないんだよー!」

お前も一緒に何とかしてギルを正気に戻してくれよ!」

「………なあロミオ……?」

『アレ』はもう……アラガミ化ってことでいいよな?」

「やめろジュリウスううううう!!」

放たれるは、制止の声。

戦場に舞うは、怒りの鉄槌。

ダウンドンダアアン！ という——『慈悲の一撃』が——今、響く。



『何してんだアレは仲間だろおおおがああああ!!』

『い、いいいい……今のは誤射だ……! k k k k k、か、回復なんだ……! ……次は外さん!!』

『……隊長くく! ソレをあんまり刺激しないで!! なんか怖い!!』

……。

『フハハハハア→!! ……ヘルメットが無ければ即死だったな……。見たかフルフェイスの力!』

イエスふるふえいす!! ノーモアふるふえいす!!』

『テメエも煽るんじゃないよ! 黙ってるこの謎怪人マスク・ド・ゴリラ様!!』

『あああああうぜえええええ!!』

『隊長キャラー！ キャラ崩壊してるよー！』

『ジュリウス隊長お気を確かに！ 一緒にゴリ仮面を応援しましょう！』

……………。

『もう畜生…………！ け、けど好機だ…………！ マスク・ド・ゴリラ！

さっさとラーヴァナからコアを抜いて葬ってさしあげろ！ それで任務が終わるから…………！ あ、あとで一緒に、病院に行こうな…………？

…………精神科か、脳外科か…………それが問題だ…………』

『そうだよ早くこんなクソ任務終わらせて帰ろう！ もう、こんな嫌だよ私！ お願いマスク・ド・ゴリラー！』

『頑張ってくださいゴリ仮面ー！』

『…………』

なにが、なんだか、わからない…………。

「フランさあーん…………ブラッドー04からCP……………。一体何がどうしちやっただんですかーギルさんはー！

…………日ごろのストレスのせいですかー？ 向精神薬でも飲ませた結果なんですかー？ あんな薬中戦場に連れてこないでくださいよー…………このままじゃ全員戦闘恐怖症に罹患しますよー…………！」

小声。

『こちらCP…………知りませんよあんなヴァカ…………ゴリラマジでキモい…………最早ゴリラですらありませんね、ゴリラに失礼ですねこう呼びましょうか——元ゴリラ』

『元マクレインな元ゴリラはよく分かりましたからあ！ 何が彼をそうさせてるんですか……!? ギルさんはあんな人じゃないかっ
た——……!』

『人の心の闇は深い………』

『もしアレがギルさんの内に巢食う闇なら、もう救いようがない……!』

『違いますよ……。ふふふ………恐れることはありません………何も——
——そう………何も——。』

今のあの神々しき姿こそ………世界の意志。P—66偏食因子の誠
の意志………!

そう————世界は………求めているのです………! 来るべき『祭
典』の2日目の種子を——!。

たとえ、提供できるものならば、もうネタでもタネでも何でもいい
のです!

どんな泥の中であれ………たとえ濁った沼の中でさえ………美しく咲
き誇る蓮華の如く——!』

「フランさん、同時通訳お願いできますか?」

『無理………もう無理………』

「フランさあん!!」

「P—66怖あ!?! P—66怖あああ!?!」

『俺は今、フライアという場所の恐ろしさを垣間見た………!』

『イカれてるな』

超絶ブラック職場を軽く超越したロシア組ですら引いてやがる。

『よし、よーしよしよし……良い子だ……マスク・ド・ゴリラ……良い子だから、そのままラーヴァナにトドメを刺すんだ……大丈夫だ、もう悪いジュリウスはお前を撃つたりしない……』

『……』
『——隊長お願い！ あと一分でいいから自重して！』

『……』

重苦しい沈黙が周囲を包み込む。

……ような気がした。

『了解した——。これよりラーヴァナ、コア抽出に入る——』。

……確か、ラーヴァナの弱点は 聴覚 だったよな
『？』

「は?」

『!』

『な、何を!』

『ゴリ仮面が……大量のデカイ釘と……ガラス板を持っていますけども……?』

『まさか……?!』 総員!! 今すぐ集音センサーを切れ!! 音量を落とすんだ!! 通信機を切つて良い——急げ早くしないと手遅れにな……』

「ちよ、現場一体どういう意味でそれ言つて——つつ!」

やがて聞こえてくる……音。

それは……基本的に誰が聞いても嫌いな音——。

ガラスを釘で引つ掻くという——暴音。

『○▼%\$&%\$%\$%◆&\$%W#
”!?!?!?!』

ここで、アラガミ豆知識。

コンゴウやヤクシヤ、などと言つたアラガミは聴覚が非常にすぐれ、また集音性があるため神機を變形させる音でもこっちは居場所をバレてしまう。ラーヴァナもそのパターン。

あんなにデカイ凶体なのに、聴覚はすごくぶる良い。

きつと、人間なんかよりも——ずつと、ずつとずーつと……鋭敏な聴覚を持つている……。

可哀想に、人間でさえキツイのに……ラーヴァナ×3は今地獄を味わっていることでしょう……。

情報によると手足がもう存在しないので……もがくことも、のたうちまわることもしない。

『……ははっ……良い恰好だぜ？ そんなにイイのかよ……？ 堪え性がねえな……断面から体液出まくってんじやねえか……？ このまま失血死かあ？ ほらほらもつと頑張れよ、なあ……？』

「マスク・ド・ゴリラ……！」

ヒーローがそんなこと言っちゃいけない!!

絶対言っちゃいけない!!

情操教育に超よくない!!

……でも聞いちゃう……。

『あああああああああ!!』

『うわあああああ!! み、耳があああああ!! うわあああああああああ!! すまない——エリ……あああああつあああああ!!』

『くっ……間に合わなかったかゲルマン組……!』

『CP了解。エミールさん、ヘルマンさん無事死亡確認。急ぎ救護班、収容をお願いします……二人消えましたね……ああ……いい悲鳴でしたね……』

死と破壊の連鎖がノンストップパブル。

『そろそろ限界みてえだなあ？ ……もう、我慢しなくて逝っていいんだぜ……?』

じゃあせめて安らかに逝かせてやれよ……どんな死に方だよ……!?
味方怖い……やべえコイツマジヤバイ……。マスク・ド・ゴリラ怖い……。

『録音準備は!? この素材を逃す手はありません! 音声加工、音コラ、人力……幾らでも方法はあるのです! これを私のジュリウスに掛け算すれば……! 私のユートピアが……完全なる薔薇の園が! 新たな世界——聖域が完成するのです!』

『この暴走俺が止める……』

『ま、待てジュリウス、マスク・ド・ゴリラの様子が……!』
『やっこの悪夢が終わるよお……』

『フツハハハハハ……ひでぶ!』

「な、何……?」

何か今、成人男性の断末魔が聞こえた気が。

『ギルううううう! しっかりしろギル!! 死ぬなよお! こんな所で死んじゃ駄目だつてば!』

『ギル大丈夫か……? ——見る影もない……!』
『何それ見たい!』

「ギルさんどうなったんですか!」
『クツソこのマスク外れねえ!? なんでだコレ……うわあ首に直接接続されてやがる!』

『……一人でも欠けたら……意味がないんだ……』

『ジュリウス！ 諦めて殺すな!!』

『何だか……ミイラ化してっいませんか……？ ひっ……!!』

「ギルさん大丈夫!? え？ ミイラ!」

高すぎる代償……。

「何したんですかラケル先生!」

『別にちよつと……その……——オラクル細胞が人体、特に脳——精神感応を起こすという研究はご存知ですね……？ 神機接続ですらそうなる可能性を秘めているのですから……直接頭にブツ込めばどうなるかな〜つと……うっふふふふふ。』

予想外の素晴らしい結果に流石の私と言えど鼻血を禁じえ〜ま〜ぜん〜……ご、ごちそうさまでした……!』

「全部おまえのせいかあああああ!」

『やめろブラッドー04、ラケル先生に罪はない!』

「抜かせブラッドー01! そう思ってるのは今この瞬間!! 全世界で!! 貴方だけだ!」

『当然だ! 俺はたとえ世界を敵に回してでもラケル先生の味方をする』

つまり、洗脳だとか薬物投与によるヘブン状態だとかじゃなく。

文字通りの人体改造……もとい脳改造……。

今その代償で死にかかっている……と……。

『神機を離せば何とか……駄目だ外れないよ!!』

『ど、どどどどどどうしましょう……!!?』

『かくなる上は……ロミオ向こう側から引っ張れ、行くぞ……せーのっー!』

ベリベリベリい！

……という、世にも奇妙な音が、私の耳へと聞こえてきたのでした……。

『……取れたな』

『あー……人の手の筋肉の構造がよく分かる……』

『か、皮が……皮膚が……！』

『なにそれすごーいっ！』

「言わないで下さいいいいいいい!!」

【第二次共同防衛戦】

戦果報告：コンゴウ17体

ヤクシヤ12体

ヤクシヤ・ラージヤ 3体
その他中型種 多数

オウガテイル測定不能
感应種イエーン・ツイー コア摘出成功

防衛ラインの維持——成功

損害報告：軽傷1名

重傷8名（内2名意識不明）

重体1名

追記事項：もうこんなメチャクチャなオペレート二度とやりたくありません。



「……良い奴だった。だが残念だ。今頃………地獄の業火で焼かれている頃だろう」

「ギルさぁん……!」

「いや落ちつけジュリウス、ギルは死んでない」

ライトサイドに帰ってきたニット帽先輩。

「次はどんな人が来るんだろうねー! 楽しみく〜!」

「ナナ、サラツと怖いこと言わない。ギル生きてるから」

「……誰が来たって同じだよ……」

「唯、だからギル死んでねえからあ!!」

ロミオ先輩だけが、あのクソゴリラを弁護している。

「でも原隊復帰の目処立ってないって言う……? もう、きつと帰ってきませんよ……現世に」

「治るって絶対! ギルと先生を信じろよお前ら!」

「ロミオ先輩く〜! ギルはねーきつとねー……この世界をアラガミから救うために天が使わしてくれたゴリラなんだーって考えればいいよ………? だからね……」

……天に返品する時が来たんだよっ! えっへへへへ〜!」

「ナナやめろ笑顔でそんなコト言っちゃ駄目だ! 落ち着けお前はそんな奴じゃなかった!」

「そうだ、ナナ。アレは絶対地獄逝きだ………天国の扉など叩ける訳がない」

「ジュリウスまでどうしちゃったんだよお!? 部下に優しい上官って
いう外面どこに置いてきたんだよ!?!」

「………奴には同情はする………あの献身っぷりも評価はする………だが
………俺が………! 俺が許せないのは………!」

ラケル先生の手で頭を撫でまわして貰った!!! という一点だ!!」

「「そい!?!」」

「文字通りの洗脳など………羨ましすぎる………」

「え………エエー………? わかんない………オレにはちよつとわかん
ねえなー………ははっ………ちよつと離れてくれジュリウス」

「隊長あたまおかしいよー!」

「………選ぶなら俺を選んでほしかった」

「退くわ」

「キモいわ」

「………唯?」

「………隊長が良いんならそれでいいんじゃないですかもうどうでもい
いよ類人猿も女神も局長も」

「………唯………!」

「おい」

もう、何も怖くない。

『もー……あ、繋がりました……！　こちら現場のシエルです。装甲壁閉鎖完了しました。隊長、及び副隊長に報告します』
「終わりましたかー！　ありがとうございます！　シエルちゃん！」
「終わりましたかー！　はいはーい繋がりますよー！　最後のお別れも言えないなんて寂しいですもんねー」

オリガちゃんが、画面を操作し、中継映像を出す。

何ということでしょう、少し前まで戦場だったその場所。装甲車や戦車、自走砲だらけだった装甲壁が今では匠の技によって綺麗に修復されている。

それは希少なアバドンとアモルの特殊なコアのお蔭だったりする。

……そう、私たちは『あの日』……見てしまった……。

あの日、アーサーさんがホクホク顔で、アバちゃんとアモさんを回収して回っていたこと……。

……数日後、装甲壁の中から『ぴぎやー』とか『ぶぎやー』とか『きゅぴい』とかいう……ちよつと可愛い……断末魔が聞こえてきたこと……。

何かどっかで見覚えのある尻尾が、壁にめり込んで、しばらくもぞもぞ動いていたこと……。

……やがて動かなくなり静かに飲み込まれていったこと
……。……。

——まあ、壁が修理できたんなら何でもいいよね？

『唯さーん！ ナナさーん！ 先輩さーん！ 会長さーん！』
『!!』

「健太君……」

「お、元気になってるじゃん！」

「結局、先生の車椅子1個持っていかれたね……まあ、いいんだけど」

腕やら足やらを包帯でぐるぐる巻きにした車椅子の男の子が手を振っていた。

でも……その手あまり振らない方が良いと思う。その子の周辺だけ不自然に場所が広がっている。未だに彼は接触禁忌であることは変わらない。

その首には……半分以上が溶けかかった、神機使いの腕輪の破片が吊るされている。

……とても、大切そうに。

……あの時、フライアが受け入れて……ここまで運んできた人達。もう、彼らは難民じゃない……明日からは『ロシア支部第一サテライト』の市民として——正式に登録される。

このサテライトの防衛はしばらくはアーサーさん達がやってくれるらしい——けど、壁に穴を開けるレベルのアラガミは大方、先日狩りつくしたので……アーサーさん達も少しは休める、と喜んでいた。

サテライトは独立自治が認められているから、ここではDNA登録や支部の内部や外部居住区ほど監視や統制も厳しくはない……だが、その分、外部居住区よりはアラガミの襲撃率も高い。

危険はある。

それでも生きることを選択したのだ——今、そこに居る誰もが。

『会長——ここでお別れですがおれはココで可憐で気高く、知的で蛭の様に儂いラケル先生の素晴らしさを皆に伝えていきます!!』

「ちよ……!!? 隊長この子に何教え込んだんですか!?!」

「期待しているぞ、同志」

『はいっ!!』

「だから何やってんですか?!?!」

この世界にまたひとり、感染源が増えた瞬間だった。

健太君の後ろには、黒髪の女性が——結局最後まで名前聞かなかったけど——暫定『ハカセ』さんが寄り添っていた。

……あの人が一緒なら多分大丈夫だろう。

以前偏食因子の研究を行っていた人だから——きっと、今度こそ……。

『こちらシエル今から帰投します……え? あ、あの……? こ……困ります私……私……!』

『おでええええええええん!!』

『おでんパンおでんパンおでんパンおでんパンおでんパンおでんパンおでんパン』
『!!!』

『おおおおおでええええん！ ぱあああああん！ おでえええええん！
んぱあああああん!!』

『ひっ……きやああああああつ?!』

「シエルちゃんー?!?!」

「おおおおおい!? 大丈夫かー!? シエル!? シエーローール!?」

「だいじょうぶ、だいじょうぶ。焦らないの先輩っ♪ きつとそのうち帰ってくるからねー」

……そのうち、ね」

「……アーサーさん、見ましたか……アレが私たちがこれから守っていく……サテライトの……ひとたち……? つすよ……」

「……何か大丈夫そうだな、うん。この際だから有給消化しようぜ」

モニターを見てドン引きしていたロシア勢が正気に戻りそうになった所に、ナナちゃんの黒い影が伸びる。

—— 逃がさないよ……? と。

「はい、オリガちゃん。これ、おでんパンだよ」

「……ひっ……?!」

「前は受け取ってくれなかったでしょー? 見逃すとおもったー? えへへっ!」

……でも、今は大丈夫でしょ? もう、オリガちゃんを追い詰めるモノなんてないよねー。何かに追い詰められてる人ってなんとなく分かっちゃうんだからねー!」

「……」

「もう、だいじょうぶ——それでしょ？」

「……………」

オリガちゃん、頑張って……。

と、心の中で応援を送っていると。どこからともなくヘルマンさんが現れた。

さっさと帰ってしまったエミールさんが居なくなってから、この人少し寂しそうだ。

だが、今日はこころなしか、隻眼が少し柔らかい表情を作っている。

「……感謝する。ブラッド副隊長。これで……ようやく『アイツら』は歩き出せる」

「……」

向けられたのは感謝の言葉だった。

「本当は分かってたんじゃないですか……？　アーサーさんが、ずっとずっと『自分』に向けて色々言ってたってことも……オリガちゃんが立ち直ろうともしてないことも……」

「……ああ」

やっぱり……そうだった。

過去に彼らに何があったのか——結局は分からない。

だが、見てきたこと、そして聞いたことから察すると——相当な過去があつたんだと予測できた。

そして、ずっと傍に居たこの人が……それを分かっている、訳が無い。

そして、それをあえて放置した理由も——ちやんとある。

「全てはあいづらが自分で悩み、そして——どんな形であれ自分自身の力で解決していかなければならない問題だ。諦めることも、忘れることも……或は全てを抱えていくことも。俺ができることは、何も無い。

……そうだろう？ 神に祈れないこの世界では——自分を救うことができるのは、自分だけだ」

「……」

だから、何もしなかった。

解決策を提示することは簡単だった……だが、それでは何の意味もない。

自分を救えるのは自分だけ——ある意味苛烈ともいえる潔さ。徹底したまでの自己完結。

……閉じた世界は、まるで……今を生きる人間たちの生き様、そのものにさえ、思えた。

そこで、いかにもヘルマンさんは男臭く笑う。

「だが、俺にでも出来ることはある。

……あの未熟なくせにお人好しな馬鹿共が、泣きたくなつた時に胸を貸してやれる。

……男の胸など、その程度の役にしか立たん」

「……」

「だが、女は違う」

ヘルマンさんは愛情さえ感じられるような声色で、続けていく。

「女の胸は『希望』だ。命を繋ぎ、育み癒すことができる未来への希望そのものだ……。今を生き抜くことしかできない、無力な俺たちはせめて……。何かを託すことしか出来ん。未来を生み出すことが出来るのは……。その時代を懸命に生きようとした人の意志だけだ。だから」

とん、と肩に分厚い手が置かれた。

「……堂々と胸を張れ」

私は潜在意識に呼びかける。

……悪い人じゃない……悪い、人じゃないんだ……そう……そう……
……だけど…………！

この世には、どうしても分かり合えない類の人間は居る様だ。

……でも、その一切ブレなかった凄い姿勢と完成しきった人生観だけは尊敬しても良い。

おそらく一生……いや、死んでも、共感はできないんだケドね。

「おでんでっせおでんでっせおでんでっせおでんでっせおでんでっせおでんでっせ
おでんでっせおでんでっせおでんでっせ」
「オリガああああああああああああ!!」

「勝った！ はい終了ー！」

神機兵護衛任務編

phase34 ストローマン

「分かっているとと思うけど。結論から言うと、あんま褒められた選択じゃないよ……………唯ちゃん」

「……………」

眼前に立つのは、私より3年長く生きてる男。

腹の立つことに、髪色から目の色まで相似比の様に酷似していやがる……………私の兄。

「……………何?」

「P-66を『勝手に』持ち出したこと、それを既存の神機使いに投与しようとしたこと。それで、あの防衛戦で撤退しなかったことだ」

「……………」

嫌味な位淡々と、分かりやすく言い聞かせるように『説明』してくる。

——兄が怒っていることは分かる。

身内に対して兄が怒ることは本当に珍しいけど……………結構本気で怒ってることは嫌という程伝わってきた。伊達に17年間も兄弟をやっていた訳じゃない。

「それを部外者のあなたに言われたくはない……………作戦外行動は現場の神機使いの各判断に任されているはず。いくら『優秀な』技官でも踏み込んで良い領域ではないと理解してる? それは局長から私たちに直接委任されてる権限。戦場に立ったことのない人に批評家気取

りで口出しされれば流石に不愉快なだけれど？」

「だが技官にでも作戦外行動の事について言及は許されている。じゃないと『素人』の現場の神機使いに任せて置いたら何されるか分かったもんじやないから。だから一技術官として言わせてもらおう。」

ハツキリ言う。もし、唯ちゃんがあのままK I Aした場合……P | 6 6 偏食因子を持ったまま死んだ場合、それをアラガミに捕食されたらどうするつもりだった？ 更に既存の神機に投与して不適合だったらどう責任とるつもりだった？」

「……」

心のどっかで分かっていたことだったけど——改めて他人の口から突き付けられると、かなりイラつと来る。

……特に、コイツに言われると。

「確かに唯ちゃんの言う通り技官はあくまで現場においてはサポート要員だ、戦場に出てアラガミと殴り合う力は持っていない。でも、こっちはこっちで頭と技術で日々戦っている。それを勝手な神機使いの『判断』だけで全部水の泡にはされたくない。」

一つの技術を開発するのだって、時間も資源も人でもかかっていることを理解してほしい。

不安なのは分かる。だけど、P | 6 6 を持っているならあそこで退いておくべきだった」

「……でもあの状況だと、私が助けに行くべきだった」

「切り捨てるっていう選択肢もあったはずだろ？」

「……」

「何もかもが甘い。副隊長としても、フライアの一員としても。判断が温かったんだよ。」

……唯ちゃんが優しい子だってことは、俺はよく知ってる。目

の前に居る人間を見捨てることなんて出来ない子だってことも……分かってるよ。

……だけど、その上で聞いてほしい。

今、唯ちゃんには責任のある立場にある。だから一番に考えるべきは『ブラッド』のこと、その次に『フライア』のことだ。その他のことは多少は切り捨てても、仲間の安全を考える義務がある……そうだろうか？」

……分かってる。

分かっては……いる。

だって……。

だって、私だって、一度は……そう考えた。

……考えて……しまった。

それは正論だ。恐らくは——本来軍属の人間が行うべきであろう、冷静で合理的な判断。

整然とした理念に従い、正しい判断を下すことこそが求められるべき能力なんだ、って……分かってはいる。けど……。

素直に受け入れることは、できなかった。

「……そうやって……」

思わず感情がこみあげてくる。

それは、すごく単純で子供じみた……怒りだった。
今まで何とか自分を覆っていた理性と言う名のメツキが剥がれ落ちるような音がする。

そう、私は——キレた。

「そうやって……いつもいつも……いっつつも私のこと馬鹿にして……!」

「……唯ちゃん……」

「分かってるよ!! そうだよね!! ああ、そうだよね! あなたから見たら……いつも特に迷いもなくすぐ即効で正解を引き当てる様な完璧超人からしたらさぞ馬鹿に見えるよね!? 一瞬で分かるような簡単なことにグダグダ言ってるんで挙句の果てに不正解選ぶような出来損ないのことなんてね!!」

「ちよ、ちよっと待って唯ちゃん! 別にお兄ちゃんは……」

「さぞ迷走! 爆走! 大混沌!! してるみたいに見えるんでしょ……!!」

「そこまで言っただア……!」

「言ってる!!」

「言ってるよ……!」

「言ってる……!!」

「言ってる……!!」

「言っただよコンチクショー!!」

「言っただよコンチクショー!!」

「はい論破……!」

「ゴリ押し論破ー!!」

「うっさい! ……特に努力もしてないクセに何でも出来る天才肌の奴に上から目線で正論説教されたって私の精神に1ミリたりとも響かないんだからー!! 基本スペック並以下の雑魚を舐めんなああー!!」

「それ以上大事な妹が自分を蔑むような言葉吐くと……流石にお兄ちゃんが泣くよ?! 泣いちゃうよ?!」

「御忠告大変ありがとうございました! 今後は頂いた御助言を最大限活用し、同じ失態を二度とやらないように誠心誠意努めるとともに、反省として活かさせて頂きます!!」

「そんな言い回し何処で覚えてきたのマイシスターー!!」

「クソ兄貴になんか……クソ兄貴になんかあ……! 私の気持ちはどうせ分かんないんだ馬鹿あああああ!!」

「ゆいちゃああああん!!」

「うるさあああい! 貴官なんかオウガテイルに下半身齧られて死んじゃえばいいんだあああ! ホモサピエンスのオス的な意味でー!!」

「下ネター!? ここで妹が下ネタの死ネターー!? しょうがない妹ね……だけど! 俺の中のY染色体が今貶されて喜んじやってるぜ妹よ!!」

「土に帰れー!!」

「ひどい!!」

「無に帰れー!!」

「ゆいちゃん……!」

「輪廻の輪に帰ってよ馬鹿あああああ!!」

「悪口のレパトリーが増えたね唯ちゃん……! お兄ちゃんは嬉し

いよー!! うわあああ……」

そうして、私は、兄から逃げた。



「聞きましたか香月さん……今の、あの、アホの言い分を」

「ええ、聞こえましたねレオーニさん……どーしてムキになっちゃうんだろーねー……基本的に唯ちゃんは素直なのにねー……」

「というか、ただの兄妹喧嘩じゃねーかよ……家でやれよ……」

「アレが遅れてきた反抗期ってヤツかな〜?」

「10代前半で終わらせとけよ常考……」

「崩れ落ちたね〜お兄さん……ああ、ふるふる震えてる……」

「妹に反抗されてそんなに精神的にキツかったのかよ……」

「何だかんだで馬鹿兄妹〜?」

「そう、あいつらは馬鹿兄妹……。妹馬鹿な兄貴と、本物の馬鹿の妹という地球の悪戯と奇跡のもたらした驚異のクソコンビだ。だからさー? そんな自分責めることないと思うよー……?」

「そうだよ〜元気出して〜? ……ねー? シエルちゃんー?」

「……」

見るからに落ち込んだシエルがおでんパンを両手で抱えこんでしよんぼり……としていた。

絶妙な距離感を保ったまま、少女は純白の背中を向けている。

ガツクリと頭が垂れたまま。

「あなたは悪くない」

「駄目だナナ……ソレ、カップル限定の攻略法……」

「えー? そうかなあ〜?」

「なあ、シエル。ホントにお前は悪くないよ……あの時点じゃあのジュリウスでさえゴーサイン出してたじゃねーか……? なー? 良くやった方だと思う! 流石だよなーやつぱ『エリートクラス』はさー! だよな、ナナ?!」

「そ、そそそだよー! 私たちの初陣なんかよっか全然よかったよー! 単騎敵中突破とか……」

「言うな……」

「……」

イマイチ声が届いていない。

「アレは全部アーサーのせいだから。アイツが悪いから。レーダーイカレてたのだから。実はアイツ薄々気づいてたから。それでも出撃しやがったアイツの所為だから」

「えー……どうしたの先輩？ ネガティブキャンペーン？」

「英国系の二枚舌なんか信用するな利用されるだけされた後ポロ雑巾の如く投げ捨てられる」

「やだー怖いね〜」

「だから予測できなかったのかもしれないって……、だからーシエルが悪かった訳じゃないよ……な？」

「そうだよシエルちゃん！ ロミオ先輩は信じてるって言うてるよ！」

「………ナナ？」

「ロミオ先輩は!! 信じてるって！ 言ってるよ!!」

「ナナあ!？」

「何？」

お前は信じてないのかよ！ やだなー、信じてるに決まってるでしょー……可能な限りね！ という仲の良さそうな会話をBGMにシエルはやはり落ち込んでいた。

今まで積み上げてきたものを否定されたような気分だった。

もつと、もつと、皆の役に立ちたい……と願っているのに、結局自分が学んできたことは机上の空論に過ぎなかったのか……と。

結局、自分の根源にあったものは何だったのか。

マグノリアIIコンパスで己の学んできたこととは——何だったのか。

あの養護施設では一流の教育を施して貰った、職業軍人から、また

は対アラガミ戦のエキスパートである退役神機使いから、時には科学者さえもが教員について。

それは、何の為だったのか。

全てはアラガミを根絶させる為、一流の戦闘員になるため、ひいては神機使いを教導していく最先端部隊の戦術士となるため……。

様々な思いが脳裏をかすめていくが、どれも上滑りの言葉の様に思えた。

ただ一つ、胸の内に確かにあったのは。

誰かに必要とされたいという……小さくてささやかな、願い。



本日の天候——空一つない、曇天。

特に意味もなく見上げた空は基本、いつだって曇っているような気がする。

……まあ、雲が赤くないだけ、まだマシな方かな……と思い直す。隊長じゃないけど、気分が落ち込んだときにはここに来ると精神衛生にいい。

……本当に、綺麗な場所だし。

という、人類の叡智と美意識の粋を集めた場所——フライア最上フロア『庭園』で。

「55……56……57……58……よし、問題ない」

「……………隊長……………」

「誰だ!? ……ああ……………お前か」

彼は一体何を数えていたのでしょうか……………。
……………多分ラケル先生の画像。

「どうかしたのか? 唯」

「……………いえ……………すみません……………お邪魔しました……………」

「いいさ、気にするな。それより、何かあったのか?」

「……………」

「……………席を外そうか?」

「いえ……………」

出ていくのはこっちの方です——と言いかけて、辞めた。

つい忘れがちになるが隊長はれっきとした上官……………それに先に居た人を追い出すわけにもいかない。

それだけの理由だった。

……………それだけの理由のハズ……………だった。

けど、口が勝手に動く。

「……………ここに居て……………ください……………」

「……………分かった」

出会ったときと同じ、木の下に並んで腰を下ろす。

何から話せばいいのか、何処から話すべきなのか……とにかく、何か話したかった。

聞いてほしかった。

今の自分の気持ちを言語化すれば……心の整理をつけることができるんじゃないか……と考えていた。

ジュリウス隊長は黙っている。

「……前の戦闘……感応種が出現したって聞いた時……私は……」

「……ああ」

「救援に行きました……自分が行かなくちゃ、って思ったから。」

状況的にもあの距離で救援に行けたのはシエルちゃんか私だけだったはずです……。

……でも……ハッキリ言って、私はあの時迷いました………迷いまくってました。

……シエルちゃんや……『仲間』を危険に晒してまで……助けに行くべきなのか、って……」

「……そうだな。だが、それは副隊長として……仲間を慮った結果、だろう？ ……何も恥じることはない」

「………私は……」

この先は言いたくなかった。

幻滅されるかもしれない——という恐怖があった。

いや、今更色々醜態を晒しまくっているから幻滅も何もない………とは思ってはいたけれど……。

……嫌われたくなかった。

………この人に嫌われることが怖かった。

だから、少しだけ言いよどむ。

……それでも、ちゃんと言う、と決めた。
自分の気持ちと真摯に向き合う為に。

「……もつと……見下げ果てたことを……考えてたんです。……
本当は。」

私たち『第三世代』が旧型の……『第一世代』を助けに行く必要が
あるのか………つて」

「……」

「我ながら最悪だつて分かってます……一瞬だけ、本当に一瞬だけ
……安全策を取ろう、つて思った。」

ここでオリガちゃんを見捨てて逃げても……戦術的な撤退が十分
認められる、と。感応種はまた調査してから討伐すればいい……あの
状況下で下手に戦力を分散して、ブラッド隊が全滅したらそれこそ人
類にとつての損失なんじゃないか………そう………考えてしまつた
んです」

自然にキツく拳を握り込む。

鳥肌が立っていることが分かってしまった——どこかふわふわ、
とした地に足がついていないような感覚が足を伝う。

「保身の為とか、自分だけが助かりたいからとかそんなんじゃない
………本当に、心の底からそう思ってしまったんです。あの時私は……

私は……！」

「……」

「自分も含めて、全員を——『人間』として考えることが……できなかった。

まるでモノか道具の一部の様にしか考えることができなかった。皆……ロシア支部の人も、エミールさんも、ロミオ先輩やナナちゃんやシエルちゃんですらも……一瞬だけ、皆を数字みたいに見えた。数値でしか見れなかった。……それが……心底嫌になったんです……そんなことしか考えられなかった自分が」

「……」

……兄に言われなくても分かっている。

きつと兄なら、こんな下らない葛藤はしない。迷いがあっても、本的にはバツサリ行くようなヤツだから。

でも、私は私だ。兄じゃない……兄には成れないし……遠く及ばない。

だから……本心を見透かされると腹が立った。

それが本当に人間として正しいのか？ ……という疑念を忘れたかった。逃げたかった……のに。

嫌でも向き合え——と突き付けられたから。

「……主旨は理解した。唯……副隊長としては、合格だ」

「………は………はいいい?!?!」

「だからソレで正解、ということだ。数ヶ月前までお前は非戦闘員だったにも関わらず、急な実践投入へのプレッシャーを乗り越えた、さらには重圧に対する責任感も理解している……更には自分たちが何者であるか、も客観視できる様だしな。……悪くない」

「……え……エエー……!?!」

「見直したぞ、副隊長」

「……………」

……まさかのベタ誉め……だった。

そこはお前は間違っている一択でしょ!? 見下げ果てたクズだと罵倒するフェイズでしょう!?

お前は！ 間違っていると!! 言ってほしかった人生でした！

「それを、俺に隠すことなく打ち明けたことも含めて——な」

「……………!!」

精神が呼吸するの止めたかと思った。

急ブレーキは辞めて頂きたい。マジで辞めて欲しかった。

「お前が内面で葛藤するタイプの間人だということは、とうの昔に解っているさ……。やっと素直に打ち明ける気になっただけで合格点だ」

「そんなに低かったんですか私の評価……」

「ブラッド最低値だった」

「あー……妥当だと思いますー……」

じゃあ何でそんなヤツ副隊長に任命しようとしたんだこの人……!?
いくら危機好き人間でもそれは危なすぎる人事だろ……。イマ
イチ隊長と言う人が理解できない。

やっぱサツパリ分かんねえわこの人。

「数字でしか見れなかった……ということとは、一面では冷静に判断し
た——と評価できる。だが、ある意味ソレは危険な素質でもある。

だから、絶対に忘れるな……俺達『ゴツドイーター』は、人間なん
だ」

「……はい……分かってます」

「……ならいい。それに……その件に関してお前が悩むことはない。
忘れたのか？ 最終的に判断を下したのは俺だ」

「……ソウデシタ……」

判断丸投げしたんです。すいませんでした。

「だからお前は自分の責任を感じることはない、いいな？」

「……」

「分かったのか」

「は……はい……」



「と、いう訳で……妹と仲直りしました!! 神威ヒロキがお送りしまーす! フライア開発新技術!! その名前も……『すーきいーる・いんすとおーるうーー』!!」
「真面目にやって。じゃなきや帰って」

どこぞの青狸みたいな紹介は辞めて頂きたい。
それに、別に仲直りした訳じゃない……兄と私の間には決して浅くない溝が存在しているのだ……!

「……と、最愛の妹に怒られたので真面目にやります。」

オラクル細胞が『自ら思考し、捕食する』という細胞だということ
は最早周知の事実であり、つい先日我らがゴッデス、ラケル・クラウ
ディウス博士がとある犠牲の上で精神感応という怖い事で教えたく
れたりしましたよね……—はい！ですのぞー!! 恐らくはココ
に集っておられる皆様ガタガタにとつちや常識というコトで宜しい
カナーと私は考えます。

なので以前から考えられておりました。オラクル細胞のその保持
性……平たく言うと『形状記憶力』を応用した新技術です、こちらを
ご覧ください」

兄がスクリーンに映像を投影。

何か装置……つぽいものだと思った。

そのあと、専門用語だらけな色々良く分からない説明が入る……。

「——異常で理論説明は終了になります。次にコレに関してのメリツ
トですが——。今現在でも周囲に拡散しているであろう遺留品神機
——現場の言い方だと『遺された神機』の再利用が可能になり今まさ
に使われている『生きている』神機の強化が容易かつ低コストで可能
となる、ということです……勿論、我らが実践部隊『ブラッド』にも
例外じゃあないぜ!! そう唯ちゃんの為なら!!」

「真面目にやれって……私言っただよね?」

「調子乗り過ぎてマシタ……」

「神威技術中尉、少し質問が」

「はいどうぞー!」

……技術……中尉……? だと……!?

「……のこじ……その『遺された神機』なのですが……それらのすべて
はP—53 適合型です。旧型新型の違いはあるのでしようが……『ブ

ラッド』の持つP―66偏食因子とは適性がない、のではありませんか!？」

「ふっははははあー! 心配ナツシングですな!! その問題はもう解決できておりまあーす!! うちの唯ちゃん! うちの唯ちゃん!!」

「……流石に、キレるよ……?」

「えー怒られたくないので手短にー……前作戦で散々問題視されたことですが結果論から言えば『P―66型とP―53型は個体差があるとはいえある程度の親和性がある』ということは実戦証明済みです。ヨカツタネー」

ざわざわわーと、一同騒然状態な研究員の皆様。

何故かこつちをチラチラ見る人なんかもチラホラ居る。

「よつてこの新技術『スキル・インストール』に於いて殆ど事故どころか失敗さえも事前検査で確認することで極力抑えられると考えられます」

「……な、成る程……」

「そして、神機兵の兵装も……例外ではありません」
「……!!」

神機兵制作チームが身を乗り出す。

有人、無人に限らず……神機兵を強化できる。

しかも、実際戦闘にだすことなく……安全に、即戦力として練り上げることができる……。

……喉からお出てが出る程欲しい技術ですよねー……。

……もう分かってたよ最初っからな! ケツ。

「以上でスキル・インストールの理論発表は終了です。あとは実際に

やってみるのみ!! れっつごー!」

「……やっぱウザい……ウザい! ウザすぎる!! 帰れ馬鹿あああ
!!」

「ふっ……気づいたんだよマイシスター……! 唯ちゃんの居る場所
が俺の!! 帰る場所なんだあああ!!」

「地獄っていう故郷に帰ってクソ兄貴!! どんな地獄の底だつて……
あんたが傍に居てくれるよりかマシなんだ!」

「親子そろって同じこと言いやがって!。同じこと母さんにも言われ
たぜー!」

「少しは懲りろ!!」

「断る!!」

神よ……もうこの際アラガミでいいから神よ……。

どうか、この腐れ兄貴に鉄槌を。

……私は、その時、かなり本気で……そう祈っていた。

……………局長室に呼ばれた。

今度は私が何をしたと言うのだ……また怒られるのか……いつまで怒られなければならないのだ……

と戦々恐々としていた私だったが、呼ばれたのはシエルちゃんと隊長も一緒だという。

3人揃って説教!? —— という、想像もできないこともないが、一応役職だけ考えたと実動部隊の隊長と副隊長、そして参謀。……今から何が始まるのだろうか。……ブリーフィング?

扉の前に立つと、男女が言い争う声が聞こえてきた。

今すぐには入りづらい、ので、隊長の判断でドア前で待機する。

「レア博士……神機兵の無人運用のテストに、どうして反対なさるのです?」

「反対ではなく、時期尚早と申し上げているだけです……グレム局長も、なぜ許可を出したのです?」

「有人神機兵の運用が非人道的だと、本部の連中が難色を示しとるんだ。退役神機使いの連中もそれに同調しとるようだ……ここである程度の運用実績がないと神機兵計画自体の縮小も免れんのだよ……。レア博士には申し訳ないが、ここは私に免じて……な?」

「——無人運用なんて、まだ一度も制御できていないのに……ですか?」

「シユ、シユミレートでは正常動作確認できているのですよ……!」

「実践はシユミレーションとは違います……果たして本当に上手く行くのかどうか」

「しゅ……………シユミレート段階ですらテストパイロットを意識不明に追い込む有人型よりかはいくらか人道性と安全性という面では保障できると思うんですがねえ……………」

「何ですって……………薄毛眼鏡の癖に知ったような口を！」

「か、かかか髪の話は今関係ないではアリマセンカ!? やめて頂きたい! やめて頂きたい!」

「毛根も根性もないハゲは黙っていなさい! グレム局長、もう一度ご再考を! このような髪のない人間の作った無人ドローンの実践投入が結果を出せるとは毛頭思いません! 毛髪もありません! 育毛余地もない!」

「じ、自分が女だからって……………! ふ、フサフサだからって……………! いくら知的で可憐でホタルの様に気高いラケル先生の身内とて容赦はしない……………雀りますぞレア博士!」

「やめたまえ!! クジヨウ君やめたまえ!! 女に手を上げるな!! それでも貴様は男かこの馬鹿モンがああ……………」

「うわああああん!」

「そしてレア博士! あまり髪髪言うもんじゃない!! 髪のないこの世界にも救いは必要なのだよ!」

「……………申し訳ありません……………失礼いたします!」

「本当失礼なお方ですよ!! 髪がないからって……………まだ私はハゲてはいないのに……………」

「クジヨウ君……………諦め給え……………すべては時間の問題だ!」

「それがこの世界の定めというのなら……………な、なんと残酷な……………」

……………。

……………入り辛え……………!

「ブラッド隊長、ジュリウス・ヴィスコンティ、以下2名入ります!」

行くのですか隊長……。迷いはないのですか隊長……。

と、踏み入れた部屋は非常に住み心地の良さそうな部屋であり。壁には大量に勲章が並べ掛けてあった。

床には赤い絨毯。そしてフェンリルのエンブレム、フライアの紋章……。その他色々がいくつも飾ってある。

今は曇った空が見える大きな窓を背後に、グレムスロワ局長が堂々と座っておられた。

その傍らには顔色の悪い白衣の中年男性。

広い額。薄い髪。

確か前に温泉で会った……。クジヨウ博士、とかいう研究職員さん。……と。

「なんで貴官まで居るんでしょうかねえ……。？ 神威技官……」

「フツ……。嫌だなあ〜、モシカシテ忘れちゃってるのー？ ああ愛しの我が妹よ……。お兄ちゃんは神機兵の兵装チームの一員なのだよ！ つまり、今回の件にも無関係って訳じゃあないっ！」

「帰って」

「副隊長……。今は私語を慎め」

「兄妹仲が良いのは構わんが、時と場合を選べんのか貴様ら」

……。W上司に怒られた。何という理不尽か。これも全部兄の所為だ。

私は悪くないから謝らない。

「既にラケル先生から聴いているとは思いますが……。神機兵の無人運用テ

スト及び、その護衛をしてほしい。詳しくは……あー……クジョウ君
「はい、えーっと……会……ジュリウスさんと、シエルさんは確かラケ
ル博士とレア博士の……」

言葉に詰まるクジョウ博士の言い分を察したらしい隊長が続ける。

「ええ、我々は両博士に育てて頂きました。ですので、テスト段階の神
機兵に搭乗した経験もあります」

「ああ！ ならば話が早い。要するに神機兵が戦う様子を観察しつ
つ、万が一の時には守って欲しいのです。なるべく一対一で神機兵と
アラガミが戦う状況を作りたいので、まずは周辺エリアのアラガミを
一掃していただきます」

話を聞いた隊長とシエルちゃんが僅かに眉を顰める。

「……露払いをしろ、という事ですか？」

「流石はブラッド隊長さん。……頭の回転が早くて助かりますね、
チーフ？」

「ええ、その通りですよ！」

研究職な男二人は、喜色を張り付けた顔をしていた……が、隊長の
ほうの表情は、苦い。

何か気に障るようなことがあるのだろうか、と一抹の不安を覚え
る。

……それは、シエルちゃんも同じようだった。鉄面皮を被って無表
情を装っていることは分かるが、その目はどこか晴れることがない。

「そういうことだ。今回の主役はあくまでも神機兵だ、ということ
肝に銘じておけ……いいな、主役は神機兵だぞ？ 貴様らではないの
だぞ?? くれぐれも余計なことはするなよ？ 絶対するなよ?……
特に神威」

「俺スカー? 何スカー?」

「貴様ではない！ 妹神威！」

「局長！ お言葉ですがそのクソ野郎と私を同列に扱わないで頂けませんか!？」

「そんなこと言われるとお兄ちゃん寂しー」

「うっさい帰れえ！」

「ややこしいぞ貴様らあ！」

机दान！

局長の鉄拳槌が打ち下ろされた。

「ご、ごめんなさい……………」

「面目ないです……………」

怒られると萎縮します。

昔からそうです……………。

「いいな………… 『ブラッド副隊長』…………？ 貴様は再三否定するようだが、研究職に家族が居る以上………… ブラッドの誰よりもよく理解している筈だ。神機兵1体1体にはかなりの費用がかかっているんだ。腕の1本でもへし折ってみろ。莫大な修理費を請求してやる……………」

「そんなあ!？ …… 具体的には幾ら位……………」

企業秘密につき伏字。

だが、本当にかかなりの額だった。

「無理です！ 私そんな払えません……………」

「だから何も余計なことはするな!! そして神機兵を守り抜け! で、実績を上げろ!!」

「何という無茶なことを!？」

「貴様ならばできる!!」

「ここで応援!？ まさかの応援!？」

「唯ちゃんなら出来る！」

「うるせえ！ 兄貴は黙ってハゲてろ！」

「髪の話は今関係ないじゃありませんか!!」

「イチイチ喰いついてこないで下さいい……………」——大丈夫、九条先生はハゲじゃないんですから……………ちよつと薄くたって……………私、全然気にしませんよ? だって博士は博士なんですから……………」

「……………えっ?」

「どうしたのかねクジヨウ君、何か嬉しそうだなクジヨウ君……………頬を染めるんじゃないクジヨウ君!」

「……………ブチ殺すぞ荒地が……………」

「何ですか、べ、べつに嬉しくなんかいいですから勘違いしな……………
いいいい!! ど、どうしたのですか神威君!! い、イキナリ私に襲い掛かってくるなんてえ!? あ、あああああ! あ! あ! あ! 辞めてください! そんな乱暴にしたら髪があ……………頭がああ! いやああああ!! 抜かないでえええええ!!」

「……………」
ぶちぶちぶちい! と無言のブツチンと共に、若干の頭皮と薄い髪がまばらに舞った。

という、茶番劇。クジヨウ先生のみ人生の悲劇に対し。隊長の表情は晴れない。

むしろ険しい。

「……………了解しました。クジヨウ博士、後程ブリーフィングで」

「ひつく……………ぐすつ……………ひどい……………ひどい……………こんな話って……………うろうう……………」

「では後程」

……………と、恐らくは何かしこりを残したまま——話は終わってしまった。

……………何か解消しきれしていない、何かを抱え込んだまま。



隊長から各員へ今の委細を伝えるべく。

皆して庭園に召集されていた。

「まず、本日付けで、重体につき一時除隊扱いになっていたブラッド隊員、ギルバート・マクレインが原隊復帰した。ギル。死の淵からよく帰ってきた、その幸運と精神力に敬意を表する」

「……ああ、ギルバート・マクレイン、本日より復帰する……だが……」

何故か歯切れが悪いマクレイン氏。
浮足立つ我らブラッド隊員。

「俺は……何か……やらかしたのか……？ ……ここ数日間の、
記憶がないんだ……」

「気にするな大したことじゃない」

「ア……アルツハイマーじゃねーの？ ……ははっ……幾ら何でも若
年性すぎるって……はははは……」

「……お前ら何か隠してねえか？」

「ギルはその……しばらく、魔王に……そう、正義の魔王に体を乗っ取
られていたのです……魔王が……」

「悪運強いね……あの状況から生還するなんて凄いや……腕が
鳴っちゃうんだから……」

「……本当に、何か隠してないか？」

「……ギルさん……」

疑わし気なギルさんは一体どこまで記憶が抜け落ちているのだろ
う……。

確か、ラケル先生がのたまうには……。一部記憶障害が発生するか
もしれない、と言われていた。

……。

とにかく、今は——だ。

「ギルさん、過ぎ去った過去はもう戻ってきませんし、戻れません。二
度と……。あの時に戻れたら、って人間後悔することはあると思いま
す。……でも、だとしても、私たちは……未来に向かってでしか、進
むことができない……」

「……副隊長」

「……未来に向かってしか、進めないんです」

「……………副隊長……………」

「進めないんです」

「……そんなもんで誤魔化されるとでも……」

「進めないんですよ……ギルさん。いつまでも終わったことに固執しない!! はい、隊長!」

「……………おい」

「次のブラッドの作戦行動は神機兵護衛の任務になる、無人型神機兵のテストを行う。中型種と無人型が1体1で戦える状況の構築……そのための護衛と、周辺の脅威の一掃の命令を受けた。……各員、神機兵の資料に目を通しておく様に」

「……………はあ!? 何だよそれ!?!」

「……………何かねく」

「……………」

「え……………? ちょ……………皆、どうしちゃったの……………?」

ブラッドの一同の不満タラタラの声上がる。

まさかの展開に驚く私。

ナナちゃんはともかくとして……ロミオ先輩やミスター・お人好しまでもがカチンと来たようだ。

……………え? 何で? 皆なんで……………?

隊長とシエルちゃんも溜飲が下ってないみたい……………だ。

「皆不満があるなら……言ってくれないと……………」

「……………ねえ、唯ちゃんは何とも思わないの?」

「何ともって……………何を?」

「……………はあく……………やっぱさ、お前何か『違う』よなー……………まあしろうが

ない、か」

「え……エエー……そうなんですか先輩……」

身に覚えのないデイスられが発生している。

……一体、何がいけないと言うのか……。

「率直に感想を口にするんなら……ふぎけんな、としか言えないな……。あんな木偶のお守りをするなんて冗談にしても笑えねえ……そんなものに投資する余力があるんなら……」

「ちよ、ちよつと待つて下さい！ だって神機兵の開発は今、必要に迫られているんですよ……？ 貴方だって見てきたハズじゃないですか……」

「……」

ギルさんが黙りこくる。

そう、実際どれ程、神機兵が望まれているのか——ブラッドのみんなで見えてきたハズだ。

フェンリルから受け入れを拒否された難民が……どんな手段を使つて『自衛』せざるを得ないのか。

技術が遅れている支部が……どれ程の苦境を戦わなければならなかったのか。

あの難民たちや、ロシア支部での戦いで見てきたハズだ。

そして、今でも彼らの闘いは……まだ終わっていない。

神機兵を見て思ったのは、『コレ』が配備できれば、あの人達だって……何に縋らなくても自衛することができる。ロシア支部だって、数が少ない神機使いに無理をさせなくて済む。

だから、有人にしろ無人にしろ早く完成させるべきなんじゃないのか……。

……それが、私たちが人類の為に果たすべき義務なんじゃないの

か、と思っていた……。

……のは、どうやら私だけだったらしい。

「……副隊長、逆に聞く。……ならアンタはコレを1体作る資源で……何台の神機ができると思う？」

「……………えっ？」

ギルさんの口から出たのは、至極当たり前のこと。
さつき聞かされた神機兵の値段が——思いだされる。

「詳細は分からないが、俺が見る限り……人工コアが最低でも3個使用されている。神機の同一とは限らないと思うが材料は似たようなもんだろ。だったらその分見積もって3台分の神機が製造できる——
—だろ？ 3台神機が出来れば小隊が1つできる……小さい支部1個なら十分守っていける程度の、な……」

「……で、でも……」

ギルさんの理論は、確かに自信に裏打ちされていた。

……まるで、見てきた、とでも言うみたいな口振り。もしかしたら……5年の神機使い歴の中で、そういう場所に居た経験があるのかも
しれない……と憶測してみる。

「前に行ったロシア支部だってそうだ。あいつらが必死こいてやつと直した装甲壁……コイツが1体解体するだけで、同じ修復ができる」
「……………」

「唯、悪いけど今回だけはオレもゴリラに賛成。……神機兵ってさ、アラガミを倒すために作られた起動兵器なんだろ？ それをオレ達を守るって何かなあ……本末転倒って感じがする。まるで……神機使いより神機兵の方が大事だって言われてるみたいない気分になるよ……やっつてらんないよな。オレ達だって、ここまで来るのに『それなり』に苦勞してきたんだぜー？」

「ロミオ先輩まで……」

「当たり前だよ、私たち、そんなもの守るためにゴツドイーターになった訳じゃないんだから」

「……」

皆はソレで納得いつていなかったのか……とここに来てやっと理解が及んだ。

隊長とシエルちゃんも同じなんだろう。

皆、現実を分かっている……私が知らない、世界のことを。

神機使いとしての誇り。ソレが……私には、欠けていた。

多分、この意識の差はどうにもならない。

……だって、私は今までの人生の中に於いて一瞬だって「神機使いになろう」と……考えたことなど無かったのだから。自慢ではないが、その分……努力してきたこともない。積み上げてきた知識も、訓練も、今必死になって皆に追いつくために研鑽している真っ最中だ。今までラクをしてきた分のツケなんだ——と自分自身に言い聞かせてみる。

「……それでも私は、やるべきだと思います」

「そりゃ任務だから……拒否権ねーよオレ達に」

「そうじゃない……っていうかロミオ先輩そう腐らないで聞いてください」

「何?」

「手短にしてね」

「……」

「何この期待値ゼロ感! ……ま、まあ良いですけどね! 期待されない方が気楽ですから!」

何かが盛大に空ぶった。

「……皆の言い分は分かりました。納得いかないことも、色々無駄遣いしているってことも……。多分、ここまで積み上げてきた苦労や努力を否定されている気になっている……。って言うのも分からなくもありません……。スミマセン、実際よく分かりませんけど」

「うん！ 流石唯ちゃん！ よく言ったね〜！ ……覚悟、できてる？」

「待てよナナ、言わせてやれ……ソレがコイツの遺言になる」

「……まあ、アンタが神機使いとしての意識が薄いのは仕方ないことだ……むしろつい数ヶ月前まで『内側育ち』の民間人だったのに、良くやってる方だろ。その辺、俺はもつと誇つていいと考えるがな」

真逆な反応の違いが実に素晴らしい部隊……。

「でも………何もしなければ、何も変えられない」

「……そりやな………分かってるけど」

「……まーね」

「……！」

「今のままで良い訳がないんです。……最近、私にもやつと分かってきたんです。正直……此処に来るまでアラガミなんか見たコトなんか無かった分際で何言つてんだって思われるかもですけど……。

何かを変える力があるのに、何も変えようとしなないことは『罪』です。その為に……多少の矛盾や不条理、犠牲にさえ目を瞑つてでも、私たちは成し遂げるべき———なんだと思う」

「……」

「……」

「……」

「何か言ってください!!」

無言はやめて。

マジやめて。

「唯ってそんなヤツだったんだなー意外ー」

「オラクル細胞に脳みそ変質させられてるんじゃない? どこぞのゴリ仮面みたいに」

「……は? 一体何を言って……仮面……? うっ……頭が……」

「ほ、ほらギル落ち着けよなー」。仮面とか何だよ本当ウケるわー……アニメ見過ぎだよナナ」

「ねえねえギルー? 思い出してきた? マスク・ド・ゴリ……」
「やめろナナあ!!」

「私……私今……今……! ありったけの知恵を絞ってソレっぽいこと言ったのに……! 言ったのに……この部隊はあ……!!」

「副隊長! 私はその……とても良かったとおもいます!」

「……小学生並の感想ありがとうね……シエルちゃん」
「も……」

くるり、と振り返ったニット帽先輩が、何か言いたそうにしている。
……フォローを入れてくれるのか、優しいなあ……ははっ……。

「えー……何かなあ……唯って意外と強い奴だったんだな、ってさ……うん」

「意外と!? ……強い?!?」

ナニヲイツテルのデスカこのパイセンは。

「悪く言うと、意外とドライで薄情なヤツだったんだなー」

「悪く言う意味は何ですか……!?!」

「何となくー?」

「特に意味のない悪意……!?!」

「落ち着けて。そんな風を取るなよ……。たださ、オレが言いたいのは……」

ロミオ先輩の顔が、真面目になる。

……彼にしては珍しく、どこか真剣味を帯びた——なのに、少しだけ悲しそうな、今にも崩れ落ちてしまいそうな表情だった。

「……非人道的だ、って言ってるわりには人間を盾にしたり……何かさ、軽く見られてる気がするんだよ……人の命ってヤツが。もし……こんな段階でさえ簡単に犠牲を払うことを厭わないんなら、この先にはもつと……人間を蔑ろにする何か……起こるかもしれないじゃん?」

……オレはそうゆうの嫌だな」

「……まっさかー……考えすぎですよー先輩」

「ロミオ先輩が真面目!」

「……お前ら……! お前らなあ……! もういいよ!! 人の為の自衛兵器なら人犠牲にするのって何か違うんじゃないの、ってオレは言いたかっただけだよ!!」

「だって無人型ですよ? 起らないでしょそんなの」

「うーん……難しいこと考えるの苦手ー」

「……」

「……」

無言の先輩とギルさんだった。

先輩は何かあきれ顔で、ギルさんの方は……何か考えている様だった。

……どうせロクな事じゃないだろう。

「各員、思う所はあるだろう、だが現在有人神機兵に対し本部が難色を示している以上、無人神機兵で実績を上げるしかない。さもなければ……………この機関の存在意義自体も疑問視されかねない」
「うっ……………」

身に覚えがあり過ぎる……………」

勝手に壁外居住民の救助だとか……………その後のロシア支部だとか……………一応、感応種討伐に成功はしたけど、コアは私たちがゴタゴタしている内にアーサーさんがちゃっかり持ってっちゃったし……………」

拳句の果てにはP-66偏食因子持ち出しからの、勝手な強制投与……………」

……………」

……………そろそろ、グレム局長だけじゃなくて本部にも怒られる頃合いだろうなあ〜とは予測していましたがよええはい。半分私の所為ですねそうですね……………」

こんだだけ好き勝手な行動ばかり取ってれば……………流石の本部も考えるだろう……………コイツら神機兵真面目に開発する気あんの？……………」

「だが、副隊長の言うことにも一理ある。この計画が成功した暁には、各サテライトや技術的に後れを取っている支部に神機兵を派遣することが可能になる。今はまだ理想の段階だろうが……………その為には今、我々が可能なことを、ひとつずつ叶えていくしかない」

「そ、ソレです隊長！」

「俺という個人としても、神機兵はレア博士の宿願だ。知っての通り、マグノリアIIコンパス出身としては……………レア博士には恩がある。彼女の夢をここで終わらせたくはない。……………そうだな？ シエル？」

「……………はい、レア博士には……………お世話になりましたから」

「……………そうだねー、それなら頑張らなきゃ、つてなるな」

「まあ……………うん、だよな……………そうだねーあんま深く考えないでレア博士の為に考えりゃいいかー!」

嘘の様に同調していくマグノリア出身者……………。

……………。

これが……………人望の、差……………。

「有用性を疑われているならば……………結果を叩きつけるまで」

「つ、強気……………」

「当然だ。疑うことしか知らない本部の低能共に分からせてやる……………
我々の有用性を」

やはり……………隊長は強気だった。

……………前回の不機嫌を引きずっているからか、それとも……………何か私たちに開示されていない情報も隊長だけは知っているから、なのか……………。

ガラス外に広がる——見上げた空は、鉛の色。

今にも崩れ落ちそうな程……………淀んでいた。

phase 36 ペトルーシユカ

「と、言ったモノノー……申し訳ありません。本当にすみません。現状開発じや実戦投入なんか無理でした……けども！ここで退くわけにはいかねーよなあー！ という訳でー！！」

「……実動部隊の『対感応種討伐特殊部隊』に……アラガミのコアを……持つてこい、と……？」

「……お気持ちは理解しますけど、お、抑えて下さい……」

「……研究方が……如何に我々神機使いを、いかなる視点で見ているか、がコレでもか、という程……よく分かる事象、ですね……」「い、いえ決して……軽視している訳ではありません……申し訳ありません……こちらの不手際で……はい……」

「……いいえ、貴官の責任を言及している訳ではありません。どうか誤解なさらずに。これも任務です不服など言おうハズもありません。……ですが、出撃ごとに我々神機使いが命を削っているのだという現実をお忘れ頂いては困ります。」

以後はこのような事は極力抑える努力はして頂けますでしょうか？

「……断言はできませんが……努力は……します……」

「努力……『は』する、ですか……」

「ぜ、全力で頑張ります……」

「落ち着け、副隊長」

「気持ちには分かるけど抑えて。唯ちゃん」

「何でお前身内に対して必要以上に厳しいの？」

「副隊長……私が言うのもアレですが……幾ら何でも言い過ぎなのは……？」

「仲良い兄妹だな。身内がフライアに居て良かったじゃねえか、副隊長」

「皆さんコイツをあんまり甘やかさない!! どこまでも調子乗って付け上がりますよこのクソ兄は!!」

「まあ……お前の兄貴だし……? 調子乗るって所は流石血のつながった兄妹——」

「ロミオ先輩……何か言いましたアア!？」

「い、言っていない言っていない! ……つたく……普段大人しい癖に何なんだよアイツ……」

「分かるよ。初等部に居たよね。普段暗いくせに急にキレて、クラスの雰囲気極寒へと落とし込むタイプ? 怖いね」

「……も……」

「香月さん印象操作上手だね。だけどうちの子はそんな子じゃないよー! 唯ちゃんは、人一倍臆病だけど、優しい子だから仲良くしてやってな!」

「報酬次第で、らじやー!」

「了解!」

「シエル。それは命令じゃないから従わなくていいんだからな!」

「……そうなのですか……?」

「五月蠅い! 黙ってるクソ兄貴! ナナちゃんもシエルちゃんもこんなヤツと必要以上の会話をしなくていいんだからね! 無理しないでいいよー!」

「え〜？ 私はねー。唯ちゃんとお話してるよりかは遥かに有意義だと思っよつ？」

「その……その……副隊長私は……私は……！」

「茶番と私語も大概にしろ貴様等。 神威技官、情報共有を続けて頂きたい」

「「……すみませんでした」」

クソ兄貴が……。またテメエのせいで隊長に怒られたぞコラ……。もう絶対許さない。

いつか殺す。吊るす……。

という、煮えたぎる殺意を押し込めながら表面上は気にしてないよー、ハシヤイじやつてごめんなさいねーという顔面を構築。

多分、ナナちゃんとロミオ先輩も同じ演技を実演中。

「あー……じゃあ、まず言い訳から……聞いて下さい」

「言い訳？ 別名：命乞いってヤツかな〜？」

「聞く必要ないよ。殺そう」

「……懺悔の用意は、出来ていますか？」

「女の子たち……清々しい程聞く気ないねー！ だが、それがいい……。でも聞いてくれな……。あのねー！」

……今回実戦投入ができない大きな原因の一つとしては、関節部位のアクチュエータが正常稼働していないということが一番デカイのです。だが、人工知能……及び神機兵用アーティフィシャルCNS-αタイプの電気信号パルスやその受容体には異常はない。問題となつているのは、その伝達体の補助である液体触媒の不足によるものです。

この液体触媒はアラガミエキスって呼ばれているアラガミから採取できる液化オラクル凝縮体からしか精製できません。ので持つてきてもらえると非常に助かりますって言うか無きやできない。本部や各支部に催促することもできるけど、時間がない。すぐ欲しい。じやなきや神機兵テスト自体を延期せざるを得ない。……そしたら、本部にもっともつと目を付けられる最悪怖い監視員とか送られてくる可能性が微粒子レベルに存在するかも」

……兄の口振りから察するに。

隊長も言っていたことだけど……ひよっとしたら、フェンリル本部は神機兵に乗り気じゃないのかもしれない。確か局長は有人神機兵は非人道的だと一部の上層部が批判、退役神機使たちもそれに同調している……とある。

退役神機使い達が同調——という所が怪しい。

良く考えると、結局人の力に頼るのならば神機使いと大して変わらない。なら開発する意味はとくにない。だったらギルさんの言う通り……その技術や資源を使って少しでも神機を量産するか、高性能な神機を生産しろ……。

……悪く考えると、神機使いの存在そのものの有用性が崩れることを恐れている……んじゃないか、という思考が脳裏をかすめる。

アラガミを倒せるのは自分たちだけなのだ——という誇りに固執している、可能性がある。

だったら神機兵なんか面白い訳がない……。

……。

グレム局長も焦る訳だ……。

本部は『人類を救うという正義』を称えて好意的に支援してくれるわけではない……むしろ運が良ければ隙をついて叩きつぶそうとしてくる。

ロミオ先輩じゃないけど、この分じや人類皆が一丸となつて分かり合える日なんか当分来ないだろう。

それこそ、おでんパンによるラグナロクでも発生しない限り。

そして、そんなコトより気になることが、一つある。

「……液体触媒が不足した理由は？」

「えー……そこはー……技術的な理由でー」

「液体触媒が、不足、した、理由は??」

「……超濃度アラガミエキスが不足シテマシテー……」

「……理由は……??」

「……答えなきや駄目ツスカー？」

「理由 は ????」

兄の目が少しの間右往左往して揺れた後。

きつぱりと開き直ったのか……真実を告げる覚悟が出来たのか。

その、セルリアン色の澄んだ目を……こちらへと向けた。

「……神機兵の表皮及び強化外骨格組織に特殊なコーティングを……」

「施しちゃったから、なんだよね……」

「……どんな??」

「……………防水処理……………」

「!!!????!?」

「はい？　なんでそんな処理やる必要があるんだよ？　オレさっぱり分かんねえー……………いらなくない？」

「うーん……………？　表皮組織、つて事は外側だけじゃなくつてー中の縦部……………つまり、パイロットさんが乗るところにもコーティングがされてるー……………つて考えていいのー？」

「も？　……………なんでそんなものが……………？」

「科学者の考えることはよく分からねえな……………」

「いや、俺もねーそう思ったのよ！　何でそんなものやりたがるのこイツ等、つて思っちゃったりした訳ですよ！　だけどさー、イザやつてみるとなると意外と面白くなっちゃつてその……………あと深夜だったし……………徹夜のテンションで色々やつてもう意識ねーやwつてなつたら気がついたらアラガミエキス全部なくなっちゃつてた訳ー！」

「わ、わわわ笑い事じゃないよ、そそそそんなこと……………で素材を無駄遣いするなんて……………」

「ちよオイ……………唯ちゃんどうしたの？　何か呂律回つてないよ……………？」

「……………」

「そう言えば……………私、適合試験の時にラケル先生に聞いたのですが……………やたらと防水処理が充実していました……………少し驚いたのですが……………」

「やっぱりそうか。俺も思った。古巣で初めて受けた適合試験場はあ

んなに防水防水してなかったからな……まあ、フライアは変わってるからな」

「え？ オレン時は無かったぞ？ ナナどうだった？」

「私の時も無かったよそんなのー二人とも何言ってるのー？」

「え？」

「……え？」

「……？」

「……ん？ どうゆうこと？ ねえ、何か知らない？ 唯ちやん？？」

「し、しししししし知らない！ なななな何の話だかサツパリ!! 私には!! わかんない!!」

「落ち着け、唯……! 落ち着け……落ち着くんだ!」

「知らない、知らない知らない知らない知らない知らない知らない……私は何も知らない覚えてない記憶にない……!! 違う……違うの……違う違う違うちがうちがう……そんなつもりじゃなかったの……そんなつもりじゃ……! そんな……そんなつもりじゃなうわああああああああああああああ!!」

「やめろ副隊長! ドサクサ紛れに兄を消火器で撲殺しようとするんじゃない! 落ち着けと言ってるだろう!? 正気にもどれ!!」

「ちえすとおおおおおおああああああああああああ!!」

「副隊長……!」

「止めるな隊長さん! 俺は……俺は……! 受ける! だってソレが!! 妹の愛なんだツ!!」

俺を信じて……」

「うおらああああああああああああ!! 死に晒せえええええええええええ!!」

目の前が真っ赤になり、ガツシヤアアアン! という壮大な音が――

——響いた。

「やっぱお前らおかしいよ……」

「……ねえねえ、隊長と唯ちゃんは何か知ってるってことなのかなー？ 二人だけの秘密ってヤツですかー？」

「ふ、二人だけ……秘められた密室での……!? も、もしかして……」「シエルそれ曲解だからな」

「……どうやら起き上がったみたいだぜ、あの兄さん。頑丈な兄貴だな。情報共有続行と行こうぜ」

「うるせえ性犯罪者。テメエ何一人だけマトモですってツラしてんだよゴリラの癖に」

「喰いついてくるんじゃないやねえよ面倒なロミオだな、話が進まなくなるだろうが黙ってるタコ」

「もうお前なんか知らねーよこの変態仮面クソゴリラ」

「だから何だよその仮面って……仮面……仮面……？ 何か忘れてる気が……」

「……で、その不必要な『防水処理』をしたせいで……足りなくなっただいいんだよね？ アラガミエキスが。アラガミエキスが。何で全くそんなものを作るんでしょうねー、あーあーあー……ケツ」

「そう言うなってーイモウトよー……研究者なんて多かれ少なかれ皆悪ノリが大好きなんだよ!! そうゆう人間の好奇心が人の世界と未来のと破滅を引き起こすんだって!!」

「破滅は駄目だろお……お兄さあん……！」

「……もー……」

「とにかくソレを持ってくればいいんだろ？　なら話は早いじゃねえか」

「そうそう！　そうゆう訳だからチャチャつと持ってきてきちやつて下せえブラッド様たち……ぐへへ……もうそれでさっさと神機兵の関節トウルントウルンにして出撃するからさーそれで万事解決だよ」

「……防水処理……気になるなあ〜」

「ナナちゃんこつち見ないで……！」

「……まあ……いいよ……。私、吐かせる方法、なくは、ないから」

「尋問ですか？　手伝いますとも！」

「えへへへ〜〜シエルちゃん！　絶対唯ちゃんをゲロらせようね！」

「は、はい……！」

「え……!?!　えっ……!?!」

という感じで収集がつかなくなってきたその頃。隊長がスクッと立ち上がる。

「本作戦の目標は目標ザイゴード30体。単純計算で一人当たり5体の討伐になる。よって広範囲索敵を為部隊を二つの分隊に分ける。α班、ロミオ、ナナ、俺に付いて来い。β班シエル、ギル……そしてお前だ、副隊長。陣頭指揮を任せる」

「りよ、了解しました……」

陣頭指揮……字面を見ればかなりの大役……。

……いや、副隊長としては当たり前なのだけでも。

「忘れるな、今回はあくまで採集任務だ。だが不必要な戦闘を避ける必要はどこにもない！　各員、己の意志と判断に従い行動せよ。ブラッド部隊、出撃！」

「「「了解!!」」」



まあ、そんな簡単に行くわけがない。
現実はいつだって残酷だ……。

『ブラッドβ。交戦外の非討伐対象——中型種、ヤクシヤが戦闘音を聞きつけもの凄い速さで接近中。……120秒後そちらのエリアに入ります』

「やっぱこうなりますよね……あはははは……デスヨネー……」
もうヤケクソだ。

……戦闘中のブラッドαに通信を繋ごう、助けに来てもらおう……
と思ったが、何とブラッドαもヤクシヤと交戦中っぽい。隊長……何
のためらいもなく、討伐するって選択をしたんだあうわあ……。

……すでに通信機越しには悲鳴と怒号と狂笑が入り乱れている。

「想定より近かったな、片付けに行くぞ」

「待って下さいギルさん！」

「ん？ どうした？ 行かねえのか？」

何言ってるんでしょうねこのクソゴリラは。

何のためらいもないのか。ヤクシヤって中型種だってコト、人間の
4倍くらいあるデカい化け物だってこと、忘れてんじゃないかなこの
人……。

だが、こっちはまだ規定のノルマを達成していない状況。

そう……このまま帰れば確実に死……！

「そうですね、非討伐対象と接触した場合一時的に退避という作戦内容だったはずです」

「まあ……だが、俺達の仕事はアラガミの討伐だ」

「ナイスだ、シエルちゃん。もっと言ってやれ。」

「作戦通りに行動できない様ではより強力なアラガミと戦うことはできません」

「……だが、臨機応変に戦うべき場所もある」

……。

「ですが……!!」

「今がその時だ。俺はコイツを討伐するべきだと思っている……そして、同じく作戦行動を共にする以上お前にも来て欲しい……手エ貸してくれ」

「……それでも……貴方の言う事に賛同はでき……かねます。このままでは混戦に突入してしまいます！ そうなれば理論的に考えて任務達成の確率が減少——」

「じゃあ、お前はもうどうしたいんだ？ ——シエル」

「っ……!! わ、私は……私、は……!!」

『落ち着け二人共。現場での指揮権はブラッドーβ4にある』

『はっ！ ザマアみろゴリラー。怒られてやんのー!』

『そうそうー、シエルちゃんそんなのとマトモに会話なんかする必要ないよ〜』

突如として入ってきたα班たちの通信に、思わずほっとする。

このままこの二人の議論……もとい口喧嘩はどうなることかと思っただ。

……きつと、この二人、根は温厚。

だからこそ、お互い相手を傷付け合うようなことは——したくなかった、ハズだ。

「……悪かった」

「申し訳ありません……」

『お取込み中失礼ですが、ヤクシャ侵入まで残り30秒です——さつさと決断すべき、かと』

「分かってるんでプレッシャーは辞めて下さいフランさあん……」

『とか言ってる間に残り27, 26, 25……』

「あー!」

「副隊長……」

「……どうする?」

つて言われても……。

どうしよっか……と脳内が凍り付きそうになった時、隊長からの通信が入る。

『小型種を分断し先に対処するか、それとも、まとめて一気に相手にするか——副隊長、お前が決める』

「私ですか……」

『現場での指揮権は貴様に委ねた。言っただろう? ……己の意志と、判断に従え——と』

「……」

『どうやら休憩は終わりの様だな……。α総員、氷結バレット装填!! 既に片腕は落とした!! ゼロ距離射撃で銃弾を送り込んでやれ!! 傷口を狙って撃てええええ!』

『いえすきー!』

『オレ……アラガミ相手とはいえ流石に非道な気がする……』

『気にするな! どうせ奴らに痛覚など存在しない!! あつても俺は気にしない!!』

……アラガミとしてこの世に生まれたことを後悔させてやれ!!

総員吶喊!!!』

『うおおおおおお!!』

……。

……相変わらずヒデエ……。

「副隊長!」

「決めたか?」

「あ、あー……そうでしたー、ちよつと待つて……」

一瞬だけ逡巡。

だが躊躇ってる暇はない。

……すぐに決めなければ、この現場を動かすことはできない。

自分の意志へと問いかける。

それで自分は、どうしたいのか……を。

「ブラッド分隊―β5、β6 傾注!! これより接近中の中型種ヤクシヤを迎撃する! 交戦域には小型種が2体、コレの討伐にβ6。ヤクシヤ迎撃にはβ4とβ5で当たる!」

「β5、了解した」

「待つて下さい副隊長!」

シエルちゃんから制止の声が放たれた。

「戦力を分散する―――のですか?」

「そうだよ、シエルちゃん……ザイゴート2体、一点狙いで狙撃すれば、難しくはない。討伐後はβ4に合流。中型種討伐に加わること」

「ですが……戦力の分散は……! やはり反対です! ここは中型種よりも任務を優先した方が――」

「コレは命令です」

「……っ」

命令、という言葉に弱い―――というか脊髓反射してしまうらしい、シエルちゃんの背筋が伸びる。

自分でも卑怯だとは思うけど……今はグタグタと議論している時間がない。

本当時間が無い。

それだけだ。

「――だが、それでも貴女が成りたいと願うことがあるならば、止めはしない。……シエル・アランソンに告ぐ。」

もし私の命令に不服があると言うならば……今すぐ、ココで後ろか

ら撃ちなさい」

「なっ……………」

「おい……………!?!」

……………。

……………あるえ……………?

……………どうしてこうなったの……………?

…………………………今更引つ込みはつかない。このまま一気に押し通るのみ。

「私は1体でも多くの素材を確保したい、それが神機兵の完成に近づくなら中型種だろうが小型種だろうが関係ない！一刻も早く神機兵を完成させ、実用段階に持つていくことが私の意志です！推服できいないのならば今すぐここで撃ちなさい！」

……………貴女が、自分の意志で決めることだよ、シエルちゃん」

「……………副隊長……………」

シエルちゃんが、小さく囁いた。

こんな命令があるなんて……………と。

それが一体どうゆう意味なのかは分からないが……………確かに言えることが、ある。

私の知っている『命令』は——いつだって、誰かの為にと思う心と、確固たる意志が存在していた。

私はその背中を追った、だけだ。

『盛り上がってるところ悪いけどα2からβ4へ……ギルのバイタル情報をよく見てやってくれ……あんま無理はさせないでやってくれな……考えたらギリギリで原隊復帰したようなヤツに任務なんてこなせる訳——』

ロミオ先輩からの緊急回線。

そして、そこに乱入してくる——ブツツという、雑音……。

『ロミオ……。あまり副隊長に余計な情報を与えるなよ？』

『そうだよ先輩く。きつとギルなら大丈夫だよ』

『お、おい待てソレは俺の通信機だちよつと待……うあああああああ！』

威圧感、というか良く分からない恐怖感……。

ロミオ先輩の通信はもう死んじやったけど……その残された言葉を頼りにすーつと横目でギルさんのバイタル情報を閲覧する……。

『ギルバートさん。一撃でも喰らったら速やかに死にますね。ご武運を（嘲笑）』

「マジですか!? マジデスカー!? え? なんで!? なんでそんな体なのに戦場に出てきたんですかこのゴリラはああああ!!」

「神機使いになった時から……俺はもう……覚悟は、できてる……!」
「カツコよく言った所で状況は絶体絶命!! 最初っから出てくんないギルさん 下がってろギルさん!!」

「タダじゃ……死ねねえんだよ……一匹でも多く道連れにしてやらああああ!!」

「怖っ……!?! 怖ああ?!」

よくよく考えたらコイツ、数日前までミイラだったんですよね!? そんな奴が世紀の大発掘で現代に蘇ったとしても! 今! 立つてるだけでやつとなハズですよね!?

だったらそんな体なら……最初っから戦力外だから来なければいいのに……本来なければいいのに……!

何なのコイツ死にたいの!?

……内心、逆ギレが止まらない。

『その意気だギル。……お前なら逝けるさ』

『今こそ年貢の納め時〜♪』

『ジュリウス? なあジュリウス?! お前誰だよ……? ジュリウスだよなあ……? ジュリウスなんだよなあ!? ナナも悪乗りするんじゃないよ! 頼む唯、もうお前しかない!!』

「……ぜんしよしまーす……」

『唯いいいいいい!!』



「……」
「……」

「あ、あのねシエルちゃん……その……さっきの任務は無かったことにして下さい……アレは私じゃなかった。何か別の誰かが憑依していた結果なんです、時々あるよね、雰囲気とかに流されてつちやったりしてたまーに誰だ自分？ってなるのってねーよ、よよよくあることだよね!?! ……ね……?」
「……」

……駄目だこりやああ……。

「副隊長」

「……何でしょう、アランソンさん……」

状況から整理しよう。

まず、あの後ヤクシャは……超ギリギリで何とか討伐できた、という結果になった。

瀕死のギルさんを止め、ブラッドアーツをぶっ放し、瀕死のギルさんを助けに行き、ブラッドアーツを空振りし。ギルさんを殴って止めて、ブラッドアーツを不発にし、やっぱりギルさんを宥めて……。

……合流したα班と一緒に討伐して貰った……。

い、色々あつたが結果的に、ザイゴート30体討伐の任務は達成。規定量の素材採取は成功した——と言つていいだろう。ついでにヤクシャ素材の確保も出来たことだし、悪い結果にはなっていない。

……が。

「貴女の行動は理解に苦しみます……」

「忘れて下さい……忘れて下さい……申し訳ありませんでした……」

「駄目です。忘れませんとも!」

「なんで!?!」

「アレだけのことを言ったんです……簡単に……忘れられる訳……ありませんとも……」

「待って、どうして頬を染めているんですかシエルちゃん!? なんて意味ありげのモジモジしてるんですかシエルちゃん!? ちよつと落ち着いて話をしよう私たちはきつと分かり合えるはずなんだからあ!!」

「……も?」

「もー!」

という冗談はさておき、と急にマジメな顔つきにシエルちゃんは変貌する。

「ですが、納得がいきません。理論的ではない……あの命令は……作戦の第一目標とは、外れた指示でした。あなたも理解していたはずでは? ……私情が、入り込んでいることを」

「……おっしゃる通りです……」

「もう……だったら、次からはより安全性を兼ねて、達成可能な戦術を一つ一つ確実に組み上げていきましょう。私情を挟み込むことは冷静さを欠く判断を下すことになります……以後は注意してください」

「……は、はい……」

反論の余地がまるで、ございません。

完璧な理論です、シエルちゃん……。

正論だけが、正解とは限らないよ。

軍律も規律も大事だけど……。

……人は、弱い」

「……ですから、規律があるのです。弱い人間が迷ったりしない様に、理性と『正しい』理論に従える様に徹底すれば不測の事態に陥つても——」

「無理だよ……そんなの。だって、……その規律と理論に正しさはあっても——『弱さ』は加味されてない……違うっ？」

「シエルちゃん。何も知らない私が言えることじゃない、と思うけど……でも、何も知らないからこそ、言えることもあるよ……弱さを強引に切り捨てた先の選択って……どうなると思うっ？」

ソレが本当に正しいことなんだって——言い切ることはできるっ？」

「……」

一瞬だけ、シエルちゃんが静かに止まってしまった——ように思えた。

……言い過ぎちゃったのかもしれない——と僅かな後悔が襲ってくる。

「では……では………私が……私が、今まで学んできたことは……『何』だった、と言うのですか?」

シエルちゃんが苦悩まみれの声色で呟いた。

……どこか苦い表情が浮かんでいる。

……きつと、本人も、心の底では……理解していたのだと——
思った。

「何が正しいのか分からないこの世界で……何にも継らずに、自分だけで何かを決断出来る人間なんて……そうそう居るハズもない。人は………どんどん楽な方に流れていくもの——ではないのですか?」

だからこそ……規律で縛り上げてでも、何かに脅迫されてでも……正しくあろうと、強くあろうと! するべきではないのですか!?! 私
はそう信じて……!」

「……人が楽な方に流れていくのはブラッドの誰よりもよく分かっているつもりだよ、特に私は! でも、それじゃ……駄目だと思う。そうやって、思考を放棄したら最後………何も自分で考えられなくなる」

「……」

何も考えられなくなることの恐怖は……良く分かっているつもりだった。

自分で、自分の人生を、なにひとつ選ぶことが出来ない。

……自分の人生を生きることが出来なくなる。

生きながら、ゆっくり死んでいくような……じわじわと息がつかまっていくような、窒息感。

……それだけは、嫌という程、知っている。

「それじゃ駄目だよ。……何かを守り抜くとか、何かを成し遂げたいとか……そうやって、自分で決めなきや何も成すことはできない。自分で考えて、自分で決める——それが意志の力だって」

それこそが、人間に与えられた最大の武器——なんだって。

「だから……」

「……でも……でも……！ 私……は……」

「……」

少し、考えさせてください。

……と、シエルちゃんはそれだけ口にして……部屋に戻ってしまっただ。

……自分がどれだけ情けないか……そんなことは良く分かっている。

シエルちゃんは何も悪くない——むしろ、ある意味正しい。

……何も努力してこなかった私が、今まで散々頑張ってきたあの子を否定する価値なんかない……そんなことは百も承知。

だからこそ、シエルちゃんには、ちゃんと意志を持って欲しかった。

……シエルちゃんの戦術や戦略、軍事に関する知識は本物だと思う。

だから……確固たる意志さえあれば、私なんぞよりも、ずっとずっと優秀なゴッドイーターになれる。

……なれる、はず。

今のままじゃ、ダメなんだ。

私も、シエルちゃんも……今のままじゃ……神機兵と大差ない。命令とプログラム通りに動くだけの存在と……何も変わらない。

初めて手にした意志は、あまりにも重く。
手足は鉛の様に、動いてくれない。

ブラッド隊は、内に抱えた問題を解決できないまま——神機兵の無人運用テストは開始されようとしていた。

phase37 オートマタ

「間に合った……な、何とか間に合った……!」
はあはあ、ぜえぜえと息を切らせる整備員や研究員の死屍累々。
積み上がった屍の上に立つは、1体の巨人。

……巨……人……?

……人……。

……人……じゃあないよなあ……アレ……。

「どっちかって言うところゴリラだよな」

「アウトおおおお!!」

「はい、ロミオ先輩おでんパンだよーっ!」

「ぬわー!」

皆思ってたのに言わなかったんだからさあ……空気読んでくださ
いよ……先輩……。

……前見た時は、確か上半身パーツだけだった。あの時点じゃまだ
人型だった。

神機だけを見た時も、「デカいな」位にしか思わなかった。

……それなのに、何故……すべてを足し合わせるとゴリラに……。

「何でゴリラになったの……どうして……こんな……」

「うっほっほーうほほほー♪ うっほっほーうほほほー♪」

「さるーゴリラちゃんばんじー♪ さるーゴリラちゃんばんじー♪」

「歌わないで下さい!!」

元気なブラッドムードメーカーカコンビを無視して隊長の姿を探そう

……と思つてたら……。

……シエルちゃんの姿が目に入った。

一瞬だけ視線が合つて、すぐに逸らされる。

……。

……避けられてるよねー……。

……嫌われたよねえ……これえ……。

「……ゆーいーちゃん……？ シエルちゃんにー何かしたー？」

「………はい………」

「やっぱいいー………なんでそうゆうことするかなあ〜？ 大事な大事な稼働テスト前に何で部隊の仲をこじらせるのかなー？ ばかなの？ 死ぬの？ 唯ちゃんは天才なのかなー？ 失敗の天才かなー？」

「……返す言葉もゴザイマセン………」

「ねえ、反省してるなら態度で示してねー？ さっさと関係を修復しておくことー！ ゴタゴタを持ち込まないでよね副隊長！ 死ぬなら勝手に一人で死んで〜」

「うわあナナちゃん乾いてるね………そうゆうカッサカサの所嫌いじゃないよ………」

「私は唯ちゃんの湿っぽいところ好きじゃないよー」

「……心も体も水分抜かれてミイラと化せば今ならとつてもお得だよー」

「肺に水溜まって溺死すれば？ すっごくすっごく苦しいよー」

はあ……と、ため息しか出ない。

ナナちゃんとな変な会話した所で、シエルちゃんと仲直りできる――訳ない。

………という作戦だったのか。ナナちゃんの誘導に乗っている間にロミオ先輩がシエルちゃんを引っ張ってきた。

「はいシエルー丁々！ あとは若い二人で仲良くなれよー！」

「ローミオ先輩っ♪ 私たちはあつちでゴリラ見ようー！」

「イイねー！ 慣れればアレ、カツコいいよなー。よっしや行くぞナ
ナ……ってナナあ!? う、腕……腕当たってるって！ 腕……」
「何？」

「だ、だからさあ……!! ……くっ!!」

うるせえな背後……。

圧倒的な沈黙にこっちが耐えているというのに嬉しそうにキャン
キャンと……。

……でも正直私の所為だから一応ちゃんと謝るといふ選択肢を選
ぶ。

「……シエルちゃん……あの……この前はごめんなさい……。余計な
ことばかり知ったような口をききまくりましたマジで反省してい
ます全面的に私が悪かったんで本当ごめんなさい」

「……」

「私が一方的に悪かったと思っていますすみマセン」

「……」

「甘ちよろい癖に勝手に批判なんぞする価値もないのに本当に申し訳
ありませんでした」

「……」

「自分の情けなさには反省の言葉もありませんというか私に言われた
くはなかったよねシエルちゃんそうだよねこんな生きてる価値特
ない雑魚イーターになんか上から目線で偉そうな説教されたくな
かったよね特に努力もしてこなかったテメエが何言ってるんだよこの
クソがと思つた事だよね分かるよ私が逆の立場だったら今頃マジギ
レしてどっか逃走してる頃だもん、生まれてきてごめんなさいちよつ
とこの世に誕生した罪を償ってきますオウガテイルの生餌になつて

きます私のことなんか忘れてしつかり生きてって下さいシエルちゃん……」

「副隊長」

「は、はいっ!？」

「……」

「黙らないで!？」

「……に言われたことをずっと……考えていました」

「何で溜めたの!？ どうしてチャージしたの!？ シエルちゃん……?」

「私の意志は……何処にあったのでしょうか……と」

「……あ、ハイ……」

……どうやら、まじめな、はなしだったようだ。

「……ずっと、ずっと考えていたんです……。私の意志は、どこに、あったのか……と。」

言い訳にもなりません……。今まで、周りの期待に應えることで精いっぱいだった。周囲が期待することを……自分に課せられた使命と命令とを……果たしていくのに精一杯で……考えていなかった……考える事さえ放棄していた……すべて私の怠慢なのだと思います……」

シエルちゃんは、少しずつ……戸惑いながら、言葉を吐き出す。長い間降り積もっていた……ずっと昔に吐き出すべきだった、言葉を。

シエルちゃんはきつと……良い子なのだ。

周囲から兵士になることを期待をされ、ソレに精一杯努力をして応えてみせた……そういう子だ。

……嫌だ、無理だと投げ出して、逃げた私とは違う。

「ふ、副隊長?! ……な、何を言ってる……」

「だから……シエルちゃん……あのね……? シエルちゃんが何をしたいのか、分からないって言うんだったら……私と同じことを……思ってるほしくないな……なんて……」

「副隊長と……同じ……気持ちに……」

胸に手を当てて頬を紅潮させるシエルちゃん……。

……すごく……かわいいです……。

「あの……上手に口……に……できないんだけど……。私は……神機兵……ほしいから……だから、ちゃんと作らないと……いけないから……だから、シエルちゃんも……いっしょに……やってくれる?」

「でも副隊長……」

「む、無理ならいいよ! でも……シエルちゃんが一緒なら……」

「……ふくたいちよ……」

……何だか変な雰囲気になってきちゃったので、ここらで軌道修正しましょう。

「神機兵が今、本当に必要だってことは分かってくれるよね? ……」

全然、世間知らずの甘い考えかもしれないし、何理想論ブツこいてんだって言われるかもしれない……。でも、神機使いが足りていない支部や神機使いが居ないサテライト拠点……そういう場所は本当に一刻も早く——神機兵が必要なんだ、って思ってる。

だから……早く完成させたい。だから……今回のテストを絶対に成功させたい」

「……はい」

真摯に私だけを見つめてくる目。

……その目に少しだけ心が曇る。……そんなに見上げられるほど、私の決意は固くない。

……そう言ってる思わず——逃げたくなる。

……だけど、今だけは……逃げちゃ駄目だ。

「……シエルちゃん……私、すつごく弱いんだ……。もう知ってると思うけど。私本当に雑魚い。……意志も弱いし、物理的にも弱いし……ついでに頭も弱い方だし……」

「……そんなこと……」

「だから。シエルちゃんが後ろから押してくれると……凄い助かる。同じ意志を持ってくれてるってだけで……隣に居てくれるってだけで……多分、私は諦めないで頑張れる。」

だからもし……シエルちゃんが今、自分の意志を見つけれないって言うんだったら……今回は……駄目な私のサポート役……なんだけど……嫌だよねー……?」

「……サポート、ですか?」

「うん。ただ隣で頑張れ頑張れって言うてくれるだけでいい。多分……シエルちゃんにしか、頼めない」

「……私、にしか……?」

ロミオ先輩やナナちゃんは——駄目だ。

あの人は、何だかんだでしっかり『自分』を抱えている気がする。自分が今何をしたいのか、何ができるのかを……おそらくは理解していると思う。

だから、手に余ることはやってくれない。

そして隊長は……まだ遠い。

意志も力も強い人だから……そして、その分孤独だから。

それでも、と皆の先を歩いていくだけの力強さがある。

……今は、追いかけるだけで精一杯。

だけど、今、同じ様に迷っているシエルちゃんなら、頼めるような気がした。

他の誰にも言えないような……ダサイ悩みを。

「副隊長!」

「な、何? シエルちゃ——うわっ!」

むぎゆっ……という、程よい圧迫。
胸に当たるのは……柔らかい、感触。

……や、やだ……コレって……コレって……!
当たって……

「もちろんですとも！ お任せください！」

「や、やだシエルちゃん……ちよつと苦し……」

「嬉しいです副隊長……！ 誠心誠意、全力で任務に当たらせて頂き
ますー！」

「し、シエルちゃん……すごい大きい……」

「副隊長……もう少し……こうしてても……宜しいですか？」

「も、もー……シエルちゃんたらあ……」。

……あまりキツくしないでね……？」

「もー！」

ふわっふわだなー……ふわふわしてる……。

もうちよつとだけ……この感触に溺れた——

と、暫くそんなことをやっていると、奥の扉が開いてほぼゾンビの
様になった超絶美形と、クソ野郎が半分死臭をまき散らしながらおぼ
つかない足取りで地獄の窯の底から湧き出してきた。

「さ、さいしゅうちえつく……おわったよお……」

「ぶ、ブラッド……しようしゅーだ……か、各員はいちにつけ……」

「隊長!!?? 大丈夫ですか隊長ー!!？」

「ジュリウス隊長……!？」

ああ、萎れてる……頭の上のバナナが萎れてしまってる！

シエルちゃんと一緒に隊長の下へと駆け寄る。

ふらふら、としていた隊長はそこでガツクリと崩れ落ち、膝をついた。

ラケル先生一人を難なく支えることができる強靱な膝も今日ばかりはぶるぶると小刻みに震えている……！

「どうなさったのですか隊長!?!」

「何してたんですか!?! うわ……かなり好意的に見てもヒデエ顔色です……」

「……問題ない……最終チェック作業を……日……徹夜でこなし
ていたまでだ……副隊長、体力増強剤を取ってくれ……腰のポーチに入ってる……」

と、言われたので。

ちよつと失礼して隊長の男性にしては細いなーと思う腰、のポーチをゴソゴソ漁ると、何とそこには。

……使い切った体力増強剤の空き箱が。

「何してるんですか隊長!?!」

「自分の体力に限界が来たと感じたらいつでもドーピングできるように箱ごと――」

「貴方戦闘員ですよ!?! 分かってるんですかあ!?! ああこんなもの使うたびに隊長の貴重なテロメアがどんどんどんどんすり減っていく……」

「落ち着いてください副隊長、体力増強剤では、減りません、少し人間の臨界点を超えるだけです」

「ふっふっふっ……こんなもの、軽いピクニックだ……」

「隊長落ち着いてください焦点が!?! 焦点が合ってますん既に目の!!」

「一度気絶させて再起動させましょう副隊長! コレは何かエラーを起こしています」

「シエルちゃんやめて隊長は機械じゃない!!」

「問題ない……ただラケル先生さえいらっしやれば俺は……俺は……!」

などとのたまう隊長へ、ほぼ無理やり体力増強剤を口の中へと流し込み。

咽る隊長の口を無理やり抑え込み、二人がかりで喉を通したところ
で――。

……やつと隊長は正気に戻った。

それでも依然として疲労の濃さは感じ取れる。

……ああそう言えば遙か後方で唸ってる謎の生命体がもう一体存在するけどそれは無視しますね。

全くもって自己管理がなっていない。良い年した大人なんだから徹夜でぶっ倒れないで欲しいよね本当。倒れて他人に迷惑かける位なら余計なことしなければいいのに情けない奴だ。

「妹と同じ空間に居れば大復活!! 特殊部隊ブラッド第017号任務『無人神機兵護衛任務』についてのブリーフィングを開始しまあつす! フランさん」

「……シスコン……生理的に……無理………全員、こちらの作戦域概要をご覧ください」

今回画面に現れたのは地図。

既にA地点、B地点、というフリップが点滅している。

「本作戦は神機兵3体の護衛となります。

ブラッド隊を分割、各チーム1地点での戦闘になります。神機兵αをブラッドー01。神機兵βをブラッドー06。そして神機兵γをブラッドー02、03、04、05で当たって下さい。神機兵γの陣頭指揮権は04。本作戦総指揮権はブラッドー01。以上です」

「はいフランさん!」

「……何ですか副隊長?」

「……分隊分けがおかしい。隊員6名に対し護衛対象が3体ならば、1体につき2名ずつ人員を配備できるはず。……単騎行動の理由は？ 納得ができる説明を求めます」

明らかにおかしい……そもそも単騎行動という事自体が死を招きかねない。

……それでも隊長はまだ納得ができる。

だが、シエルちゃんの方の人事は一体どうゆうことなのか。

……シエルちゃんは、まだ新兵の域を脱していないのに。

「そちらの説明は……神威技官」

「各員のバイタルデータ及び戦闘記録で高い順から2名に離脱してもらった結果だ。アランソンさんについては単騎行動にはなるが、周囲アラガミの脅威は少ない。また、アランソンさんの銃はスナイパー。その効率的な戦闘方法は前回のロシア支部戦でデータが取れている。よって連係よりも単騎での撃破効率が高い」

「……神威技官、ソレはロシア支部の……イエン・ツイー戦でのログを見た結果言ってること？」

「はい、そうですブラッド副隊長」

確かにシエルちゃんの狙撃スキルは高い……少なくとも私よりも全然。

……だけど……。

「副隊長……私は、やれます」

「……」

「大丈夫です！」

「……」

「……まあシエルならやれるんじゃない？ 射撃成績はオレやナナよっか上なんだし！」

「そうだよー！ いざとなったら前みたいにさっさと逃げちゃえばいいんだからねー！」

「……本当はこの場所はブラッドー05にやらせる予定だったのだが

却下された」

「……………俺か？」

「単騎行動でならK I Aしても違和感がない」

「んじや続けるよー！ 本作戦の目的は神機兵対アラガミの一对一のテスト環境の整備、及び神機兵の護衛。確認されているのはシユウ、コンゴウの中型種、戦闘面についてはヴィスコンティ大尉お願いしますー」

「神機兵αとγ周辺には戦闘状況が発生する。今回の標的、コンゴウは聴覚に優れたアラガミだ。戦闘の気配を感じたらすぐに駆けつけてくるだろう。よってコンゴウを先に片付ける。シユウは遠くの戦闘音には気づかないはずだからな。」

作戦域西端、A地点にコンゴウを誘導し、炎や破碎属性の神機と銃弾で速やかにケリをつけろ」

「了解！」

「なお、今回の作戦のオペレートはフランさん。こっちからは技術オペレートとしてクジヨウ博士が参加するんで無線が混雑する可能性があります。注意してくれな……………特に唯ちゃん！」

「帰って」

「よく飽きないよなーお前らさ……………兄妹ってそんなもんなの？」

「分かんないよねー」

「……………そう言えばさつきからあんまり喋らないなゴリラ。何だよ……………ま、また頭でも痛いのかよ？」

「脳溢血？」

「いや……………神機兵……………だったよな……………？ ……なんかあの頭に見覚えがあるきがすr」

「よ、よし頑張ろうな皆!!」

「神機兵をしつかり守ろうねー!」

「珍しくやる気があるロミオだな……ふっ……」

ブラッド総員に告ぐ、今こそフライアの実力を示す時だ!

アラガミと本部に我らの有用性を教育してやれ!!」

「了解!!」



神機兵の最終調整を担当した研究員は思った。

スキルインストール……オラクル細胞の中にある思考する分野――

―その中でも、記憶を司る領域に干渉し、スキルの永続性を図る技術。

……理論は完璧に作動はした。だが、そのせいで――急速成長させた神機兵は、突貫工事もいいところだ。

焦り過ぎている……。そんな空気は、フライア中に漂っていた。

本部からの了承が得られないのではない……恐らく、本部側には神機兵を本気で叩きつぶしに来ている――節さえ見受けられた。

神機兵計画が凍結されれば、フライアは最早存在する意味がなくなる。そうなればフライアの研究機関は解散されるのも時間の問題となるだろう。

……そこで研究されていた技術は恐らく、様々な支部がよってたかって食い荒らす。

事実、リクルートが来ていないわけではない……技術的に後れを取っている支部は嫌でも研究員を取りに来るだろう。

おそらく、ソレは他の人材——フライアの実動部隊『ブラッド』でも例外ではない。

世界で唯一『感応種』に対抗できる力を持ち——ブラッドアーツを使用する最新鋭のゴッドイーター達をややすと逃すほど、世界は甘くはない。願わくば彼らが全員本部に残るか……もしくは、何処か技術的にも後れを取っていない場所に引き取られるか、が達成できればと願わずにはいらなかった。

……P-66 偏食因子の扱いは非常にデリケートである。

彼らは言わばゴッドイーターの感応種。存在するだけで周囲に影響を与える存在となり得る。

自分たちは恐らく気づいても居ないだろうが……その検査頻度やデータ収集の仕方は神経質すぎる域にまで到達しつつある。

そこまで神機使いに注意を払っている場所は……フライア以外にはない。

もし、神機兵が凍結され、フライアが解体し、ブラッドが解散されるようなことがあれば……。

最悪、彼らは別々の場所で……恐らくは全員、悲惨な最期を遂げるだろう。

……決して被害妄想ではない、本当に有り得てしまう最悪のシナリオを思い浮かべながら、研究員は自分の妹がブラッドに在籍しているという——開発チームの青年を見た。

……彼に、血のつながった家族が、そうなるかもしれない未来が見えていないわけがない。

「えー皆さん。何か全てがかなり急ピッチですがー……我々は最善をつくしましたつてことで、後は結果を待ちましょう！ 何も気にすることない!! なるようにしかありません！ つー訳で皆頑張りますぜー！」

「了解！」

『こちらC P。神機兵 α 、 β 、 γ 。それぞれ配置完了しました。いつでも始められます』

『ブラッドー01、周囲のアラガミ、掃討を完了した。早速交戦だ』

『ブラッドー06、神機兵 β 尚索敵中です』

『こちらブラッドー04、今ロールアウト完了しました』

次々に入ってくる通信と報告。

それらを受けた開発チーフ——九条博士が穏やかな声色で告げた。

「それではテストを始めましょう」

『神機兵 α 、これよりアラガミとの戦闘に入る!!』

今でも鮮やかな景色がある。

11月だった。

特筆して言うべきこともない、強いて挙げるとすれば……激しい吹雪が吹いていた時期。

後に与えられた情報によると、アラガミ出現以来、世界の気候は大幅に崩れ、本来ではたとえヨーロッパに当たる地域でも11月に吹雪というのは平和だった頃には有り得なかった現象——であるらしい。ただ、当時の自分には恐らく知る余地も無かったのだろう。

生まれてこの方、異常気象に慣れた身には疑念すら抱くこともなかったのだろう。

ただ、幼かった身には分厚い雲により太陽光が遮られ——結果として黒に近い灰色に淀んだ空と叩き付ける白い雪。そして『連合軍』の紋章を背負った両親の姿だった。

親が『任務』に赴くのは義務、命令は何よりも果たすべき使命。

——それがアランソン家の誇りと規律であった。

なのに、その日は。

両親が二度と帰ってこない気がして……ならなかった。

いつもだったなら両親に習った敬礼の真似事をして送り出すのに、その日だけは……いやだ、と駄々をこねた。

いっっちゃやだ、いかないで、いかないで……と。何度も何度も繰り返していた。

いかないで……と。

「シエル……。心配しないで……。？　ね？　……必ず……。帰ってきてますから」

母が屈み、小さかった私の身体をそつと抱きしめて……耳元で優しく、囁いたことを覚えている。

顔は見えなかった。

……今を思えば、あの時母は……どんな表情だったのだろう、と思える。

ただ一つだけ分かっているのは、もうその時私が『もし』孤児になった場合——私は児童養護施設マグノリアⅡコンパスに移籍することになっていた……ということだった。

一体母は、どんな顔で……私を抱きしめていたのだろう。

「帰ったらお誕生日を祝いましょうね。皆で、一緒に……だから、あなたは待っていて」

その時母は、消え入りそうな声でそれだけ残して去っていった。

あなたは待っていて、良い子で待っていて。

それが、両親から私への最後の『命令』。

2065年 11月 旧ロシア連邦東シベリアクラスノヤルスク

地方 『ソーンツァ作戦』

連合軍による最後の反攻作戦。

その結果は多大な犠牲を払いつつも、成功を収めた——と言われている。



「で、では皆さん。何度めかにはなりますが……神機兵とアラガミが1対1で戦える状況にしたいので、周囲のアラガミの討伐をしてください」

「分かっているだろうなクジヨウ君……今度という今度こそは失敗は許されんのだぞ」

「は、はい……ですが局長。何分初めての投入のものでどう動くかは全く分からな——」

「そんな御託は聞いておらん！とにかく成功させろ!! そうでなければフライアは……」

「だ、だから……善処は致しますが成功の確約はできかねますと……言ってるのに……!」

「……ところで、クジヨウ君」

「は、はい!」

「……何故此処……つまりフライア管制室に居る全員、俺以外の全員は……防護服を着こんでいるのかね?」

「……それは」

「何のことだか」

「サッパリ」

「分かりませんね」

「……何だか嫌な予感がしてきた……」
「気のせいッスよーグレム局長ー。んじやあ、まず交戦中のαから計測始めまッスよー！ 01状況報告ドウゾー」



「こちらブラッドー04からCPへ。神機兵γ、ロールアウト完了。これより索敵に入ります」

『よし……いいぞ、いいぞ……！』

恐らくは独り言……九条博士の上ずった声を無線が拾う。

どうやらこの人は本当に神機兵の初陣を喜んでいらしい、ということが伝わってくるような声色だった。

だが、そこはすかさず歴戦のオペレーターであるフランさんが見逃すはずもない。

『クジヨウ博士、戦闘行動中です。混線の原因になりますので無線は必要な時以外は切っておいてください』

『あ……す、スミマセン……』

『ふふっ……初々しい……』

『え』

『無線通信……初めてなんですネ』

『あ……あっ』

『……緊張してるんですか？ クジヨウ博士？』

『そ、その……』

「……………何この会話」

いつそのことこつちから通信を切ってやろうか……とも考えたが、情報的に盲目と化すか耳元で変なプレイを開始されるかだったら、まだ後者の方がマシだろうと考え直すことにした。

「すつごーい、ホントに無人で動いてるよー！」

「ジュリウスとシエルはコレに乗ったことがあるのかあ！

……………。

いいなあー！ 中どうなつてんだらうなー！」

「ロミオ先輩何今の間々？」

「うっさいなあもう……何でもねえよ！ ほらナナ、しつかりやるぞー！」

「はいはい、わかってまーす」

突如として神機兵からの電子音、そののち、何かが切り替わるような——機械音とグツチャグチャとした肉と肉のこすれるような異音が響く。

そして、急に——その空気抵抗を受けやすそーな体のどこに、推進力があるのか全く不明な神機兵は人間と大差ないスピード感で、走行を開始した。

つまり、コイツ、けつこう足早い。

「神機兵γ、シユウ発見！ 交戦します！」

正面に立つのは人間とコウモリ、足して二で割ったような人型のアラガミ。

攻撃前の予備動作——もとい『挑発』をまさにやっている状態だ。

そして数分後。

そこには返り討ちにあって倒れ伏すゴリラ兵の姿が。

「エエー……」

「02、03ガツカリしない！　しても口にしない！　クジヨウ博士
！」

『ど、どうゆうことだ……熱感知機能が正常に機能していないのか
……？　いや、直前のテストでは異常はなかったハズ……だとしたら
……』

『熱感知センサー異常なし！』

『頭部人工制御指令核にも異常見られません！』

『あー……じゃ……やつべエ問題あるの接続だわ……。……ま、いつ
か……うん。CPよりγ護衛班！　唯ちゃん！　護衛頼むよー』

技術班からの報告が色々上がる。

恐らくは計測、制御を今この瞬間も行っているんだろう。クジヨウ
博士も大変だ。

……そして今、入った情報がひとつ。

「了解！　ブラッド分隊、これより対アラガミ戦に入る！　ナナちゃ
ん、ロミオ先輩行きます！　身内の恥 研究員の失敗は私が注ぎます!!」

「はーい！　いっくよー！」

「ちよおい……ブラッドー03からCP、神機兵は大丈夫なんスか!？」

『神機兵自己修復機能は既に作動しています』

『回復時間さえあれば修復、再起動できます』

「はー……スゲー……」

「おりやりやりやりやあー！」

ナナちゃんの神機から散弾が発射され、シユウを追う。

半分以上は外すが、一射が翼を掠り墜落。

2, 3発が続けて入る。

「やったあ！　特訓の成果かなー？　シエルちゃん、ありがと

うー！」

「ナナちゃんやったあ！」

「オレもシエルに教わろっかなあー」

ナナちゃんが近接形態に神機を戻して走り出す。

ロミオ先輩と私も近接形態を維持したままで走る、今のシユウは翼が結合崩壊し、さらに地面に叩き付けられた衝撃でのダメージが入っている。

動けない今、一気に叩くべきだ。

「よおっし！ ナナは右、オレ左腕な！ 唯は顔面行ってくれー」

「分かりました！」

「任せて先輩！」

ナナちゃんがハンマーを点火させ、ついでにロミオ先輩がチャージクラッシュ。

左右からのタコ殴りにより両翼が折れたシユウの頭部を狙って跳躍。

空中で一回転し、神機の刃で斬りつける。

「うう……」

『シユウ沈黙しました』

……コレやったあとの頭に血が上った後グラあつとくる頭痛はまだ慣れない……。

ひよつとしたら自分耐G能力が雑魚いのかも……と思う。

いや……この場合は三半規管が弱いのか？ 前庭だか何だかが弱いかもしれない。

一体他のロングブレード使いはどうやってこの逆流感に耐えているのか……今度隊長に聞いてみよう。

「こちらブラッドー05、悪い！ コンゴウがそっち行った！ 迎撃用意できてるか!？」

「ここでコンゴウ誘導担当だったギルさんが戻ってくる……らしい。」

しかもコンゴウごと

戦況だけを見るならばこっちは今シユウを倒したばかりだから手は空いている。

……だが。

『神機兵再起動プログラムに入りました。第1フェイズクリア、完全起動まで残り30!』

「ギルさん来ちゃえ!!」

30秒位だったらどうにかなるでしょ多分おそらくきつと。

……という、根拠のない自信が湧いている。

ウエアラブル端末がアラガミとギルさんを拡大、そして投影。

通常種コンゴウを後退射撃しながら誘導中のギルさん……撃つて、避けて、撃つて走ってるみたいだ。

このままだと40から50秒ほどで合流するだろう。

『予測より早い……!? 神機兵再起動、同時にコンゴウを捕捉! 交

戦を開始します!』

『副隊長、頭上に注意を!』

「はい!?!」

フランさんと技術班の計測員さんの叫ぶ声が混合する。

ナニヲ言っているんだろーなあ……という薄ら寒い予感を感じつつ頭上を見上げると……。

……そこには元気よく頭上を跳躍していく神機兵君のお姿が。

「……げっほ……口の中じやりじやりする……」

『着地点が頭上からズレただけでもマシです。真下に居れば肉片だったんですからね……生きてて良かったですね』

「……仰せの通りデス……」

何故かフランさんが不満そうだ。

着地地点位言ってくれてもいいじゃないの神機兵……。そんな神機兵ですが、コンゴウを見るや否や同族——いや、討伐対象と見抜いたらしく一直線に向かって走り出す。

相変わらず巨体に似合わぬ良く分からない速度で。

「ギルさん退避してくださいー！　神機兵γ交戦！」エンゲージ

状況はまさしくゴリラゴリラそしてゴリラ。

クジヨウ博士の応援にも熱が入ってくる。

γ君は直進、だがコンゴウは何かデケエ息を吐いて反撃してくる。

人間だったらそこで装甲展開か回避行動に出るところだが……。γ君は違った。

神機兵γはそこで大きく跳躍すると、空中で一回転し、刃をアラガミへと叩き付ける。

『コンゴウ沈黙しました』

『よし！　よし！　よし!!　いやったあ!』

『やった……。だが……。今の動作はプログラムには……。』

『至急、思考制御モジュールを確認します!』

CPでは冷静にオペレートを続けるフランさん。

歓喜を隠せないと言ったクジヨウ博士をはじめとした研究員たち……。

「コンゴウを一撃かよ……。!」

「すっごー……」

驚きを隠せない、と言った表情のロミオ先輩とナナちゃん。

……。だけど、私には素直に喜ぶことができなかった。

今の神機兵の動作を見れば分かる。

……。模倣した。

模倣、された……。

アレは今さつき正に、シユウの顔面斬りをやった時……私がやった動作だった。

多分神機兵は何らかのセンサー、もしくは受容器官で今の私の動きを見て……一瞬で、模倣してやってのけた。

……そう……私が……。

………一週間ぐらいかけて……マスターした刀法を……一瞬で模倣……。

……。

……神機兵の方が、私よりもカシコイんですかそうですかふうん……良かったね……。

こつちは未だに毎回アレやる度に軽い頭痛に襲われているのに、γ君は全然気にしてないっぽい。

オイルも生態部分を満たす疑似体液の逆流も気にしない。それが神機兵の様だ。

『続いて小型種討伐テストに入りたいと思います。えー……みなさん、この調子でどんどんテストを続けましょう！』

『神機兵α。対象を撃破……すまない、脚部に軽度損傷を受けた』

『ええ!? ……そ、そんなあ……』

『……ブラッドー01、軽度損傷について詳細の報告を。目視できる範囲で構いません』

『了解。……脚部関節部位の装甲が破損、その下の生体組織にまで裂傷が及んでいる。半分はダメージを負ったときに受けたものだが、装甲が喰い込んで裂けた部分もある。……コレはオイル……なのか？ 恐らくオイルか疑似体液物質が漏れ出ている……こんな感じだが

他に説明が必要ならば捕捉する』

『十分。損傷を確認しました。神機兵の自己修復は不可能と判断。αはフライアに帰還……で、どうツスカチーフ?』

『え……ええ神威君そうしましょう……ああ……やっぱり……やっぱり関節が……』

『関節かあ……』

『関節ですね……』

『トウルントウルンにしすぎちゃったみたいだよねー! あつははははははー! ……いやー、面目ないっ!』

「お前の所為か……」

クソ兄貴 いつか殺そう 家族なら

身内の恥は この手で屠る

……と、うつすら心に誓った。

時だった。

「お、おい……なあ唯」

「何ですか先輩」

「いや、まずさっきの神機兵の攻撃の巻き添えになったギルがコンゴウの下から這い出してきたぞ……ってこととな……」

「本当……? じゃあすぐに助けにとどめ刺しにいってあげないとね!」

「ナナちゃん行かないで!」

「止めないで唯ちゃん!」

「おいナナやめろってば……あ、あとそれからさ……。気のせいだといいんだけさ……」。

……なあ、あの雲……なんか………不自然に赤くないか？」



「ブラッドはまだ現場か!？」

管制室へブラッド隊長——ジュリウス・ヴィスコンティが帰投した
まま、と言った風情で駆け込んでくる。

「はい、神機兵βおよびγはまだテストを実行中ですが……」

『こちら06！ 神機兵β背部大きく損傷！ フライア判断願います！』

「背部だと!？」

戦況を画面で眺めていた九条博士が息を呑む。

同じく研究側であろう、モニターをしていた観測員たちが焦りを浮かべた口調で追隨した。

「背部損傷具合は!？」

「まずいですよ……背中には……!？」

マイクの近く——モニターの近くに立っていた研究員、神威ヒロキが通信機のスイッチを入れる。

シエル・アランソンに通信が繋がった。

「CPからブラッド06。アランソンさん、君の主観でいい……損傷度合の詳細を報告してくれ」

『はい……。神機兵の背中が……エンブレムより下から腰にかけての部分が……何と言っているのか……まるで、結合崩壊したかの様になっています!』

恐ろくかなり動揺しているのだろう、常に冷静であるシエルの声は、狼狽を隠しきれていないようだった。

「β応答ありません!？」

「外部入力……駄目だ、人工コア応えません。起動不能」

「……お、おいどうゆうことだ!? 説明しろ!!」

技術的な話が理解できない……が、研究員たちのただならぬ様子を見たグレムが焦り出す。

ヒロキは表情に焦りを浮かべつつ、上官へと向かい直る。

「背中がアラガミの攻撃……多分反撃により結合崩壊を起こした様です」

「ああ、だろうな。だがそれが何だ!？」

「……局長、アレだけ巨大なモノを動かしているんです。———こう考えて下さい。神機の制御はアーティフィシャルCNS1個で事

足りません。ですが神機兵はいわば『超巨大神機』……。よって、1台につき人工コアを3個使用しています……。その埋入箇所は頭部、左腕……。そして背部」

「……まさか」

「結合崩壊が再生しない、つまり自己修復が不可能な状態……。恐らくは背部コア損傷の可能性があると予測できます」

「何だと……!?!? ……だが待て、たかがコア1つだろうか!? 動かそうと思えば動かせるんだらうな!?!?」

「……無理です」

「他のコアがまだ生きているんだらうが!?!」

グレムの口調に必死さが滲み始める。

「3つのコアはお互いが連携しあって動いている。現段階では1つ制御不能になったところで他2つで代替できるほどの開発は進んでいない」

「……ということとは、神機兵はまるで動かん、ということか!?!」

「……残念ながら……!?!」

ガン、とグレムが机を蹴とばす音が響いた。

「アレほど巨大なモノがいつまでも動かないだと!?! ……小一時間も経ってみろ、あつという間にアラガミ共の餌だらうが!?!?」

「神機兵β活動を停止!」

「駄目です、どうやっても動かせない!!」

技術員たちの悲鳴のような声上がる。

「……聞こえた通りですシエルさん。アラガミを撃退し、神機兵の護衛に回って下さい」

「待てフラン!!」

ジュリウスの切羽詰まったような怒声が響き、フランは顔をしかめた。

……どうしたのだらう、一体。

女神だ何だ言っている時以外は……極めて冷静なこの青年が声を荒げている。

それが、既に何か尋常ならざる事態を予感させる。

「帰投途中で『赤い雲』を見かけた！……アレはおそらく……」

「……まさか……」

フラングが地上気象観測データの検索を始める。

そして見つける。

試験場に選んだ地形。

一帯を覆う分厚い雲。

よく目を凝らして気づく。

その積乱雲の層の奥に——赤い雲が隠れていた……ことに。

「ブラッド聞こえるか!?!」

『何ですかフランサーン……どうせまたダメ出しか悪口でしょ……もう聞きたくないんですけど……って、アレ!? 隊長!? 何でそこから連絡……』

「ブラッド総員即時退避! 一刻を争うぞ!」

『や、やっぱあの赤い雲ヤバイ奴ですよね……そ、そうですよね……はあ……デスヨネー……どうしていつもこんなことに……』

『ほらな! やっぱ幻覚じゃなかったじゃん!! だから言ったじゃんオレ!!』

『ねえ隊長……やっぱりさー……アレ、赤乱雲、ってやつなの?』

『……痛え……』

「見え……ているのか!?!」

目視が可能な距離にブラッド隊員が存在する……。

その事実にも、ジュリウスの焦りが増す。

「まだ間に合う! 赤い雨が来るぞ! 退避し——」

『——既に赤い雨が降り始めました。ここからの移動は困難です』
「なっ……………」

シエル居る場所では、既に雨が降り始めている。

…………その雨は、死をもたらす病の水源。

「何故言わなかった……………」

『申し訳ありません…………空は赤かったのですが…………』

「シエル…………!!」

『テツキリ…………コレが…………噂に聞く…………夕焼けなのかと…………』

「それ違う!!」

シエル・アランソン16歳。

軍事訓練は積んだけど、生まれてこの方名家の令嬢。正真正銘の箱入り娘であった。

『ちよ、え…………ええ!? シエルちゃん!? マジデスカ!?』

『マジ…………かよ…………?』

『…………』

『待ってろ! オペレーター、すぐに位置情報送信してくれ! 救援に行くー!』

『おい、待てよギル! 勝手に——』

「フラン、輸送部隊の状況は!？」

「……輸送部隊……」

「……駄目です。周囲にアラガミの反応が多数あります、単体での救出は不可能です!」

「こちらジュリウス。ブラッド各員着用、及び携行しシエルの救出に向かってくれ!!」

眼前で取り交わされる戦闘員たちの通信の連打。

ソレに、一時的に計器をチェックすることに気を取られていた観測員たちが反応する。

「お待ちください大尉! 現状の防護服は戦闘を想定して制作されていない! 破損の恐れがあります!」

「……聞いた通りだ、だからなるべくアラガミとの交戦は避けるように心がける、シエルはその場で雨を凌ぎつつ待機、救援を待て!!」

「おい、勝手な命令を出すな!!」

横からの一喝。

グレム局長——フライアの最高責任者がジュリウスの言を遮る怒声を張り上げた。

「神機兵が最優先だろう! おい、アラガミに傷つけられないように守り続けろ!」

「馬鹿な、赤い雨の中では戦い様がない!」

「俺がここの最高責任者だ!! いいから守れ!! 神機兵を守れ!!」

「人命軽視も甚だしい! あの雨の恐ろしさはあなたもよく知っているハズだ!!」

「……!」

「じ、自分も局長と同意見です!!」

グレムとジュリウス——フライア最高権力を握る男と世界最高峰の実力を持つ神機使い。

それぞれ異なってはいる者の、威圧感を纏う二名の言い争いに、口を挟む者が居た。

先ほどから、データ観測を行っている技術員だった。

視線だけで人を殺せそうな程睨み付けてくるジュリウス相手に、技術員は竦みそうになりながら反論をぶつける。

「大尉の提示した救援案では神機兵βを見捨てることになる!! 神機兵のデータは全部揃っていないければ意味がない!! このままではブラックボックスの回収もままならずアラガミの餌になる……!」

分かってているんでしょ!? そうすればフライアは何の成果も出せなかったことになる!

そうなればブラッドも——」

「や、やめなさい……! 上官同士の会話に口を挟むなんて……!」

「ここにはブラッドに本当の家族が居る人がいるんだ!! 神機兵を見捨てるということは『そうゆう』ことだ!

シエルさんには申し訳ない……でも……! ブラッド全員を、フライアのことを……考えるのなら……神機兵を見捨ててはいけないということ位……」

「……」

「あ、あなただって理解しているハズでしょう!! どうか……どうか……! より多くを救う選択をして下さい!!」

「……言いたいことはそれだけか?」

「っ……」

「それでも俺は——」

『隊長……隊長の命令には従えませんが』

「……シエル……？」

『救援は……不要です……』

不十分な装備での救援活動は高確率で『赤い雨』の二次被害を招きます。よって、局長の命令を優先し……各部隊は現場で待機すべきだと考えます』

淡々と紡がれ続ける声。

その背景には既に、雨が地面を叩く音、水が空から降り注ぐ音が奏でられている。

「シエル……！」

『副隊長、聞こえていますか……？ 貴女が任務の前に言ってくれたこと……覚えていますか？』

一刻も早く神機兵を完成たい——と。その為には……多少の犠牲でさえも無視して進むのだと……。

ここでβのブラックボックスが回収できなければ……開発に遅れが出る、と、判断します……』

「……」

シエルの言葉は正論だった。

だが、ソレは正し過ぎる——何を犠牲にしても、前に進め、と言う。

……たとえば、それが自分の命だったとしても。

そんな固い『意志』すら感じさせるような言葉だった。

『だから私は……私は……絶対に、ここで神機兵を守り抜きます！
ソレが果たすべき命令です！』

だから……！！ ……だからっ！！』

そこで、シエルの感情の堰が切れたのだろう。

鏡面の様に静まり返っていた水面に、波紋が広がるように。

シエルの口調が……だんだんと、少女のそれへと変わっていく。

『……ああ……そうだったんだ……』

軍律と規律、知識と知性。命令には絶対従順という固い決意。

ソレで鎧われた何かが、静かに瓦解していくようだった。

後に残ったのは。

まるで、幼い子供の声。

『だから私は……命令を守ろうとしていた……だから………私は
……』

「シエル、もういい……！ それ以上話すな……」

『……私の意志は何処にあるのだろうか……』

でも……違いました……ずっと、ここに……あった。

望まれていたんじゃない……私が……私自身が、望んでいたこと
だった……！

規律正しくあることも、命令には従順であることも……全部自分の

意志の形だった！

ようやく分かりました。

もしかしたら……そう在るべきだと、誘導された結果なのかもしれない。

もしかしたら、残された遺志を自分の意志と勘違いした結果なのかもしれない。

でも……それでも』

固い殻を割ったのは。

他の誰でもない——きっとソレは彼女の自身。

『ソレがどんな形をしていても……きっと『彼ら』へ、繋がってる！』

更新された任務を果たします。

その短い言葉と共に——通信を切断する音がプツリと残った。



……ド偉いことになってんじゃないですかあ……。

「ゆうーいいいいーちゃああああん?!?!?」

「わ、私のせいですかあ!? 私が悪いんですかあ!? ご、ごめんな
さああああいー!」

「シエルちゃんに! 出撃前に!! 何、言ったのーーー!?!?」

「いやちよつと別にそんな変な事は言つてな」

「凄く思いつめてるよ!? 追い詰めるようなこと言ったんでしょー!?
シエルちゃん最後悟つてたよ!? アレはいけない!! もの凄くい
けないよ!!」

「おっしやる通りだよお……! シエルちゃんもう何でそうなっちゃ
うのー……! もー! もー!」

「やめろってナナ! コイツを責めるよつか先にやることがあるだろ
!」

「ろ、ロミオ先輩い……!」

「コイツを吊し上げるのはこの状況を何とかした後だ!!」

「結局吊るんですかあ!? このヒトデナシー!」

「うるせえ馬鹿あ! 関係修復の機会まで作ってやったのに裏目に出

るなんて……そんな展開想像できるかー！」

「ぐうの音も出ない!!」

「あ、何か降ってきた」

「キタアアア！ 遂に！ 赤い！ 雨が!! 降ってきたんですね!!
うわああああ」

「だ、大丈夫だよ……よく見ろまだ水透明！ これ普通の雨！」

「赤くなるのも時間の問題かな」

「ひいひい！」

「小言合戦は終わったか、終わったな。オペレーターから情報が来た。
シエルを助けに行くぞー！」

「ギルさん!?!」

マジ唐突すぎるわこの男……。

「ちよつと待って下さい死に急いでるんですか貴方はー！」

「行くなら今だ、隊長も言ってただろ、急行しろって」

「そう……ですけどちよつと待……」

「待てよギル！」

ロミオ先輩が珍しく、声を荒げて掴みかかりに行く。

「聞いてなかったのかよ?! この防護服は戦闘想定されてない……そ
したら確実に赤い雨を浴びるってことだろ……!」

「だったら何だ、見捨てるって言うのか？」

「……そうは言ってない……」

「アイツの居る場所はもう赤い雨が降ってるんだ！ 早くしねえと手
遅れになる！」

「ちよつと二人とも……」

物凄い剣幕で開始される男性陣の口撃合戦に……何とか間に入っ
て止めようとしてみる。

「じゃあお前……アイツを助けに行くまでにアラガミと戦闘ないって言い切れんのかよ!？」

「……確証はない。だが戦闘を避けることはできるはずだ」

「そんな訳の分かんない予測に仲間の命まで賭けられるのかよ……!」

オレはそんな分の悪い賭けに乗るつもりはない!」

「なら……ここで仲間を見捨てるって言うのか!？」

「馬鹿言うな! オレだって……オレだってシエルを助けたいよ!!」

……だけど……!」

「お前に目の前で仲間を失うことの意味が分かるのか!？」

「……っ!」

「……だったら、お前には分かるのかよ……!」

「……」

「目の前で仲間を失うってことが……分かるって言うんだったら……ちよつと考えれば分かるだろーが……」

今『ブラッド』で最悪のことは、全員全滅しちゃうことで! ジュリウスだけ残してブラッドが全滅するってことで……! ゴリラでもちよつと考えりゃわかんだろ!?! 過去に何があつたか知らないけど、お前もブラッドのゴッドイーターだったら……過去ばつかに見えないで未来のことも考えろ大馬鹿野郎!!」

「俺は……!」

「黙って二人共」

白熱しかけた二人の口論を取めたのは……底冷えのするくらい、静かなナナちゃんの声だった。

「分かり切ったことばかり並べないで、そんなこと言われなくても分かっているから。……あと個人的な感情ばかり吐き出すのもやめて。今そんなことやってる場合じゃないよね? 分かっているでしょ?」

……音声記録は全部ログに残っちゃうんだよ?」

「……」

「……」

「もつと責任のある言動を心がけて……今、決定権を持っているのは、誰？ ギル？ ロミオ先輩？ 私？」

「違うでしょ。現場の指揮権を持っているのは誰？ ……更に今は司令部からの命令に『混乱』が発生している状況で……決定権を持っているのは、誰？」

湿る空気。

灰色の混じった赤い空。冷たい雨が降りしきる中で……3つの視線がゆつくりと私の方を向く。

沈黙を保ったままで。

「貴女だよ、副隊長」

「私……？」

「そう、今は隊長にも頼れない。……簡単じゃないけど、シンプルで分かり易いな選択。」

……貴女が決めて、『命令』を出して……副隊長」

「……」

「どつちを選んでも——私たちは命令に従うから。そうだよね？ ロミオ先輩、ギル？」

「……」

「……ああ、そうだ」

まだ納得はしていない、でも反論もしない——という感じのロミオ先輩と、やり切れないものを抑え込んで頷くギルさん。ナナちゃんだけが、真っ直ぐな目で私に決断を求めてきている。

……多分コレが、私が副隊長としての初めての決断。

誰にも頼ることのない——隊長に頼ることのできない状況での……初めての裁量。

助げたいに、決まっている。

……でも現実問題として、ロミオ先輩が言うことが正しい——技術員の人も言っていた通り、防護服は戦闘を想定していない。ゴツドイーターの戦闘は苛烈を極める、服の破損を恐れて戦って倒せる程アラガミは甘い相手じゃない。

じゃあどうすればいい？

……赤い雨を浴びることが無く、アラガミとの戦闘を可能にして……シエルちゃんを救えるような方法が……何か……。

ふと上げた視線の先には、巨大な兵器——護衛対象だった神機兵が起立している。

最新鋭の兵器、人類の希望、人の命に頼らないアラガミへの対抗処置——が、今は立ちはだかって、シエルちゃんを危機に追い詰めている——。

そんな複雑な感情が突沸した。

そして、気づく。

「……雨……弾いてる……?？」

phase39 ドール・レスキュー

「副隊長!! 無茶だ危険すぎ——」

「気にすんな唯! ギルに余計な発言はさせねえ!!」

「無茶って何かなー。あーあーあーわたし分かんないなー」

神機兵の背部——搭乗口を神機を入れて切断。装甲を引きはがす。内部にあったコンソールが露出。それを操作し、搭乗口の開放を指示。

……え、パスワード入力!?

……ダメ元で女神の名前を入力……。

……うわあ、まさかの大ヒット……。

これ設計した人絶対隊長の同志だ……。せめて有人型の設計者の方にしてあげなよ……と内心誰にも聞こえないツツコミを入れながらハッチが開くの見守る。

気圧が平衡化する時の音と共に軽く風を浴び、露わになった中を確認した。

「……行ける……」

……と思う……多分。

破損部位はない、システムダウンをしている可能性も薄い。

あとは、コレを再稼働に持っていくだけだ。

それには操縦権をこちらのものにできるか、が問題。

搭乗口に乗り込み、操縦席に座る。

センサーでも搭載されているのか……私の体重を感知した神機兵の背部が、音を立てて閉まった。

機械と生体組織、油と鉄の臭さが入り混じった妙な臭気が鼻につく。

……操縦の仕方、操作の仕方はぶっちゃけあまり自信が無い。

だが、事前に渡された神機兵の資料はしつかり読み込んで来た……名残惜しそうにレア博士が追記していた有人用の項目も。

一抹どころではない、心の大半を占める不安を残しながら……スピーカーに向かって声を張り上げる。

……虚勢がバレてなければ、いいんだけど。

「ブラッド―04から02, 03, 05へ！ 各員、赤い雨を凌げる場所まで待機！ 雨が止み次第フライアへと帰還せよ！」

「ブラッド―04、これよりシエル・アランソンの救援に向かう！」

「02了解！」

「03了解、救援直ちに赤い雨を凌げる場所を探します！」

「おい待て副——」

「ロミオ先輩ギルの口に何か突っ込んで！」

「任せろ！」

『04待て！ 単騎での行動は危険過ぎる！』

「だからこそです、隊長。最悪の事態——ブラッド隊の全滅という状況を避けるため02, 03, 05はここに置いておきます！ これならば、もし私とシエルちゃんが未帰還になったとしても……『ブラッド』は残ります！」

『……許可できない！』

音声ログには問題になるような発言は残していない。それに、ピーコン反応を辿っただけでは私が神機兵の近くに残留しているようにしか見えないハズ。

隊長が事態を把握できないということは、他のみんなも同じなハ

ズ。

フランさんや技術員、そして上官全員を欺いていることに、ちくりと一瞬だけ心が痛む。

……けど、いいよね？

うん、いいよね。悪いことに使う訳じゃないんだし。

「それに私は……赤い雨を食らうつもりも、アラガミに負けて死ぬつもりも毛頭ありません！」

『……副隊長……？』

『……おいまさか貴様また……』

『また髪の話してる……』

通信をブチつと切る。

うん、コレで大丈夫。ログには残らない、平気なハズ……。

……果たしてコレだけ訳の分からない機械を並べられて私が操縦できるのか、もう全然不安しかない状況だけどきつと何とかなるよね、という無理やり作ったポジティブシンキングで神機兵を起動。神機兵のシステムが次々に起動し——順調に各部が起き上がってくるような予感がする。

……操縦権をこちらのものに、という判断は一応間違っていないかった……だが油断も安心もまだ遠い。

次々に立ち上がる計器は、神機兵がいつでも動けることを示していた。

……だが。

肝心な操縦桿が、まるで凍り付いたかのように動かせない。

「ですよねー……はあ……そうだよね……うん……そんな順調に上手

何と変えても果たそうとするだろう。
……私が、そう言っちゃったんだから。
ロミオ先輩に強いと評された様に。

……多少の犠牲にさえ目を瞑ってでも、未来の誰かを救う決断をし
ろ、と。

……その意味、全然分かっていなかった。
多少の犠牲の意味を……全然。

なのに、シエルちゃんは、その言葉を信じて。

……私を……信じて。

「動いて……動いて神機兵……！」

今この瞬間も、神機兵を守り続けている――。

「神機……兵……」

頭の中で一つの可能性が浮上する。

そもそも……神機兵って何だっけ、と。

ギルさんも、兄も……言っていた。

制御にはアーティフィシャルCNSが使用されている――と。

……つまり、ソレは……。

ソレは……。

「……絶対に……動いてよ……！」

動かないなら……力づくでも動かすしかない。

一瞬だけ迷いが生じたが……思考を続けることを放棄した。

考えたって判断材料が足りなすぎた。納得がいくまで悠長に思考している時間が勿体ない。ならここはイチかバチかの賭けに出よう

——と思った。

今まで色々な不運をブツ被ってきたんだから……こうゆう時だけでも幸運の女神様は微笑んでくれても良いハズだ。

反省の止まらない中で、感情だけが収束しようとしていた。

……やっぱり私は強くはなれない。

自分で言った『強さ』の意味が。

何と引き換えてでも、何かを犠牲にしても……ここで、目の前の救える仲間を犠牲にしても。

未来の誰かを救う事……なのだとしたら。

——それが、強さだと言うのなら。

……だったら。

だったら、私は。

「動きなさい……！」

理屈の上では——神機兵はデカくて自分で動く……神機。
だからコレなら通るハズ——だと思う。

確証も根拠も殆どない……ただ、本能だけで判断した。

正面に配置された操縦桿を力任せに引き抜く。

配線にされていたのは、電線に使用される金属コイルではなく……
オラクル由来の生態部品。

「根性見せなさい！ このっ……短足鉄屑スクラップゴリラあ!!」

ぼつかりと開いた空洞に、腕輪を入れる。

……何かが伸びて、腕輪に接続がされるような——よく知った感覚が腕の表面を伝う。

不幸中の幸いというか……覚悟していた痛みはなかった。

その代わりに、手の表面がまるで延長したかのような錯覚。ものすごい一体感を感じる……。

そして何かが動く音。足元を揺らすかなりの振動。ゆっくり上がっていくような感覚。

……やった。

……来た、動いた……動かせたんだ。

……そう安堵した私の目に、

神機兵のコクピットについて画面が点灯して起動と『あること』告知する。

『制御機構変更：成功：無人モード↓有人モード
カドウケウスシステム：自動起動：成功』

リモートコントロールを開始します』

「……………」



「一体何が起こっている!?!」

「さ、さっぱりです! 分かりません……!」

「使えんクジヨウだな貴様あ!」

「ひい!」

司令室は半ば混乱状態に陥っていた。

ただ、ジュリウスをはじめとした……各員、程度の差はあれども、何かうすら寒い嫌な予感だけは確かに感じ取っている。

そして、大抵の場合、それは予感ではなく……予知、もしくは予報と化す。

「フラン、ブラッドに通信を繋げられるか? ……副隊長がまた単独行動に走った……恐らくロクなことが起っていない!」

「駄目です……全員着信拒否。ついでに05、通信機断絶、恐らくは破壊されています」

「マクレイン隊員に何が起こっているのだね!?!」

「黙って下さい局長。そんなことより問題は唯とシエルの方だ!」

ブラッド隊長である青年はビックリするほど即答だった。

「マクレイン隊員に何が起こったんだね?!?! 無視していいのかジュリウス君!?! それでいいのか君は隊長だろうジュリウス君!?!」

極めて常識的な局長の言葉をガン無視スルーすることに決め込んだジュリウスは画面に目を凝らす。

そして、気づく。

「フラン……神機兵γに……異変があるぞ……何故勝手に起動している……?」

「この軌道ですと神機兵γ、神機兵βに向かっていきますね。接触は300秒後です」

軌道の予測、計算を叩きだすフランが予想進路を見せた。

だが、この状況でもまだ事態が飲み込めない。

……当然、真つ先に『ソレ』に気付いたのは……開発チーフである、クジヨウ博士だった。

頭の薄い中年男は両手で少ない髪を抱えてシャウト。

「ええ……エエー!? 何かもうエエー!? 何故ですか!? な、何故!? 何故勝手にい!? うわあああああああ!」

「クジヨウ君! クジヨウくーん!! 落ち着き給え!! 頭を筆るんじゃない!!」

「ま、まさかまさかそんなそんな……あ、あつ……ああああああつ!!
あああああああああ!!」

「クジヨウ博士?」

「……ついに狂いましたね。イワン先生。一名様、ご案内です」
『ヨロコンデー』

「あああああああ——ツ!!! やめてくれツ! そんな! 乱暴にしたらあああツ!!」

「クジヨウ君! クジヨウくーん!!」
荒れ狂うクジヨウ博士、止めるグレム局長。

中年男二人の絡みという誰も望まなかった光景を目にしたジュリウスは凍り付いた。

だがフランは極めて冷静だった。流石優良オペレーターのだけはある。

「……」

「●REC」

「らめえ! らめえええええ!! らめなのおおお! そんな乱暴に

したら……乱暴にしたらあ！こわれちゃうのおおおお！大事な神機兵壊れちゃうのおおおお!!」

「……クジヨウ博士……貴方のそうゆう所は嫌いじゃないが……今は空気を読んで頂きたい!!」

「省るなヴィスコンティ大尉!」

「……ああ無様……」

「なんでえ……ど、どうしてこんなことが……!? は、はははっ……有り得ない、有り得ない……こんなことは有り得ない……! 無人制御を有人制御に書き換える? 戦闘員の神機使いが……? 有り得ない……」

「こんなこと……こんなこと……! 技官じゃないとこんな芸当は出来ない……」

「そ、そう……技術官じゃなければ……技術……官……じゃ……なけ……れ……ば……」

「……技術官」

「……じゃ」

「なければ……か」

言葉にしている内に気づいてしまったのだろう。

部外者である三人、直属の上司であるクジヨウ博士。合計8つの瞳が……先ほどから驚くほど沈黙を保っていた彼らへと注がれる。

「……観測班として今回の作戦のモニターをしていた、技術員たちに。」

「こんなことも、あろうかと」

「か、神威君……? 嘘ですよね……じよ、冗談なのですよね……?」

クジヨウ博士の震えるような声を。

神機兵兵装開発チーム所属の青年技官、神威ヒロキは真正面から受け止めた。

「神機兵γには……！ 我が家の至宝……神が遣わしたマイエンジェルたる唯ちゃんの身体情報全部をインストール済みになってんだよおおおあああああああああ！！」

「うわあああああああ！！ あゝ あゝ ああああああああああッ！！！！」

「マジか」

「……マジですか」

「……」

叫ぶクジヨウ、無言のグレム。辛うじて事実を受け入れることに成功したジュリウス。

そしてドン引きするフラン。

「フライアって凄いねー！ 何だってデータ採取もバイタルチェックも事細かくやつてるじゃーん！ そう、神機兵には！ ……この世界に現存する愛する妹の全てのデータをつぎ込んでいる……！ あの子の年齢、身長、体重、肺活量、血液型、血圧、血糖値、白血球数、赤血球数、血色素量、平均赤血球容積e t c, e t c。爪の形からDNAの塩基配列まで……ッ！ テスト中の神機兵は全機唯ちゃん専用機になったと言っても過言じゃない！」

「かかかかかかか神威くうん……！ 君というニンゲンは……！ 君というニンゲンは……！」

「……おい、まさかソレが原因で止まったんじゃないだろうな？」「ナンノコトダカサツパリ分カリマセン」

瞬時に返されたそれは、完全無欠たる棒読みであった。

「3日続けて完徹した甲斐があったアっ!! いやー、念には念を入れとくモノだよねー」

「髪の毛抜きますよ神威君!？」

「貴様等は兄妹揃いも揃いおってこの……!!」

「時は来た！ 全リモートコントロールシステム作動！ これより神機兵有人型の遠隔操作性実験を行う！」

「了解!!」

ここぞとばかりに、端末をカタカタ言わせる技術員たち。

先ほどの3倍のスピードでキーを打ち込んでいる。そう、彼らはやればできる研究員。略してYDK。

「生態認証作動、通りました！」

「コネクト完了。制御機構変わります」

「コンフリクト解除、同時に遠隔操作支援プログラム『カドウケウス』

の正常起動を確認しました！」

「カドウケウスとの連結問題ナシ、リモートモード、システム作動！」

「いつでも行けます、お兄様!!」

「おっしや行くぜえええええ!!」

「何してんだこのシスコンがああああああ!! 私の無人機を返せええー!!」

「……うっわ……。」

「……うわあ」

「おい、ブラッドー06につなげ！ 神機兵βに乗り込め！ そうすればブラッドも神機兵も犠牲に出なくて済む！」

「残念ですが最愛の唯ちゃんの分しか間に合いませんデシタ、アシカラズ（棒）」

「こらあああああ!!」

「しかし、神威技官……コレは作動するのは良いのですが……中のパイロット……つまり妹さんには、通じないのでは？ 何が起こっているのか分からないのでは？」

「通信自分から切っちゃいましたもんね妹さん……内部スピーカーを今入れましたが……コレでデータを取れるかどうか」

「ノープロブレム。問題なし！ 俺は唯ちゃんを信じてる！」

「……お気持ちは分かりますがヒロキさあん……」

「俺は!! 唯ちゃんを!! 信じてる!!」

『な、ななななななニコレナニコレナニコレええええー！』
え、ええええええ!? どうして勝手に動くのー!? 怖あ! 怖ああ
ああ!? い、今あ! ガタって言った……ガタって言ったあ! 立っ
た! 絶対立ったあ! 立っちやったの? ……何でええええええ!?』

「……」
「……」
「……」

「……流石、技術中尉の妹さんです!」

「頼んでもないのに実況するとは……中々の逸材ですね!! 何の才能
かは分かりませんが!」

「超可愛いゼマイシスター!!」

「ブラッドー04、呼吸、心拍共に乱れています……。……乱れています」

「……副隊長……完全にパニックだったか……」

「もうどうにでもなあくれ……」

『ま、待って下さいい! ご、ゴリラって言ったの怒ってる……?』

お、怒ってますかあ!? そうですよね!?

うわあああごめんなさいごめんなさい! 謝りますからあ!

……ひどくしないでええ……!』

「副隊長が錯乱してるように見えコンテイ」

「遂に狂ったようですコーニユ」

「機械に話かけるとは末期だなこいつレムスロワ」

「おおーつと、ここでアラガミ発見です！ レッツ駆逐！ ビバ抹殺！
ハイ行っちゃおー！」

「了解!!」

「神機兵制御コア、コマンド入力完了！」

「戦闘モーシヨン入ります。5, 4, 3……2, 1……！」

「ぶっ殺せええええ!!!」

『ひいいい!? う、動いたあ!? ど、どどどどうして武器じゃない方の手で握りつぶしてんですかあ!?』

握力!? 握力!? 何ねじ切ったの……!? っていうか……手の感触がリアルに伝わってきたああ……やだ気持ち悪い……! な、何かバタバタするんですけどおおお! 何でこんなあ!?

もうやだあ! ……やだこんなの……! ……助けてください……隊長……!』

「呼んでますよ、ジユリウスさん」

「この状況で俺にどうしろと言うんだ副隊長……俺は何も出来ないだろ副隊長……」

「……正論ですね……」

「神威いいいいい! 貴様何ということをしてからに……! ああああ

あ! もういい! 貴様の処分は後で言い渡す!!」

「どうぞ局長、何なりと! 妹の為なら、この命! 惜しくも痒くもありませんー!」

「今は全力で何とかしろ!! というか、してやれ!! 貴様の妹と現場のブラッドをな!!」

「了解局長、お任せください！」

「自信满满ですねお兄様！」

「流石ですお兄様！」

モニターを見ると神機兵は、もう一体の神機兵に……仲間の元へと辿り着いていた。

「……………本部に何を言われるか……………」

頭を抱えるグレムに、青年の声は応える。

「んー……まあ……そこは逆に考えればいいんじゃないツスカー？
局長。」

……状況、記録映像、そして音声ログだけを見れば証拠としては十分であるはずです。ブラッド副隊長の神威唯は確かにこう言った『これよりシエル・アランソンの救援に向かう』——と」

「……………」

「ソレですよ局長、神機兵βの回収でも、破損神機兵の護衛でもない。シエル・アランソンの救援に行くと言った。つまりそれは……神機使いが神機使いとして、命令でもない、任務でもない……自らの意志で『仲間』を救おうと……助けようとした、判断」

「……………」

神機兵γは、屈みこみまるで、何かを雨から守るように空間を作る。何よりも守りたい……そう願うものを庇うかのように。

「今、戦っている現役の『神機使い』が仲間を救うために、とリスクを覚悟して神機兵に乗り込み『神機使い』を救いに行った。」

——果たしてこの事実を見ても……本部の退役神機使いの方々は、『有人』神機兵を『非人道的』だと、難色を示すでしょうか？」

『うえええ……何か気持ち悪い……——えー……ブラッドー04から本部……うぷっ……か、神機兵のすぴーかーって何処……あ、コレか……んうっ……うわぁ喉まで来たぁ……』

……シエルちゃん？ 聞こえる？ ……な、何とかなったねーあはは……うっ……。

……んく……。

……シエルちゃん……帰ろう……？』



「01からブラッド各員！ 現時刻を以て神機兵運用テストの終了を
通達する！」

『おい、隊長！ 待てあいつらはどうなったんだ!? ソレを知らせ—
—』

『……もう……うるさいギルだなく……。あーあーあー私何か急に
素振りがしたくなつちやつたな……』

そおーれえー！ よつこいしよー！ えーいつ!!』

『ナナ、ナナ……ソレ流石にヤバいつてナ……ナナああああ!? あ、
あ——ツ！ 頭はヤバい！ 頭はヤバいつてナナやめてギル避け
ろおおおおお！』

「赤い雨は避けているか？」

『はい、大丈夫です！ あのねー隊長ー副隊長がね……神機兵
に乗っていつちやつたー』

「問題ない。その件は既に解決した……二人共無事だ」

『やったーっ！ 先輩！ ……唯ちゃん、ちゃんとシエルちゃん助け
られたんだって……！』

……良かったあ……！』

『……ギル……おい、息しろよ……ギル……！ 何か耳からヤベエ汁
出てるけど大丈夫だよな？ なあギル……何か言ってくれよ……？
頼むからさあ……！』

『……………ケ』

『け?』

『……………ケ……………イト……………さ……………ん……………』

『誰!?!』

『さあ? 大方昔の女の名前じゃない? 死んでもどうでもいいことだから気にしないけど。それよりくく戦場で恋人とかーお母さんとかー呼ぶのはもう駄目ってコトだよねっ!』

『ギル死ぬなあああ!!』

「ブラッド隊、全員無事を確認した!」

「良かった……………本当に……………良かった……………。……………皆さん……………無事で何よりです」

「おいちよつと待てえ! 05に何をした03!? マクレイン隊員生きているのか!? コレ以上犠牲者増やしてどうするジュリウス君!」

「戦闘不能ではありませんが、死亡ではないかと……………多分」

「Pー66適合者リスト、ピックアップしておきます」

「助かる、フラン」

「いえ、お気になさらず」

「やってる場合かね!」

「ははっ……………ハゲそうな奴、見つけたあ……………」

「あら、神機兵テストと聞いたのですが……。……。色々問題があったようですね……。ジュリウス？」

「先生!! 先生!! 先生!!!」

「よしよしよしジュリウス……。よしよしよしよしよし……。……。それで、ジュリウス……。貴方の、家族……。そして、私の大切な子供たちは、皆……。無事ですか？」

「はい先生! 当然ですラケル先生!」

「ああ……。またヤヤコシイのが……。! 状況を混乱させかねない奴が……。!」

「ら、らららららラケル博士え!? こ、こんなところに居らっしやるなんてーっ! やった今日は厄日だと思っていたけどラケル博士に免じて帳消しですー! 髪生える!! 髪生える!!」

「それが生えないんだよねーチーフ……。はいはい皆ー。女神が降臨してきたよーヨカッタネー」

「フライアの女神様あ!」

「アワーゴツデスラケル先生!! これで勝つる!」

「どうなっとなるんだフライアは……」

「恐れながら局長、コレが、貴方の部下達です」

「」

「あら……？ 何ということでしょう……シエルとあの子に……小型種と中型種の群れが向かっているではありませんか……。……そして、今出撃できる神を喰らいし戦士は貴方しか居ない様ですよジュリウス？ ……私のジュリウス？」

「分かっていますラケル先生！」

「それでこそ私の見込んだ『神の御子』……新たなる時代の創始者にして、やがて世界を統べる王となる『器』……。さあ、ジュリウス？ 貴方の力で……。貴方の家族を……。守りなさい。……。できるでしょう？ だってあなたは……。ジュリウスなのだから」

「はい先生！ ラケル先生！」

「おい、何をする気だヴィスコンティ大尉」

「……。何したつてもう……。どうでもいいですよ。マザコンティ大尉」

「お待ちください会長！ 何を……。何をするというのです?!」

「クジヨウ博士、ラケル先生を頼む」

「会長……。?!」

「……。まさか、あの予備動作……。!? まさか……。! やばい皆伏せろ!!」

「さあ……。お征きなさい、ジュリウス。……。君に決めたあ！」

「はい先生!! 私は……。俺は……。! 僕は……。!! あなたの為なら……

——飛べる!!」

ガツシヤアアアアアン。

「ジュリウスくうううううん!! 戻って来なさい!! ジュリウスくううううううん!!」

「素晴らしい跳躍力ですジュリウス……! あら、ガラスが粉々になっちゃいましたね。これも王の為の尊き『犠牲』にして『生贄』……そう、全ては祭壇に祀られた『糧』となる——ということにしておきましょう」

「修理費……経費で落ちますかね……コレ……」

「あああああーっ! ラケル先生にガラスの破片が降り注いでしまっ! 何を棒立ちしているのです皆さん! 今こそファンクラブに意地を見せるときーっ! ラケル先生の肉壁となるのです! 我らの女神に傷ひとつ負わせてはならないんだああああ!!」

「「「うおおおおおおお!!」」」

「こんな狭い場所でスクラムを組むなあ! 心意気だけで十分だろ!!」

「あつははは……隊長さんスゲー……足早エエ……中型種もう全部倒しちゃったよ強いねこの人……うん、何かもう……はい撤収ー! お疲れさまでした!!」

『フライア聞こえますか!? こちらブラッドー06……赤い雨による脅威は去ったと判断……これより副隊長を神機兵から降ろします!』

副隊長……大丈夫ですか副隊長!』

「フライア了解しました。シエルさん、注意してください」

『こ……こちらブラッドー04……うつぷ……。生きてマース……し、シエルちゃんあんまりゆすらないでちよつと私今ヤバい状態だから……ひう……!』

『副隊長……し、しつかり! ……副……たい……ちよ……! 貴女という人は……本当に、本当に……!』

……君の行動は……理解に苦しみます……』

『気持ち悪い……ヤバいやバ……』

『こんな……こんな……!』

『シエルちゃ……うつ……』

『……副隊長? ……か、顔色が!』

『……もう無理……どっかに袋……袋……アハっ……もういいや……これで……ふれでたーふおーむう……』

『副隊長何を!? そんな所に顔をつ込んで……!』

『うゝ おおおおおおええええええ!! オゝ エエエエエエエエ』

その時、グレゴリー・ド・グレムスロワは思った。

命令違反に単独行動、さらには上官を欺こうとした罪……罰するべき点が多い。

だから帰ってきたら懲罰房にぶち込んでやろうと考えていたが……。

……年頃の少女が、それも数ヶ月前までごく普通に学生生活をしていた少女が……人間としてヤバいものまで吐いてゲロ塗れになった挙句、人間扱いすらされていない酷い持ち方で引きずられて来るのであれば……もう十分な罰が降りたように思えるのだった。

……流石に、懲罰房は勘弁してやろう。

そして、グレムはまだ幼い自らの愛娘を瞼の裏側に思い浮かべる。妻によく似た可愛らしい顔立ちのあどけない少女。

どうか、娘が年頃へと成長した暁には……。

絶つっつっつっつ対に……コイツみたいになつて欲しくねえな——……と、グレゴリー・ド・グレムスロワは、祈らずには……い

られなかった。

たとえ、祈る神は既に無い世界だとしても。



「……フライア……それは北ヨーロッパの神話で美と愛、豊饒と戦い……そして月の女神を表す名……その名にふさわしく優雅さを湛えつつも、この残酷なる世界を生きていくのに必要な無骨さ、そして強さ！ 気高さを持った要塞ツ！

僕は……！ 嗚呼僕はツ……！ あの神々しくも美しい！ 巨大な鉄がまるでツ！ この荒れ狂う大海に投げ出され……惑い、迷い、そして溺れながらもそれでも生き抜こうともがく人類をツ!! 救う為に叡智を結集して作り上げた『方舟』の様にも見えた……！」

「……フライアは巨大移動要塞……？ 美観は損なわれないにしても……そこそこ自衛能力があるっぽくつてすごく頑丈————だと思えます」

「否、気高く強く、そして華麗なのはそこで命を晒して戦っているだろうゴッドイーター達にも同じことが言える。彼ら『ブラッド』こそ……『血の力』とその具現化された能力……そう、まるで神機に纏う神の力を制御し、統率し……そして意志のままにと斬りあげる『ブラッドアーツ』。その熱き思いは——共に戦った戦友、ロシア支部のゴッドイーター達にも通じるものが有ったのだと言えます！ その結果、我々は悪の眷属——闇の化身とも言うべき強敵、感応種の討伐に成功した!! お互い助け合い、そして勝利を勝ち取るその姿！ そう、それこそが……！ それこそが……！ 騎士の！ 騎士達のたま」

「つゝ！……フライア所属の特殊部隊『ブラッド』は何か……血の力？ と……ブラッドアーツ？ とか言う技を使う神機使いで……それでロシア支部のゴッドイーターたちとの共闘を成功させ、感応種の討伐に成功した……かな？」

「感応種のコアは当然だがロシア支部の管轄に置かれたようです。彼らにとっては当然の報酬と言えるでしょう。またフライアが一時的に預かっていた人々はロシア支部のサテライト拠点を住処とし、苦しくとも、辛くとも、生きていくという道を選んだようです……そう、心に灯る一筋の光を目指して……皆自分の力でツ！ 立って生きるという道を選んだのですツ!! 僕は感じました……ああ、ここにもあったのだ、と。どんな苦境にも負けずに立ち向かって行く鋼の意志、それこそ……それこそツ！ 騎士のたまし」

「ええつと……ロシア支部は難民をサテライト拠点に受け入れて自治を許可した……みたいですよ……」

「以上、『エミール・フォン・シュトラスブルクのフライア遠征記』でした。ご静聴に感謝いたします」

「エミールからの報告を終わります……………。はあ……………」

ああああ！ もう！！ この馬鹿エミール！！ ちゃんと喋れない訳！？
なんで毎回毎回変な話し方するのよ馬鹿あ！！ 回りくどいのよ！！」

「ふつ…………エリナよ…………！ 回りくどいのもまた一興、なぜなら騎士には…………聞いている人間がより状況を伝えやすくするために！ 説明をするという必要があるからだ！」

「逆に分かりにくいのだ！！ もっと短く！ 簡潔に！ 話せないの！？
アホエミール！！」

「何と…………！？ 僕は…………僕は…………！ 逆に分かりにくかったのかッ！？ エミール・ショックー！」
「勝手にショック受けてなさいよボケエ！」

そこは雑多な部屋だった。

一見研究用の機材が多く置いてある部屋に見える。だが、よく見れば極東がまだ日本国と呼ばれていた頃の文化——盆栽や掛け軸、さらには重箱という代物まで置いてある部屋だった。

緑がかった髪の少女と、豪華でかつ華麗なゆるくウェーブのかかった若干偏った髪型の煌びやかな青年が言い争い？を発生させていた。

その口喧嘩とも、何とも言えないじゃれ付き合いを眺める——年齢

不詳の男の姿があった。

「報告ありがとうございます、エミール君。エリナ君も……通訳、ご苦労だったね。戻っていいよ」

「……失礼します」

エリナ、と呼ばれた少女が一礼して部屋を出ていく。

残された金髪の騎士——エミール・フォン・シュトラスブルクが口を開いた。

「さて……と、お疲れさまエミール君。それで……もう一つの件の方はどうだったのかな？」

「ああ、可能な限り調査してみました支部長。……やはり、溝は深そうです」

「そうか……やはり、な」

年齢不詳な男は眼鏡の位置をずらす。

逆光のせいで目元が隠れた。

「ロシア支部の極東支部に対しての心象はかなり悪いといっているでしょう。……無理もない。なぜなら2年前の『大防衛戦』で彼らの殆どは、アラガミと戦って死んでいるというよりかは……餓死者か凍死者になります。」

アラガミに殺されたと言うよりも、エイジス計画に殺された、という方がより正しいのかもしれないな」

「……」

「また本部の情報局がそのような思想を統制せずに、野放しにしてい

ることも一枚噛んでいよう。だとしたら成功ですな。本部は二度とロシア支部と極東支部が手を組み、何かを成そうとすることを……望むハズがありませんから」

「……だろうね」

年齢がハッキリしない男は大きく息を吐く。

他の場所から派遣されているゴツドイーターならともかく、生粋のロシア支部生まれ、ロシア支部育ちのゴツドイーターならば……極東を恨んでいても、おかしくはない。

ひよっとしたら目の前で家族や友人の悲惨な最期を目の当たりにしたのかもしれない。

エイジス計画さえ無ければ、と思っっているような激しい憎悪が……ないとは言い切れなかった。

だからこそ、エミールを送ったのだ。

人種は殆ど関係なくなつた現代だが、エミールの外見はゲルマン民族系である。

極東人らしくない……それだけで、相手を刺激せずには済むだろう、と踏んでの派遣だった。

「フツ……だがしかアし!! 今回の件で僕は悟つたツ! そう、人間は——人間同士は……! 同じ志を持ち、同じ理想を持つならば!! 隣に居るのがたとえ生まれた環境が違う人間でも——分かり合うことができる!」

そう! 共に戦い! 理解しあうことができるのだという事を!! 誰もが皆胸の内に秘めているモノ……それこそが——騎士道精神! 騎士の魂!!」

「……え? ああ、うん……あー、そうだねエー……うん」

「それさえ忘れなければ人類は負けない……己の弱さにも恐怖にも打ち勝つことができる！ そう僕は信じている!! そうと分かればこれから訓練を入れたので……榊博士！ これにて失礼仕るツ!!」

「お疲れさまだったね」

「そう、僕の……！ このエミール・フォン・シュトラスブルクの……！ 騎士道は……！ これからだあああああ!!」

「いやちよつと待とうかエミール君、そこは壁……壁だよ？ エミール君……？ ま、まままま待ちたまえ待て待つんだそんな所に騎士道はないよ!! 物理的に道はない!! 何をするんだやめるんだエミールうううう!!」

「ちえすとおおおおおおおおおおおお!!」

響くコンクリートの破壊音。

極東支部の日常の音。

誰かの雄たけびと支部長の絶叫。

今日も極東支部は平和だった。



痛む頭を支えながら満身創痍なギルバートは震える下半身で全身を支えながら例の携帯端末を掴んだ。

その足取りはまるで生まれたてのゴリラの様に覚束ない。

強打によつて固定されていた頭のギプスがズレ、頭部からは出血が漏れる。

だが、紅く染まっていく視界の中でも、その文章だけは決して見逃すことはできなかつた。

送り主も分からない、送信されたアドレスさえ辿れない、そのメッ
セージに目を通す。

『素敵な実験体生活を送っているだろう、貴様に朗報だ。』

極東支部で強力なアラガミの情報を得た。

極めて交戦記録の少ない個体だ——恐らくは極東支部の上層部で
すらまだ知らないだろう。

発見されたアラガミは、ハンニバル変異種

赤いカリギュラ——だ』

「赤い……カリギュラ……」

視界が赤く染まるのは、目に血が入っているせいか……精神のもらす興奮作用によるものなのか、その判断がつかないでいた。



目が覚めるとそこは……いつか見た。
綺麗な天井だった。

赤い空なんかじゃない。神機兵のあのくっせーコクピットでもない。

……消毒液の匂いと、清潔な綺麗な天井だった。

オボロげな記憶を辿っていく。

確か……私は……シエルちゃんを助けたかったんだ……。

赤い雨もアラガミも防ぐために、神機兵に乗った……とこまでは覚えてる。

そこから先がとても曖昧だ。

操縦桿ぶつ壊したら……気がついたら勝手に動いていた。

その動き方がヤバくてヤバくて……。

……気持ち悪くなっちゃって……。

えつと……それから……？

……それから……。

……。

「うわあああああああああつ!!!!」

スゴイ、記憶がアイマイダナー……。

結局、何も解決していないけど、全てを忘れると決めた私は。取りあえず時計を覗く。

現在深夜……まさかの夜1時。

寝なおそうかな、と考えてベッドに潜りこ……もうとした時、白衣の男性がちょうど部屋に入ってくる瞬間だった。

「あー……先生……おはようございます」

「んー、唯ちゃんおはようございます。……どうかな気分は？ バイタルチェックに来ただけど……もう必要なさそうだねえ……」

「はい……、あのー先生……私……どうして担ぎ込まれたんでしょーかー……？」

「脱水症状」

「聞きたくなかった!!」

推測大当たりで泣きたくなる。

こんなことで先生の手を煩わしてしまい……うん、まあ申し訳ない。

「君の方はねー、僕でも大丈夫だったことで任されたよー……神機使い専門医は皆ギルさんにかかりつきりだからねー」

「ギルさん……一体何が……」

「大丈夫。一時は心肺停止状態まで行ったけど今は生きてるよ」

「ギルさんに一体何が!？」

あの人毎回出撃する度に入院してないかな……？

……あまり人の事を言えた義理じゃないが。そろそろ彼の精神面が心配だ。

でもまあ……脳改造されてるし……意外と平気？なのかもしれない。

ひとしきり仲間の心配をしたら、次は任務の結果が気になり始めた。

話を振ってみる。

「あの先生……運用テストは……」

「神機兵のテスト、か……悪いけど僕にはよく分からないんだけどね。こっちは人間専門医だから管轄外だし……ただ、最善の結果とは……

言えなかったみたいだよ」

「……」

「まあ、成る様にしか成らないさ。今は早く体を治しなさい。まずはそこからだ」

「……はい」

明日は大量の検査が待ってるからねー、とイワン先生は茶化して言った。

決して多くは語らない人だけど……やはり神機兵の運用テストは、うまく行かなかったようだった。

ブラッド隊としては多分コレが——初めての任務失敗、ということになるのだろう。

……ただ。

……この失敗は最悪じゃない、色々やらかしたけど、大切なものはちゃんと守れた。

命令よりも、任務よりも……大切なものを。

……あとで死ぬほど怒られるだろうけど、私にしては上出来、落としどころとしてはマシな方。

——そう思えば、恐らく明日以降来るであろうグレム局長の説教波も、耐えきれるような気がした。

「あー、あと……確かジュリウス君から預かりものをしてたんだよー。スツカリいい隊長になったねーあの子も。君のことを心配して来てただけど……全然目を覚まさなかつたからね。目が覚めたら渡してくれて頼まれたんだよー」

「……まさか報告書……」

「違うから」

「じゃあ……反省文……!?!」

「違うから、違うから大丈夫。そんな泣きそうな顔しないの。違うから、違うからね……」

もう少しだけ良いモノだよ、とイワン先生は私を宥めつつ、何か袋みたいなものを取り出した。

大きさに書類系ではないと思うけど、記録素子系である可能性が微レ存……。

と、思いつつ恐怖半分、不安半分で開封すると。

中には——見覚えのあるヘアクリップが。

「……?」

「何かね、『あの時は悪かった。弁償した』とか言ってたよ?」

忘れてたコトだったけど。

……マルドゥークとか名付けられたあの白いアラガミと対峙したときまで遡る……。

アイツにボッコボコにされた時にヘアクリップが耳元で凄い音と共に爆ぜたことは覚えている。

別に何処にでもあるような代物だからいつでも買い直せるからいいやーと思っただけ。

……その後は積み込みによる物資不足でそんな贅沢言えなかつたし、辿り着いたロシア支部はお察しの通り。

だからずっと放置していた。というか、忘却の彼方へと飛ばしていた。

……けど。

隊長は、忘れていなかったのだ。

……ずっと。

「弁償かあ……」

「良かったねー。じゃあお休みなさい」

「はいどうもですー」

イワン先生が電気を落とそうとする。

その時……一瞬だけ視線が、カーテンで遮られているベッドを見たような気がした。

……そう言えば。

結構な頻度で医務室のお世話になっている私だが……あのカーテンが開いている所を一度も見たことはない。

誰かあのベッドで寝てるのだろうか？

……。

……まあ、きつと研究のし過ぎでぶっ倒れた研究員の緊急避難場所になつてるんだろう、と予想。

もしくは、よく死ぬ有人神機兵のテストパイロットさん達の回復用のベッド。

当たってないにしろ、恐らくは見当外れでもないだろう、きつとそんな所だよねー、という方向で考えておくことにした。

まさかおでんパンの被害者とか、ラケル先生のフルフェイスの被害

者とか、レア博士のダイレクトアタックの被害者だとかそういう訳ではあるまい。

……つて……100パーセント否定できないのが怖い……。

「弁償してもらっちゃったよ……」

黒色のヘアクリップを指でなぞって、独り呟きを漏らす。

……安物じゃねえぞ、コレ……。

外見は以前していた物とよく似ているが……触れただけで、材質が違うことは十分理解できた。きつと隊長、フランさんに相談もしないで完全に直感だけで選んだんだろうなあ……と想像してみる。

まあ……いつか……何かの伝導体にでもなってくれれば、と思つてく。

そんなことよりコレ本当に弁償なのか、そこから議論したい。

後で請求書を持ってこられたりはしないだろうか……だとしたら経費で落とせるのかコレ!?

……不安はつきない。

「……でも、嬉しい……」

……は？

……今何を口走った。私……？

言った直後、反射的に口を手で覆った。

そんなことをしても言わなかったことになどできはしないが。

……え？ 何で？

自分の懐が痛まなかったからーという思いは……ない訳じゃないけど。

自分の思考回路は無きやないで、何とかなるから別に必要性はない、と判断して買い直そうともしていなかったはずだ。だから自腹云々というよりもそもそも買う予定も無かったんだから……。

……むしろ気にされちやつて悪いなーとか、わざわざ金出させて大変申し訳ない……という罪悪感のような気おくれのような感情が存在している。

……けど。

……嬉しいって、どうゆうことなの……。

「え……？　え？　何……だとしたら……!？」

私物を弁償して貰った事じゃない。ぶっ壊した髪飾りが戻ってきたことでもない。

……貰ったということが、純粹に嬉しいんだ。

と、いう事はまさか、まさかのまさか……。

消去法で思考がまとまっていく。

そんなバカな、いや、そんなハズはないだろうと、頭の中で理性が必死こいて否定材料を探していた。

……が。

脳内で直感がイエスと頷く。

「私……隊長が……」。

……好き……？」

すてきな地獄の入り口編

phase 40 バアルの恵み（前編）

「……何スカ、ヒロキさん……」

「ああ、レオーニ君……実はな、俺、思ったわけよ」

「懲罰房から出てきたばっかりなのに元気ツスね……」

「ふっ、当然……！ 閉所恐怖症の俺はあの後グレム局長の怒りの鉄槌を喰らい、懲罰房にブツ込まれて発狂寸前まで行くには逝ったが、こつそり持ち込んだ……まだ俺に懐いてくれてた頃の我が天使の画像で何とか正気に戻れた、という訳だ」

「……そツスカ」

何でオレ呼び出されたんだろうな。という疑問と共に、ロミオは目の前の青年——あのポンコツ副隊長の馬鹿兄貴を見つめる。

万人受けする系統の端正な顔立ちにはいつだって必要以上に無駄な活気が満ちていた。

ジュリウスの様な品の良さ——悪く言えば、どつか上から目線のブルジョワっぽさや、ギルの様な荒々しさもない。特にコレといった特色はないのだが、強いて言うならば嫌味もない。

頭脳、身体能力共に優秀。であるのにも関わらずソレを鼻にかけることもなく、そのうえ常に意味不明な自信に満ち溢れている……一口に言うならば、一緒に居れば退屈しなさそう、だがその分疲れるイケメン。

ソレがロミオの神威兄に対する評価だった。

だが、男の美醜に全く興味のないロミオは品種改良型トウモロコシから作られたポップコーンを頬張る。

「最近、唯ちゃんが何か変だな、って思ったんだよ。まあ、あの子は十分可愛いから全く問題はないけどさ」

そしてこの兄貴、何故だか分からないがこよなく妹を愛している。幸か不幸か……一人の人間に対し並々ならぬ、どころか少し行き過ぎ、最早人道を踏み外している疑いすらある変態……もとい、『求道者』たちはロミオも数人見たことがあり、多少免疫はついていた。しかし、改めてみるとこの兄妹。かなり似ている。基本的な顔の作りや髪質感までそっくりだ。なのに他人へと与える印象が真逆。

「確かに唯ちゃんはゴッドイーターになつてから兄の鼻眉目抜きにしても人間的に大きく成長した。少しだけ強くなつたし、遅しくなっている」

「……」
まあ、そうだよな。と少しだけ過去に思いをはせた。

神機への適合数値だけ見た時には何だこのゴリラ、と少々ド肝を抜かれたものの、実際に会ってみると予想よりはるかに引つ込み思案で、自信なさ気な雰囲気……どこか卑屈で変な所で実年齢より子供じみた印象を持つ少女だった。

まあ世の中色んなことがあるだろうし、人格形成の際に起こつたであろうことは聞かない方がいいと判断してそつとしておいたが……今となつてはそのルーツが分かるような気がする。

多分、コイツのせいだろう。

「だが俺があの子に感じている違和感はその類のものじゃない。成長するのも、俺に冷たいのも予想の内だ。だが少し誤算があつた訳だ……それを今までの経験則、及びにデータから類推するに……」

「……はあ」

「唯ちゃん、好きな人ができた———んだろ？」

思わず咀嚼中のポップコーンを誤飲、派手に咽かえり、口腔内と鼻腔で悶絶するハメになった。

再会して僅かの間にもうソレに気付くとは……恐るべし兄、大した観察眼だ。

流石腐つても頭脳明晰なオラクル系の技術官……もしくは、シスコンと言うべきか。

「お、凶星かなー？ まあまあ落ち着きなさいよレオー二君」

「ゴホッ……ゲホッ……さ、サーセン……だ、大丈夫ツスよ」

水で色々なものを飲み干しながら気持ちをしりだけ落ち着かせる。

「となれば……あとは、相手……だよなあ？ んー……まあ予想はつくケドネ」

「!？」

そこで神威兄は不敵にニヤリと笑う。

何故か寒気がロミオの体中を走り回っていた。

「まず、あんま絡みがなさそうな一般研究職と事務職は除外でいい。次にあの子の性格からして何か『怖そう』な警備系もナシ。とすると一気に絞り込める」

「は、はあ……」

「ぐくり、と唾を飲み込む。」

「次に年齢だわ。唯ちゃんのコトだから……年上、だろ？ 身近に居る年上の男のどれか……になるともう3択なんだわ」

「……」

外掘りがザツクザクと埋まる幻聴が聞こえた。

これではもう、言い逃れができない。

「まあここに呼び出している時点で分かると思うけど……残念だけどレオー二上等兵。君は除外だ。まあ……君は見た目によらず割としっかりしているし、人との距離をすぐに詰める……割には大事なことには絶対に他者を踏み入らせない、みたいな頑固さもあるっぽい

からな―……うちの唯ちゃんにそうゆう器用な真似はできないし」

「あはは……本人の前で言うコトっすかソレ……」

「ん？ 別に？ だって嫌じゃないでしょ？」

「……まあ、そツスけど……」

確かに悪い気がしなかった。

人間関係を築くにあたり、いくらか嘘や虚飾と言ったものが必要だろうが……どうやら彼にはそういったものを用意する必要はないらしい。

別に言いたくないきや言わなきやいい。言外にそうゆう含みが持たせてあるようだった。

風変わりだ、とは思うがそこに不快さはない。

「あとレオー二君、身長低いしな！」

「うゝ」

「あの子のことだから自分よりデカイ男が好きになるって!!」

「……」

「と、なると王手だな！ 年上で長身、でもってあの子の身近に居る頼り甲斐のありそうな感じのイケメン、となると……」

「……！」

ロミオは心の中で副隊長、もとい唯へと謝罪を開始した。

「ごめん、オレに出来るのはここまでだ……！ まさかラスボスがこんな察しの良い奴だと思わなかったんだよ。悪かった、できるだけ応援も協力もするから頑張れ……！」

たった今ハードモードに更新されたであろう、少女の恋路に祈りとも願いとつかない思いを込めた。

そして、その名が告げられる。

「ギルさん、だろ」

「……………は？」

「ギルバート・マクレイン隊員だろ間違いない！」

「……………」

前言撤回。

妹馬鹿のシスコン兄貴。

最後の最後、2択でコケる。

「……………あーバレてしまったかーそーそーソウナンデスヨー」

自分でも中々出来ない程、完成度の高い棒読みだったが、お兄さんは止まらない。

「分かるよー。だよな……………仕方ないよなあ……………ギルさんカツコイイしなー。男の俺から見てもカツケエって思うもんな！ 何か薄暗い過去背負ってそうだし、人を遠ざける割りには構って欲しそうだし……………何よりあの滲み出てくるダメ男オーラ。俺が女なら放っておかないね！ ……そう……………仄暗い過去のありそうな陰のあるイケメンは特に理由もなくカツコよく見える!!」

いや、そこは男でも構ってやれ。

「つてまあーもし、もしも、だよー？ 俺がさー、女だったら何か力になつてあげたいわー……つてなつて、そのままなし崩的にフォーリンラブー！ つてするのも有りだとは思うけどさー……」

……人が何より大事にしてきた妹に、纏わりつくクソ虫となれば、話は、別」

「……………お、おう」

「いや勘違いしないでくれよレオーニ君。俺は、別に……あの子のこととを信じてない訳じゃないんだ。あの子はちよつと世間知らずなところがあるけど……すごく……心配だけど……唯ちゃんの選んだ奴なら認めてやらないこともないって思つてたりするんですよ。」

……………まあ、その前に一回殺し合いせざるを得ないけどな」

「マジっすか……ヤバいですね……」

「ああ、神機使いだからと言つて何も息の根を止める方法が存在しないこともない」

「……………ヤバいつすね」

「そうと決まれば早速決闘の計画を練らないとな!! 相談乗つてくれてありがとな!! いやだけど、流石の唯ちゃんでも目の前で死なれたらトラウマになりかねないよなあ……それは可哀想だよなあ……はあ……どうしたらいいんだ……今、俺の兄力が試されている……」

コレで、いいんだよな？

オレは何も間違つていないよな？

……ロミオは誰ともつかないものに、そう問いかける。
当然。答えは返ってこなかった。



結果から言って、やはり神機兵の運用テストは失敗だった。

研究員さんたち曰く、神機兵 α 、 β 、 γ にはそれぞれ別々の思考制御だか戦闘プログラムだかが組んであり、その比較対象も兼ねていた……とのことらしい。

だから3体の戦闘データの提出が求められていた為に全部そろってなきや意味がない……っぽい。

私に理解できたのはここまで、そこから先は何を話しているのかさえ分からなかった。

こうして、見事トチった私たちは始末書を書き、損害報告（全然分からない）をし、局長に廃人寸前になるまで怒られ……その末に。

本部が出してきた指示に従い——ブラッド、神機兵の運用実績の為に人類の最前線『極東支部』に行くことになった。

もちろん、皆ものすごく嫌がった。

グレム局長もノリ気ではなかったらしく、『あんなアラガミ動物園に行くことになるとは……』と天を仰いでいたし、ロミオ先輩やシエルちゃんは目に見えてビビっていた。

だが、何故かラケル先生がこの案に賛同を示しているらしく……隊長やクジヨウ博士は微妙な顔で硬直していた。人間としてはあんな生命の危機を感じるような魔境に行きたくはない、だが、行かなければならない。という女神への信仰心と、人としての生存本能に板挟みとなった結果だろう。

もつとも、私もロミオ先輩もシエルちゃんもそんなモノ異次元世界の話なので嫌だ怖い行きたくない、とぐずづる権利を存分に行使してやった。

……ギルさんとナナちゃんは特に何も言っていなかった。

だが、どれ程嫌だと叫んだところで現実が覆る訳もなく。

ブラッド全員どころか今回は研究員や一般スタッフにまで全員遺書を用意させて、極東行きが確定した。

こうして、現在極東地域に突入……しちまつたらしい。

磨き抜かれた強化ガラス越しに薄く光指す灰色の空を見つめると……。

空からは赤い内容物と液体に塗れたアラガミ様が、何かが砕ける様な不快な音と共に激突してくる様子が嫌でもよく見えた。核がむき出しになり、破損しているのが分かる。

鮮やかな赤い色がガラス越しに広がっていった。

今更だけど、見ていて気持ち良いものじゃない。

「……」

「……」

「……」

「……」

「今のが極東地域の空中に存在するアラガミ、ヨルムンガンダだ」

「……あー……はい……」

時々聞こえてくる爆音や地面を軽く揺らす震動は、今この瞬間も警備兵さんたち……もとい戦闘員の皆さんが対空砲火に勤しんでいらつしやるからだろう。

アラガミを倒すことが出来るのはゴッドイーターだけ……というのは最早一昔前の常識になりつつある。

確かに一般の武器でアラガミを仕留めることは難しい、だが、不可能ではない。一般的な兵器だってオラクル細胞や偏食因子を混ぜ入れることによりいくらかアラガミに有効な攻撃を入れることはできる。

更に今回の様に、核にまで届けば仕留めることすら可能——というのは、フライアの戦闘員の皆さんの戦いっぷりとか、ロシアでオリガちゃんがやっていたことを見ればよく分かると思う。

ただ、神機使いは、より効率的にアラガミを倒すことができ、その核を持ち帰ることができる……というだけだ。何もアラガミを倒すのは必ずしもゴッドイーターでなくても良い。

ただ、ゴッドイーターを使うのが最も安上がりな方法なのだが。

そう思うと何なんだろうな私たち……と思いたくもなる。

外では二体目のヨルムンガンダが駆逐されていた。今度は中身を空中散布しながら重力に従い地面へと衝突。

……真っ赤だ……。

「と、言うわけでブリーフィングを始めるぞー！ 今回のフライアの任務はーコレだあー！ じゃじゃーん！

『遺された神機』回収任務く〜！」

何がという訳でなのか分からないし、何でお前がブリーフィング仕切ってるのかも良く分からない。

と言う主観はさておき、クソ兄貴が口を開いた。

「今回のクライアントは極東支部様です！ 俺達、技術班の運送チームで、のこじんを回収します。いくら神機使いでも素人が触ったら痛い目見るからね。マジで捕食されちゃうよー？ 他人の神機勝手に触った神機使いの末路聞きたいー？ 冗談冗談！ マジレスすると死んでる神機と生きてる神機って中々区別しにくいんだよねー！」

「……あつそ」

だから、技術員に任せておけ、と言いたいのだろう。

言い方と口調に殺意が湧くが言っていること自体は正しいので特に反論は出ない。

「という訳で『遺された神機』の回収はこつちがやります。コレは極東支部に持っていきます。依頼主なので」

「依頼？」

何か思いつめたような顔面で、ギルさんが聞き返した。

「そうなんだよー。極東支部に今ここに居ますよーって位置情報送ったら、丁度いい、そこでMIAした神機使いが居るからそいつらの神機を回収してくれて依頼が来たって訳。早速のパシリ任務に俺達は泣きたくなるが、ここで極東支部への協力的姿勢を作っておくことは悪い事じゃない。

……んにしても結構難しいことをカンタンにさらっと命令してくるよねー極東支部ー。コレ支部長の顔見えるぜー！ ニヤケ面の眼鏡かけた何考えてるかよく分かんないオッサンだな絶対！」

「……遺された神機……か……」

ギルさんが帽子で目を隠す。

何だかやたら喰いついている気がする。

神機にそんな感情移入する人だったのかもしれない。

「で、ブラッド部隊についてはその間にアラガミの目を引き付けておいて貰いたい。……ただ、このアラガミっていうのがかなりの曲者だね……討伐する必要ないから、回収が終わる次第すぐ撤退するように

して欲しいです」

「……曲者？」

嫌な予感が致しますが……。

「ハンニバル」

「は？」

「ハンニバル」

「……」

大型種。

接触禁忌種。

そしてGE界で一時的にこうあだ名がついている——『不死のアラガミ』

「不死のアラガミと戦えって!? 無理……無理……!」

「怖いねー。そんなのが初っ端出てくる極東支部本当に怖いねー」

「副隊長、ご安心を。貴女のことは……私が命に代えましても」

「シエルちゃん……」

「副隊長……も!? な、何ですか副隊長……? あ、ああつ……そんな風にされると私……私つ……! な、なんだか胸が熱いような変な感じがします……副隊長……」

「仲いいな、お前ら」

「ふっ……仲が良いのは良い事だな」

「女の子が二人で仲良くしてるのって……いいよな……何かこう……平和っぽくてさ……お兄さんそうゆうの大好きです!」

「唯、シエルに抱き着いても良いけどホドホドにしとけよお前のポンコツが感染したら大変。それからシエル。嬉しいのは分かるけど顔

を赤らめるのは先輩どうかと思う……。ヒロキさんは常識がMIAしてよく見ろアレは貴方の妹さんです！ ジュリウス！アレは仲良し……。だけどさ……。と、とにかくそうゆうんじゃねーから！ そんな澄んだ目で見つめちゃ駄目だって!!」

「ロミオ先輩あんまり無理しないで！ 過労死しちゃうよ〜！」

話が逸れた。

「素直に言ってくれ。ハンニバルと交戦経験のあると言う人は、先生怒らないから手を上げなさい」

「誰が先生だクソ兄貴が」

「唯ちゃん酷い！」

「ここは私が頑張りますとも……。ハンニバルと交戦経験のある神機使いは……。手を後ろに！ 武装解除をした後ゆっくりと後ろを向いて手を上げなさい!! 武器を捨てて！ 少しでも反抗すれば撃……」

「シエルちゃんソレ趣旨が違う!!」

「……。も？」

「で、どうしたらいいんだ？」

「一応、武装解除したけど……」

「ナイフはコレで全部だ」

「こんな茶番に付き合わなくていいです!!」

「レオーニ君、隊長さん、あとギルさんか……。男性陣全員交戦経験あるのか、流石特殊部隊ー！ 討伐したことがある人はー？」

「……。お、オレはそのー……」

「その反応はくさてはロミオ先輩、討伐経験はない！ でしょ!？」

「大声で言うなよナナあ!!」

「俺もない。接触はあるが……。討伐はできなかった」

「じゃあ、隊長さんだけか。凄いな」

流石隊長頼りになるうー！

……。ん？

「はい、質問です隊長」

「何だ？」

「……ハンニバルは不死のアラガミ、って呼ばれているんですよね……？ ソレを一体どうやって討伐したんですか……？」

それこそがハンニバルが接触禁忌と呼ばれる所以。

核が再生する……倒しても倒してもキリがないという、不死のアラガミ。

極東地域の神機使いなら特殊処理を神機に施す方法があるらしいけど……。

……。

……まさか、ね……。

「ああ……そんなことか。ハンニバルは核が消失すると代替核を造るために自分の身体を構成するオラクル細胞を再吸収して核を再構成する。」

だから、ハンニバルの肉体を組み立てている全ての細胞を破壊しただけだ」

「……はい!？」

「ハンニバルを構成する細胞全てを破壊しただけだ」

うわあああああやっぱりそうだったあああああ!!

この人見かけによらず、ゴリ押し戦法と脳筋戦術推奨システム搭載型隊長。

巻き込まれる部下としては冗談ではない。

こ、個人的には……そうゆうの、嫌いじゃないけど……。

「……実のところを言うとハンニバルの核1個でいいから欲しいな〜ってオレ思ってるんだけどね!!」

「お帰り下さい」

「それも唯ちゃんの神機を回復させるための措置として!」

「……え？」

何それ初耳なんだけど。

「お兄ちゃんとしてもあまり言いたくないけど……。嗚呼妹よ、兄は泣く。」

あのなら……唯ちゃん……偏食因子ってなんだか分かる……？」

「その位知ってるよ。偏食因子って言うのはアラガミの性質——平たく言っちゃうと自分と同種のを食べない、とかある一定の物質だけ捕食しない、みたいな『偏食』特性を利用した因子でしょ。」

ソレを複数練り込んだものを応用したのが装甲壁とかになってるんだし」

ソレは散々普段やっていることだ。

フライアの装甲壁はそうやって出来てるし。

「……うん、じゃあもう……」

「で、偏食因子って言うのは神機使いが自分の神機に捕食されないために腕輪通して投与するもんでしょ。つまりオラクル細胞由来の物質でありその恩恵を受けて肉体が強化されてる……のと、あとは私たちが神機の中樞神経を制御している」

「……も、もうそこまで良いかなー唯ちゃん、あ、あとはお兄ちゃんが説明す——」

「つまり偏食因子の一番の目的はアラガミを唯一葬ることのできる生体兵器『人工的に制御されたアラガミ』である神機を制御し、かつそのアラガミに捕食されない様に『人間の側を適合』させること。」

それが偏食因子であり……偏食、因子であり……？ ……神機に捕食されない為に人体に……入れ、て……」

「唯ちゃん……」

「ま、まさか……そんな……そんな……」

「……唯ちゃん……」

ちなみに、そのP—66過剰投与、もしくは投与不足の果てがアラ

ガミ化という物騒な現象であり。

P―66の投与が不足だった場合……私たちは自分の神機に浸食されるor捕食されて肉片と化するという事態が発生しないという……これまた痛そうな死に方が無いとは言い切れない。

……神機に、浸食……され……。

……………浸……………。

……………浸……………。

「あつ……あああああつ!!」

「P―66偏食因子、偏食、つまり浸食されない為の防御、えっへへどうゆうことだろくねくね!!」

「同類って見られてるのか、それともすっげーマズそうだと思われてるのかは不明だけど……」

「逆もまた然り——という訳か……」

「……神機に……浸食、か……」

「唯ちやああああん!!」

「やだああああ!! そんなの嫌あああああつ! な、なんでソナコトニ!? うわあああああつ!!」

「どうぞ副隊長! こんなところに手頃な鈍器が!!」

「それ灰皿だなーアランソンさん! よっしやバツチ来おおおとおおおい!! 妹の苦しみは!! 受け止める!! それが!! 俺が俺である理由なんだからあああああ!!」

「ギンシャアアアアアアア!!」

「つまり、前回何も考えず、オエツとなつちやつた唯ちゃんは……吐くところが何処にもなくて何故か神機（プレデターフォーム）をトイレの代わりにしちやつて……」

「……んでそのアイツの吐いた《自主規制》は当然体液な訳だから……P-66因子が混入していた……」

「で、そのP-66入りの《自主規制》をブツ被った神機は想定外の喰いたくもないクツソ不味い物体を口の中に突っ込まれた訳だから弱体化している……つー訳か……」

「……神威技官が起き上がったな、よし、話を続けよう」

「神機も人も『食あたり』を治す方法はただ一つ!! そう! 上からジャンジャン流し込んで!! 下からガンガン出す!! ハンニバルの核は大物だから是非とも一個欲しいのです俺たちは!! と、いう訳で……」

ブラッドの皆さん今回の任務の目標は2つ。

遺された神機回収、ハンニバルのコアの回収。

それさえ出来れば問題なし! さっさとトンズラかまそう!!
レッツゴー!!」

「……全く不本意だが総員傾注……。副隊長は今回捕食形態の使用は出来なくなっている。対象はハンニバル1体のみになる。……各員、気を引き締めて任務に当たるように」

「りよーかーい!」

「了解」

「……………ゆーい……………」

「副隊長お気を確かに……………」

「……………うわあああああん!!」

phase 41 バアルの恵み（後編）

「こちら回収班。目標を発見した。これより回収作業に入ります」
『フライア了解しました。作業時間はどの位かかりますか？ 目安でいいので報告願います』

「アーティフィシャルCNSの完全沈黙を確認。また、神機の状態は悪くないので、恐らくは600秒ほどで終了するかと思います」
『了解しました、終了後にまた報告を——ブラッドに通達しておきます』

「お願いします」

回収班の技士は一通りの報告を終えると、思わず呼吸を意図的に止めた。

眼前に存在するそれから目を逸らす為に。

そこに在ったのは、人間一人分の腐乱死体だった。

だが、人間が腐っていく強烈な臭気に当てられ思わず胃液が口までせり上がっていく。

決して見ていて気持ちの良い代物ではない。

……かと言って目を逸らしたままでは仕事は出来ない。

コレは人なのだ、と言い聞かせてみても自分の同じ種の生物がその生を終え、さらには食い荒らされているという状況に生物的嫌悪感を抱きつつ——何か共感が欲しくて横に居る同輩へと視線を向けると。

何だか凄い速度で、携帯端末の操作をしていた。

「あの……神威さん……？」

「何スか？」

「え……何してんの……？ 何やってん……ですか？」

「メール」

「はい？」

「知り合いにメール」

……今やることか!? と青年は思った。

空気が読めないとか、そういう次元を踏破している問題の事の様に思えた。

「……え、今? 今……やることですか?」

「はい、そうですが?」

「……」

「だって今しか出来ないじゃん。あとここなら極東の電波拾えるかなーと思いきや。だってフライア検閲厳しいし」

「……ホトケさんの前で……つすかー……」

「あー、うん。凄い良い死体だよねこのお方」

「……お方……」

一応、人としてカウントしてはいるらしい。

だが敬意を払うつもりはあまりない様に見えた。

「今時蛆が集ってる死体なんか貴重ツスよね」

「……」

彼は割と現状を正しく認識している様であった。

「いやまあ……貴重、ですけど……」

「『外』の死体に蛆が集っているとかが中々見られねえツスよ、今時!」

「……まあそうですね……」

見たいものでもあるまい。

……しかし、生まれた時から内部居住区に住む青年、世に言う『内

側生まれ、内側育ち』の人間、という生まれ落ちた場所に偶々恵まれていた青年には、逆に珍しいのかもしれない。

「……大体今時ウジムシなんか湧く訳ないんだ」

「……？」

「蛆が湧く……っていう言葉が極東には存在するらしいけど、そもそも『湧く』訳がない。何もないところから虫が発生するわけがネエっす。そんなもんはアラガミで十分。」

コレは蠅の幼生さん達。この子たちは真つ白なおくるみに包まれ、やがてこの大空に向かって羽ばたいていく夢と希望に溢れた幼生さん達。お母さん蠅がこの絶望的な世界に次の命を託すために、と必死こいて命の育つ場所を探し回りやっと見つけたアジュール……それが元神機使いな彼、もしくは彼女は彼女、という訳です」

「……何だか愛に溢れたモノみたいに見えてきた……」

「愛こそが、全てだ。」

で、その愛しき蠅つ子ちゃんたちだけ……残念ながら今の世界は残酷なのでしぶとい昆虫類にも非常に生きにくくなっています。外界じゃ難しいだろうね、生存も……まあ、何故かハエはアラガミの偏食にも引っかけりにくいらしいけど……オラクル細胞の方が早く捕食することによって発生する飯不足と、下手すれば食った後に残留オラクル細胞に体内から逆捕食されるという危険性あることからやっぱり生きにくい世界なんスよねー。

……だから有り得ない、とは言い切れないけど確率は低いんですよ、今のこの世界でアラガミよりも先に蠅に集まれるという状況は。可能性があるとすれば2つ。オラクル細胞の捕食作用が間に合わない程の腐敗物が大量に出る状況——つまり人間の『生存圏』が近くに存在するか、それとも……」

「……はあ……」

まさかの虫から沸き出す推理に呆れ半分、と言った様子で適当に相槌を打つ。

最早虫も、腐乱死体もどうでもよくなってきた。

「コイツが虫愛好者で蠅を持ち歩いて居たか、のどつちかだ!!」

「………はあ……そつすね……じゃ、仕事しましょうか。
神威さん」

「ちよつとそんな目はやめて下さいツスよー。今流行ってるんすよマ
ゴツトセラピーー！ もしかしたらそつち系の『選ばれし者』だったの
かもしれないじゃんー！」

「はいはい。のこじん集めましよーのこじんを、一心不乱ののこじん
を。腐乱なんかほつとこうー」

「何言ってるんですか！ 極東地域に関する情報じゃないツスカ！

マゴツテイストが進出してる可能性もあるし、自然発生型なら尚採取
すべきですー！」

「ええええ……コレ触るの……ええええー……」

「のこじんの為ですのこじんの！ そう、のこじんの！」

「のこじん関係ないじゃないですかあ……」

「れつづー」

「じ、自分でやって下さいよ！ うわあやだ触りたくない気持ち悪いよおうぞうぞしてやるよせめて手袋させて下さぎやあああああああ！」

のこじん担当（だったはず）の青年研究員は悲鳴を上げた。

この間からやはりロクな目に遭ってはいないが、この後ブラッド隊員の女性、香月ナナによるおでんパンを食べればどうという事はないだろう。

なぜなら、アレを摂取することで悲しい事も辛いことも忘れられ、彼の思考は幸福に包まれるからである。

悲鳴を上げる同輩を横目で眺めつつ、色々なモノの元凶である青年、神威ヒロキは頭の中に浮かぶひとつのぼんやりとした思考を自覚した。

（……確認済みの人間の『生存圏』である極東支部までの距離は遠い。それこそフライアに神機回収を依頼するほどの距離があるはず。自力での回収が不可能という訳ではないが出勤は困難……って所だろう。

……だったら何でこんな場所に神機使いが居る？ それも死体がアラガミ以外に食い荒らされるなんて状況が発生する？

支部近くで活動を行う防衛部隊や討伐の為に精鋭部隊であるとは考えにくい……が、残っている装備の充実加減からして中堅以上の実力者だった、とも考えられる。

……中堅以上の神機使いを各地に配置して回っていたのか、それとも……）

この近くに、未保護の壁外非保護民が住む区画があるのか——と。



かつて、ローマを震撼させた一人の名将が居たという。

そいつはやたらめつたら強く、山脈は越えて来るわ、北から進撃してくるわ挙句の果てには2倍近くあったハズの戦力で何故か敗走させられるわで、とにかく凄く強かった。マジで強かった。

そして英雄は死した後でもローマ人のトラウマと成り果て現在神々に世界を蹂躪された後でもイタリア系の人々の間では言う事を聞かない子供を怒るときに引用されたり、されなかつたりするらしい。

……と、いう雑学を思い出した。

「極東のハンニバルって……デカいなあ……」

「コレ包囲殲滅されますよ私たち……」

「唯ちゃん、弱音辞めてくれる？ 私は退く気ないから……だよねー」

「？ ロミオ先輩ー？」

「あ……あ、当たり前だろー！」

いつも通りの雑談。基本的には自分たちの気を紛らわせるためのものにすぎないモノ。

緊張感に耐えられない私たち3人の出撃前のお約束っぽい何か……だとようやくシエルちゃんにも理解してもらえたらしく、減らず口を聞き流しながら軽く微笑して頂いている。

既にかんりの戦歴を積んでいるからか——余裕があるっぽいギルさんと隊長は加わってこない。

「……違う……ヤツだな……そんな簡単にはいかねえか……」

「は？ 何だよギル？」

「………何でもない」

「……ギルさん？」

ギルさんの様子に一抹の不安を覚える——が、まあ紫ゴリラのことだからどうでもいいや、と思考を切り替えた。

隊長の合図で一斉射撃を開始する。

……が、射撃による煙が晴れて——思わず戦慄した。

近接特化のナナちゃん以外の神機。ブラスト、アサルト、スナイパーの合計5種類の銃で撃ちまくっても、そのハンニバルに傷ひとつ負わせることができなかったから——だ。

「う……嘘だろお……!?!」

「硬いか……!」

ブラッド歴（比較的）長めな隊長と先輩が驚きを隠せずに呟く。

あー……。

……薄々予感しては居たんだけどモシカシテ……やっぱりこれって……。

「……アラガミ……どンドン……強くなってません……？」

「だよねー私もそれ思ってた」

「……」

無言のギルさん——は肯定という事にしておく。

私たちも……薄々……感じ取ってはいたのだ。

フライアは偶々偶然、世界基準で『東側』へと進んでいつている。途中までは偶然、今回からは極東支部に進路変更した為当たり前ではあるが。

その都度思っていたのだ。

……アラガミ様たち……どンドン、硬くなっておられませんかと。

西側のアラガミが豆腐並の骨格なのだと言いたいわけではない。ただ、あつちでスパスパ切れたハズの神様の表面が、こつちでは何故かバリ硬装甲になっている、と皆確実に実戦で感じ取っているであろうということだけだ。

案の定、ハンニバルのような大型種に、今持つてる弾丸が効きやしない。

「総員、高威力バレット装填!! 持ってない奴は近接戦闘開始!!」

「「了解!!」」

強い弾丸がない、強襲型のギルさんと私が神機を變形させて刃を出す。

何度か……例えるならばプラグを差し込んでも上手く嵌らないような違和感が起こり、神機の変形に数秒だけ手間取った。

「どうやら……クソ兄貴の言う通りらしい。」

神機のスペックは今かなり落ちている。

『シエルさんの感応能力によって周囲のアラガミ情報をキャッチ。皆さんに伝達されます』

「お任せください！ 索敵漏らしはありませんとも！」

「シエルちゃんありがとうー！」

「ふ……副隊長……！」

何故か赤くなるシエルちゃん。

……最近のあの子のツボが良く分からない。

と、いうのはサテオキ。

実はシエルちゃん的能力が覚醒していた。

『血の力』とやらに目覚めたらしい。凄い。私だって未だに分からないと言うのに……。

やっぱマグノリアコンパスのエリートは違うんですね分かります。

シエルちゃんの『血の力』は『直覚』能力というものであるらしく、隊長のように分かり易く発現するものではない、その代り常時発動させることが可能。アラガミの数や状態を把握することができる——人間の感覚器、五感の超進化版だとかそんな感じの力らしい。

その情報が私たちに送信され、網膜上に投影。

アラガミがフリップとして振られていく。

誰よりも早く状況を把握した隊長が、指示を出した。

「02, 03小型種の討伐を頼む！ だが全て狩りつくそうと考えるな、目的はあくまで標的を拡散させることだ。残る人員でハンニバルを叩く！」

「りよーかーい！ 行こうロミオ先輩！」

「よっしや雑魚は任せとけ！ ……って言いたいけどコイツら結構硬

いんだよな……」

「や……やつぱ……薄々分かつてはいたけど……！ あ、アラガミ強くなってるよね……!? ううっ……」

「な、泣かないで下さい！ 副隊長は……私が守ります！」
泣きたい。

ハンニバルの長い尻尾がスイングされ、地面を抉りながら攻撃をしてくる。

その風圧だけでもかなりヤバいことが察せられた。ギリギリで回避。

遠距離から撃っているのだろう、シエルちゃんのスナイパー弾がハンニバルを掠めた。

反転攻撃によつて背中の突起部に直撃する。

その時、ハンニバルが雄たけびとも叫びともつかない声を上げた。

……これは……効いている……ということだろう。

「……」

狙うなら今しかない。

そう考えた私は長刀をゼロスタンスに構えて、殴りに行く。踏み込んでから、斬る——特殊兵装ブラッドアーツを発動。

……したとき、に。

「……副隊長待——」

「……え？ちよ、うわあああああ?!」

ものすごい力で、

体を、

前に、

もっていかれた。

何を言っているのか自分でも分からないが、何が起こっているのかハッキリとは分からないのだから仕方がない！ 例えるなら、神機がものすごい威力で前に吸引されていく様だ。

その間ブラッドアーツ全開状態で。

「ぎゃあああああああ!!」

と、いう訳で私は今ブラッドアーツをぶっ放したまま……ハンニバルに向かって、低空飛行をかましているという、地に足のつかない状態。

……はい、当然ですがこうなります。

「な、なんで喰いついてるんですかあ!? どうして神機いいいいい!!?」
「がりがりがりがり、と神機の（勝手に出やがった）捕食形態がハンニバルの背中の突起物を齧っている。」

痛いのか、それとも自分の身体が削られていることを理解しているのかハンニバルは激しい抵抗をこころみているらしい。ちなみに、私はというと、今ライドオンザハンニバル。銀のハンニバルの背に乗つて。

……だつて仕方ないんだもん……。

……神機が、喰いついているんだもの……。

……へばりつくしか……ないじゃない……。

そんな状態で……私、また……振り回されている……。

「あ、あんま抵抗しないでえええ……! ひいいい!? ま、また気持

ち悪くなってきた……」

「副隊長!!」

「……アイツ……まさか無限ループに持ち込む気じゃないよな……？」

「有り得るく唯ちゃんなら……やりかねない!!」

ナナちゃんもロミオ先輩も勝手な事ばかり言いやがる。

大方、ここでまた吐く↓神機ブシャー↓神機によるハンガーストライキ↓大型種討伐↓吐く……の無限ループを狙っているのかアイツとでも言いたげな発言だった。実に汚い輪廻の輪であるとハツキリ言い切ることができない訳でもない。

……だが、ここまで来たら私にだって意地がある……。

……そう。

私にだって……私にだって……（なけなしの）意地がある！

コレ以上、隊長の前で体液ぶっ放して堪るかという……最小限のプライドを保つだけの根性が!!

正直何と戦っているのかさえも良く分からないけど余りにも汚い姿をもうコレ以上見られたくなかった。

……今更何言っただと思われるかもしれないが。

醜態も何もかも、もう晒すところまで晒したかもしれないが。

……って思ってたんだけど。

もう何回目かになるが、やっぱり体はとても正直だった。

思いで、どうにかなるほど……私の生体防御機能って、都合良く出

来ていないみたい。

もういいんだよ、素直になっちゃいなよーとでも言う様に、胃や内臓が蠕動運動を繰り返し酸っぱい味と共に出撃前にちゃんとお腹に詰め込んで来たあんまり美味しくないレーションがお口の中へと逆流……うつぶ。

じゃない、そうじゃない。生態現象がどうだろうとここで口さえ閉じていれば問題ない！

幻滅されたくない……もうされてるけど、コレ以上汚い所は見せたくない……。

……そう。

……落ちるところまで、墮ちたんだから……あとはもう、加点のみ！

と、一時的に無理やり自分を納得させた超理論を展開し、コレ後で絶対思い出してそんな訳ねーよ、と後悔するハメになるだろう未来さえ予感しつつも今回こそはちゃんと苦しみを飲み下す。そう海じゃないんだ、飲み干せるはずだ。

と、私が自分の中の間半端に消化された飯と戦っている間、神機はガリガリガリと実にアグレッッシヴに背中からハンニバルを喰いついていた。とても己の欲望に忠実な神機で大変ウザいと思います。人の気も知らないでよくやりやがる。

こんな状況じゃなきゃ、殴ってやりたい。

「いや、副隊長……よくやった!!」

「はい!?!」

まさかの隊長からのお褒めの言葉が降つ……いや、この場合は下から聞こえてきた。

「そのまま抑えてろ!」

「抑えろって……そんなこと言われてもお……! って神機!? なん

であなたはそんな捕食欲に忠実なんですかあ!? え? コア……!?
コレってコア!? コア取ったの!? もう取ったの?!?!」

大音量で叫ぶハンニバル。恐らくはもう絶叫と捉えていいだろう。
人間で例えるなら背中から脊髓ぶっこ抜かれたようなもの。まだ
悲鳴を上げられるだけの生命力があるあたり流石はアラガミだ。こ
んな奴ら相手に生存競争で勝てる気がしねえ。

……と、力尽き倒れそうになるハンニバルだが、既に再生が開始さ
れているらしくすぐに捕食部位の傷が癒えていく。

……しぶとい。

が、そこを逃す隊長ではなかった。

ハンニバルが体勢を崩した一瞬の隙にブラッドアーツを叩き込む。
一瞬にして右半身が消失。地面に腕だったような挽肉が転がってい
た。

支えがなくなったハンニバルが墜落。

その蜥蜴にも似た頭、正確には一番柔らかい感覚器官——眼窩へ
と。

……スタングレネードを突き刺した。

……刺さっちゃった……。

……おメメの中に……。

「うわあ……抉れてるよ………」

「副隊長すぐにその場から離れる!!」

「……」

「副隊長!」

「………は、はいっ!!」

幾らアラガミ相手でも外道すぎないかしら、と自分のなかの倫理観

氏が一瞬だけ苦言を呈したような気もするけど隊長の言っていることだから特に問題はないよねー、と自分を納得させた振りをしてみた。

これでいいのだ。きつと。多分……恐らく。

そして、スタングレネードが破裂し……ハンニバルが聞いているこつちが苦しく成る程の悲鳴を上げ……。

奴の頭は爆散したのだった。

……銀トカゲの魂に安息がありますように。

……と、思ったんだけど、しぶといハンニバルはその後。

まだ骨の見える、若干細くなった腕を突き出し。

両手をビクビクと震わせながら上体を起こし。

肉や骨の破片でグズグズになった断面図から体液をダラダラと吹き零しながらも。

起き上がってきたではありませんか。

中途半端に再生された頭部はまだ骨と筋肉が丸見えの構造であり、スタングレネードが突き刺さったままの場所はどうにもならないっぽい、片方の金色の眼には純然とした怒りが見えた。

……キモ……じゃない、これは確実に……激おこモードでしょう……。

背中からは何か円形のモノが浮き出ているし、心なしか何か若干パワーアップしているように見えなくもない。

「……あ……これ……?」

「ハンニバルが活性化したようです！ 気を付けて!!」

「……や、やっぱり……?!」

ハンニバル、ガチギレの回。

背中から齧られて頭部爆散させられた不死のアラガミは怒り狂っていた。意外と人間臭いところもあるんだあ、と変な風に関心しているとハンニバルが咆哮を上げる。コレはブチ切れてる。

「ブラッド総員傾注！ 回収班の作業終了を確認！ このまま撤退するー！」

「た、退避ー！ みんな退避ーー！」

「了解……つて言いたい所だけどさ……どうすんだよコレ!? 逃げられる気がしねえ!!」

「各自散開してバラバラになって逃げるって言うのは……?」

「ブラッドー03、ソレではダメです！ その場合……激高したハンニバルが誰か一人を集中狙いにする可能性があります！」

「……………えっへへへ、別に私は誰かをヒトバシラにしてみんなで逃げよう☆なんて考えてる訳じゃないんだからねっ！ シエルちゃん勘違いしないでよねっ！ ……チツ」

「悔いだらけの人生だった……！ まだやり残したこともやりたいことも沢山ある……！」

「後悔すんな！ まだ終わってねえから！ ジュリウスも何か言ってみてやれ！」

「そうだ諦めるな副隊長！ 我々には……勝利の女神ラケルの加護先がついているー！」

「畜生死んでやるーー！」

「お前等に期待したオレが馬鹿だったわ……。ナナ！ シエル！ 射撃しながら後退すんぞ！ ギル！ その間にあの前衛バカ二人が後退出るだけの隙を作ってくれ！」

「任せとけ」

ロミオ先輩やれば出来るじゃん。完璧な指揮だ。

シエルちゃん、先輩からの射撃がハンニバルへと降り注ぎ、半分程は弾かれ、あと半分は通りはするものあまり効いてはいない。

威嚇の為に今度はちゃんと再生できたらしい頭部から咆哮が発せ

られる。

……と、そこに。

「行け！」

ギルさんからのスタングレネード投擲。

そうだ、ここで奴が目くらましをすれば、数秒スタン状態になったハンニバルとの距離が開く。

その隙に前衛として前に出ちゃった私たちが後退すれば問題ない。そうと決まれば、と隊長と目で示した合わせた…

……のに。

「……あれえ？」

そのスタングレネードは、綺麗な放物線を描いて。

ハンニバルの口の中へと入り込んで逝ったのでした。

「……」

「……」

「……」

余りのコトに、誰も口を開けなかった。

ただ確かに分かったことは……スタグレ不発、という事実だけであつた。

これ一体どうなっちゃうのかな。

「何してんだよギル!!」

「悪い！ しくった……もう一発！」

「そ、そうだまだ行ける!! ……つておいギル……お前……スタグレ何個持ってきたんだ……?」

「3個」

「そこにまだ3個スタングレネードがくつついてるよな……?」

「……ああ、スタングレネードが3個付いてるな」

「……………今、お前……何……投げたの……?」

「……………スマン、レーション投げちまった」

「レー……シヨ……ン……?」

「隣にあつたからつい」

「もおろろ! ギルつたらろろ! うっかりさん、なんだからーっ! 『回復弾』撃つてあげよっかー?」

「うっかりゴリラですも?」

「落ち着けナナ。何でレーション投げるんだよ馬鹿じゃねーの本当に

……何でレーション投げ……レーション……ん?」

「私たちは我が目を疑った。

なぜなら。そこには。

口から泡を吹き、肢体を激しく動かし、苦しみもがき……のたうち回る、ハンニバルの姿があつたからだ。

奴は何度か大きくシタバタしたかと思うと、急に静かになり……やがて、時折びくん、びくんと痙攣するだけになり……そして、静かに沈黙した。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……ギルバート君、先輩怒らないから言ってみなさい。君は何を投げたのだね?」

「だから悪かったと言ってるだろ。レーション投げちまったんだよ」

「……………もつと詳しく。そのレーション、何…………?」

「何って、別に大したもんじゃない。普通のヤツだが?」

「いいから言え」

「何で?」

「言うんだギル!!」

先輩の鬼気迫る様子が1ミリたりとも理解できなかつたらしいクソゴリラが、キョトン、としたおおよそ成人男性の顔面とは思えない程、腹の立つ無垢な顔つきで答えやがった。

「マーマイト」

「マーマイト!?!」

どうして あなたは そんな ものを。

「は、ハンニバル死んじやった……ハンニバル死んじやった!?!」

「落ち着け副隊長、死んではいけない。ただ……何か毒物のようなものに全身を冒された結果微動だにできなくなっているだけだろう……意識はある……ハズ……」

「余計タチ悪りいよ……!? いっそのことコア抜いて慈悲の一撃を下してやりませんか……?」

「そんなことをやってもコイツはハンニバルだからすぐに再生して死ねないだろうがな……」

ジュリウス隊長の目は遠くを見ていた。

「あ、有りえねえ……そんな劇物を……!? アラガミ死んでるじゃん……!?」

「は? 劇物……? マーマイトはレーションだろ。何言ってるんだお前」

「お前が何言ってるんだ。現実が見えてねえのか」

「……故郷じゃ皆、普通に食ってたぞ?」

「お前の故郷人外魔境……!」

「アホか、これから行く場所が人外魔境だろ」

「どの世界にアラガミ(大型種)ぶっ殺すレーションに普通に食べる人類が居ると言うのでしょうか。」

「どうなってるのこの人の世界観……。暗黒大陸の深き森の奥にでも生息してるの……?」

「ともかく、動きが止まったんだ、良かったじゃねえか。どうする隊長? 撤退か?」

「今考えているから黙っててくれないか」

「何で動きが止まったかの方が重要なんだよこの場合は!!」

「……多分喉にでもつままったんだろ、マーマイトが」

「喉に……詰まった……」

「呼吸も……止まった……」

「……も……」

「やっぱりコイツはここでMIAさせた方がいいのかもしれない」

「ナナちゃん……今そうゆうコト言わないで……抗えなくなりそうだから」

数分後、のこじんを回収したクソ兄貴と……いつか見た、第二世代型おでんパンのスケープゴ……被検体にされた……のこじんの人が、装甲車を駆りながら猛スピードで合流を果たす。

彼らは白い何かがびっしりと集った赤い腕輪を採取袋に突っ込んでいた。白い何かは見えない方が良いものだど咄嗟に判断を下し、皆で全力で目を逸らす。

「……マジでー!? アツハハハハ……ハハハハハハー! スゲエー! 有り得ねえー! ギルさん……ちよつと後で面貸してくれるかな?」

「生憎検診が入ってる……悪い」

「ならいいツスよ。次の機会に殺るまでだ……つと。」

「んで、どうします隊長ー? ミゴトにスタンだな! もう全然動かない!!」

「いい機会じゃないですかー。この際ですから素材として使えそうなモノ全部剥ぎ取ってっちゃいませよーよー! 専門の器具も揃ってますし。折角我々技官が居るんですし」

「いいねー! じゃーやりますか! 隊長さん480秒下さい。大体ソレで終わりますわー」

「わ、分かった……ブラッド各員、哨戒に当たれ……」

「妹さーん。その辺にあるドリルストッパー取って下さいー」
「……どうぞ」

と、言う感じですっかりハンニバルは解体された。

その間、ハンニバルは微動だにしなかった。

だが、黄金の目は怒りを通り越し最早絶望を映しているように見えただから……多分意識はあったと思う。

「じゃあどうするー? トドメいつちやうー?」

「つて言いますけどヒロキさん……ハンニバルつて不死のアラガミじゃないっすか……」

「コアが再生しまくる以上我々では決定打を撃つことはできない……」

「じゃあ……コイツをこのまま放置するのか？」

「……それはどうかと思います……」

「……」

うーん、とブラッド全員で沈思。

このアラガミは大型種、放っておけばかなりの強敵になる。

今は完全に動かないでいるけど、いつ状態が回復するのか誰にも分からない。

まあその頃には私たちフライアはトンズラしてるからいいけど……この後極東支部に行く、ということを考えればコイツと再戦する可能性もあるんだよなあ、という懸念が振り払えなかった。

そこで、腐れクソ兄貴がハツと思いついた様な顔をする。

「そうだ、セメントで固めちゃおう」

「……は？」

「確か有りましたよねー？ オラクルセメントー？ 装甲壁とか組み立てるときに使うヤツ！ あれならコア固められるからアラガミにも有効じゃね？」

「一理ありますねー。じゃーそーしましよーかー、今持ってきてきまーす」
「ついでに手足も切断しておきましょう。此れなら蘇生してもすぐには動けない」

「いいね隊長！ じゃあ切断面もセメントで埋めて……」

何の話だよ……。

先輩助けて、倫理観が息してないの！ とロミオ先輩を見つめる



ハンニバルは生きていた。

いや、その表現は正確ではない。正しく言うならば、死ぬことが出来なかったのだ。

なぜなら、体細胞を消費しコアが生成されていってしまうからである。

そう……巨大なハンニバルはその体を再生するオラクル細胞が尽きるまで、死ぬことはできないのだ。

だが、動けなくなったハンニバルの体に群がってくるもの達があった。

小型種——オウガテイルと呼ばれるアラガミたちである。

ヴァジュラなどの大型種ですら捕食する彼らにとつては捕食対象が生きていようが死んでいようがあまり関係はない、ただ本能のままに、自らの進化の為だけに、と喰らい続ける現象でしかないからだ。数匹のオウガテイルたちがハンニバルの身体に食らいつく。

ハンニバルにはただ、自分の身体が引き裂かれていく音。肉が咀嚼される音、骨や外骨格は砕けていくような音を聞き続けることしかできなかった。

やがて、ハンニバルの身体を喰らっていたオウガテイル達に異変が訪れる。

急に彼らの口から泡が吹き出したかと思うと、そのまま地面へと倒れ込み、数度激しくのたうち……やがてはその力すらも尽き果て、動

かなくなる。

小型種であるオウガテイル達はやがて地面へと飲み込まれていった。

だが、ハンニバルには其れは許されない。

オウガテイル達とは違い、ハンニバルは不死のアラガミ——その不死性により、コアを破壊されては何度も何度も再生を繰り返してしまふからだった。

何度も何度も何度も。

数時間ほど経過すれば、また別の小型種がやってきて、ハンニバルの体を貪り食うのだろう。

そして、またコアを破壊されて地に帰ってゆくのだろう。

だが、ハンニバルは死ぬことはできない。

かといって、動くこともできない。

そして、その体に『ソレ』はいつまでもいつまでも残留し続けた。

おそらく、この呪われた円環と連鎖は続いていくだろう。

ハンニバルのコア再生ができなくなる——その日まで。

phase 42 極東の洗礼

薄暗い電灯、刃物や鈍器がつりさげられた壁。

全体的にタイル張りになっている床。

ぴちよん、ぴちよん、と断続的に聞こえてくる水音。それは何かがかぼれる音だと気づく。

磨き上げられた錆び一つないステンレスの蛇口が、冷たい光を反射していた。

……という場所に。

ある意味密室に。

「副隊長……シエルを助けに行った件……なんで、あんな無茶した？」

ギルさんと二人つきりにされたこの恐怖が分かってももらえるだろうか。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……！ な、ななな何でもしますから命だけは……い、命だけはあー！」

「あんまり独断で無茶はするな……万が一があった場合、残された奴は一生、お前の命を背負い続けるんだ……」

ギルさんの声色には何故か深い悔恨や僅かな苛立ち、何かどうしようもない程の苦悩……がにじみ出ているような気がした。

……が。

この時の私は恐慌状態であり、そんなものに気づく余裕が心に存在しなかった。

薄暗い部屋の中で喋るギルさんを見て改めて思い知らされる。

デカくてゴツくて声の低い奴は……本能的に怖いのだという、生物的な恐怖を。

「お前の……後ろを向きながら後退してるから結果的に前に進んでいくところは……嫌いじゃない。だが、『自分だけは大丈夫』とは思わない方がいい」

「そ、そそそそんなこと思ってるわけないじゃないですか……」

この状況でこの台詞……そう、コレは……死刑宣告……！

「説教臭くてすまなかった。言いたいことはそれだけ……どうした副隊長？ 顔色が悪いぞ？」

「だ、だってギルさんが怒ってるから……お、怒ってますよね……？」

や、やっぱり怒ってるんですかギルさん……？ ですよ……この前から散々な目にあってますからね……え、えつと何から謝れb b b
b」

拳クラツシュ。

無断家宅搜索。

拘束眼前強制料理。

脳改造……駄目だ、キリがない。

「……いや、怒ってる訳じゃないぞ？」

わたし、しってるよ。

怒ってる人は、みんな、そう言うんだ。

だが、この神威唯、ただでは死なぬ。

せめて一人でも二人でも道連れにしてくれるんだから……！

「ごめんなさいいいい！ でも半分はナナちゃんの所為ですよおお

！ 私だけが悪いんじゃない!! い、痛くしないで下さいギルさん!!
せ、せめてヒト思いに……! ひと思いつ!!」

「……は？」

「だって……だ、だってだってギルさん絶対怒ってるでしょ……!?

あ、謝りますから許して下さい……! く、靴でも何でもナメますから!! だからソレだけは辞めて……! お願いだから許して……!

そ、ソレだけは……ソレだけは……!」

「お、おい大丈夫か……? さつきから変だぞ副隊長……?」

「……ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……何でもするから……!」

人を逃げられない状況に追い込んでの言葉攻めでも楽しんでいるのだろうか、とつい邪推したくなったけど、その方がよほどタチが良いものの様にも思えた。

もうとつくに、部屋の隅で膝を抱えて命乞いしている。

濡れる視界でギルさんを確認すると、本気で心配してくれているよ
うな顔。

……あ、コレもしかしたら行ける? 助かる!? 生還できたりする

……!?

ほぼ縫るように見上げた。

「大丈夫か? ひよつとして……:腹、減っているのか
?」

「やだあああああああああああああああ!!」

やっぱ怒ってるじゃないですか……。ギルさん……。

そんなものを笑顔で進めてくるなんて、きつとこの人はどつか人間として大切なものが欠落しているんだ、とうっかり思っちゃいそうだった。

そう、ここは調理室。

何故か薄暗い調理室で私は……。今、目の前の男が暗黒術を行使し、小麦粉や水やバターを生贄に異世界から『何か』を召喚する様を……見せつけられていたのだ。

制止する暇さえも、与えられなかった。恐怖で喉がつまり、声を発することさえもできなかった。

そしてギルさんは……その召喚したばかりの、できたてほやほやの皿を、突き出した。

「何だよ……。さつきから様子が変だと思ってたらそんなコトか。心配しただろ……。? じゃ、じゃあコレ食うか?」

……。少し焦げたからあんまり旨くないと思うが……」

「い、いやっ……。ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいやだやだやだやだやだそんなのやだあああああ! 助けて……。誰か……。誰か……。助けてシエルちゃん……。ナナちゃん……。口ミオ先輩……。! ……隊長……。たい、ちよお……。! 嫌、嫌嫌……。いやあああああつっ!!」

それは常識という境界の外側。

悪夢からの使者という境の外の、地獄の窯の底を覗いたかのような嫌悪感に満ちていた。とうの昔に呼吸を辞めたハズの魚介生物が青白くぬるりとした頭部を晒しており、何も映さない白く濁った眼窩はただ星空を見上げるかの如く天に向かって突き出している。だが彼らが泳いでいるのは青い海ではなく、小麦粉とバターで作られ

……まっ黒な炭だった。

その冒流的なまでの黒さは、人間の原始的で底知れない恐怖を刺激し、挑発し、狂乱の世界と何処までも苦いであろう想像を絶する味覚への暴力を蠱惑的に囁いていた。

という、形容しがたい恐怖にとらわれた。

「あ……あ……あああ……っ……!?!」

「遠慮すんなよ。」

……まだ沢山あるんだからな？」

「うわあああああああああああつ!! あああああああああああああああああああああああああああああ!!」

目を閉じてても、直視したくない現実があるだけだった。受け入れたくない、もう何も見たくない……そうやって考える事を放棄した。

……そうするしか、なかった。

じやないと、心が壊れそうだった。

今私が口に行っているのは一体何なんだろう。今、口の中で爆ぜてる……この気が狂いそうになるモノは何なんだろう……。苦くて甘くて痛いくて……生臭い……のは……何なのだろう……。

……もう、何も。

……考えた……く……な……。



「す、すごい……」

「マジでか……」

研究室で、男二人は驚愕していた。

遺留品神機、M I A神機、もしくは『片割れ』『持ち手ナシ』などと言われるが、一応神機使いの心情を考慮して、一番使われている呼び方はコレだった。

——遺された神機。

ちなみに、人によっては適当にのこじん、と呼んでいる剛の者も居たりする。

しかも結構多数派で。

「ヤバイですよコレ……!」

「あ、ああそうツスね……ヤバい……ヤバすぎるぜのこじん……!」

「何というか……キレてます。キレツキレです!!」

「センスが光っている……としか言いようがない！」

驚愕に目を見開く彼らの眼前には一振りの神機が乗せられた台があった。

その神機——のこじん、は。と言うと。

神雷槍パンタレイ 極

アサルト銃身 クリシユナ

残念ながら装甲は戦っている最中にでも剥がれ落ちてしまったのだろう、回収することはできなかった。

……が、ぶっちゃけこのゲテモノ装備に合う盾は一体何使ってたんだ、と彼らはまだその存在を知らない。

それはともかく。

「スゲえ……スゲエよ……美しい……神々しい……神機！ビバ神機！
ぼくこの世に生まれ生きてよかった！」

「一体誰だこんなモノ使いこなしてた英雄は……ああ、人類は……惜しい神機使いを失った」

「今更ですが彼、もしくは彼女の生前の姿が今コレほどまでに知りたくなるとは思いませんでした」

「パンタレイとクリシユナを一緒に使うとは……何者だったんだ……」

見た目の神々しさに加えて、この武器に持つ特性は神と雷。コレじゃクリティカルが出にくい。にも関わらず複合属性がこともあるうに『剣の達人』。

弱点部位を殴ればダメージ加算になる、が、そもそも神と雷属性では（お察し）であるためにただの緑エフェクト乱舞になる。

そのただでさえ、使いにくそうな槍を更に使いにくくするのは――
銃身クリシユナ。

近接用スキル『剣の達人』を……この世から抹消するためだけに天に嘉されたと思えないスキルだった。

のこじん大好き研究員が暫し俯いて考えていたが……やがて何かを思いつくかのようにはつとした。

「そうだ……ドレットバイクとナイトホロウ……」

「……っ！　そ、そうか……！　このスキルなら……その2体に対しては……バリバリの戦果を發揮する!!」

「間違えない！　きつと……きつとこの神機を使つてたツワモノは……！　小型種をちくちくするのが得意だったんだ!!」

「それだ！」

そんな訳ねーだろ。

という、ツツコミを行えるものは残念ながらこの場に存在しなかった。

なぜなら今現在フライアはとても忙しく、やはり忙しく、殆どの研究員や事務員たちは仕事に精を出していたからである。

研究員たちは端末を死んだ目で眺めており、事務員は体力増強剤を飲み干し高笑いし、また別の事務員は何もない空間に向かって楽しそうに話しかけていた。

すると後方で爆発が起き、有人型神機兵からテストパイロットがまた一人運び出されていく。

医療班が待機していて幸いだった。なぜなら、現在ブラッド隊員は全員任務に出ているからだ。何ということはない小型種の討伐任務だが、それでも神機になって1年のキャリアもない隊員が半数を占めている為、生傷が絶えず、任務終了と同時に駆け込んでくる戦闘員た

ちのケアに当たらなくてはならない。

という訳で今日もフライアは笑顔の絶えないアットホームな楽しい職場だった。

そんな平和な光景に。

突如として、警報が鳴り響く。

「な、何だ!？」

「何が……?」

「緊急●●速報?」

「ち、違うぞ……コレは……!」

のこじん分析をしていた青年が、おでんパンを噛み砕く。

隣の同僚を見ると、その緑を帯びた鮮やかな空色の目が、すつと細まっていた。

やがて誰もが理解する。

それを見計らったかの様なタイミングで、艦内放送が流れだす。

『フライア外部装甲壁が突破！ 繰り返す、フライアの装甲壁がアラガミに突破された!! 至急警備班は迎撃に当たるように!』

『詳細は不明！ 600秒後AとDブロックに隔壁を下ろします！ AとDの非戦闘員はすぐに避難を！ 600秒後です急いで下さい早く!!』

『ア、アラガミ……F区画入ってきました！ 近くに居る人はすぐに退避を!!』

「そんな……フライアに……!?!」

「アラガミが……!?!」

「嘘だろ？ 装甲壁は常時アップデートしていたはずじゃ……」

「F区画つてすぐそこ……!?!」

「……」

フライア始まって以来の非常事態に誰もが慌てふためいていた。

事実、まだ装甲壁の完成度が温かった頃には、このような事態は度々あった。

……だが。

常にそのような状況でも対処できる神機使いが必ず居た。
今までは。

ブラッド隊がまた『隊』として殆ど機能していなかった為、戦闘となると外部から戦力を補っていた頃には必ず神機使いを一名残していたのだ。

だが、今は人員が揃いブラッドを『隊』として運用させていくために全員出撃させた結果。

……現在フライアにはアラガミと戦闘可能な神機使いが居ない状

況だった。

既に隔壁が落ちているらしい、何かを地面に叩き付けるような鈍い音が響く。

そのことが、最早一刻の猶予もないことを示していた。焦りや驚愕に彩られていたハズの彼らに、やがてひとつの決意が灯る。

「スタグレあるだけ出してくれ!!」

「確か……アサルトライフルはこの辺に……」

「視界剤でも何でもいい! 使えそうなモン全部持ってこい!!」

工具箱や棚、もしくは机の下から数人が装備を出す所だった。

ある者は慣れない銃器をブツブツとマニュアル操作を繰り返しながらも何とか扱い、またある者は障害になりそうなものを集めて即席バリケードを作っていた。

一応この様なことがあった時の為に訓練は積んである。

ただ、日頃研究員として生きている自分たちのソレが一体どこまで通用するのか。

誰も確かなことは分からなかった。

それでも、誰も隔壁の場所まで走ろうとはしなかった。既に隔壁は降りている。

恐らくは、次締まる壁よりも……もうすぐ傍まで来ている、アラガミの方が近い。

今この瞬間でさえ、何かを噛み砕くような音がどこからか響いてくる。

「絶対行かせるな!! この先には行かせちゃだめだ!!」

「………こんなの……アラガミに効くかどうか……」

「………それでもやるしかないだろ……」

全員の胸にはよぎる思いがあった。

ここで自分たちは全員死ぬかもしれない。

何の意味もなく、恐らく——アラガミに一矢報いることすら敵わずに。

生きながらにして五体を八つ裂きにされるといふ最悪の死に方を
するかもしれない。

だが、それでも、守り抜くべきものがある、と。

皆分かっているその心情の中。

誰かがソレを口にする。

「いいから守れ！ 神機兵を守れ!!」

その誰かの決意を皮切りにしたかのように——

アラガミたちが雪崩れ込んでくる。

phase 43 極東の洗礼―2

「ふええ……や、やっぱり強くなってる……強くなってますよおお……」

「だよな……はあ……そうなんだよなあ……。アラガミどんどん固くなってるんだよなあ……」

「だよね……今日だつて擦り傷いっぱいできたもんね……」

「副隊長、ここは私が絆創膏を貼ります！」

今回の任務——簡単な小型種の討伐任務の終了後、私たちはガタゴトと装甲車に揺られていた。

空がヨルムンガンドだらけだったために、ちよつと今日飛ぶのはチャレンジャーかな……となったのだ。幸いそんな距離が離れている訳でもなく、装甲車なら十分移動ができる範囲だった、ということもある。

だからもうすぐフライアに到着する。

先輩とナナちゃん、シエルちゃんと私は隣り合つて座っており、今日の任務について反省——というよりも愚痴り合いをしていた。

「いいよシエルちゃん……こんなの睡つけとけば、治るよ……私なんかを使う絆創膏が勿体ないよ……」

「つ、つっ睡!? 唾液……ということですか!? じゃ、じゃあ……その……私ので……よければ……?」

「シエルちゃん何言つてんの意味分かん……え? ちよ、だ、駄目だよシエルちゃん!? か、顔近いし……」

「副隊長……動かないでくれますか……?」

「だ、ダメだつてば! そ、そこ汚いよ……!?!」

「いいんですも副隊長……私……私……あなたの為なら……はむっ!?!」

「やっ、やだちよつとシエルちゃんつてば……っ! むぐっ……」

ちよつとシエルちゃんとの会話が楽し……変な方向に向かおうとしていると、ナナちゃんの腕が伸び、口の中に何カガツツコマレタヨ

ウダ。

目の前にはナナちゃんの満面の笑み。

「ねえ……時と場所、選ぼーね？」

「もももももももももももも」

「おでんおでんおでんおでんおでんおでんおでんおでんおでんおでん」

「ナナ……いつも持ち歩いてるんだな……それ」

「準備がいいでしょー？ えへへへへへくく女の子なんだから当然だよー」

しばらく真っ白になった頭の中で幸せになっていると。

……不意に隊長が通信をゲットした。

慌てて私も繋いでみる。

どうも他の隊員には繋がっていないっぽい、と確認
となると。

恐らくは隊長職レベルにだけ通信がつながる仕様の特別通信である可能性がある。

じゃあ私もイけるはずだ。腐っても副隊長なんだし。

……もしかしたら駄目かもしれないけど。

「こちらブラッドー01、フライア。追加任務か？ ………………何
……だと……？」

「え、追加任務？ キツいなそれ……」

「まずい……副隊長！ 通信をき——」

「……………」

「(ヤベエ遅かったか……)」

聞いてた。

そこからはいつものフランさんじゃない……多分、オペレーターですらない、あまり聞いたことのない女性の声が聞こえてきた。

かなり取り乱しているらしく、息が荒い……ついでの、何を伝えればいいのか順番もメチャクチャで普段の戦闘だったら使い物にならないオペレーションだと眉間にシワを寄せていただろう。

でも、分かつてしまった。言葉の端々からでも、推測できてしまった。

もしかしたら勘違いかもしれない、何か間違えて受け取っているのかもしれない……。

……そう思ったかった。

だが、少し遅れて外を熱心に見ていたギルさんが、何かに気が付く。

「……おい、アレは……何だ……?」

「何だよギル。………というか双眼鏡ナシで良く見えるな………どうゆう視力してんだ………」

「はいロミオ先輩、じゃーん！ 小型双眼鏡、コレで見てー………あ、あれ？ ……ねえ隊長、ひよつとして今の通信……コレと関係ある!?!」

「………」

シエルちゃんが首尾良く手渡してきた双眼鏡をのぞき込みながら……。

私は、その光景から目を離すことができなかった。

フライアに、無数のアラガミが集っていた。

しかもそのほとんどは……小型種だ。一体倒すのにも時間がかかる中型、大型が居ないのはせめてもの幸いなかもしれないが、その分、数が多い。

何よりも不安なのは、ここから見えるだけでもかなりのアラガミの

数が確認できる……だからこそ。

一体、『中』には何体居るのか全然分からないということだった。

「……なに……これ……？」

アラガミ装甲壁はちゃんと在ったはずだ。

……アラガミは嫌う『偏食』を練り込んだ装甲壁は……ちゃんと在った、ハズだ。

……なのに、なんでこんなことになってるの……？

どうして、どうして、と脳裏は反響して繰り返すだけで、明確な回答など何一つ提示することはなかった。対策はしていたハズなのに、こうならない様になっていたハズなのに……と。

だが、本当に私の心の中にあっただのは。

……もつと、もつと……子供じみた思考だった。

「……お兄ちゃ……」

と、言いかけて口を閉じる。

違う。

違う……駄目なんだ。そんなことを気にしている場合じゃないんだ。

本当なら……本当ならここで、フライアのこととか、内部で働いている研究員さん達だとか、レア博士やクジョウ博士、ラケル先生や局長のことを……考えないといけないハズだ。

あとついでに神機兵も。

アレを食い荒らされる訳にはいかないんだ。

神機兵は希望だって……フライアが開発すべきものであって、これからの世界に間違えなく必要となるものだって……皆、言ってたんだから。

そうやって理性で感情を押し殺して、何とかマトモな判断が出来るようにと、冷静さを被せようとする。

……けど、無理だった。

怖かった。

……自分の……たった一人の……兄を失ってしまうんじゃないか、という恐れが頭から離れなかった。

……いや、そうじゃない。

もつと最悪の可能性がよぎる。

……ひよつとしたら……もう……手遅れになってるのかも……。

混乱しそうどころか、既に混乱している頭を抱えたまま、装甲車が停止する。

皆何をすべきかを理解している様で——次々に、収納された神機を取って、出撃していく。

「シエル、血の力『知覚』を使って索敵、それをデータ送信で全員に転送してくれ！」

「了解！」

「全員薄々分かっているとは思いますが……フライアにアラガミの侵入を許した。今フライアはAとDブロックを封鎖して凌いでいる！これよりブラッドは内部に侵入したアラガミの駆除に当たる!!」

今回は閉所、かつ救助活動を含めた戦闘になる。シエル、ナナ以外は銃の使用を極力控えろ」

「了解——！」

「分かった！」

「了解した」

「敵情報送信します！」

「……」

「……ロミオと副隊長はココに残って外側の敵を排除しろ」

「……な……!?!」

一瞬だけ、バナナ頭をカチ割ろうかと思った。

だが、冷静極まりない灰色の目で凝視されるとこちらも引き下がりがざるを得ない。

……よく考えたら体格とキャリア、訓練期間の差で体術でこの人に勝てる訳がない。

「ロミオの神機——バスターとブラストは閉所での戦闘に適していない。だからココで後続のアラガミたちを抑えろ。副隊長にはブラッドアーツがある。それだけの火力があれば仮に中型種や感応種が現れたとしても対応できる」

「……」

「——あー、了解。分かったよ。ここでアラガミを止めるぞ、唯」

「……だ……だけど……」

「大丈夫だって、ジュリウス達を信じろよ」

「……」

……迷いは、一瞬だけだった。

「……了解……。……ロミオ先輩！ 行きましよう!!」

「よっし！ 片付けるぞー！」

「ブラッド、これより戦闘状況に入る!!」

「「了解!!」」

遠くなっていく足音と、神機を変形させる音が、反響していくつも重なって聞こえてくる。

状況は最悪。

一体何がどうなっているのかも——見当も、つかない。だけど。

信じるって決めた。

皆を信じるって、決めた。

……だから……。

「大丈夫だって」

「……」

「ヒロキさんなら多分平気だよ。殺したって死ななさそーじゃん？
あの人。」

「だってお前のお兄ちゃんだからさ」

「……」

ロミオ先輩は、とても優しそうな笑顔でそう言った。

……。

とにかく……今ここでグダグダやっても何も解決しない。

ただ、やることを殺るまでだ。

そうして、目の前のザイゴード目がけて、銃を引いた——。



「しぬかとおもったー」

「ホントにホントにヤバいかとおもったー」

「……」

「アラガミなんて……毎日見えますけどー実際ー近くてぐわーつてなるとー怖いすねーあっははははは」

「俺こんな間近で死にかけたの3年振りだぜー」

「マジですかーヒロキさん。それ、ヤバいつすねー」

「ヤバイヤバイーマジでヤバイー」

「………」

「ビックリですねーまさか……アレだけ被害が大きくて……死亡者ゼロなんて!!」

「衝撃ですけども?」

「………すまない、我々がもっと早くに帰還していれば……」

「………」

には……非常に『軽微』なものであるらしく、フライアであれば4、5日もあれば修復することが可能になるとか何とか。

で、肝心な人的損害だけだ。

……良かった、というべきなのか、死亡者はまさかのゼロだったのだ。

ただ、大怪我がした人や……ひよつとしたら現在の再生医療を用いても完治させることが難しくなっているかもしれない人が数名居て、今医療班——特にイワン先生は大騒ぎになっているらしい。

そんな訳もあり、私たちだって暇をしているわけもなく……応急手当や後片付けにかけずり回されている。

「だけどさー……まあ今回だけは、まさか『アレ』が役に立つなんて思わなかったよね……」

「そうそう香月さん!! 全く不本意だったけど!! 今回ばかりは命を救われちゃったよーお兄さんー!」

「アレもう一種の才能かもだよな……」

「ああ。実は俺も薄ら感じていた……ひよつとしたら、アレが……そうなんじゃないか……と……。そう、アレこそが……奴に宿る『血のちか』r「ジュリウス、ソレ絶対違う! 違うから!!」……そうなのか?」

「そーだねえ、アレが『血の力』なんだとしたら……(そんな力この世に存在しちやいけないよ) ね?」

「な、ナナ……? いま何か心の声が聞こえたような気がするんだけど……」

「えー? 気のせいだよー? ロミオ先輩つたらーっ!」

と言う流れるような殺意の中。

……隊長はフツと涼やかに笑ってその人ばかりを見た。

「何にせよ……今回は、皆救われたということだな。

……ギル、に」

「ありがとうギルさん、ありがとうギルさん!!」

「イノチノオンジン カンシャ 永久ニー」

「俺もゴリラになります!! 俺も!! ゴリラに!!」

「味覚結合崩壊野郎とか言ってマジスンマセンでしたああああ!!」

「おでんパン」

「お、おう……」

ギルさんは一人だけ困惑していた。

何が起こっているのか良く分かっていないようだった。恐らく彼が今、人から感謝され、頭を下げられ、ジャパニーズDO☆GE☆Z Aされ、そして拝み倒されている理由を理解することはないだろう。多分、一生ね。

簡単に言うと。

アラガミがいよいよ侵入して来て、もうコレは死ぬかもしれないねえ超ヤベエとなったまさにその瞬間、神の奇跡か悪戯か或はその両方であるのか、偶々ソレが目に入ったと言うのだ。

その——黒光りする、空を見上げる——パイが。

尚、製作者は「つい、カツとなってやった。反省はしていない。作り過ぎたから沢山の人に食べてもらおうと思っただけ」などと意味不明な供述をしている模様。今現在全く反省の色は見えていない。

ソレを見つけた兄は言ったそうだ。

これだ——と。

ソレをアラガミに向かってぶちまけると、何ということでしょう。

アレほど元気に「人狩り行こうぜ！」とばかりにヒヤハーしていた小型アラガミたちが、みるみるうちに、全身から体液を吹き出し、青黒くなってグズグズに溶けていくではアリマセンか。何も無かったハズの空間に苦しみもがいた末に地獄を味わって事切れたアラガミたちが積み上がっています。

住み慣れた我が家に無理やり押し入ってきた元気なアラガミ様たちに、匠からのプレゼントです。

これでもう、フライアの平和を脅かすものは居なくなっただでしょう。本当に、本当に、なんということをしてくれたのでしょうか。

心配した甲斐が全くなかった！

正直、ここまで行けば才能なんじゃないかと思えてきた私。

だが、問題なのは本人はその才能に一切気づいて居ないということだ。

そして、タチの悪いことに人間、アラガミの区別なくギルさんの料理は容赦しない。

「神機使いを引退したら是非こつちに来てくださいギルさあん！」

「アイテム部門はいつでも貴方を歓迎します!!」

「錬金術師と呼んでもかまいませんか!？」

「食撃の救世主と呼んでいいでしょうか!？」

「……………え?」

「おでんパン」

「アンタが居てくれて良かった!!」

「貴官はフライアの全乗組員の命を救ったんだああああ!!」

「……………いや……………そうなのか……………」

奴が自分の犯した罪と遂げた功績を自覚してはいないらしい。

……………というかきつと死んでも無理だろうね。奴が今の状況を理解するためには取りあえず一回死んで輪廻転生して来世でちゃんと人間に生まれればワンチャンあるだろう。

いずれにせよ無自覚なことが良い事なのか、悪いことなのかは分からない。

ただ。

今回は、皆ソレで助かった。

それだけは……いや、それだけが。

まぎれもない、事実なんだと思う。

「ゆーいーちゃん？ あれ？ ……もしかして泣いてるのー!?」
「……………泣いてない……………」

「安心しちゃったー？ あっははははー良かったねー!」

「泣いてない……………泣いてないんだからあ……………うう……………」

「心配だったんでしょー？ 分かっているって。はい、泣くとお腹すい
ちやうよねー……………だーかーらー! はいどうぞ! おで」

「さっさとソレ寄越せええええええええええ!」

「ええええええええ!! ちよ、唯ちゃんそんな急に食べたら詰まっちゃう
よ〜!!? とうか今人間の顔してなかったよ!?!」

「……………う、うるさいい……………ううっ……………」

ナナちゃんからおでんパンをむしり取る。

何だろが関係ない、思いつき串ごと……………かぶりつく。

……………口に入ってくるのは、相変わらず混沌とした味と、微妙にしん
なりしたパンの食感。

それは喉の奥まで詰まったから……………息がつかまって、苦しくて。

おまけにパンも具も冷めちゃってて、ちっとも美味しくなんか
くって……………。

……少し、しよっぱかった。

phase 4 未知の挙動

今日も書類。

昨日も書類、どうせ明日もまた書類……ずっとずっと紙束と格闘しているような気がする。

今が朝なのか昼なのか夜なのか……もう分からない。

窓もない、時計もない、ロビーで机に座ってずーっとカリカリカリカリカリ……ってやってれば人間こうなっても仕方ないじゃないかと思う……。

ナナちゃんだけは正確な腹時計を持っているらしく、今が何時であるのかは正しく把握している様子。

だが、ナナちゃんが……ものすごい勢いで摩耗していく精神を何とか現世に繋ぎとめるために必要不可欠極まりない大切な情報を、無条件に私たちへと教えてくれる訳もなく……というか分かった所でナナちゃんにも何が変えられるわけもなく、ただただ時間が過ぎていくだけだった。

……いや、別に何もヤバいことをしている訳ではない。

私たちはただ……極東支部への書類上の手続きをやっているにすぎないのだ。

それが凄いキツイと言うだけで。

「もうむり……しんじやう……しんじやう私……」

「が、頑張れ……あと少しでおわるぞー……」

「ふええ……おでんパンが足りないよお……」

「わ、私には……おでんパンが無くとも……も、問題ありませんとも……副隊長……」

「なにー？ しえるちゃん……？ そんなーわたしのかみのけをーもさもさやってもーなにもーないよー？」

「くんくんくん……んっ……コレが……副隊長の……臭い……」

……ふう……コレで午後もイけます!!」

「……………良かったな。ナナー腹へってないー？ 大丈夫ー？」

「死にそ〜」

「しぬー」

「しつかりしろお！ 死なねーよ!! 人間そう簡単には死なないから!!」

ロミオ先輩には私たちへ激高叱咤するだけの元気がまだ残っているようです。

ちなみに、私たちよりも若干手慣れているっぽいギルさんは黙々と文字を書く作業に勤しんでいた。神機使い歴5年のカンがそうさせるのか、作業が始まって以来彼はあまり喋らない。

多分そうやって必要以上に消耗することを防いでいるのだろう。体力の節約の仕方を良く知っていやがる。

そしてもう一人、こういう作業に手慣れているであろう、隊長は……………。

「追加持ってきたぞ」

「二うわああああああああつ!!」

「追加だ」

「やだーもうやだー！ やだあああ！ やだよおおおお！」

「ちよ、ちよつと休ませ……………、コレ以上やったらマジで無理…………オレもう無理…………」

「お腹すいたよー！ 隊長〜！」

「なんだかいしきが…………」

「唯ー！ ココデ寝タラ死ヌゾー!!」

隣でロミオ先輩の声が聞こえる…………。

ギルさんはいいから早く寄越せ、とばかりに指をクイクイつとやっている。

もちろん目は合わせないし声も発さない。視線は、下から動くことはない。

だが、確実に分かったのはその目が死んでいるであろうことだった。そう……こうゆうのは……ッ！

心を閉ざし、思考を停止し、物言わぬ機械のようになった者勝ち……ッ！

に、対して経験値が桁違いだからか……それとも元々スペックが高いからなのか、余りダメージを負っていないらしい隊長はいつもとあまり変わらない精神状態の様だった。

「いや、コレは違う。そうだな……休憩がてら良いのかもしれない……。全員、手を止めてこっちに来てくれ」

……などと、のたまいやがった。

まあ行きますけどね……拒否権ないし……嫌じゃないし……。

むしろお近づきになれるなら嬉しいけど……できればもつと心と時間に余裕があれば嬉しかった人生でした。

なぜこんなことになっているのか、と言うと答えはクソ簡単だ。

今まで……こうゆうコトを丸投げしてさせて貰っちゃっていた事務員がゴツソリ減ったから。

この前のフライア襲撃事件は死者こそゼロに抑えられたもの――怪我人が居なかった訳ではない。その怪我が原因でまだ復帰でき

ない事務員さんや研究員さんも多いし……。

実際、フライアがこれから人類の最前線『極東』に向かうにあたり、大幅な人員整理にあった。

だが、この人員整理は決して悪い意味ではなく——殆どは、今と同じ待遇か栄転という形で世界各国の支部及びフェンリル本部に転属になっていた。

それは、当たり前と言えば当たり前前の判断だった。

今の人類にとって『人材』というものは実は貴重品であるらしい。

……人のことを消耗品扱いしまくっていたあの支部や、イザとなったら多くを生かす為にバツサリと人を切り捨てているという現実ばっか見てきたせいで、イマイチ現実感が湧かないが、人と人材は別。ということなのだろう。

つまりは人材——確かなDNA情報や身元、一定以上の教育。そして能力。支部や人類に対し貢献する姿勢やフェンリルに対しての忠誠心がしっかり把握されている有能で『使える』人間——を易々と死なせるわけにもいかない、と。実際、同じ人材を再生産するのには時間と金がメチャクチャかかる。

それこそ、私が当たり前だと思って悠々と通っていた学校だって……この世界では、行ける人間の方が、少ないのだ。

ある人は自分の意志で、またある人は戸籍のある本部や支部からの昇進をチラ………命令により仕方なく………と言った感じに色んな人たちの疎開が進んでいる。

つまり、これから先のフライアは本当の本当に極力数の絞られた少数精鋭のみで構成されるようになるという訳だ。

……ので、神機使いと言えども、今までの様に丸投げではなく「この位は自分たちでやれ」という訳になった。

そうゆう訳で、私は改めて自分が今まで非常に甘やかされていたと

いう事実をつきつけられたのだった。

今更だけど。

本当に今更だけど。

どの道、今この瞬間、慣れない書類仕事で死にかけているという現実は何も変わらない。

「何ですか隊長ー」

「おなかすいたー」

「腹減った」

「私、とてもムラムラします」

「なあシエル、自重って知ってるかー？」

「……わ、私はそこまで重くありません!! 少し大きいだけです!!」

「体重じゃねーよ!!」

「もー……?」

隊長が箱から取り出してきたのは、簡易アルコールパッチテストに使うみたいな医療用ケースだった。

箱の中にくっつかのシートが詰まっている。ソレを見て、やることは大体察した。

……アレルギー検査でもやれと言うのだろう。

私、アレ嫌なんだよなあ……。子供の頃、兄がやっていたのをみたことがあるけど、48時間肌に色々くっつけたりしなければならぬのだ。

「隊長く? なにそれく?」

「何って……アレルギー検査用のパッチテストですよね? 何か調べられますか?」

「……どこかで見ることがあるような気がしますけども……?」

「私特にアレルギーなんかないけど? 何でも食べれます!!」

「……ウナギのゼ……」

「あははははー？ ……唯ちゃん何か言ったかなー？」

「何かって……な、何も言っていないイツテナイ言ってもせん言ってもせんからはい!!」

「悪いのはこのお口かな〜？」

「……」

「……」

無言のギルさんと、ロミオ先輩。

やがてギルさんが口を開く。

「……P-53型偏食因子適合パッチ……だろ？」

「は？」

「何それ〜？」

イマイチ聞いたことがない。その物質名を言われてもパツとしなかつた。

ロミオ先輩がため息をつく。

「唯はともかく……ナナはさあ、やっただろー？ マグノリアIIコンパスに入るときにさー」

「えー？ 私そんなのやってないよ〜」

「え？ ……ふーん……そーなんだ……。……まあ、いつか。オレ、あんまこうゆうの好きじゃないな……」

「そうなんですか。ギルさんは見たコトあるんですか？」

「………何度か、な」

妙に歯切れが悪い口調。

外部居住区ではよくパッチテストをやっている、とだけ告げる。

「へえー……そーなんですかー」

「唯ちゃん知らなかったのー?」

「うん、私の居た場所じゃ見たことないよ。学校で年に一回健康診断やっってたくらい」

「ふーん。どこでもやるんだねー健康診断ー」

「フライアはやりすぎだと思っただけね。」

それはそうと、ギルさんの言っただパッチテスト、というのが引かかる。

外部居住区でパッチテストを頻繁に行う理由。

……。

……どう考えてもロクなことが思い浮かばない。

私自身、あまり『ゴツドイーター』を知らないから何とも言えないけど……。

『内側』には、赤紙が回ってくるのが少ない。私に赤紙が回ってきて驚かれた位だ。

かといって、ゴツドイーターの数が少なかったか、というと……現実はそんな訳じゃなかった。

……つてことは、そうゆうことなんだろう。

具体的に言えば『内側』の人間は、安全が保障された環境があるために、教育や思想の統制がし易い。だから『使い道がある』って判断されている。

少なくとも——使い捨て以上には。

そこまで考えて、私は……ある可能性を思いついた。

フエンリルの庇護外——サテライト地区や、壁外の非保護人類。

彼らとの軋轢があることは身に染みて分かっていたことだけ……その見積もりさえ、甘いかもしれない。

ひよっとしたら、外部居住区と内部居住区……そこにも、見えない

壁は立ちふさがっているのかもしれない。

腕を出せ、と言われて袖をめくって、パッチを乗せる。

3分間待つて、ソレを外す。

まずはシエルちゃんと、ロミオ先輩だった。

「セ、セーフ……よ、よし……変わってる……！」

「見てください副隊長。この様に赤くなれば適性がある、ということです」

ロミオ先輩とシエルちゃんの腕には、綺麗に四角く赤色がついていた。

彼らはP―53に嘉されたらしい。ヨカツタネ。P―53型にも乗り換えが出来ルネー。

次はギルさんが外す。

「……あれ？」

「??」

そのパッチは何というか……凄い微妙って感じだった。

半分は赤くなっているが、ロミオ先輩やシエルちゃんみたいにハッキリ色はついていない。半分位ボヤケちゃっていた。

なんでなの、どゆうことなの。

「俺は元々旧型から乗り換えだ。………まだ……残ってるのかもな……」

「そうだな、ギルの中のP―53型偏食因子が残留している可能性がある」

「ちよつと待つて下さい、隊長ソレつてもしかしてヤバいんじゃないでしょうか……？」

「あまり良くはないが、どの道どちらも適合しているのだから問題はないだろう。一度人体に入れた偏食因子は消えない。」

P―53型とP―66型の偏食因子がお互い干渉しあう可能性もなくはないが……そうなったらその時はギルごと処分すればいいだけの話だ」

「あ、じゃあ大丈夫ですね！ 良かったあ……」

一度入れたら消せないとか怖エエな偏食因子。

次はナナちゃん、私が一緒に剥がす。

「あ、あつれー……?」

「ええ〜? 全然変わってないよー……なにこれ」

「副隊長もナナさんも変化ありませんね……」

シエルちゃんの言う通り。

全然全く、偏食はなかった。ただ、元のままの肌色が残っているだけだった。

つまり……コレが意味するコトは……。

「私とナナちゃん……P―53型への適性……ないってことだよね……」

「ねー。ブラッドじやなきやどうなったのかちよつと怖いねー!」

「そういうこと言わないでよお!!」

私、ブラッドじやなきや、適合試験の時点で人生終了のお知らせが通知されてたのか。

改めて考えてみると怖……。

「ナナちゃんだつてそうでしょ……」

「私、ブラッド以外に道ないよー?」

「やだ……ナナちゃん覚悟決まってる……」

「唯ちゃんと一緒にしないで」

ナナちゃんの声は冷たかった。

あとは隊長。ピリピリピリとパッチを腕から引きはがす。

結果は赤。適性アリ。

……まー、ですよねー。とも思った。

基本、何をやっても完璧にこなすこのお方に死角はないらしい。

それがブラッドの隊長——ジュリウス・ヴィスコティという人なのだ。

少し時間を貰えますか——と、シエルちゃんは言った。



曰く、ここから先の極東支部はマジでヤバそうなので、メンバーの戦闘効率向上の為にと遠距離からの攻撃を重視した方がいい……との献策だった。つまりは銃を使った戦闘技術の強化だ。

「ちなみに、貴女はバレットエディットを積極的に使用していますか？」

「……うーん……実はあんまり……」

「そうですね……分かりますとも」

ゴッドイーターの使用する銃弾は通常兵器とは違う。もう何度目かになるけど、アレはオラクル細胞をぶっ放している。つまりは、カッチリと型にはまってはいない。その分柔軟性があり……つまりは銃の弾丸の様に、毎回弾倉に入っている数だけ同一規格の規定数の弾が撃てるという訳じゃない。

これのメリットは弾丸の種類の幅が広がるということだ。レーザーやモルターなど、そのアラガミごとにより有効なバレットを撃つ作業が、楽ではあるのだ。

デメリットはそのジャムの多さ。

初期配備だったころには弾詰まりや、逆噴射という怖い事態もザラではなかったらしい。

そのために整備が銃器とは違い専門の技術がどうしても必要となる。今では技術が進歩した為、ジャムの確立は1万分の1……と、言われているらしいけど……。

一応、P-53型第一世代以降の神機にはオラクル細胞がアホみたいな弾丸を造らないように、管理するための制御機構が搭載されている。それらは『モジュール』と呼ばれる。

そのモジュールをガチャガチャいじりまくる作業がシエルちゃんの言う『バレットエディット』だ。

無論、そんな難しいものが私に分かる訳もない。

「バレットエディットはその難解さからか多くの神機使いが敬遠するようですが本当にすばらしい技術なんです。弾道や挙動の変化は立ち位置が流動的になりがちな遠距離攻撃において多くの選択肢を与えてくれますし性質を変えることで威力や範囲のコントロール、更には味方の回復効率の向上まで……」

「あつ……すみません、つい熱くなつてしまいました……」

「大丈夫……。……シエルちゃん、本当にバレット好きなんだね」

「……………はい、好きなんです」

「……」

「で、でも……………副隊長のことも……………好きです……………よ……………?」
やだ、しえるちゃん赤くなってる……………本当、可愛いなあ……………。

「そこで、ですね……………」

という、シエルちゃんの提案に従ってミッションオーダーをした結果。
果。

ザイゴードがふよふよと浮きまくる中、ヤクシヤをつれて逃げ回るといふ任務を発注。

シエルちゃんがザイゴードを撃ち抜いている間に、ヤクシヤを連れてマジで逃げ回り、最終的にはシエルちゃんの脳天狙撃によりヤクシヤは眠りについたのだった。

ちなみに今回はそこらへんで暇そうにしたていたナナちゃんとロミオ先輩のコンビ+ギルさんも合わせて出撃したので、かなりの大所帯出撃になっている。

まあ、その辺はフライアには隊長残してきたし特に問題はないよね。

「終わったー、はやく帰ろー……………つてアレ? 唯ちゃんどうしたのー?」

「警戒」

「もう任務は終わったよー? なんでー?」

「いい? ナナちゃん……………こんなね……………ミッションが何も問題なく終わる訳がないんだよ……………! この後絶対ヤバイアラガミが現れたりするって相場が決まってるんだから……………!」

「あはは……………被害妄想かなー? お、おでんパンいるー?」
「いない」

後方でシエルちゃんが座り込んでいる。

ロミオ先輩が何かあったのか、と今まさに聴いていた。

『どうしたよシエル？ どっかケガしたー？ それとも具合でも悪いー？』

『いえ私は。……それより神機が何か……』

『え？ 不調？ マジかよー……最近整備さん減らしたからかなー……』

『……不調というより……悪くない、変化だと……思いますが……』

『……え？』

『すみません、上手く言語化できません』

「……？ 大丈夫シエルちゃん？ 無理しないでね。帰ったら整備さ

んに診て貰おつか」

『はい！ はい！ 副隊長!!』

シエルちゃん……本当可愛いなあ……。

内心でそう思っていると。

不意に背後からガサリ、という音がした。

反射的にそっちに銃口を向ける。

音的に距離は10メートル以上離れている、だったら剣より銃で先制する方を選ぶ。

視界を絞り、ピントを合わせた先には……。

「アモさん……アモさんや……！」

アモル、という希少種のアラガミが居た。

滅多に遭遇しない＋希少素材が取れることから『幸運のアラガミ』と呼ばれる小型種。

カサカサつとこつちに気づいたらしいアモさんは、そのまま踵を返してパタパタパターつと……だがものすごいスピードで逃げていく

所だった。

「あー……あーあー……まあいいや……アモさんだしね……」

アモルなら人に直接的な危害は加えない。

と脳内で勝手に思い込み、ならいいやーと銃を下ろす。

皆が呼んでいる声がする。

そろそろ帰ろう、隊長だけ置きっぱなしにして行っちゃったから

……嗚呼これから任務報告とか書かなきゃだし大変だなあ、書類仕事

嫌だなあ……。

とか他愛もないことを思いながら私は一步踏み出……

「……え？」

したかった。

が、何が起こったのか足元の踏み応えはなく……いや、あつたけど……強いて言うなら薄氷を踏み割ったかのような感触をおぼえる。

つまり……そうゆうことです。

「ほらやっぱり何かあると思ったあああああゝあゝあゝあああ
あああああああ!!」

「え……ええええええ!? ま、マジかー!?」

「唯ちやああああん!! そんな……! そんなつ……! そんな断末
魔……あんまりだよー……!!」

「ナナあああ! 諦めんなあ! まだ死んでねえよ!! 人間は!

そう簡単には! 死なないから!!」

「副隊長ー!! 今! 逢いに!! 行きます!!! とおう!」

「早まんなシエル!!」

「止めないで下さい! 嗚呼、副隊長が……! 私の副隊長が……!」

……という、仲間の声が、どんどん……遠く、小さくなっていくことだけが。

落下していく私が、最後に認識した現実だった……。

……これ……どこまで落ちるんだろう……?

phase 45 おいでよ、女神の森①

「ゆうううういいいいいいいい!!?!?」

「副隊長ー副隊長ー!」

「聞こえてるかー! きこえてるならー! 返事しろおおおお!!」

「副隊長ー! 副隊長ー!」

イキナリ開いた穴の淵から深奥を覗き込むようにして、ロミオとシエルが叫んでいた。

隣に居るナナは比較的冷静そうな眼差し、更にギルバートに至ってはフライアへ打電を開始している。

「あー……駄目だ……どうしよう……アイツ……本当………有り得なさすぎる!!」

「度を越したドジは超迷惑だよね」

「ふくたいちよー! ふくたいちよー!!」

「ああああ! シエルすてーい! ステイ!! ほら、コレ唯の!!」

……朝使つてたタオル……」

「ふくたいちよおおおお! ハグウ! くんくんくんくん……」

「……シエル、お前……変わっちゃまったな……。うん……まあいいや……あーもうどうしたらいいんだよコレー! なあ、ナナあ!?! 何か考えない!?!」

「あのね、先輩……ひとつだけね、さつきから考えてたことがあったんだけどね」

「お、おお?! マジでか! 言ってみ!」

少女の紅を帯びた目の色は真剣そのものだった。

ロミオは思わず喉を鳴らす。

このナナという娘は……普段はおでんパンとおでんパンと飯、三度の飯より飯が好き、という腹ペコガールではあるが……実のところ、直感が鋭く、どこか聡いところがある。

だからこそ、何か有用な案があるのではないか……とロミオは期待と懇願と焦燥の入り混じった目を向けた。

あのね、先輩。とナナの唇が告げる。

「ここで副隊長がりタイアしたら……繰り上がりでロミオ先輩が副隊長に昇進するんじゃないかな……って思ってたんだ〜！」

「あー……同期で入ってきた友達というか仲間というか、血よりも濃い絆で結ばれた家族の安否を心配するどころか助けようって気にもならねえんだな、流石はナナだよ！」

「やだなー先輩つたら〜。あのねーそしたらねー。同じ現象が起こるんだつたら〜次は私がブラッド隊の副隊長つてもあり得るのかなーつてちよつと思つちやつただけなんだからー！」

「香月さん……君は……何と戦っているノデスカ!？」

「アラガミ」

「そうだな……それもあるけどオレ、ナナが別の何かを目指している様に思えるんだけど……ナナ怖い……」

「副隊長を！ 一心不乱の副隊長を!!」

「シエルは心配なのは分かったからちよつと落ち着いてまず人間としての健康で文化的な最低限度の尊厳から思い出せ!!」

「そんなもの！ 今の私には必要ありませんとも!!」

「一番忘れちゃいけないことなんだよおおおお!!」

「シエルちゃんおでんパン食べるー?」

混迷に向かって全力疾走していく状況を収めたのは意外——もしくは必然的にギルだった。

腐つてもブラッドの最年長だ。ついでにキャリアは部隊内で2番目に長い。

「落ち着けお前ら。今ジュリウスに連絡した所だ。腕輪から発生するパルス信号をフライアの方で逆探しているらしい……それに、この高さからなら落ちても死なねえよ」

「なら副隊長は……嗚呼……良かったあ……」

「……おい、ナナ何してんだ」

「……………えへへくべつつつにー？ なんでもないよー？
ふーん……………この高さ、からじゃ……………落ちても殺せないんだーと思って
ね……………」

「お前ギルの背後に回って何しようとしたの!?!?」

「……………何もしないよくくやだなーロミオ先輩つたらーっ!」

「ナナあ!!」

物騒な桃色少女をスルーしたギルが端末を覗き込み、舌打ちを漏らす。

「…………チツ…………駄目だ、反応がない。…………もしかしたらビーコンが破損したのかもな」

「おおー。流石は唯ちゃんー!」

「どうゆう奇跡だソレ!?!」

「もー…………わ、私なら直覚能力で副隊長の居場所を突き止められますのに!! あの方が何処にいるのかイツパツで分かりますのに!」

「無理すんなよシエル……………まだ血の力目覚めたばっかなんだからさ……………」

「もー……………」

シエルの『直覚』能力は左右の距離では広域の索敵を可能とするが、残念ながら現時点では上下にはあまり役に立たなかった。

「まア、何とかかなんだろ」

「オイコラあ! 思考停止してんじゃねーよゴリラ!!」

「してねえよ、アイツは生きてる。で、あとは情報を待つしかねえだろうが」

「だ……………だけどき……………! ……もしかしたらケガとかしちやってるのかもしれないじゃん……………? ……ここ極東だろ? 小型種だって硬いの……………そんなんだつたら危ないだろ!」

「さつきも言ったがこの位の高さならゴッドイーターなら転落した所で死ぬような距離じゃない。

……肋骨2，3本は逝くだろうがな」

「それヤベエじゃねーか!!!」

「結構クセになるんだぜ？」

「テメエの性癖なんか聞いてねーよ!! 死んどけこの腐れ変態!!」

「永久凍土にでも埋まってなよ〜」

「八寒大地獄直葬ですも」

部隊員から浴びせられる罵声だが、ギルバートには全く響いていないようだった。

傷ついてもいないし、嬉しくもなさそうだ。

「隊長からの通信だ。『戻って来い』……だそうだ。帰投するぞ」



「な、ななななな……何でもしますから！　い、命だけはあ！」
「……」

状況を整理しよう……。

死んだと思った。大落下したのだから。

それが何故か自分は生存しており……多分オラクル様の影響を受けて細胞レベルで強化されまくった身体のお蔭だろうが……落下地点が偶々池——どっちかと言うとドブだった。故に地面に叩き付けられるよりは幾らかマシな結果になったからだろう。

全身が痛いには痛いだが、動かせない程の怪我ではない。

……動きたくない程の疲労はあるけど。

多分、察するにこの目の前の青年に助けてもらったのだろう。

つまり、私は今助けしてくれた人に対して命乞いをしている。

……命乞いをしている。

「……何でもするのか……？」

「………はい」

って言っても限度はあるんだけどね。

「じゃあ……くつかえしてくれ」

「………は？」

「靴返してくれ」

「………えっと……？」

一瞬覆してくれ、と言われているのかと勘違いをしてしまった。

どうやら寝込んでいた私の……枕の代わりにしてくれていたらしい。地味に親切な対応だった。

……ちよつとクサ……へ、変な臭いするけど。

「………どうぞ……ありがとございしました」

「………ああ」

……そしてまた無言。

あまり喋らないタイプの様だ。平素ならば、むしろ好ましく思えるだろう。

……でも今は喋って欲しい。マジで心から。

「えーつと……？ 私は……」

「……アンタは上から落ちてきた。それで、溺れてたから、助けた」

「……あ、ありがとうございます……」

だから上半身脱いでるんですね彼は。

腹や肩にデカイサンマ傷が見える。かなり古いものらしく、痕は残っているものの体格はかなり鍛えこんであると感じた。体躯は細身ではあるものの貧弱そうには見えない。

……と、いうことは、この青年は栄養衰弱状態ではないということだ。このご時世で栄養失調に陥っていないということは、もしかしたらフェンリルの配給を受けられる立場の人間であるということなのだろうか。

何となくそう考えた。

「……そうだ、神機……!?!」

アレ放っておいたらヤバいつて……!

一応アレだつてアラガミ。日ごろから逃げる機会を伺っていたようだから運が良ければ隙を突いて野生に戻るかもしれない。

そうなったら今度こそクビ……もとい、偏食因子投与停止処分だ

……!

「神機は拾った」

「はあ!?!」

「アンタの神機は、拾った」

青年は事実を二回ほど繰り返した。

別に音波として聞こえなかったわけではない。ただ、脳が情報処理を拒否したのだ。

「え……？ 拾ったつて……」

当然だが、神機は武器というより生体兵器、つまるところアラガミ

である。

好き嫌いしやがったり、勝手にビビってシールド開閉したり……挙句の果てには何だか最近ヘソを曲げたりでとーっても個性的で素晴らしいと思う。

……じゃなくて。

アラガミだから当然適合者以外の人間は捕食するし、一応この子（？）の適合者な私ですら偏食因子が尽きたらモグモグされる運命だ。だから普通の人間が何の特殊処理もない状況下で触ったりなんかしたら……あつという間に元人間なもみじおろし一丁の擦り上がりという結果になるかもしれない。

「沈んでいたから、縄で引っかけて取った」

「……」

「コアと接続部位の下。そして先端の六角金属部。ブレードタイプだとそこは触っても大丈夫だ。だから回収できた」

「……凄いですね!」

「よく……やる。神機の回収依頼を受けたこともある」

何なんだこの人……。

あと、そろそろ服着てくれないかな……。

別に……今更……男の上半身など見ても何とも思わないけど、ビジュアル的に凄く寒そうだ。

改めて見ると、その整った面立ちが明らかになる。

植物を思わせるような深い緑の目と視線があった。まだどこか子供っぽい、あどけなさを残しつつ落ち着いた雰囲気のある人だ。年齢は恐らくひとつかふたつ上だろうと思われるが、どっしりと構えた隙の無さが一回りほど大人びて見えた。

……と言うのは実は二の次で、正直本当のところ眉毛太いなコイツ、と真っ先に思ったのだけだ。

あとデコ広いなー髪質剛毛だなー……って位。

「……」

「……」

……駄目だ全然情報がひきだせない。
何か喋らなきゃ……。

「えっと……今車の中……ですよ……」

「……ああ」

運転してるの誰!?

「こ……これどこ向かってるんですか……!?!」

「……」

無言。

……よくよく考えたら怖くなった。

もし、極東支部にこのまま直送されるんだとしたら……私……ブラッドと合流できるのか。

考えてみたら単独行動は危険極まりない。

最悪神機取られてそのままポイとされる可能性が大……!

「あ、あのウ……じ、神機って……私の神機って……返して貰えるのでしょうか……!?!」

「……」

やっぱり無言。

だが、あからさまに目を逸らすという態度。

結論。

「か、返してくれないんですね!? や、やっぱり!! そうですね分かり

ましたアア!!」

「……」

あつ……。

これ終わった……かも……。

「い、いいですよーいいですよー!! あの神機ロクでもない神機なんですからあ!! 好き嫌いは激しいし適合してもいう事なんか聞かないし挙句の果てにはよく機能不全に陥るスゲエ代物なんですからあ

!! 誰にでも使えると思ったら大間違いです! 大体! 適合したハズの!! 私にだって!! 使いこなせてない!!!」

言っつて悲しくなってきた。

太眉男子も啞然としている。

「……………え?」

「あんなもの分解したところでマトモな装甲壁になればいいですね! というかなければいいと思いますね!! ひよっとしたら周囲の装甲壁素材をバリバリに食って被害拡大しかねませんからあ!」

「……………」

「シールド勝手にカパカパするしー捕食しなくていいのに勝手にしまくるしー! しかも食べたコアが全部回収されちゃってますから素材なんか引っ付いてないし多分テンデ役に立たないと思いますけどね!!」

「……………」

必殺、適当な事の集中砲火。

とにかくどうでもいい情報をそれっぽく喋って相手を混乱させてみようとかいう、底の浅い考え。

そんな論法が効く相手かどうかは良く分からないが、何か彼は黙ってしまった。どうせ出まかせだとバレるのは時間の問題だろうが、今この瞬間神機使いが言っていることを無碍にスルーは出来ないハズ……………!

「……………ひとつ聞く」

「……………何でしょう……………」

答えると思ってるのか。

……………と、一瞬よぎったが。質問する姿勢は非常に真摯だった。真剣そのもの、と言った表情に悟る。コレは多分嘘をついたらバレるだろうな……………と。

「アンタ……………神機使いになって、どれくらいだ?」

「……………」

『ゴツドイーター』になつて、どれくらい経つ？ ……答えたくないなら、いい」

……。

……質問の意図が掴みかねます。

そんなコト気にしてどうするんだろう、と思うが……。

……考えられるのは戦闘員として使えないかと思つているんだろうなーという可能性だけだった。

じゃあ嘘をつく理由もないからここは正直に言う。

「……1年」

「……」

「………ほ、本当は、今やつと脱新兵した位ですつ……！」

「………分かった」

……今の返答で間違えてはいないよね……？

するとイキナリ、ガコンという何かが開くような音。

車………というか装甲車の外側から聞こえてくる。

装甲って言うくらいだからソコソコ分厚い金属か何かで構成されている（ような気がする）………ということは、かなりデカイ何かが開いたんじゃないかと……。

……。

………。

経験則上デカイ何かつて『アレ』しかないんだけど……。

「……あの………貴方………極東支部の人………ですか………」

青年は少しだけ暗い表情で答えた。

「違う」

僅かな沈黙。

その後、再び口を開く。

『第一サテライト』……。

俺達の町は……『ネモス・ディアナ』——だ」

力強い声と共に告げられたその名は。

……どっかで聞いたことがあるような気がするけど思い出せな
かった。



サテライト拠点（3回目）

ここでは神機使いはやたらと嫌われる。

コレだけ覚えた。

つまり、この状況——命の、危機……！

いや、でも……まだ行ける！ 私はまだコンテナの荷台！ 装甲車のお荷物！

ウンテンシユさんが黙っててくれさえすればワンチャン……！

「おかえり……調達班……パパッと手続き……して……入って……おいしいごはんが待ってるよ……」

「ただいま……手続き終わった……。あとなー、コゾーがなー。」

神機使い「拾ってーきーたーぞー」

「マジかよ……スゲ……」

「マジだー」

……神よ……。

この世に慈悲はないのですか……？

「なんで即バレしちゃうんですかああああ!!」

畜生がああああ!!

「まかせれ……今……通報した……」

「すげー仕事早いなー流石だわーじゃあオレ帰るわー」

「どうもネモス・ディアナ警備隊です。荷台を開けて下さい」

「どうもコンニチワ。さっさと神機使いを降ろしてさしあげろア!!」

「つーるーせーつーるーせー」

「うわああああああああ!? もう縄があるー! な、縄が用意されてるー! ちよ、ちよつと待つて下さい何でもしますから命だけはああああああ!!」

「うわクッサ……心配しなくて大丈夫ですよ、この縄はですね……特殊繊維を用いておりますして無理やり引き裂こうとすると手が千切れる仕様になっておりますので」

「あくしろよ!」

「こーしゅーけー。こーしゅーけー」

「やめて下さい助けてえええ!! 首縄が断頭台と大差ないのでどうあがいても死じゃないですかヤダあああああ!」

つい助けを求めてさっきまで密室で二人きりだった青年を継るような目で見える。

上半身脱ぎだったハズの太眉イケメンは何故か一瞬で服を着ており、袖は腕まくり……しかもマスターロールにしている。

しかもちやつかり助手席に乗っていた。私を見ると若干憐れむような眼差しを一瞬残した後何故かGJ!と親指を立てやがり。

……走り去っていった。

私の……神……機……。

「持つてかないでー!!」

「連行します」

「直送します」

「直葬です」

「あ、や、やったー直死じゃない!! と、とりあえず生きてるー!!」
こうして私は鬱血寸前にまで腕に縄を巻かれまくり、やたらガタイのいいオッサン×3に担がれて、何か凄そうな所に連れていかれたのでした。

そこにはまたしても眼鏡をかけたオッサンの姿が。

年齢的には……うちの父親と同じ位な……ような気がする。

やたらと厳しい顔つき、ピンと伸びた背筋、折り目の正しい服装に、全身から発せられるオーラの様な何かを彼を間違えなく偉そうな人であるということを感じさせた。

コレはそう……グレム局長とか隊長とかと同じ人種だ……！

だが、どこか……まるで専門分野に特化した系統の知性というか……神経質そうで潔癖的な印象を抱く。

そう……何となくだけど。

研究者に多いタイプ、なような……感じがした。

「……君は……」

「……う？」

その眼鏡の男性は私の顔を見るや否やで一瞬はつとしたような表情を浮かべる。

だが、すぐに無表情を決め込み、元の厳しい顔つきに戻した。

「私はこのネモス・ディアナの総統を務めている。……見たところゴッドイーターと見受けた。貴官の所属と階級を名乗り給え」

「……」

「……と、言っても素直にいう訳がない、か——。」

いいだろう。こちららも少し情報を開示しよう」

すると、オツサンはイキナリ端末を起動させ、電子文書を開いた。一読して絶句する。

それは……ココに来るまでに散々格闘させられた『極東支部』の書式の証明書だった。

見ただけで悪寒が奔る。体が拒絶反応を起こしていた。

……と、今はそんな場合じゃないから……青ざめて、脂汗を流しながらも何とか文章を読み取っていく。

そして、一番下の署名欄には二人分のサインがあった。

独立支援部隊『クレイドル』のアリサ・イリーニチナ・アミエーラとか言う……おそらくはゴッドイーターで『クレイドル』所属であろう神機使い、ロシア系っぽい女性の名前と。

極東支部支部長、ペイラー・榊……その人の名前だった。

「見て分かっただろうが、我ら『ネモス・ディアナ』は極東支部との防衛上の提携をを結んでいる。極東から防衛の為に神機使いが派遣され、我々はその物資供給や補給を支援している」

「……」

「故に——ネモス・ディアナは神機使いを『保護』するということを私が保障しよう。……コレで警戒を解いて頂けたかな？」

確かに——筋が通る。

極東支部の支部長の署名まで見せつけられた証明書まで突き出されては何も言えない。嘘をついているようには見えないし……多分、コレは本当のことだろう。

だが、ひとつだけひっかかることがある。

……だけど、その疑問を口に出すのは憚られた。

「どうしてもと言うのならは今防衛にあたってはクレイドルの神機使いの名簿一覧を見せようか？ 何ならその全員と今この場で連絡を取ってもらっても構わないが」

「い、いえー！……そ、そんなことしなくても……」

「……それとも、貴君は神機使いではないのか？」

「……は!?」

「私はただ所属と名前を名乗って欲しいとだけ言っている。それすら出来ないという事は——何かネモス・ディアナに危害を加える心算でここに来たのか、それとも——そもそも神機使いというのがネモス・ディアナに入りたいがための狂言か……と疑わざるを得ない。その確認、何より君自身の身の『証明』の為に名前を教えてほしいと言っているのだよ。」

……

……見たところ神機使いに必要な『腕輪』も何か違っている様だ
痛いところを気付かれた。

「え……こ、コレはその……!」

「神機使いは新型、旧型と問わずにその全ては『赤い腕輪』をしていると記憶しているのだがね？ 貴君のそれは黒い腕輪の様に見える。

……何、自分の身に覚えがなければ堂々と名乗ればいい、それだけではないのかね？」

「……」

うう……この揺さぶり怖いよお……！

緊張感で胃がキリキリと締まってくる。おなかいたい、もうはきそう。

……まあ……でも……。

サテライト拠点が神機使いが欲しいっていうのは、分かる話だし……一番近い極東支部と繋がっているとしたら、順当ではあると思う。

だったら……信頼しても、大丈夫——だよね……？

少なくとも所属と階級と名前を名乗るだけなら問題ないハズ——。その他何一つ喋らなければ良い……ハズ。

そう考えて言うことにした。

「わ、私は……フェンリル極致化技術開発局所属『ブラッド』の神威唯です……腕輪が黒い理由は訳あって話せませんが神機使いです……！ 持ってきた神機がその証拠です！ ええつと……こ、コレで信じて頂けましたでしょうか……!?!」

驚きの黒さ。

ぜんぜん、しんぴようせいがないよね。

だ、だって全く見知らぬオッサンに対しての自己弁解なんか慣れない……！ 腕輪が黒い理由は一般人に対しては守秘義務の範疇!!

言わなくたって問題ない!!

尚、総統と名乗ったオッサンはその丸い眼鏡を反射させて腕を机の上へのせ、顎の前で手を交差させている。

「失礼……今、フェンリル極致化技術開発局……と……言ったかね？
私の——聞き間違いではない、かね——？」

もういちど所属を……尋ねても、良いかな……？」

「は、はい……フェンリル極致化技術開発局……通称『フライア』です
けど……あの……何か……？」

「そうか。」

……そうか……」

「あ、あの——……？」

オッサンのタダならぬ様子を感じ取ったが

——なんかもう既に手遅れっぽかった。

途端に扉が開き、さっきの警備隊っぽいやたらガタイのいい筋肉ダ
ルマ×3が突入してくる。

あ……これ……ヤバイやつだ……。

「残念だ……非常に残念だよ……そうか、フライアの連中か……奴ら
めとうとう……こんなものまで……送り込んでくるとはな……！
どこまで我々を愚弄すれば気が済むのか……！」

「な、なんのお話ですかあ……！？ し、知らないんですけど……私知ら
ないんですけど!？」

「立ちなさい」

「フライアは黒……はっきりわかんかね」

「懺悔しとけや懺悔」

「だから何で!？」

誰も説明してくれない。

「黙れ! フライアの犬め!! コレだからフェンリルは信用できん!

大っ嫌いだ!! バーカー!!」

「フェンリルに対する深刻な風評被害!？」

「チクショーめー!!」

「ペン投げないでー!!」

「おい小娘気を付けるんだ……総統閣下は只今相当かつかなされてい
るぞ!!」

「こんな時に反応に困る上手い事は言わないで下さい!!」

「警戒したのは良いけど、嘔吐く用意が足らんかったー」

「処す? 処す?」

「独房に突っ込んでおけ」

「了解致しました」

「ええええ!!? そんな急展開に付いていけない……!! 心が付いてい
かない……!!? ま、待って下さいーこれからエゲツないこととか、4
0時間連続尋問とか、同じ質問ばつつかするアレとか睡眠時間切りつめ
る奴とか太ももの下に手置くヤツとかやるんでしょー!!? な、何で
もゲロりますから命だけはああああ!!」

……こうして、私は。

……カビ臭いし、何か湿っぽい。鉄格子の入った部屋に、ブツ
込まれた。

「ううう……な、なんで私ばつつかこんな目に……! ……隊長……隊

長——！」



少女が連行された後の部屋にて。

集められた評議会の一部の重鎮達と、筋肉ダルマ×2と眼鏡の総統——葦原那智は、微妙に重々しい空気の中で黙り込んでいた。口火を切ったのは筋肉ダルマその2。

短い髪に、鍛え上げられた肉体——そして体にぴったりとした服を着た三十路の男だった。

「いかなさされるおつもりですか？ 総統」

「公開処刑に決まってんだろハゲ」

「……」

葦原那智は黙っていた。

そうだ、やってしまえと一部の評議会の重鎮達からも声上がる。

今でこそ——極東支部の神機使い達が防衛するようになってい

そして、一部の住人たちは彼らにこころを許し、受け入れている。

……だが、それはあくまでも一部の話だ。

受け入れた振りをしている者、仕方のないことだと今までのことを水に流した振りをした者も居る。

だが、誰もが受け入れられたわけではない。

「待て、冷静に考えてみる。……そんなことをしたらフェンリルが黙っていない！」

「バレなければいい。あの小娘は『女神の森』には来なかった。数日後、アラガミに返り討ちにあったゴッドイーターの死体が上がる……よくある話じゃないか」

「……だが、利用価値があるんじゃないか？」

「だから何だ！ 忘れたのか！ フライアの連中には——！！」

白熱していく議論には、感情論が入り込んでいた。

無理もない——那智にしてもフライアには煮え湯を飲まされた——と思っっている。

だが、個人的な思いは違う。

その時、ゴホン、と咳払いが聞こえた。

「……申し訳ありませんが、少し宜しいでしょうか？」

「おい、お前——ただの警備の分際で——」

「いや、構わんよ……何でもいい、言ってみ給え。たしか君は——以前、フェンリルの警備隊をやっていた……と言っていたな？」

「……はい。その通りです」

ムツキリマツチヨな警備兵その2は重々しく慇懃に頷いた。

「私から見させていただけますと……あの少女は恐らくゴッドイーターになってから日が浅く見えます。恐らくは新兵、もしくはそれに毛が生えた程度のキャリアを持ったないでしょう。尋問したところで、大して役に立つ情報を引き出すことはできないか……と」

「……根拠は？」

「強いて言うならば、勘というヤツです。」

具体的に言うならば、立ち振る舞いや肝の据わり方を見ていれば分かります。歴戦のゴッドイーターはもつと隙がない……もしくは、あ

えて隙を作り『獲物』を誘い込みます。更には、猜疑心というよりも『怯え』や『恐れ』の方が濃く見えました。

……断言しましょう、アレは仲間の死というものを見たことが無いのでしような。

となれば、恐らくは徴兵されたばかりの新兵。そんな新兵に『フライア』の責を問うことはあまりにも筋違いでは、と考えます」

一理ある、と那智は考えた。

だが、評議会のメンバーからはあからさまな非難が上がる。

「……だからと言って、フライアを許すとは一言も言いません」

「なっ……!?!」

「お、おう。そうだ君、分かってるじゃないか！」

「当然です。奴らはソレだけのことをした……！ その落とし前は何としても付けるべきです。」

私が申し上げているのは『フライアの責任を取るのがあんな新兵一人』であることが納得できねえ、と言っているだけです。そんな安いモノだと思われたくはない」

「ああ、そうだ」

「……そうだ、ならば、『アレ』は生餌として飼っておけばいいではありませんか？」

「フライアから打診があった時——相手方に突き出して、その時それ相応の者に、相応しい振る舞いをして頂くとしよう……もし、フライアが無視を通すというのなら——」

「もしくは極東支部に突き出してやるのも一手だな……」

とりあえず生かして飼っておこうと言う方に話が流れていった。

「だが……その間あの神機使いとやらはどうする？ 誰かが監視下に

置くのか?」

「アラガミでも狩らせておくか?」

「馬鹿が、その間に逃げられるに決まっているだろう」

「いっそ薬漬けにでもしておくか?」

「貴重な薬剤をそんなことに使えるか! ただでさえ薬を無駄食いする奴がいるのだぞ?」

アーデモナイ、コーデモナイという意見が飛び交う中。

再び警備兵その2なオツサンが口を開く。

「……どうせならば、監禁中に『女神の森』の住人達の為に役に立ってもらおうというのは如何でしょうか?」

なあに、フエンリルお得意の奉仕作業というヤツです。

「……どうです? 健康で、体力のありそうな、若い娘ではありませんか?」



『ええええ!! そんな急展開に付いていけない……! 心が付いていない……!?! ま、待つて下さいーこれからエゲツないこととか、40時間連続尋問とか、同じ質問ばっかするアレとか睡眠時間切りつめる奴とか太ももの下に手置くヤツとかやるんでしょー!?! な、何でもゲロりますから命だけはああああ!!』

「……」

「……」

「……」

「……」

「嗚呼……副隊長……」

冷静に考えてみたら盗聴は可能だったたりした。

なぜなら副隊長の腕輪には盗聴k……音声記録用の素子が仕組まれているのである。

それを逆探し、こうやって再生機につなげれば、ブラッド全員に盗聴が可能。

なので、副隊長の——つまりは唯の泣き言から何からは、全てブラッドへ筒抜けだった。

「……おい………マジかよ……ナニシテンノアイツ……」

「言葉にできない」

「捕まっちゃったー」

「……しかも………よりによって……」

「なんて薄情なブラッドですも!! 副隊長がお可哀想ですも……副隊長、さぞ心細いでしょう……嗚呼、泣き出してしまいました……可哀想に」

「気にすんなよ。アイツのことだし、どーせすぐ泣き止むよ」

「私は泣き疲れて途中で爆睡に一票」

「そ………そんな……、ナナさん! そんなの………そんなのっ………可愛

すぎます!!!」

「シエルちゃん、何がいいのか、私ぜんぜん分かんない」

シエルだけが、（下心見え見えで）唯の身を心配していた。

「で、どうするー隊長ー?」

「どうもこうも……助けに行かなきゃヤバいだろ。そうだよな!?

ジユリウス?」

「……」

「あの……調べた情報によりますと……この『女神の森』ネモス・ディアナというサテライト拠点は極東支部と提携関係にある様です。ですので、ココはどうでしょうか……極東支部を通して、副隊長の身柄を解放してもらおうというのは……」

「んー……それな、オレも一瞬考えただけどさー……」

「駄目だよそんなの」

シエルの案を、ナナが一刀両断にバッサリと割る。

「そんなことしたら極東支部に介入を許すことになるじゃん、そんなの私は嫌だよー。どうせ唯ちゃん確保したらしたで、ブラッドに返してくれるまで色んなものを要求されるに決まってるよ。相手は黒くくいウワサの絶えない『あの』極東支部だよー? 信用できるわけないでしょう?」

ねっ、ロミオ先輩ー?」

「お、おう……。……べつにオレはそこまで思っただけだよ……」

「絶対極東支部に介入されたくないんだからー!」

「……もー……」

「……では、ナナさんは他に代案がありますか?」

「ないよー。全然ないー。もうどうしよつかー」

ナナの口調はいつもと変わらぬあつかんとしたものだった。

だが、その実内心は装っている程穏やかなモノではない。その証拠に、おでんパンが普段の2倍速のスピードで口に運ばれている。

その様子を目ざとく見つけたロミオは思った。

——コイツもコイツで心配してるんだな。何だかんだでも仲間はやっぱり大事だもん——と。

尚、実際ナナの内心に計算されていた『最悪の場合、唯を見捨てていく』という算段をロミオは終ぞ知ることはない。

シエルはもーもー言いながら慣れない戦略を練っていた。

ジュリウス、ギルの二人が何か意味のありそうな沈黙を守っている。

その時、ガシャンという音と共に、昇降機から一人の青年が降りて来た。

茶色の髪に、セルリアン色の目——今ここに居ない少女と同じ配色。

彼女の兄——神威ヒロキだった。

ロミオは脊髄反射で悟る。

一番来ちゃいけない奴、来やがった——。

「ひ、ヒロキさん！ あの、あのあのー！ き、気持ちは分かるけどここはちよつと冷静になつて話し合ry」

「ん？ 何？ レオーニ君？ 俺は至つて冷静だけど？」

「……本当ツスか……？」

「何だよー疑つてんのかよー？ 落ち着いてるつてば大丈夫。妹がピョンチなんだからさ、ここはお兄ちゃんが落ち着いて無きや駄目だろ？」

「……」

「……」

「……」

「……」

逆にその落ち着きっぷりが恐怖を催す。

これはアカン奴だ、とそこに居る全員、シエルやギルですら理解した。

云わば過冷却状態。

臨界点を越え、一周し……逆に冷静になっているのだ。

当然、綱渡りは危うい。

「極東支部と繋がってるのか……まあ怪しいことこの上ないケド。

だけど、そんな回りくどいコトする必要はない。上層部にかけてあっちゃえばいい」

「……」

「……」

「それができたら苦労しませんも」

「お兄さん……疲れちやつてるのは分かるケドさ……」

「言うなよ、ナナ」

「聞け。」

まず、前提として俺達『フライア』は独立支部。本部所属じゃない。

本部の色が濃いついていうだけの、れっきとした支部」

神威兄、至つてまともに落ち着いて話す。

「次に『女神の森』は極東支部から『サテライト』認定受けた『自治区』。

フェンリルに頼らないで自力で装甲壁をくみ上げ、更には独力でアーコロジを完成させている。スゲエよな。

……だが、何だ。情報によるとこう言ってるじゃん。

『女神の森』発足は数年前であり、フェンリル極東支部によるサテライト認可を受けたのは『後』である。

違うか、隊長さん？」

「……違うない」

「だとすれば、だ。こう考えることも出来んじゃないかな。

『女神の森』に住んでいるのは極東支部から何らかの事情で出た人間or初めから壁の内側にさえ入れてもらえなかった人間』のどつちかに該当する住人が大半を占めている可能性。

装甲壁の前で偏食因子のパッチテストやって、受からなかった奴を叩き返す、なんてコトもやってんだろ？」

「……」

全員が息をのんだ。

この世界に於いて——ある程度『常識』になつてはいることをアツサリと口にした青年は、特に気に留めることもなく続けていく。

「まあいいよ。そんなコトどうでもいい。……ただ、この前提だとオレが『女神の森』に棲んでたらこう思うね。

フェンリルにも、極東支部にも、その尖兵のゴツドイーター達にも。『昔見捨てたといて今更何しに来やがったんだ』とか『どうせまた見捨てられる』とかね。

……もちろん表立ってはそんなコト言わない。だけど、思いは消えない。

……そして、その不信感の向かう先はフェンリル全体よりも、もつと間近で自分たちを見捨てた奴ら——つまりは『極東支部』とその『神機使い達』に向かう」

人間はより大きく、漠然としたものを憎悪し続けることはできない。

憎めるのはもつと簡単で身近なモノだろう——と言っていた。

前支部長シツクザールの政策によって路頭に迷った難民たち——謂わばそれが、『女神の森』の実態。

神威兄はそう言及する。

彼らが憎んでいるのは、極東支部とその手先——なのだ、と。

「だから、ここで俺達が『フライア』と『神機兵』を使う」

「……」

他のメンバーがはつとする中。
ジユリウスだけが、苦い表情を浮かべた。
けど、お兄様はその変化には気が付いていない。

「極東支部は信用できない、神機使い達は憎い。なんであの時助けてくれなかったんだ、救ってくれなかったんだ、今更なんだって思いが燻ってる。

だが、自分たちの安全と命はそんな奴らの『気まぐれ』の上でしか存在しえない。

そんな状況にさあ……耐えられるわけがない。
だから、そこを突く。

今のそんな不安定な奴らにこう言ってやれば良い。

『意志さえあれば、貴方がたは守りたいものを守り抜くことができる。』

最高の自衛手段の提供をしますよ——』って。

その取引と交渉の場の条件として唯ちゃんの身柄を引き渡して貰えばいい。唯ちゃんは帰ってくるし、俺らは有人型のテストパイロット供給源を確保できる。年齢や性別、神機との適合率や偏食因子との相性etcでサンプルが多い方が良いし。悪い案じゃないとおもう………んだけど………さっきから何か俺の期待してた反応とちよつと違うよーなキガスるなー……。

………ヴィスコンティ隊長………?」

「………」

「………あのー………何か間違っているなら指摘が欲しいんだけど………」

「………」

「イヤナ予感ががが」

「たいちよー?」

「……」

「どうした、隊長」

「もっ？」

「……………」

「おい……………」

……………おい、まさか

「まさかのまさか……………!?!」

「……………」

「やがて何かを振り切るかのようにジュリウス・ヴィスコンティは告げる。」

「……………ソレ……………もう……………やった……………」

「あっ」

「あっ」

「あっ」

「あっ」

「もっ」

「……………」

その後の副隊長兄の手は早かった。

まるで見るモノを魅了するかの如く流れるような手つきで腰についた発信機を掴みとり、迷うことなく内線ボタンをプッシュする。

「もっしもしーし？ 格納庫ー？ こちら兵装開発の神威です。」

あの急なことで申し訳ないですが今スグ急発進できる神機兵つてありますかね？ 出撃つてあと何秒位でできまry」

「早まるなヒロキさん!!」

「せいっー!」

シエルの手刀が空を切る。

幼少期より軍事訓練を受けてきた少女による対人格闘戦技は鮮やかだった。関節を打たれた兄貴の手から発信機が滑り落ち、『切』ボタンが偶々押された。

そして、連絡手段を失った男の慟哭が響き渡る。

「だって唯ちゃんがああああああああああ！ 妹があああああああああ!! うわっああああああああああああああああああ!!」

「シエルそのまま抑えてろ！ ジュリウス！どうゆうコトか説明して差し上げろア!!」

「了解！ 秘儀………正固め!」

そして、ロミオに促されたジュリウスによる申し訳なさ全開の説明が始まった。

「……有人の方で今まさに神威技官の言った通りのコトが行われていた。

極東区域に属する『サテライト拠点』で……まさに搭乗員の募集が

行われていたんだ……。その該当地域を精査したところ……。完全一致した……。『女神の森』に……」

「oh……」

「……で、どうなったんだよ……？」

「もう想像つくね〜」

「ああ、そうだ。その通りさ……」

上層部と交渉し、神機兵の搭乗員を募ることまでは成功したらしいが……。

……その後の配備には至らず、今ネモス・ディアナは極東支部の『サテライト』として保護下に入っている——と言えば、分かるな？」

「万策つきたか」

「今、どんな気持ち？　ねえ、どんな気持ち？」

「……副隊長が行方不明になるかもしれない。単独行動になるかもしれない、という所までは予測できていた。

そして戦闘が不能になる状況に追い込まれているかもしれない——という所までも考えられた。

だが急に穴が開いて転落したかと思うと、その後よりによって一番フライアと拗れている場所に連行されるだなど、ココまで予想がつくか……！

……すまない、俺の失態だ……」

「あんま自分を責めんな隊長、アンタは悪くない。

……だが、そうなる、今の状況は俺達が思っていたよりもヤベェってことになるな」

「その通りですギル……」

恐らく『女神の森』——少なくとも直接交渉に当たったであろう上層部には、私たちフライアはこう見られているかもしれません……。『約束を破った裏切者』、と。

そして、私たちの副隊長はそんな場所に、今、捕らわれている……。間違えありません！　コレは……コレは——！　尋問後にエゲつ

「は？」

「俺はアイツを女だと思った事はない」
「」

ロミオ絶句。

だが、こうかはばつぐんだ。発狂していたシスコンも、暴走していた百合っ子もここで現世に戻ってきた。

「……えつと……ジュリウス、ソレどうゆう意味……？」

「アレだけ自立心のない奴に魅力を感じたことはない——と言っている。良くて体だけ育った子供……みたいなものだろう」

「……いや、ソウダケドモ……」

「ある！ 一理ある!! 唯ちゃん凄く……ガキっばい所あるもん！」

「そこが良いんです！ そこが可愛らしいんですうううう！」

「唯ちゃんdisってんじゃーねーぞ糞バナナがああああああああ
!!」

「だからこそ、成長のしがい……もとい、『伸びしろ』があると言っている。アイツが実力を伸ばしていくのは見えていて心地の良いモノがある……」

「……いや、でも……ジュリウス……。……唯は、一応

は、可愛いぞ……？」

「……お前は何を言ってるんだロミオ」

「……いや……その……唯は、結構……可愛いと……思うよ……オレは……」

ロミオが何を言いたいのかまるで理解できないジュリウスは真剣そのものと言った表情で暫し黙考。

「……お前がそう言うのなら、そうなのかもしれない。だが、人の価値は見た目で決まるモノではない——そうだろうか？」

「……」

絶世のイケメンが言う腹立つ正論だった。

「副隊長はガキ臭いからそのような危険はないと俺は考える。狼藉を働いた方が萎えそうだ」

「分かった。良く分かったよジュリウスありがとう、だけどお前はもう、喋らない方がいい」

「……説得しろと言ったのはロミオ……」

「いいから！ もういいから！ だからもう許してやって!! 今この瞬間もアイツは——唯は——！ 隊長って、お前の名前を連呼しながら泣いてるんだよ!! 察してやれよ!!」

「助けてやりたいとは思っている」

「もういいってば!!」

副隊長の片思いは全然報われていなかった。

コレはどっちかが目を覚まさない駄目だあ……と、ロミオは死んだ目で遠くを見つめた。

その、死んだ目で虚空を見つめるロミオの視界に一人の男の姿が入る。

長身に長髪——先ほどから何故か寡黙なギルバート・マクレイン、だった。

何か思いついたのだろう、ギルが伏せていた顔を上げる。

「なあ、隊長。その理屈で行くと……副隊長がガキ臭いからそうゆう目には合わないから大丈夫だ——ってことで

いいんだな？」

「……そうだな」

「……なら、お前の論法には一個穴がある」

「……う？」

それは、とギルが言い切った。

「二人でもロリコンが居れば、アウトになる」

「——っ!？」

「おい……おい……おい!」

紫ゴリラはロクな事考えていなかったようだ。

だが、ジュリウスがはつとしていた。まるで「盲点だった!」と言わんばかりの、雷にでも撃たれたかのごとき天啓を受けたような表情そのものだった。

「だってそうだろう? 見た目の発育は良い、だが中身が子供っぽい——コレは有りなんじゃねえのか?」

「……一般的に幼女を性愛の対象にするのは問題外、倫理的にも社会的にも死ねクソ野郎と思っっているが……! ……成年ならば……例え見た目が幼くとも……!」

「ああ、しかも、体はもう大人——つてのが有り要素だろう。考えてもみる、子供の顔に大人の身体がくっついてんだ。それでもって精神が子供何だとしたらそれは……」

「しかも実年齢は17歳——2074年現在婚姻すら可能な年齢……! 罪悪感を感じる必要性はない。ならば……」

所に性的魅力があると聞いたのか？」

「そして、逆もまた然り——だ。

……これがどうゆうことだか、分かるか？」

「……いや、分からない」

「俺にも分からない」

「何の話してんだテメェら!!! 両方分かってねーーーじゃねーーか!!!」

「俺はロリコンじゃない」

「俺もロリコンじゃない」

「そんなカミングアウトは聞いてねえよ!!」

「ロリコン……？ 何だそりや変態の一種か？ 見たこともねえよ。妖精か」

「全くだ、そんな奴らが居るから世界は天変地異に襲われ、アラガミは出現し、紅い雨が降り、黒蛛病が蔓延し、人が苦しんでいるんだ」

「最悪だなロリコン」

「居ない方が世の為だな」

「全くだ」

「この世から抹消しよう」

「殺るか」

「皆殺しだ」

「何でもかんでもロリコンの所為にしてんじやねえぞこの馬鹿共ゴミックス」

「ロミオ先輩……どうすんのコレ……」

「もう……どうにでもなればいいと思います」

phase 46 おいでよ、女神の森②

「出る」

「……」

鉄格子の外から簡素極まりないオツサンの声が降ってきた。

ソイツが私をしょっぱいた筋肉ダルマの一体だという事に気づく。

「……」

「出る」

「……」

ガアン！ と鉄格子を蹴られる。

「……らないんです……」

「は？」

「すみません知らないんです私!!!」

「……」

「あなた達が！ 知りたがってる!! 情報は!! 多分!! 何も持ってない!!!」

「いやそれキミが判断することじゃありませんからね」

「痛い嫌ですー！ 嫌です怖いですううー！ な、何でも話すからー!!」

「ゴツドイーターだろ多少痛い位がまんしなさいよ」

「そんなの業務内容にあるなんて聞いてないよおおー！！！！」

「諦めろ」

「ヤダああああ！ ヤダヤダうわああああん！」

「うっせ」

「コイツに人間の心はないようだ。」

「な、何聞くんですかあ……！ 私どこに連れていかれるんですか……!?! ……此処どこですか!! 私は誰?!」

「しるか」

「せめて何聞くのか教えてくれたっていいじゃないですか……」

「なんで？」

「……………カンペ作りたい」

「あ？」

「脳内で」

「ナメてんのかコラ」

「だって……………だってだってだってえ……………!!」

「シヤラップ」

人のぬくもりが恋しくなってきた。

ああ、フライアが懐かしいな……………。

頼んでもないのに、おでんパンを供給してくるナナちゃん。

心身ともに満身創痍で回復したいのに、お布団の中に入ってこよう

となさるシエルちゃん……………。

冒流的な汚料理を勧めてきやがるギルバートさん……………。

そんなギルさんの人体改造を嗜むラケル先生……………。

→を死ぬほど崇拜しているジュリウス隊長……………。

……………。

コレが、私の……………フライアの……………仲間なんだよね……………。

きつと今頃ロミオ先輩は大変なことになっているだろう。

あ？ クソ兄貴？ アレは敵でしょ常識的に考えて。

と、居る訳もない仲間たちのことを思い浮かべ……………ついでに隊長のことを思い出して薄ら涙ぐんでいる私が連れていかれた場所は意外なことコンクリートむき出し&鉄臭い&壁に何に使うのかよく分かる器具たちが陳列しているような部屋ではなかった。

一瞬そこに入るのかなーとおもってガタガタ震えていたけど、なん

と奇跡的にスルーしてくださった。

ちなみに、お隣（同じ構造）のお部屋からは誰かが何かされているような悲鳴が聞こえてきた。

どうやらお仕事の中だったっぽい。聞かなかったことにする。

「入れ」

「……は、はい……」

入れられた部屋は、更衣室の様だった。

……更衣室……。

……あまり良い予感がしねえ。

「着ろ」

「フア!?」

「着なさい」

と言って筋肉ダルマが服を差し出してくる。

……あ、テツキリ脱ぐ系かと思ってマシタ……。

そしてオッサンに差し出されたのは——何人も着回した後のようなちよつと臭い、作業着。

と、マスクとゴム製の手袋と帽子だった。

……何が始まると、言うのでしょうか……？

遠くの方で機械の音がする。

見るとベルトコンベアがゴウンゴンと唸りを上げていた。その場所ですぐの男女が同じような格好で手だけをひたすら動かしていた。

その手は正確にプログラミングされたかの如く、トウモロコシの皮を剥いている。

「……………も、もしかして私……………」
「じゃ作業にはいつて下さい」

……………こんなん、予想できるか。

トウモロコシを取る、皮をむく、コンベアに流す
トウモロコシを取る、皮をむく、コンベアに流す
トウモロコシ、皮、コンベア。トウモロコシ、皮、コンベア以下ルー
プ。

腕が痛い。

腕輪が重い。

それだけじゃない、足が痛い。足がヤバい。

ひしひしと痛みはじめる体を自覚しながらも、心はもうしにかけて
いた。

こんな作業をずーっとずーとずーとずーとやっているから……………
もう何も考えられなくなり……………

とか思ってたら足の上にトウモロコシを落とした。

着替えちゃったから戦闘靴ではなく、そこらへんにあったちよつと
すっぱい匂いのする古いスニーカーだ。

だから直撃は痛かった。

うつすらと、視界が滲んでいく。

「……………」

泣きそうになりながらも、手が止まるとまた怒鳴られるのでトウモロコシを拾う、皮をむき、コンベアへゴー。

中には潰れてたり一部腐ってたりするトウモロコシさんがある、そうゆうのは段ボール箱へと投げ捨てる。

……なんか出荷とは別方向に持っていくらしい。

多少カビてたりする部分は雑巾で拭って綺麗ならコンベアに流す、汚いなら段ボールに流す。

この見極めが大事ならしい。皮をむく、コンベアに流す。

このダメなところもろこしって一体何に使うんだろーねーコンベアに流す。

酷い話だ、ちよつと形が悪いからって……腐ってるからって没にされるなんて……コンベアに流す。

コンベアに流す。

コンベアの……皮をむく……。

じゃないよ……あはは……トウモロコシを流す……。

母なるコンベアの大河に……流す……。

「ちよつと、そのゴッドイーターのお姉さん。コレは駄目なトウモロコシね、流さないで」

「……………すみません……………」

うつかり没を見逃していたみたいだった。

作業服なオバさんが私の流した没もろこしを、ヒョイツとつかみ、段ボール箱へと直送する。

「何回同じこと言わせるの？ いい加減覚えて」

「……………はい……………」

オバさんは作業に戻る。皮をむく、コンベアに流す。

トウモロコシを取る、皮をむく、コンベアに流す

トウモロコシを取る、皮をむく、コンベアに流す

トウモロコシ、皮、コンベア。トウモロコシ、皮、コンベア。
「……」

……あれ……？ 私……何やってんだろ……？

これ……トウモロコシ……なんだよね……？

……なんでトウモロコシなんか……剥いてるんだろ……？

こんな事をしている場合じゃない。コンベアに流す。

何か……私にはしなきゃいけないコトが……あつたような気がする……。

……けど……それって……何だつたっけ……？

……。

……この馬鹿デカイ腕輪ってなんでついてるんだっけ……。

何かトンデモナイことを忘却の彼方に押し込め……皮をむく、流す。

だんだん分からなくなってきた。

私は何者だったのか、何者かであつたのか。

地味に薄ら分かつているのは、少し前まで内部居住区とかいう比較的運に恵まれた場所で心臓と横隔膜を動かす作業をしていたことと、そんな場所で変わらない日常をグダグダと過ごしていることに嫌気が差していたこと。

だからクソ兄貴と大喧嘩して家を出て……そこから……何だか記憶がおぼろげだ。

でも、何となく不幸だったような気もする。

仲間っぽい何かが……居たような気がする。
好きな人が……居たような気がする。
でも、全部過去の話。

今の私はこうやってトウモロコシを剥くことしか存在価値のない……そんな無意味で無価値なタダの機械にすぎない。

……。

……いや。

……本当に……そうなのだろうか……？

……違う。

機械だからって無意味で無価値……なんかじゃ……ない……！

きつと……きつと……このトウモロコシは何処かに出荷されて何かに使われているはずだから……だから絶対意味のない作業なんかじゃないんだ。

意味のないことなんか……ないんだ。

コレはきつと何処かで誰かの役に立っているんだ。

私の存在は……無意味で無価値かもしれないけど……きつとコレは誰にでもできるようなコトだけ……！

……でも誰かが、やらないといけないコトなんだ。

そう思うと、急に頭が軽くなった。

今まで求めていた——意味だとか、意義だとか、価値だとか……誰かに認めてほしい、という思いが全て……心の中から、すつと離れていくのを感じた。

まるで、ひとひら、ひとひらと花が散っていくような感覚。

それらは決して穢れることはなく、ただ綺麗なままに手放して、風に任せて運ばれていく。

……ここではない、どこかへと。

意味なんかなくてもいい。

価値なんか知らない。

ただ目の前にある——トウモロコシから皮を引きはがせばいいだけなんだ。

ソレが世界を救う、ただ何も考えず私は粛々と流しつづけなければいけないのだ。

こんな形の幸せもあるんだな、と私は理解し、悟った。

今までは自分自身を認めてほしくてたまらなかつたような気がする。どこにでも居るような人間の一人で居ることが嫌で嫌で、このまま人生が終わっていくことに慟哭していたような気がする。

だけど、今ならわかる——そんなものは、どうでもいい。

だって、トウモロコシの皮をむいて流すことに……幸せはあったのだから。

と、思っていると後ろから急に肩を叩かれた。

振り返ると何だか微妙なオッサンがいた。ムツキムキだ。あの肩なら多分何時間酷使してもコンベアに流しつづけることができるだろう……恵まれた体格だと一瞬で判断した。

「お、おいゴッドイーター……その没の箱を運んで下さい」

「……」

言われた通りに没箱を運ぶ。

何かでかい機械の前に置く。

機械はガガガガガと凄い騒音をたてる。

やがて……後ろから何かを吐き出す。

「……何……ですかコレ……？」

それはもう、皮をむくことさえできない、変わり果てたトウモロコシの姿だった。

そこにオッサンが一人おり、その変わり果てたカピカピになったトウモロコシをせっせとズタ袋に詰めていく。

「ん、じゃ運んで下さい」

「……は？」

「袋、運んで」

……言われた通りにズタ袋を荷車に積む。

で、先導された通りに運んでいく。

……ここまでできて怖くなった。

「……あの……わ、私……どこに……？」

「入れ」

「……え？」

目の前には大きな鉄扉があった。

ここに入れと筋肉監視員は言っている。

……何言ってるんだろう、この人。

私は……こんなことしている場合じゃないのに……。

私は……。

私は……。

トウモロコシの皮を取って、コンベアに流さないといけないのに。

鉄扉が大きな音を立てて開かれる。

その先で私が見たモノは――。

「あ……あつ……!? あ……！」

目の前に通るのは白い悪魔——達。

忘れもしない——少し前のことがフラッシュバックする。

確か、あの時もこんな……。

ううん、違う、あの時は誰かが隣にいたような気が……!?

白い羽毛と、紅いトサカを持つ……その飢えた鳥獣^{ケダモノ}共は。

……異常なまでに光った目で、私を見た。

「「「コツケエエエエエエエエエエ!!」」」

「いやあああああああああああああああああああ
!?!?!?」

私は抱えていた餌袋を放り投げて鉄扉に駆け寄る。

が、すでにそこは閉まっていた。

後ろからは奴らがその欲望^{しよくよく}をむき出しにして追いかけて来る。
だから……目の前の分厚い扉を、気が狂わんばかりに叩いた。

「で、結局アレから3日経ったんだよな」

「3日も何してたんだろーねー私たち〜」

「それは……かくかくしかじかこれこれいあいあです」
「……」

「機密事項にしていたハズの今回の一件が本部にバレて、その火消しにグレム局長が駆けずり回っていたせいだがな……」

ブラッド、総員揃ったな。まず、今の現状を確認する」

「二「了解」三」

ジュリウスがホワイトボードにマジック（水性）で書き入れていく。
それは『女神の森』の見取り図だった。

「……ふーん……流石は『サテライト拠点』……予想以上にアーコロジーになってんだな」

「そうでも……コレは……本当に……支部のミニチュア版のようです……」

「……」

「……ねえー、隊長ーきいていいー?」

思わず感心するロミオとシエル。無言なギル。その中でナナは、迷いなく手を上げた。いつもの天真爛漫な彼女はへへへーと顔に能天気（つぽく見える）笑顔を浮かべている。

「あのね……どうして隊長はこの見取り図を知ってるのー?」

だって、『女神の森』は極東支部の管轄下でしょー? もしかしてー……私たちの知らないところで極東支部にコンタクトを取ったりしたのー?」

（もし、そうだとしたらちよつと面倒くさいかな〜……だって隊長のコトだし、うっかりボロを出してるかもしれないよねー? ……それに皆で秘匿していたハズの今回の一件が何故か本部にバレたことも気になるかな〜）

と、ナナが薄汚く考えていることを悟ったららしいジュリウスが顔色一つ変えずに肯定する。

「ナナの疑念はもつともだが……ラケル先生に誓って言う。

極東支部にコンタクトを取った訳じゃない。コレはフライア自力で入手したものだ」

「えへへ〜疑念なんてないよ〜？ やだなー隊長ったら〜もつと仲間を信じてよ〜！」

「……じゃあソレなんで？ どうやって手に入れたの？」

鋭く勘ぐってくるナナに対し、ジュリウスは、はぐらかすことも、嘘をつくことも諦めた。

「お前たちには伏せていたが……。フライアから派遣された潜入工作員から秘匿回線で伝えられたものだ」

「は？」

「え？」

「も？」

「……」

「な、なあジュリウス？ それってさ……つまりスパ……」

「潜入工作員だ。言っただろう、有人神機兵を配備する計画があった、と。その際、調査もなしで投入する訳がない。あいにく没と化したが

……情報収集の為の潜入任務はまだ続いていた、ということだ」

「……あーはい、分かりました」

「スパイだってーなんかカツコイイね〜ロミオ先輩！」

（この状況下でのスパイ……なんか嫌な予感がする……）

ほぼ直感でロミオは悟った。

「……と、なると、話を戻します。

今現在の状況を整理するとこんな感じでしょうか……？

・『女神の森』上層部は『フライア』に対し、不信感を抱いている。

・前提として『サテライト』住人は『神機使い』を敵視している。

・まっ黒なウワサの絶えない極東支部の介入は避けたい。骨の髄までしゃぶりつくされる。

・隙あらばフライアを叩き潰そうとしてくるフェンリル本部にバレてはいけない。(もうバレたけど)

「……でしようか？」

「ああ、その通りだ、シエル」

「……」

「……」

「……」

「……」

その時——真空のような思考停止が、場に広がった。

「コレ、詰んでんじやね……？」

「ヤバイよね〜」

「諦めてはいけません！ 諦めてはいけませんとも!! ネバキバツツプ!!」

「おい、隊長……確か極東支部には『クレイドル』とかいう機動部隊があつたよな？ ソイツも勘定に入れといた方がいいと思うぜ」
「……そのことについてだ、大まかな状況確認はシエルが言った通りで正解だが……ハッキリ言うと、実はもつと悪い。」

今ギルの言った、極東の独立支援部隊『クレイドル』だが……『女神の森』に定期巡回することになっている。さらには『女神の森』に

は極東からの派遣神機使いも存在する。よって極東支部として警戒すべき勢力は2つあると考えるべきだろう」

「敵が増えただけじゃん!」

「……そしてフライアの感応波レーダーによれば『女神の森』周辺で感応種の反応も出ている」

「嗚呼……こ、これではまるで……『前門のヴァジュラ後門のガラム』です……」

「つて言うかく四面楚歌?」

「八方塞がり……」

「手も足も出ねえな」

ブラッド各員の顔には絶望と未来に対しての諦観が広がっていた。

「そうゆう訳だ、全員コトの重大さを理解したな?

そこで、だ。

副隊長を救出するにあたり——今回の状況で最も効果を発揮すると思われると判断した結果……。

……ナナの案が採用だ」

「やったあ——!——! 喜びのくくおでんパン!!」

「その物騒無差別化学兵器なモノを終いなさいナナ。つてことはジュリウス? 何だ

……コイツの言つてたアレ……」

「『何とかしてコツソリ『女神の森』に潜入する案』でしょうか?」

「それだな」

「それだ」

ロミオが頭を抱えた、ニット帽がすっぽりと腕の中に収まる。

「どうすんだよおお……」

ロミオは脳内で激しく懸念と戦っていた。

まず、神機使いは目立つ。とても目立つ。

女神の森内部の人間には多分敵視されている。しかも、極東の神機

使いとバツタリ出くわす可能性もある。

つまり、素性を隠したかった。

もつと言うならば……せめて顔を見られたり個人を特定されることだけは避けたかった。

そんなささやかな願いさえ、今ここで……潰れようとしている。

「心配するなロミオ。今回はとある伝手により本部からの支援が受けられるようになってる」

「……え？ マジで？ 本部……支援……？ ちゃんとしたの寄越すんだらうな………？」

「も？ 本部には隠した方が良かったのではありませんか？」

シエルが「もつ？」と可愛らしくコクビを傾げた。

その凄まじく無垢なしぐさは年相応の反応だった。いつもそうしていればいいのに。

「本部にも色々ある。フライアに賛成している勢力、反対している勢力、中立に立つ勢力……風向き次第の日和見勢力、などがな。賛同している側から物資支援を受けられた。あと情報も止めてくれているらしいな……全てはグレム局長の日頃の成果ということだろう」

「マジかよ局長すげえな」

「やればできんじゃん局長」

「流石局長」

「ヤベエなグレム」

手放してグレムを褒め称えた一同だったが、心の底ではどうでもいい、と全員思っているのは明白であった。

「そして今回『協力者』に今、来て頂いている。各員粗相のないように務めろ」

「了解、協力者……か……」（来なくていいのに）

「りよ……からい！」（監視役かなー？ おでんパンにしといた方がいいかな？）

「了解致しました！」

「ああ、分かった……」(……)

その時、昇降機が降りて来る音が響いた。

ブラッド全員の注目が集まる中——ジュリウスの言っていた『協力者』であろう、一人の男が昇降機から降りて来る。

ひどく奇怪な容貌の男だった。

もう老齢に差し掛かっているように見える。

その男が、口を開いた。

「……お初にお目にかかります。

私の名は………イゴールと申します」

「アウトオおおおおおおおおお!!」

ロミオがシャウト。

「どうしたロミオ……。お前らしくもない。失礼の無い様にしろと……今、俺言わなかったか？」

「ジュリウス聞いてくれ!!」

オレ……オレさ……今まで………今までの………ちよつと思つてたりしたんだよ………?

お前らが本部本部って言うけど、それちよつとビビり過ぎなんじゃないか、って………。

……オレが間違つてたよ！ 今！ ハッキリ分かつたよ!!

本部は………本部の奴らは………本気で運が良ければ隙を突いてぶつ

潰そうとして来やがるってなア!!!」

「彼は味方だと言っているだろう」

「アレが味方に見えるならお前の目は腐っている」

「ここまでやるとはく恐れ入ったねく」

「コレ……コレ……覚醒しますよ! 私たち!」

老爺を見てキヤイキヤイ騒ぐ若手を横目で見ながら、イゴールと名乗った男が瞬きひとつせずに話す。

「ほう……これはまた、変わった定めを……お待ちの方々がいらしたよ
うだ……フフ」

「お帰り下さい!!!」

「何を言ってるんだロミオ」

「お黙り下さい!!!」

「……ふむ、なるほど。では、貴方の未来について、少し覗いてみると致
しましょう……」

「占い〴〵は、信用されますかな?」

「しません!! しないので!! お帰り下さいいいいいいいいいいい
!!!」

「何をさつきからそんなに慌てているんだロミオ!」

「シャラップ! コトの重大さが分かってねえのはお前とそこのゴリ
ラだけなんだよ!!!」

「重大さなら理解している……一刻も早く、副隊長を連れて……帰る
んだ!!」

「そっち……もそうだけどさ……そっちじゃねええええええええええ
!!」

しばらく、荒れ狂うロミオが居るだけだった。

「……な、なんとということはないよなオレが神経質すぎただけなんだよなそうだよな。」

べ、別に……イゴールって名前だけでやたら鼻が長いだけのじーちゃんなんかそこらに沢山居るもんなそうだよな。偶然だコレは偶然偶然偶然……！」

「イゴールさんからは、今回フライア印の装甲車が使えない為に装甲車を提供して頂いた」

「……………あつ、隊長くその装甲車ってくもしかしてく」

「リムジンバスだ」

「えへへへへーやっぱりい〜♪」

「クソがあああああああああああ!!!」

「こ、コレはBGMを……用意しなければいけませんとも！ 全ての人の魂の●を……！」

ロミオの目は、既に沼底のように濁っていた。

最早、昔の様に澄んだ明るい色の光はない。

流石に茶番に飽きてきたジュリウスが強引に話題を戻す。

「総員聞け。フライアのリーダーによれば、翌朝『女神の森』にアラガミの波状進撃が来るらしい。……俺達はそこを突く」

「ん？」

「えー？」

「も？」

「……………おい、ソレは……………まさか……………」

「そのまさか、だ。アラガミの群れと一緒に『女神の森』へと奇襲をかける」

言い切ったジュリウスに対し、全員一時的に沈黙を守っていた。

……一瞬冗談か？と疑ったが、青年の顔には真剣さが見える。

………残念なことに、苦しい位大真面目であった。

どう考えても正気の沙汰とは思えない、だが、これしかない……全員がそう悟っていた。

「だとすると、一つだけ問題があります。

……その様な状況での潜入ならば、起り得ること——『極東』の神機使いとの接触です。

その時……顔を見られては、素性が割れることとなります」

シエルが重い口調で告げる。

胸に持っていた疑問を改めて言語化されたことで、やっとブラッドは思考を巡らし始めた。

何か方法が……素性を隠すことができる、方法を。

……せめて、顔だけでも隠す……何かを。

「そう言えば、俺の部屋にこんなモンが置いてあったんだが……お前ら、何か知らないか？」

「!??!」
「!?」
「!?」

ギルバートがごそり、と……『仮面』を取り出した。

否、仮面というよりはヘルメット（フルフェイス）と言った方が近いだろう……。

それは、彼らが心の奥底に封印していた。

……………『忌まわしき仮面』そのものだった。

「そ、それは……！　ま、マスク・ド・ゴリラ……!?（phase33参照）」

「なんで持ってきてきちゃったのー!!」

「何だお前らやっぱり知ってるのか?」

「も……も……！　それは封印したはずでは……!?」

「何……だと……!?」

「何ビビってんだよ……どう見ても神機兵の頭にそっくりだろ」

どう見ても神機兵の頭にそっくりだった。

「一見分からねえけど、よく神機兵見てるんならコレで気づく。ソレに顔も隠せる。好都合じゃねえか。」

コレ、被って行こうぜ」

「!?」

「!?」

「!?」

「!?」

「……だから、さつきから何なんだよお前ら」

「お前が何なんだよ……!?　仮面の何かに操られてんじやないよな

……!?」

「こ、コレが……英国面の力……!?」

「よもや全員マスク・ド・ゴリラになる日が来るなんて……予想外です

も……」

「ギル、お前は待機だ」

「何でだ？」

「いいから待機だ!! ベ●ベツトカーで待機してろ!! 絶対そのヘルメットを被るな!! いいな!？」

「……お、おう……ベ●ベツトカーでヘルメット持ってるやいいんだな?。」

「お前らドサクサにまぎれてベルベツト言ってるんじゃないよ!!」

「ロミオ先輩! 言ってるのはヘルメット!!」

「ややこしんだよああああああ!!」

「もつともですも。紛らわしいですもー」

「それは、貴方が貴方の外側の事物と向き合った時、表に現れ出る『人格』。

様々な困難と相対するため自らを鎧う、『覚悟の仮面』……とても申し」

「言わせるかあ!! ナナ! その爺にそれ以上喋らすんじゃない!!」

「そ、そんなこと言われてもくく私困るよおく……」

「じゃあ、この『覚悟の仮面』人数揃えて……早いところ副隊長を助けに行くぞー!」

「感応されんなギルウ!! そしてお前はもうそのヘルメットに触んなツ!!」

「……手から離れない」

「もう知らない……」

大体まとまってきたところで、ジュリウスがスクッと立ち上がる。

その様は、まるで配下の兵卒たちに軍令を下す、司令官の様であった。

……実際似たようなものだけだ。

「総員傾注! これよりブラッド副隊長——神威唯を奪還する!

分かっただけの通り今回の敵はアラガミだけではない! 繰り返し、今

回の敵はアラガミだけではない!!

……各員ソレを忘れるな！　そして……副隊長と共に、帰還せよ!!

「了解!!」

「現時刻を以て——副隊長奪還作戦を発令する!!

作戦名——『ペ●ソナ』!!」

「畜生がああああああああああああああああああああ!!」

phase 47 おいでよ、女神の森③

『各員配置に着いたことを確認、各自健闘を祈ります』

耳元から聞こえる無線通信、いつもと変わらぬオペレーターの声が響く。

『標的を視認した、このまま待機を続ける』

『いつでもいけるよ〜』

『潜入行動の準備は万端です』

『……俺は本当に出なくていいのか？』

『絶対に出るなCP。コレは命令だ』

『……わ、分かった』

『ちよつと先輩〜？ 返事がないよー？』

『……』

『応答を！ 大丈夫ですか生存報告を！』

「生きてるよ！ けどさあ……、……なあ、コレ……本当にやるの？」

『フツ……今更何を』

『怖気づいたの〜？』

『臆病風に吹かれたのですか？』

『自信ねえならそのポジション変わってやってm……』

『お前はそこで待機してろ、行方不明者リストに名前を追加したくなかったらな』

『……冗談だ』

「……………マジデ……ヤルノ……？」

『ブラッドに二言はない』

『退路はない』

『もう逃げない』

『覚悟決めろ』

『No way back流しておきますね』

ブラッドのオペレーター……フランが悪ノリノリで面白半分ヤケ半分で流すBGMを聞き流しながら、ロミオはわずか数時間前の事を回想していた。

~~~~アイマースムーヴオ~~~~♪

「今回のポジションはこうなった」

『女神の森』外周―ジュリウス・アラガミの殲滅&極東神機使いの誘導

『女神の森』内部潜入―ナナ、ロミオ、シエル：副隊長救出

『女神の森』外(ベ●ベツトカー)―ギル：通信中継点兼臨時拠点

「わー……隊長大丈夫？ 何かこれ見ただけで大変そうだよ……？」  
（おかしいよ……何で隊長潜入しないのかな……？ というかココで隊長が救出に来ないとか……唯ちゃん知ったら泣いちゃうね、きつと！ 正気なら、の話だけど）

「俺、ナナ、シエルで潜入かあ……」（ナナが絶対口クでもないこと考

えてる)

「隊長……このギルの中継点とは何なのでしょうか？」

ナナの疑問はスルーし、比較的マトモだと思われたシエルの質問にのみジュリウスは応えることにした。

「……前から言っているが、今回の行動は本部、極東支部に知られるのはマズい。」

だが、通常回線で通信を行えば傍受される危険性がある……その為、フライアでの秘匿回線を使うことになった。だが、秘匿回線はひどく不安定な通信回路になる……したがって、だ」

●ベットカーにはデカイアンテナがついていた。

「お前まさかハッキングでもしようって言うんじゃねえだろうな」  
「人聞きの悪いことを言うな……ただ『少し』電波塔を拝借するだけだ」

「成程くだからフランさんがなんか不機嫌なんだねくく！」

「……では、誰かが電波塔に入り込まねばならない……ということですか？」

「そんなのシエルちゃん দিয়েイじゃない！」

「そうだな、シエルに任せるよ！」

「……任せました！ 電波ジャックはお任せ下さい!!」

「ついでにくシエルちゃんならく感応能力使ってチヨチヨチヨイって、『女神の森』内部にある監視カメラとかも覗けるんじゃないかなく？ だってイマドキの精密機器でくオラクル細胞使ってない奴なんかある訳ないでしょー」

「……やってみます！」

「知覚能力ってホントすげえなー」（期待してねえけど）

「頑張ってね！ シエルちゃん！」（ダメ元くく）

「期待に応えます!!」

「……」

シエルは生真面目に敬礼の動作を取った。

「他に質問事項がある者は居るか？」

「あつ、そうですね！ 潜入組……ナナさん、ロミオはこちらを」

敬礼していたシエルが何か思いついたらしく、横に持っていたカバンをゴソゴソと漁る。どこにでもある、布製の鞆であり、可愛らしく旧世界の動物たちがデフォルメされている絵柄が印刷されていた。

年頃の少女が持つにふさわしい代物だ、と思つて思わずロミオはほっこりとする。

その中からはバレット——オラクル弾丸が現れた。

ロミオの笑顔が消えた。

やっぱりコイツら……人間として根本的な何かがズレている……と確信した。

「ついに完成しました！ これが……これこそが……！ ブラッドの切り札ともなり得る物体、名付けてブラッドバレット(以下BB弾)です！」

「びーびーだん？」

「ブラッドバレットな。……なあシエル、ブラッドバレットつて何？ つていうか何時作った？」

「よくぞ聞いてくださいました！ それは……それは……あの日、副隊長が私の下から姿を消した日……私は無力感に襲われ、やるせない思いで一杯になり……副隊長への憧れと、憧憬とそして……。で、何か色々溢れ出しそうだったので射撃訓練に打ち込んでいた時でした！」

私は……気づいたのです……！

同じでもいいんだ、同じだって……くつつくコトができるんだ……と！ そう、私は副隊長は同じ女性同士ですが愛し合う気持ちさえあれば大した問題はないのです!! まるで……まるで……この……B

B弾の様に!!」

「……シエルが何を言っているのか分からない件について」

「シエルちゃん……」

「……このノリ……ケイトさんを思い出すな……」。

……で、シエル、このBB弾とやらは何だ？ お前や副隊長、隊長の使う『ブラッドアーツ』の銃版だと思えばいいのか？」

「大体そんな感じですよ！ 発射されたオラクル弾を感応波を使って威力を増幅させたもの、とを考えてくれれば良いかと思われます。詳しい事はかくかくしかじか」

「なるほど分からん」

あまりの専門用語の多さに歴戦の神機使い達はひぎを折った。

シエルの手から潜入班へBB弾のバレットが配布される。

ナナが食い入るかのように、その弾丸を見つめていた。

「……ナナ？ どうかした？」

「ん？ ……ううん、ロミオ先輩……。何でもないよ、ただ……ただ、ね」

両手で弾丸を胸の前でぎゅつと抱きしめた少女は、まるで……強い決意を込めるかのような強い口調で言った。

「コレを味方に撃つ……なんてことが起らないといいな、って思っただけ……」

「どうしてギルの方を向いてソレを言うんですか香月さん」

「えへへへへ……んー？ なんか目が勝手にギルを追っちゃったの……。コレを抱きしめるとね……なんだろう、胸がどきどきするん

だ……」

「あ、それひよつとして殺意」

「こんな気持ち……私……はじめて……」

「紛らわしく言ったところで今までの言動は覆らねーよ!! もうバレバレなんだよ! やめなさい!! 特に今回はマジで!!」

「えく? だって撃つてみたいじゃない?」

「味方に撃つのは回復弾だけだから!!」

ぷくーつと頬を膨らませる似非猫耳少女。

間違えなく美少女であるにも関わらず、その殺意は今日も高い。

「じゃあロミオ先輩! 私からもコレくくプレゼント! 渡しておくからねくく!」

「要らねーよ……ん? 何だこれ……ああ、いつもの精神破壊兵器か。あとで捨てておくな」

「駄目だよー。コレはねくおでんパンだけど、ただのおでんパンじゃないんだからっ!」

えへへ、と無邪気かつ快活な少女の笑顔。

ソレを見たロミオは。

……背筋に悪寒が奔るのを覚えた。

「ナナ……何を……したんだ……?」

「えく? そんな……大声でなんて……恥ずかしいよ……?」

「言え……言いなさい……言うんだナナあ!! 包み隠さず全部正直に言え!!」

「ええー? そ、そんな声出さないでよー……ロミオ先輩……怖い顔してる……」

「1ミリも思ってたねーこと口に出すな。後ろ暗いことがないなら言うハズだろ!! つーか怒鳴られるのが嫌なら最初から余計なことすんな!!」

「ううん、後ろ暗いことなんか、なにもしてないんだからくく」

その瞬間、ロミオ・レオーニは光の速度で理解する。  
あ、これ……絶対ヤバイモンだ、と。

「コレはね……おでんパンとおでんパンとおでんパン……その三体のおでんパンの融合の末に出現した『母印究極飯』……」  
アルティメットおでんパン

「お、おう……」

「その名も……『慈悲の一撃』……」

「名前からしてアウトロー!!」

「だって……だってね……!」

ナナがそこでうっすら涙ぐむ。

ほぼ確定事項で全然信用できない空涙であることが明白……のだが、目の前で女の子に泣かれるとどうしてもたじろいでしまうのがロミオだった。

「唯ちゃんがね……もし、《自主規制》で《自主規制》な《自主規制》になっちゃってたら……可哀想なんだもん……」

「その時は私が副隊長を癒しで差し上げま」

「シエルちゃん、黙ってて」

「も……?」

「だって唯ちゃん……好きな人、居るんだよ? 絶対、はじめての《自主規制》だって《極秘事項》が良かったって思う……。分かるよ……だって……だって……っ……!」

……唯ちゃん、腐っても女の子だもん!!」

「ひ、ヒデエ……何て言い草だ……!」

「ナナさん……地味に……今、副隊長の事を奈落の底に突き落としま

したね……」

ひどく冷静なツツコミ×2を無視し、ナナは（無理やり出した）涙で潤ませた瞳を、上目遣いにしながらロミオの顔を見上げ……。

……見るものが見たら抗えないであろう、悲し気な微笑みを作る。

「だからね……もし、そうなっていたら……ロミオ先輩が……楽にしてあげて……？」

「嫌だよ!!!」

「えく？　なんでよー？　この人でなしー！」

「お前にだけは言われたくない!!　お前にだけは!!　絶対に!!　言われたく!!　ない!!」

「ドケチー」

「そうやって自分の手は汚さずに仲間を減らしてのし上がるつもりだろ!!」

「ちよつとく？　おでんパンにそんな人間をコロコロするような物質は入ってません！」

ただ、抗鬱と向精神作用とく……あとちよつと『幸せ』になれるだけなんだからねくく！

「お前の幸せ怖いんだよ!!!」

ナナはかつて、おでんパンを喰わせて皆で突撃すれば怖くないとかいった内容の文書を書き残していたことがある。その内容を忘れるロミオじゃなかった。

「じゃあいいもん！　私持つてるからくく！」

「だ……！　（おいやめろ冗談だろこんな奴にそんな劇物持たせておくとか……鬼に金棒どころか、核弾頭持たせるようなモノ！　し、仕方ないここは……）」



わ、分かった!! お、オレが持つておく! 責任を持つてオレが使  
うよ!!」

「あつはー☆ やったあ〜! じゃあロミオ先輩イザって時はお  
願いね〜」

「……………分かった」

(……………はあ、どうしよう……………こんな超兵器持たされても……………唯にやる  
訳にはいかないし……………けど、アイツ喰いかねないし……………かといつてア  
ラガミに喰わせるわけにもいかないし……………神機に喰処分させるわけ  
にもいかないし……………燃やしても有害物質出そうだし…………………………はあ  
……………)

ヤバい所持品がドンドン増えていくことに頭を抱えるロミオだっ  
た。

~~~~~アブナアアアアイ♪

「……………」

『総員聞け!! コレは任務ではない——繰り返す、コレは任務ではな
い! 記録に残すことも、誰の目に触れることも許されない。』

だから——命令でもない、任務でもない。それでも守りたい大切な
仲間を救い出す。

たとえ神無き世界であろうとも——使命でなくとも、だ!』

『『了解』』

「……」

『行くぞ、ブラッド隊——第一回ピクニック、出動する!!』

『『……』』

「……締まらねえ……ジュリウスエ……締まらねえよ……!」

『……じゃあ何と言えば良かったんだ』

『もつと他に言い方があったと思います』

『任務でなく、かつ神機の持ち出し申請が通るのはコレしかなかった』

『もつとさあ……何とというかさあ……』

『……ハイキングの方が良かったか?』

『もういい隊長黙ってろ』

『ジュリウス隊長のせいで出鼻が挫かれました。ペナルティとして一定時間通信断絶です』

『ちよ、フランm……』ブチッ

『少し頭冷やしましょうか……見た目だけなら王子様なのにとっても勿体ないですね。』

では、ギルさんコマンド・ポスト・オフィサーCP Oとして、何かありますか?』

『……え? 俺か……?』

『ねえねえフランさん! この場合のペナルティーは何くく!』

『ギル! ここはビシッとお願ひします!』

『……』

『分かった。CPから各員に告ぐ。』

死ぬな、死は最悪の選択だ。切り抜ける、生き延びろ。そして……運が良ければ隙をついてぶっ殺せ』

「ソレ違う!! 似てるけど違う!!」

『ペナルティです。報酬から10パーセント削れます』

『やったー!』

『お気の毒ですもwww』

ロミオ・レオーニは悟りつつあった。

本当の敵——それはアラガミでもなく、『女神の森』でもなく……それは、背中を狙ってくる猫耳と、

業務外のコトを突貫で覚えさせられ、寝不足でイライラしているオペレーターなのである——と。

『先鋒は私が!! 我に……続けええええええ!!』

「シエル気をつけろよー……」

『シエルちゃん先鋒だなんてカツコいい〜!』

こうして、ジュリウス発案の副隊長救出作戦は――。

……幕を上げたのだった。

ロミオは痛くなってくる胃を抑えながら不安と戦っていた。
だが、この少年の様な青年はまだ知らない。

……本当の悪夢は、この先に待ち受けている――ということに。



『女神の森』には警報が響き渡っていた。

燃え盛る炎。

逃げ惑う人々。

子供の泣き声、それを宥める声。燃え盛る自らの家を見つめながらも走っていく者。

真面目で義務に忠実なのか、消火活動にいそしむ者。被害を少しでも少なくしようと、誰もが必死だった。

その中を行く、なんやかんやで上手く立ち回るシエルの姿があった。

炎と煙に塗れた街の中。

頭部に見方によってはゴリラっぽく見えるゴツイマスクを被ったどこか貴族めいた服装の少女が全力疾走する様は嫌でも目立つハズなのに、非常事態故に誰も気にしてなかった。

また、シエルも養護施設で教育された軍事教育の賜物か、隠密行動に秀でたシエルは特に怪しまれることなく、ある時は群衆の間を縫って、ある時は建物に隠れ、ある時は匍匐前進をしつつ巧みにすり抜けていく。

やがてシエルは管制塔に辿り着いた。

人は何故か居ない。

おそらくこの騒ぎでこの拠点を置いて逃げていったのだろう。

もしくは、別の緊急指令室へと移動したのかもしれない、どの道人がいないということは僥倖だった。

シエルは素早く端末を操作する。

設置されている監視カメラは全部で30台程あった。
画像に素早く目を通し、目的のカメラを探す。

そして。

シエルは……見つけ出した。

最愛の——『彼女』の姿を。

「……あ、ああっ……！」

まるで……何年も離れていたかのような、錯覚。

「たい……ちよ……！……ふく……隊長……っ！」

少女は……指の先で、届くハズのない姿をなぞる。

「嗚呼副隊長……私……待っていたんですも……？」

副隊長……あつ、移動するのですか？

待って下さい……。ふう、よし、こっちのカメラで、……と。

嗚呼副隊長！ 行かないで下さい！ 行かないで下さい！ 私を

置いて行かないで下さい……………」

無意識に心から眩きが漏れていた。

だが、それをおかしいこととは思えない。

今、シエルの胸の内は……………とても、温かいものでいっぱいだった。

そう。

……………愛おしいという、確かな気持ち。

「嗚呼副隊長……………ごめんなさい、貴女を守るって……………局長と薄い髪眼鏡から守るって決めたのに……………」

副隊長、ともういちどだけ囁いて、シエルは液晶越しに唯の姿に触れた。

「今だって……………すぐそこに……………居るのに……………」

……………会いたい……………」

でも……………届かない……………っ！　こんなに近くにあなたがっ！

貴女が……………いらっしやるのに！！

……………ふう」

そこで、シエルは正気に戻った。

「……と、いう訳で、副隊長の居場所は確認しましたとも！」

さて、肝心な通信の方ですが。そうですね、大型の拡声器がふたつあります、か……。

……もー……」

乙女チックモードから頭が冷えたシエルの脳はやつと通常速度で回転を始める。

やつと当初の目的を思い出したらしく、彼女は自らの視覚能力をフル操作して通信機を探る。

ナナの言った通りに……結局は今の時代オラクル細胞が使われていない機械はほとんどない。

ならば、その活動が活発な場所を探ればいい——通常では、集中力と精神力を削る難易度マックスの困難な作業。

最愛の副隊長を取り戻したいという『強い意志』を持った今のシエルは困難ですら——可能にするッ！

シエルは携帯端末から、場所の情報を入力する。

CPを経由し、フライアのオペレーターへと情報が届いた。

数十秒後、フランからの返答が来る。

『場所情報把握。』

これよりハッキングを行います。
ですが、ハッキング出来るのはどちらか一つです。
もう片方の方はシエルさんの方で停止願います』

簡素な内容。

ハッキング出来るのは一つだけ。

元々、通常のオペレーターにここまで求めるのも困難だろうに、フランも睡眠時間を削り、徹夜で作業をしてくれていたのだ。
皆最善をつくしている。

シエルは自分の携帯端末を掴み、ケーブルで接続し、ハッキングを開始しようと試みる。

確かに難しいかもしれないが……大型スピーカーは真上にある。
つまり、シエルが此処でハッキングを行い拡声器を停止されること——
——これが、『模範解答』とも言うべき行動だった。

いくら時間があれば自分にだって……。
そこまでシエルは考えて、はっと気づいた。

——『模範的』じゃなくっても……いいのだ……と。

思い出すのは——あの赤い雨の記憶。

あの時副隊長は、無茶をしても……自分を助けてくれた。

あの行動は『模範』とは言い難い——最低、自分も副隊長も両方死んで
いた可能性さえあるのだから。

でも……あの時……。

……嬉しかった。

……とても……。

……暖かかった。

そう……。

……今度は、自分が。

シエルの中に、今、強い決意が宿る。



『わが生涯に一片の悔いなしイイイイーーーーー！』

という叫び声と共に、爆炎。

潜入したブラッドの各員は、なんとなく何があったのかを……察した。

『シエル……逝つちまつたか……』

「シエルちゃんリタイア〜〜！」

『……えー……装置を止めて下さい、と私は申し上げたのに……
どうしてこんなことになるのでしょうか、私が悪かったのでしょうか
期待した私が馬鹿でした……畜生が』

『フ……フランちゃんは悪くないよ……』

『あ？』

『……フランさんには何の落ち度もないと思います』

『当然です。じゃあもう切りますよ、忙しいので』

「ちよ、ちよつと待ってー！　ロミオ先輩駄目ー！　まだ肝心な情報
を何も貰ってないよ!!」

『そ、そうだよオペレーター！　まだ唯の居場所聞いてないよ！　オレ達！』

慌てるロミオ&ナナの通信に対し、オペレーターは。

(見えないけど)につこり、と満面の笑顔を浮かべて歯切れのよい声で、答えた。

『……昨今の神機使いは言葉遣いが大変荒れている様で……。

口の利き方を……ラケル博士は……“教育”し忘れていらっしやる様で……。

……そうですね、『次』のブラッド隊になる……ゴツドイーター達には……きちんと伝えておきましょうか……言葉遣いには、注意する様に——と。』

『ま、待ってええええええ!!』

『何でしょう?』

『待って! じゃない……お、お待ちください!』

『先輩—先輩—!』

『ああああ! もう! 分かってるよお! ……』

フランは超不機嫌であった。

突貫ハッキングの真っ最中であるにも関わらず、同時進行でオペレートまでこなさせられている——という激務に対し、クリティカルにキレているのが分かってくる。

神機使い達は理解した。

このオペレーターに逆らってはいけない——と。

そう……力ある者には……ひたすら追従するべきなのだ——と。

『……………フラン様』

「嗚呼、フラン様!」

『……………何でしょう? 私、忙しいのですが?』

オペレーターの声は、まるでこれから屠殺させるであろう家畜に向

けたそれと酷似していた。

だが、末期の声に耳を傾けてはくれるらしい。

そのスキを逃さずロミオは懇願に入る。

そんな彼は、最早何と戦うべきで、何を守るべきなのかを見失いつつあった。

『フライアの誇る超オペレーターフラン様！　どうかお慈悲を!!　我ら神機使い達が任……じゃないピクニツクをこなせるように情報を!!』

「お願いします慈悲深く聡明なフラン様！　この末端ソルジャーに一瞬で良いので耳を傾けて下さいませ!!」

『嫌だなあナナあ！　め、滅多な事言うんじゃねーよ馬鹿あ！　完璧な超オペレーターなフラン様がオレ達現場の神機使いの声を聞き逃されるハズがある訳がないだろ!?　で、ですよねフラン様!?』

「あ、あははははーろ、ロミオ先輩そうだよね〜！　だ、だってフラン様は完璧で完全極まりない超絶オペレーター様なんだよね?!?」

縫るように紡がれる、神機使い達の渾身のおべんちゃらを聞きつつ、フランはいくらか気を良くしたらしく、返答に応じることにした。

『……仕方がないゴッドイーターですなぁ……』

『お慈悲に感謝いたしますフラン様!!』(もうやだ胃が限界)

「フラン様ありがとうございます!!」(帰ったらおでんパン、かなー……)

『副隊長の居る場所は地下の様です。具体的に言いますとこの辺です』

「地下だったってー！　はいロミオ先輩ビンゴ〜！」

『オレか……』

……オレかあ……………

分かったよ……………行くよ……………』

『ジュリウス隊長からの通達です。各員、プランBに変更。全員注意して任務に当たって下さい』

『え』

「りよーかーいっ！」

プランB、と聞いた後のナナとロミオの反応は真逆のものだった。

『え……………ちよ……………プランBで……………プランBって……………』

『私はフランです』

『フラン様……………あのラケコンはマジでプランBをやると言っているのですか!?!』

「おっけー！プランBに移行しまーっす！」

『……………マジ……………かよ……………?』

『中央コンピューターのハッキングに成功。以降、通信を解除します。』

これより秘匿回線から通常回線に通信を戻します、各員コードネーム使用に注意してください!!』

『コードネーム……………』

「あつはははは……………ロミオ先輩……………でもここは空気読んでね〜〜！」

『分かってるよお!!!!』

『……………お返事は?』

『「完璧なピクニックを実行してご覧に入れましょう、フラン様!!」』

『よろしい。ならばピクニックだ。』

では、通信切り替わります5秒前、4、3、2……』

(フランさん不機嫌だけど仕事はちゃんとこなすあたり流石くく！)

あとはロミオ先輩次第って感じだねー……。

……じゃー私もちゃんと任務……じゃなかった、ピクニックしないと!!)

と、物騒極まりないことを決意しながらガッツポーズをかます彼女の姿は。

肌の露出の多い、ピンク色の服。

手には大きなサンタクロースの様なズタ袋。

そして頭には謎の仮面。

と、まるで……どう好意的に見ても変態の一種であるかの様だった。

そこに避難中なのか、手をとりつつ小走りで通り過ぎようとする親子の姿があつた。好奇心に勝てなかつたらしい、子供がナナの姿を指さす。

「おかあさーん！ 仮面のおねえさん……？ がいるー！」

「み、見ちゃいけません!! は、早く中央シエルターまで逃げるわよつ!!」

「で、でもおかあさん……あのおねえさん？も早く逃げないと……アラガミが……」

「……。」

ど……どこのどなたか存じませんが早く貴女も逃げないと大変よっ!？」

(おおーてつきりスルーかと思つてたら意外といい人ー?)

こんな時代だからこそ——人は、人に、親切にできるのかもしれない。

こんな状況であつたとしても——人は、人として、無くしたくないものがあるのかもしれない。

多少どころかかなり動揺しながら出来るだけ目線を合わせない様にしてくる母親とおぼしき中年女性に、ナナは(仮面越しに)話しかける。

「ご心配なーく！ 私ならだいじょぶっ！ それよりそれより中央シエルターつてーどつち？ あーそつちなんですかー！ (じゃあこの後もこの道、沢山人通るよね〜)」

あとー！ あとあと〜そこに大きいスピーカーがあつたりしますよねー？ え？ この街で2番目に大きいスピーカーがある……」

「そんなことを聞いてどうするの？ いいから早く逃げないと……」

「じゃあコレ持ってつてくださーい！」

ナナはその母親らしき女の子の手を握ってない方、つまりは開いている方の手に強引に、ビラを押し付ける。

そのビラにはハッキリと大きく文字が書かれていた。

尚、使用言語は極東地域共通用語と英語の二か国語表記。

『ゴツドイーターはもう要らない！ 集え!!』

神機兵搭乗志願者募集!!』

「え？ えええ……？ な、なにこれ？ 何か既視感が……」

「あと、こちら無料で配っております神機兵用携帯食料のサンプルの……『携行おでんパン』です！」

ミニチュアサイズのおでんパン！ どうぞどうぞー！」

「え……ええー……？ こんな配給食貰ったことないんですけれど……？」

「最新作です！ 避難所でアラガミが怖くて眠れない夜はありませんか？ または逃げなければならぬ状況なのに足がすくんでしまうことはありませんか？ でもこれがあれば大丈夫!!」

不安や恐怖を勇気と幸福に変えてしまう最強の携帯食品……！
今なら何と無料です!!」

「……」

「ちなみに使用されているコムギは有機栽培かつ本物なので成長期のお子様にも安」

「貰います」

「おかあさん……これ……ほんとうに大丈夫なの……？ こ、このお

ねえさん……信じるのー？」

あからさまに戸惑う親子にビラとおでんパンを渡したナナは、通信で連絡を入れる。

そして、何か（ロクでもない）決意を秘めたような瞳で、スツカリ曇った空を見上げた。

「ロミオ先輩……あとは、頼むからね……！」

こうして、少女は。

その避難路でひたすら、一心不乱に、ビラとおでんパンを配り続けるのだった。



もう死んじやおっかな。

……本気でそう思った。

「も、もうやだ……」

「あ?」

「も……もう無理……本当無理……コレ以上やったら私……死……」
「し?」

「もう鶏の餌やりは嫌なんですううううう!!!」

私の格好はヤベエことになっていた。

散々突つき回されたせいで、所々破れた作業着は替えが無いとか
いう理由で着替えさせてももらえない。

しかもあのクソ……もとい、おにわとり様方は所かまわずに食べた
ら出す、という行為をなさるので、袖やズボンの裾はもう……もう
……。

おわかりいただけたでしょうか。

「頑張れ女の子」

「だ、大体皆さんは何処に行きやがったんですか!? 何でみんな居な
いの……!?!」

「そらさつきアラガミ警報鳴ったからだ」

「……は? 何それガチじゃん。……え? じゃ、じゃあ私どうなる
んです……?」

「あんたゴツドイーターじゃん、どうにかならんのか?」

「……………私は神機を今持っていますよね……………」

「……………うん、持っていないね」

「……………人工的に調整された生体兵器を操る兵士がゴツドイーターなんですよね……………」

「そうですね」

「……………つまり……………ゴツドイーターとは……………神機なんです!!」

「……………」

「急なお話ですが味噌汁をご存知ですか、知らなきゃカレーでもいいです。思い浮かべなさい。」

アラガミを倒す手段とはすなわちコアと呼ばれる『指令細胞群』を抜くコト! もしくはぶっ壊すこと! それに通常攻撃は通用しませんつまり同じオラクル細胞性の武器でなければ通りません!

そもそも神機とは毒を以て毒を制す理論でアラガミを以てアラガミを制するためのものです!!

そして現時点じゃ残念ながらアラガミのコアに対して一番有用な武器です!!

いいですか……………神機とはすなわちゴツドイーターの本質! ゴツドイーターこそが神機! 神機なしでゴツドイーターは有り得ないケド……………ゴツドイーターは神機使いナシでも成り立ったりするんです!!

今の私はー! 今の私は——!! 味噌の入っていない味噌

汁! ルーの入っていないカレー!!

そう、つまり——ただの煮物です!!!!

「……………すげ〜く……………おいしそうです……………」

「結論！ 今アラガミに來られたら……闇の労働の鎖で繋がっているこの工場まで燃え尽きちゃうー！」

「お願い死なないで神機使い！ あんたが今ここで倒れたら総統や人民との約束はどうなっちゃうの？ ライフはまだ残ってる。ここを耐えれば、アラガミに勝てるんだからー！」

「次回！私死す!!——そうゆうコトです!!」
「ドンマイ」

「こ、こんな場所でそんな情けない死に方嫌だああああ!! だ、大体……私死んだら大変ですよ!! 貴方確実に喰われますよ!? しなばもろともー!!」

「そんな時は一緒に死んでやる」

「何そのイケメン……ですが今はそんな要素いらねーよ!!」

「悪いな職業任務には忠実なんだ」(コイツが喰われている間に逃げる時間があると俺ワンチャン)

その時、私は察した。

あ、コイツ……ナナちゃんと同じタイプの人間だ——つて。

「このクソ野郎があああああああ!!」

目の前の警備兵その1のミゾオチを思いつき蹴り上げるー!

そう、始めからこうしておけばよかったんだ……。

手錠はあるけど蹴れるじゃない。神機はないけど、オラクル細胞があるじゃない。

そう……改造人間が……生身の人間に——負ける理由は何処にもない!!

「甘い」

「と、取られたあ!?!」

「そおいー!」

相手の格闘技術は遥かに私より上だったようだ。

……ですよね……。

いくら改造人間とはいえ……私……数か月前まで……。
……ただの学生だったんだから……。

と、何もかも諦めかけたその時。

急に警備兵その1さんがぶっ倒れた。

「……………え？」

白目剥いて口から泡吹いているので、どう見ても気絶していることが分かる。

まさかこのタイミングで運よく都合よく鉄骨が空から降ってきたのかな……？ などとアホめいたことを考えるけど……まあ当然そんな訳もなく。

代わりに見えたのは。

頭部に、神機兵の頭がついていた。

頭部に、神機兵の頭がひっついていていた。

半ば狂気じみたその武装——。

「うわあああああああああああああ?!?!?」

「お、おいコラ騒ぐなって！ オレだよ!! オレ!!」

「だ、誰?!? い、いきなり何ですかあ!?! 不審者氏ですか!?!」

「違う!!」

「や、やだ……来ないでえ……!! それ以上こっちは来たら通報します!!」

「何処にだよ……」

「うっ」

ぐうの音も出ない。

変態マスクマンはそうすると何か腕をこっちに向けて指さしている。

……よく見るとどっかで見覚えがあったようなシロモノでないこともない。

「ほらコレ！ ブラッド特製！ フライア印のP-66アームドインプラント！ 『P66偏食因子』を媒介とした、神機に対する神経信号の伝達と神機使いの神経に接続された神機の『オラクル細胞』の制御を担っているスグレモノだよ！ 無くすと死ぬ超クソアイテムだこのボケエー！」

「あ、あれ？ この会話どっかで……」

「だからオレだっつってんだろ!!」

「ま、まさかその鼻に突く声は……!! マサカ……ロミオ先輩……?」

言われてみれば……。

このマスク野郎の身に着けているオレンジ色っぽい短めの上着は確かにロミオ先輩が着用していたソレとよく似ている。むき出しの神機はロミオ先輩の大剣に見える。

うっかりいつものニット帽がないから分からなかったようだ。

ロミオ先輩も改めて私の格好を眺めているんだろう。表情を感じさせないそのマスクがこつちをマジマジと眺めている。

「……………何、やってたの……………？」



「ま、まあ無事だな!? 再会できて良かった! よつしや逃げんぞ!!」
「え、ええ……………? そんなことを言いましたも……………」

困惑する私をよそに神機兵頭なロミオ先輩は通信機のスイッチを入れる。

一体どうやって通信してるのかは不明かつ割愛。

ロミオ先輩は神機兵マスクでも分かる程——ガツクリと1,5秒ほど首を落とし、そして、何か決意をするかのように顔を上げた。これから通信するだけだったのに何でそんな儀式が必要なんだろう、という私の疑問は。

……この後、すぐに解かれることになった。

「こ——こちらシヨタ粹！」

「シヨタ粹!?!?」

衝撃の発言。

「シヨタ粹!?!?」

「黙れ」

「……す、すみません……し、シヨタ粹先輩……」

ダメだ……堪えるんだ……!」

ここで笑ったら……ロミオ先輩は確実に私を放置して逃げるところから……!」

そう、ロミオ先輩を傷付けちゃいけない、きっと今頃ヘルメットの下は真っ赤な顔&涙目なコンボを決めているハズなのだから。

ロミオ先輩だって恥ずかしいんだから……!」

と、考えていた私は——甘かった……。

『こちらシルバーバック。感度良好。どうぞシヨタ粹』

「シルバーバック……?!?」

シルバーバックとは。

成熟した雄のゴリラに見られる特徴の一つ。

背中の毛が白くなる現象である。

そこから転じてゴリラの群れのボスをつかさどる用語としても使われる。

……ブラッドのマスコット粹、ゴリさんは、シルバーバックとなつたのだ……。

「し……しよ……シヨタ粹からシルバーバックへ……。

『防水チキン』を確保した！ 繰り返し！ 防水キチン確保！」

「?!?!」

『了解、シヨタ粹よくやった。ピクニック会長とおでんPに通達しておく、通信終了』

「……頼んだ、通信終了」

ピツ、と通信を切ったロミオ先輩は、おずおずと私の方を向く。

「……えー……副隊長……」

「…………防水……チキン……?」

防水チキンて……。
防水……チキンて……。

「あ、あのさ唯……コレな……。その……。
通信をな……共有したから……潜入捜査員も傍受できるよーにっ
て……。

……だけど盗聴の可能性も考えてさ……ほ、ほら、誰が誰だか分
かったらダメじゃん……?」

「……防水……。鶏……」

「しよ、しょうがないだろうお！」

いつものコールサイン使っちゃ駄目だったんだよ!!!!」

「……………ぼーすい……ちきんエ……」

……ひどい。

……こんなの……こんなのって——ひどすぎるよ……フライア
……。

「ちなみにコールサイン命名したのジュリウスだから。お前のコール
サインはジュリウスがつけた奴だから」

「……………え? なにそれ……。

ロミオ先輩が何を言っているのか理解できない——思考が停止し、

脳内の何もかもが真っ白になった。
しばらくして(実質30秒後)、重なっていた思考が一つに収束を果
たす。

そんなのって……。

……そんなの、って………!!

「隊長……隊長が……」

「うん……」

「隊長がそんなコトするなんて……！隊長……それって……。

……私のことちゃんと見ててくれた、ってことですよ……
!?!」

「……は？」

「……ソレじゃあ……私隊長の視界には入っている、ってコトですよ
ね!!」

「おい」

「良い人生だった……」

「しつかりしろ唯!!」

そこでヒットするロミオ先輩の顔面ビンタ。

「い、痛い……」

「あ、ゴメン！ ゴメンな……唯だって一応、女だったよな……」

「一応……」一応って……一応……」

物理より心に来るダメージ。

「だって……だってだって……良いじゃないですか……全く

無視のスルーされてるよかマシじゃないですか!!」

「いや……無視って訳じゃねーけど……この場合好感度マイナスだぞ。まだ視界に入ってるないゼロ段階の方がマシじゃね?」

「黙れ自称シヨタ粹!」

「自称じゃねーよ!! 好で言ってる訳ねーだろ!! この防水鳥女!」

「愛の反対は無関心!」 だったらその辺のハーブだとか雷石だとかに思われていた方がまだいいんです!!

私はココ来て悟ったんだ……人間、小さい所で、日々の暮らしの中で、何気ない幸せを見つけていくことが大切なんだって!!」

「正論の使い方間違ってるぞ」

「だからいいんです!」 私……私はもう……!」

「ここで、この地下で……この先もずっとずっと……トウモロコシの皮剥いてコンベアに流して皮剥いてコンベアに流して鶏に餌付けて突っつかれて年喰って人生終わっていくんです!!」

「こんの馬鹿ああああああ!!」

ロミオ先輩が胸倉を掴みあげてきた。

顔は相変わらず神機兵ヘルメット装着のままだ。

だが、声は熱かった。

「お前は——お前は——ッ!」

何のために……ゴッドイーターになったんだ!!??」

「そ、それは……」

適合通知書が来たから……。

と、答えようとしたが——思わず口をつぐんだ。

違う。

そうじゃない。

今、ロミオ先輩はそんなことを聞いているんじゃない……！

「お前は——アラガミを倒すために！ ゴッドイーターに！ なったんだ！」

「そんなコト一言も言っただけ……」

「分かったら——こんなクソみたいなドン詰まりの人類の状況——覆してやれ!!」

それは、天啓のようだった。

「覆す……」

そうだ。

……私も、そう思っているんだ。

ずっとずっと無理だと思ってた。

不可能だって、思ってた。

でも、違うんだ。

出来るとか、出来ないとかじゃない。

私だって……そう思ってたんだ。

自信も根拠もなくいいし——未来の展望だつてまるで見えなくて——

それでも。

——考えるだけなら、自由だったんだ。

なんで……きづかなかったんだろう……。
……今まで……ずっと……。

「分かりました……分かりましたよシヨタ粹先輩……！ 私行きます
！ 皆の所に……帰るんだ！」

「お、おう……。じ、じゃあさつさと帰るぞ！」

「その為にはまず神機の奪還……でもソレが何処にあるのか分からな
い!!」

「うーん……ソレな。そっちの方はそっちの方でどうにかなる手はず
はあるんだけど……」

と、やっと前向きになっていたところに。

強制的に通信がはいる。

どうやらコレはネモス・ディアナの共同回線——つまり避難所にあ
るであろう、『この街で一番デカいスピーカー』から発せられた通信だ
という事が分かる。

もしかしたらアラガミの動向か、極東支部からのゴツドイーターの
派遣か……地上の情報を知らせているものかもしれない。

と、思っ注意深く聞いてみる。

『立ち上がれ人民達よ!!!!』

「は?」

何が始まったんだろーか……？



その頃、避難所に集まった『女神の森』の人民達は公共放送にスイッチが入るのを見ていた。

巨大スクリーンに何やら人影めいたものが写っている。

幾度もアラガミの襲撃に耐えてきた為、傷んでおり、荒い画像ではあったが、人々はその姿を確実にとらえることが出来た。

それは、見るモノたちに圧倒的なまでの違和感と、どこか冒瀆的な錯覚さえも抱かせる――

変な仮面を被った男の姿だった。

「なんだ……アレ……？」

「あのマスクどつかで見覚えが……」

「おでんぱん」

『立ち上がれ人民達よ!!!』

「「キエエエエエアアアアアシャアベツタアアアアア
!!」」

まさか喋ると思わなかった為、声を発しただけでこの騒ぎである。
ちなみに、そこに居る殆どの人間がその声が青年期以降の男性の声
だと気づいただろう。

『我々は実に多くモノを奪われてきた！ 家を、家族を、平穏な日々
を。』

そして武器を持つことを許された限られた者たちの救いの手が気
まぐれに差し出されることをただ待つしかできなかった。

そんな現状でいいのか？ 満足か？ 悔しくないのか？

聞こう人民たちよ……そんな世の中でいいのか!?!』

一部の少数の人間たちは、なんかどつかで聞いたことがある演説だ
なーと思ったが。

殆どの人間は画面に釘付けになっていた。

その圧倒的意味不明のカリスマ性に。

『否！ 断じて否!!』

長きに渡った屈辱の日々は此処に今終焉を告げる！

今こそ雪辱の時は来た！ 団結せよ人民達！立ち上がれ！

強い意志の前ではアラガミなど最早敵ではない!!

己の力で自らの守るべきものを守れ！ 人には皆その力が備わっている!!

人民達よ、武器を取れ!!

今こそ人類の敵に立ち向かえ!!』

「……」

「……」

「……」

『女神の森に——真の楽園に——！ 勝利をおおおおおお

!!』

「「ypaaaaaaa!!」」

と、いう訳で何やかんやの末。

『女神の森』に住まう人民たちは戦えと言う言葉に深く共感し、何故か『アラガミと戦わないといけない』という半ば強迫観念じみた狂氣的闘争心に火が付いてしまった。

ありとあらゆる武器庫を漁りだし、極東支部から自衛用に、と支給されていたスタングレネードや音響弾、ついでに足止めくらの効果ならば多少ある偏食因子を練り込んだ弾丸入りの銃器などを勝手に、

『『ねーよ!!』』

「何が」

『今ので下手に動こうとしない奴なんか居る訳ねえよ!!むしろ殺る気に溢れるだろ常考』

『シヨタ粹先輩コレってFのOさんに繋がりますか!?!』

『CP経由じゃないと無理』

『シルバーバック! 早くコレをあの『無駄にデカくてやたらと動く船』に繋いでください!!』

「もうやってる、切るぞ」

まだ回線外で何か言いたそうにしていた副隊長とロミオを無視して、ギルバートはさっさと通信を切り替えた。

オペレーターはもはやゴニョゴニョと讒言を言っていた。

『今こそ革命の時来たれり……立てよ人民、武器を取れえ……』

「オペレーター、次の指示を頼む」

『了解しました我らが指導者マクレイン。……急ぎよ予定を変更しましてプランは△に切り替わります』

「………と、いう事は……出るのか、アレが」

『はい、お察しの通りです……出ます、アレが』

分かった、通達しておく。

というギルの返事には奇妙な緊張感が含まれていた。

同時刻。

ネモス・ディアナ北門付近にて。

小型が無数、中型のアラガミがそれでも数十体ほど集っていた。その上を、滑空してくるのはフェンリルの軍用ヘリ。

『聞こえますかパイロット、あと20秒後アラガミの真上に降下します！』

『了解！ 計器チェック問題な——し！』

『ご武運を！』

ヘリの上空から見えるアラガミたちは壯観だ。

ここから射出されれば、直線上にいるアラガミ達を一気に屠ることができる。

そう考えると——思わず『食欲』をそそられるような光景であった。

『よく聞いとけ……アラガミ共……アンタらに恨みはないが、今そこに居られるとクツソ邪魔だからブツ殺させてもらうが恨むんじゃないぜ？』

世の中には、舐めてかかると痛いものが二つある……』

無理やりつけたターボジェットに火がともる。

一度しか使えない射出機——それが点火し、上から宙づりになっっているがゆえに上空に浮かぶその巨人がもつ大剣が銃器へと姿を変えた。

『それはな……操縦もできるエンジンアと……』

銃口が、真正面の中型種へと——向けられた。

『本気を出した……シスコンだよ
!!!!!!』

神機兵γ、クローン。

—— 出撃。

phase 48 おいでよ、女神の森④

「うおおおおら死んどけアラガミ共おおおおおおお!!」

無敵のシスコンと化したお兄様、又の名を神威ヒロキの操る神機兵からはバカスカとオラクル弾が発射される。

ついでに地面方向へと射出された機体は脚で小型種を轢き潰し。

バキバキと外骨格の碎ける音と肉が挽かれていく水音を垂らしながらも、

無事着地。

……出来る訳もなく。

着地と同時に片足を大破した。

バツキリと根元から折れた足が僅か遠くに離れた中型アラガミ（具体的にはコンゴウ）を頭部から串刺しにする。

だが、コアまでは届かなかつたのか死亡までには到らなかった。

「シスコンからHへ!! 右脚損傷！ けどまだ大丈夫だイケル!!」

何が大丈夫なのかよくわからないが、この程度でくたばるクソ兄貴ではない。

初めから脚部損傷は計算の内である。

すぐさま上空から予備パーツが投下。

接合面はオラクル細胞性になっている為、適合すれば神機と神機使い同様、それっぽい触手めいたもので接合する形になっていた。

クソ兄貴が無様にも片足で必死こいて神機兵脚部を接着している間。

先ほどコンゴウを貫いてぶっ飛んだ方のパーツに変化が見られる。

そう、溶けたのだ。

それどころか刺し貫いたコンゴウを内側から捕食し、その場から溶

けていく。

やがてコアまで浸食が達し——コンゴウが居た場所には何も残らずただオラクルの残骸だけが残った。

やがてそれらも塵へと返るだろう。

「よつしや討伐——！」

正確には着地の時点で十数体キル。

だが神機兵に搭載していた『アラガミコアカウンター』が数字を表示する。

律儀に計測していた。

(そうだ……コレでいい……!!——この情報は本部に転送される……)

神威ヒロキは考えていた。

『前』は失敗した。あの計測結果では神機兵の有用性を示すことはできなかった。

だが、今は違う。

今度こそは、パイロット付きの有人神機兵。

そして反対側には同じ数のアラガミを相手にしているであろう神機使いがいる。

(それにあの隊長さんに負けたくはないし……!!)

そう、ただの——負けず嫌いであった。

神機使いと有人神機兵の比較対象。

同じ環境下で、世界レベルで見ても上級クラスの神機使いと比べて遜色ない結果を出せれば。

いや、

それを上回ることができたのならば。

本部はすぐに神機兵の方へと動くだろう。

そうなればこれより後、神機に『適性在り』と判断されたものは、神機使いではなく——神機兵。パイロットとして育成され、戦場に投入されるだろう。

もしくは、無人型神機兵が大量生産され、いずれは戦場を支配する

ようになる。

——それが、妹を救う為に自分にできる唯一のやり方だった。

不器用にしか戦えなかった。

だが、今回の作戦無かったことになってるのにどうやって本部にこの情報転送しているのか言及されたら一発でアウトということ本部から来た協力者(?)であるイゴー●に一任と言う名の丸投げをしている辺り詰めは甘かった。

「オラクル充填完了。喰らえ化け物共おおおお!!」

銃口から出るのは——見紛うことなき『アラガミバレット』だった。ただしその形状は神機のそれとは違う。

神機のアラガミバレットは、捕食したものを射出する——に対し。

このアラガミバレットは、いわば『神機兵の体細胞』を撃ち出しているということになる。

文字通り『肉を削って骨を断つ』戦い方——それがパーツさえそろえば補える神機兵の闘い方だった。

撃ち出したオラクル細胞群が一方向に向かいアラガミを食い破っていく。

カウンターの数字が一気に跳ね上がったのを見て、神威ヒロキは満足そうに小さく笑った。

(一撃でこれなら……ブラッドアーツをも上回る……!)

もっと射撃精度を上げ、アラガミを密集形態に持ってきてコレで一気に殲滅する。

そうすれば一度に20……いや、30体の小型種を消し炭にするこ
とさえ不可能じゃない。

彼にしては珍しいほど、高揚感で溢れかえりそうになっていた。
もう一撃を放つために、と体勢を立て直そうとしたその時だった。

「なっ……!?!」

神機兵の肝——事も有ろうに神機パーツ。

兵装開発をつかさどる自分の専門分野がバツキリと二つに折れていた。

(……ヤベ……)

『し、シスコンさんどうしました!?!』

「……こちらシスコン。『鉄屑ゴリラ』のイチモツが折れた……」

『……え?』(い、イチモツ?)

「根元から……バツキリいった……!」

『い、痛そー……』

「手が離れない……強く……握り過ぎた……!」

『……』(え?え? 変態カミングアウト?)

「つい……テンション上がって……出し過ぎたんだっ!!」

『……』(野外……)

「O細胞の負荷に内部機関が耐えきれなかった畜生オレの設計ミスだよそうだよ! 吹かしすぎました誠にすみませんしかも腕のホネ反対側から出てるしーあーもー帰ったらまた凶面ひーかーなーきやー!!」

『あ、あああああ! そ、そうゆうコトだったんですか!! び、びつくりしたあ……』

「は? 何言ってるんだか意味わかんない」

『お、お気になさらずっ／＼!! ちよ、ちよつと勘違いを……も、も』

う…………!』

「分かってる…………竿の代わりは持つてきてない。というか存在しない…………。だが、このアラガミ全部殺らないと帰れない…………しようがない、か…………。」

今から景気よくぶっ飛ばす!! ちよつと離れて、終わったら拾ってくれ!!」

『は、はいいいいいい!!?』

ヘリのパイロットは我が耳を疑った。

『い、いやちよつと待つて…………? え…………? どうしよう…………? 私そんなの聞いてない…………』

「シヤラップ! 良いかよく聞け!! このアラガミを殲滅しねーと後々面倒なんだよ主に脱出経路確保とかそつち系な話が! つまり!! オレの天使が!! 危ない!!」

『て、天使…………』

「そうだ天使! オレの命! 我が家の家宝!!」

だけでもうコイツは使い物にならない、だけどここで放置するとネモス・ディアナの奴らが勝手に持つてったり、極東支部にかすめ取られたり、もしくはアラガミ様達が勝手に食って進化したりしたらヤベエだろ。冗談じゃないよな。

だから吹っ飛ばすんだわ」

『え…………え…………?』

「グダグダ言っている時間はない! とうかもう装甲齧られてるからこれしかないっ!」

大丈夫! 死ぬほど痛いぞ! だが!! 幸運の女神は! オレの

!! 味方だああああああああ!!」

『うわちよ怖』

「妹愛してるうううううううううううう!!」

こうして、本日二度目の……爆炎が上がった。

——と、いう光景を見ていたネモス・ディアナの人民達は感動すら覚えていた。

自分たちを守るために……一命を賭して戦った戦士が、あそこにはいた。

そして、今、自分たちを守るために、その命を散らせてまで……アラガミを防ぐ壁となってくれた。

……と、見事なまでに勘違いした人民の皆さんは目にうつすらと涙まで浮かべていた。

だから、今度は自分たちがやろう。

戦い方は見ていた。

そうだ。

爆発させればいいんだ。

さっきの謎マスクによって闘争心に目覚めてしまったネモス・デアナ人民たちはプロの人民と化す。
かくして、ネモス・デアナ史上最大にして最悪、空前絶後の汚ねえ屋内花火大会が始まったのであった。



「何が……！」 な、何が起こっているというのだ……!?! な、なぜこん

なことがっ……!?!」

葦原那智は困惑していた。

自らが長年にわたり打ち立ててきた、自らの力と意志の象徴——『女神の森』と呼んだ街。

それが、目の前でバンバン炎を上げている。

「……………ま、街が……………! わ、私のネモス・ディアナが……………!?!」

また一つ建物が吹き飛んだ。

嗚呼、確かアレは設計に苦心したんだよな……………。確か壁には特殊素材を使うんですよ!と今は亡き部下が張り切っていた。

そのためにわざわざエイジス島まで物資を取りに行つて——戻つてこなかった。

エイジス建設時代からの付き合いで、離反する時も文句のひとつも言わずに黙つてついてきた——自分には過ぎた部下だった。

きつと、あのまま行けば那智より優れた技術者として大成していたかもしれない男だった。

その部下——スザキの笑顔が大空に広がり……………爆音と共に消し飛んだ。

「や、やめろ……………! ……やめてくれっ……………!」

那智は両手で顔を覆う。

今、自分の半生を賭してきたものが——ガラガラ、ではなく派手な起爆音と共に、崩れ去っていく。

唯一の救いは、もう一つの半生をかけた宝が、今この場に居ないという事だけだった。

『あつれー？ どおーしたんですかあ〜？ 那智おじさーん？』

「……!？」

『あらあらあらー……酷い惨状。これはこれは……ご愁傷様です』

「さ……サツキ……君か……!？」

画像の荒い通信用モニターに妙齢の女性の姿が映し出される。
メガネをかけた知的な美女。

『女神の森』出身のフリージャーナリスト高峰サツキだった。

『あららー？ コレ何ですー？ 中央回線完全に取りられちゃってますねー。これプログラム組んだの誰ですかねー本当情けないっいたらありやしない』

相変わらず毒舌は冴えている。

『さあーと、いつまでそんな所でへこたれている心算なんですかおじさん。』

さつさと立ち上がっちゃって下さいよ』

「……すまない……私が……！ 全て……私の責任だっ……!!」

うなだれる那智に、画面越しのサツキはにっこりと微笑みかけた。

『うるさいってんですよ黙ってくれませんか？』
「」

ネモス・ディアナ総統は思わず白目。

『今ねえ……謝罪も責任言及も必要ないでしょ、理解してくれてますかね？ 分からない訳ないと思うんですけどねー昔フェンリルのお偉い技術者さんだったおじさんには』

「あ、ああ……」

『謝っている暇あったら立ち上がったらどうです？』

へこんでる暇あったら前を向いたらどうですかねー？

私、おじさんのグズグズした泣き言聞きたい訳じゃないんですよ。そんなもん拾っても三面どころか、四面、五面記事のスクープにもなりやしないんだから。

そうゆう訳です。一文の特にもならない、めそめそするのはもう終わり。あの子だっていつも歌ってるじゃないの』

「……」

『明日を照らすのは——勝手に昇ったり沈んだりする、『太陽』なんかじゃない。

自分か、或は誰か——人の手で作り出される『希望』なんだって

………そうでしょう？』

「……サツキ君……」

そして、那智は立ち上がる。

「ああ、そうだ……その通りだな……フツ……情けない所を見せてしまったな」

『分かればいいんですよ。』

それじゃあ、まずは皆を正気に戻しましょう。まずは回線を取り戻す、そして上げるんです。

……ド派手な、反撃の狼煙ってヤツをね』



反対側からでも見える程の黒煙を確認したジュリウスは、何かとんでもないことが反対側で起こったということは薄らと理解しつつも実際は何が起きているのか全く把握できていなかった。

「オペレーター、状況は!?!」

『こちらオペレーターからピクニック会長へ、シスコンが爆発しまし

た』

「……そうか、分かった」

『☒ならご心配なく、今炭になったのはクローンです。オリジナルはまだ残っております』

「だろうな」

ジュリウスは今のセリフから内容を推理する。

シスコンが爆発——つまり、神威ヒロキ技官が何故か技官なのに神機兵パイロット（恐らくは☒のクローンコピー）で出撃し、かなりの数のアラガミを掃討したということ。

つまり——神威ヒロキが出撃せざるを得ない状況が発生したということだ。多分内部で。

内部で何かを起こせるのはシエル、ナナ、ロミオの潜入3名とCPのギル。

通信がハチャメチャコードネームになっているということは今通信回線はスパイにも傍受できるようなオープンチャンネルであるはず。

ならシエルは通信回線の乗っ取りに成功した——ということだろう。

そしてその状況下で、人民が大人しくしていない状況を発生させること——一番効果的なのは人が集まっている場所で何かを不特定多数に対し伝達すること。

ジュリウスの脳内で結論が出る。

多分、ギルが、何か、やらかした。

……が、恐らくは心配ないだろう。

作戦は上手く進んでいる。恐らくはナナかロミオのどちらかが、副隊長を奪取することに成功している。

でなければ神威ヒロキが素直に自爆などするはずがない——。

『ピクニック会長。外部から『方舟』に緊急通信がはりました。恐らくは救援要請の様です。如何致しますか？』

「無視しろ」

『……え？』

「混線によるジャミングで聞こえなかったことにしておこう。心配ない……救援要請、ということは今同じ戦域に居る、ということになる。ふっ……相手は恐らく極東支部の神機使だろう。奴らの居場所が特定できたぞ」

『……』

「あとはバレなければ問題ない。……引き続き頼む、通信終了」

『……了解しました、ご武運を』

（わざわざフライアに救援を求めてきたという所が引つかかるが……。

……イザとなれば再出撃という手もある……）

ジュリウスは、神機兵ヘルメットの下でロクでもない思考を巡らせながら、黒煙の昇りたつ空を見上げた。

それは反対方向に居る自分にさえ、目視できるほど濃い煙。

ジュリウスは思案する。

（……さっすきの爆炎……見えたのが俺だけならば良いのだが……）



「……………」
「……………」

「どうしようロミオ先輩!!」

「オレ…………大きくなったら…………指導者マクレインの為に命を捧げるんだ…………」

「現実逃避してる場合ですか!! しっかりしてくださいー!!」

「いいじゃんちよっと位…………。アイツ才能の使い方間違えてるよ…………大した奴だよウチのマスコットは」

「…………緑色なブドウ」

「それはマスカット」

「球技とかで味方に出したパスを奪うアレ」

「それはパスカット」

「漫才でもやらないとやってらんない。」

「私たちは合流地点から一步も動いていないのだ。」

「長々と何やってたんだと言われるかもしれないがしようがないでしょう…………。ここでロミオ先輩とアーデモナイコーデモナイとやっ

ている間に……何か地上はややこしい事態に陥り、ギルさんの共●主義的政治宣伝演説のせいで皆に思想が芽生え、更にはどこもかしこも爆音だらけだ。

……………怖くて動けない。

「んー……多分、そろそろこの混乱に乗じてここに潜入してる工作人員……平たく言うとスパイが救援に来る……かも……しんない。だ、だからさー！ もう少し待とうよ！

大体逃げるにしても神機取られちゃってんだろ？ 神機は何としても回収しなきゃヤバいつて」

ロミオ先輩のおっしやる通りだ。

私の神機は『第三世代機』。『女神の森』は極東と繋がっている。

多分もうここが襲撃を受けたという事実は極東支部へと伝わっているだろう。

という事は、極東支部直属の防衛部隊か討伐部隊が派遣されてきている可能性が高い——というか絶対出動してきている。

万が一にも極東支部に『フライアの機密事項』をかすめ取られるわけにはいかないのだ。

そんなヘマやらかしたら……口封じとか何かそれっぽい理由で今度こそグレム局長から偏食因子停止処分のお知らせが来るコト確定だ。

そう、ゴツドイーターに於いては……上官とは即ち死刑執行人と同義である。

……………と、すれば……………。

「……………いや、打って出ましようロミオ先輩」

「えっ？」

ロミオ先輩が何言ってるんだコイツ……という目で私を見る。
……いや、ヘルメットしか見えないから分かんないんだけどね（憶測）。

「私……薄ら聞いたんです。あの暗黒労働の最中に……」。

「ここネモス・ディアナには……『薬をドカ食いする奴が塔のてっぺんに居る』んだって……」

「……あー……うん。……多分極東なら50パーセントの確立で……黒蛛病だよな……」

「そう、聞いたのだ。」

工員の皆さんがたまーに漏らす会話や独り言。大抵はご近所の噂話だったり、仕事や上官、家族の愚痴だったりなのだが、その中にひとつ怪しげなものがあつた。

塔のてっぺんには、薬をドカ食いする奴が居る——らしい。

グリム童話のお姫様か、と思つたけど。幾らなんでも童話のお姫様は薬漬けにはされてはいないだろう。

多分、私がお薬廃人にされなかつたのも……間接的には、その子のお蔭かもしれない（限りある資源的な意味で）

だつたら……」。

「そんな薬中を後生大事に抱えていること……コレって不自然じゃありませんか？」

「いや……そんな変なことでもないと思うけど」

「……私もそう思いましたけど、ソレはフライアとか余裕のある『支部』内部の話だと思ふんですよ。」

多分フライアでブラッドの誰かが黒蛛病やつたら山ほど薬や治療技術を投与してくれると思います」

当然『被験者』としての意味も含めてだろうけど、という語句は飲み込んでおく。

「自慢じゃないけど……私が元住んでた居住区にもかなり大きな病院

がありましたし……そこではフェンリルの、特に技術関係者やその身内に対しては手厚いケアが施されるんです……」

「……？ 唯？」

「……治る見込みのまるでない、そんな病気に対しても……です。」

「……よく知ってます」

「……」

「でも、サテライト拠点や余裕のない支部はそんなもん匿ってる場合じゃありませんよね？」

「……」

「それでも貴重な薬剤まで投与してソイツを囲っている……と、いうことは」

「おい」

「可能性のひとつとしては、その人が重要人物であるということ。何らか特殊技能持ちかもしくはその近親者。いわば人質として『枷』にさせられているのかそんな感じで。」

「もう一つの可能性は……」

「……唯……」

「そう。コレはずっと思ってたことだ。」

「若いから？ 未来がある子供もしくは若者だから生かしておいてやろう？ そんな慈悲がある訳がない。」

「ましてや黒蛛病。触っただけで不特定多数の人間を罹患させる致死率100パーセントの病。」

「……どう考えたって、安らかに火刑になって頂きたいものだ。私がネモス・ディアナの一般市民だったらそうする。失礼だが、生きるっただけでデメリットしか存在しない。」

「じゃあなんでそんな危険性まで背負いこんでいるのか。」

「考えられるのは。」

「その葉中が、『極東支部』と『女神の森』の同盟に対し何か握っている——という可能性です」

「……」

おかしいとは思っていた。

ネモス・ディアナは確かに——自力で装甲壁を組み上げた凄惨な難民キャンプだ。

だけど、あくまでも難民の群れ。

しかも——多分だけど——私も人の事を言えた立場じゃないが、ネモス・ディアナに住む人の大半は恐らく、偏食因子にすら適合しない。神機使いになる可能性もなく、かといって一部を除き特殊技能を生かせる訳でもない。冷静に考えれば『使えそう』な人間をピックアップして無理やり極東の装甲壁の中にブツ込む。

……これが一番手っ取り早く、安上がりなんじゃないかと私は思う。

……だが、実際極東支部が行っていたのはソレとは真反対の何かだった。

ネモス・ディアナに神機使いを送り、オラクルリソース、物資、資源の提供を行い、その上で……フェンリルに組み込むようなことはせず自治権まで与えている。

まるで私たちがロシア支部でやった様に——だ。

どう考えたって何かある。

現に私たちがだって——あそこに自治権をもぎ取ったのは、『フェンリルに存在がバレたらヤバイ』彼らの身柄を隠す為だ。

その対価として『感応種』の討伐とオラクル資源の提供——あと偶然ロシア支部の戦力強化。

だがそれが使えたのはあの支部がギリギリだったからだ。ロシア支部はとにかく何でもいいから人口が欲しい、資源が欲しいと喘いで

いたからだ。そこにフライアは付け込んだと言っても過言じゃない。ただ極東は違う。そんな極東支部が『同じ条件』でサテライトを保護している……。

「何が出てくるかは分かりませんし、何者であるのかは興味ありませんけど……ソレは確実に、彼らの同盟にとって重要人物であるとは思うんです。だから……！」

「……流石のオレでもそろそろ言いたいことが分かってきたぞ」

「そいつを掻っ攫って行けば!! ネモス・ディアナと極東両方攻撃できる格好の材料になるじゃないですかああああああああ!!」

「ほらなやつぱロクなことじゃなかった!! やっぱロクなことじゃなかったああああ!!」

「行きましょう! 場所はふわふわしてますけど『塔』なんかそうそう残ってないハズです! ネモス・ディアナの住民ならそんな大事な大事なお方のご身体は爆破しようなんか考えないハズです! だから折れてない塔っぽい場所を探していけば……!」

「やめろつつつてんだろ!! そんな人を不幸にすることするんじゃないねーよ!! だったら自分の脱出手段考えろ!」

「このピンチをチャンスに変えてみせるって思考回路ですよチクシヨーがー!」

「お前の場合チャンスはピンチにしてるんだよ馬鹿あ! もう助からうって考えて行動してねえだろ!? 失敗したときに誰が一番攻撃で

きるのかっていう戦犯探しだろソレえ！」

「だって……だってだって……！ ブラッドの皆が助けに来てくれるなんて思わなくて……。 ナナちゃん辺りなんかサパツと切り捨てそうじゃないですかあ!! 隊長にだって迷惑かけまくってるからもう愛想つかされて諦められても何も言えない状況なんです私！」

だ、だから……。もし誰も来てくれなかったらどうしよう、って一生懸命考えて……。馬鹿なりに足りない頭を必死こいて使った結果なんですううう！」

「もう何も信じられなくなった結果なんだな……。慣れないことするなよ……。皆お前のこと心配してたんだぞ……。 (それなりに)」

「え？」

「うんうん、ナナとかシエルとか心配してたぞー。あとジュリウスも。ヒロキさんは発狂してたぞー心配しすぎて発狂したぞー」

「……。え？ 隊長が……。心配してくれてたんですかやったー！」

「……。だから取りあえずは、今は神機を取りに行くこと最優先だなー……。えー？ 極東にパンチをかませる良い案だと思っただけだなー？」

「このクズが」

「おい！ 生きてるな!! 神機使い……。と、そっちは『本部』から来た奴か!」

「ろ、ロミオ先輩コレは！」

「よっしいいぞ……。何が良いつて都合がいい！ そうだー！ オレは

本部から来たんだー！」

ロミオ先輩は喜々として肯定する。

多分コレは……さつきから散々言っている……潜入工員とやらだ！

……本当に居たんですねびつくりです。

「合流できたみたいだな良かった！ 外は今かなりの混乱状態だ！」

「……あ、やっぱり」

「……だよな……」

「何でもシエルターでイキナリ演説が始まったかと思うと人民の殺る気スイツチに火がついてしまった。さらにはどっからか来た神機兵が自爆したせいで爆発すればいいんだと皆が考えてアラガミ爆破をしまくっている。

分かるな、外は危険だ!!」

「……………」

「……………」

何が起こってるんだってばよ……?」

「で、でも私たち神機を取りにいかないと……」

「そ、そうだよ」

「ああ……保管庫だが、先ほど親方さんがトチ狂って自爆したようだ」
「は!?!」

「終わったー」

「まさかこんなことになるなんて……」

「な、な、な……」

「アイツ……余計なことしやがって……」

「もう全部ギルさんのせいですううううう!」

「コレでお前も廃業かあ……」

「ギル? 誰だソレは……アレも君たちの仲間なのか?」

「……不本意ですが」

「共に神機を並べてアラガミという共通の敵を倒しに行く、っていう

のが仲間の定義なら外れているとも言えないこともないよ」
「……………そうか、アレもお前らの仕業か…………」

ん？

あれ…………？

そこで、コイツ見たコトあるなーと思い出した。
そうだ。この人。

…………私を連行しにきた3人の警備のうちの…………一人。

…………何かやたら殺意が高くて、隙をついて散々ぶつ殺そうとしてきた人じゃないですかやだー！

「動くな神機使い！ この女の頭ふっ飛ばされたくなかつたらな!!」

「うわああああああ!! 状況が覆ったー!!」

「やっべ油断した…………」

「助けて先輩ー!!」

ロミオ先輩の表情は見えない。

あるのはただ、機械臭い神機兵のヘルメットだけだった。

「…………おい、そこのアンタ。頭に拳銃突き付けてるとこ悪りいが神機使いがそんな玩具の拳銃で殺せると思ってるんのか?」

「(ハア!! 何言ってるんですか先輩!! この至近弾なら流石に死にますよ!! オラクル細胞がそこまで万能なわけないでしょーがー!!)」

「(黙ってれば分からないし、ハッターだから! でも信じるかもしれ

ないから!」

「……だろうな。テメエらは化けモンだからな……この位で死んでるとは思っていないさ」

そこで何を思ったのか警備兵その3（暫定）は上着を脱いだ。
そこには。

細身でありながらも鍛え上げられた体軀を包む防刃服。

……に、巻きつけられた爆弾が。

「ええええええええええ!?!」

「オウガテイル数体ならぶっ飛ばせる威力を持つてる高性能爆薬だ……これならアンタらだって吹っ飛ばせるだろ!?!」

「せ、先輩コイツ……コイツ……!」

「お、おう……正真正銘の……」

「爆弾魔だああああああ!!」

自爆覚悟とは……恐れ入りました……（絶望）

「考え直せ! 何がお前をそうさせる!?!」

「うるせえオレは神機使いもフェンリルも大嫌いなんだよ!! こんなコトになるから来た時にぶっ殺せってオレが散々言ったのに全員悉く無視しやがって……なら自分でやるまで!! 誰も叶えてくれないなら自分自身の手で……切り拓くまでだって思ったんだよ!!」

「お願いしますせめて撃つて下さい! 多分死ぬ! 即死できる!! 爆殺なんて汚い死に方はやだああああ!」

「勘違いすんなクソ女。今からアンタには古巣に戻ってもらおうさ……ただちよつとこの重たい服を着てもらった状態でな!!」

……助けて、爆弾魔から自爆テロの強要されています。

「無理! 無理無理無理!!」

「うるせえ……何なら死体を送り返そうか？　そんなら駆け寄ってきた仲間も一緒にあの世行き」

「あ、それこそ無理だと思えますよ本当に。……そんな人望ないんで」
「……あー……そう」

一瞬だけチラつと憐れまれた。

……自爆テロ示唆してきた爆弾魔に憐れまれる人生だった。

その時、ロミオ先輩がこつちに向けて……スタングレネードを投げつけてくる。

チカつという閃光。

普段神機とリンクしてから使っていたせいか……うん。直視した目が非常に痛い。

後ろの爆弾魔と一緒にのたうち回るハメになった。

「目がっ、目がああああああ!!」

「あ、ごめん」

自分はヘルメットのせいで全然まぶしくないんだねロミオ先輩……。

爆弾魔が落としたであろう拳銃を先輩の方に蹴る。掴むロミオ先輩。

とかやっている間に爆弾魔がその真価を發揮すべく反対の方の手で握っているスイッチに指を掛けた。

が……結局それは押せなかった。

奴の指は吹き飛んでいた。

……え？　先輩そんなに射撃上手かったですか……？

そして羽交い絞めにされる爆弾魔。

いつの間にか何かもう一人加わっている……。

……いつからそこに居たのか……あれこの人……？

「またしても警備兵……」

暫定警備兵その2。

彼は同僚を縛り上げていた。

「お、お前やはり裏切り者……」

「暴れんなよ……暴れんなよ……!」

「うわちよどこ触ってんだやめ」

「悔い改めて」

「ひっ……」

「ホラホラホラホラホラ」

「……」

「これももうわかんねえな」

「こつちの事情も考えてよ……。これじゃ台無しだあ……」

「ああ……もう……滅茶苦茶だよ……」

「えーつと……お助けスパイ（真）？」

「今度こそ信用していいのか……?」

「君たち! ここは任せ給え!! この爆弾魔は私が……性敗するツ
!!」

目の前に理解に苦しむ光景が展開されていることを半ば察しながらも今度こそスパイ（真）を信じようと思考停止して私は決めた。

多分ロミオ先輩も決めた。

先輩先輩連呼しすぎたのがいけなかったのかな……そうかな……。

「でも神機……」

「心配無用。神機ならこの先を北に向けて200メートル……そう、爆炎を上げているラボにあるハズだから見ればすぐに分かる!!」

「」

「」

爆炎……。

上げちゃってんじゃないですか……。

「神機大丈夫だよね……?」

「……運次第……じゃね……?」

「心配ないさー！ 早く行けばまだ間に合う!! 後の事はこの私に任せ
てくれ!!」

と、爆弾魔をガシガシと拘束しながら声を張り上げる警備兵その
2。

腕は関節をキメており、更には脚で爆弾魔の体を踏みつけている。

結果腕には激痛、腹には鈍痛。

「わ、分かりました！ じゃ、じゃあ後のコトはー!」

「もうどうすればいいんだよ……とりあえず神機！ 終わったら撤退
！ 後の事はコイツが多分何とかしてくれるハズ……! 頼みまし
た!!」

こうして、私たちはもつれあう男×2を置いて……やつと地下を脱
出したのだった。

去り際にこんな感じの声が聞こえてきた。

「お前……やっぱ裏切ってやがったなクソ……!」

「……」

「オレを……そうするつもりだ……」

「……」

「くっ！ 殺すならさっさとやれ！」

「そう急くな。殺しはしない」

「……ふ、ふざけるな！」

「ああ、だがお前に私の正体を知られても困る……」カチャカチャ

「……おい？ な、何をする気だ……? や、やめ……」

「端正な顔立ち、処女雪の如く白い肌……蒼穹の如く澄み渡った青い
目……そして銀糸のような髪……」

「え、ちよ」

「オレは……！ オレは……っ！」

「何してんすか!! やめてくださいよ本当に！」

「お前のことが好きだったんだよ！」

「アーツ!!」

……何があったのかは、見ないでおこう……。



「この先……ですよねー……」

「……うん」

廃墟と化した地上。

それは、数日前に見た曲がりなりにも立ててあった家や建物の姿はすっかりと炭となり果て。

……今も尚、いろんな場所から何かが崩れる音や壊れる音が響くのだった。

ここは、地獄ですか？

思わずそんな問いすら、放ちたくなる程の……惨状が目前には広がっている。

「……行きましょう……か……」

「……おう……」

いままで幾度もアラガミを退けてきた神機使いもビビる。

一番怖いのは人災なのかもしれない……などと思えてきた。

「周囲には爆音を噴き上げる建物……いつ自爆するか分からない市民。」

そもそも顔を見られないように、つて一か所に誘導してそこに閉じ込めて蓋しておくはずだったのに……。

……なんでこんな……！ どうしてこんなッ……！」

「今更ですけどホントすいませんロミオ先輩……。どこにこんな量の爆薬が……」

「きつと『女神の森』の半分は爆薬で出来ている」

「……残り半分は……？」

「キチガイとかじゃね？」

「狂氣的」

「だってここ極東だもん」

極東は地獄……はつきりわかんだね……。

この地獄からどうやって抜け出そうかな……と考えていると。
となりのロミオ先輩がなにやら思案していた。

「……先輩、何か良い案、ありますか？」

ロミオ先輩だつて神機使いと人生の先輩だ。きっと恐らく多分有益かつ実現可能そうな脱出作戦を持っているハズ……！　と思いつつ期待を込めて見つめてみる。

だが、ロミオ先輩の答えは……少し違った。

「……なあ、唯」

「何ですか」

「これ、脱出とあんまり関係ないんだけどさ……お前さつき言つてたじゃん？　薬中がどうのこうのって」

「あ、ちゃんと聞いてたんですね！」

「……おい」

てつきり聞き流されているのかと思っていた。

「あの話の続きだけどさ……。その薬中さんがひよつとしたら『極東支部』と『ネモス・ディアナ』の同盟に関連している可能性がある……ってというのがお前の推理」

「……」

「でもそれ誰も知らなかった訳じゃん？　『本部』の直下組織の『フライア』がソレを知らなかったってコトは……本部が意図的に秘匿している可能性以外を考えると……極東が本部に隠したい情報になるよな？」

「……」

「これから極東に向かう、っていうフライアの動向は本部は掴んでい
る。」

もし本部がアレなら、『ネモス・ディアナ』に注意しろとか探り入れろ、とかそういう指示、あるハズじゃん？　でもそんなもんは来な

かった。じゃあ本部もやっぱ把握してない『何か』があつて……その
ネモス・ディアナに匿われてる

つーことはさ……」

「……」

「いや、それは置いといて」

「え」

「ゴメン話が逸れた。言いたかったのはそうゆうことじゃなくつてさ
……」

「な、ななんですかロミオ先輩……？ 今凄い重要なことを言おう
としていたんじゃないんですか……？」

「……いや、そうじゃなくつて」

「早く言つて下さいよ！」

「……だからそうじゃなくつて!!」

ロミオ先輩の声は震えていた。

多分……私の顔の真っ青になっているハズだ。

……何だろう。

一体何なんだろう、コレは。

潜在意識が語り掛ける——やめておけ、と。

触れるな、と。

「なあ、『女神の森』つて……どっかで……聞いたこと……ない？」

「……」

ゾクツとした。

『え？ アレ？ 何？ ちよつとCPO？ 勝手に通信つなげないでよ〜』

『……こちらピクニックだ。どうしたシルバーバック』

「え？」

「は？」

突如つながるロミオ先輩の無線通信（スピーカーフォンver）
そこから聞こえてくるのは変なコードネームだが……多分隊長と
ナナちゃん。

二人のちよつと戸惑った声が、ほぼ同時に聞こえてくる。

『あれー？ ロミ……じゃなくって、シヨタ粹先輩にも繋がっちゃつて
るの？』

『ああ、無事か？』

「うん……無事だし防水チキンも確保したけどさ……どうしたんだよ
ゴリラ』

嫌な予感がする。
そう。

とてつもない……何か巨大な……嫌な予感が。

『……こちらCPO……。俺じゃない……』

『え?』

『……?』

「……嘘だろ……」

「えっ? ……えっ?」

『俺じゃ……ない……。『船』にも聞いたが今……』

『こ、こちらオペレーター! 聞こえますか!? 全員に通達! 通信
障害が起きています!!』

繰り返します通信障害が起きています! 恐らくは反撃——『乗っ
取り返され』ています!!』

全員音声通信を切——』

という、切羽詰まったっぽいオペレーター……フランさんの声がプ
ツリと切れた。

何だろう。

何だろう、この感じ。

そう……コレは……。

『何か』……来る……!』

『聞いてください、光のエリア』



『皆さん……私には……凄く、凄く、大切な人がいます……』

『その人は……彼は……かつては恵まれた身分に居た人間だったよう

です』

『ですが……不幸な出来事——この世界で、本当にありふれた……でも確かに不幸な出来事によって。幼少の頃にご両親を失ってしまった』

『……そんな小さな男の子は、今——大人になって武器を取っています』

『そう……この世界を蹂躞する敵——『アラガミ』を屠り、人々を守るために』

『今この瞬間も……命を賭けて……戦っています!!』

『私は……私も同じでした。母を失い……自分の中に籠って、いつ嵐は過ぎ去るのか、と……頭を低くして、身を縮こまらせて……怖くて震えているだけの、ただの女の子でした』

『だけど……だけど。皆さん。』

一歩でいい。

一歩だけで、いいんです。……あとで後ずさっても良い、すぐに逃げ出しても良い。

だけど、今——この瞬間だけは……』

『歩き出しましょう。前へ、明日へ。』

怖くても、震えていても——ただ、勇気だけを信じて。

私はあの日……その人から、勇気を——戦う力を、貰いました。

……だから』

『今度は、私が——。私なりの……勇気を、示したいと思います』

『聞いてください——光のエリア』

『お母さんお母さんお母さん……おか、おかあさん……お母さんお母さんおかあさんおかあさんおかあさん……！』

怖いよ……怖いよ助けてお母さんおかあさんおかあさああああん……！』

「ひっ……………」

『あ…………あ…………あ……………！』

余りの事に恐怖で立ちすくむ。

足が……笑う。

泣きたいのに……叫びたいのに……。

声が——でなかった。

私ですら……こんな状態なのに……。

「たい…………ちよう…………？」

…………きつと。

『一体何が……？』

『ナナと副隊長はいつもと大して変わらないが……心配なのは隊長だな』

『SAN値直葬ですか？』

『殴れば治るんじゃないか？』

『脳天直撃弾はどうでしょうか』

『それだ』

『黙れゴリラ！』

『も、もー！ 私たちは真剣に隊長を心配して……』

『もーもー吠えるな黙ってるこのホルスタインが!!』

『ロミオ先輩それは流石に酷い』

『フツ、まるで褒め言葉ですも!!』

『やだシエルちゃんメンタル固い』

『後で説明するから！ 全部説明してやるから今は何もしないでくれ頼むから本当頼むからあ!!』

『もー』

『分かった』

『お母さん……お母さん……お母さん……お母さん……ごめんね……おでんぱん……』

』

『ロミオ先輩！ あの発狂コンビが黙りました！ コレはチャンスです！』

『……』（いや……違う……コレは……！ 嵐の前の……）

ロミオ先輩がブツブツと何かつぶやいている。

きつと一時的な発作が治まり、二人共現世に帰ってきたようだ。

その時、ぶつり、と通信が入る。

どうやらオープンチャンネルになってしまったらしい。

『こ、こちらクレイドル！　こちらクレイドルう！　今ネモス・ディア
ナ外壁第3ブロックで戦闘中……い、今外壁第3ブロックで戦闘中！
結構キツイ……これ聞いている奴が居たらだれでもいい！　誰
か来てく……』

『あ』

『も』

『あ』

「……やめろ……やめろよ……？　絶対行くなよ……？　絶対だぞ
……？」

『あれもう来たあ!?!』

『あ』

『……これは』

「終わった」

「あなた達はこんな状況で何をやってるんですかあ！ 馬鹿なの!? あんたら馬鹿あ!?!」

「……」

『と、言いましたも』

『状況が全然分からん。……なんであのピクニックはピクニックして
いるんだ？ 脳が』

『ナナさんも心配です。そもそもネモス・ディアナは殆ど無法地帯で
すから、もう——何が起こってもいいのでは?』

『狂気の沙汰程面白い』

「コラあ！ 何観戦気分やってんですかアホお！ ロミオ先輩からも
何か言っつけてください！ 先輩からも！」

……ロミオ先輩?」

あれ。なんで静かなのこの人。

「……先輩……? 大丈夫で……」

「……」

「いっ」

「ゴフっ……!!」

「ひっ……!?!」

その光景は——戦慄を覚えた。

ヘルメットはいつもと変わらぬゴリラフェイスを装っている。

だが、問題はその下……顎から首にかかるまでの場所だ。

男にしては細いロミオ先輩の首筋からゴリラの顎のラインにかけ
て——赤い雫がぼたぼたと、零れている。

ロミオ先輩が——咳き込む度に。

「ロミオ先輩ああああああああああああい!!」

「唯……どうしよう……オレ……オレ……! ……血が……止まらな
いんだ……!」

『ロミオさん、バイタル危険です!! 急ぎ回復を!!』

『どうしたロミオ!? 負傷か!?』

『いえギル……ここにはアラガミはいません……と、なると……落石
やガラス片などの建築物の落下による負傷の可能性が高いかと思わ
れます!』

『オペレーター! ロミオの怪我の箇所は!』

『腹部に激しい損傷が!』

『……まさか……』

『おそらく……この血の減り方は……!』

『『鉄骨だ!』』

「……ってそんな訳あるかあああ!!」

「ガハツ………ゼエゼエ……」

「あ……ああ先輩! ロミオ先輩しっかりしてください……!
ちよつとコレ取りますね」

「唯……ゴボゴボゴボ……」

自分の血で咽ている。

ゴツドイーターじゃなかったら死んだ。

「唯……ごめんな……」

「ロミオ先輩! ロミオ先輩! 目を開けて下さい!!」

(ロミオ先輩が) 一人欠けたら……! ツツコミが足りないんだ……!

だから……! 頼む……!」

「ごめんな……オレ……(の胃)弱くて……ゴメンな……」

「逝くなあああああああ!!」

『いや、死なねーだろ』

『流石に言い過ぎですも』

『茶番も大概にしろよそんなコトしてる暇ねえだろうが』

『全くですも』

「黙れ! 貴様(等)にロミオ先輩が救えるか!!」

「やめてマジやめてそんなボケもうオレ捌ききる体力ない」

ロミオ先輩は焦点の合わない絶望しきった顔をしていた。
生きろ、そなたは美しい。

『おい……見ろ……こんな所に……』

『も』

『カピバラが居るぞ!』

「何で!? どっから湧いた!?!」

『シエル……』

『なんにもいないですも……なんにもいないったら!』

『シエル……どきなさい』

『出て来ちやダメですも!』

『むきゅー』

『渡しなさいシエル。人と鼠とは同じ世界には住めない』

『お願い! 殺さないで! ちや、ちやんとお世話しますも……!』

「じ、自由すぎる……! ベ●ベツトカーの中自由すぎるっ……!」

「ガハアアツ!」

「先輩ー! 先輩いいいいいい!!」



ロミオ先輩が意識を取り戻した数分後。

先輩はまだ体がキツイらしく、お腹（ぶつちやけ胃）のあたりを抑えて何とか歩いているような状況だった。

口元は大量に吐血した痛々しい跡が残っている。

もうロミオ先輩の体力は限界だ。

こうなったらいち早く……あの半分燃えている建物にぶち当たっていくしかない!!

……と、私たちが決意を固めていたその時。

崩壊する武器庫の中から一人の人間が飛び出してきた。

男。

体格的には成人型。多分、若い。

重傷。

ロミオ先輩に負けない位、全身が血に染まっている。

そして腕には——神機を収納するのに使われているアタツシユケース。

「……………」

よく見るとその青年の顔に見覚えがあることを思い出した。

確か前……この崩壊都市に来た時……。

いや。

それより少し前。

「あっ……！」

思い出した。

あの顔、あのデコ……。

そして……あの眉毛……！

名前も聞かなかつたけれど、
それは確かに知った人。

phase 49 おいでよ、女神の森 final

「くっ……はあっ……はあっ……!」

「戦場で、少女は苦悶の声を上げていた。」

「うっ……は、はやく……しなきや……!」

重たい足を引き摺って行く。

もう少し。

もう少し。

あと、一步。

あと……一步だけ。

重たい体に鞭を打ちながら、血を流している心を励ましながら。

一歩ずつ、着実にと進んでいく。

「……がんば……らなきや……!」

皆頑張ってるんだから。

……私も、やらなきや。

……それで、皆で……。

……帰るんだ。

口の中で、自分にしか聞こえない声で、反芻しながら。一歩一歩確実に、と進んでいく。

目指す先は——歌声の聞こえてくる場所。

避難場所の……スピーカー。

「お母さん……私……頑張るからね……!」

少女——香月ナナは、覚悟を決めた様にきゅつと一度だけ目を閉じ……。

……再び、世界をその瞳に映す。

「みんなと一緒に……帰るんだから……っ!!」

あの、何気ない……日常へ。

ナナは大きな神機の銃口を真上に向けた。

取りつけられているのはショットガン——至近弾で大きな威力を
発揮する型の銃。

だからこそ、遠距離攻撃は叶わなかった。

だが、もう遠距離での狙撃を行える仲間はいない。

だから——避難経路の途中に陣取っていた自分が往くべきなのだ
と判断した結果だった。

聞こえてくる歌声から、必死に意識を逸らす。

震えていた。

怯えていた。

だが……逃げなかった。

コレが、香月ナナの闘いなのだ——強く、強く心に刻んでいたか
ら。

「うああああああああああああああああああああ!!」

雄たけびを上げながらナナは引き金を引き絞る。

装填されているのは、任務前にシエルから渡された必殺のバレット。

息も止まるような——一瞬、されど永遠のような時間が過ぎ去る。

刹那。

熱によって溶解した支柱が折れる。

その真上——スピーカー本体は無残にも砕け散っていた。

光と熱、そして物体エネルギーと化した必殺BB弾が——荒ぶる神の魂の如く、スピーカーを引き裂き、焼き払い、その灰燼すらも残さず捕食した。

バックブラストが地面に巨大な空洞を穿つ。

数秒後。

砂塵が吹き抜け、開いた光景には……。

もはやスピーカーは存在しなかった。

「やった……！ やったよ……皆……！ 私……できたよ……！」

少女はそう呟くと。

さっさと神機を回収し、走っていった。



「あなたは……！」

「……アンタ……神機使い……」
忘れるものか。

思い出したコイツ……そう、コイツは……！

上から落ちた私を助けてくれて、神機を回収してくれて。

……で、その後有無も言わさずさっさと私をネモス・ディアナ警備兵に引き渡しやがり。

神機を持つてってトズラかましやがった野郎だ。

恩と怨嗟が50対50という超微妙な位置。

「あの時の腐れ眉毛!!」

「……」

青年は頭から血を流しつつ、全く表情を変えずに。
持っていたアタツシケースを上げ

そこで燃え盛っている炎の中にと、力の限り投げ込もうとした。

「あ……ああ、これはこれは！ 尊い眉毛の命の恩人様ですねお久しぶりです、再会出来て恐悦至極に存じます恩人様に於かれましてはご健勝の程お慶び申し上げます！」

「……」

青年は神機を炎の中に投げ入れるのを辞めたようだ。

……超短気じゃんこの人超怖い。心狭い。

マジ怖い。

「……誰？ コイツ？」

「えっと……自称沼ボチャした私を助けてくれた……？ 人っぽいです」

「……分かった」

ロミオ先輩は痛む胃を抑えつつ警戒したような面で何となく胡散臭げなものを見るような視線。

そこで、腐れ眉毛男……もとい命の恩人は膝をつく。足元にじんわりと血の水たまりが形成された。

ああ、キツそうこの人……と、いう訳で近くにあるあまり熱くなさそうな石にそつと寄りかからせ……ここは同性であるロミオ先輩が傷の具合を確かめ、軽い消毒と止血を施す。

えつと……回復錠って、一般人にも効くんだっけ……？

「唯……」

「何ですか」

くいつくいつ、とロミオ先輩。

よく見るとハンドサインを出していることに気付いた。

以下、ハンドサイン会話。

《《コイツお前に何したの？》》

《《だから、沼、落ちた、助けた、この人》》（不慣れなので単語の羅列）

《《……最初？》》

《《最初、ここ……爆心地……来る、前》》

《《コイツ、お前、助けた……のは分かった。》》

……で？　なんで神機とお前は別個になってんだよ？》

《《全部コイツのせい》》

《《……つまりこの眉毛がお前を警察（？）に突き出して神機持つてトンスラしやがった野郎？》》

《《そう、それ》》

《《……》》

《《傷、深い、多分。回復錠、渡す、治す、ほうがいい？》》

《《……いや、いいよ》》

《《フア!?》》

《《勿体ないじゃん使わないよ。神機泥棒に慈悲なんかいらぬ》》

《《この腐れ外道ニツトがあ!! あんたはそれでも人間かあ!! 大賛》》

成、です!!」

《《なんで悪態付くときだけ無駄に上達してんだよ……》》

「……で、恩人デコ助野郎様……。あなたは何しにここに来たんですか」

「……」

恩人様は何も言わない。

だが、その眼光はかなり鋭かった。

……まるで何かを値踏みするような視線が、そこにはあった。

だが、今更何をと思う。

なぜなら……もう彼の中でとっくに答えは出ているハズなのだ。

「……ソレを、私に渡すつもり……だったんでしょう？」

「……ああ、そうだ」

全く悪びれもせずに肯定。

そこに見透かされたことへの動揺や驚きはない。また、否定もしていない。

……つまりは予測の範囲内だった、という事だろう。

最初あった時からちよつと思っていたことだけだ……。……。

……この人、かなり頭が切れる。

だから余計なことは言わないでおこうーと本当に本気でそう思った。

今までの自分の言動とかをざつと確認してみる。

……大丈夫、問題ない。

「ここに來たつてことは、私の居場所を知っていた。で、神機をわざわざ『一般人』でも持てるようなアタッシュケース型にしているということは運搬することを予測していた。

……もしあなたが、神機を装甲壁か何かの一部にするつもりなら

……そんな形にはしないハズでしょう。

それか、極東支部に引き渡すつもりだった……という可能性もありますけど」

「……否定はしない」

嫌な言い方だ。

さつきから分かるようにこの人の発言には……一切『嘘』は入っていない。

だが、口数が少ない。

ともかくこの言い方からすると……最悪の場合。

たとえば私が神機を使えるような状態じゃなかった場合とか、そもそも生きていなかった場合とかも考えていた——という受け取り方も出来る。

つか絶対考えてやがるなコイツなら。

「……ネモス・ディアナの襲撃が起った時、あなたはこう考えたんだ。

『極東の神機使いだけで足りるのか』——って。

だけど、そんなときにちょうどいいのが一人居る——って。どうせなら『使ってやろう』と思った。それで神機を私に渡そうと……持つてきた——違いますか?」

「……ああ」

で、予想外の誤爆に巻き込まれて傷だらけになっている——ということだろう。

逆に、そこまでしてでも私を『神機使い』として『戦力』として見ていた……ともいえる。

……今までそこまで期待されたことなんかないからちよつと嬉しい。

ここでロミオ先輩を見る。

目が合った。

そして、首を縦に振る——信用してもいい、という意志表示。

そう、もしこの仮説が正しいのならば。

恩人様は、私に神機を運んできた。

神機を使ってアラガミと戦うことを期待している。

つまりゴツドイーターとして『使う』ことが目的。

この2点から予測すると。

恐らくは……多分……。

このアタツシユケースに爆弾は仕掛けられていないハズ!!

私だつてあんまり頭は良くないけれど学習するのだ……そう……
学習の学習を。

さっきの爆弾魔の件もあって、この街の人間は基本信用できないと
いうことをようやく悟った。

認めましょう……極東は、地獄。

コイツら地獄の住人悪鬼羅刹の類。

散々嵌められたんだから当然警戒するに決まっている——爆弾と
いう存在そのものに。

ここまで嫌われてるとは思わなかったよ!!

「……じゃ、じゃあ開けますよ……? 大丈夫だよ? だ、大丈夫だよね!」

「……」

「何か言つてよ!!」

「いいぞー唯ー! 開けなよー!」

「ロミオ先輩なんでそんな遠くから!」

「念のために遮蔽物の影に隠れることによつて直撃を免れようかと思
います」

「一緒に死んでくれないんですか!」

「当たり前だよ!! こんな所で死んでたまるか!」

「薄情者ー!ー!ー!ー!!」

死んだらロミオ先輩を呪おう。

そう決意を込めながら——開く。

カチリ、という小気味いい音。

ソレは爆薬のスイッチが入った音ではなく——。

アタツシケースに収納されていた神機が、展開される音だった。

久しぶりの相棒の姿を見て……思わず安堵感がこみあげる。

全く変わらない様に見えたクロガネは——全体的にちよつと変な
臭いするしヌルつとしていたけれど、緊張感から解放された今そんな
ことは些細な問題のように思えた。

「良かったあ……! 生きてる!! 私……まだ生きてる……!」

その時——ネモス・ディアナの空。

爆炎と煤に塗れ、黒く塗りつぶされた空から。

一筋の光が射す。

「……………あ……………」

見えたのは、青い空。

どこまでも高く——澄み切った、蒼穹。

その美しさに、ただただ息をのんで……………呆然とした。

どうして……………ずっと……………忘れていたんだろう……………。

世界は。

こんなにも。

……………美しい。

「気は済んだか」

「気でも狂ったか」

「……………世界は美しい。……………けど住んでいる人間はド汚ねえ!!」

ちよつと生きてることが嬉しかったただけなんだからね、勘違いしないでよね。

「武器ゲット！ ではこれから撤収！」

「良かったセーフ、危なかったクソ危なかった」

「コレ持って帰らないと処分される所でした！ 本当に、本当にありがとうございました！」

「心配すんな。すぐには死なないよ唯はさ」（人体実験の検体はいつだって足りてないんだからさ）

「実にエゲツない」

そそくさと退散しようとした私たちに向かって、眉毛男は声をかける。

「……待て」

「……」

「……」

……やっぱりな。

「アンタ達に……頼みたいことがある」

「……」

「……」

嫌な予感嫌な予感嫌な予感嫌な予感……。

青年は頭から血を流し、ハアハアと肩で息をつく。

やはり赤く染まった腹部を抑えながら、痛みをこらえた表情で……
それでも意志の強そうな眼だけはまっすぐに私たちを見つめた。

やがて、苦痛の滲んだ口調で縋るように言葉が発せられる。

「……頼む。……ここを……救ってくれ。……皆を……守ってくれ

……」

「いやもう遅すぎるでしょ何もかも」

「気持ちには分かるケドもうボロボロだから諦めよう」
「……と思うかもしれないけど、そうでもない」

下手に十思考な奴だ。

そのまま若干俯いた青年はやがて、ポツリポツリと語り始めた。

「……分かってる……虫の良すぎる話だって……分かってる。

……だけど、聞いてくれ……。

……皆、神機使いのことも……フェンリルのことも……心の底
だと、納得している訳がないんだ」

「でしようね」

「まあ、うん。そうだろうな」

見りや分かるわその位。

「だけど……もう……それしかない。

……神機兵だって……本当は、ただ……継りたいだけなんだ」

「は？」

「……そう、だろうな」

「極東支部も……神機使いも……いつ見限られるかなんか……分からない。神機兵も……結局……来なかつた……。皆……忘れた振りして……本当は……覚えてるんだ。」

だから本当は……怖くて怖くて堪らないんだ。

……不安で不安で仕方がないんだ。

だけど、怯えてばかりじゃ生きていけない。……だから、皆……恐怖を抱えながら、平気って顔しながら……必死になって、生きてる」

「え？ え？ ん？」

「……そう、だよな……。うん……分かるよ。」

……いつ見捨てられるか分かんないって……本当怖いんだよな……」

「だから……げほっ……。」

……だから……頼む……！ この街を……皆を……守ってく……」

「え？ やだ何でこの人神機兵のこと知ってるの」

「え？」

「……あれ？」

「(白目)」

「眉毛！ しっかりしろ眉毛！ ごめんな……コイツずっと地下にいたから情報が遅れてるんだ！」

「ちよつと私が悪いんですか!？」

「瀕死の奴が必死こいて願いを託し！ 希望を繋ごうとしてるんだから！ トドメ刺すな馬鹿あ！」

「え、ええー？ だ、だってロミオ先輩そんなこと一言もいつてな……」

「……眉毛死ぬなああああああ！」

「誤魔化すんですか!？ うわ最低だこの人！」

「俺……頑張ったんだ……もう……ゴールしても……いい………よな……?？」

「ぞっくり言うとか昔フライアから神機兵を送ろうと思ったけどやっぱ無理だったっぽい」

「マジで……? 今明かされるフライアの超不祥事発覚」

「本当にな、オレ全然知らなかったよ」

「……じゃあ、いつそのこともうココ潰しちゃいません？ いい機会だし総統とかいう一番偉い人爆殺すればフライアの不祥事は圧殺でき……」

「だからヤメロつつってんだろお!!」

「……………冗談です。ジョークジョーク、H A H A H A …… H A H A !」

「……………」

「じよ冗談ですよ恩人様！ わ、私たちが総統を爆破するわけないじゃないですかもー！ も。もー！」

「今更取り繕っても遅せえよワザトラシイ」

「(あの爆弾魔忘れたんですか!？ 敵って認識された瞬間にコイツが自爆しかねない可能性が微レ存)」

「(さつき確認したけど爆弾は巻いてない。手榴弾の可能性もあるが

ピンを抜くまでにぶっ殺せば問題ない」

「(ピン抜くのそんな時間あるわけないでしょう)」

「(この傷だし、大分失血してるから、何かするつもりなら確実に予備動作が見えるから大丈夫。死後自動爆発する系ならサツサと逃げて、神機のシールド展開すりゃ平気だつて)」

す、すごいロミオ先輩……私なんかより、ずっとずっと警戒してるし、対策も立てられている……！」

どうやら、ケガ見て血止めしたとき何か必要以上にベタベタしてるなーと思ってたけど、アレ傷見てた訳じゃなかったんだね。爆弾巻いてないかどうか見ていただけだったんだね。

……そして先輩。爆風除けできるのって、最重量級のタワーシールド所持の貴方だけですよね？ 私の軽いバツクラーじや無理ですよ
ね？

とか思ったけど……そこ突っ込んだら今度こそロミオ先輩に殺されそうだったから黙っていた。

「……それ……だけじゃない……アンタ達に倒して貰いたいの
……」

「ん？」

「……？」

『感応種』——だ」

「……」

「……」

『あつ……や、やだ……先輩……先輩……開けてよ……目を……開けてよお……!』

『……………』(キュピーン)

『や、やめて……………! 来ないで……………! 来ないでえ……………!! 来ないでよ!! やだつ、嫌嫌嫌……………!』

『(無言の歩行)』

『誰かあ……………! 助けて……………! 助けてよ……………! ……ママあ……………! こ、怖いよ……………怖いよ……………!』

お願い……………やめて……………助けて……………死にたくない……………死にたくないよ……………! きゃあああああつ! うわらば』

「……………なあ、シエル」

「ギル! 大変です!!」

「……………何だ、どうした?」

「この子……………この子……………! 女の子です!!」

「マジでか」

「コレはとり急ぎ一目で見分けるようにしなければなりません……………。何かいい方法は……………も? 何ですかも?」

や、やだ……………も、も……………くすぐったいですが! でも女の子なら問題ありませんとも! もし性別♂がそんな所触ったら……………何ですもー? 首のコレが珍しいのですか……………? そ、そんなにペロペロしないで下さいも……………。……………は! ヒラメいた!!」

「なんだ」

「リボンをつけてあげれば解決です!!」

「コレをこうしてくると回せば……………完璧です!!」

「可愛いな」

「可愛いです……！ か、可愛いですつ……！ ああもう食べちゃいたいですもー!!」

「じゃ捕食」

「プレデターシエルと化しても……悔いのない人生でした!! むしやあー!」

「きゅっきゅっきゅー」

「ふわあああ! 柔らかい!! ぷにぷにですも!!」

「ところでシエル」

「何でしょう」

「……今……ジュリウスが順調に虐殺をして回っている訳だが」
「はい」

「……ひとつ聞きたい」

「……はい」

「お前、この『クレイドル』についてどう見る?」

「……クレイドル……『ゆりかご』でしょうか……」

「……さっきの無線通信、聞こえたよな? あいつらはこう言っていた『こちらクレイドル』だ。」

「普通は部隊名なんか付かないんだ」

「も？ ……ですが、私たちは普通に『こちらブラッド』など言いますか？ またロシア支部の彼らにも『スネグーラチカ』という部隊名が付いていたハズですが」

「……ああ、その2部隊には共通項があるだろう？」

「……………」『特殊部隊』……………もしくは『特別行動を行う部隊』……………という、ことですか？」

「そうだ。ブラッドは第三世代神機使いの育成及び臨床実験という実験部隊としての特殊性。スネグーラチカは広域作戦運用時の仲間の支援という特殊性……。即ち両部隊ともいわば神機使いとしてはイレギュラーな存在である……………ことは分かっているな？」

「はい」

「その時点でこの『クレイドル』もまた特殊な存在……………極東の特殊部隊であると考えられる。」

そして、もう一つの疑問点。コイツらはコールサインを使わなかった」

「……………」

「コールサインは『フリップ化』するために——オペレーターや司令官、及び現場の戦闘員同士の通信に齟齬が発生しないためにつけられている。」

特にブラッドまさにソレだ。また、他部隊と合同作戦を行う場合——『コイツはどこ誰か』を一発で見分ける手段としても有効だ。ソレを使っていないとすれば他部隊との合同作戦を行うことが無い部隊、もしくは通信や指揮系統において混乱が生じることがない……………と考えられるだろう。

ただ、コレに関しては100パーセントとは言い切れない。

どこでもやっていることだが特に極東地域では部隊編成がカツチリと型に嵌つちやいならしい。

神機の貸し借りが多すぎてイチイチコールサイン呼びしている方が余計混乱しやすいという可能性がある。だからコレを言い切ることは出来ない」

「……ギル。先ほどから聞いていて思ったのですが。」

「……極東支部に関して随分とお詳しいですね？」

「……」

「確かに貴方はブラッドの中で、隊長に次いで実地経験があります。また、神機使いの世界の知識については隊長すらも凌駕する。」

「今のが一般論だ、と言われれば反論はできませんが……極東支部の情報に随分と精通しているように私には見えませんでした。」

「……どうなのでしょう？」

「……一般論も含めた俺の憶測だ。あくまで仮説、予想の域の話ではない」

「それは……嘘ですね」

「……!？」

「私の『知覚』能力を甘く見てもらっては困ります。」

「貴方の些細な動揺など、よく『観れば』分かります。」

「……ギル、貴方が隠していることなど……私にはお見通しです！」

「……じゃあ何だ？ 俺が……何か……隠している、とでも？」

「ええ、そうでしょうとも」

「……」

「ギル……貴方は……かねてより世界最強と謳われる『極東支部』に強い強い関心を持っていた!! そうですね!?!?」

「……」

「ええそうでしょうとも！ そうですも！ きつと夜な夜なコツソリ
端末で極東支部の情報を漁りに漁って憧れを抱いていたのですも！
こうすれば極東行きになった時のフライアで、貴方が声高に極東行
きに賛成していた理由も得心がつかますも!!
ギルは極東大好きゴリラだったんですも!!」

「……………」

「…………もー？ ……ま、間違えてしまったでしょうか…………私…………？」

「…………ば、バレちゃったかーしやうがないーさすがシエルだすげえ
じゃねえか（棒）」

「も、もー！ やりました!! 当たりました!! 大丈夫です、ご心配な
く！ このコトがバレたら可哀想なのでコレは私とギルだけの秘密
にしておいて差し上げますとも！」

「ああ…………助かる、ありがとう」

「礼には及びませんも！
も。」

「ナナさんを捕捉しました。至急回収に向かいますよう！」

「了解」

「…………あ…………ナナさん…………もしかして…………！」

「この子を食べちゃったりはしませんよね!？」

「ナナならやりかねん」

「もー！ どうしましょう……は、早く隠さないと……！ そ、そうだ
後ろのトランクに……！」

「ごめんなさい……ちよつと狭いけど我慢してくださいね？ 後で
必ず助けてあげますから……！」

「じゃ行くぞ」



「か、感応種……」
「……」

寒くないのに、寒気が奔る。

この人……なんでそんな言葉知ってるの……？ 極東の常識なの

!?! 何なの!?!

……とりあえずここで取るべき行動は。

「か、かんのーしゅって何だろー？ ロミオ先輩知ってますー？」《話、合わす、先輩と私》

「いや知らねえな」《それは流石に無理あるよ……》

「あははは……」

「……嘘だな」

「《バレタ》」

「《だから言ったじゃん！ だから言ったじゃん!!》」

「……アンタ達が何者なのかは聞かない。だが……極東の神機使いじゃないのは……確かだ。

多分別の支部から来た神機使い」

「……」

「……」

「アンタを助けに来た仲間の神機を見れば分かる。……二人共新型だ。そんなのは極東だって珍しい」

「……」

「……」

「そして腕輪が違う……神機使いの腕輪は皆赤い。他の場所のは知らないが……極東の神機使いは皆、赤い」

「……」

「……」

「だがここまでなら、アンタ達がただの神機使いでこれから極東に派遣される途中に運が悪かった……とも取れる。だが、最初に会った時……アンタは言った。

『私の神機はよく機能不全に陥るものだ』と」

「……………」
「……………」

言った。

言ったよ。

必殺のあることないことゴツチャ混ぜで適当なことガンガン言つて相手を混乱させよう戦法で口走つたよそれっぽいことを。

「普通の神機使いは『機能不全』なんて言葉は使わない、大抵は整備不良か、ジャムつた、つて言う。

そもそも機能不全と言う言葉自体が最近使われ始めたものだ。

……『感応種』が現れてから」

思い出したのは、ロシア支部で共闘したオリガちゃんだった。

あの子は確か言つてた……イエン・ツイーの感応波を当てられて、彼女の神機が動かなくなった時だった。

『神機なんて整備不良や物資不足で！ 皆！ 1回2回動かなくなつたことありますつてば！』

……………。

あ。

『機能不全』つて言葉を使うのは俺が今まで見てきた限りだと『感応種』と戦つたことがある奴だけだ……極東支部じゃ原則、対感応種には曹長格以上の神機使いが4人か3人で当たるようになってる。

でもソレだけだとまだ弱い。アンタが……実はベテランの神機使いで、何年も別の支部で戦つてきた優秀な人材だから引き抜かれ

た、って可能性が捨てきれない。
だから聞いた」

「……………」

この人と最初に会った——装甲車の中での会話を思い出す。
コイツ言ってた。

神機使いになって、どれくらいだ？

『ゴツドイーター』になって、どれくらい経つ？

……その質問の意図が私には分からなかった。

ただ、『戦力』として判断されるかどうか……を見極める為だけのものだと……思っていた。

だから……。

正直に……答えた……。

「神機使いとしてやっと新兵を脱した程度の奴が『機能不全』という言葉を知っている——つまりは、感応種と交戦経験がある。更には極東とは別の場所から来た極東支部とは違う腕輪を嵌めている。そしてどう見ても新品なのに、やたら高品質な神機。それも『新型』……この3点から」

「……………」

「……………」

「アンタ達は対感応種の為に結成された神機使い——もしくは、ソレに近いものだ」

こ、コイツ……。

SUGEEEEEEEEEE!?

「(ば、バレたー!? な、なんで!? 忍者なの!? アイエエエエ!?)」
「(rrrrrr冷静になれ……! なんだコイツ……この推理力凄すぎるわ)」

「(たったアレだけの情報量から正解に辿り着くとか)」

「(だから頭の良い奴と会話する時には気を付けろとアレ程。だがコイツの直感マジ半端ない……本物だぞ)」

「(どうしよう先輩……)」

「(コレ爆弾警戒してたオレ達馬鹿じゃね? こんな頭の回る奴が自爆とか爆破とか安易な手に頼る訳ないんだよなあ……)」

「(激しく同意)」

「(まあ取りあえずさ……)」

頼んます、ホント頼んますよロミオ先輩……!

「それで? アンタはオレ達に何をしたいんだ?」

「……」

「推理は分かった。……だけど、それでオレ達に何を要求するんだ?」

仮にオレとコイツが……その対『感応種』用のゴッドイーターだと
して、お前は何をしてほしい？」

とりあえず目的を聞き出す先輩。

ここから取引かな……？

「……アンタ達がココに来たコトを誰にも言わない。証拠も消す」

「……いや、別に？ オレ達実は極東支部に行くことになってるんだ
なコレが。……だから、別にお前に存在がバレたところで痛手はない
よ？」

……と言うか近いうちにバレることだし」

強がつてる……。

ロミオ先輩超強がつてる！

神機を持つ手がガツタガタに震えている……！

眉毛青年は、その綺麗な緑色の目を——すっと細めた。
表情筋に従い太い眉毛が険しく下がる。

「……ハツタリだな」

「……」

コイツ……心理学の心得でもあるのか……？

「……極東支部に行くってところは本当だ。だけど、少なくとも『今こ
の瞬間』に此処に居ることは隠しておきたいんだろ？ ……違うか
？」

「……」

「……」

大正解だよ畜生が。

「……悪い、言い方がキツくなった……。俺からの要求は——願いは、

たった一つだ。

「この周辺に一匹いる感応種を……倒してほしい」

「……そいつはどんな奴？」

「デカイ。……2階建ての建物の天井くらい……そして早い。あと

……口がデカイ」

「……描けるか？」

青年は近くの石ころを拾って地面に絵を描いてみる。

……クソの役にも立たなかった。

絵心ない。

本当。

絵心ねえなコイツ!!

小さな子供が見たら泣き出すレベル。

ここが喰神教教団ならすぐに司教様が飛んできて悪魔祓いをなさるレベル。

「神機使いも歯が立たない……もう、何人もやられてる……」

……俺の……家族も……」

「……」

「……」

家族も、と口にした時、どちらかと言えば平坦な口調で話していたハズのその声が……薄く滲んだ。

同情はする。

——同情、は。

「だから……頼む……！」

「こんな状況……覆してくれ!!」

私たちが言うべき言葉は——ひとつ、だった。
もう、心は——決まっていた。

「善処します」

「考えます」

「現在の装備では討伐は大変困難だと判断したので、また今度」

つまりイイエです！

だってそうだもん。

私たちがそもそも極東に来た理由というのはグレム局長が言うには神機兵のデータを取るためということと、ブラッドの部隊運用としての実績作り、それだけだ。同情はする、可哀想だとは思う。けどソレだからって言って助けてやろうという意思はあるけどそんなもん嫌だわ。私たちとしては一刻も早くここで神機兵データ集めて部隊実績作って退散したいというのが本音。じゃなきゃこんなアラガミ動物園なんか誰が来ると思っているのか。好き好んでこんな場

所来る奴要る訳ねえだろ冗談じゃない。

第一感応種だって極東支部対処できてるじゃん？ 黒蛛病だってヤバいけど何とか対策できてるじゃん？

私たちが行かなきゃいけないのは本当に感応種がどうにもならない場所とか、黒蛛病患者を壁の外にポイっとしたり、アラガミに喰わせることで感染源を絶つていう方法しか取れないような人達の居る場所じゃないかと思う。確かに極東は大変だとは理解している。

でも、何とかなっているからわざわざ強化する必要もないでしょう。

それにネモス・ディアナだって装甲壁自前で作れる集落だし、紛いなりにも『あの女』の恩恵もそこそこ受けているハズだろうし。

何で『ブラッド』が『フライア』という動く支部に所属するのか―― 私たちは、その意味をようやく分かりかけてきたのに。

「……………」

「分かって下さい。貴方のこの変な呪いの絵だけだと明らかに情報不足です、コレで戦おうなんて手の込んだ自殺はフェンリルでは推奨されていません」

「……………ついでに、オレたちには仲間も居る。この2人だけじゃ目に見えて戦力不足。だから一旦ここは退避する。」

……………出来る限り討伐できるようにはするよ。約束する」

ロミオ先輩は目を合わせていなかった。
守る気ない約束ですね分かりました。

「(スマン、唯。ここまでだ！ オレ頑張ったけど……………オレにできるのはここまでだ！)」

「(よ、よくやったんじゃないですか？ 何かこの人も納得したみたいなの顔になってますし)」

「(むしろコレは仕事をやり遂げた男の顔をしていると思う)」

「(あれ？ ……そう言えばこの人超重症……………!? これひよつとしてこのまま逝っちゃおう？ 逝くの？ 逝っちゃおうの？ 何か表情安ら

かなんですけど!?!」

「(……コレで……満足したぜ……みたいな?)」

「(じゃこのまま放置すれば昇天?)」

「(だから何でそうなるかな……唯の心荒んでるな)」

「(数日間のブラック労働は私を変えてしまいました)」

「(あつそ……でも目の前で死なれたら寝覚めが悪いし……ここで放置するくらいならいつそ楽に……。」

……楽……に……ん? アレ? あ、そうだ……『慈悲の一撃』……)」

「(と、トドメいっちゃう? トドメ刺す? ロミオ先輩遂に人殺し!?)」

「お、おい! しつかりしろよ!! ダメだよ寝ちやダメだって!! 早く!! コレを口に入れるんだ!!」

「ろ、ロミオ先輩それ」

「お前こんな場所で死んでいいのかよ!? お前は……お前は……こんな所で終わっていい人間じゃないだろ!?! だから食えつて!! 食つて……生きろよ!! お前は——お前は——!」

誰かが託した命なんだろ!?!」

「……」

「だからしつかり生きろ! 簡単に諦めんなよ! 足掻いて、足掻いて足掻いて必死になって……そんなもって生きなきゃいけないだ!! 誰かに繋いでもらった命なら……簡単に捨てちゃいけないんだ! 満足して死ぬな! 死にたくないって、絶対死ねないって……そうやって生きるために、もがいてみせろよこの大馬鹿野郎!!」

「……」

「自分の生き死にぐらい——覆せ!!」

「……お、うおおおおお!」

な、流れが……!

「あああああああ！ い、行っちゃったあああああああ！」
「……これでいいのだ」

「良くない!! 何してんだよ信じてたのに！ 信じてたのに!!」
「面白ければよかろうなのだ」

「重傷のまま何も解決してないのに走ってっちゃいましたよあの人!!」
「しかもあの炎の中に!!」

「火葬の手間が省けるんじゃないね」

「ダイナミック燃身自殺だー！ー！ こんな……こんな死に方……
あんまりだよ……！ 悪い人じゃなかったのに……！ めっちゃ怖
かったけど悪い人じゃなかったのに……！」

「……ま、ナナ曰く『人をコロコロするような物質』は入ってないっほ
いから大丈夫じゃない？ いままで発狂したヤツは何人も見てきた
けど死んだ奴は1人も居ないじゃん？ 平気だよ多分。」

あと何か生存本能全開になるっばいからしばらくの間生きてられ
るだろ、あんな感じで。それまでにどっかで処置して貰えればワン
チャンあるっばい

「すごくか細い彼の生存率」

「運が良ければ隙を突いて生き延びろ」

「ああやっぱり運次第……。じゃあ先輩、一緒に祈りましょう……。そ
の幸運を……」

「Agnus Dei, qui tollis peccata

mundi: (訳: 神の子羊、この世の罪を取り除き給う主よ)」

「dona ei requiem. (訳: 彼に安息をお与えくださ
い)」

「Agnus Dei, qui tollis peccata

mundi: (訳: 神の子羊、この世の罪を取り除き給う主よ)」

「dona ei requiem semper in nomine. (訳:

彼に永久の安息をお与えください」

「南無三。じゃあ行きましょう!!」

「よっしゃ死の都から脱出だーーーー!!」



「お母さんお母さんお母さん……」

「ナナさんしっかりしてください!」

「……前方200メートル、ロミオと副隊長を発見した。回収する」と、
という訳でやっと合流できた。

「あとは……ジュリウスだけ……か」

「それが一番問題なんですも」

「隊長……どこに居るのかさっぱりだよ……」

「……ジュリウスエ……！」

「隊長……！」

ギルさんが連続打電を試みているが一切効果はないっぽい。

だろうな……。うん……そうだろうな……。

だって隊長。

今ちよつとヘヴン状態なんだもん。

「……放置するわけにもいかない、どうする？」

「だよー放っておくと壁壊してネモス・ディアナ住民を無差別殺人しかねないもん今の隊長」

「まさか。ジュリウス隊長がそんなことするハズがありません」

「……いや、分かん。やるぞ……『今』のジュリウスなら……やるぞ……！」

「………悪い方に考えよう」

もし隊長がネモス・ディアナで無差別殺人でも起こしたらそれこそ今度こそフライアとブラッドの終焉な気がする。

………いつそのことそうなる前に私たちが壁をぶち壊しアラガミを流入……。

「論外」

「何も言っていないじゃないですか」

「お前の考えることはだいたいわかる」

「あ、じゃあロミオ先輩」

「却下」

「何にも言っていないのに……」

「ロミオ先輩そうゆうの良くないと思います」

「どうせ君らまた人殺そうとしてたんだろ分かります流石に」

「いいじゃないですかロミオ先輩さつきワンキルしたんですから」
「やだ嘘?! 唯ちゃん詳細詳細〜! 祝! ロミオ先輩童●卒業
!」

「あいつは死んでない! 生きてるよ多分生きてるってば!」

「なんだロミオ……お前もついに殺ったのか」

「やってねーよ!! テメエと同じにするんじゃねえ!!」

「もー」

シエルちゃんが一人困ったようにオロオロしていた。

と、途端に彼女から厳しい声が飛ぶ。

「敵接近! 2時方向距離300……!? も!? は、早い!」

「……え」

「嘘」

「おう……マジデスカー!」

「各員神機展開! CPOより総員に告ぐ! これより対アラガミ戦
に入る! 状況開始だ!!」

「……」

「スマン間違えた。ピクニックだ!!」

「了解!!」

とは言ったものの。

「何でだよ畜生ー!」

「皆〜! 私銃ボロボロ〜」

「わ、私の銃も……申し訳もありません!」

戦力……。

急いでベ●ベツトカーから飛び降りてみたけど、実際戦えるのは—
—ロミオ先輩と私とギルさんみたいだ。

シエルちゃんとナナちゃんは銃……というか神機の破損が酷い。

何やったらそんなになるの一体こいつらなにしてたのネモス・デイ
アナの中どうなっちゃってんの。

……もう想像もしたくない。

「ああああ！ もう！ 何でこんな所にアラガミが……！」

「……この感じ……気を付けてください！ 皆さん！ 感応種です
!!」

「嘘だろ」

「冗談キツイつすよ……」

「シエルはウソつきません!!」

「えく？ シエルちゃん本当くく？ シエルちゃんはウソつかないん
だー。ふーん。

……隠し事もしないんだー……」

「……も」

「……なんで後部座席でもぞもぞ言ってるんだろくねくく？ 不思議
だねくく！」

「……もー……!!」

「ナナちゃん心理戦は後にして!!」

時と場合を選んでくれナナちゃんよ。

ああ、もう、ともうずいぶんと長いコト調整していかないハズの神機
をガタガタと調べる。

……意外なことに、きちんと『手入れ』されていた。

細かい所はファイアには及ばないが……素人がやったにしては上
出来すぎる調整だ。下手な整備員よりもずっと上手いかもしれない。

私は確信した。

大丈夫、これなら……戦える。

即座にバレットを装填し、銃攻撃をしようと弾倉を開けた。

その時、驚愕の事実が目に入る。

なぜか……満タンになっている………弾倉。

そこに入っていたのはオラクルバレットでは………なかった。

そう。

これは。

ああ……うん、どーりでさつき、ヌルっとしてるなーと思ったんだ。
ちよつと変な臭いするなあ………って思ったんだーよー
ねー……。

「あ、あ……」

「あいつ……あの……あの……！」

誘引フェンロモンとは。

人工的に合成されたフェロモンの一種であり、アラガミに対し発動。

アラガミを一定時間引きつける能力を持つ。

主に、誘導や、一時的に『注意を引きたい』時に使われるものである。

つまりはスタグレ同様、高価ではあるもののその気になれば、一般人でも入手可能なアイテムの一種……

「あんの野郎おおおおおおおおおおお!!!」

!!
あのクソ野郎ハメやがったあああああああああああ

そりやそうだよね!! 爆破するよりこっちの方がずっとずっと効率的だよね!! そうだよね! 外部から来た存在しない神機使いがアラガミおびき寄せてくれるんだからね!!

払う報酬一切なし! 仮に死んでもそもそも『いない』ことになっているんだから関係なし!!

アイツが散々あんなこと言ったりやったりしてたけど……要は効果効いてくるまでの時間稼ぎだったってことでしょ見事に嵌りましたよド畜生が。

「畜生があああああああああああああ!!」

「あいつ殺すあいつ殺すあいつ殺すあいつ殺すあいつ殺すあいつ殺す

いつか殺す絶対殺す……!」

「何が覆してくれだよ!! 最初から殺意MAXだったくせに……! 大した役者だなあの腐れ眉毛」

「刻んでやる刻んでやる刻んでやる刻んでやる」

「もうなにもしんじない」

しかも絵心ないから全然似てない。

目の前に現れたソレは……ザックリ言うと。

デカイアバドン。

何か緑色っぽい。

デカイアバドン。

だがしかし、この巨軀で機動性は通常種と変わらない。

「クソ速すぎる!」

「ふええ……目が足りないよお……」

「ギルがまた戦闘不能に! 行きます! リンクエイドしに逝きます!」

「シエルちゃんやめといた方がいいよ? そう言ってシエルちゃんも戦闘不能になったじゃない」

「もー……」

「じゃあナナちゃんが行けば!」

「やだ。生理的に無理」

「ああ、クソもう! さっさと起きろギル!!」

「スマン……直撃くらっちゃった」

「頑張りましょうギル! 肋骨が全滅する前に隊長が来れば私たちにも勝機があります」

「上等だ。肋骨全滅も一興だな」(本気)

「うわキモ……もう隊長どこにいるんですかあ!! 早く来て下さいよお……!」

「駄目……どこに居るのかさっぱり分かんないし、打電しても全然答えないや……ははっ」

「ジュリウス……」

「駄目だ当たらねえ……! あいつ速すぎる……!」

「それは残像だ」

「今の誰だ!?!」

「わ、私じゃないよ……?」

「も! 副隊長っ!!」

シエルちゃんに呼びかけられた時――。

「っっ!!」

そこには超高速に加速しまくったアバドン（感応種）が……!

ダメだ、コレはぶつかる。シールド展開を急ごうと思っただけ間に合わない。

まあ当たっても多分死なないからいいか……問題はどれだけ負傷するかだけどそこは運次第だよなあ……と諦めかけ痛い我慢しようと思いきや――。

「副隊長っ!」

「シエルちゃん……!?!」

シエルちゃんが……まるで私の盾になるかのように……私とアバドン（感応種）の間に……!

「シエルちゃん！ シエルちゃん！ 何で私なんかの為に——！ シエルちゃん……！」

……あれ……？ 意外と大丈夫?!」

「もー？ あれー？ あんまり痛くありませんも？ あれ？ あれ?? もー？」

「うん分かったから立とう、シエルちゃん。まだ奴のバトルフェイズは終了してないからね」

「了解です」

シエルちゃんは直撃したにも関わらずビツクリするほど無傷だった。

なんでだよっぱりアバドンだからか……？ 攻撃力低いのかな……？ とりあえずシエルちゃんを立てさせて移動しようとは腕を貸す。シエルちゃんが顔を赤らめながらそれを取る。

と、同時に。

服が……正確には、コルセットの上に着ていたブラウスが……こう……はらりと。

まあ……。

……うん、そうゆうことだよ。 ……うん……。

「?!?!?!」

「う、うわあああああ！ オレ見てない!! 何も見てない!! 見てないからあ！ 何も！ 見て!! ないからあああああ!!」

「し、シエルちゃん……！」

「や、やだ……副隊長！ み、見ないで下さいっ!!」

「気にすんなもう何回も一緒にシャワーしてるでしょ!!」
「やっぱりおつきいなあ……。」

じゃなくて。

私は即座に来ていた鶏臭いツナギの上をシエルちゃんに被せた。
これで下はもうタンクトップ1枚だけだ。

今のは攻撃か？ それともただ本当にカスっただけ？

もしそうだとしたらこのアバドンの殺傷力は大したものだ。やっぱり偶然直撃しなかっただけ——かなりの力はあると思っただけ。シエルちゃんの服は一見薄そうに見えるけれど、実は防熱、防刃繊維を織り込んだ高級品。多分拳銃の弾（種類にもよるけど）位ならば防ぎそうなレベルでの防御力がある……。

それをあの一瞬で切り裂いた——のだとすれば。

改めて敵の脅威を認識した私は冷汗を覚える。

……あまり攻撃的じゃないからか……手数は少ないけど、一撃でも貫いたら相当ヤバイ……。

……油断は、できない——と。

恐怖と畏怖の入り混じる視線をアバドン（感応種）へと向けると——
|。

そこにはもっしや、もっしやと白い『何か』を捕食するアバちゃんのお姿が。

「……」

布きれに見える。

ぬののふく、みたいに見える。

絶妙なフリフリ具合がシエルちゃんのお洋服と似てない……こともない。

うん……シエルちゃんのお洋服……と……言い切れないことも……ない……。

その瞬間。

直撃の割には信じられない無傷、一撃で有り得ない程の面積を抉った攻撃、なのにその下の肌は無傷――。

という……謎が、一直線に、つながった。

「あ……あああああ……！」

「うつそ……」

「そんな……偏食傾向が……存在するなんて……！ やっぱり極東は魔境ですも!!」

「ギルさああああん！ 早くシエルちゃんに上着を……うわ駄目だあいつもう喰われてやがる」

「ここは……負ける訳には――行かねえんだよ!!」

「男の半裸なんて誰得」

「ラケル先生がいらっしやったら鼻血ぶーですともええ」

「やっぱあの人がよくわかんないよ……っ！ やああああ！ 来ないでえええええ！ こっちは来ないでえええええ！」

「ロミオ先輩！ 見て……凄いい！ 唯ちゃん……アバドンと追いかけてっこしてる!!」

「すげえ……早すぎて逆にゆっくり見えるぜ……」

「ギャシヤアアアアアアアアアアア!!」

「嫌あああああああああ！ ごめんなさいごめんなさいだからやめてえええええ！ 食べないでっ！ たべないでよおおお！ 食べちゃ嫌あああああ！」

「きゅ〜♪」(ムツシヤムツシヤ)

「あああああああああああっ!!」

「副隊長——!!」

「シエルちゃん行っちゃダメだよっ！ あ、だめだもうおそい」

「シエル……ぐすっ……ちゃん……!!」

「副隊長……！ あの時——あの時は——！ 貴女が助けてくれました……！ だから……だから……！ 今度は……わたし……が……!!」

「もう……シエルちゃんの……ばか……」

「副隊長……せめて……いっしょに……」

「……ごめんね……うん。でも……ありが……とう……」

「ギャツシヤアアアアアアアア!!!」

「ナナ、コレ着てろ」

「え？ い、いいの？ ロミオ先輩……上着脱いだら一枚だけになっちゃうよ……？」

「もうあいつらは手遅れだ。だからオレは、せめてナナだけでも……助けてい」

「……ロミオ先輩……」

「それにオレは男だからさ。……別に大したダメージはないよ」

「……えへへっ！ ……先輩、ダメだよコレ……短いから……お腹、隠

れないよ……」

「(あの眉毛の家族……コレの被害に遭ったのかよ……こんな変態アラガミの……)」

「あ、ギルまた死んだ」

「ギルもう行くなあ！ それ以上ズボンが破れたら流石にヤバイよ！」

「大丈夫だ……俺は……まだ……戦える!!」

「コレ以上は見たくもないもの見えそうだね」

「一番防御力が高い奴は一体何処で何してるんだあのピクニツクは」

「……ねえ、ロミオ先輩？ 神機がまともに起動してるってことはさ

……まだBB弾持つてるよね？」

「うん、入れた。……だけど今ぶっ放したら唯とシエルに……」

「……悲しいけどね、必要な犠牲って……あると思う……」

「撃たねーよ!？」

「誰もシエルちゃんたちに撃ってなんか言っていないでしょー！ もう

ロミオ先輩ったらあ！ どうしてそんな酷いことが考えられるの!!」

「え？ マジ？ ……ごめんごめん悪かったよ。何かいい手あんの

？」

「決まってるでしょ！ あのね、その銃口をね、ちよつとだけ右にズラすとね……あと8秒後くらいにチャージグライドして突っ込んでくるから丁度ジャストポジションに……」

「期待したオレが馬鹿だった」

何だかロミオ先輩とナナちゃん楽しそう……。

現在徹底抗戦中につき、とりあえず足とか腕とか喰われても良い箇所を差し出しつつ、腹(の布)裂かれたり、足(の布)が付け根ぐらゐまでザツクリ言ったりしてるけど何とかまだ貞操は守っています。

でもそろそろ限界が……！ と、まで来そうになったその時。

響く。

聞くものの気さえも——狂わせるような絶叫が。

轟く。

この空と地を揺るがすような鬼哭が。

「これは……!」

「来たあ!」

深い悲しみと怒りと狂気に満ちた。

慟哭が。

「こ、ここのこ怖い……!?」

「マジアラガミ化かと思いましたも……」

「クソ……! 隊長!! 目エ覚ませ!!」

「あ……はは……はははははっ! ハハハハアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「アイツ……笑ってやがるぜ……」

「マジ発狂したウチの隊長に勝てる気がしない件について」

もう……皆……死ぬしか……ないじゃない。

「各員シールド展開!! か、勝てないこんなの倒せない!」

物理的にも心理的にも無理だあ……こんなのお。

「隊長! ジュリウス隊長!! 目を覚ましてくださいも! 私ですシエルですも!」

「……」

「シエルちゃんの声なら……! 付き合いの長いシエルちゃんの声なら……!」

「隊長! マグノリアIIコンパスで護衛対象だった仲ではありませんか!! 楽しかったですよねあの日々は……毎日サブマシンガン分解したり! 組み立てたり! ナイフ研いだりしたじゃありませんか!」

「……」

隊長の動きが……止まったあ!

いいぞシエルちゃんすごいぞー! かつこいいぞー!

それにしても今明かされるマグノリア時代。小学校1年生くらいの女の子と5年生くらいの男の子が二人仲良くなるんで銃の分解だとかナイフの研磨だとか……。

ちなみに今この状況でマスクしてるのは隊長だけです。
皆ネモスディアナ脱出の際に脱いでますあんなクソマスクは。

「だらしねえ！ ジュリウス……そのマスクに操られて……！ 『そう』なってるんだろ!!」

「お前が言うな!!」

あの惨劇を忘れたとは言わせんで、初代マスク・ド・ゴリラ。

「……さつさと正気に戻してやる」

「……」

ギルさんの槍からは黒いオラクル。

隊長の剣先には白いオラクルがそれぞれ刀身を包み込むかのように収束。

そして。

槍と長剣——両方の『統制』を司る、アーティフィシャルCNSが

——琥珀色に、輝くその一瞬。

チャージグライドとブラッドアーツがぶつかり合う。

「ぐ……おおおおおおおおおっ！」

「だああああああああああああああああ!!」

あれ……？ なんだろう……何気に熱い展開じゃ……？

勝敗は——うん。

やっぱりギルさんの負けだった。

ギルさん無事死亡。きっと大地のぬくもりを感じていることだろ

う。

そんなことしている間にそそくさとシエルちゃんを引きずって逃げた私はロミオ先輩の背中に隠れていた。

「何とかしてくださいお願いしますロミオ先輩！」

「お、お願いく先輩くく！ あんなん勝てるわけないじゃん！」

「……」

「あのピクニックと1年何とかやってきた先輩ならできるでしょ！！」

「そ、そうだよくく！ あとで何でもするからくく！」

「……」

ロミオ先輩が、何か覚悟を決めたらしく。

ガチャリ、と神機を銃型ブラストへと変形させる。

「……なあ、ナナ……唯」

「な、何く？」

「何ですか!？」

「味方に撃つていいのは——『回復弾』だけ……だよな」

「……うん」

「まあ……常識的には」

「まさか先輩……」

「……え？ ちょっとそんな……まさか……マサカネー」

ロミオ先輩射撃体勢。

「……仕方ないんだ。コレは、仕方ない事なんだ……うん、そう。仲間

を守るためなんだ。せめて……残ったお前らを守る為なんだ……。だからコレは違うんだ……そう、そう……コレは……！」

「やめて!! やめて下さいロミオ先輩!! そんなことしちやいけない!!」

「唯ちゃん! ロミオ先輩の邪魔しないで!!」

「心配すんな……オレが、やる……」

「だって……! だって! ナナちゃん!! このままじゃ……」

「そう、『このままじゃ』私たちあの狂った隊長に八つ裂きにされちゃうの!! だから……だから仕方ないの!! ロミオ先輩だって本当は辛いんだよ!? だって……だって! 隊長と一番一緒にいたのは先輩なんだって、唯ちゃんも分かってるでしょ!?!」

「でも……! でもだからってこんな……! こんな……!」

「……じゃあ、他に代案があるの?」

「……」

「……分かってるよ。うん。だからね……。せめて……最後まで、ちゃんと見てよう……」

「………ナナちゃん……」

「や、やだなあ……唯ちゃん……なんで泣いてるの?」

「………ナナちゃんだって……泣いてるよ……」

ガチャリ、とロミオ先輩が標準を定める。

「これが……オレの………! 俺達の………!」

『回復弾』だあああああああああ!!」



「どうしてこうなった」

「コレにはその……深い訳が……深淵なる因果律がその……」

「全部ギルのせいだよ」

「え？ 俺？」

あれから数日後。

意識不明昏睡状態で担ぎ込まれた集中治療室から帰還してきた隊長のベッドの横で皆揃ってデブリーフィングをやっていた。

隊長は全身包帯のミイラ状態で。

腕を足を固定していて。

顔にはいくつかガーゼをはったような凄惨な状態だったけど。

一応元気そうだった。

……少なくとも生き死にの境をさまよってる感じではない。

「あの時……神威技官の自爆煙が見えた所から覚えていないんだ。

……あの煙はかなりまずかった。あれだけ高く上がっていたんだ

……視覚優性型の遠方の大型、中型種ならばまず気づかないはずがな

い。……アレで近辺のアラガミを集めてしまったのかと予測できた

が……お前達、大丈夫……」

「……」

「……」

「……」

「……もー……」

「……夫じゃなかったんだな」

ああ……隊長、分かってたんだ……。

シラフだと頭は切れるし強いしB Aと統制持つてるから凄く頼りになるのにな……。

非常に残念だ。

そうゆうところ嫌いじゃないけどね、むしろ好きだけど。

「おい、隊長、大体なんであの時発狂した？ お前があんな風にならな

かったらこんなことにはならなかったはずだろ」

「全くですも」

「黙れ貴様らに分かってたまるかいつの間にか個人情報も正確に入手されている恐怖が分かるか、俺の過去はマグノリアⅡコンパスに於いては抹消され親戚を脅して口封じさせているんだぞなのにどっから漏れた個人情報があああの女の恐怖が分かるかああの女のあの女のあの女のうわあああああ」

「隊長！ これ水です！」

瀕死の重傷人になんてこと言うんだこのゴリラは。

「……そんなの、アイドルなら当たり前だろ？」

「も……もー？ ギルが何を言っているのか理解できない件について」

新解釈：アイドルなら当たり前説。

「で、ナナは一体どうして」

「過去のトラウマ。コレ以上は答える気ないよ。はい終了」

「……そうか……分かった」

ナナちゃんはギルさんと視線を合わすことはなかった。

「……ひとつ聞きたい」

「どうぞ」

「何でしょう」

「まあ言いたいことは分かるけどさ」

「もー？」

「このバナナうめえな」

「お前達……何故……全員揃いも揃ってトレーニング用ウェアなんだ……？」

そう、私たち、今。

絶賛全員トレーニング用のクソダサイジャージ着用中なのです。
幸いしにて任務はないし、あの地獄の書類記入も終わったので、座

学とかデスクワークとかトレーニングだけだからコレで何とかなっている。

まあそれには対して深くもない理由がある訳だが。

そう。

服が。

全滅したのだ。

服は……犠牲になったのだ……変態アバドンの犠牲にな……。

「その——今、全員……服が無いんです」

「は？」

「もちろんジュリウス隊長のもです……下以外消し炭になったので……」

「……え？」

「今日は隊長、アンタにそれを相談しにきた」

「ねえ隊長……この後さ……極東支部にさ……行くんだよね……？
どうしよう……」

「……」

隊長の顔面は蒼白。

荒ぶる心拍数。

「……確か、予備のフェンリル士官用と下士官用制服があったはずだ。
それを倉庫に取りに行けば……」

「……それですが、実は……」

「アーサーさん達が持ってっちゃったらしくて……」
「……」

それは私たちも思いついたことだ。

倉庫に行けば確か予備の士官制服があったはず！ と思っただけど

……まあ見事にもぬけの殻だったという訳だ。

やっぱ年中物資不足で喘いでいる奴らは違うね。抜け目なさすぎて怖い。

一体奴らのせいでいくつ備品がなくなったことやら。

「……………じゃあ被服科であまり布を貰って速攻合成……………」

「隊長……………ちよつと前に、壁外非保護……………もとい『ロシア支部第一サテライト拠点』の人達乗せてたでしょ？」

あの人たちをね、乗せた時、本当にボロボロの服着てたから……………ね？」

「……………」

そう、それも皆で知恵を出して思いついた。

被服科で何か布っぽいものが余ってればシエルちゃんがお裁縫上手だつて言うからその……………

で、結果。

『第一サテライト』が完成したとき何かプレゼントしてやりたいなーと思っっていたらしいフライアの有志がボランティア活動の一貫ということであまり布で服を作つてあげたらしい。

何だかんだで結構布は余っちゃうっぽいし、このままだと燃料になるんだから、ということでも全部使ってしまったという訳だ。

だからそんなもんねーよ、と言われたのだった。

「……………もうこの際、一般職員とか警備兵の制服をそれっぽく改造……………」

「……………ああ、それな。『極東』入りしてすぐ……………アラガミの襲撃を受けたことをおぼえてないか？」

「……………ああ、あつたな……………そんなことも……………」

「そうやら、一般職用の制服倉庫が『やられた』らしくてな……………。それに、その後大幅に人を減らしただろ？ そんな時に昇進したのが結構居たらしい。だが、急な昇進で制服が変わるが揃えられないと言われた奴らが、じゃあ持参するからと……………。……………おびただしい数のネクタイだけが残ってた」

「……」

本当にあつた怖いフライア。

「……駄目だ……もう俺達に……打つ手は……ない……」

「そんな諦めないで下さい隊長！ もうどうしたらいいか分からないから貴方にこっややつて相談してるんです！」

「誰か人数分と同じ服を持っている奴はいないのか？」

「私ふんどしなら持つてるよ〜」

「着ないから！」

「……」

「わ、私も……その……レオタードなら……持っていますとも！」

「女子はギリギリアウトとして男にレオタードはキツすぎる……！」

「隊長意外と似合うんじゃない〜？」

「ナナちゃん……！ な、何言ってるの!？」

「そうだなナ……残念だがこの傷は当分消えないだろう……。そんな体で露出度の高い服を着ると……」

「隊長……着る事自体は嫌じゃないんですね……」

「……」

「ギル、お前も何かないか？」

「そうだ、縄で服を作ろう」

「馬鹿じゃないのか」

「野生に帰れ」

「滅ぶがいい」

「……」

「冗談だ」

「あ？」

「あつそ」

「ギルは今から1時間呼吸禁止ね！」

「……」

ひとしきりギルさんを弄った所で。

私たちは気づく。

さつきから……具体的ににはトレーニングウェアの下りから、全く会話に参加していない人が居ることに。

「ロミオ先輩、なんか静かですね?」

「どうしたの? お腹減っちゃったの?」

「お腹痛いんですかロミオ?」

「……なあ、お前さ………わざと?」

「何を言ってるんだロミオ」

「真剣に考えてるだろうが」

「………え? なにこれ? ひよつとして間違ってるのはオレの方なの?」

「何ですか」

「じゃあ言いなよ」

「自白すれば今なら命だけは助けてやりますも」

「さあ言えロミオ!!」

「バナナうめえ」

ロミオ先輩は微妙な顔つきで、またしてもお腹——恐らくは酸液を含む消化器官の上あたりに手を置いている。

あの咯血の後遺症に苦しんでいるのだろう。イワン先生からお薬貰っていたけど……。

「……ブラッドの……制服じゃ……駄目なの………?」

「!?」

「!?」

「!」

「!!」

「も」

「何だよその反応は!?!?」

「も、も……盲点でしたも!!」

「その発想は……なかった!」

「何で!?!」

「だってあの制服だよ!? あんなピッチピチのキツキツのレザー着るとか……死んだ方がマシだよ!!」

「お前に人としてのプライドはないのか……?」

「そこまでか!? まあそこまでか!? 上にサーコート着るだろ!! まだいいだろ!!」

「だが背に腹は代えられん。仕方ないが……ここはロミオの言う通りだ……腹括ろうぜ……皆」

「あ、あんな恥ずかしい服を……! もう一回着るなんて……!」

「副隊長のボディラインが……! ふ、副隊長のお胸から腰にかけてのウエストラインが……! ……なだらかな曲線が……! ……あ、鼻血ですも」

「大丈夫だシエル、ここは医務室だ。倒れても問題ない」

「何を想像して鼻血出したのかは聞かないでおいてやる」

「私おでんパン持っていくね」

「ジャージで出るよつかマシだろ……というか特殊部隊制服なんだからソレで出席すんのが正解じゃないの……? 本来なら」

「ああ、あの服は戦闘も考慮してあるから……万が一戦闘状況が発生した場合にも対処がしやすい。その観点で納得してくれ……」

「……制帽、被ってくか……顔見られない様にな……」

「そこまで嫌か!?!」

「当然だろ、公開処刑なんざ……どんな羞恥プレイだ……」

「おいゴリラ……実は内心楽しみにしてんだろ……!」

「私は楽しみですも!」

「…………何が…………ねえシエルさん何が…………？」

「それは……………当然！ 副隊長が嫌がりながらも制服に屈服していく涙目なお姿を見るのがとてもとても楽しみなんですも!!」

「ゴフアアツ!!」

「ろ、ロミオ先輩ああああああい!!!」

こうして。

ロミオ先輩が丁度良く吐血した辺りで——みんな覚悟を決めたらしく。

私たちは。

あのフェンリル公式セクハラ制服を身に着け——晴れて、極東へと入るのだった。

狂気に満ちた——ネモス・ディアナの横を通りすぎながら。

←
←
← 以下、作者によるおまけ
←
←
←

あとがきっぽいので苦手な人はブラウザのバックボタンを押さずに、
このままスクロールしてください。

ネモス・ディアナ編 キャラまとめ

・葦原那智

コミックス | the 2nd break | に登場。

歌姫様の父君です。

ネモス・ディアナをまとめあげる相当出来る総統で、家族に対し素直に愛情を伝えられない不器用な人です。

主人公のことを内心助けてやりたいと思ってました。

が、この場合の助けるとは『GEの過酷な運命から救ってやる』ことを意味するので、もし主人公が彼に何でもいいから助けてくれと縋って居たら問答無用で神機を叩き折られていました。

元フェンリルの研究者でエイジス島建設にも関わっていた様です。

・警備その1

丁寧語の奴。

ネモス・ディアナ普通の人代表でした。

主人公には人間的に同情しつつも、立場的に仕事はこなすし、自分の命が一番大事。

毒にも薬にもなりません。本名は鈴木。

・警備その2

淫●語のヤツ。

スパイでした。

フライアから送り込まれた作業員で、2年前から潜伏していたという設定です。

議会を説き伏せるなど、一応仕事はしています。

もし、誰も主人公を回収できなかった場合神機のみを回収し、主人公を口封じするという任務を背負っていました。ホモでした。本名は田中。

・警備その3

爆弾魔。

外の人嫌い&GE嫌いの奴で主人公のことをマジでぶっ殺そうとしていました。

ちなみに、19歳、179センチ、銀髪青眼の超美形です。

本名はスタニスワフ・ノヴァク。

ホモに掘られました。

・高峰さつき

フライング登場。 | t h e 2 n d b r e a k | 及びG E 2、
G E 2 R Bの登場人物です。
ハッキング返ししました。

・葦原ユノ

今回最大の罨。
出現条件は『ネモス・ディアナ内部の公共電波を乗っ取ること』で
した。

これはかつて非常事態において、ネモス・ディアナ全体がユノの歌
声によって落ち着いたという過去から、いつでも流せるようにと、中
央P Cにあらじめレコーディングされていたコンサート内容のも
のです。本人が降臨したわけではありません。

効果はジュリウスが発狂、ユノにトラウマを持つブラッド構成員が
一時的戦闘不能に陥ります。

・空木レンカ

恩人様、デコ助眉毛。もしくはあの野郎。

G E A世界の主人公様です。

世界線が異なるという作者の俺ルール設定の為、この世界では18歳になっていきます&ネモス・ディアナの一員として日々外界に出てはサルベージを営んでいる様です。

善良な一般市民の皮を被った策士でした。

装甲車の中で言った主人公の出まかせは「どーせ嘘八百ならべてんだろーな」とスルーしていましたが、気になる単語はちゃんと拾ったようです。

主人公の気づいた通り、神機にフェロモンを塗りたくっていませんた。

ちなみに、主人公は何らかの理由で神機を使えない、と判断した場合には問答無用で神機を時限爆弾付きで街の外に射出、アラガミを誘導して爆破する予定だったようです。

G E A本編でもレンカ君はメンタルバリ硬のとても頭の良い子だったので、アホの作者には個人的に好きだけど書きづらかったキャラでした。多分もう当分出てきません。

違う世界線での「もし…」の公式主人公を出してみたかった、というだけの理由で出しました。

公式主人公が違う生き方をしていたら…を書くのはとても楽しかったです。そんな彼らを想像してみるのもいいのかもしれないですね。

は？ 神薙？ 誰それ？（煽）

加賀美隊長の立場を奪った奴なんか知りませんね。

以上です。

今回は作者は書いてて非常に楽しかったです！

ご愛読ありがとうございました！

次回から極東&ギル編に本格的に入っていく予定ですがシリアスにしようとしていたギル編を全く考えられていないので多分結構先になるかと思えます。

今更ながらギルさんで遊び過ぎたことを後悔しています。

Interval 手紙

こんなものを書くのは人生で初めてです。

だけど、頑張って書きます。

さつきからターミナル端末の履歴、検索用ワードにはろくでもない言葉ばかりが並んでいます。

なんかもう、我ながら情けなくて、既に私は泣きそうです。

ここまで来るともうなんだか笑えません。

先に言っておくと本文章は、私ことフェンリル極地化技術開発局特殊部隊『ブラッド』所属 次席 神威唯から、同部隊隊長ジュリウス・ヴィスコンティ大尉に当たて個人的に書かれたプライベート文章です。

ですので、別の人間がコレを読んでいるのは超間違いです。

すぐく間違いです。すぐに読むのを止めてください。つかやめろ、今すぐにだ。

頼むから。本当に。

とは言っても多分ナナちゃんやロミオ先輩辺りは容赦ないんだよね……でもやめてね？

本当に本当に本当だからね!?

あとフランさんも、できたらラケル先生も読まないで欲しいです。局長はまさかそんなことしませんよね……？

そしてクソ兄貴にだけは渡らないように。もしそんな事態になろうものなら呪います。呪ってやります。

だから、これを読んだ赤の他人なあなた。どうかコイツを燃やしてください。それだけが私の望みです。

本当に燃やしてください。もしくはアラガミのえさにでもしてください。

だからわざわざ紙とペンで書いているんです、絶対に消えるよう

に。

灰にでもなつて、無くなる様に。



2枚目です。ここからが本文です。

思い返せば、私なんか神機使いになろう、なんて思ったのは今思えば本当に軽い気持ちだったんじゃないかと思えます。

私はフィンランドのフェンリル本部研究員の両親の下に生まれ、本部の内部の中で安全に生活していました。

アラガミのことは知っていましたけど、どこか遠くのことだと思いついでいましたし、私の育った家庭では配給品が滞ることなど殆どなく、私自身飢えたこともなければ何かに不足を感じたことはありませんでした。

兄も、友人も、回りの皆もそうです。

毎日毎日当たり前のように学校に行つて、携帯端末を持ち歩いて、定期的にフェンリル主催のイベントなんかにも参加して、定期試験のたびに徹夜して唸っているような当たり前の学生でした。

今思えば、本当に恵まれていたのだと思います。

当時の私は、装甲壁が破壊されてる場所があるなんて想像もしていなかったのです。

仕組みや原理は授業や両親の話で何となく理解はしていましたが、それでも「こんなに大きなものが壊れるなんてありえない」と思っていたのです。

それがあんな簡単に破壊されるものだなんて、まるで想像もつかなかったのです。

そんな私が神機使いになるまでのいきさつや心情の変化は……なんか色々あつたような気がします、実は忘れてしまいました。

というか、勢いだけでバカ正直に書くには時が経ちすぎていて、か
といって客観的に分析するにはまだ早すぎるような感じですよ。

だから単に『検査結果で適合通知が着たから』ということにして置
いてください。

浅はかだったと思いますが、私には、その通知書が、『私を必要とし
てくれている』ようなものに思えたんです。

本当にバカでした。知っています。

もう何十回と見たあなたの呆れ顔がものすごく、ありありと目に浮
かびます。

貴方と初めて出会ったのは庭園でした。

あの時私は適合試験でやらかしたらしいことで頭がいっぱいに
なっていました。

正直あれほど怖いものだと思っていなかったのです。私は簡単な
パッチ検査くらいなものだろうと勝手に想像していました。兄に失
敗すれば死ぬどころかミンチになる、と事前に言われていたのも関わ
らず。

あの時だけは兄が正しかったと思います。

話がそれました、兄は関係ありません。1ミクロたりとも関係あり
ません。

たぶん、その時からなんだろうな、と思います。

私は貴方が好きです。

文字がヤバいです。震えます。

……落ち着きました。もう大丈夫です。

こう書くと貴方は、非常に自分の都合よく受け止めるんじゃない
かってちよつと心配なのでもっと詳しく書きます。

私、神威唯は、一人の女の子として、ジュリウス・ヴィスコンティ
という男性のことが好きです。

だから決して『家族』としてとか、同じ部隊所属の隊員としてとか、

(かなうならば友人として) という意味で、『好意的に思っている』という意味ではありません。

異性として貴方が好きです。

基本的に文化を気づいている大多数の人類はコレを恋、もしくは愛と呼びます。

詳しく書きました。隊長は結構天然なところがあるので、ハッキリ書かなきゃ分かってもらえないかと思ったのです。

言いました。すつきりしました。

何かこんな形でしか貴方に思いを伝えることができない辺り、私は本当にヘタレなんだと思います。

もう情けないです、泣けてきました。



好きでした、隊長。

多分、一目ぼれだったんだじゃないかと思います。いつから好きだったかなんて、分かりません。

好きでした。隊長。

本当は過去形なんかで言いたくないけど、でも、もう過去になつてるんだと思います。

あなたがコレを読んでいる、ということは過去になっているんだと思います。

そして私は多分、最後の最後まであなたに言葉として、思いを伝えることはできなかつたと思います。

一体、私はどうやって死んだんでしょうか？

もしかして、貴方や仲間、ひよつとしたら家族に看取られてベッドの上で安らかに死ねたでしょうか？

多分ないな、と思います。

できたら綺麗に死ねていたらいいんだけど。

これでも私は自分を女だと思っています。ですから少なくともあまり綺麗じゃない姿を心から好きになった人には見られたくないのです。

多分、痛いだの苦しいだの怖いだの死にたくないだの、みじめつたらしく泣き言を吐くだけ吐いて、今までありがとうとか、そういう感じの大事なことは何一つ言えないで逝ってると思います……自分のことなのでよく分かります……。

だからこつちで言います。なので、私の死に際は忘れてください。

ソレはちよつとパニックになって極限まで慌てふためいた結果なんだと思います。

当たり前です、誰だって死は怖いはずです。だからパニックにもなります！

断じて。……信じて？

好きでした、隊長。

本当なら、本当にすみませんでした、とか、迷惑かけて申し訳ありませんでした、とか皆に心配かけてごめん。とか、辛かったけど楽しかったとか。そういうことを伝えるべきなんだと思います。

だけど、死んだ後に気持ちだけが伝わるんだとしたらって想定だと、どうしてもこうなっちゃいます。

貴方に好きだった、という気持ちを知っておいて貰いたかった、なんて思います。

だけど私はヘタレなので、口にはできません。

フラれるのが怖いから、恥ずかしいから、つて言い訳ならいくらでもできるんですが。

でも、これなら言えます。

だって私はもうこの世に居ないんですから。

たとえフラれても、もう私は気になりませんし、悲しくないし、恥

ずかしくもありません。

ですが、もし、両思いだった場合には死ぬほど悲しいです。もう死んでるけど。

だったら隊長と手を繋いでみたかったな、なんて思います。

普通に友人が彼氏としていたような、デートもしてみたかったな、って思います。

二人で過去に人類が作ったとかいう映画見て、感想を喋って。

とくにやることもないのに、お互いの部屋に行ってダベったり、好きなことしたり。

配給の列と一緒に並んだり、あんまり美味しくない配給品と一緒に食べたり。

もつというんなことを喋ったり、してみたかったです。

一度でいいから、私の育った支部と一緒に見て欲しかったです。できるなら、両親にも会ってほしかったです。

学生時代の友達に、恋人として自慢してみたかったりもします。

あとは……。

……すみません、恋人というものがどうゆうものなのか、イマイチ私にも分かってません。

だけど多分こんな感じでしょう。大方間違っではないと思います。

大事なことは私は貴方という人間のことが好きだったし、できたらこんなこともしてみたかったな、ということを知っておいて貰いたい……貰いたかったな、というただの自己満足です。

でも返事は分かりきっているから大丈夫です。ただ、面と向かって拒絶されたら嫌だったのです。悲しいし、生きる希望もクソもなくなるからです。

なんだかもう何が言いたいのか分からなくなってきました。

ただひとつ、最後に言っておきたいことを言っておこうと思います。

『私のことなど忘れてどうか幸せに生きてください』……って言うのが多分正解なのかなと思います。

だけど残念ですがご存知の通り私はそこまで出来た人間ではありません。だからこう言います。

どうか、私を覚えていてください。

多分あなたは一流の神機使いだし、ちゃんとした士官教育も受けている人なので、言われなくてもすぐに私のことなんか綺麗さっぱりスツカリと忘れるでしょう。

そして私なんぞに言われなくても、何年後かには誰かと結婚し……その相手が誰かはあえて考えないことにしますが……家族を作って、退役して、子供を連れてピクニックでも行つて、見る影もないオッサンになって、幸せな人生だったと笑つて、隊長があれほど欲しがっていた家族に看取られながら死んでほしいです。

1年先2年先ぐらいまではギリギリ覚えているかもしれませんが、10年ぐらいだったらもう影も形もなくなっていると思います。多分、私の顔も、声も、何か全部忘れ去られていると思います。

だからどうか名前だけでも、少しだけでも覚えていてください。そして、私が貴方を好きだったということを覚えていてください。どうか隊長の人生が幸せでありますように。

さようなら。ずっと好きでした。

「やめてよナナちやああああああああん!!」

「さようなら。ずっとすきでした……なるほどね〜!」

「やめてよおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「どうか、私を覚えていてくださいの下りは流石にやばくない? これじゃ呪いの手紙だよ〜」

「やめてくださいしんでしみます!!」

「死ねばー? だってコレ『遺書』でしょー?」

「本当やめてもうやめて私しんじやうこれ以上やられたら憤死しちゃうううううう!!」

「2枚目の下りつていらなくない? とうか何? 唯ちゃん適合試験で何したのー?」

「……るから……!」

「きこえないよー?」

「食べるからあ!! おでんパン食べるからあ! 新型の人体実験やります!

やるから許してお願い読まないで音読しないでええええええええ!! 返してよ! もう返してよ!! いっそ無に帰してよ!!」

「人体実験なんて人間きが悪いなく〜試食つて言つてよ!!」